

荒砥北三木堂遺跡 I

昭和56年度県営圃場整備事業荒砥南部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

《本文・図版編》

1 9 9 1

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

資料	附屬島根埋蔵文化財	01-353
	調査事業団保管	438-1
No. 3- 2246	平成4年1月31日	(5)

荒砥北三木堂遺跡 I

昭和56年度県営圃場整備事業荒砥南部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

《本文・図版編》

1 9 9 1

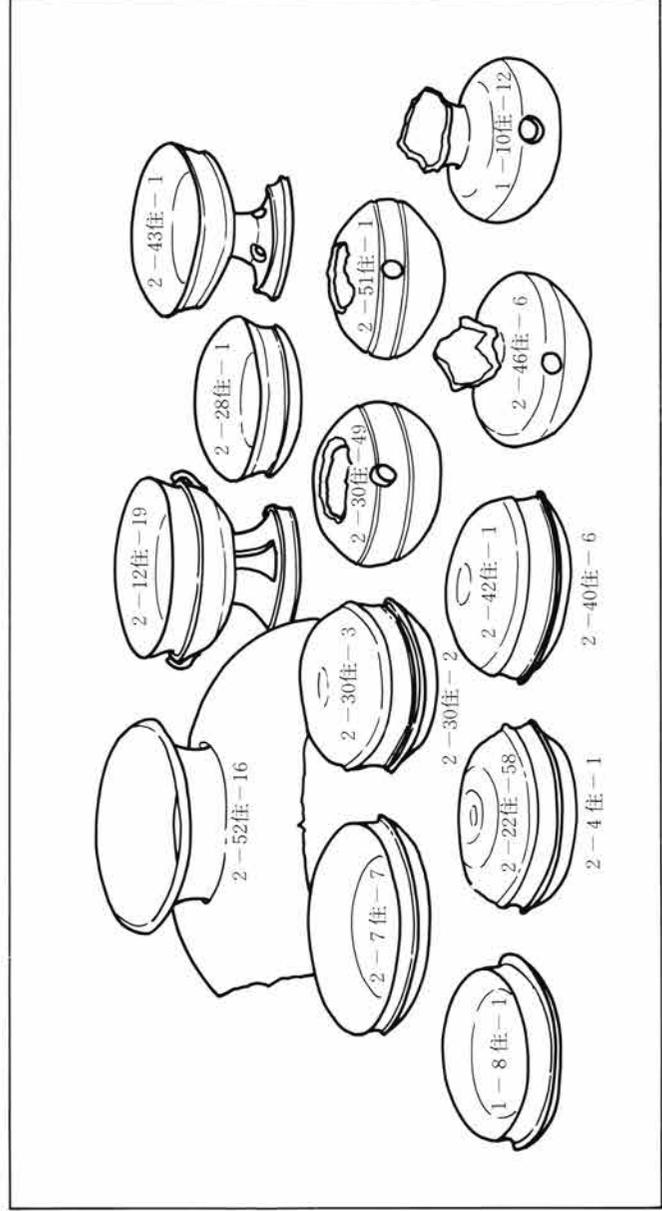
群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



集落と古式須恵器

北三木堂遺跡は、検出した古墳時代の堅穴住居が60軒で、このうち55軒が中期に属するという特異な集落遺跡である。しかも、55軒のうち20軒に古式須恵器が伴出し、一部には5世紀の前半まで遡る初期須恵器も含まれている。

古墳にまつわる祭祀的な色彩の濃い古式須恵器が、これほど頻度をもって集落から出土する例は、大半の住居が古墳時代中期に営まれる集落の構成とともに、県下で余り例を見ることができない。



序

上毛三山の一つである赤城山南麓の旧勢多郡荒砥村一帯は、国指定史跡前二子・中二子・後二子古墳を始めとする数多くの埋蔵文化財が分布している地域として知られています。

この地域で、大規模な圃場整備事業が計画され、工事が着工されたのは昭和49年からでした。この事業により数多くの埋蔵文化財が消滅することになり、関係機関により記録保存のための調査がなされました。

前橋市今井町に所在する荒砥北三木堂遺跡もその一つで、昭和56年度に事業対象区域となり、先土器時代から室町時代にかけての数多くの遺構が、当事業団によって調査されました。

諸般の事情により発掘調査した遺構・遺物の整理が遅れていましたが本年度より3年計画で整理事業を行うことになりました。

本年度は、先土器時代と縄文時代を除いた弥生時代から室町時代にかけての遺構・遺物の整理を行い、調査報告書を作成することができました。本年度の報告には、弥生時代中期後半の竜見町式土器から赤井戸式土器への変遷を示す竪穴住居出土一括資料や東日本では希有な例として注目されている、古墳時代中期の竪穴住居跡より出土の43点程の古式須恵器等が報告されています。

発掘調査後8年の経過を経て調査関係者の総意・協力を得て調査報告書が上梓できたことは、誠に意義深いものがあります。関係者の苦勞と熱意に対し心から感謝申し上げますと共に、本報告書が本県の歴史を解明する上での資料として、広く活用されることを願い序とします。

平成3年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

1. 本報告書は1981（昭和56）年度の県営圃場整備事業荒砥南部地区埋蔵文化財発掘調査に伴う荒砥北三木堂遺跡の発掘調査報告書第1分冊である。当遺跡は先土器、縄文、弥生、古墳、奈良、平安時代および中世にわたる複合遺跡であり、本報告書はこのうちの先土器時代と縄文時代を除いた各時代の調査結果を掲載している。
2. 当遺跡は、前橋市今井町北三木堂306番地他、荒口町前原278番地他に所在する。
3. 遺跡名については、小字名のうちで北三木堂を採用して冠している。
4. 発掘調査は、当事業団が県農政部および県教育委員会と委託契約を締結し実施した。調査担当および調査期間は以下の通りである。（役職名は調査当時のものである。）

担当者 鹿田雄三（主任調査研究員）

唐澤史朗（調査研究員）

原 雅信（調査研究員）

藤巻幸男（調査研究員）

岩崎泰一（調査研究員）

期 間 1981（昭和56）年12月20日～1982（昭和57）年3月25日

5. 発掘調査参加者は下記の通りである。

青木貞子、青木しげ志、青木智英、阿久沢岩吉、阿久沢敏恵、阿左美ふくの、阿部ふく、井野節子、井野ふみ、井上フク子、井上元子、内田こう、内田重次郎、内田マツ、内田三重子、内田みつ子、岡 富子、女屋たま、小淵喜久江、小淵志げ乃、小淵トミ江、小淵正子、鹿沼かね子、神沢とし子、北爪いわ、黒崎いち、高坂キヨ子、高坂とも、小松英太郎、小屋きわみ、小山明則、斎藤なか、斎藤まき子、斎藤泰子、佐藤初子、下境喜久野、下境きち子、下山きぬ子、下山スムジ、須藤東亜子、鈴木勝代、関根勝美、関根すみ、関根 汀、田中善四郎、田村よしの、富田益江、中嶋とき子、中島フミ江、中島ふみ子、奈良あい子、奈良トミキ、奈良富代、新島フク、沼田まさ、萩原敏美、羽鳥 馨、浜岡秋信、原島美明、藤塚とし江、伏島栄子、細谷文雄、松井千代枝、松井りょう、松井麗子、松村きみ、南沢和嘉江、宮田永子、茂木シナ、茂木光子、茂木ゆき子、吉田アツ子、山田フザ子

6. 発掘調査資料の整理および報告書の作成は、当事業団が県教育委員会より委託され、1989（平成元）年4月1日～1991（平成3）年3月まで行った。

7. 本書作成の担当者は下記の通りである。

事務担当 邊見長雄、松本浩一、田口紀雄、神保侑史、巾 隆行、住谷 進、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、小林昌嗣、柳岡良宏、野島のお江、今井もと子、松井美智子、角田みづほ

編 集 石坂 茂

本文執筆 唐澤史朗 II-2-(5)、IV

石坂 茂（各執筆者の担当以外の部分）

大木紳一郎 IV

坂口 一 IV

徳江秀夫 I-3

岩崎泰一 I-1・2

遺物観察表 石坂 茂

レイアウト 石坂 茂

鹿沼敏子（群馬県埋蔵文化財調査事業団 嘱託員）

図版作成 鹿沼敏子

桑原恵美子、宮沢房子、久保田菊江、西沢智代、吉原清乃、霜田恵子、高橋節子、長沼久美子、佐藤美代子、尾田正子、高梨房江、千代谷和子、八峠美津子（群馬県埋蔵文化財調査事業団 補助員）
株式会社 測研

遺構写真 前述の調査担当者

遺物写真 佐藤元彦（群馬県埋蔵文化財調査事業団 技師）

遺物の科学的処理 関 邦一（ ）

北爪健二・小材浩一（群馬県埋蔵文化財調査事業団 補助員）

8. 須恵器の胎土分析および産地同定に当たって、その関連資料として大阪府立泉北考古資料館より陶邑古窯址群陶器山地区71号窯・同84号窯・高蔵寺地区73号窯出土の須恵器を、また名古屋大学より愛知県猿投窯東山111号窯出土の須恵器を提供して戴いた。深く感謝を申し上げる次第である。
9. 中世墓壙出土の人骨の分析については佐倉 朔氏（国立科学博物館人類研究部第1研究室長）に、須恵器の胎土分析については井上 巖氏（第四紀研究所 所長）にそれぞれ依頼し、その分析結果を寄稿（III 科学的分析）していただいた。
10. 遺物の石材同定については、飯島静雄氏（群馬地質研究会会員）の手をわずらわせた。
11. 出土遺物は群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管してある。
12. 本書の作成にあたり、下記の諸氏より御助言、御協力を戴いた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称は省略させて戴いた。五十音順。）
井上唯雄、内田憲治、小林義孝、斉藤孝正、酒井清治、佐藤明人、須永光一、武末純一、田中清美、田辺昭三、中井貞夫、西谷 正、藤田典夫、前原 豊、柳沢一男、柳沼賢次、渡辺 誠

凡 例

1. 荒砥北三木堂遺跡は1～6区の調査区に分かれるが、各調査区には工事中用基準杭を使用してグリッドを設定した。1・3・5区は3×3mグリッドを、2・4・6区は6×6mグリッドを各々設定し、東西をアラビア数字、南北をアルファベットで呼称した。各調査区グリッドの国家座標上における位置は、付図の全体図中に記載した。
2. 本報告書における遺構番号は、発掘調査時に付されたものをそのまま使用しているが、時期を問わず通番でふっているために縄文時代の遺構番号が欠落している。
3. 挿図中に使用した方位は真北である。また、各竪穴住居の本文項目における方位については、炉付き住居は長軸線に、竈付き住居は竈付設壁にそれぞれ直交する軸線の方位を採用した。
4. 竪穴住居の面積算出については、 $\frac{1}{4}$ 。平面図上でプランメーター（ローラー極式・レンズ式）による2回計測の平均値を使用した。なお、小数点以下3桁は四捨五入してあるが、重複等により面積の確定できない場合は（ ）で表示し、小数点以下2桁を四捨五入した。
5. 遺構および遺物実測図の縮尺は各図中に表示してある。遺物の場合、表示された縮尺と異なるものについては、遺物番号の後尾に（ ）で縮尺を表示した。また、挿図中の「L：○○」は、断面図の水糸標高を示す。
6. 遺物実測図中における表示は次のことを意味する。
 摩耗部分 ←土器の篋削りの方向
7. 遺構平面図中のスクリントーンは次のことを意味する。
 焼土  炉  浅間Bテフラ(As-B)  榛名山ニッ岳火山灰(FA)
8. 遺構平面図中のL：○.○mは、断面図における水糸の標高を表す。
9. 遺物の記述については、別冊の遺物観察表にまとめた。
10. 竪穴住居内から出土した遺物のうち、その住居には伴出しえない明確に時期が異なるものについては、包含層からの出土土器とともに、遺構外からの出土土器として一括してある。
11. 本文中の第1図および第2図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1の地形図（大胡）を、第4図は前橋市発行の2千5百分の1現形図（No57）を使用した。

目 次

序		2区5号住居 60
例	言	2区6号住居 63
凡	例	2区7号住居 64
		2区8号住居 66
		2区10号住居 66
		2区11号住居 73
		2区12号住居 74
		2区14号住居 82
		2区13号住居 84
		2区15号住居 87
		2区16号住居 97
		2区18号住居 102
		2区20号住居 104
		2区21号住居 107
		2区22号住居 114
		2区23号住居 119
		2区24号住居 124
		2区25号住居 131
		2区27号住居 133
		2区28号住居 136
		2区29号住居 139
		2区30号住居 141
		2区32号住居 153
		2区34号住居 159
		2区35号住居 161
		2区36号住居 172
		2区37号住居 173
		2区33号住居 176
		2区38号住居 177
		2区39号住居 179
		2区40号住居 181
		2区41号住居 183
		2区42号住居 187
		2区43号住居 190
		2区45号住居 196
		2区46号住居 200
I	発掘調査と遺跡の概要 1	
1	調査の経過 1	
2	遺跡の位置と地形 2	
3	周辺の遺跡 4	
4	調査の方法 7	
5	遺跡の基本層序 7	
II	調査の内容 10	
1	1・2区の遺構と遺物 10	
(1)	竪穴住居 10	
2区1号住居 11	
2区17号住居 13	
2区26号住居 14	
2区31号住居 15	
2区44号住居 20	
1区1号住居 22	
1区2号住居 23	
1区4号住居 24	
1区3号住居 25	
1区6号住居 27	
1区7号住居 33	
1区8号住居 34	
1区9A号住居 35	
1区9B号住居 36	
1区10号住居 41	
1区11号住居 43	
1区12号住居 46	
1区13号住居 46	
2区2号住居 51	
2区3号住居 56	
2区4号住居 57	

2区47号住居	202
2区48号住居	206
2区50号住居	208
2区51号住居	212
2区52号住居	219
2区53号住居	222
2区55号住居	227
2区56号住居	228
(2) 墳墓	229
2区1号周溝墓	229
2区1号古墳	230
(3) 土 壙	231
(4) 掘立柱建物遺構	235
2区1号掘立柱建物	235
(5) 溝状遺構	236
(6) 包含層の出土遺物	236
2 3・5区の遺構と遺物	243
(1) 竪穴住居	243
3区1号住居	243
3区2号住居	245
3区3号住居	245
3区5号住居	248
5区1号住居	250
5区2号住居	252
5区4号住居	254
5区3号住居	256
5区5号住居	257
5区6号住居	257

(2) 土 壙	258
(3) 掘立柱建物遺構	261
3区1号掘立柱建物	261
3区2号掘立柱建物	261
5区1号掘立柱建物	261
(4) 溝状遺構	263
(5) 墓 壙	264
3 4区の遺構と遺物	268
(1) 竪穴住居	268
4区1号住居	270
(2) 溝状遺構	272
4 6区の遺構と遺物	273
(1) 竪穴住居	273
6区1号住居	274
6区2号住居	276
(2) 焼土部分からの出土土器	280

III 科学的分析

荒砥北三木堂遺跡出土須恵器の胎土分析	282
荒砥北三木堂遺跡出土の入骨	296

IV 成果と問題点

弥生土器の編年的位置	317
土師器と須恵器の編年	322
荒砥北三木堂遺跡中世墓の性格	331

写真図版

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡の位置…………… 3	第 37 図 1 区10号住居…………… 41
第 2 図 周辺の遺跡分布…………… 5	第 38 図 1 区10号住居出土遺物 (1) …… 42
第 3 図 時期別の遺跡分布…………… 6	第 39 図 1 区10号住居出土遺物 (2) …… 43
第 4 図 発掘調査区的位置…………… 8	第 40 図 1 区11号住居…………… 43
第 5 図 各調査区の柱状土層…………… 9	第 41 図 1 区11号住居出土遺物…………… 44
第 6 図 2 区 1 号住居…………… 11	第 42 図 1 区12号住居…………… 45
第 7 図 2 区 1 号住居出土遺物…………… 12	第 43 図 1 区13号住居…………… 46
第 8 図 2 区17号住居…………… 13	第 44 図 1 区12号住居出土遺物 (1) …… 47
第 9 図 2 区26号住居…………… 14	第 45 図 1 区12号住居出土遺物 (2) …… 48
第 10 図 2 区17・26号住居出土遺物…………… 15	第 46 図 1 区12号住居出土遺物 (3) …… 49
第 11 図 2 区31号住居…………… 16	第 47 図 1 区12・13号住居出土遺物…………… 50
第 12 図 2 区31号住居出土遺物 (1) …… 17	第 48 図 2 区 2 号住居と出土遺物…………… 51
第 13 図 2 区31号住居出土遺物 (2) …… 18	第 49 図 2 区 2 号住居の遺物出土状況…………… 52
第 14 図 2 区31号住居出土遺物 (3) …… 19	第 50 図 2 区 2 号住居出土遺物 (1) …… 53
第 15 図 2 区44号住居…………… 19	第 51 図 2 区 2 号住居出土遺物 (2) …… 54
第 16 図 2 区44号住居出土遺物 (1) …… 20	第 52 図 2 区 2 号住居出土遺物 (3) …… 55
第 17 図 2 区44号住居出土遺物 (2) …… 21	第 53 図 2 区 3 号住居…………… 56
第 18 図 1 区 1 号住居…………… 22	第 54 図 2 区 4 号住居…………… 57
第 19 図 1 区 2・4 号住居…………… 23	第 55 図 2 区 3・4 号住居出土遺物…………… 58
第 20 図 1 区 1・2・4 号住居出土遺物…………… 24	第 56 図 2 区 4 号住居出土遺物…………… 59
第 21 図 1 区 3 号住居…………… 25	第 57 図 2 区 5 号住居…………… 60
第 22 図 1 区 3 号住居の遺物出土状況…………… 26	第 58 図 2 区 5 号住居出土遺物 (1) …… 61
第 23 図 1 区 6 号住居…………… 27	第 59 図 2 区 5 号住居出土遺物 (2) …… 62
第 24 図 1 区 3 号住居出土遺物 (1) …… 28	第 60 図 2 区 6 号住居…………… 63
第 25 図 1 区 3 号住居出土遺物 (2) …… 29	第 61 図 2 区 7 号住居…………… 64
第 26 図 1 区 3・6 号住居出土遺物…………… 30	第 62 図 2 区 6・7 号住居出土遺物…………… 65
第 27 図 1 区 6 号住居出土遺物 (1) …… 31	第 63 図 2 区 8 号住居…………… 67
第 28 図 1 区 6 号住居出土遺物 (2) …… 32	第 64 図 2 区10号住居…………… 68
第 29 図 1 区 7 号住居…………… 33	第 65 図 2 区 8 号住居出土遺物 (1) …… 68
第 30 図 1 区 8 号住居…………… 34	第 66 図 2 区 8 号住居出土遺物 (2) …… 69
第 31 図 1 区 9 A・B 号住居…………… 35	第 67 図 2 区 8・10号住居出土遺物…………… 70
第 32 図 1 区 7・8 号住居出土遺物…………… 36	第 68 図 2 区10号住居出土遺物 (1) …… 71
第 33 図 1 区 9 A 号住居出土遺物 (1) …… 37	第 69 図 2 区10号住居出土遺物 (2) …… 72
第 34 図 1 区 9 A 号住居出土遺物 (2) …… 38	第 70 図 2 区11号住居…………… 73
第 35 図 1 区 9 A 号住居出土遺物 (3) …… 39	第 71 図 2 区11号住居出土遺物…………… 74
第 36 図 1 区 8・9 A・9 B 号住居出土遺物…………… 40	第 72 図 2 区12号住居…………… 75

第73図	2区12号住居出土遺物(1)	76	第111図	2区22号住居出土遺物(3)	117
第74図	2区12号住居の遺物出土状況	折り込み	第112図	2区22号住居出土遺物(4)	118
第75図	2区12号住居出土遺物(2)	79	第113図	2区22号住居出土遺物(5)	119
第76図	2区12号住居出土遺物(3)	80	第114図	2区23号住居	120
第77図	2区12号住居出土遺物(4)	81	第115図	2区23号住居出土遺物(1)	121
第78図	2区14号住居	82	第116図	2区23号住居出土遺物(2)	122
第79図	2区14号住居出土遺物	83	第117図	2区23号住居出土遺物(3)	123
第80図	2区13号住居	84	第118図	2区23号住居出土遺物(4)	124
第81図	2区13号住居の遺物出土状況	85	第119図	2区24号住居	125
第82図	2区13号住居出土遺物(1)	86	第120図	2区24号住居と出土遺物	126
第83図	2区13号住居出土遺物(2)	87	第121図	2区24号住居の遺物出土状況	折り込み
第84図	2区15号住居	88	第122図	2区24号住居出土遺物(1)	129
第85図	2区15号住居と出土遺物	89	第123図	2区24号住居出土遺物(2)	130
第86図	2区15号住居出土遺物(1)	90	第124図	2区24号住居出土遺物(3)	131
第87図	2区15号住居の遺物出土状況	折り込み	第125図	2区25号住居	132
第88図	2区15号住居出土遺物(2)	93	第126図	2区25号住居出土遺物	133
第89図	2区15号住居出土遺物(3)	94	第127図	2区27号住居と出土遺物	134
第90図	2区15号住居出土遺物(4)	95	第128図	2区27号住居出土遺物(1)	135
第91図	2区15号住居出土遺物(5)	96	第129図	2区27号住居出土遺物(2)	136
第92図	2区15号住居出土遺物(6)	97	第130図	2区28号住居	137
第93図	2区16号住居	98	第131図	2区28号住居出土遺物(1)	138
第94図	2区16号住居と出土遺物	99	第132図	2区28号住居出土遺物(2)	139
第95図	2区16号住居出土遺物(1)	100	第133図	2区29号住居	140
第96図	2区16号住居出土遺物(2)	101	第134図	2区29号住居出土遺物	141
第97図	2区18号住居と出土遺物	102	第135図	2区30号住居と出土遺物	142
第98図	2区18号住居出土遺物(1)	103	第136図	2区30号住居出土遺物(1)	143
第99図	2区18号住居出土遺物(2)	104	第137図	2区30号住居出土遺物(2)	144
第100図	2区20号住居	105	第138図	2区30号住居出土遺物(3)	145
第101図	2区20号住居出土遺物	106	第139図	2区30号住居出土遺物(4)	146
第102図	2区21号住居	107	第140図	2区30号住居出土遺物(5)	147
第103図	2区21号住居出土遺物(1)	108	第141図	2区30号住居出土遺物(6)	148
第104図	2区21号住居の遺物出土状況	折り込み	第142図	2区30号住居出土遺物(7)	149
第105図	2区21号住居出土遺物(2)	111	第143図	2区30号住居出土遺物(8)	150
第106図	2区21号住居出土遺物(3)	112	第144図	2区30号住居の遺物出土状況	折り込み
第107図	2区22号住居(1)	113	第145図	2区32号住居	153
第108図	2区22号住居(2)	114	第146図	2区32号住居出土遺物(1)	154
第109図	2区22号住居出土遺物(1)	115	第147図	2区32号住居の遺物出土状況	折り込み
第110図	2区22号住居出土遺物(2)	116	第148図	2区32号住居出土遺物(2)	157

第149図	2区32号住居出土遺物(3)	158	第187図	2区45号住居	197
第150図	2区34号住居	159	第188図	2区45号住居出土遺物(1)	198
第151図	2区34号住居出土遺物(1)	160	第189図	2区45号住居出土遺物(2)	199
第152図	2区34号住居出土遺物(2)	161	第190図	2区46号住居	200
第153図	2区35号住居	162	第191図	2区46号住居出土遺物	201
第154図	2区35号住居出土遺物(1)	163	第192図	2区47号住居	202
第155図	2区35号住居出土遺物(2)	164	第193図	2区47号住居出土遺物(1)	203
第156図	2区35号住居出土遺物(3)	165	第194図	2区47号住居出土遺物(2)	204
第157図	2区35号住居出土遺物(4)	166	第195図	2区47号住居出土遺物(3)	205
第158図	2区35号住居出土遺物(5)	167	第196図	2区48号住居と出土遺物	206
第159図	2区35号住居出土遺物(6)	168	第197図	2区50号住居	207
第160図	2区35号住居の遺物出土状況	折り込み	第198図	2区50号住居出土遺物(1)	208
第161図	2区35号住居出土遺物(7)	171	第199図	2区50号住居出土遺物(2)	209
第162図	2区36号住居	172	第200図	2区50号住居出土遺物(3)	210
第163図	2区37号住居	173	第201図	2区50号住居出土遺物(4)	211
第164図	2区36・37号住居出土遺物	174	第202図	2区51号住居	212
第165図	2区37号住居出土遺物	175	第203図	2区51号住居出土遺物(1)	213
第166図	2区37・33号住居出土遺物	176	第204図	2区51号住居出土遺物(2)	214
第167図	2区33号住居	177	第205図	2区51号住居出土遺物(3)	215
第168図	2区38号住居と出土遺物	178	第206図	2区51号住居出土遺物(4)	216
第169図	2区38号住居出土遺物	179	第207図	2区51号住居の遺物出土状況	折り込み
第170図	2区39号住居	180	第208図	2区51号住居出土遺物(5)	219
第171図	2区39号住居出土遺物	181	第209図	2区52号住居	220
第172図	2区40号住居	181	第210図	2区52号住居出土遺物(1)	221
第173図	2区40号住居出土遺物	182	第211図	2区52号住居出土遺物(2)	222
第174図	2区41号住居	183	第212図	2区53号住居と出土遺物	223
第175図	2区41号住居出土遺物(1)	184	第213図	2区53号住居の遺物出土状況	224
第176図	2区41号住居出土遺物(2)	185	第214図	2区53号住居出土遺物(1)	225
第177図	2区42号住居	186	第215図	2区53号住居出土遺物(2)	226
第178図	2区42号住居出土遺物(1)	187	第216図	2区55号住居と出土遺物	227
第179図	2区42号住居出土遺物(2)	188	第217図	2区56号住居と出土遺物	228
第180図	2区42号住居出土遺物(3)	189	第218図	2区1号周溝墓	229
第181図	2区43号住居	190	第219図	2区1号古墳と出土遺物	230
第182図	2区43号住居の遺物出土状況	折り込み	第220図	2区の土壌の位置	231
第183図	2区43号住居出土遺物(1)	193	第221図	1・2区の土壌	232
第184図	2区43号住居出土遺物(2)	194	第222図	1・2区の土壌と出土遺物	233
第185図	2区43号住居出土遺物(3)	195	第223図	1・2区の土壌出土遺物	234
第186図	2区43号住居出土遺物(4)	196	第224図	2区1号掘立柱建物	235

第225図	2区1号溝と出土遺物	236	第263図	6区1号住居出土遺物	273
第226図	包含層の出土遺物(1)	237	第264図	6区1号住居	274
第227図	包含層の出土遺物(2)	238	第265図	6区2号住居	275
第228図	包含層の出土遺物(3)	239	第266図	6区2号住居出土遺物(1)	276
第229図	包含層の出土遺物(4)	240	第267図	6区2号住居の遺物出土状況	折り込み
第230図	包含層の出土遺物(5)	241	第268図	6区2号住居出土遺物(2)	279
第231図	包含層の出土遺物(6)	242	第269図	6区2号住居出土遺物(3)	280
第232図	3区1号住居と出土遺物	244	第270図	6区焼土部分の出土遺物	280
第233図	3区2号住居と出土遺物	246	第271図	6区の焼土部分と出土遺物	281
第234図	3区3号住居と出土遺物	247	第272図	三角(A)・菱形(B)ダイヤグラム 位置分類図	285
第235図	3区5号住居	248	第273図	Qt-Pl 相関図	286
第236図	3区5号住居出土遺物	249	第274図	分析対象の須恵器実測図	289
第237図	5区1号住居出土遺物	250	第275図	各須恵器の電子顕微鏡写真 [×750](1)	290
第238図	5区1号住居	251	第276図	各須恵器の電子顕微鏡写真 [×750](2)	291
第239図	5区2号住居	252	第277図	各須恵器の電子顕微鏡写真 [×750](3)	292
第240図	5区2号住居出土遺物(1)	253	第278図	各須恵器の電子顕微鏡写真 [×750](4)	293
第241図	5区2号住居出土遺物(2)	254	第279図	各須恵器の電子顕微鏡写真 [×750](5)	294
第242図	5区4号住居と出土遺物	255	第280図	各須恵器の電子顕微鏡写真 [×750](6)	295
第243図	5区4号住居出土遺物	256	第281図	墓壇出土の人骨	297
第244図	5区3号住居	256	第282図	各調査区の遺構検出状況	299
第245図	5区5・6号住居	257	第283図	年代別の住居外形分類一覧(1)	折り込み
第246図	5区6号住居出土遺物	258	第284図	年代別の住居外形分類一覧(2)	305
第247図	3区1・4号土壇	259	第285図	年代別の住居掘削深度一覧	307
第248図	3区3号・5区1～4・6号土壇	260	第286図	年代別の住居方位一覧	308
第249図	3区1号掘立柱建物	261	第287図	1・2区の集落変遷(1)	311
第250図	3区2号・5区1号掘立柱建物	262	第288図	1・2区の集落変遷(2)	312
第251図	5区1号掘立柱建物出土遺物	263	第289図	年代別の住居面積一覧	315
第252図	5区1号溝	263	第290図	弥生式土器の器種分類	318
第253図	3区の墓壇の位置(1)	264	第291図	撚紐を使用した弥生土器の縄文原体 (2区31号住居No.8)	319
第254図	3区の墓壇の位置(2)	265	第292図	荒砥北三木堂遺跡出土土器編年図	折り込み
第255図	3区の墓壇	266			
第256図	3区の墓壇と出土遺物	267			
第257図	3区墓壇の出土遺物	268			
第258図	4区1号住居(1)	269			
第259図	4区1号住居(2)	270			
第260図	4区1号住居出土遺物(1)	271			
第261図	4区1号住居出土遺物(2)	272			
第262図	4区1号溝	272			

第293図 荒砥北三木堂遺跡出土須恵器編年図……328
 第294図 今井神社古墳出土の埴輪……330

第295図 墓壙と周辺の小字名……332

表 目 次

<p>第 1 表 1・2区土壙の規模一覧……233 第 2 表 2区1号掘立柱建物の規模一覧……235 第 3 表 3・5区土壙の規模一覧……258 第 4 表 3区1号掘立柱建物の規模一覧……261 第 5 表 3区2号掘立柱建物の規模一覧……263 第 6 表 5区1号掘立柱建物の規模一覧……263 第 7 表 3区墓壙の規模一覧……267 第 8 表 墓壙出土の古銭一覧……268 第 9 表 胎土性状表……283</p>	<p>第10表 年代別住居一覧 ……300・301 第11表 竪穴住居外形分類基準……302 第12表 複数住居にまたがる土器の接合例一覧 ……309 第13表 ……327 第14表 群馬県内仏教系宗教法人宗派統計表……334 第15表 前橋市・勢多郡内仏教系宗教法人多数派 本尊別創建年代分類表……336 第16表 前橋市・勢多郡内仏教系宗教法人多数派 のうち中世創建推定寺院本尊別分類表…336</p>
---	---

写 真 目 次

P L 1—1 第3調査区の遠景（手前今井沼、後方赤城山）	4・16・20等）	3	1区11号住居遺物出土状況（No.3・10等）
2 第3調査区の遠景（西方から）		4	1区11号住居出土遺物
3 第1調査区的全景（西方から）		P L 17	1区10号住居出土遺物
P L 2—1 第2調査区的全景（北方から）		P L 18—1	1区12号住居
2 沖積地の堆積土層		2	同 竈と遺物出土状況（No.19・20）
3 同左（部分拡大）		3	同 竈埋没土層（E—E'）
4 第1調査区の堆積土層		4	同 出土遺物
5 第5調査区の堆積土層		P L 19	1区12号住居出土遺物
P L 3—1 2区26号住居		P L 20—1	1区12・13号住居出土遺物
2 2区17・26号住居出土遺物		2	2区2号住居
P L 4—1 2区1号住居出土遺物		P L 21—1	2区2号住居遺物出土状況
2 2区31号住居		2	2区2号住居出土遺物
P L 5 2区31号住居出土遺物		P L 22—1	2区3号住居
P L 6—1 2区44号住居		2	2区4号住居
2 2区44号住居出土遺物		3	2区3・4号住居出土遺物
P L 7—1 1区1号住居		P L 23—1	2区5号住居
2 1区1・2号住居出土遺物		2	2区5号住居出土遺物
3 1区4号住居		P L 24—1	2区6号住居
P L 8—1 1区3号住居		2	2区7号住居
2 同 竈		3	2区8号住居
3 同 遺物取り上げ後の状況		P L 25—1	2区6号住居埋没土層（A—A'）
P L 9—1 1区3号住居遺物出土状況（No.18・20・24・27等）		2	2区6・7号住居出土遺物
2 1区3号住居出土遺物		P L 26	2区8号住居出土遺物
P L 10 1区3号住居出土遺物		P L 27—1	2区10・11号住居
P L 11—1 1区8号住居		2	2区10号住居埋没土層（A—A'）
2 1区8号住居出土遺物		3	2区10号住居竈と遺物出土状況（No.1・7・10・12等）
3 1区7号住居		4	2区11号住居出土遺物
P L 12—1 1区6号住居		P L 28	2区10・11号住居出土遺物
2 1区9号住居		P L 29—1	2区12号住居
P L 13 1区6号住居出土遺物		2	同 遺物出土状況
P L 14 1区9A号住居出土遺物		3	同 竈
P L 15 1区9A・B号住居出土遺物		4	同 遺物出土状況（No.24・26・29・32等）
P L 16—1 1区10・11号住居		5	同 遺物出土状況（No.2・6・14・21等）
2 1区10号住居竈と遺物出土状況（No.2・		P L 30—1	2区12号住居埋没土層（B—B'）

	2	同 遺物出土状況 (No.5・8・12・23等)		2	同 遺物出土状況
	3	同 遺物出土状況 (No.6・14)		3	同 竈と遺物出土状況 (No.23・35・50・53等)
	4	同 遺物出土状況 (No.5・8・12・23等)		4	同 貯蔵穴と遺物出土状況 (No.5・25・36・45等)
	5	2区12号住居出土遺物		5	同 埋没土層 (B-B')
P L 31		2区12号住居出土遺物			
P L 32—1		2区13号住居			
	2	同 竈と遺物出土状況 (No.3・10)	P L 46—1		2区22号住居遺物出土状況 (No.19・26)
	3	同 遺物出土状況 (No.1・9)		2	同 遺物出土状況 (No.6)
	4	同 遺物出土状況 (No.16)		3	2区22号住居出土遺物
	5	同 遺物出土状況 (No.8・10・15・16)	P L 47		2区22号住居出土遺物
P L 33—1		2区13号住居遺物出土状況 (No.5)	P L 48—1		2区23号住居
	2	同 遺物出土状況 (No.14)		2	同 埋没土層 (B-B')
	3	2区13号住居出土遺物		3	同 竈と遺物出土状況 (No.3・10・30・32等)
P L 34—1		2区14・15号住居		4	同 遺物出土状況 (No.27・38等)
	2	2区14号住居		5	同 遺物出土状況 (No.20・24)
	3	2区15号住居	P L 49		2区23号住居出土遺物
	4	2区14号住居出土遺物	P L 50—1		2区24号住居
P L 35		2区15号住居出土遺物		2	同 竈と遺物出土状況 (No.4・6・27・46等)
P L 36		2区15号住居出土遺物		3	同 埋没土層 (B-B')
P L 37—1		2区16号住居貯蔵穴内遺物出土状況 (No.28・29)	P L 51		2区24号住居出土遺物
	2	2区16号住居出土遺物	P L 52—1		2区25号住居
P L 38—1		2区16号住居出土遺物		2	同 竈と遺物出土状況 (No.11)
	2	2区18号住居出土遺物		3	同 埋没土層 (D-D')
P L 39		2区18号住居出土遺物		4	同 出土遺物
P L 40—1		2区20号住居	P L 53—1		2区27号住居
	2	同 竈と遺物出土状況 (No.9・11)		2	同 竈
P L 41—1		2区20号住居遺物出土状況 (No.3・6・9・12等)		3	同 遺物出土状況 (No.13・14・20・25)
	2	同 遺物出土状況 (No.1・12)	P L 54—1		2区28号住居
	3	同 遺物出土状況 (No.3・6)		2	2区28号住居出土遺物
P L 42—1		2区21号住居	P L 55		2区27・28号住居出土遺物
	2	同 竈と遺物出土状況 (No.1・6・10・20等)	P L 56—1		2区29・30・33号住居
	3	同 遺物出土状況 (No.2・5・17・34等)		2	2区29号住居埋没土層 (B-B')
P L 43		2区20・21号住居出土遺物		3	2区29・33号住居出土遺物
P L 44		2区21号住居出土遺物	P L 57—1		2区30号住居
P L 45—1		2区22号住居		2	同 埋没土層 (A-A')
				3	同 遺物出土状況 (No.49)

	4	同 遺物出土状況 (No.8・10・12・21等)	P L 73	2区35・39号住居出土遺物
	5	同 遺物出土状況 (No.30・31・48・63等)	P L 74-1	2区37号住居
P L 58		2区30号住居出土遺物	2	同 遺物取り上げ後の状況
P L 59		2区30号住居出土遺物	3	同 竈と遺物出土状況 (No.2・19・21等)
P L 60		2区30号住居出土遺物	4	同 遺物出土状況 (No.11・14・17・21等)
P L 61		2区30号住居出土遺物	5	同 遺物出土状況 (No.5)
P L 62-1		2区32号住居	P L 75	2区37号住居出土遺物
	2	同 竈と遺物出土状況 (No.1・13・20・21・25等)	P L 76-1	2区40号住居
	3	同 埋没土層 (B-B')	2	同 竈と遺物出土状況 (No.2・4・6・7等)
	4	同 出土遺物	3	同 埋没土層 (D-D')
P L 63		2区32号住居出土遺物	4	同 出土遺物
P L 64-1		2区34号住居埋没土層 (B-B')	P L 77-1	2区41号住居
	2	2区34号住居出土遺物	2	同 竈と遺物出土状況 (No.9・14等)
P L 65-1		2区34号住居	3	同 出土遺物
	2	2区36号住居	P L 78-1	2区42号住居
P L 66-1		2区36号住居埋没土層 (C-C')	2	同 竈と遺物出土状況 (No.26・29等)
	2	同 竈と遺物出土状況 (No.3・4)	3	同 出土遺物
	3	同 出土遺物	P L 79	2区42号住居出土遺物
P L 67-1		2区36号住居	P L 80-1	2区43号住居
	2	2区38号住居	2	同 遺物出土状況
P L 68-1		2区38号住居竈	3	同 薦編み石の集中出土状況
	2	2区38号住居出土遺物	4	同 出土遺物
P L 69-1		2区35・39号住居	P L 81	2区43号住居出土遺物
	2	同 遺物取り上げ後の状況	P L 82-1	2区45号住居
	3	同 埋没土層 (B-B')	2	同 出土遺物
	4	2区35号住居竈	P L 83-1	2区46・47号住居
	5	2区39号住居竈	2	2区46号住居出土遺物
P L 70-1		2区35号住居遺物出土状況	P L 84	2区46・47号住居出土遺物
	2	同 遺物出土状況 (No.50・66・74・75等)	P L 85-1	2区50号住居
	3	同 遺物出土状況 (No.24等)	2	同 竈と遺物出土状況 (No.3・8・15・21等)
	4	同 遺物出土状況 (No.20・31等)	3	同 遺物出土状況 (No.19・21)
	5	同 遺物出土状況 (No.6等)	4	同 出土遺物
	6	同 遺物出土状況 (No.7・46・61等)	P L 86	2区50号住居出土遺物
	7	同 遺物出土状況 (No.47等)	P L 87-1	2区51号住居
	8	同 遺物出土状況 (No.42等)	2	同 埋没土層 (E-E')
P L 71		2区35号住居出土遺物	P L 88	2区51号住居出土遺物
P L 72		2区35号住居出土遺物		

P L 89	2区51号住居出土遺物	4	同 間仕切り状の地山掘り残し部分
P L 90-1	2区52号住居	5	同 埋没土層 (D-D')
	2 2区46・48・55号住居	P L 103-1	3区2号住居遺物取り上げ後の状況
P L 91-1	2区52号住居埋没土層 (B-B')	2	同 部分拡大
	2 2区48・52・55号住居出土遺物	3	同 間仕切り状の地山掘り残し部分
P L 92-1	2区53号住居	P L 104-1	3区5号住居
	2 同 竈と遺物出土状況 (No.13・16・18等)	2	3区2・5号住居出土遺物
	3 同 埋没土層 (A-A')	P L 105-1	3区3号住居
	4 同 出土遺物	2	同 埋没土層 (C-C')
P L 93	2区53号住居出土遺物	3	同 竈
P L 94-1	2区56号住居と遺物出土状況 (No.3・4)	4	同 遺物出土状況 (No.3)
	2 同 遺物出土状況 (No.5・6等)	5	同 出土遺物
	3 同 出土遺物	P L 106-1	5区1号住居
P L 95-1	2区1号周溝墓	2	同 掘り方の状況
	2 同 周溝内の埋没土層 (-A')	3	同 竈
	3 同 周溝内の埋没土層 (A-)	P L 107-1	5区1号住居埋没土層 (A-A')
P L 96-1	2区1号古墳	2	同 掘り方の状況
	2 同 石室	3	同 遺物出土状況 (No.2・7)
	3 同 前庭部の埋没土層	4	同 遺物出土状況 (No.1)
	4 同 掘り方の状況	5	同 遺物出土状況 (No.8)
P L 97-1	2区17号土壇	6	同 出土遺物
	2 同 埋没土層 (A-A')	P L 108-1	5区2号住居
	3 2区19号土壇	2	同 竈
	4 同 埋没土層 (A-A')	3	同 埋没土層 (A-A')
	5 1区3号土壇、2区20・21号土壇出土遺物	4	同 遺物出土状況 (No.1)
		5	同 遺物出土状況 (No.14)
P L 98	2区遺構外および包含層の出土遺物	P L 109-1	5区2号住居遺物出土状況 (No.6・18等)
P L 99	2区遺構外および包含層の出土遺物	2	同 遺物出土状況 (No.24)
P L 100-1	2区14号住居からの磨製石斧出土状況 (No.124)	3	5区2号住居出土遺物
	2 2区遺構外および包含層の出土遺物	P L 110-1	5区4号住居
P L 101-1	3区1号住居	2	同 埋没土層 (D-D')
	2 同 埋没土層 (C-C')	3	同 竈と遺物出土状況 (No.4)
	3 同 竈	4	同 遺物出土状況 (No.9)
	4 同 出土遺物	5	同 遺物出土状況 (No.1・2・8)
P L 102-1	3区2号住居	P L 111-1	5区4号住居遺物出土状況 (No.4)
	2 同 全景	2	5区4号住居出土遺物
	3 同 遺物取り上げ後の状況	3	5区3号住居
		4	同 埋没土層 (C-C')

- P L112—1 5区5号住居
 2 同 埋没土層 (B'-B)
 3 5区6号住居
 4 5区6号住居出土遺物
- P L113—1 3区1号土壇
 2 同 埋没土層 (A-A')
 3 3区3号土壇
 4 同 埋没土層 (B-B')
 5 5区1号土壇
 6 同 埋没土層 (A-A')
 7 5区2号土壇
 8 同 埋没土層 (A-A')
- P L114—1 5区3号土壇
 2 同 埋没土層 (A-A')
 3 5区4号土壇
 4 同 埋没土層 (A-A')
 5 5区6号土壇
 6 同 埋没土層 (A-A')
 7 3区4号土壇
- P L115—1 5区1号溝状遺構
 2 同 埋没土層 (A-A')
 3 同 埋没土層 (B-B')
- P L116—1 5区1号掘立柱建物
 2 同 遺物出土状況 (No.2)
 3 3区4・6・7・12号墓壇、5区1号掘
 立柱建物出土遺物
- P L117—1 3区1号墓壇 (調査前)
 2 同左 (調査後)
 3 3区2号墓壇 (調査前)
 4 同左 (調査後)
 5 3区4号土壇 (調査前)
 6 同左 (調査後)
 7 3区5号土壇 (調査前)
 8 同左 (調査後)
- P L118—1 3区3号墓壇 (調査前)
 2 同左 (調査後)
 3 3区8号墓壇 (調査前)
- 4 同左 (調査後)
 5 3区6号墓壇 (調査前)
 6 3区7号墓壇 (調査後)
 7 3区9号墓壇 (調査後)
 8 3区10号墓壇 (調査後)
- P L119—1 4区1号住居
 2 同 竈と遺物出土状況 (No.7・8・12・
 24)
 3 同 竈埋没土層 (—)
 4 同 竈埋没土層 (—)
 5 同 竈埋没土層 (—)
- P L120—1 4区1号住居出土遺物 (薦編み石)
 2 同 貯蔵穴内の遺物出土状況 (No.19)
 3 同 遺物出土状況 (No.13・14)
 4 同 出土遺物
- P L121—1 4区1号溝状遺構
 2 同 埋没土層 (A-A')
 3 6区1号住居埋没土層 (C-C')
 4 6区1号住居
- P L122—1 6区1号住居遺物出土状況 (No.3)
 2 同 遺物出土状況 (No.8)
 3 同 遺物出土状況 (No.9等)
 4 同 遺物出土状況 (No.6)
 5 6区焼土部分
 6 同 遺物出土状況 (No.1・5・6)
 7 6区1号住居、焼土部分出土遺物
- P L123—1 6区2号住居
 2 同 竈と遺物出土状況 (No.10・13・15・
 18等)
 3 同 埋没土層 (B-B')
 4 同 遺物出土状況 (No.12・16)
 5 同 遺物出土状況
- P L124—1 6区2号住居遺物出土状況 (No.5・6等)
 2 同 遺物出土状況 (No.17)
 3 6区2号住居出土遺物
- P L125 1区3・13号住居、2区15・20・30・46
 号住居と2区包含層の出土遺物

I 発掘調査と遺跡の概要

1 調査の経過

前橋市の東南部に位置する旧城南村の地域では、1975（昭和50）年度に策定された群馬県新総合計画に基づいた農用地総合整備事業の一環として、1974（昭和49）年度より1981（昭和56）年度の8年間にわたる荒砥南部地区県営圃場整備事業が実施された。この圃場整備事業は、水田や畑地を含めた約900ヘクタールにおよぶ広大な区域を対象としたものであり、県下でも有数の規模をもつものであった。

一方、圃場整備事業の対象区域内には、荒砥三・二子古墳や今井神社古墳などの前方後円墳をはじめとした多数の古墳群や、中世の用水跡の女堀などの周知の遺跡が数多く存在し、考古学的にも重要な地域として知られていた。

こうしたことから、圃場整備事業の実施に先立ち、事業の主体者である県農政部と県教育委員会との間で、文化財の保護を前提とした協議が行われた。その結果、埋蔵文化財の包蔵地を圃場整備事業の対象地から除外することが不可能で、かつ工事によって破壊される区域については、事前の発掘調査を実施することになった。原則として、発掘調査は新たに計画される道・水路部分と低・台地の切り土部分を対象とすることで合意された。

8年間におよぶ荒砥南部地区の圃場整備事業に伴い、縄文時代の集落跡を検出した荒砥前原遺跡や二之堰遺跡をはじめ、古墳時代から平安時代にかけての集落跡や水田跡等を検出した上川久保遺跡や島原遺跡および天之宮遺跡、中世の大規模な用水跡と畠跡を検出した女堀などに代表されるような発掘調査が、17遺跡で実施された。

1981（昭和56）年度の圃場整備事業は、当該事業の最終年度にあたり、その範囲は荒口町、今井町、二之宮町にまたがる約90ヘクタールの面積におよんだ。こ

の区域には、周知の遺跡として前方後円墳の今井神社古墳とその周辺に分布する小円墳群の今井神社古墳群、中世の用水跡の女堀、包蔵地の道上遺跡や三本木遺跡などが存在しているのみであった。そこで工事に先立って、全対象区域の遺物分布調査を実施し、包蔵地の有無とその範囲を把握した。工事計画により遺跡の破壊されるおそれのある区域については、この調査結果を基にして発掘調査を行う地点を定め、更に包蔵地としての認定漏れの防止や遺跡範囲を確定するために、工事の対象区域に適宜トレンチを配置して確認調査を行った。その結果、発掘調査を必要とする遺跡として、荒口町の女堀と前田遺跡、今井町の北原遺跡と北三木堂遺跡および今井神社古墳群、二之宮町の青柳遺跡の合計6遺跡がリストアップされた。これら6遺跡の延べ面積は15ヘクタールを越える広大なものであり、それを単年度内に調査終了させることは困難であることから、幾つかの工事設計変更がなされたが、それでも最終的に10ヘクタールを越える調査面積となった。（ここで報告する北三木堂遺跡を除いた他の遺跡は既に報告済みであり、それらの経過の概要は省略する。）

北三木堂遺跡は、今井沼とそれに連なる小規模な沖積地の両縁に展開する丘陵上の遺跡で、畠地整備を中心とした切り土工事により破壊される約70,000㎡の範囲が発掘調査の対象となった。当遺跡は縄文時代から平安時代にかけての約90軒の竪穴住居による集落跡や、中世の墓群および先土器時代の石器包含層からなる複合遺跡であった。しかし、調査期間は工事期間との関係から、1981（昭和56）年12月末から翌年3月初旬までの実質2カ月間であり、前述の前田遺跡や北原遺跡の調査をも同時進行させなければならなかったために、困難を極めた調査となった。特に先土器時代の調査は、1～6区に分かれた調査区の中で、2区の一部においてのみ実施し得たものであり、調査不十分な側面を残した。

2 遺跡の位置と地形

荒砥北三木堂遺跡は、前橋市の市街地から東方へ約11kmほど離れた旧荒砥村に所在しており、JR両毛線駒形駅から北東へ2.6km、荒砥川と国道50号線が交わる地点より北東へ500mのところに位置している。

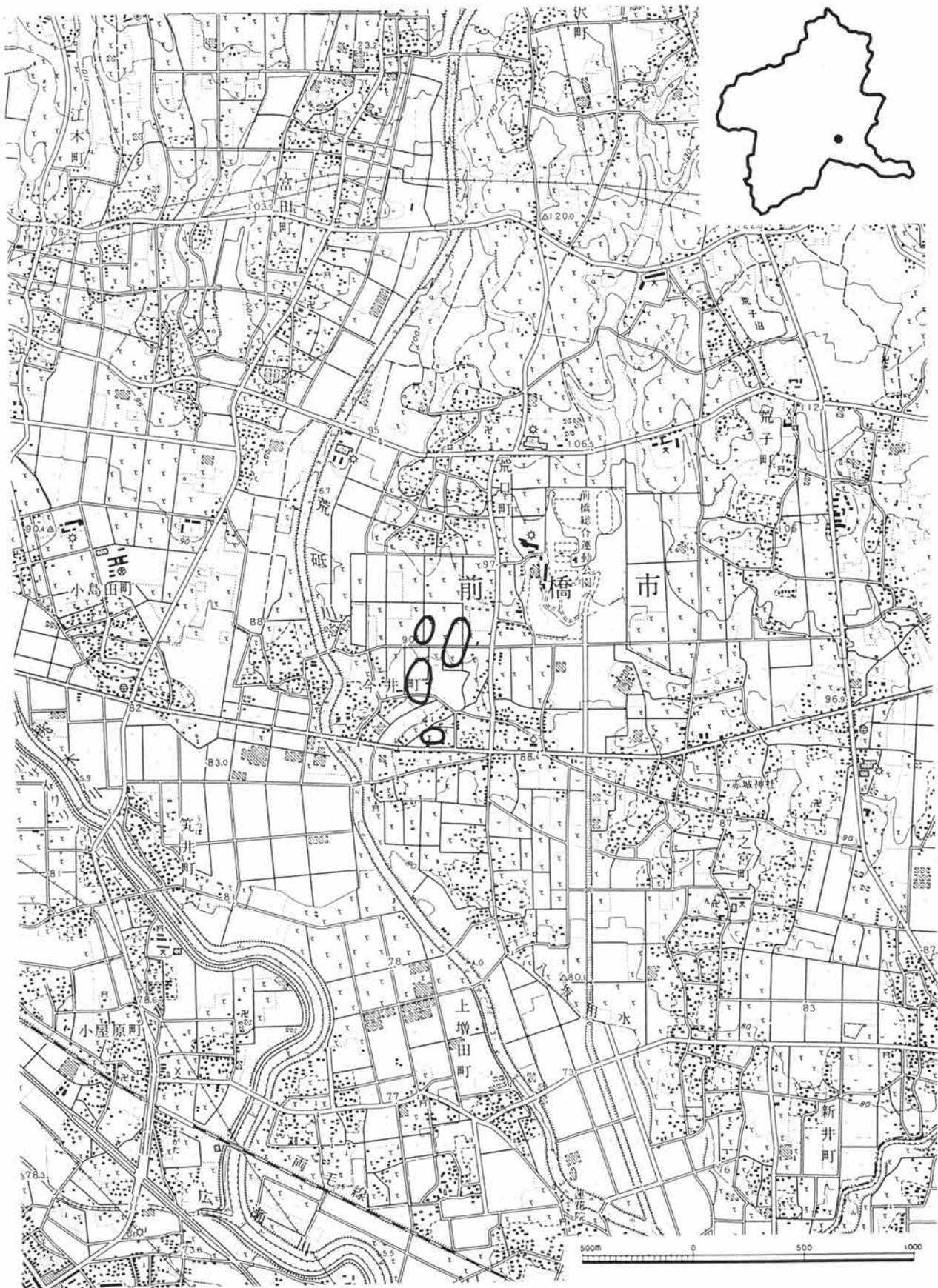
当遺跡の立地する旧荒砥村地域は、県中東部に位置する赤城山南麓の末端部にあたる。赤城山は黒檜山（標高1,828m）を最高峰とし、那須火山帯の南端に位置する複合成層火山である。北西麓は比較的大規模な輻射谷が発達した丘陵地形を呈するが、南麓では浅い輻射谷と緩やかな原形面からなる広大な裾野地形を呈している。また南麓では標高500m地帯で山地から丘陵性台地への地形変換点がみられ、200mよりも下位の地域は低台地化している。この低台地地域では、山腹より流出する荒砥川、宮川、江竜川、神沢川、桂川などの中小河川や山麓端部からの湧水によって開析が進み、複雑に入り組んだ小規模な沖積地が形成されている。また山麓の末端部は、桃木川や広瀬川などの河川の侵食によって、小規模な崖線が形成されているが、荒砥川や神沢川との合流点の周辺には広大な沖積地が広がっている。赤城山南麓の基盤層は火山泥流堆積物によって形成されており、荒砥南部地域の地形は下部ローム以上をのせた洪積台地と、ロームの二次堆積である砂壤土性の微高地のほかは、沖積地に分類される。台地はローム層中には、県西部の長野県境に位置する浅間山を給源とした板鼻黄色軽石（As-YP）、板鼻褐色軽石群（As-BP）、広域テフラの始良Tn火山灰（AT）、榛名山を給源とする八崎軽石（HP）等の更新世のテフラ層が堆積している。また、沖積地では古記録や考古学的資料から1108（天仁元）年の噴火とみられる浅間Bテフラ（As-B）や、考古学的資料から6世紀初頭とされる榛名山のニッ岳火山灰（FA）、4世紀中葉とされる浅間C軽石（As-C）などの完新世のテフラが堆積し、これらテフラの直下より古代の水田址や畠址が検出されている。これらの完新世のテフラについては、台地上の弥生時代から平安時代にかけての遺

構の埋没土中からも検出されている。

微高地の成因については現在のところ明確になってはいないが、赤城山の山体の一部が自然災害によって崩壊し、河川沿いに泥流となって流下して流速の衰える山麓端部に再堆積したものと考えられている。最近、当地域における発掘調査が進む中で、この泥流堆積物の下位に縄文時代早期の遺物包含層の存在することが確認され、少なくともこの微高地の形成が完新世に入ってからであることが判明した。また、818年の地震災害による大規模な土砂崩壊跡も検出されており、こうした数時期にわたる自然災害に伴う泥流堆積物によって、河川沿いや開析谷沿いの地域には微高地の形成とともに大きな地形の変化が生じたと推定される。

当地域における土地利用は、台地では桑・菜園を中心とした畠地、沖積地は水田としてそれぞれ開発されているが、火山性の山麓特有の保水性に乏しい欠水地帯でもあり、常に用水不足に悩まされてきた歴史をもつ。灌漑用水の確保のために、山腹から山麓末端にかけて多数の溜め井や溜め池などの施設が構築され、湧水や山腹からの中小河川による給水を受けてきたが、これらのみでは需要をまかなうことができず、近年では利根川から引水した大正用水や群馬用水による給水を得て、ようやく安定した状態となっている。

荒砥北三木堂遺跡は、西側を荒砥川で、東側を標高95mより流出する湧水によって形成された開析谷でそれぞれ挟まれた、幅500mほどの舌状の台地東端部を中心に立地している。当遺跡は地点を隔てた4つの遺跡により構成されており、この開析谷沿いの東縁辺に沿ってNo.1・2調査区と北側へ500m離れてNo.4調査区が、西縁辺に沿ってNo.6調査区と北側へ300m離れてNo.3・5調査区の各遺跡が展開する。No.1・2・4調査区とNo.3・5調査区とを隔てている開析谷は、幅30~40m、奥行き1km程の規模をもち、当遺跡の南方500mの地点で荒砥川に合流している。No.1・2区の南東側には、構築の時期は定かではないが、この開析谷を流れる湧水を堤により東西にせき止めて湛水させた今井沼と呼ばれる溜め池が隣接して存在する。またNo.3・4調査区とNo.6調査区との間には、この開析谷



第1図 遺跡の位置

I 発掘調査と遺跡の概要

から分岐した幅20m、奥行き500mほどの極めて小規模な開析谷が存在し、やや入り組んだ地形を呈するが、これらの大小の開析谷により地形的には、各調査区が4つの遺跡としてとらえられる。これらの遺跡が立地する地点の標高は89～93mであり、南方へ向かって約2%前後の勾配をもち、開析谷との比高差は約3m前後である。

3 周辺の遺跡

この項では弥生時代以降の農耕集落の変遷を中心に、荒砥北三木堂遺跡(1)周辺の歴史的環境を概括しておきたい。

弥生時代 本遺跡で検出された中期後半の住居と同時期の住居は、荒口前原(3)、荒砥前原(4)、荒砥島原(5)の各遺跡や鶴ヶ谷遺跡群(6)で検出されている。いずれの遺跡も小規模で、沖積地を臨む台地縁辺や微高地上に立地している。居住域に接した沖積地の一部を生産域とする小規模な農耕集落の一例と考えられる。後期の遺跡としては荒砥大日塚(7)、宮川(8)、宮下(9)、北山の各遺跡があげられる。

古墳時代 古墳時代前期になると遺跡は急増する。これらの集落は、台地縁辺に立地し、小河川からの取水や沖積地の谷頭からの湧水に依拠した生産域を維持していたと思われる。この時期の集落は、小河川の流域ごとにほぼ一定の間隔をおいて立地していることが指摘されているが、これは乏水地帯であるこの地域にあって、絶対量に限界のある用水を効率的に配水するための配慮が働いたためとされている。二之宮千足遺跡(10)では浅間Cに埋没した水田が検出された。また、荒砥天之宮(11)、荒砥諏訪西遺跡(12)で同時期の畠が検出されている。

この時期、居住域に近接して周溝墓が複数築造される場合が多い。荒砥島原(5)、荒砥二之堰(13)、荒砥上ノ坊遺跡(14)などがその例である。堤東(15)、中山A、東原B遺跡・阿久山遺跡(16)では前方後方型周溝墓が検出されている。

このように、周辺地域における居住域や墓域として

の周溝墓の検出例は、他地域に比較しても遜色のないものであるが、現在のところ前期古墳の存在は知られていない。前橋市天神山古墳や伊勢崎市華蔵寺裏山古墳が比較的近接した位置にあるといえる。

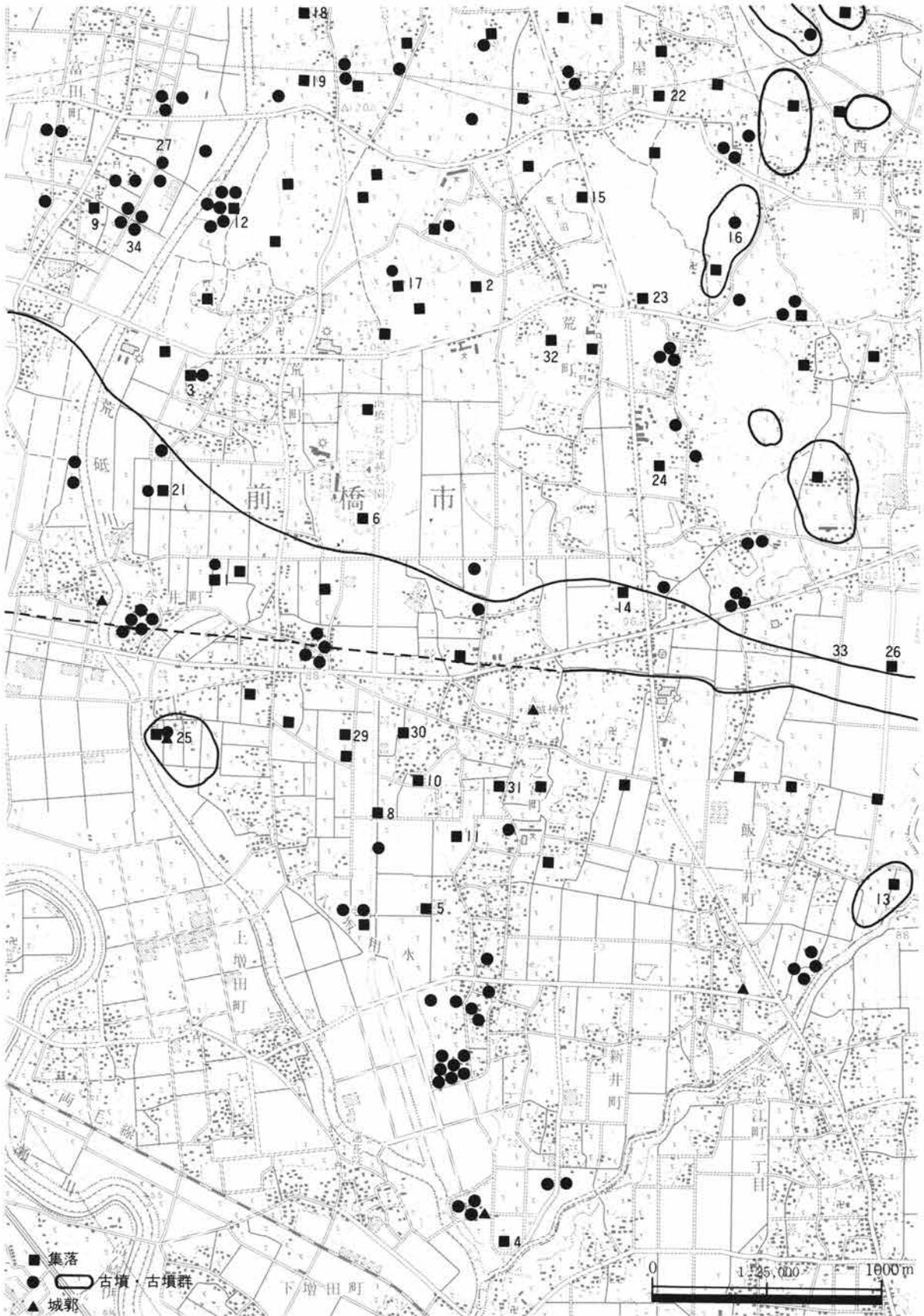
前期の集落のうちの多くは中・後期に継続し「伝統集落^{註2}」となる。柳久保(17)、丸山(18)、北原(19)、鶴ヶ谷(6)、荒砥宮田(20)、荒砥諏訪西(12)、荒砥島原(5)、荒砥東原(26)、荒砥上ノ坊(14)など多数の遺跡がこれにあたる。また、中期になって新たに集落が形成される例としては、荒砥天之宮(11)、荒砥北原(21)、北田下(22)、下境II遺跡(23)などがある。「第一次新開集落^{註2}」の成立である。

荒砥荒子遺跡(24)や梅木遺跡、丸山遺跡(18)では、5世紀後半から6世紀にかけての堀による方形区画をめぐらした住居群が検出され、首長層の居宅と考えられている。

居宅の出現に代表される集落形態の多層性は、墓域である古墳にも認められる。5世紀の後半になり、当該地域で初出の大型前方後円墳である今井神社古墳(25)が築造される。全長71mの規模をもち、組み合わせ式の石棺を内部主体に有したと考えられる。同時期には、東原6号墳(34)、おとうか山古墳(27)、新山3号墳(28)などが築造されているが、いずれも直径が20m前後の小円墳にすぎない。

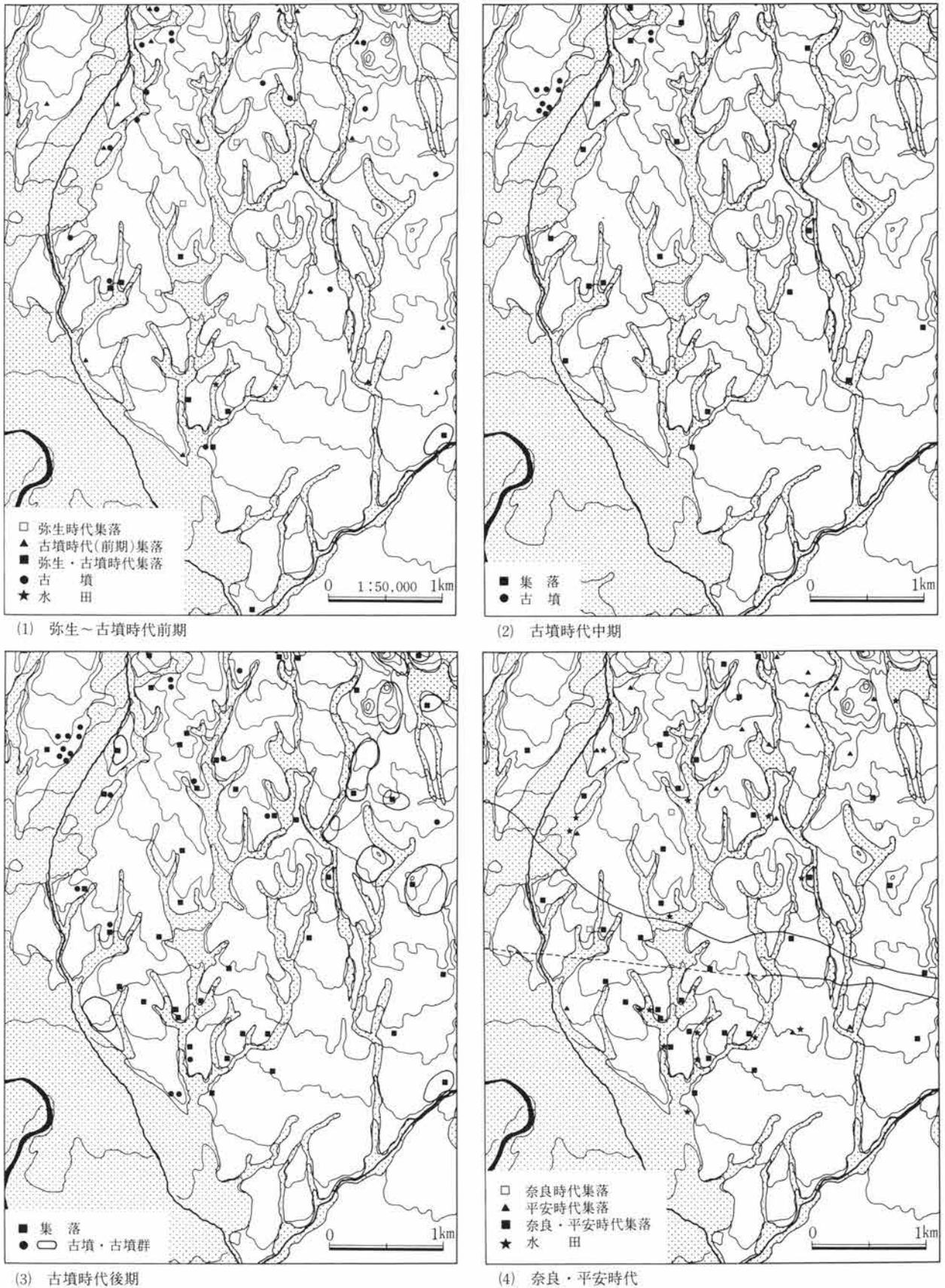
このような居住域・墓域にみられる集落変遷の背景には、弥生時代から古墳時代前期を通じて採用されていた、小河川からの取水や自然湧水を利用した配水方法に加えて、荒砥天之宮遺跡(11)で検出された溜め井の掘削、河川の流路変更をも伴うような新たな、かつ大規模灌漑技術の導入による農耕地開発の存在が想定される。特に、他の小古墳と隔絶した規模を有する今井神社古墳(25)の出現は、小地域圏の統括者の存在を窺わせ、これらの開発が政治的、組織的に行われたことを示唆している。また、本遺跡とは至近の位置にあり、本遺跡の住居数が5世紀代に飛躍的に増大するという動向とも密接なかかわりを有する古墳と思われる。

6世紀から7世紀代になると「第一次新開集落」も



第2図 周辺の遺跡分布

I 発掘調査と遺跡の概要



第3図 時期別の遺跡分布

台地・微高地 沖積低地

「伝統集落」化し、「伝統集落」の変遷と同様の拡大をみせるようになる。そして、荒砥洗橋遺跡(29)、荒砥宮西遺跡(30)、二之宮宮下西遺跡(31)などでは新たな集落の形成が始まる。古墳は三・二子古墳に代表される大型前方後円墳が数基ずつ築造されるとともに、小地域ごとに円墳が築造されるようになる。特に、7世紀代になると群集化が進むとともに本遺跡や荒砥北原遺跡(21)、荒砥下押切II遺跡(32)のように散在した状態も認められるようになる。

奈良・平安時代 古墳時代後半に存続・成立した集落はこの時代も継続し、居住域は台地全体を有効に利用して立地するようになる。水田開発は、古墳時代に比べて更に進行している。1108(天仁元)年に降下したAs-Bで埋没した水田跡が、16箇所の遺跡から検出されており、古代末期には当該地域の台地周縁の沖積地の水田開発はほぼ完了していたと思われる。また、荒砥諏訪西遺跡(12)では微高地上の水田跡が検出されており、水田耕地の拡大がかつての居住域にまで及びはじめていることを示している。しかし、この浅間山の噴火によって、本地域をはじめ県東部一帯の水田耕地は潰滅し、灰掻き等の復旧は行われずに、一定期間にわたり水田耕作が停止されて荒廃地化したことが、その噴出物の堆積状況から窺われる。本地域を東西に横切る女堀(33)は、12世紀の中葉に澁名荘域内のそれら荒廃地の再開発を目的として未完成に終わった農業用水である。

中世以降 本遺跡では小土壙をともなう火葬墓が検出されているが、同様のものは荒砥宮田遺跡(20)や北山遺跡にもみられ、北山遺跡では土葬墓も検出されている。鶴ヶ谷遺跡群(6)でも20基の墓壙が発見された。宮下遺跡(9)で検出された59基の墓壙は、板碑や五輪塔を伴い、造墓集団の検討や埋葬形態の推移を知る上で注目される。

註1 小島敦子「初期農耕集落の立地条件とその背景—地形復元を前提にした遺跡分布の分析—」『群馬県史研究』24 1986

註2 用語の使用は能登健・小島敦子(「弥生から平安時代の遺跡分布」『新里村の遺跡』新里村教育委員会 1984)の定義に従っている。

4 調査の方法

発掘調査に先立って行われた遺物分布調査結果に基づいて、道・水路および切り土工事予定区域に対して大型掘削重機(バックフォ)による試掘トレンチを適宜設置し、遺構の有無の確認を行った。

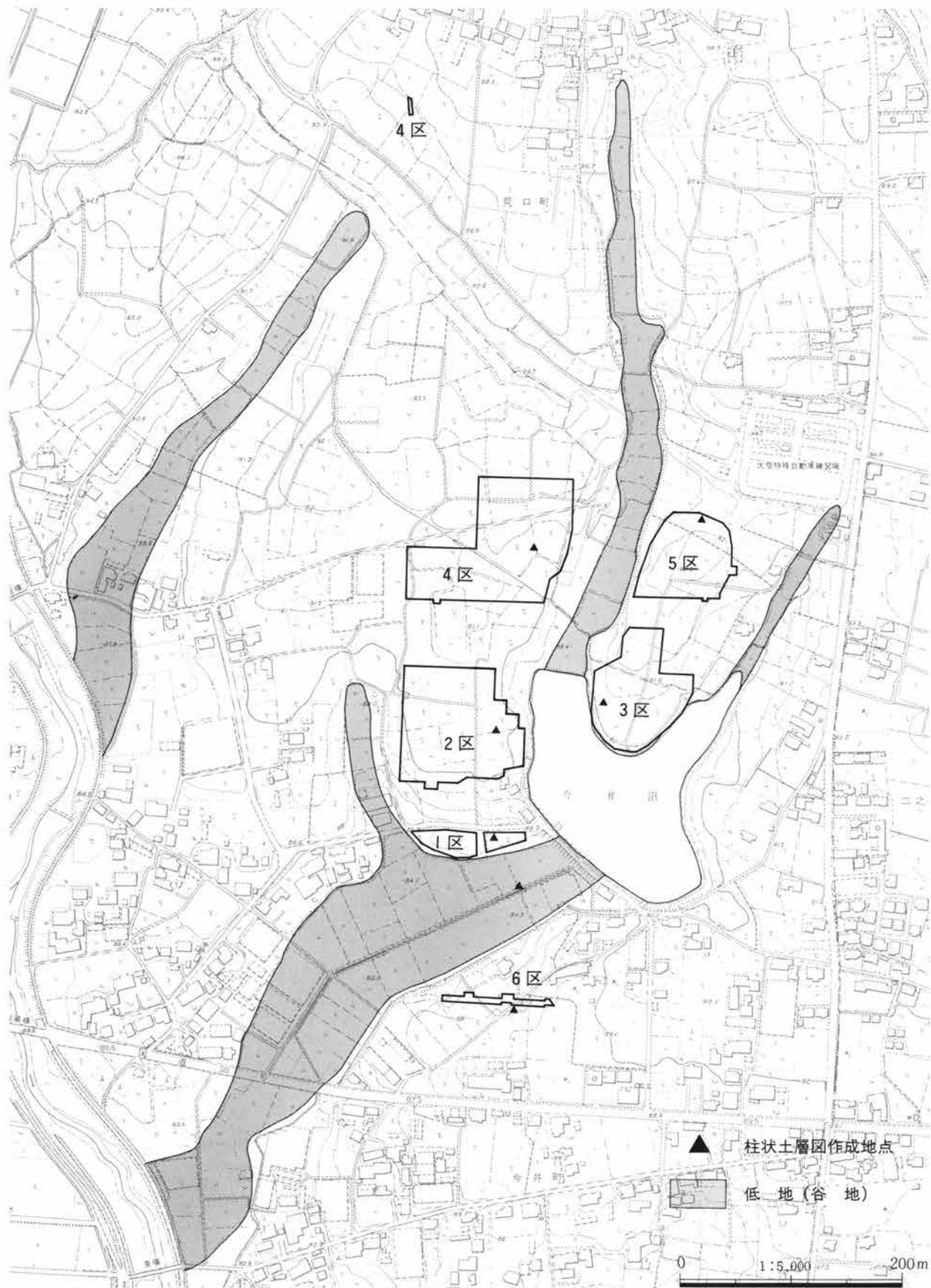
その結果、6地点の合計39,000m²の範囲より縄文時代から平安時代を中心とした遺構と遺物が検出され、特に今井沼に面した地点(2区)で遺構の存在が濃密であることが判明した。また各地点では、耕作による表土層の攪乱がローム層の上面にまでおよんでいる箇所が多く、良好な遺物包含層の存在している地点は少ないことも判明した。こうした試掘データをふまえて、各地点における遺構確認範囲内の層厚30~60cmの表土層を大型掘削重機によって除去し、ローム層上面にて遺構の検出を行うこととした。この機械による表土層の掘削に当たっては、遺物包含層の存在も意識して徐々に深度を下げて行く方法を取り、遺物の散布が確認できた時点で掘削を止め、手作業による遺物・遺構の検出を行った。特に、縄文時代の出土遺物の多い3区南半部では、ローム層の上面に草創期後半の遺物包含層が残存しており、手作業によるグリッド調査を行った。

各地点には1~6区の調査区名を付し、各地点における工専用ベンチマークを基準にして個別に3×3mのグリッドを設定した。また各調査区の位置については、今後における遺跡周辺の発掘調査に備えて、国家座標上にプロットした。

5 遺跡の基本層序

1~6区の発掘調査対象区域は、基盤層に上部ロームを載せた台地に地形区分され、ローム上面から地表面までの間には、1区を除いて各地点ともに共通した2~3枚の土層が堆積している。1区は沖積地へと続く台地先端の斜面部に当たるため、他区とは堆積土層の様相が若干異なっている。以下、台地部分の堆積土

I 発掘調査と遺跡の概要



第4図 発掘調査区の位置

層を1区と2～6区とに2大別して説明を加える。また調査対象区域とはならなかったが、沖積地の堆積土層について参考資料として説明を加えておきたい。

1区 斜面部の末端に位置するために、他地点に比べて地表面からローム上面までの土層が厚い。

I層：現在の耕作土であり、灰褐色を呈する。浅間山を給源とする1783（天明3）年のAs-Aのテフラを多量に含んだ砂質土で、50～60cmの層厚をもつ。

II層：暗褐色土。褐色土をブロック状に含み、浅間山を給源とする1108（天仁元）年のAs-Bテフラが散在する。二次堆積土と思われ、粘性に乏しい。20～25cmの厚さで堆積している。

III層：黒褐色土。古墳時代の遺物包含層である。浅間山を給源とするAs-Cテフラを含み、粘性や締まりのある土である。25～30cmの厚さで堆積する。

IV層：暗褐色土。上面が古墳時代の遺構確認面であり、縄文時代の遺物包含層でもある。粘性や締まりのある土で、10～20cmの厚さで堆積している。

V層：褐色土。上部ロームの最上面にあるソフトロームが黒味を帯びたもので、浅間山を給源とする1.3～1.4万年前のAs-YPテフラを含む。

2～6区 桑・菜菔の耕作による攪乱がローム上面に達している地点が多く残存状況は良くないが、各調査区ともに類似した土層堆積が認められる。

I層：現在の耕作土であり、灰褐色を呈する。As-AやAs-Bのテフラを含んだ砂質土で、粘性や締まりが少ない。30～50cmの厚さで堆積する。

II層：黒色土。As-Cを含む黒ボク的な土で、地点によっては弥生～平安時代の遺物が包含されている。粘性や締まりのある土で、10～20cmの厚さで堆積する。

III層：黒褐色土。締まりのある土で、2・3・5区では縄文時代の草創期後半から前期にかけての遺物が包含されている。10～20cmの厚さで堆積する。

IV層：ソフトローム層である。上面はIII層からの漸移層で、褐色味を帯びる。30～40cmの厚さで堆積する。

V層：ハードローム層である。

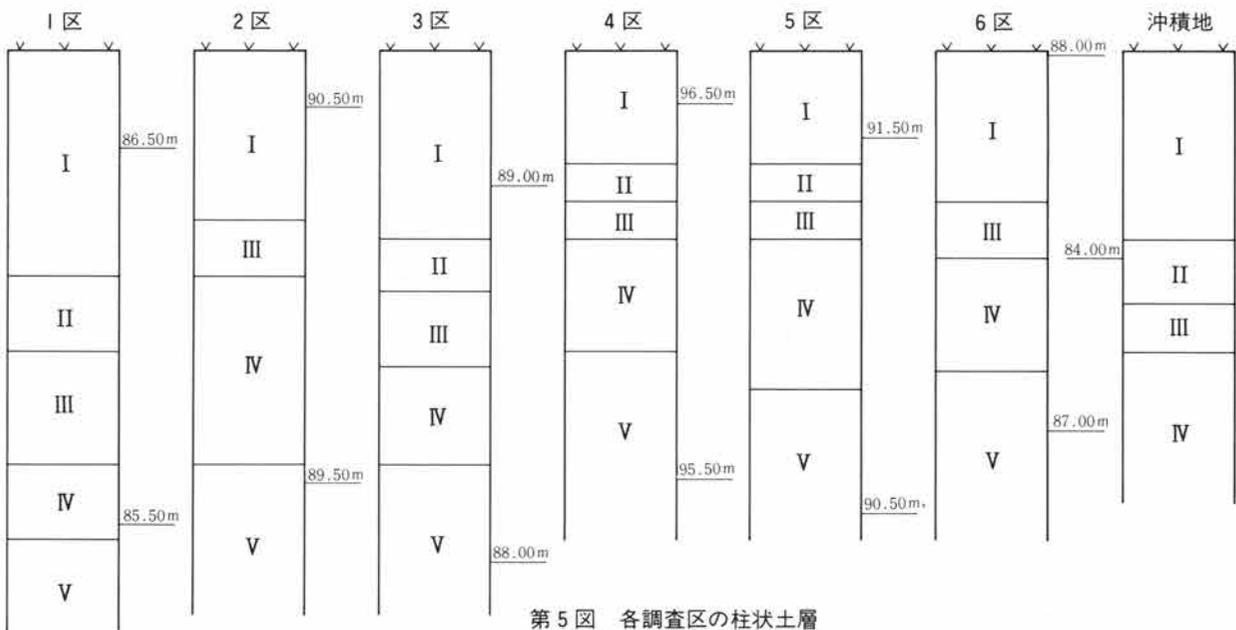
沖積地 1区南側の沖積地内にて、トレンチ調査により各土層の堆積を確認した。

I層：褐灰色土。現在の水田耕作土で、層中に数枚の鉄分の沈積層が認められる。粘性や締まりのある土であり、50～60cmの厚さで堆積している。

II層：暗青灰色土。粘性の強い土で、水田耕作土の可能性もある。15cmの厚さで堆積する。

III層：As-Bの純堆積層である。10～15cmの厚さを持ち、上位に紫灰色のアッシュがみられる。

IV層：青黒色土。上面が古代の条里期の水田面と考えられるが、部分的なトレンチ調査のために畦畔は確認されていない。粘性や締まりの強い土である。



第5図 各調査区の柱状土層

II 調査の内容

先土器時代や縄文時代を除いた弥生時代以降に属する遺構は、竪穴住居を主体として土壇、溝状遺構、方形周溝墓、古墳、掘立柱遺構などが検出されているが、各調査区での遺構の時期やその内容に差がある。以下調査区（遺跡）単位に、遺構内容の概要を述べる。

1 1・2区の遺構と遺物

現在の道路によって1つの遺跡が南北に分けられた両区は、東西約100m、南北約200mほどの遺跡範囲のうち、約12,000㎡について調査され、弥生時代中期末から奈良時代にかけての遺構が検出されたが、それらの大半は古墳時代中期に属するものである。

弥生時代では、5軒の竪穴住居が台地の中央部にあたる2区より検出された。他の遺構の存在は明確ではない。古墳時代前期の遺構は、明確ではないが、包含層より土器片が検出されており、存在していた可能性もある。古墳時代中期の遺構は、59軒の竪穴住居と19基の土壇がある。また古墳時代以降に属すると想定されるが、伴出遺物がない、ために時期の特定できない遺構としては、2区から検出された円形周溝墓と円墳、それに掘立柱建物遺構・溝状遺構等がある。円形周溝墓や円墳はともに小規模なものであるが、残存の状態が悪い。奈良時代の遺構は、竪穴住居1軒のみである。

(1) 竪穴住居

弥生時代中期末の竪穴住居は5軒検出されているが、台地の中央部に集中し、その縁辺部には存在していない。他時期の遺構との重複により、残存不良なものが多いが、その平面形は台形を基調として、長辺が5mを超える長方形の規模の大きなものと、一辺が3m前後の正方形の規模の小さなものの2種類がみられる。長方形のものは2区1・31号住居で、正方形のものは2区17・26・44号住居である。住居内の施設には柱穴や炉があり、柱穴は4本を基本としてい

る。また炉については、17・44号住居を除いて検出できていないが、この2軒については床面のほぼ中央部にわずかに掘りくぼめた掘込み炉が1カ所検出されている。周溝はいずれの住居からも検出されていない。

古墳時代前期の石田川式土器の出土はみられるが、竪穴住居は検出されていない。

古墳時代中期の竪穴住居は59軒検出されているが、各住居から出土した土器が5世紀前半～後半と幅をもつことや相互に重複している住居が存在していることからみて、何期かにわたって継続的に営まれた集落と判断される。各竪穴住居の形態は、正方形や長方形を基調としたものがあり、正方形を呈するものは一辺が6mを超える大形と一辺4m前後の小形に分けられ、長方形のものには長辺が4～5mのものが多い。2区38号住居は長方形を基調とするが、拡張によると思われる張出部が付設されている。住居内の施設は、炉あるいは竈、柱穴、貯蔵穴、周溝などがある。炉付きの住居は2区2・11・18・20・43号住居の5軒で、平面形が長方形を呈し、他の竈付き住居に比べてより古式の土器を出土している。竈が付設される各住居の長軸や竈の位置については、必ずしも一定していないが、北東方向に長軸をもち、東壁に竈が付設されるものが大半を占めている。また極めて少数ではあるが、竈が西壁に付設されるものも存在する。各住居からは総計1000点を超える完形・準完形の多量の土器が出土しているが、その大半が床面より10～30cmほど浮き上がり、埋没土の中～上層に投棄された縄文時代の「吹上パターン」的な出土状況を示す。またこれらの土器の中には、破片となって複数の住居にまたがって出土しているものもある。出土遺物の中で注目されるのは、上記の土師器に並行すると思われる古式須恵器の存在であり、21軒の住居から合計43点が出土している。その他に特筆されることとして、1軒のみであるが2区25号住居の埋没土中層にて、6世紀初頭の降下テフラであるFAの純堆積層が確認されている。

奈良時代の竪穴住居は2区29号住居の1軒のみで、古墳時代の6世紀以降の急激な集落規模の縮小および断絶が認められる。平面形は一辺が4m強の正方形を呈し、遺物には表裏両面に「木」の字を墨書した坏が出土している。出土遺物の時期からみると、5区2・4号住居とも大差なく、またこれらの住居がともに墨書土器を出土していることから、相互に何等かの関係を有すると想定される。

2区1号住居

位置 E-7グリッド 写真 PL-4

形状 長軸を東西にもった長台形を呈する。四隅は丸く、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺5.90×短辺3.50・4.15mである。

面積 22.42m² 方位 N-62°-E

床面 ローム土を38~56cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面

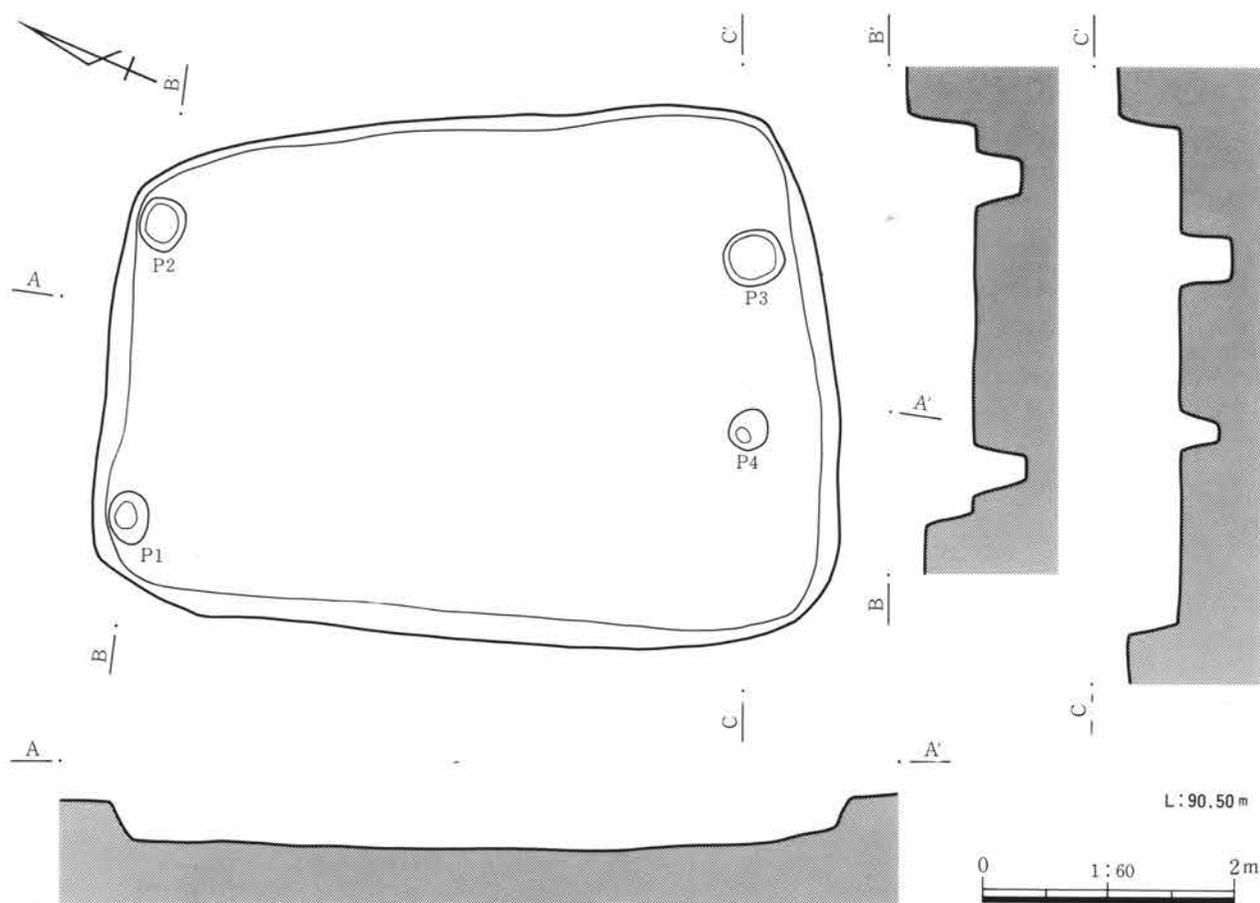
である。特に堅固な面は認められない。

炉 床面上には火熱を受けた痕跡は見当たらず、炉の位置を特定することはできなかった。

柱穴 4本の支柱穴が検出された。P₃・P₄を除いて、他は住居の対角線上に位置する。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈するが、短軸の上・下辺の位置関係が住居の外形とは逆になる。各柱穴の心々間の距離は、P₁~P₂:2.3m、P₂~P₃:4.8m、P₃~P₄:1.4m、P₄~P₁:5.1mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:35×40cm、P₂:40×35cm、P₃:45×42cm、P₄:30×33cmである。

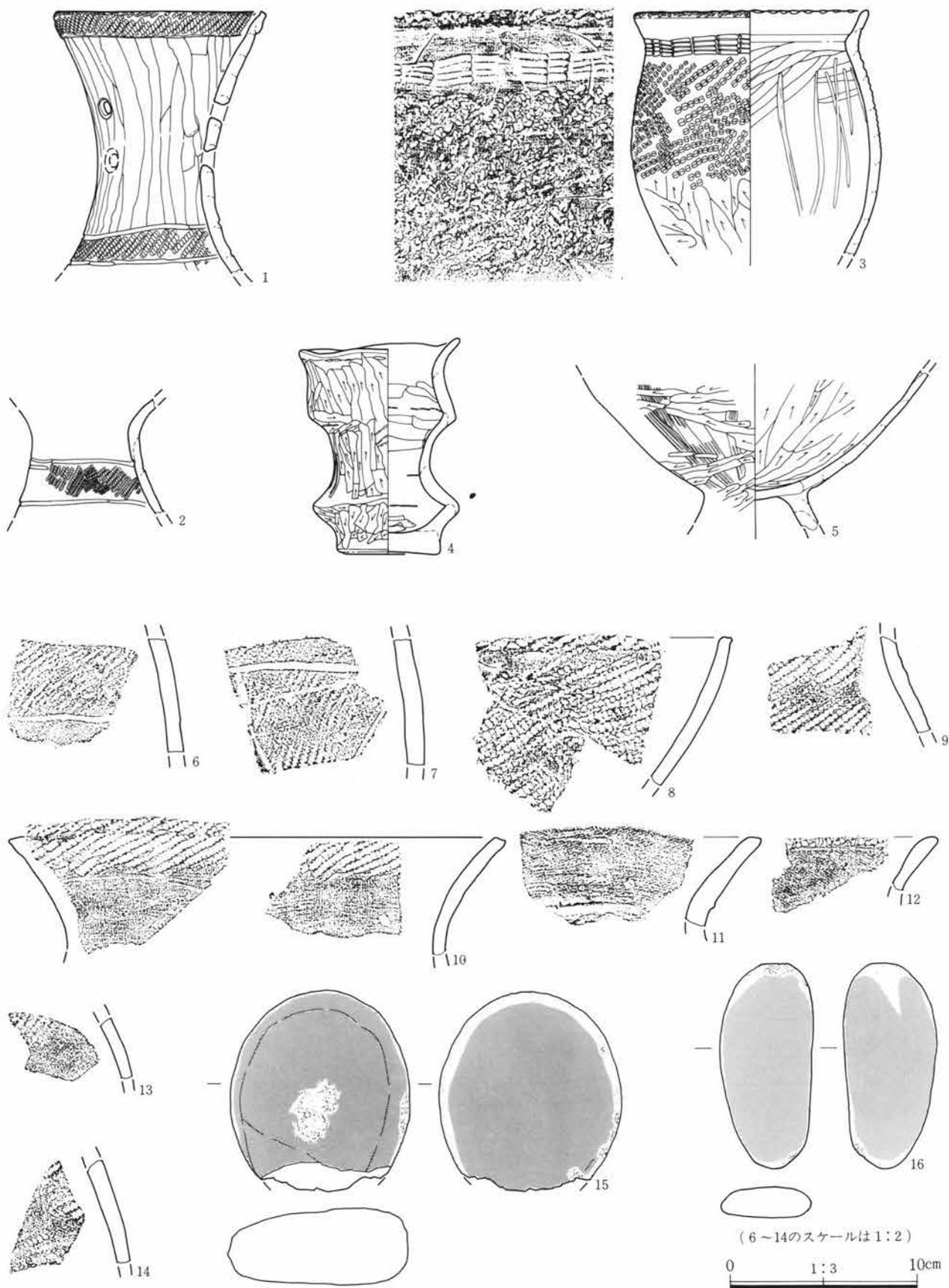
遺物 土器はいずれも埋没土中からの出土であるが、高坏1、小型甕1、甕11、台付甕1、壺3、小型異形土器1の合計18点が出土した。また、表裏両面に磨り面をもつ磨り石2点が出土した。

(遺物観察表:1・2頁)



第6図 2区1号住居

II 調査の内容



第7図 2区1号住居出土遺物

2区17号住居

位置 H-8グリッド 写真 PL-3

形状 正方形に近似しているが、長軸を東西にもった台形状を呈する。四隅は直角で、周壁は若干蛇行するもののほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺4.35・3.80×短辺4.05mである。

面積 16.78㎡ 方位 N-15°-W

床面 ローム土を6~13cm掘り込んだ、凹凸の少ない平坦な床面である。支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

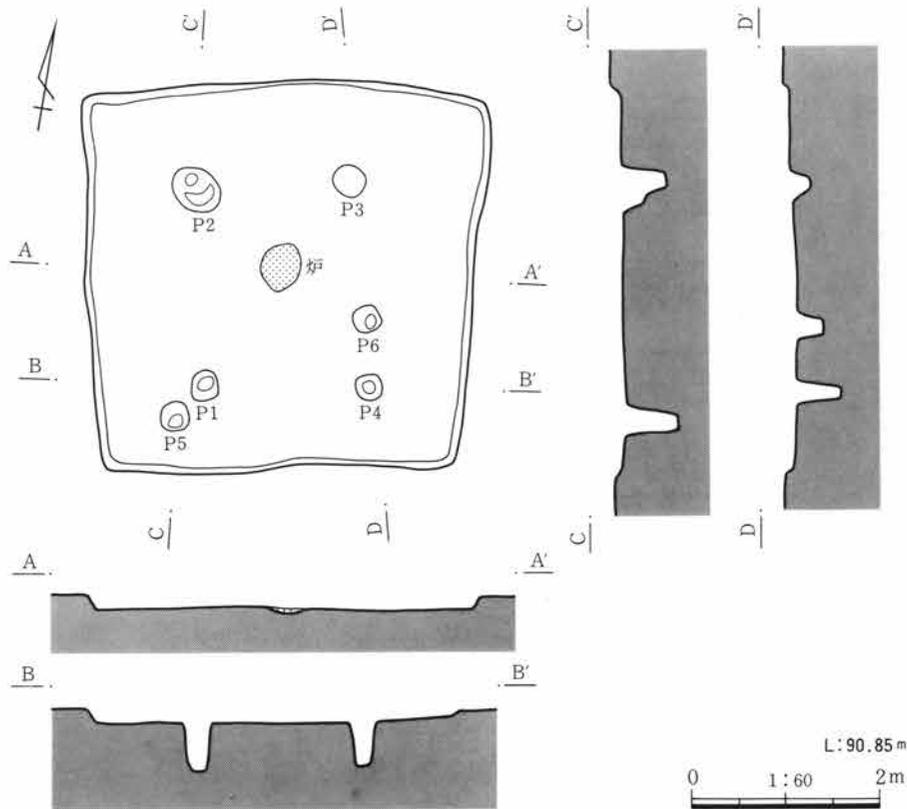
炉 床面中央部に位置する。床面を深さ8cmに浅く掘りくぼめた掘り込み炉で、長径54×短径41cmの楕円形を呈する。

柱穴 6本の柱穴が検出されたが、支柱穴と思われるものはP₁~P₄の4本である。支柱穴はP₃を除いて住居の対角線上に位置する。各柱穴の心々間を結んだ形状は、南北に長軸をもった長方形を呈し、その心々間の距離はP₁~P₂:2.20m、P₂~P₃:1.70m、P₃~P₄:2.25m、P₄~P₁:1.75mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:30×53cm、P₂:45×47cm、P₃:35×20cm、P₄:27×47cm、P₅:30×57cm、P₆:30×48cmである。

遺物 埋没土中より少量の土器片が出土したが、実測し得たのは甕6点と壺1点のみである。

(遺物観察表:2頁)

備考 周溝および貯蔵穴等は検出されなかった。



第8図 2区17号住居

II 調査の内容

2区26号住居

位置 L-11グリッド 写真 PL-3

重複 1号周溝墓に先行する。

形状 長軸を南北にもった長方形を呈する。四隅はやや丸味をもち、周壁は若干弧状に外側へ張り出す。規模は長辺3.2×短辺2.6mである。

面積 (8.70m²) 方位 N-44°-W

床面 ローム土を9~24cm掘り込む。1号周溝墓との重複や後世の攪乱等で、残存の状況は悪い。

埋没土 上層には黒ボク的な黒色土が、また下層にはロームブロックまじりの暗褐色土が堆積する。自然埋没の状態を示す。

炉 床面上には火熱を受けた炉の痕跡は認められなかったが、1号周溝墓の掘り込みによって壊された可能性が高い。

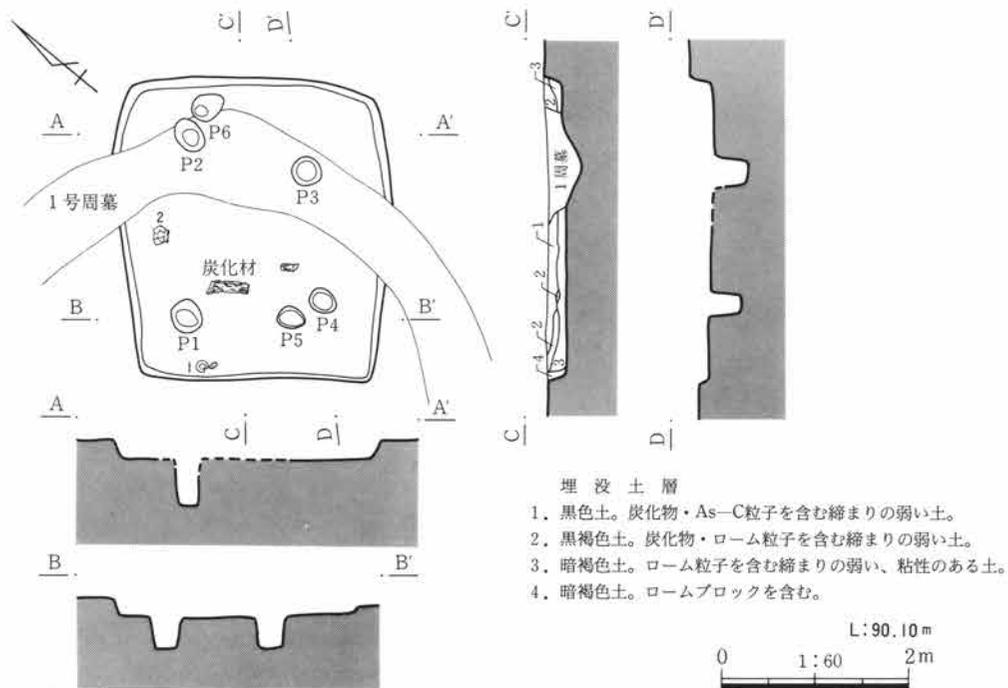
柱穴 6本検出された。位置的な在り方からみて、

P₁~P₄が支柱穴と思われる。P₂・P₄を除いた他の2本は住居の対角線上に位置している。各柱穴の心々間を結んだ形状は、長軸を南北にもった台形状を呈する。各柱穴の心々間の距離は、P₁~P₂:1.90m、P₂~P₃:1.25m、P₃~P₄:1.40m、P₄~P₁:1.45mである。またその規模(径×深さ)は、P₁:33×34cm、P₂:27×49cm、P₃:30×39cm、P₄:26×32cm、P₅:23×31cm、P₆:28×57cmである。

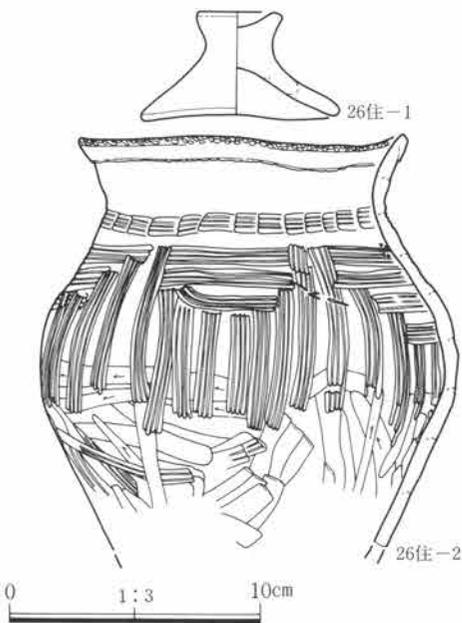
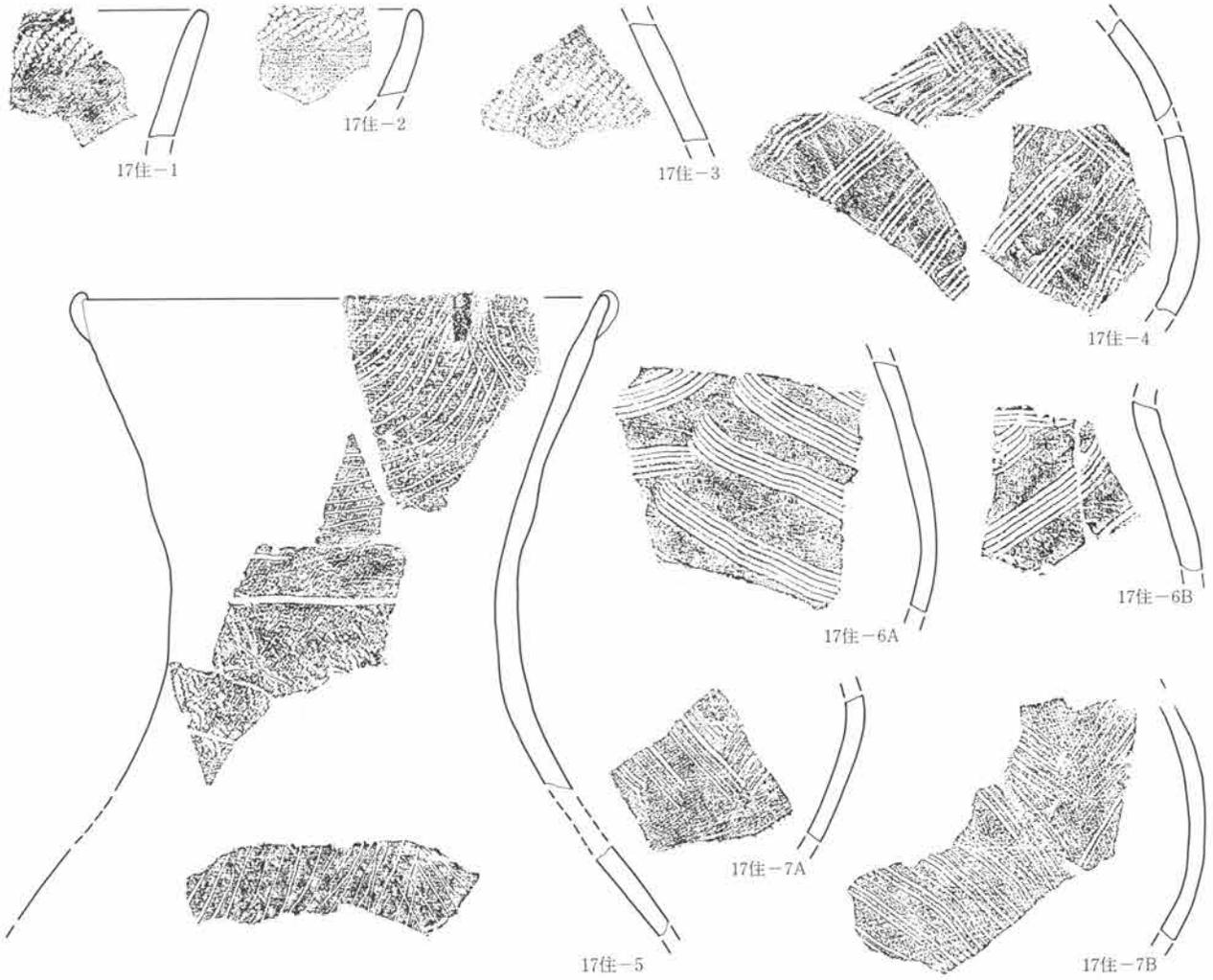
遺物 東壁および南壁近くより、甕(No.2)と盃形土器(No.1)各1点が、床面から4~8cm浮いた状態で出土した。またP₁とP₄に近接して、炭化材2点が床面より5cm前後浮いた状態で検出された。他に少量の土器片が埋没土中より出土している。

(遺物観察表:2頁)

備考 屋根材の一部と思われる炭化材が出土しており、焼失家屋の可能性がある。



第9図 2区26号住居



第10図 2区 17・26号住居出土遺物

2区 31号住居

位置 I-10グリッド 写真 PL-4・5

形状 長軸を南北にもつ長台形状を呈する。四隅は丸く、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺6.45×短辺4.35・4.80mである。

面積 29.38㎡ 方位 N-54°-E

床面 ローム土を15~20cm掘り込んで床面としている。凹凸面は少なく、平坦な床面である。支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが強く踏み固められている。

炉 床面上には火熱を受けた痕跡は見当たらず、

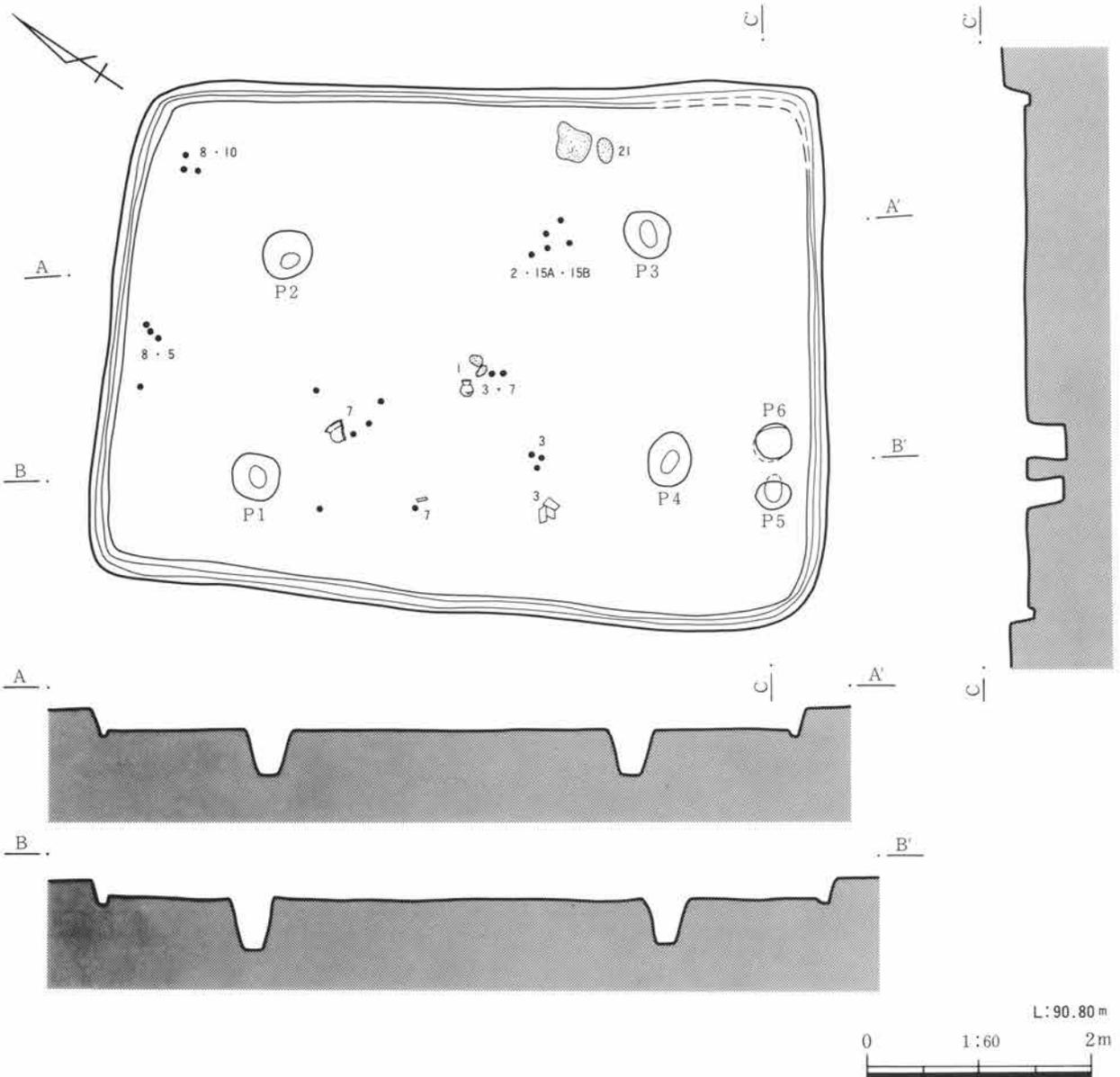
II 調査の内容

炉の位置を特定することはできなかった。

柱 穴 P₁~P₄の4本の支柱穴とP₅・P₆の2本の小ピットの合計6本が検出された。P₂・P₄を除いた他の2本は、住居の対角線上に位置する。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形とほぼ相似形を呈する。その心々間の距離は、P₁~P₂:1.95m、P₂~P₃:3.25m、P₃~P₄:2.05m、P₄~P₁:3.75mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:42×38cm、P₂:43×40cm、P₃:41×48cm、P₄:40×45cm、P₅:25×32cm、P₆:30×34cmである。

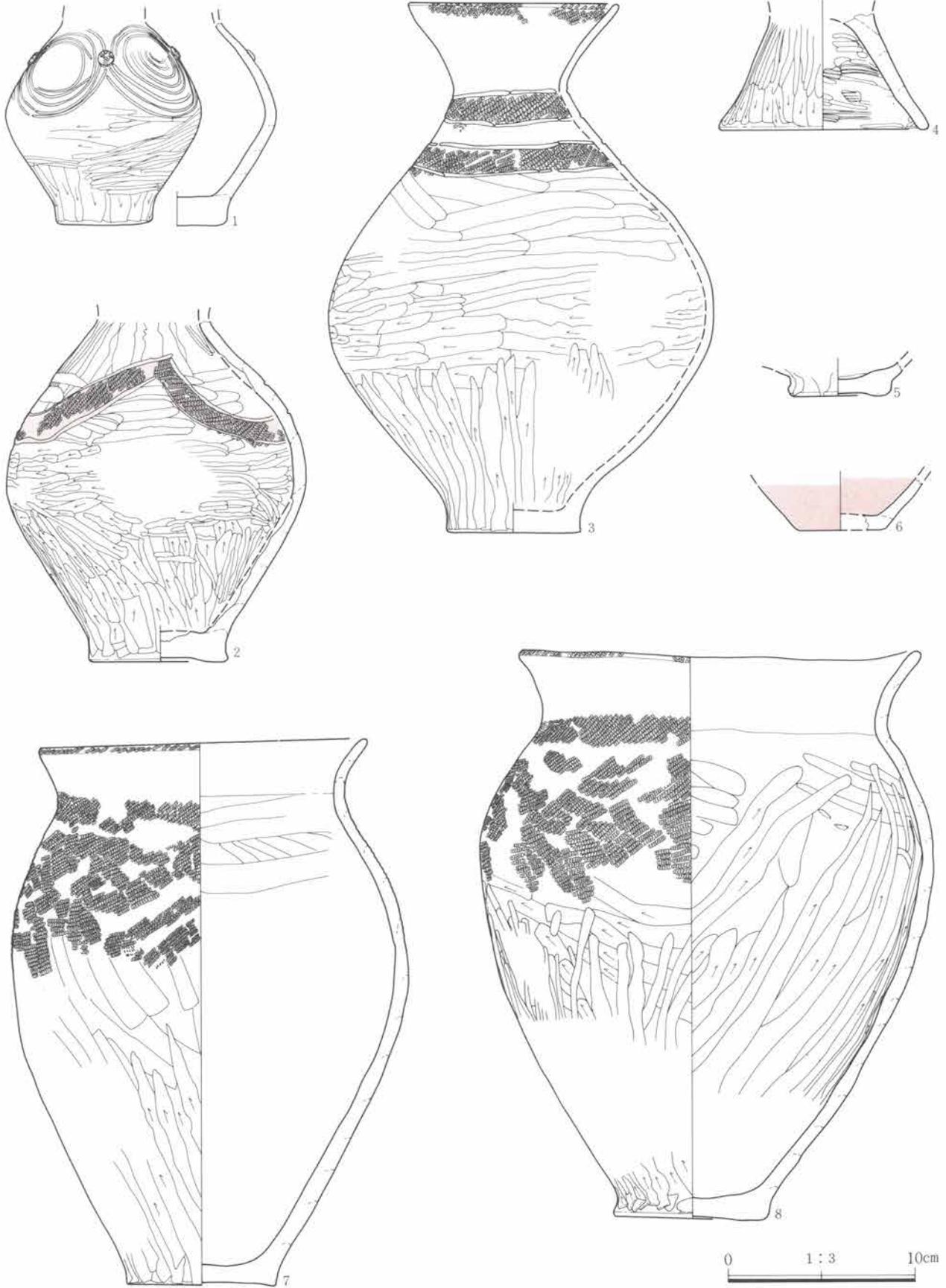
遺 物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器

は、椀1、甕9、壺7の合計17点が出土した。全体的に散在した出土状況であるが、床面に密着してNo1・3・5・7・8・10の土器片が出土し、他の土器は床面より4cm以上浮いて出土した。埋没土出土のNo15は、2区28号住居の埋没土出土の破片と接合関係にある。また、埋没土中よりNo20の紡錘車1点が出土している。東壁近くより、床面から13cm浮いて凹み石と磨り石が各1点出土しているが、縄文時代前期の土器片の出土もみられることから、これらの石器も縄文期の所産の可能性が高い。(遺物観察表:3・4頁)



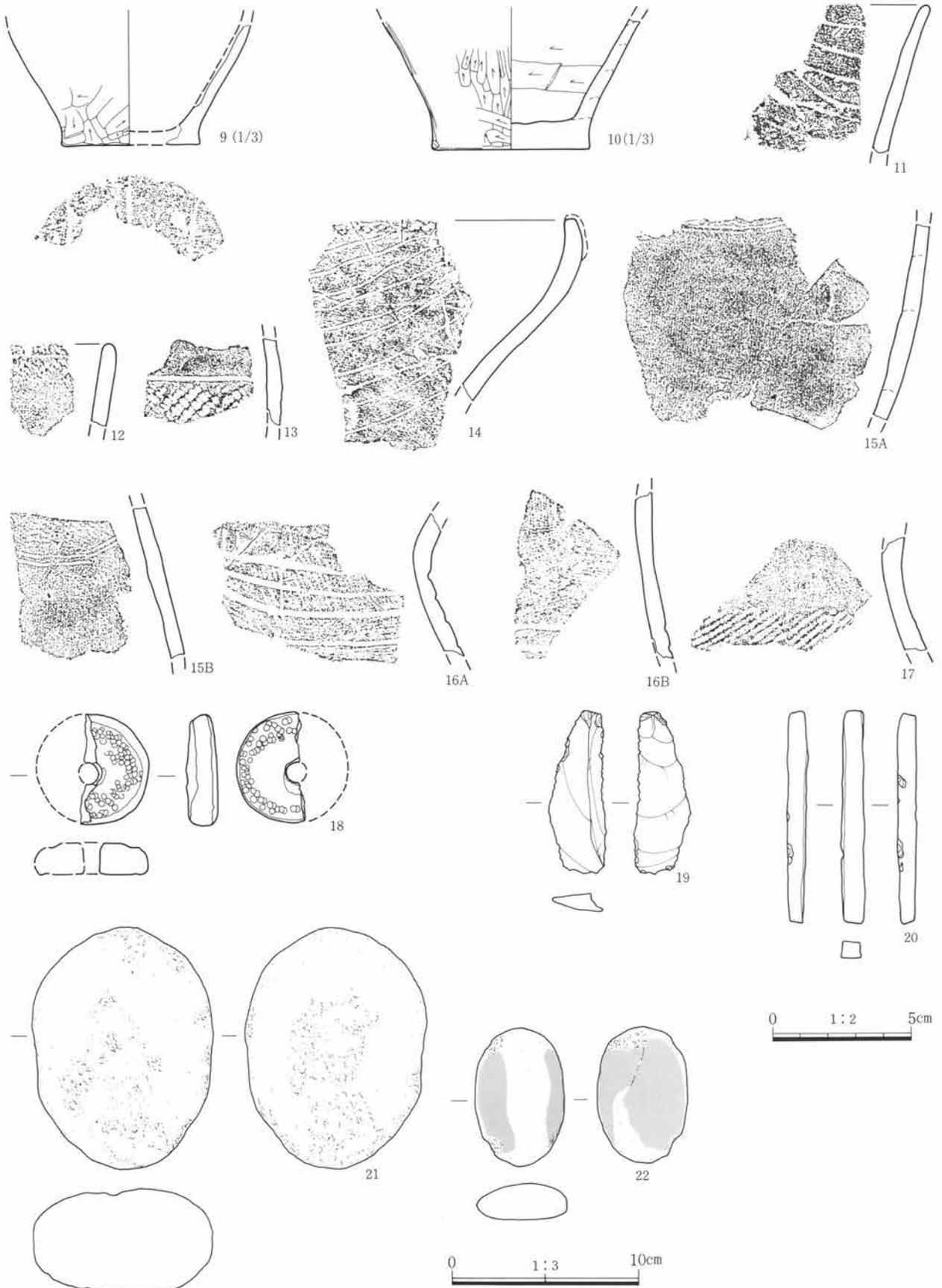
第11図 2区31号住居

1 1・2区の遺構と遺物

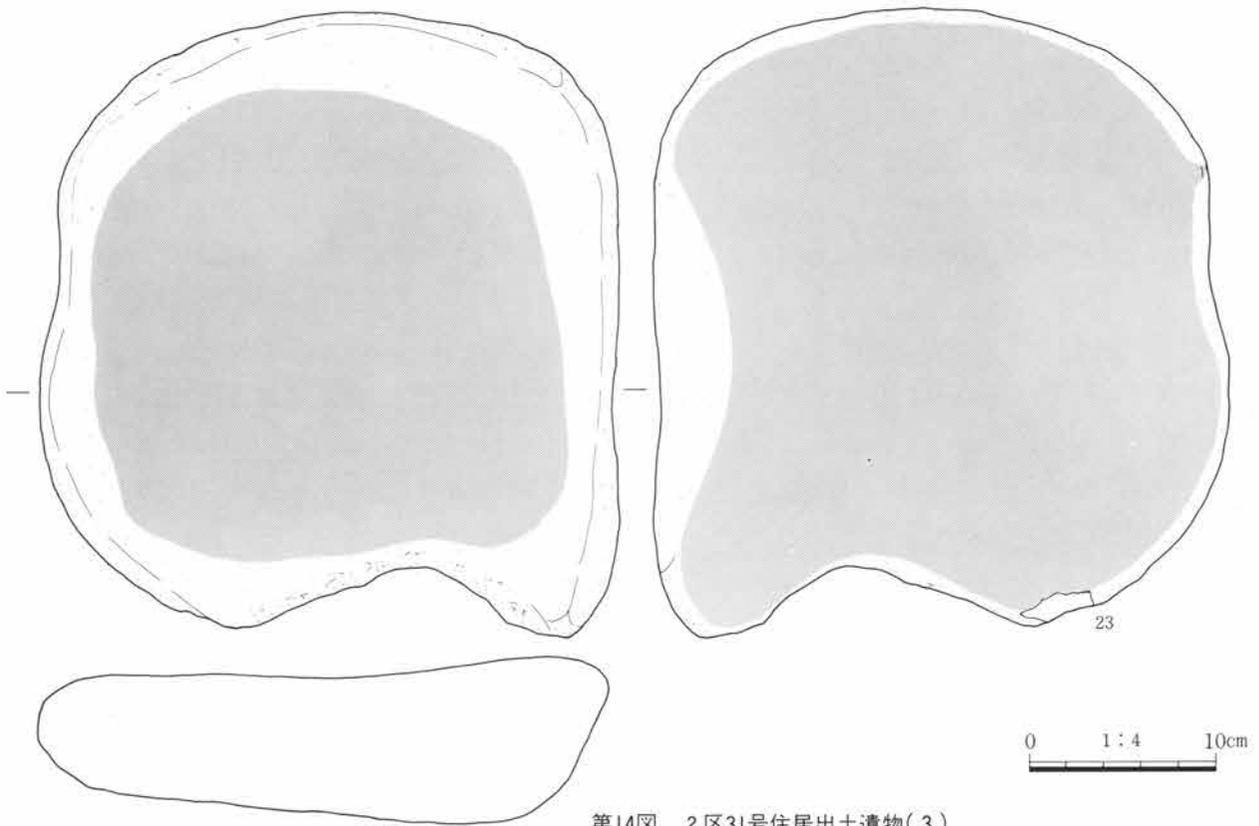


第12図 2区31号住居出土遺物(1)

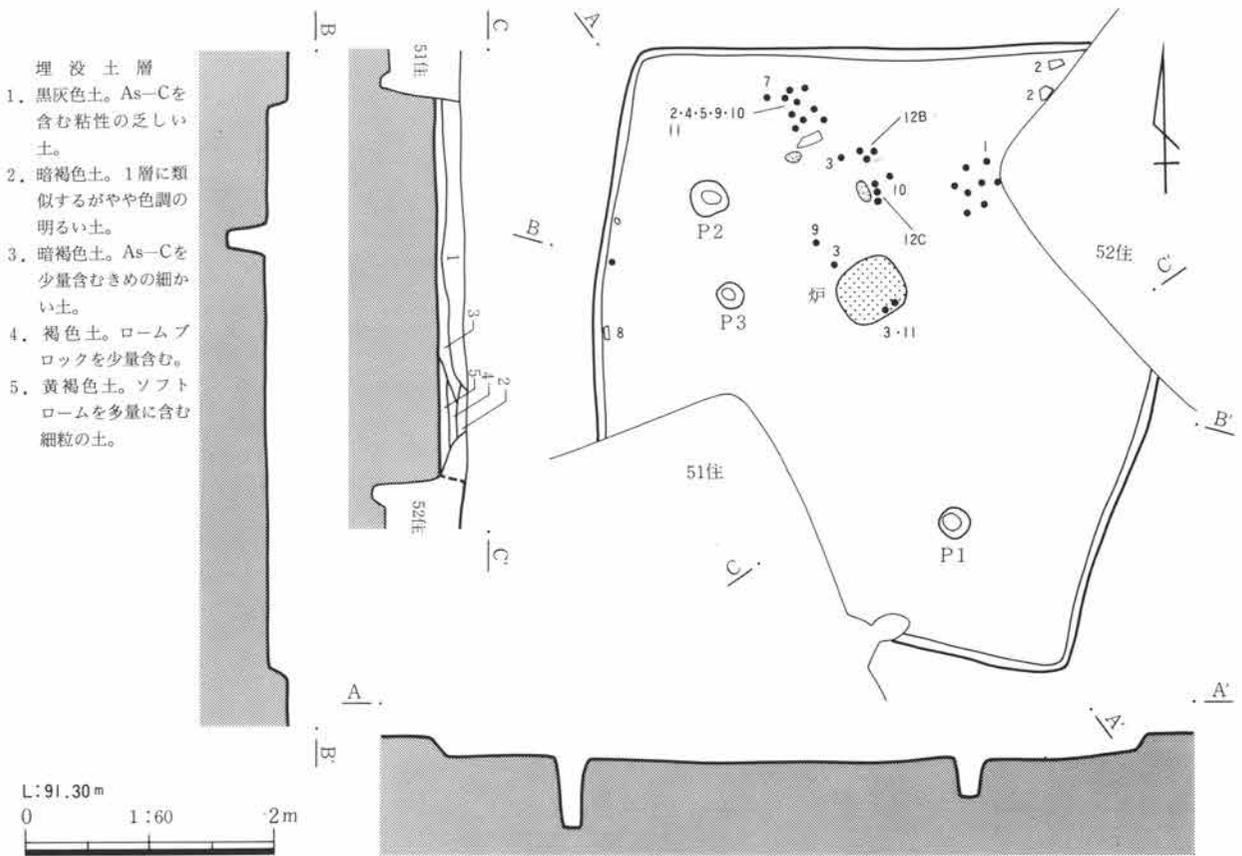
II 調査の内容



第13図 2区31号住居出土遺物(2)



第14図 2区31号住居出土遺物(3)



第15図 2区44号住居

II 調査の内容

2区44号住居

位置 K-12グリッド 写真 PL-6

重複 51・52号住居に先行する。

形状 長軸を南北にもつ不整形台形を呈すると思われる。四隅は角張り、周壁はやや蛇行するもののほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺3.7・5.1×短辺4.6mである。

面積 (20.30㎡) 方位 N-85°-W

床面 ローム土を6~14cm掘り込んで床面としている。周壁際から中央部に向かって5~10cmの比高差ですり鉢状に低くなる。支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

炉 床面の中央部に位置する。床面をわずかに掘りくぼめた地床炉で、一辺が50cmほどの隅丸方形を呈

する。壁面は火熱によって焼土化している。

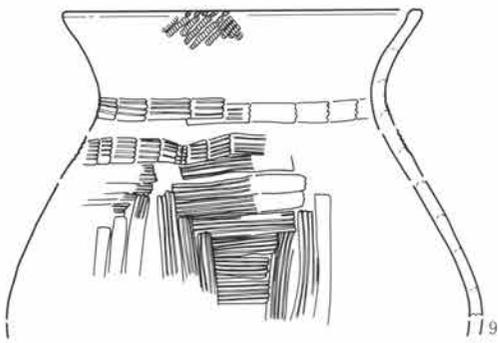
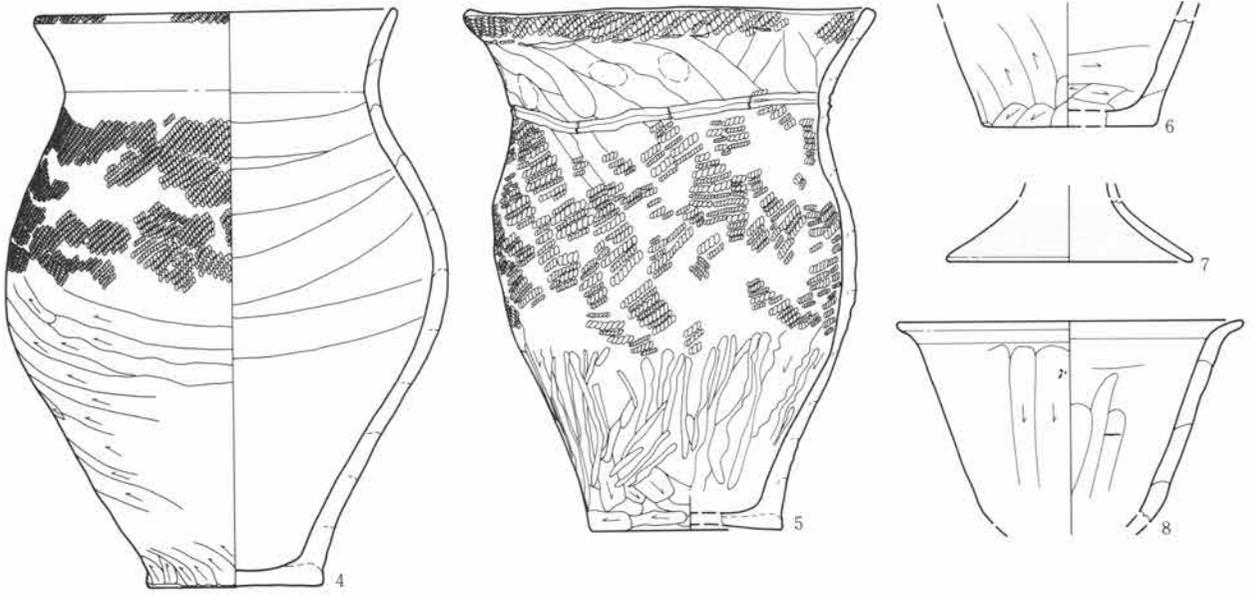
柱穴 3本の柱穴が検出されているが、P₁・P₂の2本が支柱穴と思われる。4本の支柱穴によって構成されると想定されるが、他の2本は51・52号住居との切り合いにより検出されなかった。各柱穴の規模(径×深さ)はP₁:24×39cm、P₂:38×56cm、P₃:20×24cmである。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、小型甕1、甕7、壺3、器台1の合計12点が出土した。床面に密着してNo.1~5・7~9・12の土器が出土し、他の土器は3~9cm浮いて出土した。ほぼ完形に復元されたNo.1の壺は、床面に押し潰された状態で出土している。(遺物観察表:4頁)

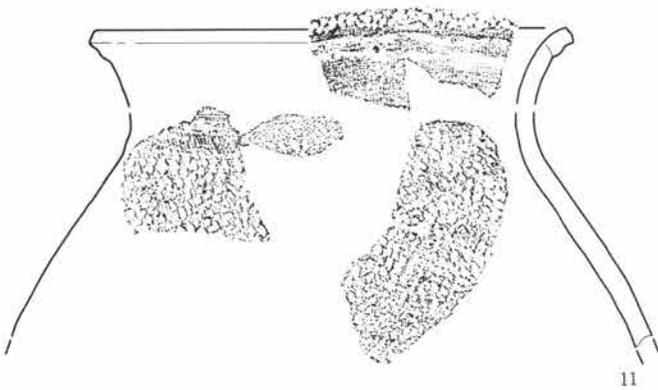


第16図 2区44号住居出土遺物(1)

1 1・2区の遺構と遺物



0 1:3 10cm



0 1:2 5cm
(10~12A·B·C)



第17図 2区44号住居出土遺物(2)

II 調査の内容

1区1号住居

位置 C-20グリッド 写真 PL-7

形状 西側の一部が未調査区域にかかっているために規模・形状等は確定できないが、おそらく一辺が3.6mの正方形を呈すると思われる。四隅はほぼ直角で、壁面は直線的に掘り込まれている。

面積 不明 方位 N-83°-E

床面 黒色土からローム土上面にかけて、65cm掘り込んで床面としている。凹凸面は少ないが、西側が東側に比べて6cm程度低い。電手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。P₁周辺に後世の攪乱が入っている。

竈 東壁中央部からやや南寄りに位置している。壁面の内側に造り付けられているが、左袖部の一部と長さ約50cmの煙道部の掘り方を残すのみで、他は崩落している。

貯蔵穴 南壁中央部に接している。長径92×短径59cmの楕円形を呈し、深さ50cmである。開口部の北から西辺にかけて、幅25~40cm、高さ10cmの土手状の高まり

が巡っている。

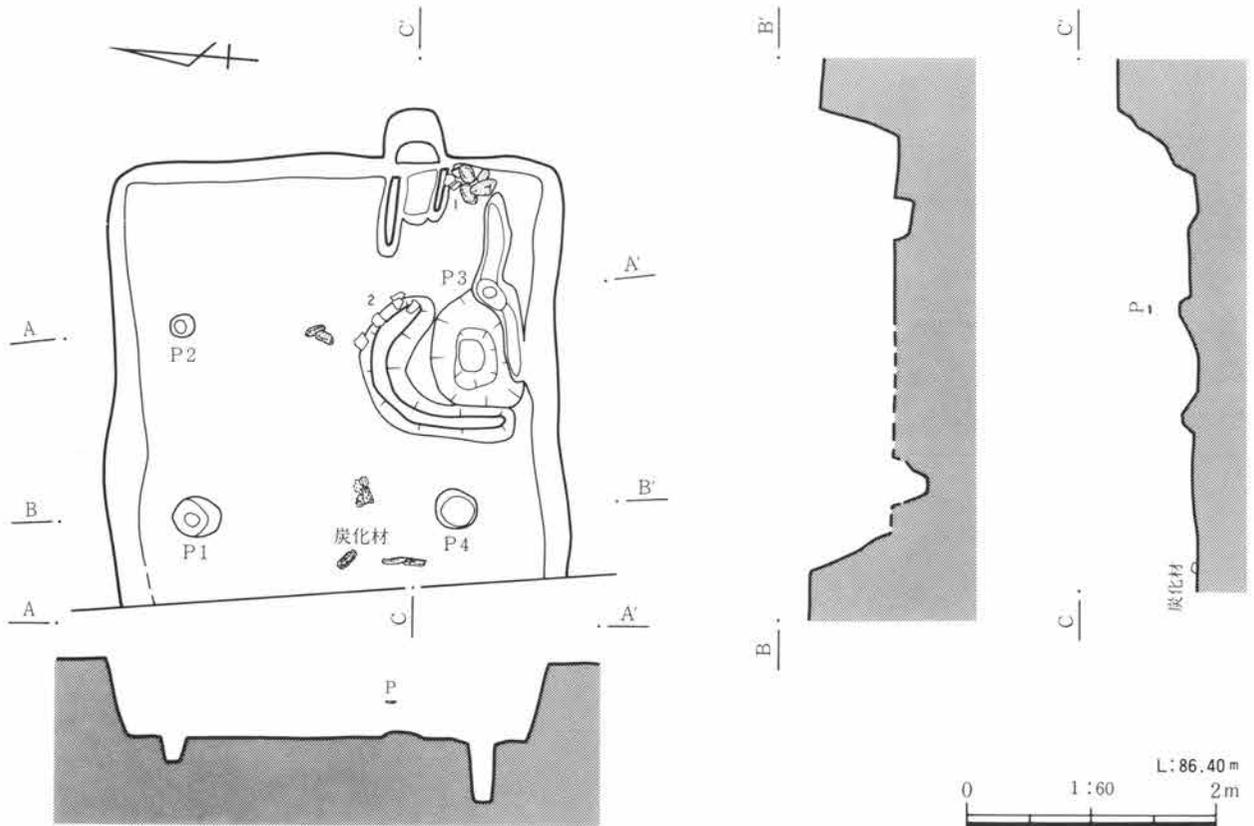
柱穴 4本の柱穴が検出されているが、P₁・P₄を除いて他の2本は住居の対角線上からずれた位置にある。各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:30×18cm、P₂:20×20cm、P₃:25×15cm、P₄:32×15cmである。また、その心々間の距離は、P₁~P₂:1.55m、P₂~P₃:2.5m、P₃~P₄:1.77m、P₄~P₁:2.13mである。

周溝 竈の右側に性格不明の溝があるのみで、明確な周溝は存在しない。

遺物 土器は埋没土中からの出土を含め、坏1、甕1の合計2点が出土したのみである。貯蔵穴に近接した住居中央部より、薦編み石2点が床面より10~20cm浮いて出土した。竈の右袖近くより、直径20~25cmの輝石安山岩の河床礫が4点出土しているが、竈の補強材か部材に使用したものであると思われる。このほかに、南壁近くから炭化材3点出土した。

(遺物観察表:5頁)

備考 炭化材の出土からみて、焼失家屋の可能性がある。



第18図 1区1号住居

1区2号住居

位置 C-22グリッド 写真 PL-7

形状 台形状を呈するが、一辺が約4mの正方形を基本形にすると思われる。四隅は直角に、周壁は直線的にそれぞれ掘り込まれている。

面積 15.30㎡ 方位 N-71°-W

床面 黒色土からローム上面にかけて32~51cm掘り込んで床面としている。凹凸面は少ないが、南西隅が他に比べて6cm程低い。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

竈 東壁のほぼ中央部に位置するが、長さ約40cmの煙道部の掘り方を残すのみである。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられるものと思われる。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長軸85×短軸72

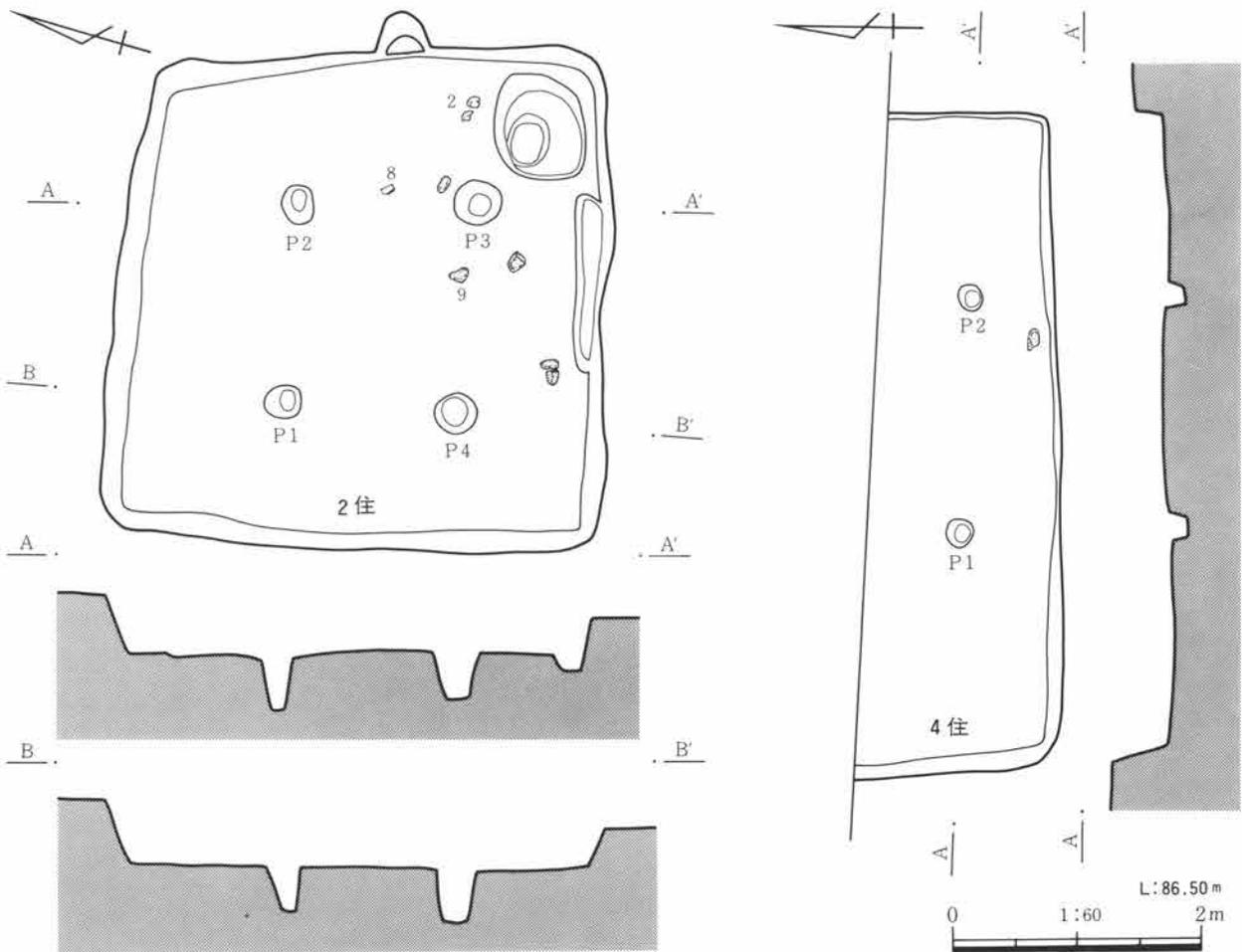
cmの隅丸方形を呈し、深さ約60cmである。

柱穴 住居の対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その間隔はP₁~P₂:1.63m、P₂~P₃:1.48m、P₃~P₄:1.68m、P₄~P₁:1.34mである。また、各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:28×37cm、P₂:27×41cm、P₃:37×38cm、P₄:33×42cmである

周溝 南壁の一部にのみ検出された。その規模は、幅12~23cm、深さ16cmである。

遺物 実測可能な土器は、坏3、甕3、甗1、須恵器の甕1の合計8点であるが、いずれも床面より6~8cm浮いて出土した。No.8の須恵器は1区3号住居埋没土出土の破片と接合関係にある。南壁面近くより、床面に密着して4点の薦編み石が出土している。

(遺物観察表:5頁)



第19図 1区2・4号住居

II 調査の内容

1区4号住居

位置 A-29グリッド 写真 PL-7

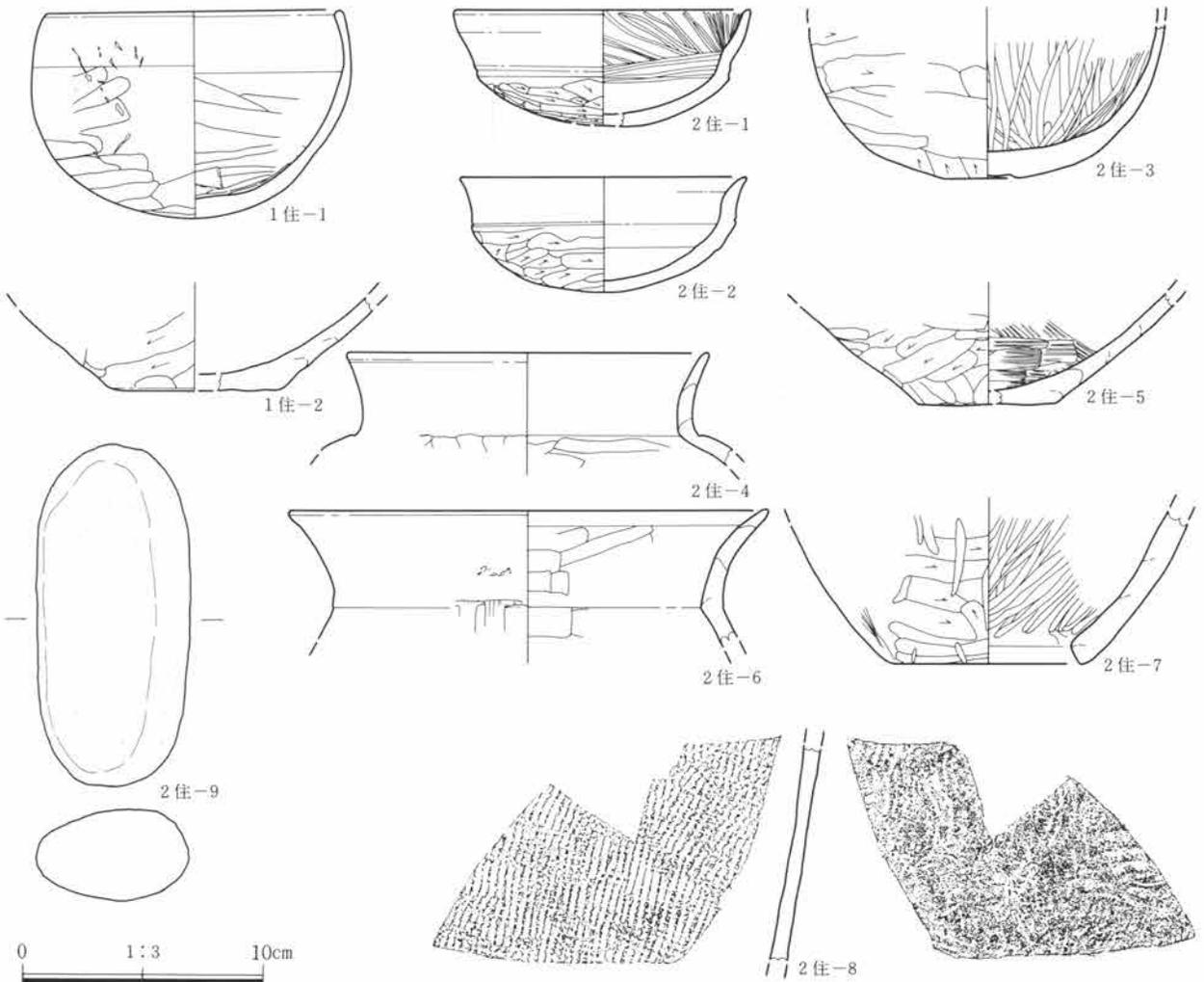
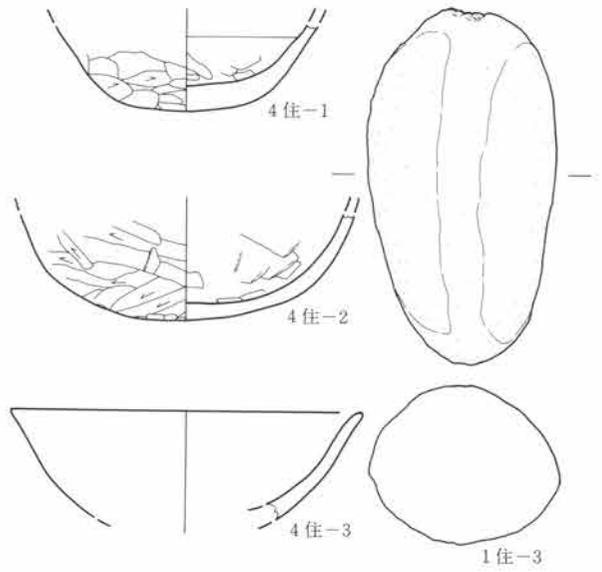
形状 北半部が調査区域外のため、規模・形状等不明であるが、南辺は5.2mである。確認し得た二隅は直角に掘り込まれており、周壁は直線的である。

面積 不明 方位 不明

床面 黒色土からローム土上面にかけて21~46cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸をもち、西側は他に比べて10cmほど低い。主柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが強く踏み固められている。

柱穴 2本の主柱穴を確認し得たのみである。柱穴の心々間の距離は $P_1 \sim P_2$:1.86mであり、各柱穴の規模(径×深さ)は P_1 :22×13cm、 P_2 :20×12cmである。

遺物 床面密着の遺物はなく、埋没土中より3点の坏の破片が出土したのみ。(遺物観察表:8頁)



第20図 1区1・2・4号住居出土遺物

1区3号住居

位置 C-25グリッド 写真 PL-8~10・125

形状 一辺が約4.8mの正方形を呈する。四隅は直角に掘り込まれている。東壁および西壁はほぼ直線的であるが、他の壁面は若干内側へ湾曲している。

面積 20.94㎡ 方位 N-83°-E

床面 黒色土からローム土上面にかけて20~46cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸をもち、貯蔵穴周辺が他に比べて12cmほど低い。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

竈 東壁中央部のやや南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられている。燃烧部の規模は長さ90cm、幅40cmである。煙道部は長さ45cmの掘り方を残すのみである。燃烧部内にはNo.20の甕が横転した状態で出土した。

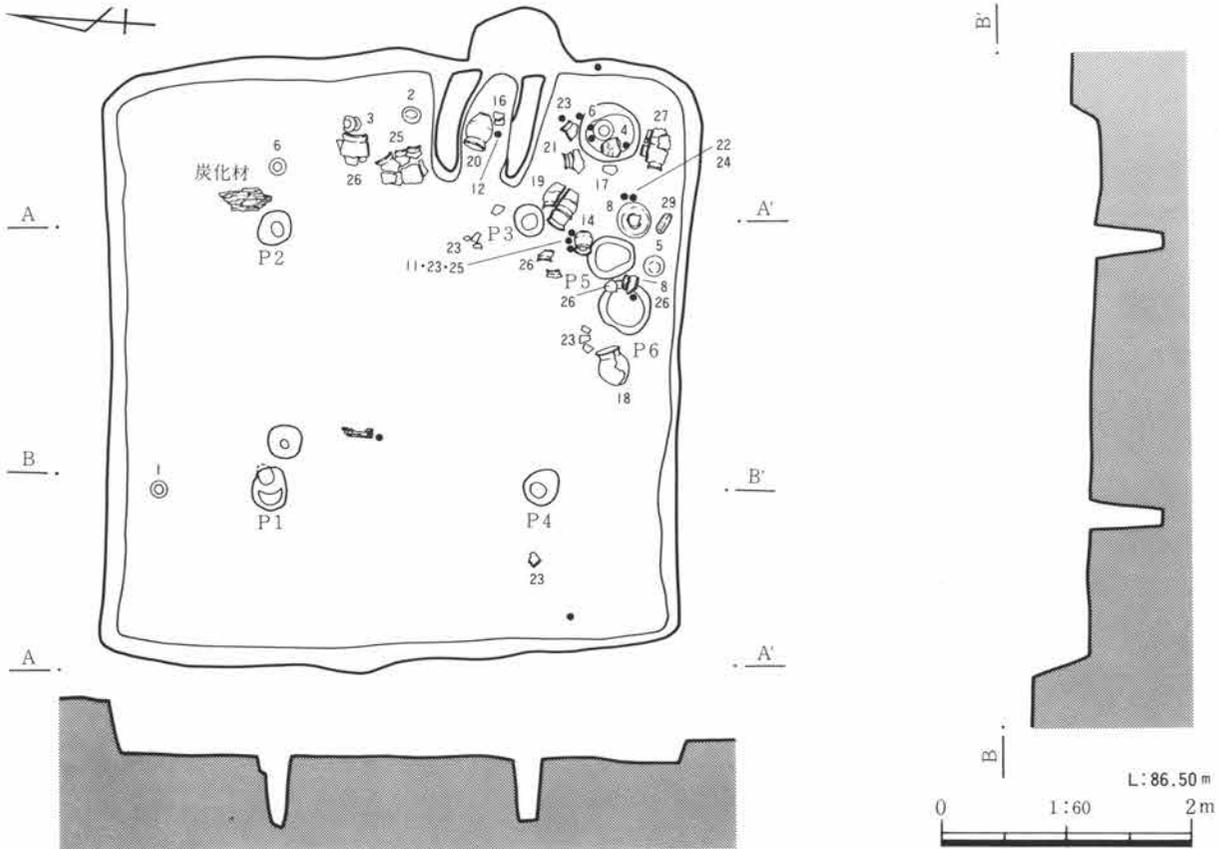
貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。直径50cmの円形を呈し、深さ60cm。埋没土中位よりNo.6の坏が出土。

支柱穴 住居の対角線上に4本の支柱穴が検出された。また南壁中央のやや東側よりには、出入口部の施設と思われる2本の小ピットが存在する。各支柱穴の心々間を結んだ形状は住居の外形と相似形を呈し、その心々間の距離は、 $P_1 \sim P_2 : 2.0m$ 、 $P_2 \sim P_3 : 2.0m$ 、 $P_3 \sim P_4 : 2.1m$ 、 $P_4 \sim P_1 : 2.2m$ 。各支柱穴の規模(径×深さ)は、 $P_1 : 30 \times 59cm$ 、 $P_2 : 28 \times 57cm$ 、 $P_3 : 25 \times 48cm$ 、 $P_4 : 28 \times 53cm$ 、 $P_5 : 36 \times 35cm$ 、 $P_6 : 42 \times 30cm$ 。

遺物 土器は坏11、高坏1、小型甕1、甕9、甗4、壺1の合計27点が出土したが、貯蔵穴や竈周辺に集中した出土が認められた。他に薦編み石2点、炭化材2点、滑石製模造品1点と弥生時代の紡錘車1点(242頁No.130)が出土しているが、模造品と紡錘車を除いた各遺物は床面に密着した状態で出土している。No.10は1区1号住居の埋没土中出土の破片と接合関係にある。

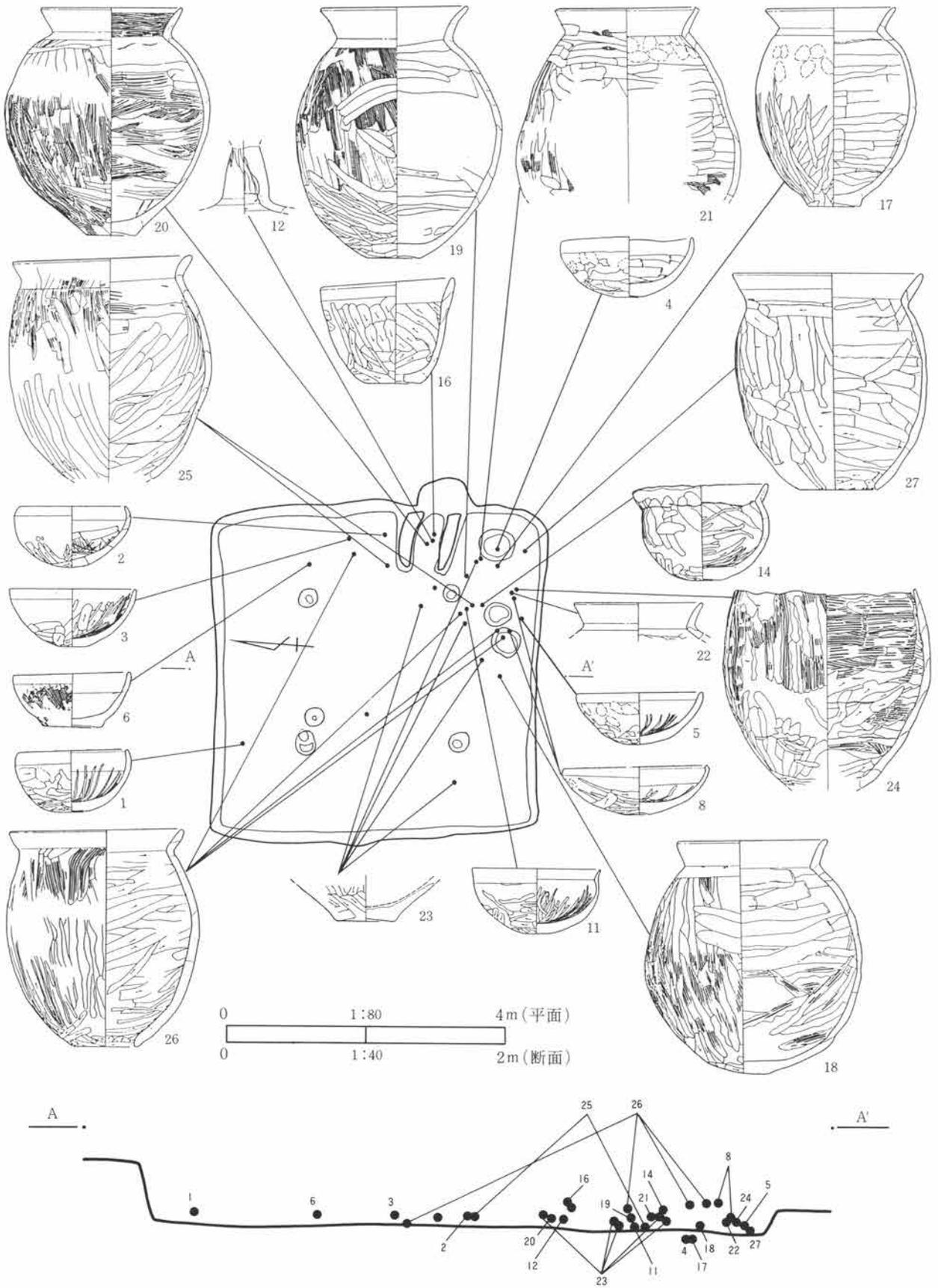
(遺物観察表：6・7頁)

備考 残存不良であるが、屋根材の一部と思われる炭化材が2点出土しており、焼失家屋の可能性はある。



第21図 1区3号住居

II 調査の内容



第22図 Ⅰ区3号住居の遺物出土状況

1区6号住居

位置 C-15グリッド 写真 PL-12・13

形状 若干歪んでいるが、一辺が4.6mの正方形を呈する。四隅は直角で、周壁は直線的に掘り込まれている。

面積 20.80㎡ 方位 N-84°-W

床面 黒色土からローム土上面にかけて26~40cm掘り込んで床面としている。かなりの凹凸をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。また、南壁中央部に接して長径1.65×短径0.9mの範囲に、叩き床状の堅固な面があり、出入口部の可能性がある。

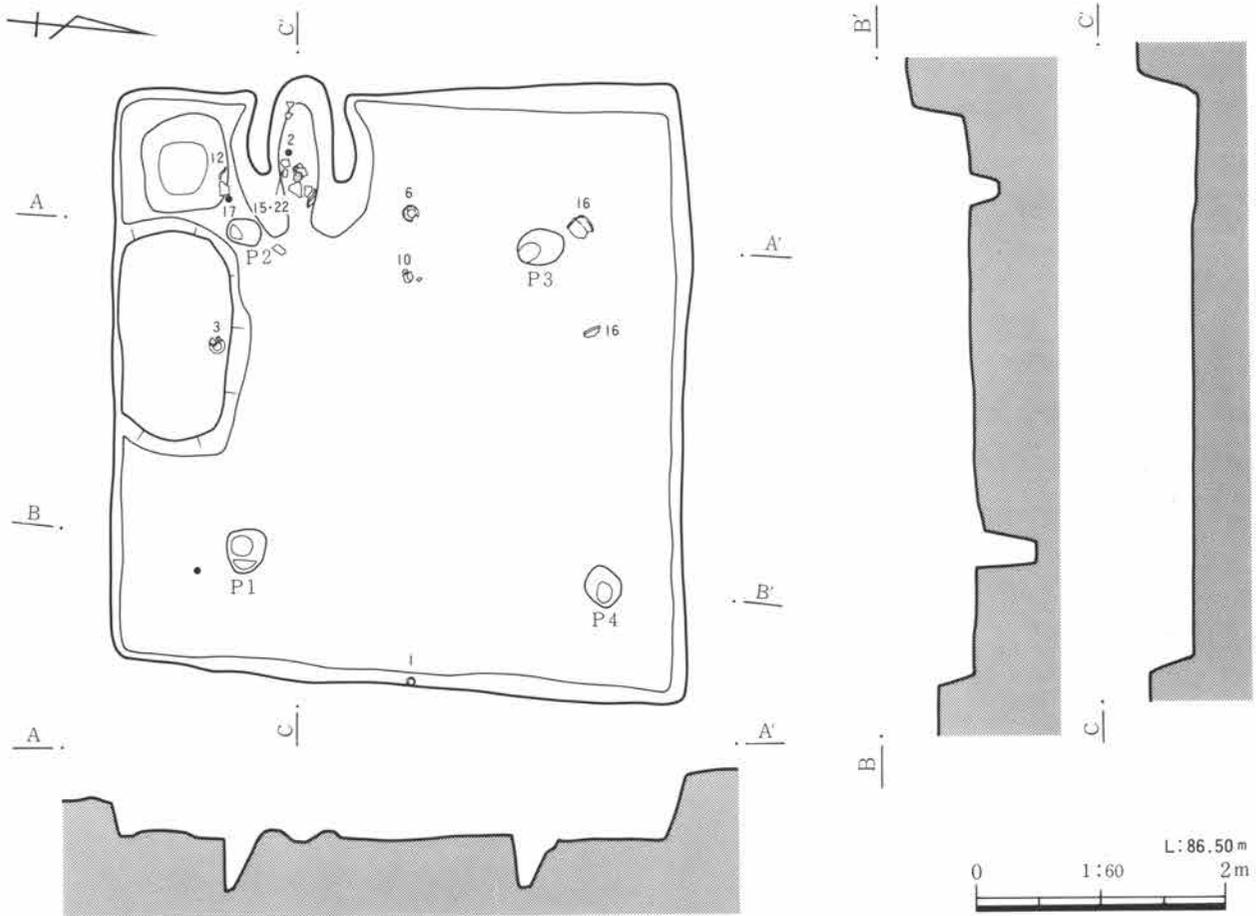
竈 西壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられている。燃焼部の規模は長さ105cm、幅53cmである。燃焼部

の中央に、棒状の輝石安山岩の河床礫を利用した支脚が存在する。

貯蔵穴 竈左側の南西隅に位置する。長軸80×短軸70cmの隅丸方形を呈し、深さ60cmである。

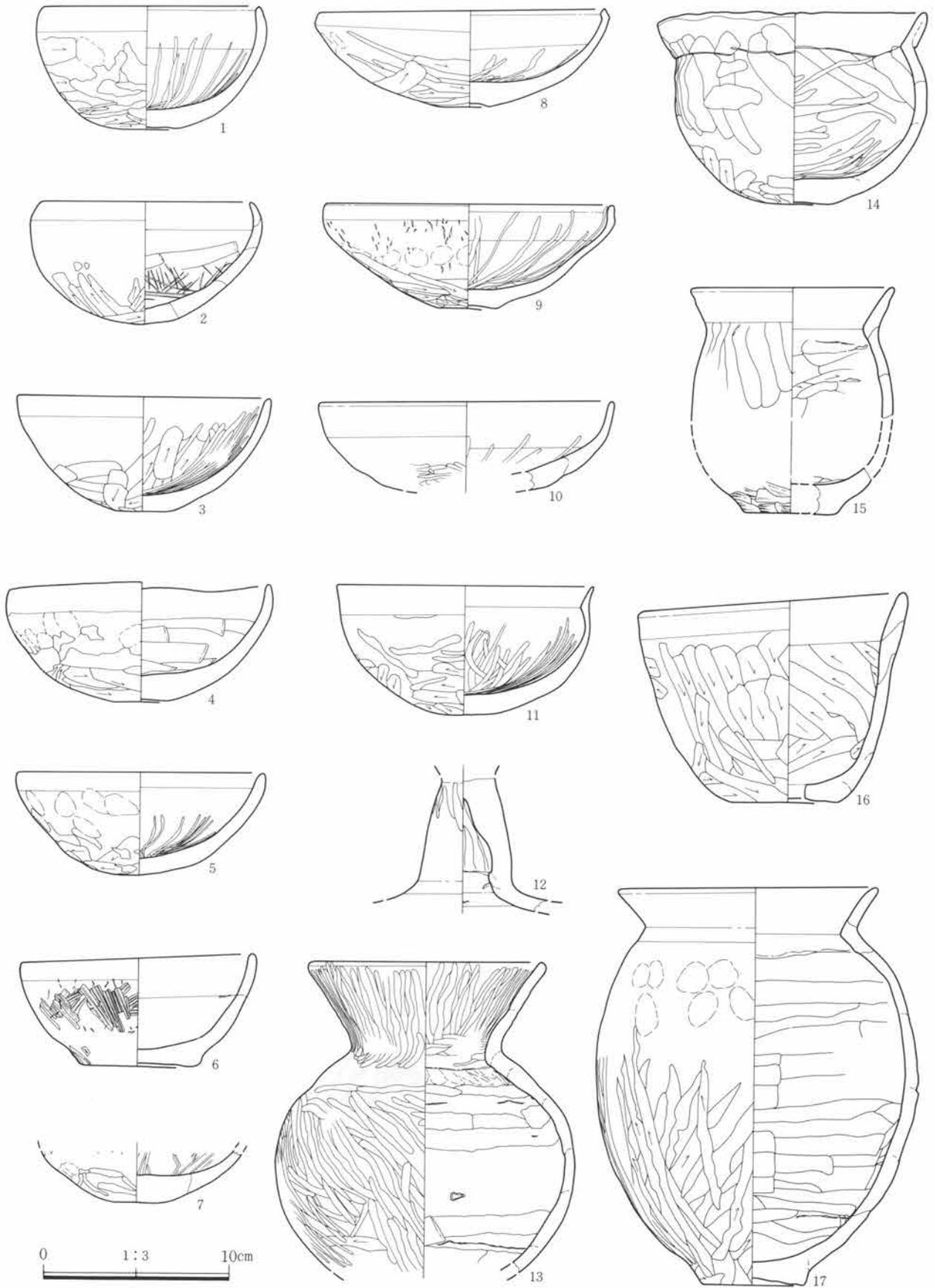
柱穴 住居の対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形とほぼ相似形を呈し、その間隔はP₁~P₂:2.5m、P₂~P₃:2.4m、P₃~P₄:2.8m、P₄~P₁:2.9mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:35×45cm、P₂:23×43cm、P₃:35×42cm、P₄:30×23cmである。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏7、高坏1、小型甕1、甕11、甕3、小型粗製土器1の合計24点が出土した。No.1・12は床面に密着していたが、他はいずれも床面より4~18cm浮いた状態で出土した。また、薦編み石2点が埋没土中より出土した。(遺物観察表:8・9頁)

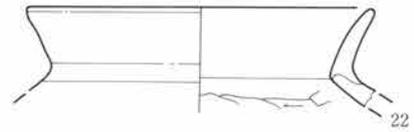
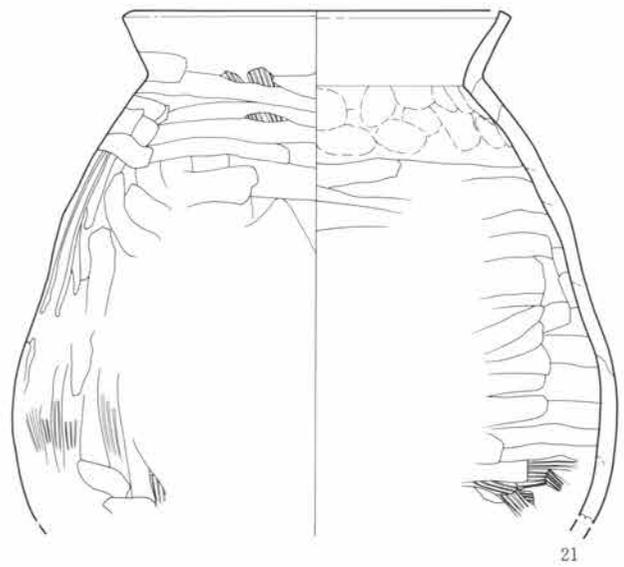
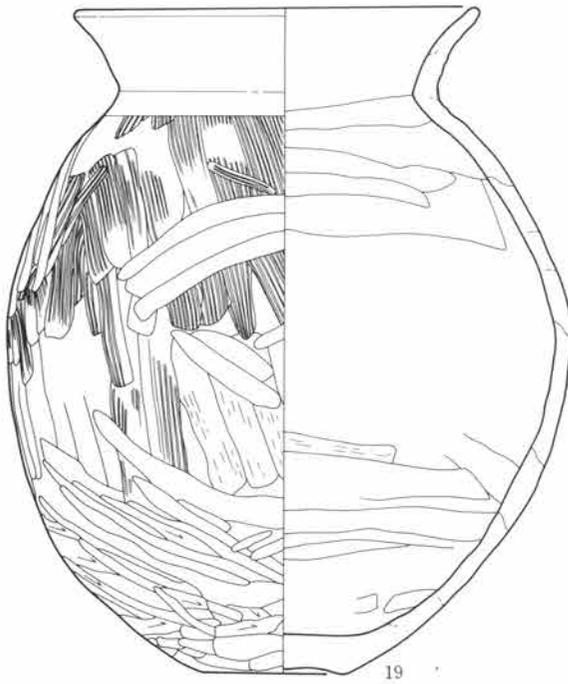
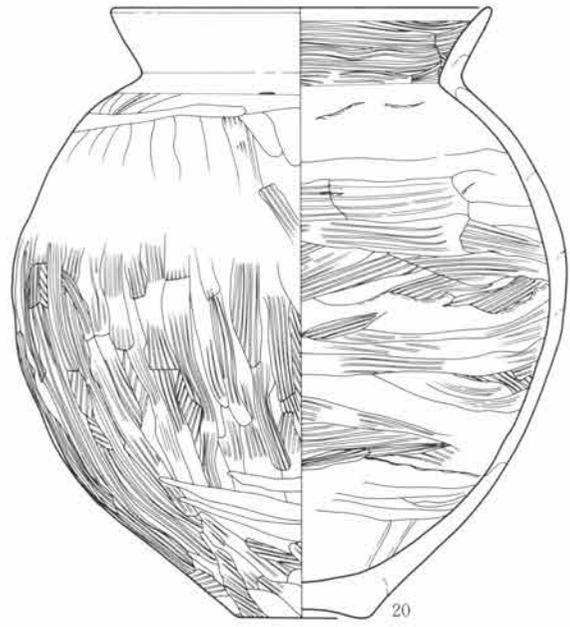
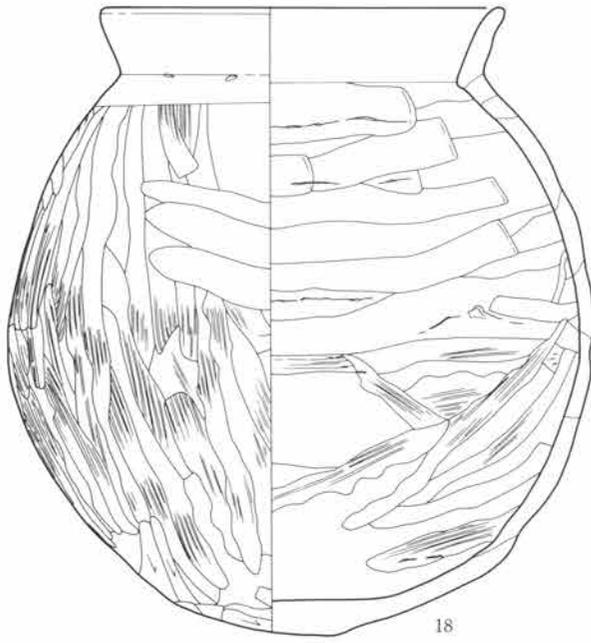


第23図 1区6号住居

II 調査の内容



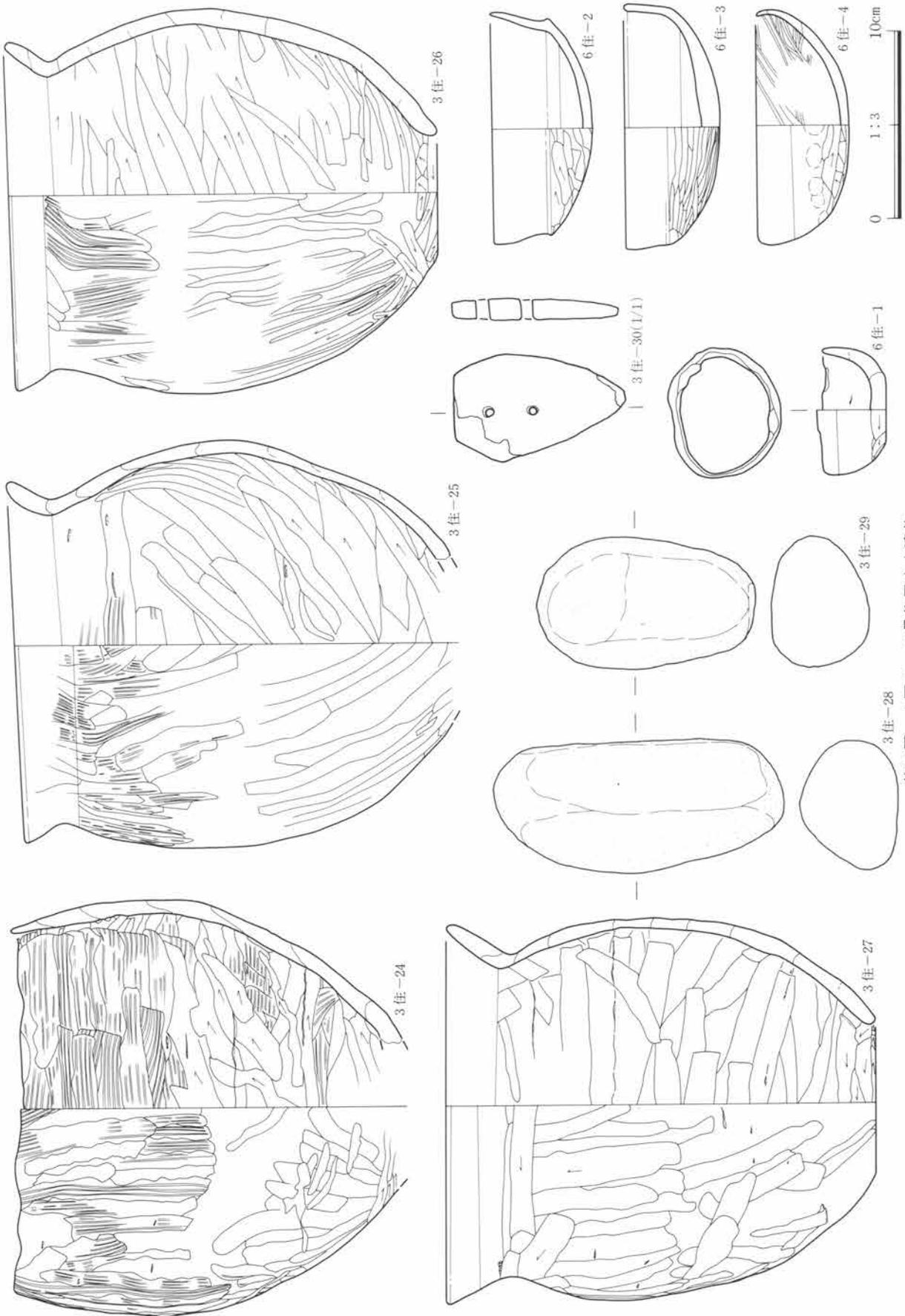
第24図 Ⅰ区3号住居出土遺物(Ⅰ)



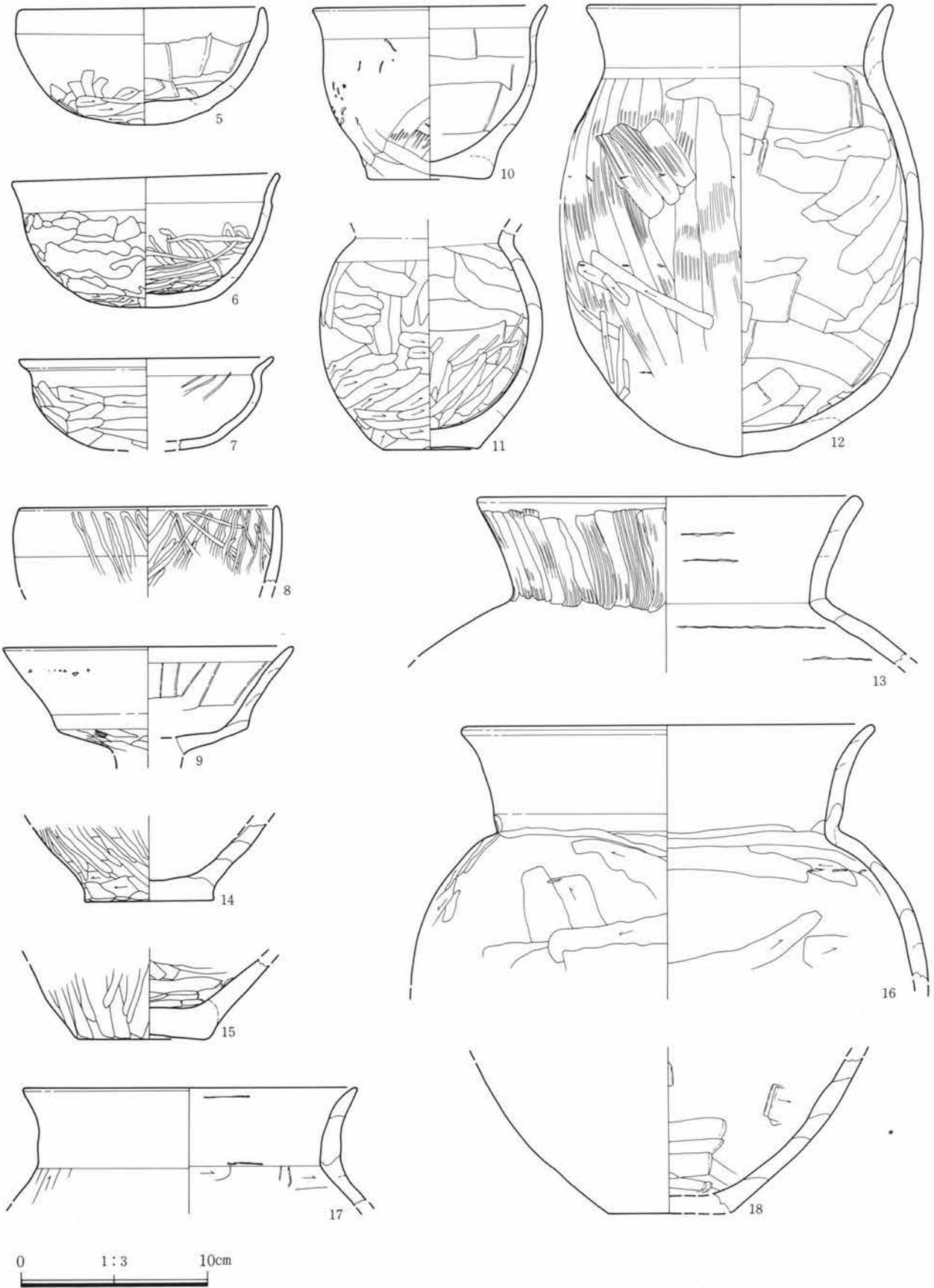
0 1:3 10cm

第25図 1区3号住居出土遺物(2)

II 調査の内容

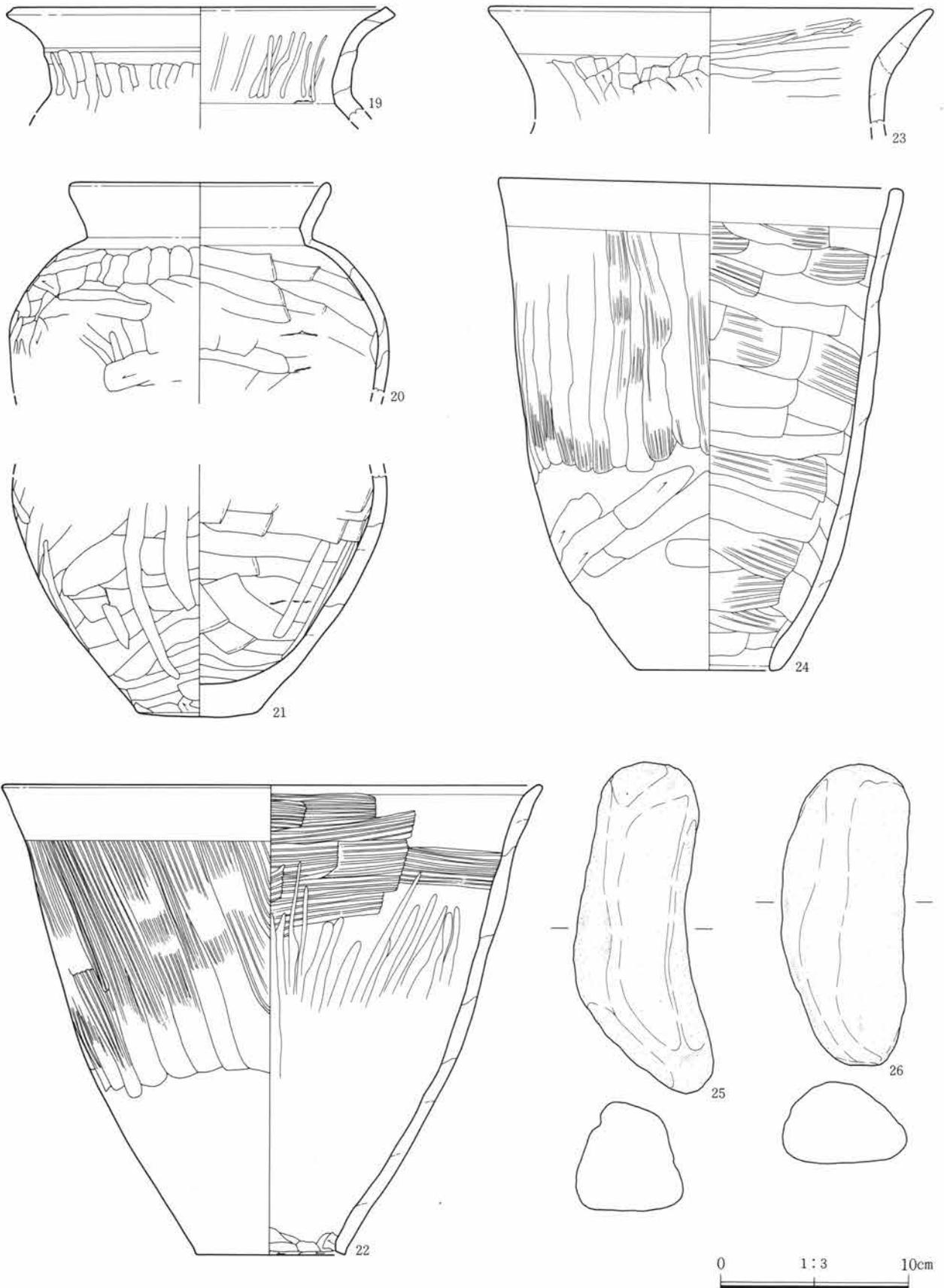


第26図 Ⅰ区3・6号住居出土遺物



第27図 1区6号住居出土遺物(1)

II 調査の内容



第28図 Ⅰ区6号住居出土遺物(2)

1区7号住居

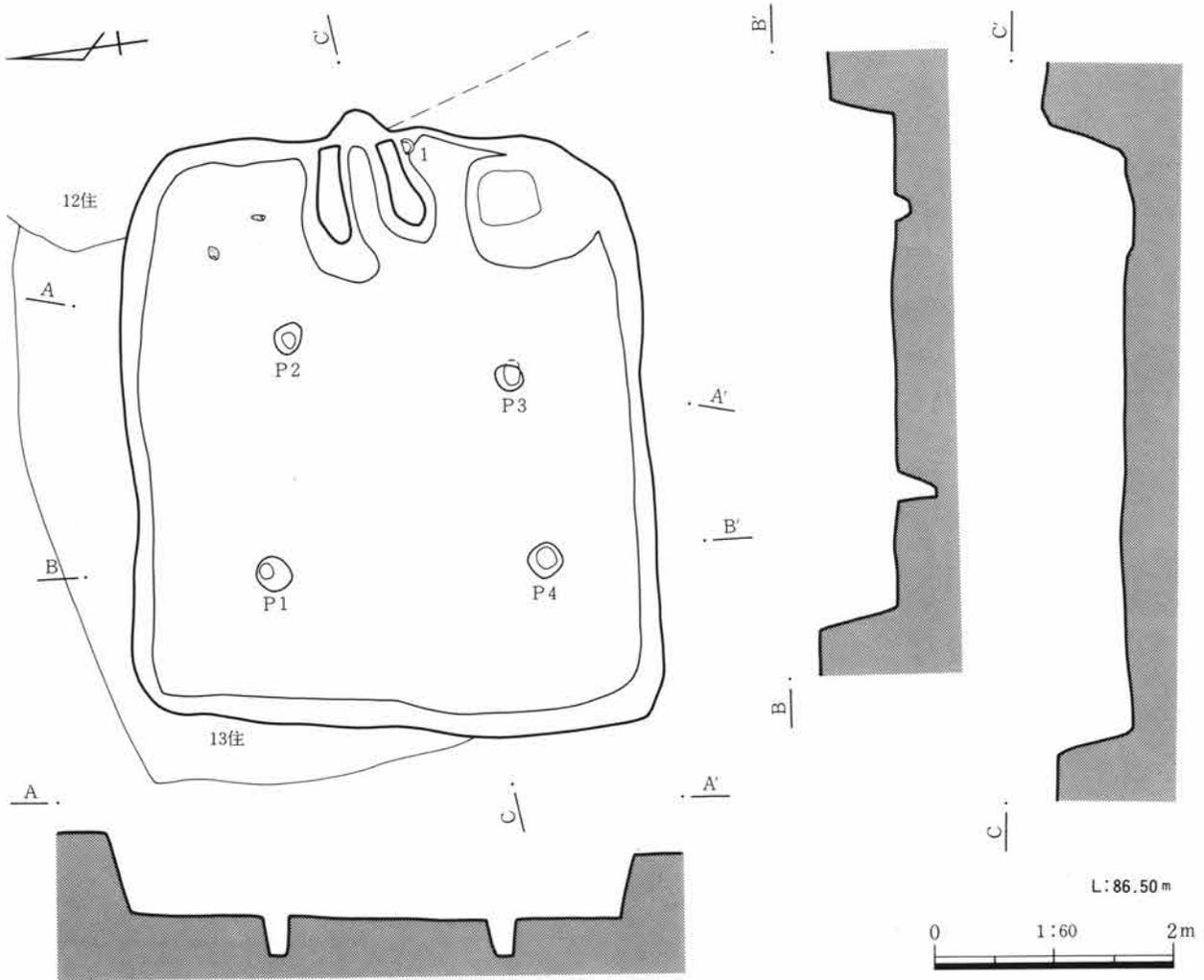
位置 B-10グリッド 写真 PL-11
重複 13号住居に先行し、12号住居に後出する。
形状 正方形に近似した形状をもつが、長軸を東西にもった長方形を呈する。その規模は長辺4.8×短辺4.3mである。四隅は丸く、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。
面積 19.62㎡ **方位** S-86°-E
床面 黒色土からローム土上面にかけて53~67cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもち、北東から南西方向へと比高差約10cmの傾斜が認められる。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。
竈 東壁のほぼ中央部に位置し、両袖部が残存す

る。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられている。燃烧部の規模は長さ110cm、幅40cmである。煙道部は燃烧部より約74°の角度で立ち上がる。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長軸110×短軸94cmの隅丸方形を呈し、深さ約70cmである。

柱穴 P₃の位置が若干内側にずれて、歪んだ台形状を呈する。各柱穴の心々間の距離は、P₁~P₂:1.9m、P₂~P₃:1.9m、P₃~P₄:1.6m、P₄~P₁:2.3mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:28×32cm、P₂:24×30cm、P₃:23×29cm、P₄:28×13cmである。

遺物 実測可能な土器は高坏1点と甕1点の小破片のみであり、いずれも埋没土中より出土した。他に薦編み石2点、竈左袖付近より床面に密着して出土した。(遺物観察表:9頁)



第29図 1区7号住居

II 調査の内容

1区8号住居

位置 B-8グリッド 写真 PL-11

形状 一辺が4.1mの正方形を呈する。南東隅がやや丸味をもっているが、他の隅部は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。

面積 16.08㎡ 方位 N-89°-E

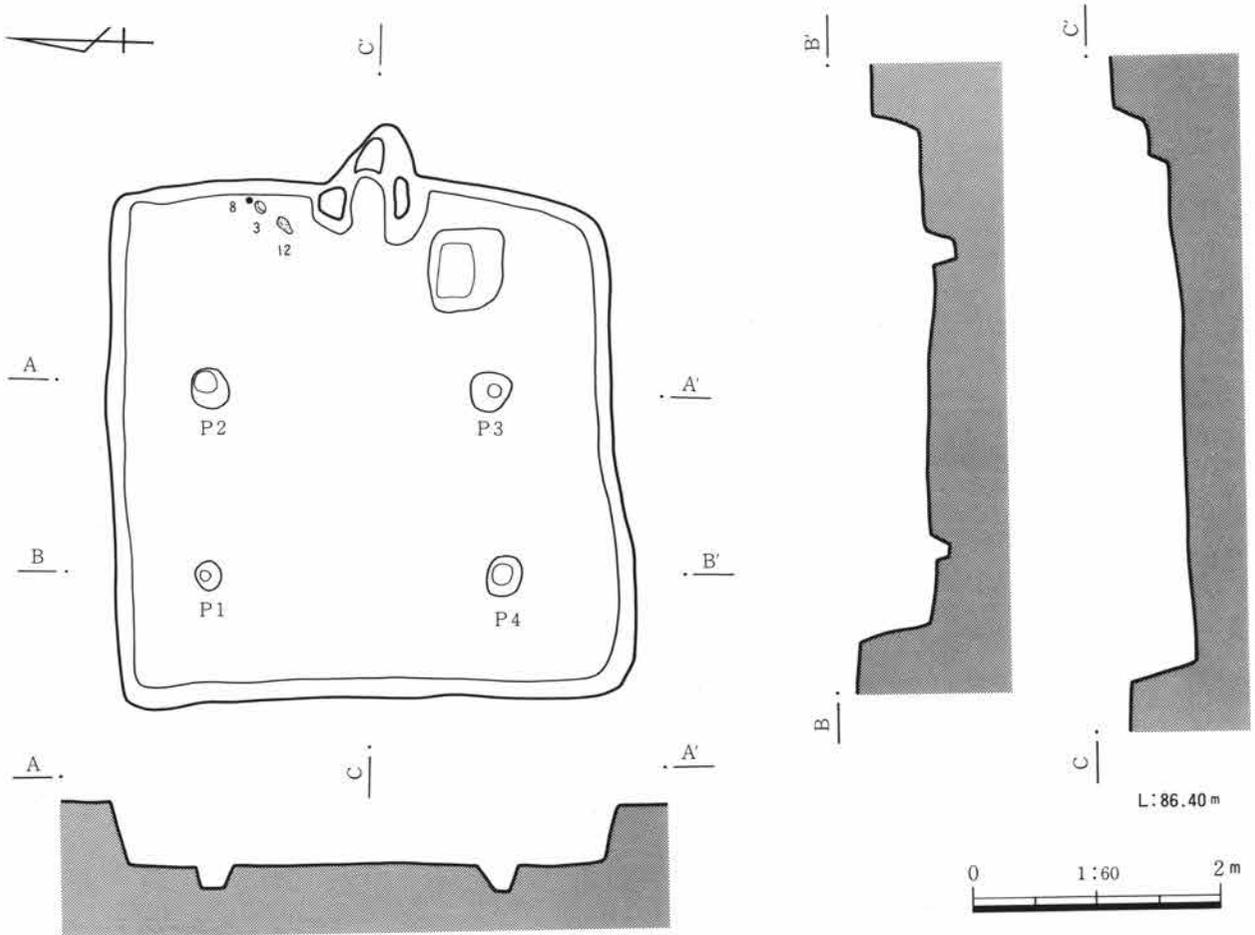
床面 黒色土からローム土上面にかけて39~56cm掘り込んで床面としている。凹凸の少ない床面であるが、東側から西側に向かって比高差10~15cmほどの傾斜が認められる。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

竈 東壁のほぼ中央部に位置し、両袖部の一部が残存する。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられている。燃烧部の規模は長さ50cm、幅27cmである。煙道部は長さ40cm、幅44cmの掘り方のみ残存する。壁面の中位を水平に掘り込み、約70°の角度で立ち上がる。

貯蔵穴 南東隅より70cmほど内側に寄った、竈の右側に位置する。長軸66×短軸59cmの方形を呈し、深さ50cmである。

柱穴 P₂とP₃の位置が床面の中央部寄りとなるため、各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形とは相似形とならずに長軸を南北方向にもつ配列となる。各柱穴の心々間の距離は、P₁~P₂:1.5m、P₂~P₃:2.3m、P₃~P₄:1.5m、P₄~P₁:2.4mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:23×14cm、P₂:32×18cm、P₃:31×22cm、P₄:30×20cmである。

遺物 床面に密着した遺物はなく、総て床面より浮いて出土した。実測可能な土器は坏6、甕3、須恵器の甕および坏の破片各1の合計11点が出土した。No.9は1区12号住居埋没土中の破片と接合関係にある。竈左袖近くより出土したNo.12の棒状礫は、片面に凹み穴状の敲打痕をもつ。(遺物観察表:10頁)



第30図 1区8号住居

1区9A号住居

位置 B-6グリッド 写真 PL-12・14・15
重複 9B号住居に後出する。

形状 9B号住居との重複か、あるいは建て替えによる9B号住居からの規模縮小なのかは確定できないが、北側周壁の共有からみて、建て替えの可能性が高い。長軸を東西にもった長方形を呈する。貯蔵穴の南側がわずかに張り出すが、四隅は丸く、周壁は直線的に掘り込まれている。規模は長辺4.2×短辺3.4mである。

面積 (13.62㎡) 方位 N-87°-E

床面 黒色土からローム土上面にかけて34~58cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもち、周壁際に比べて中央部が8cm前後低い。9B号住居との境界では、床面の落差はみられない。竈手前や貯蔵穴周辺は、叩き床状ほどではないが強く踏み固められている。

竈 東壁中央部に位置する。両袖部を残すのみで、天井部は崩壊しているが、燃焼部は周壁よりも内側に

造り付けられている。燃焼部の規模は長さ80cm、幅40cmである。燃焼部内よりNo18とNo26の甕2点および支脚に使用した河床礫1点が出土した。

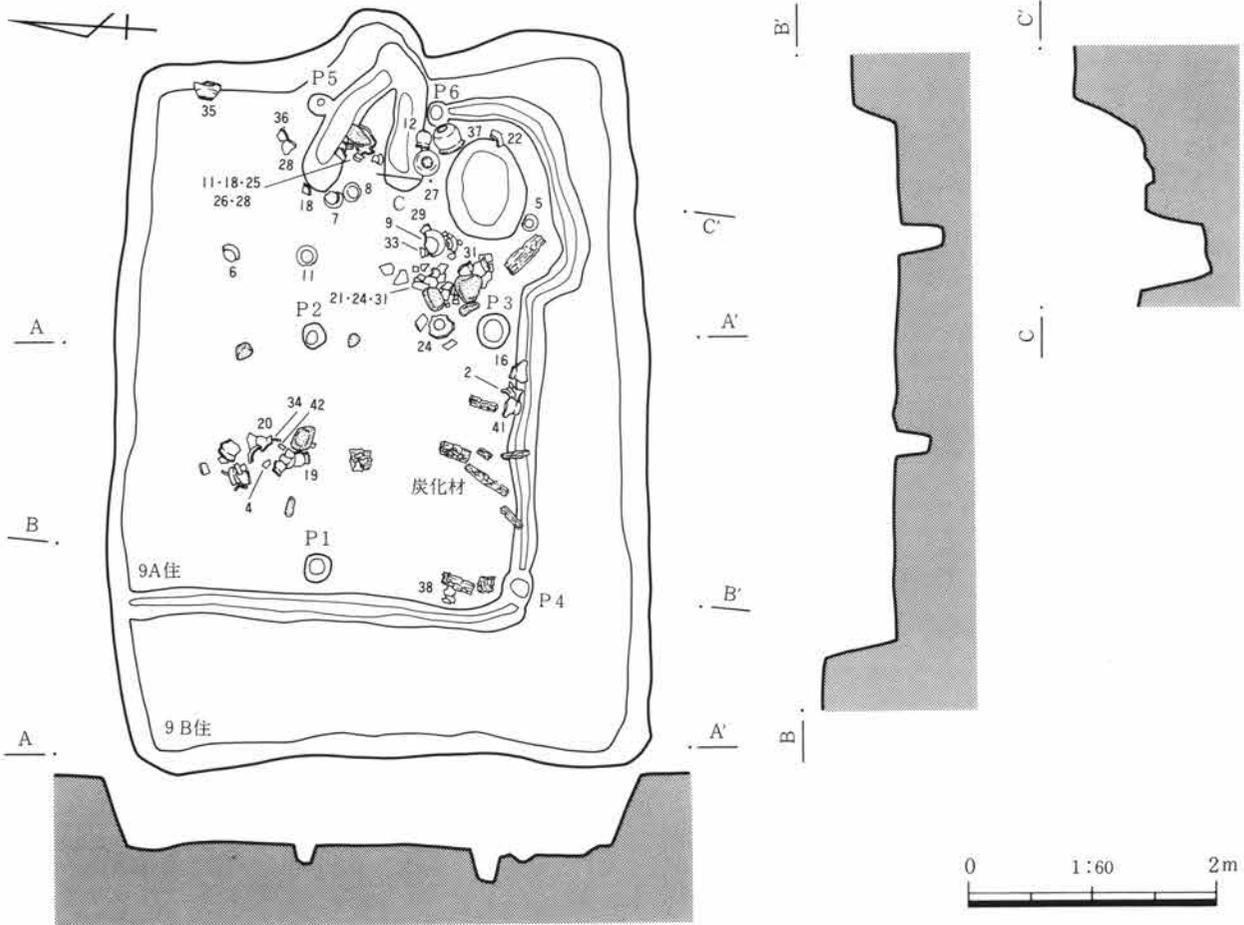
貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長径79×短径64cmの楕円形を呈し、深さ57cmである。

柱穴 本住居に伴う柱穴は検出されなかった。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏15、小型甕1、甕20、甗2、小型粗製土器1、須恵器の甕1の合計40点が出土した。ほとんどの土器が床面に密着した状態であった。No25は1区7号住居、No41は同8号住居の埋没土出土の破片とそれぞれ接合関係にある。また床面中央部のやや北西側より、No42の砥石が出土した。その他に上屋の建築部材と思われる炭化材10点が、放射状に並んで検出された。

(遺物観察表：10~13頁)

備考 屋根材の一部と思われる炭化材が出土しており、焼失家屋の可能性はある。



第31図 1区9A・B号住居

II 調査の内容

1区9B号住居

位置 B-6グリッド 写真 PL-12・15

重複 9A号住居に先行する。

形状 9A号住居よりも一回り大きな長方形を呈する。長軸を東西にもち、規模は長辺5.7×短辺4.3mである。四隅は丸く、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。

面積 23.50㎡ 方位 N-82°-E

床面 黒色土からローム土上面にかけて30~60cm掘り込んで床面としている。9A号住居の床面とも同一面であるためその詳細は不明であるが、重複していない部分の床面はあまり踏み固められていない。

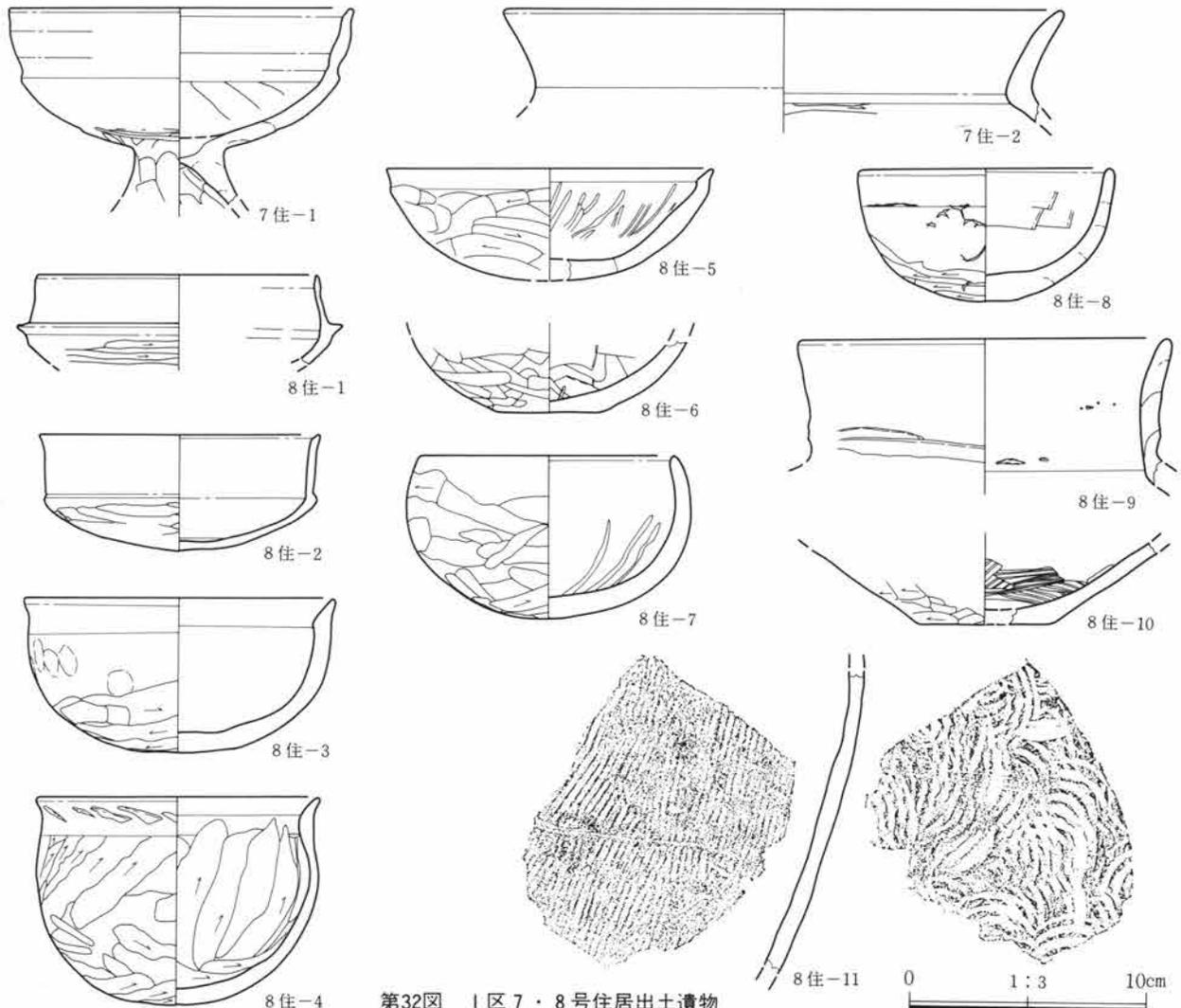
竈 東壁中央部に位置する。9A号住居との重複により破壊されているが、燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられていると思われる。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 4本の主柱穴が検出されたが、P₄を除いた他の3本は住居の対角線上に位置する。また竈の両脇には、性格は不明であるが直径18cm、深さ20cm前後の小ピットが一对存在する。各主柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と同様の長方形を呈し、各柱穴の心々間の距離は、P₁~P₂:1.84m、P₂~P₃:1.45m、P₃~P₄:2.04m、P₄~P₁:1.64mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:22×28cm、P₂:19×14cm、P₃:25×22cm、P₄:25×35cmである。

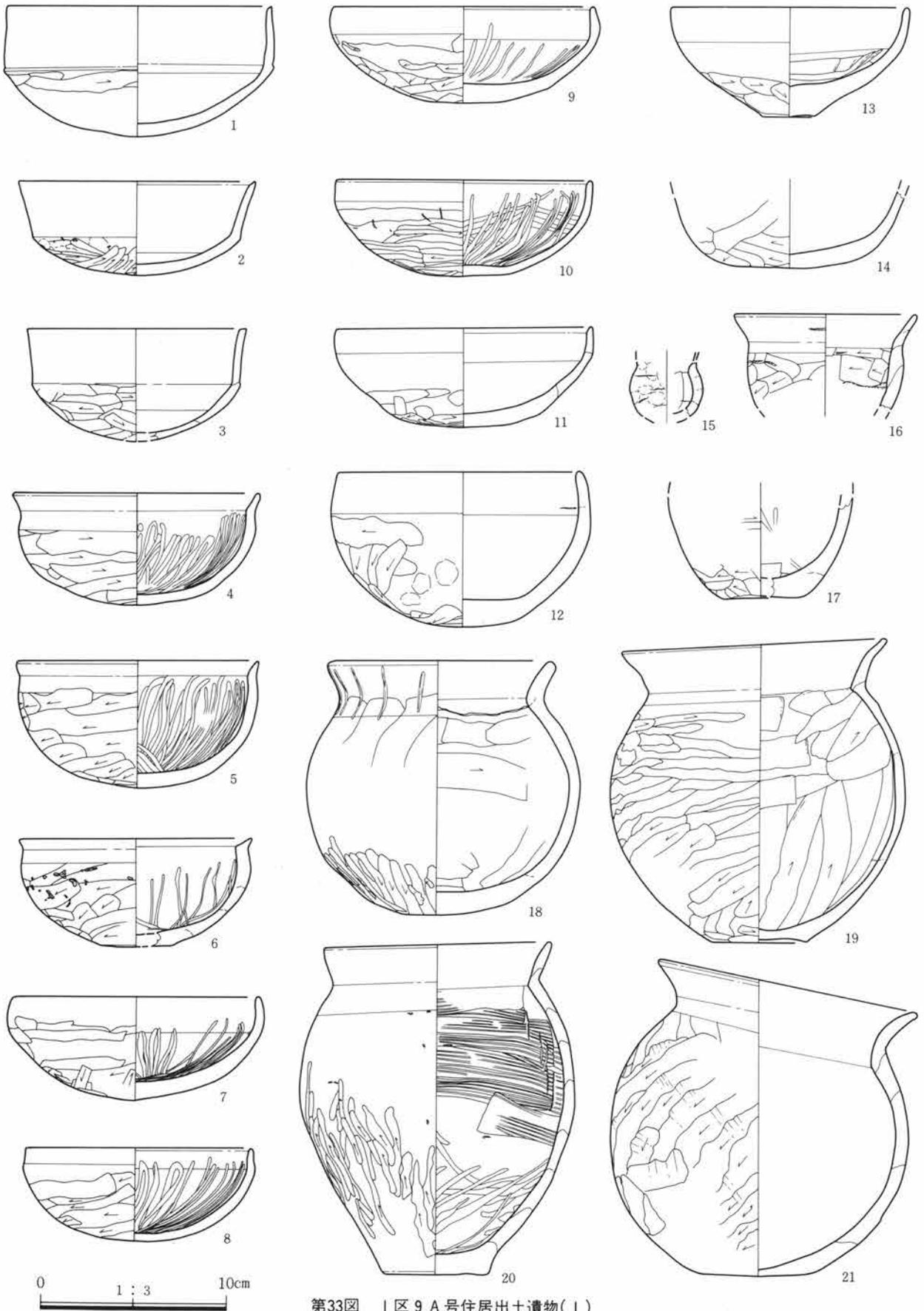
遺物 9A号住居との重複のため、検出し得た遺物は少ない。北東隅より甕の破片(No.1)が出土しているが、床面より9cm浮いて出土した。

(遺物観察表:13頁)



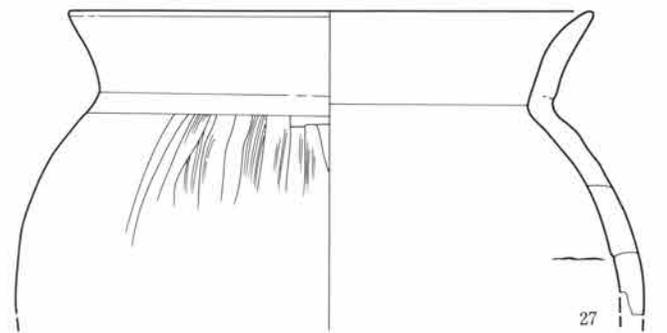
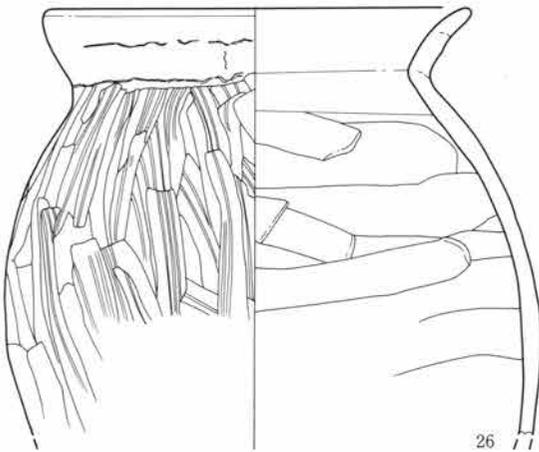
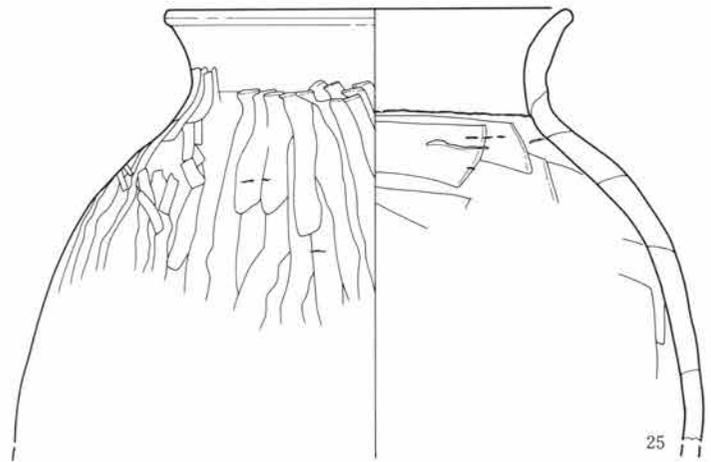
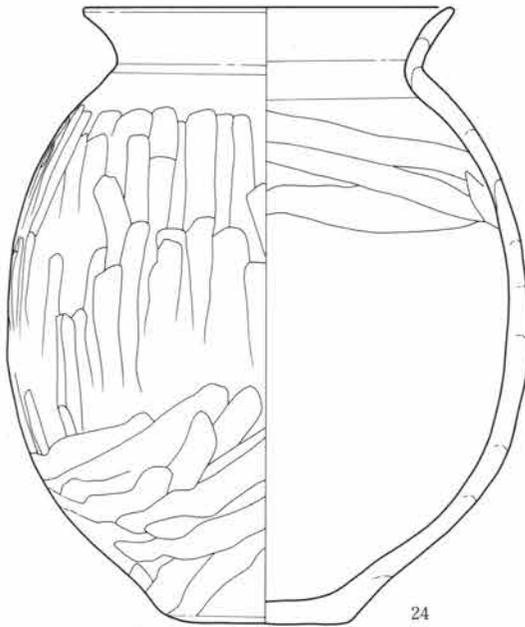
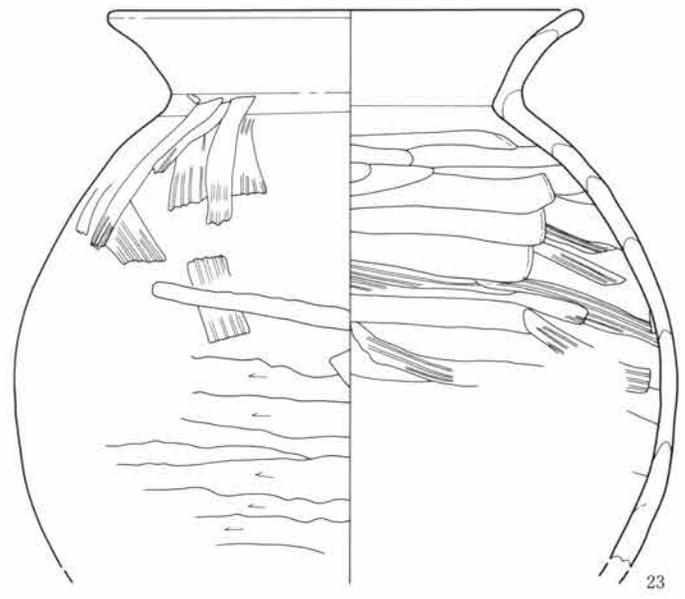
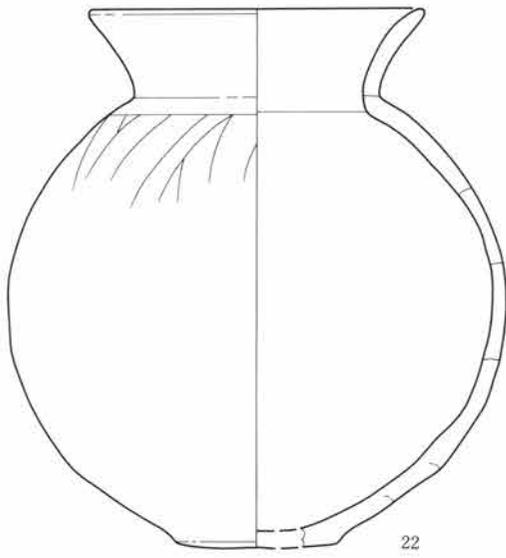
第32図 1区7・8号住居出土遺物

1 1・2区の遺構と遺物



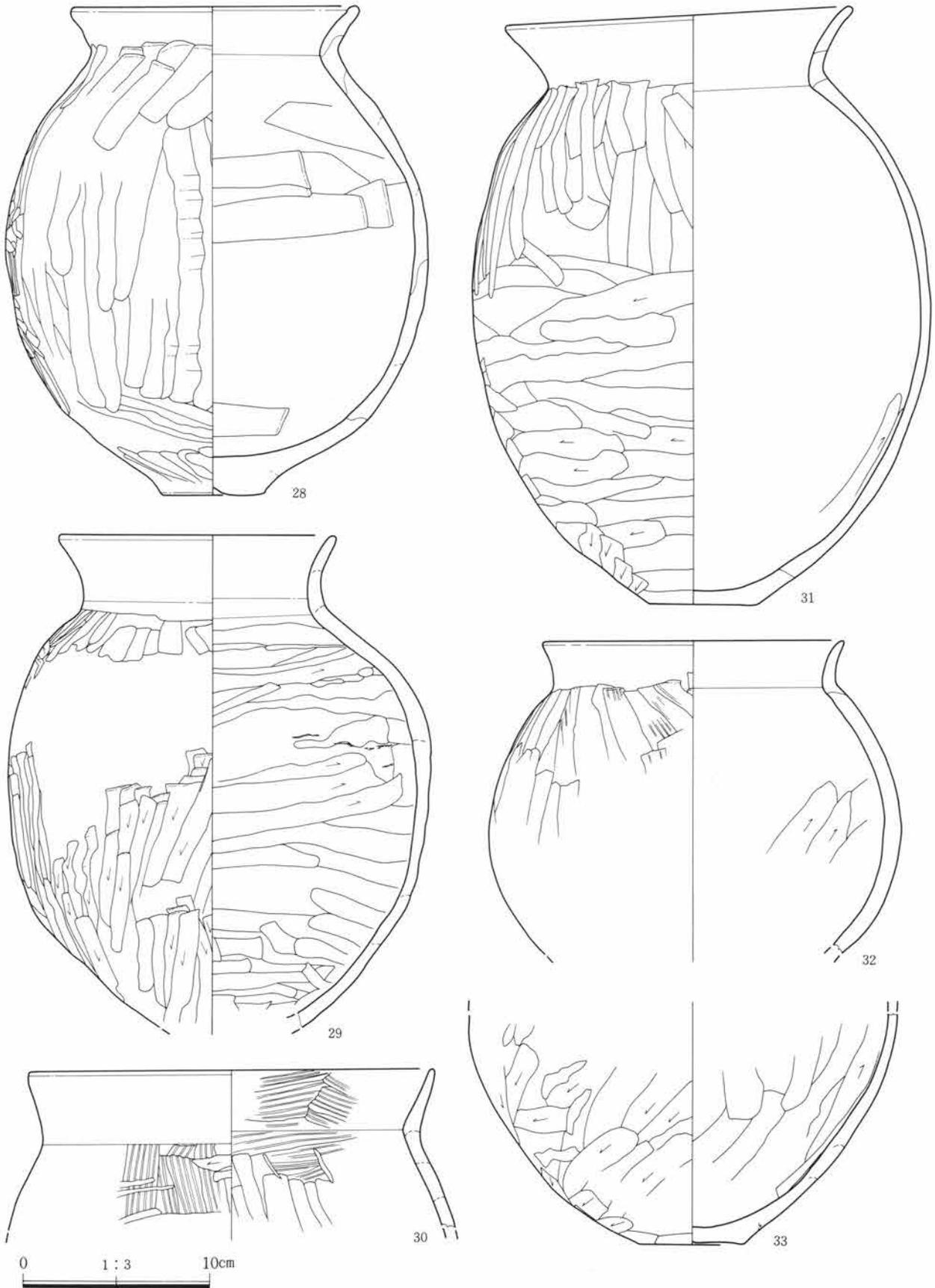
第33図 Ⅰ区9A号住居出土遺物(Ⅰ)

II 調査の内容



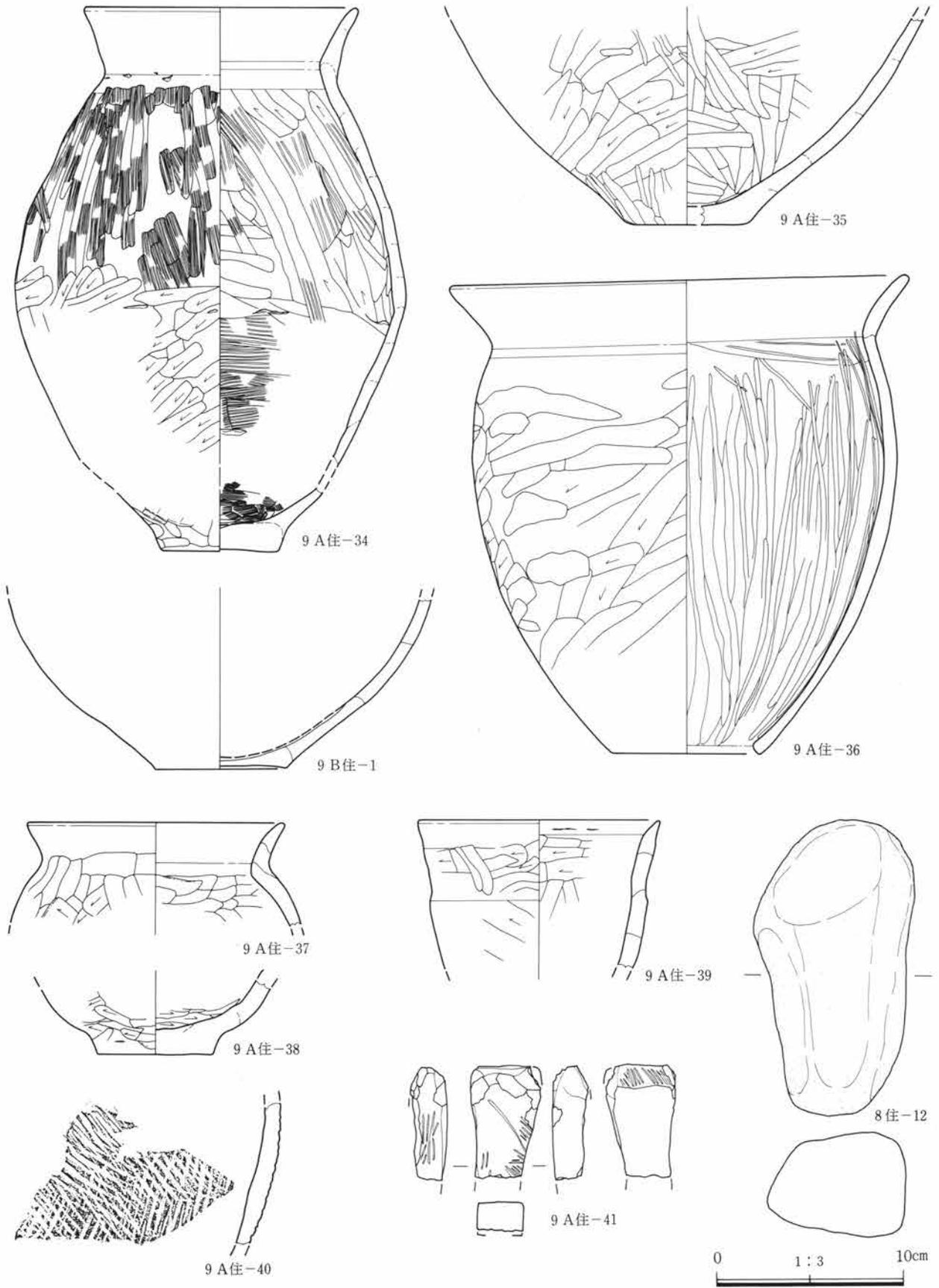
0 1:3 10cm

第34図 I区9A号住居出土遺物(2)



第35図 Ⅰ区9A号住居出土遺物(3)

II 調査の内容



第36図 I区8・9A・9B号住居出土遺物

1区10号住居

位置 B-1グリッド 写真 PL-16・17

重複 11号住居に後出する。

形状 長軸を東西方向にもつ長方形を呈する。未調査区域にかかる北東隅を除いた三隅はほぼ直角で、周壁は直線的に掘り込まれている。規模は長辺5.6×短辺4.0mである。

面積 (21.04m²) 方位 N-52°-E

床面 黒色土からローム土上面にかけて10~40cm掘り込んで床面としている。凹凸の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

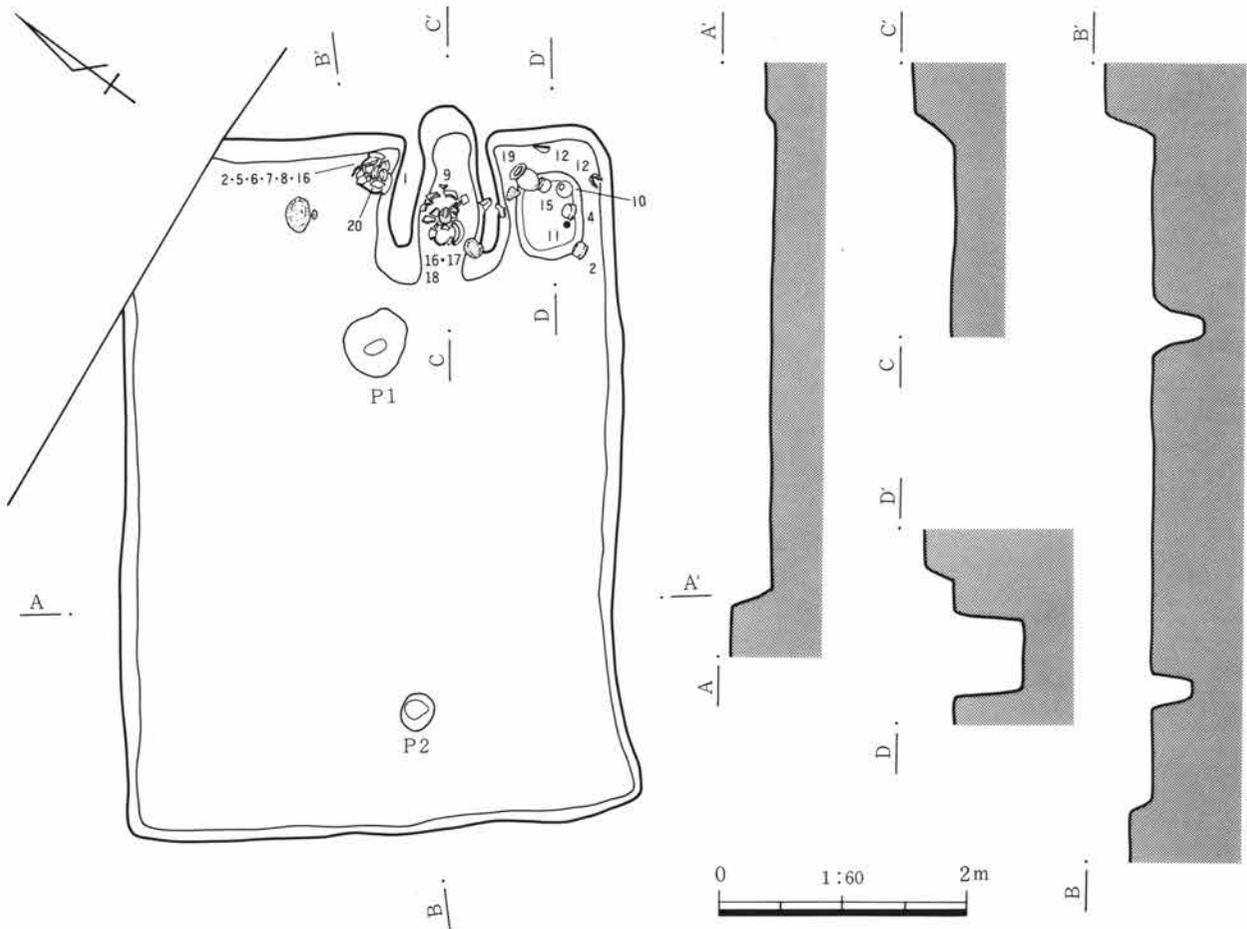
竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられてい

る。燃烧部の規模は長さ118cm、幅56cmである。燃烧部内より坏1点 (No.9) と甕3点 (No.16・17・18) が出土した。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長軸70×短軸54cmの隅丸方形を呈し、深さ55cmである。

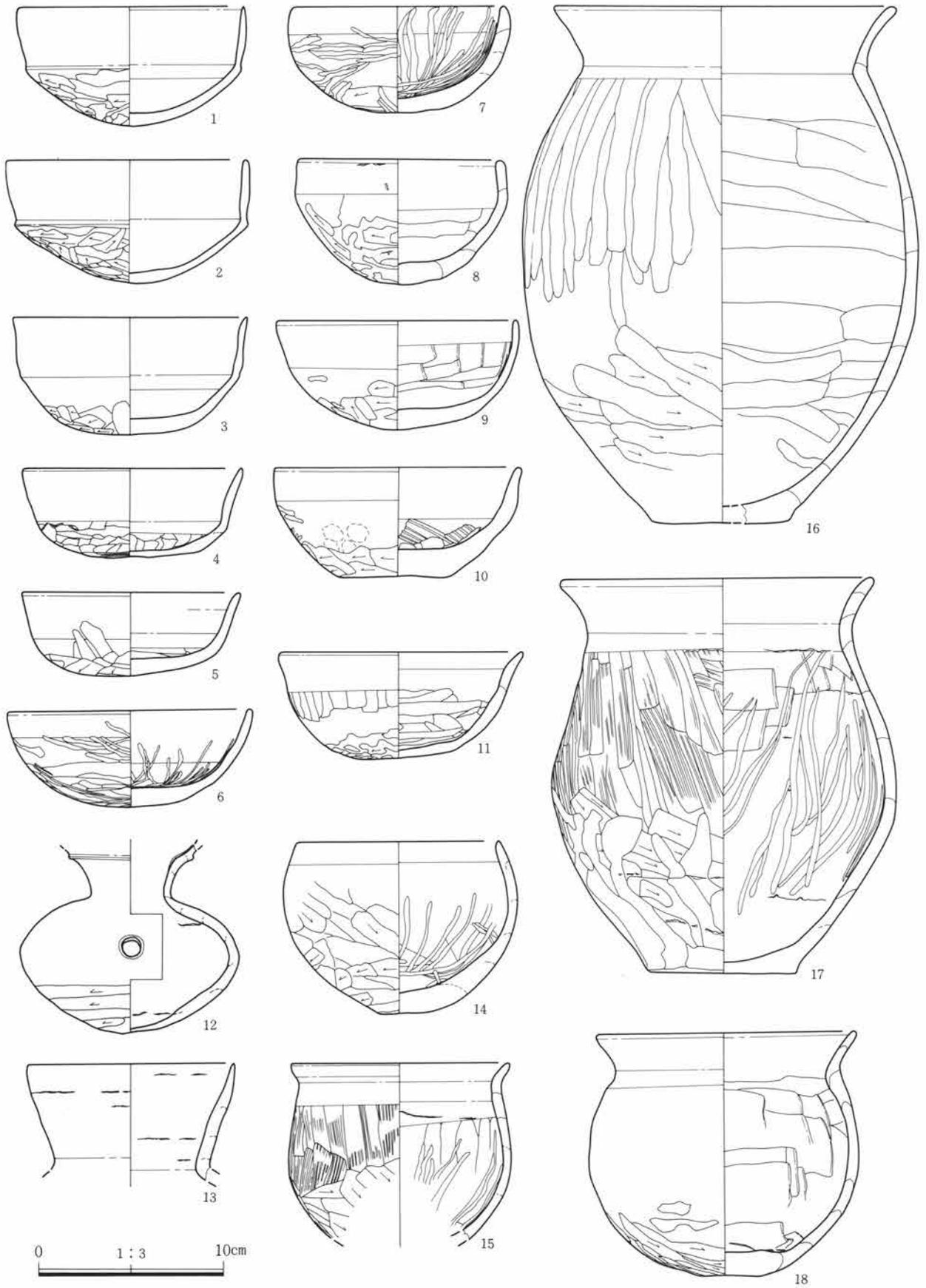
柱穴 住居の長軸に沿って2本検出されたのみである。柱穴の心々間の距離は2.92mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:48×40cm、P₂:30×30cmである。

遺物 埋没土中からの出土を含め、坏12、甕5、甔1、壺1、須恵器の甕1の合計20点の土器が出土した。No.1・2・4~8・10・11・19・20の土器は、貯蔵穴や竈の近くより集中して出土したが、No.12の須恵器が床面より4cm浮いていた他は、総て密着した状態で出土した。(遺物観察表:13・14頁)

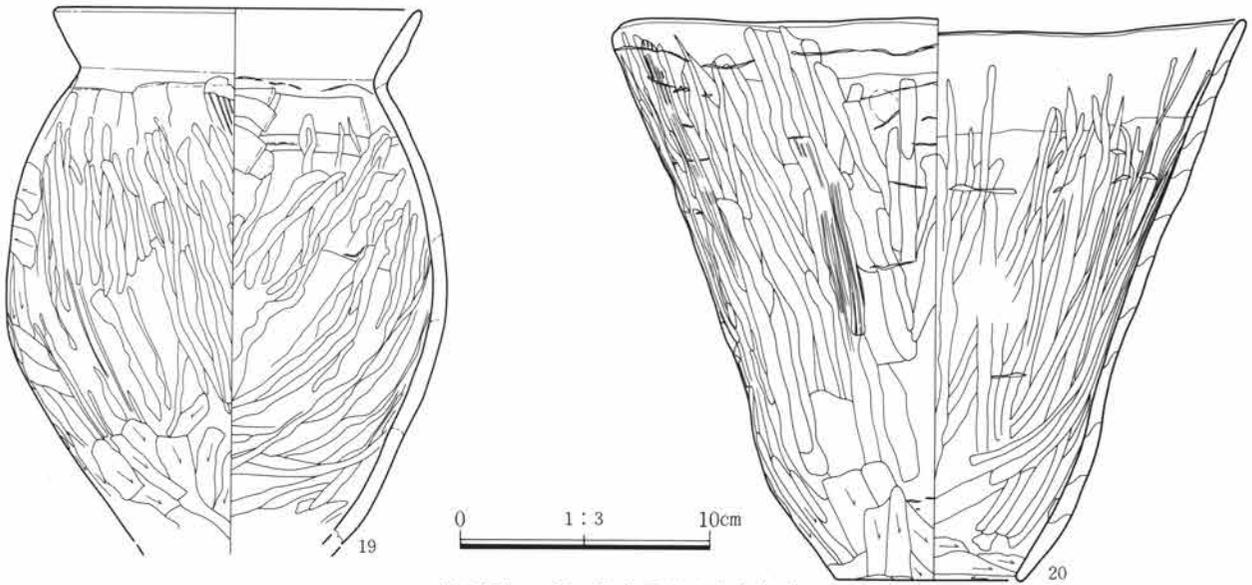


第37図 1区10号住居

II 調査の内容



第38図 I区10号住居出土遺物(1)



第39図 1区10号住居出土遺物(2)

1区11号住居

位置 B-2グリッド 写真 PL-16

重複 10号住居に先行する。

形状 10号住居との重複や北側の一部が調査区域外にかかるため、全体の規模や形状は不明である。残存する東西辺の長さは約4.8mである。

面積 不明 方位 不明

床面 黒色土からローム土上面にかけて19cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもち、北から南側へ向かって比高差約20cmの傾斜が認められる。特に堅固な面は認められなかった。

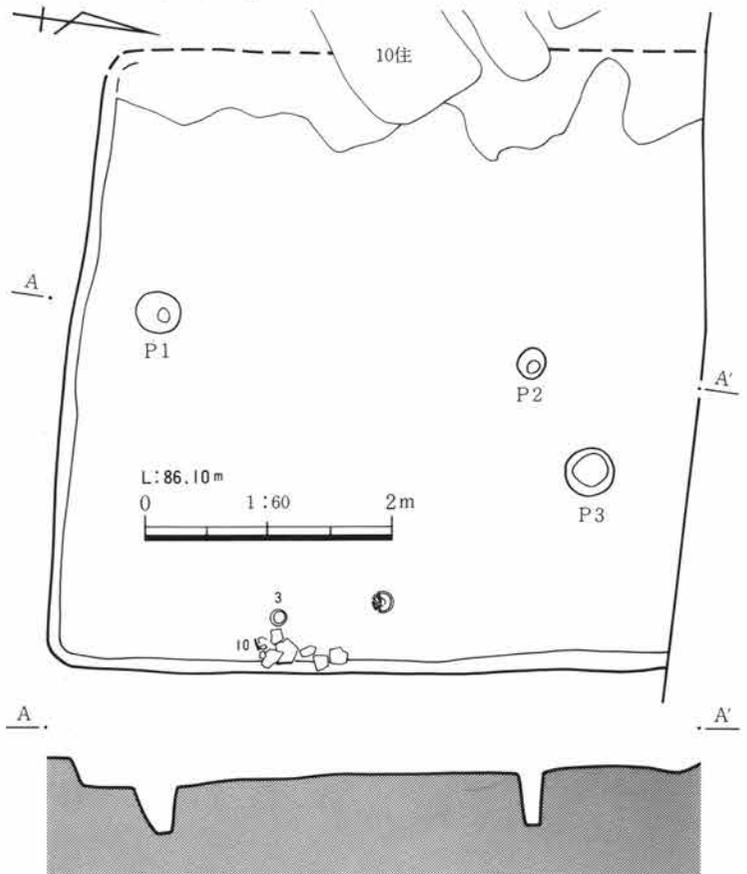
柱穴 柱穴と思われるものは3本検出されているが、規模・位置等から支柱穴はP₃のみと思われる。各柱穴の心々間の距離は、P₁~P₂:2.98m、P₁~P₃:3.62mである。

また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:35×37cm、P₂:22×42cm、P₃:40×40cmである。

遺物 坏3、甕4、甑1、小型粗製土器1、須恵器坏1の合計10点の土器が出土しているが、いずれも床面より10~20cm浮いた状態で出土した。No.6・8は1区10号住居埋没土出土の破片と接合関係にある。

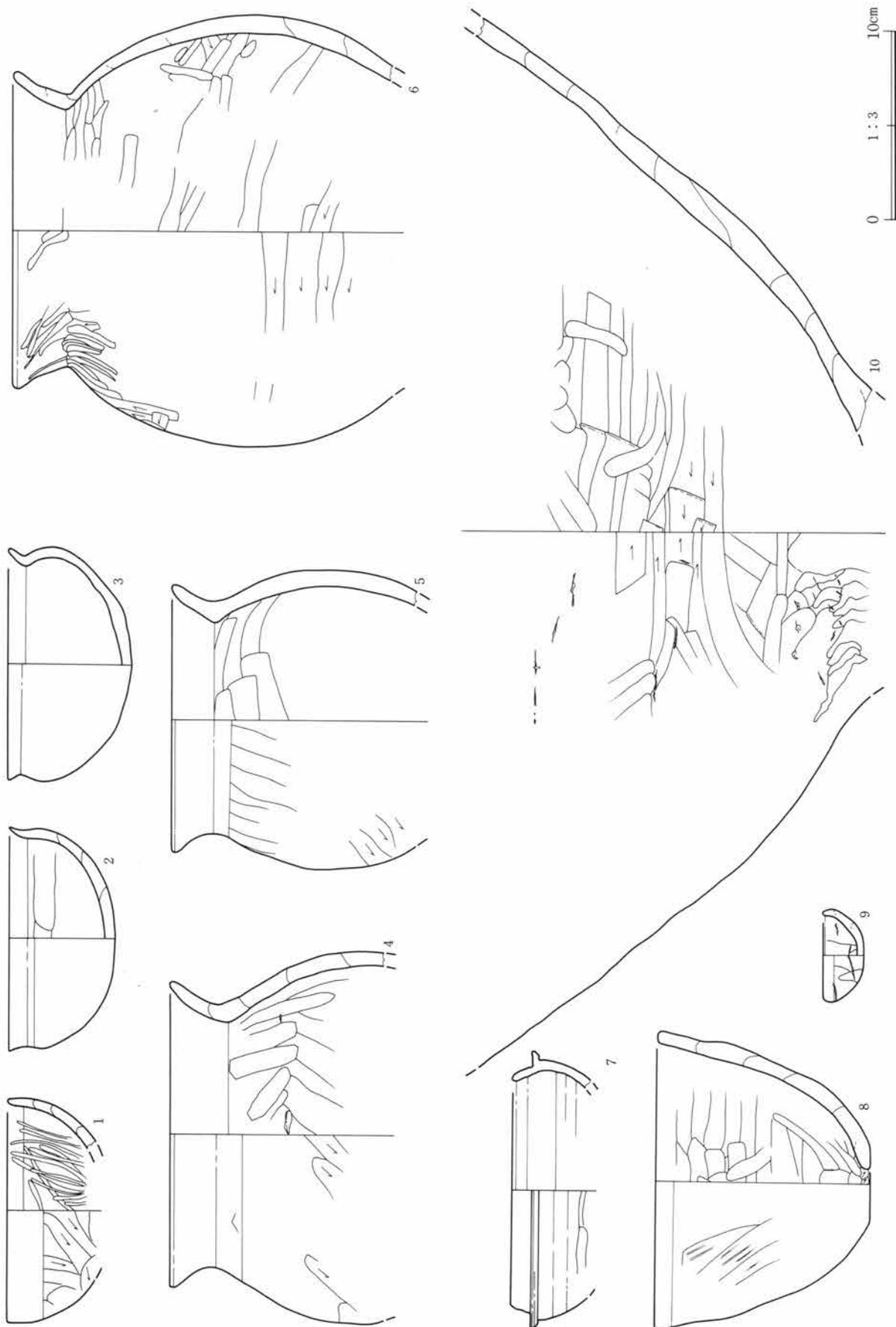
(遺物観察表:14・15頁)

備考 10号住居との重複や住居の一部が未調査区域にかかっているために竈、貯蔵穴、周溝等は検出されなかった。

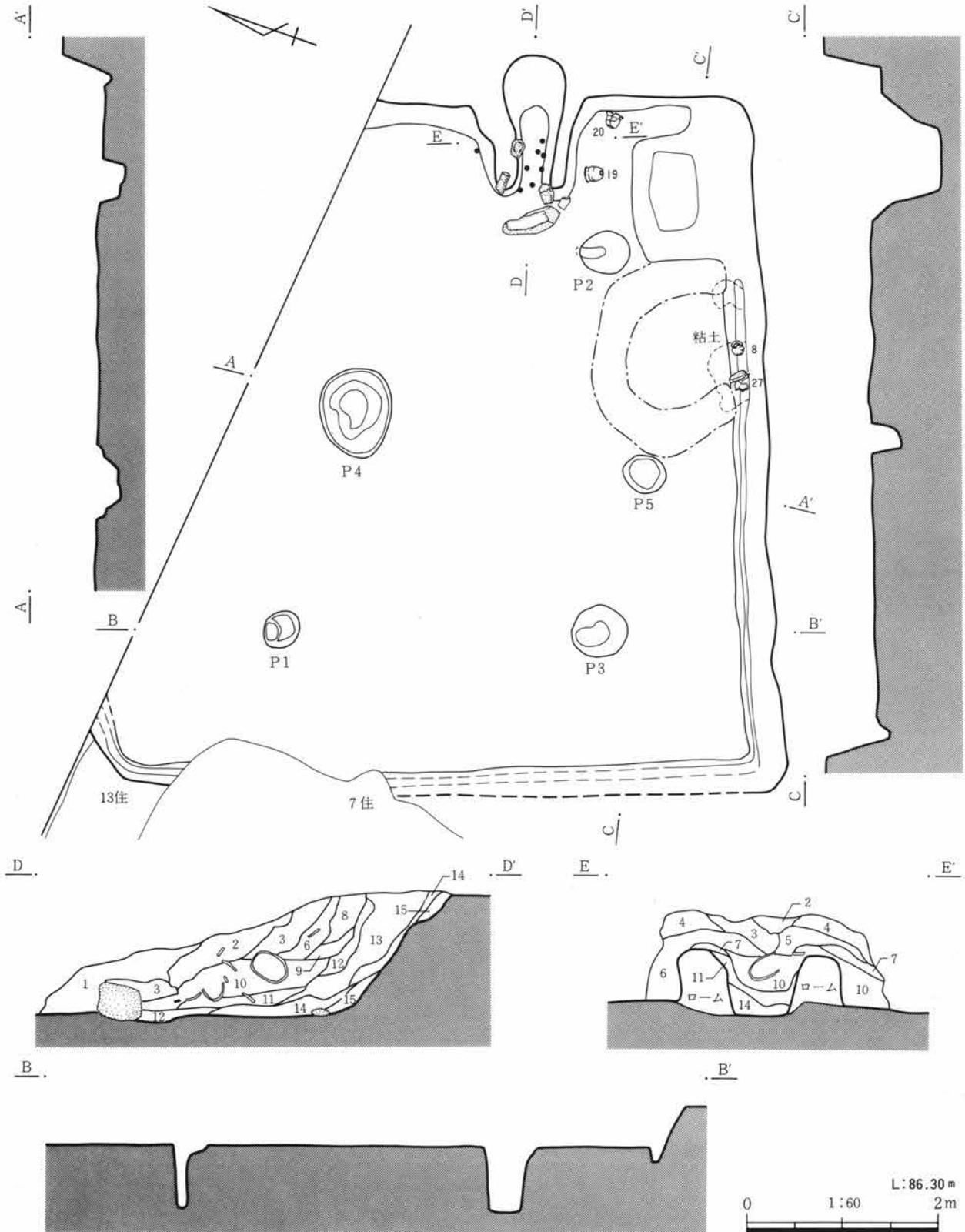


第40図 1区11号住居

II 調査の内容



第41図 Ⅰ区11号住居出土遺物



- | | | | |
|--------------------|---------------------|-------------------|--------------------|
| 埋没土層 | 4. 暗褐色土。1層に類似する。 | 8. 暗褐色土。1層に類似する。 | 12. 焼土層。 |
| 1. 暗褐色土。粘土ブロックを含む。 | 5. 黄褐色土。ロームブロックを含む。 | 9. 暗褐色粘土。 | 13. 暗褐色土。焼土を多量に含む。 |
| 2. 暗褐色土。粘土・焼土を含む。 | 6. 暗褐色土。1層に類似する。 | 10. 暗褐色土。2層に類似する。 | 14. 暗褐色土。焼土を少量含む。 |
| 3. 黒褐色土。粘土ブロックを含む。 | 7. 暗褐色粘土。 | 11. 炭化物を含んだ灰層。 | 15. 暗褐色土。粘性の乏しい土。 |

第42図 1区12号住居

II 調査の内容

1区12号住居

位置 B-12グリッド 写真 PL-18~20

重複 7号住居に後出し、13号住居に先行する。

形状 北側の周壁が調査区域外にかかっているために確定できないが、一辺が7.2mの正方形を呈すると思われる。三隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。

面積 (50.60m²) 方位 N-70°-E

床面 黒色土からローム土上面にかけて46~67cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。電手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。また、南壁の貯蔵穴に接して直径2mの半円形状の高まりがあり、この内側は強く踏み固められている。床面との比高差5cm、幅25~48cmで、出入口部と思われる。

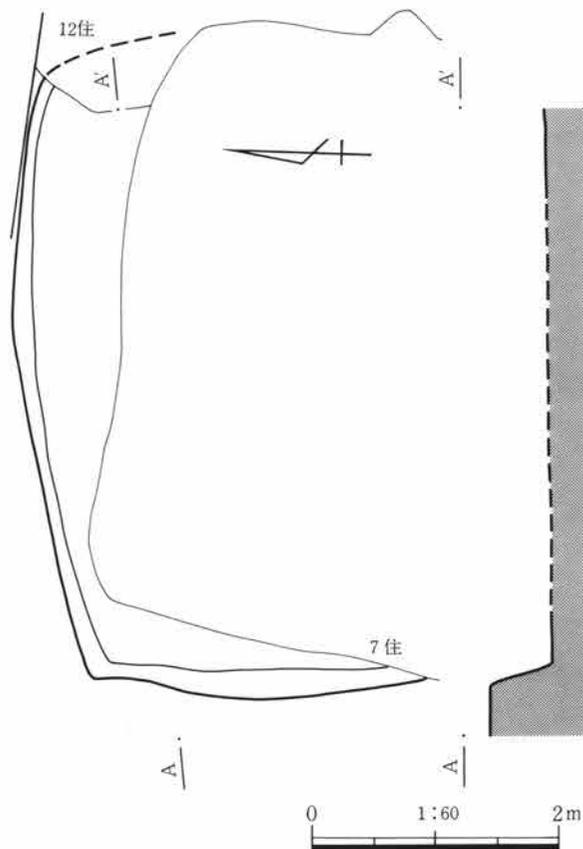
竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残

存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられている。燃焼部の規模は長さ95cm、幅44cmである。煙道部は燃焼部から約55°の角度で立ち上がる。燃焼部内より坏1、小型甕3、甕16、甗3、皿状土製品1の合計24点が出土した。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長軸129×短軸95cmの方形を呈し、深さ70cmである。

柱穴 柱穴状の掘り込みをもつものが5本検出されているが、支柱穴はP₂~P₃の3本で、調査区域外にもう1本存在するものと思われる。各支柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈すると思われ、その心々間の距離は、P₂~P₃:3.97m、P₃~P₁:3.25mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:36×40cm、P₂:50×52cm、P₃:58×50cm、P₄:77×25cm、P₅:40×27cmである。

遺物 竈以外の埋没土中からの出土を含め、坏4、小型甕2、甕5、甗2、小型粗製土器1の合計12点の土器が出土した。竈右側より出土した2点の甗(Na 19・20)が床面に密着していたほかは、すべて床面より4cm以上浮いて出土した。このほかにも薦編み石1点と鉄銹点1点が出土している。出入口部の壁際の2箇所、粘土塊が出土した。(遺物観察表:15~17頁)



第43図 1区13号住居

1区13号住居

位置 B-10グリッド 写真 PL-20・125

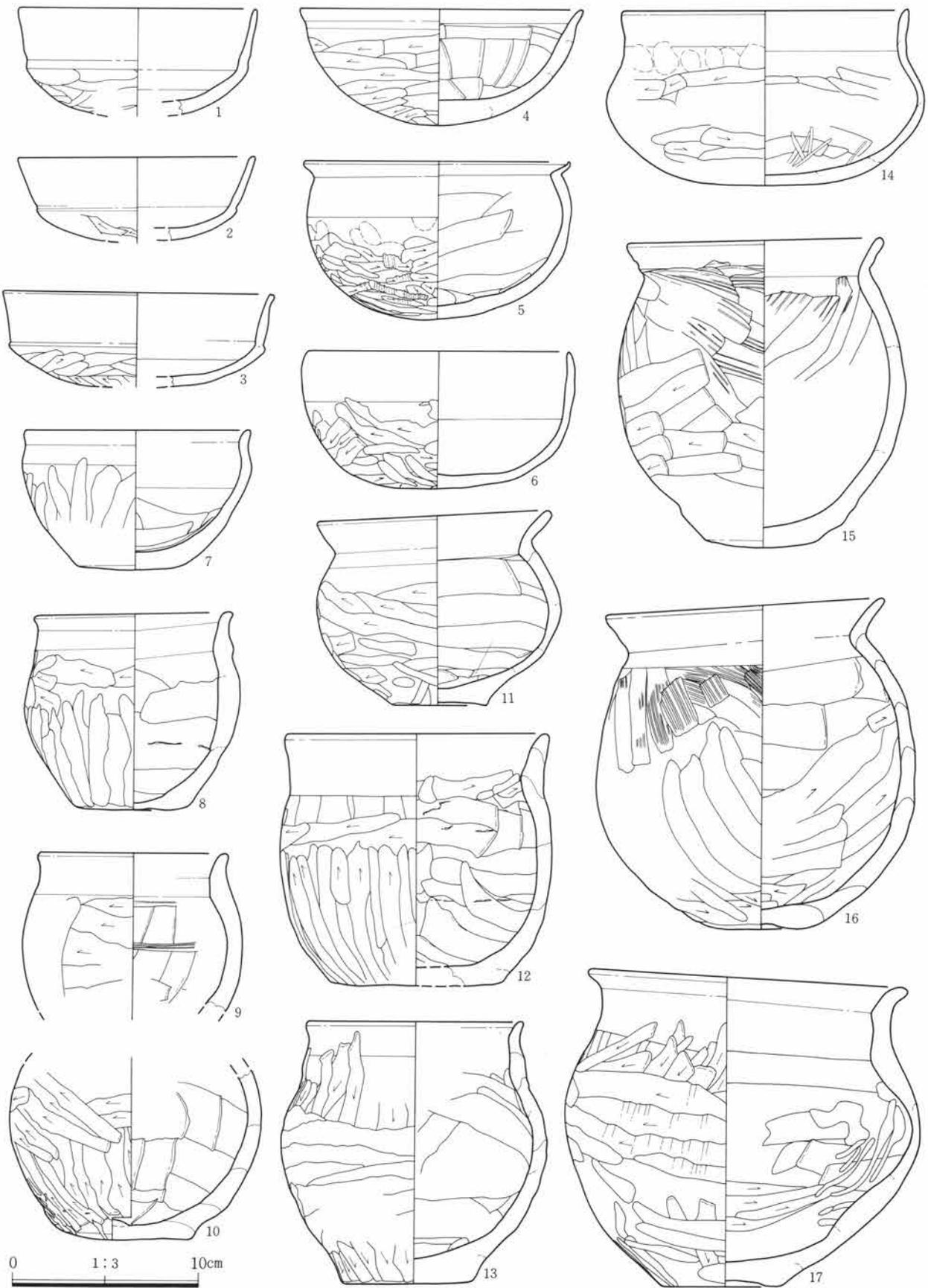
重複 7・12号住居に後出する。

形状 7・12号住居との重複により、規模・形状等は不明である。検出し得た隅部は丸く、周壁はわずかに外側へ弧状に膨らむ。

床面 ローム土を52~67cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもち、東から西側へと比高差約10cmの傾斜が認められる。特に堅固な面は認められない。

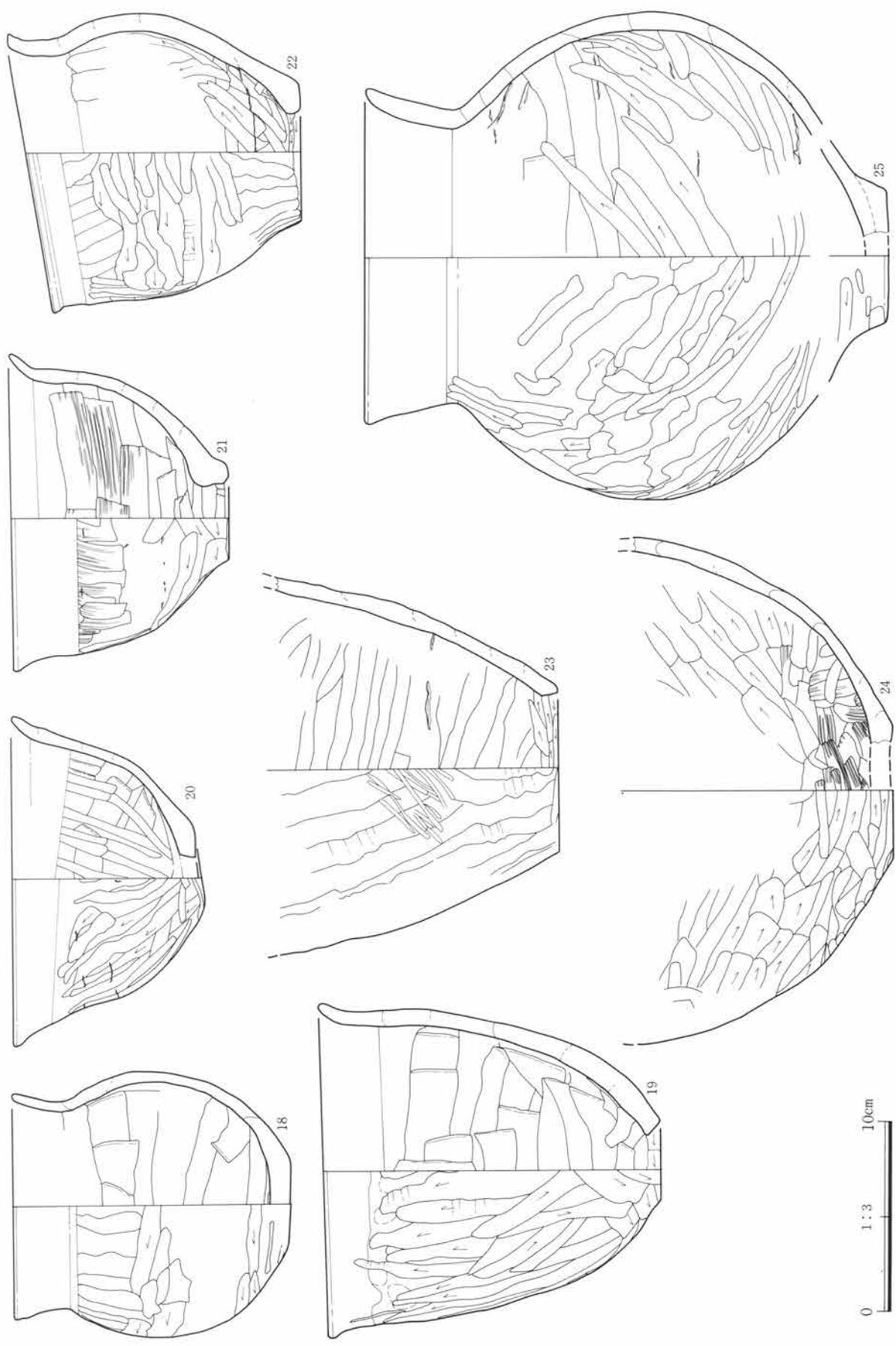
遺物 埋没土中より坏2点、甕1点、砥石1点が出土したのみである。Na 2は1区8号住居の埋没土出土の破片と接合関係にある。(遺物観察表:17・18頁)

備考 竈、貯蔵穴、柱穴等の施設は検出されなかった。

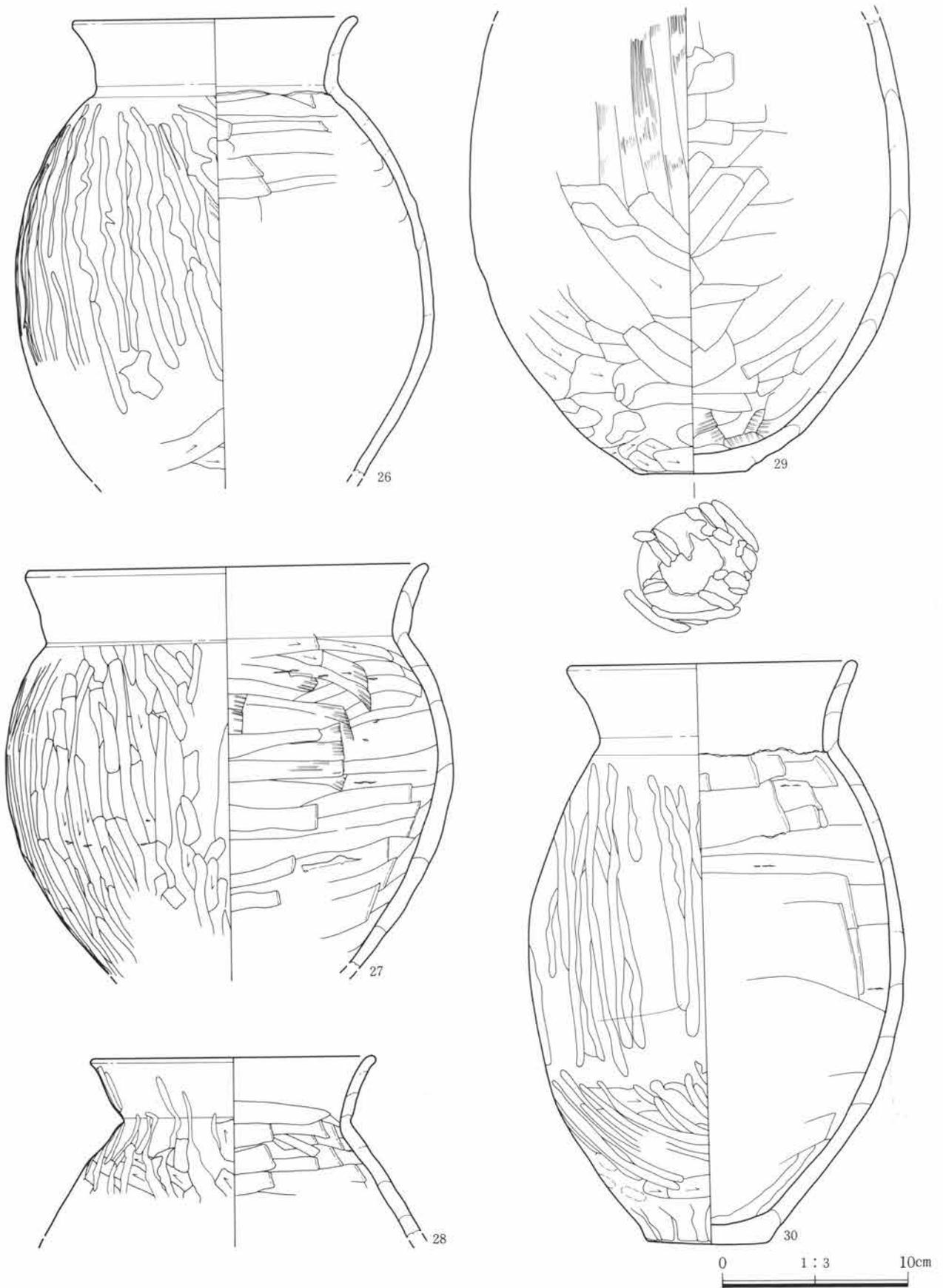


第44図 Ⅰ区12号住居出土遺物(Ⅰ)

II 調査の内容

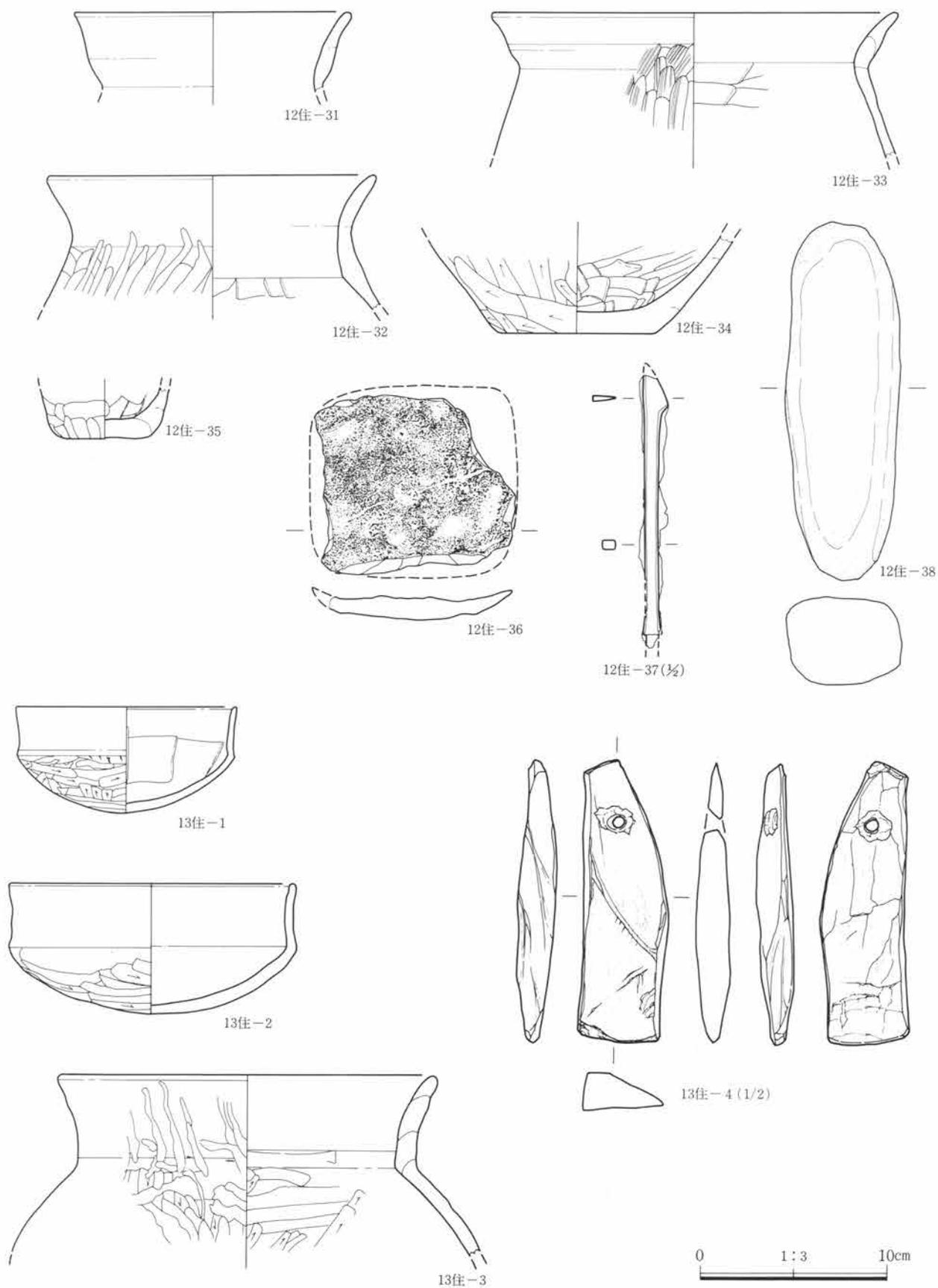


第45図 Ⅰ区12号住居出土遺物(2)



第46図 1区12号住居出土遺物(3)

II 調査の内容



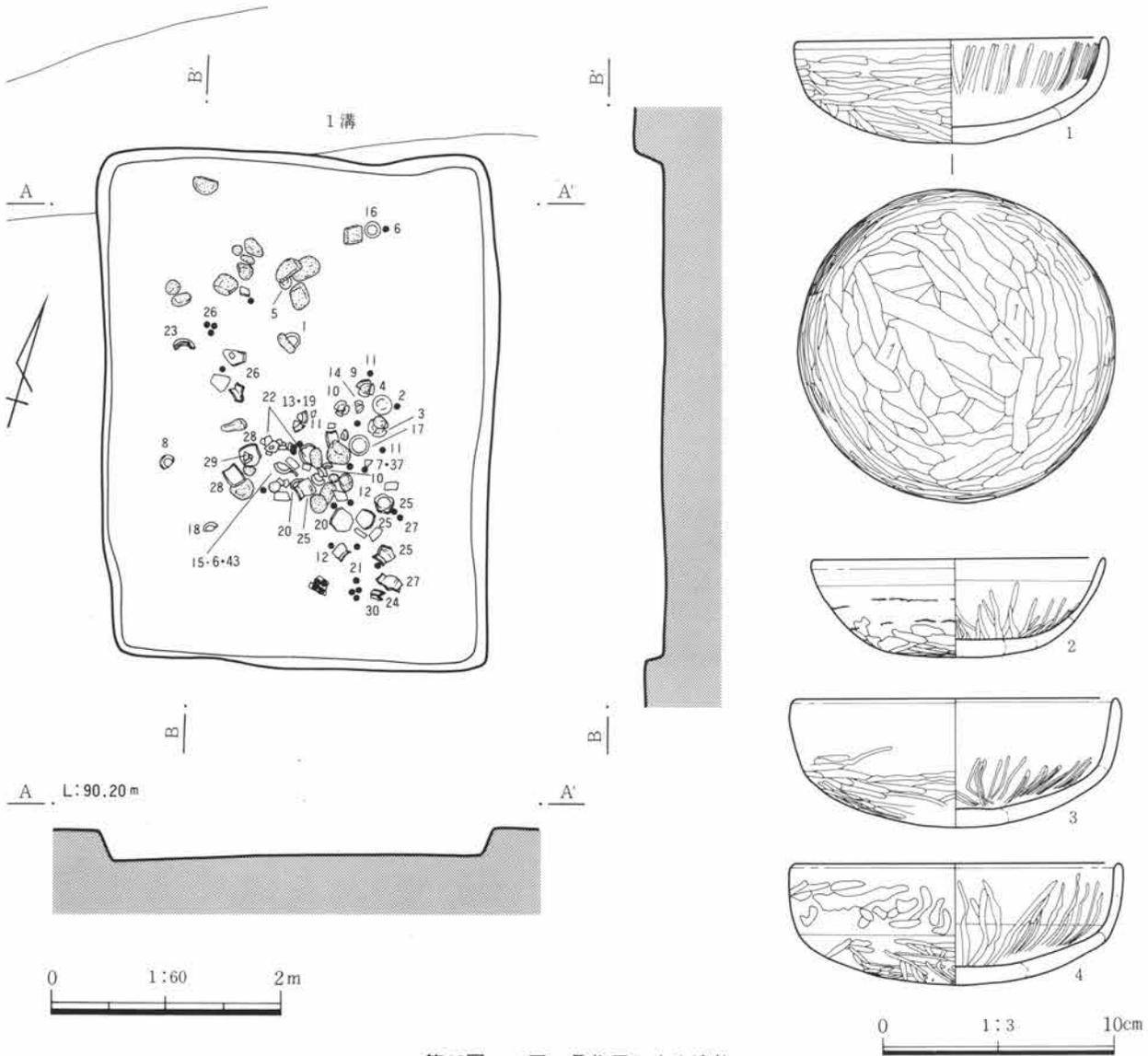
第47図 I区12・13号住居出土遺物

2区2号住居

位置 G-4グリッド 写真 PL-20・21
 形状 長軸を南北にもつ長方形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺4.44×短辺3.40mである。
 面積 14.80㎡ 方位 N-73°-E
 床面 ローム土を15~26cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもち、西から東側へと比高差約6cmの傾斜が認められる。叩き床状ほどではないが、全体的に堅く踏み固められている。
 柱穴 精査にもかかわらず、検出できなかった。
 遺物 埋没土中からの出土を含め、坏31、甕12、甔

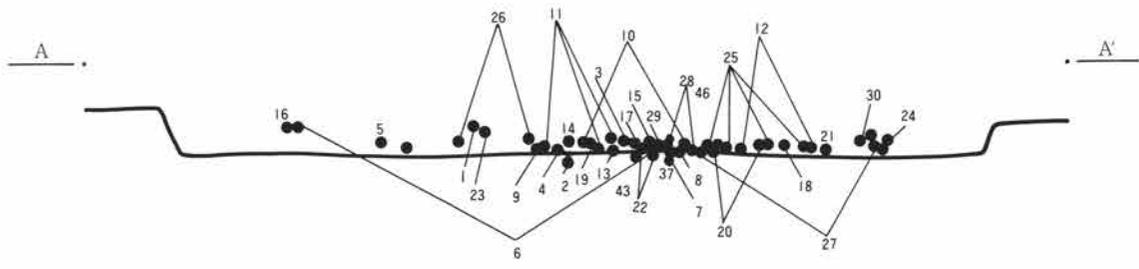
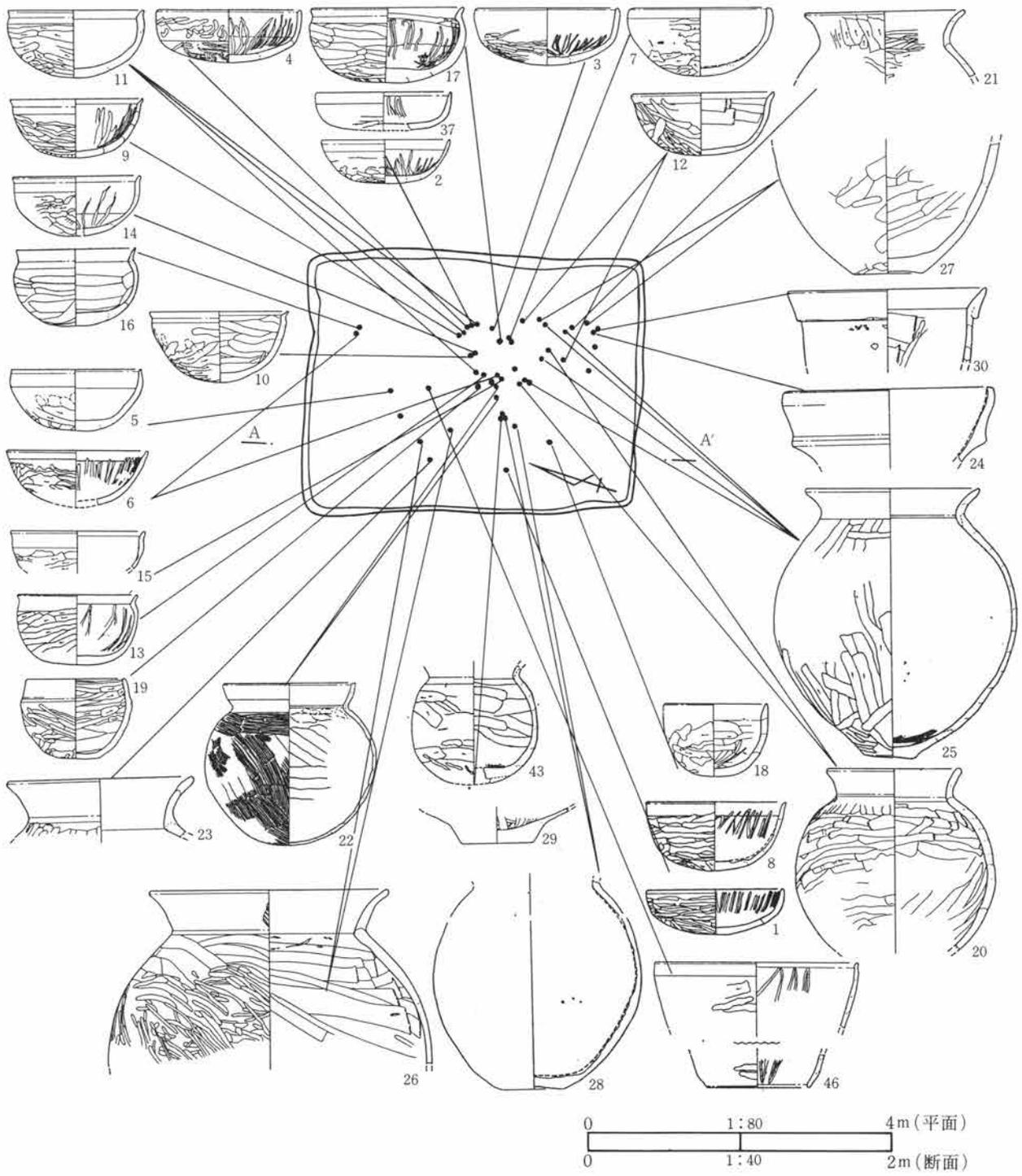
2、壺1の合計46点が出土した。床面に密着して出土した土器は、No 2・4・9・11~13・15・17・19~22・25・28・29で、他の土器は5~10cm浮いて出土した。また20点余り出土した最大径20~30cmほどの河床礫は、北壁寄りと中央部の2カ所に比較的まとまって出土している。(遺物観察表：18~20頁)

備考 竈および炉等の痕跡を検出することはできなかったが、出土した土器の時期が5世紀中葉であることからみて、竈付き住居の可能性が高い。床面上に散在している河床礫の一部が、2区20号住居と類似した炉の構築材に使用された可能性もある。

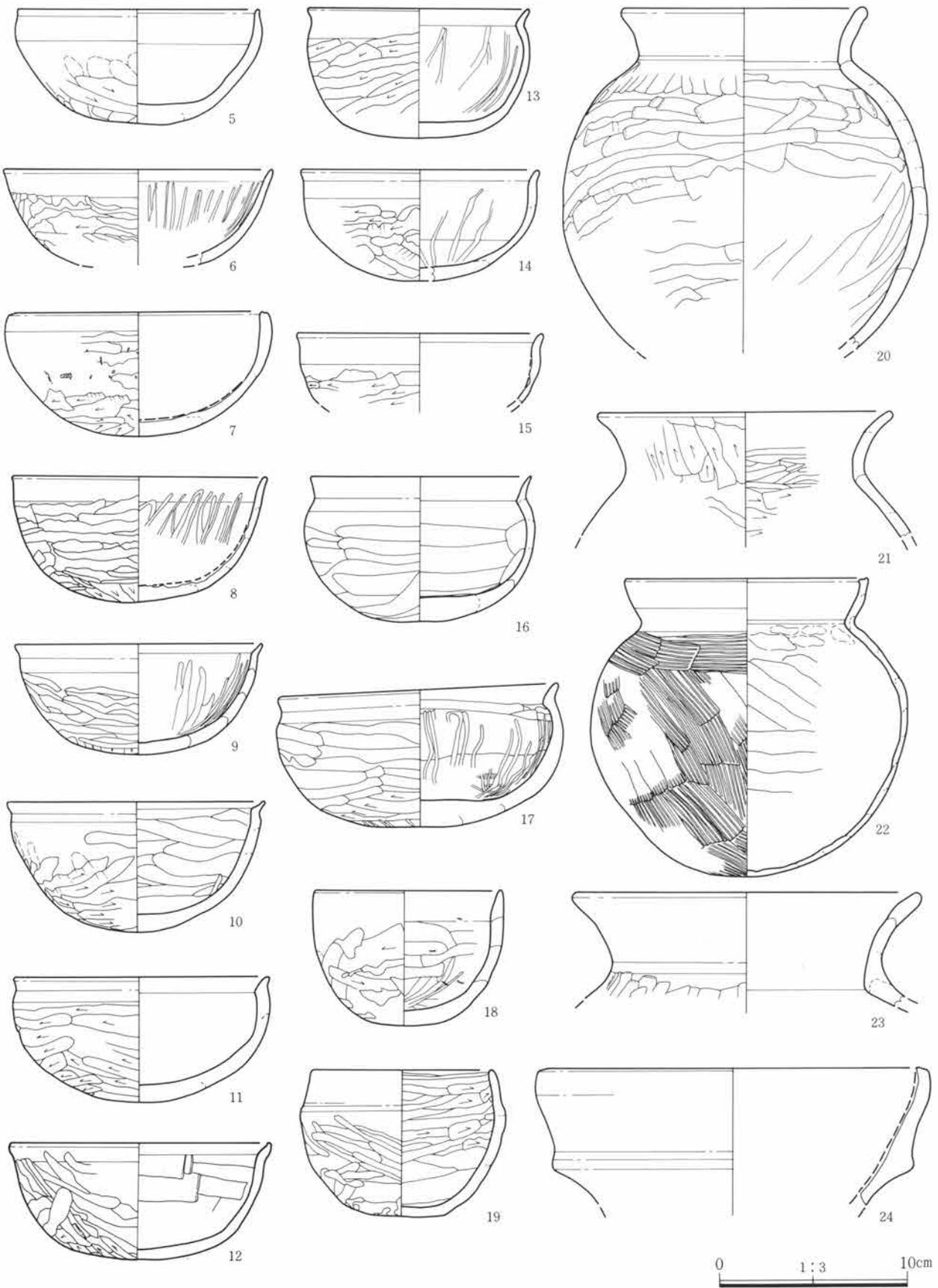


第48図 2区2号住居と出土遺物

II 調査の内容

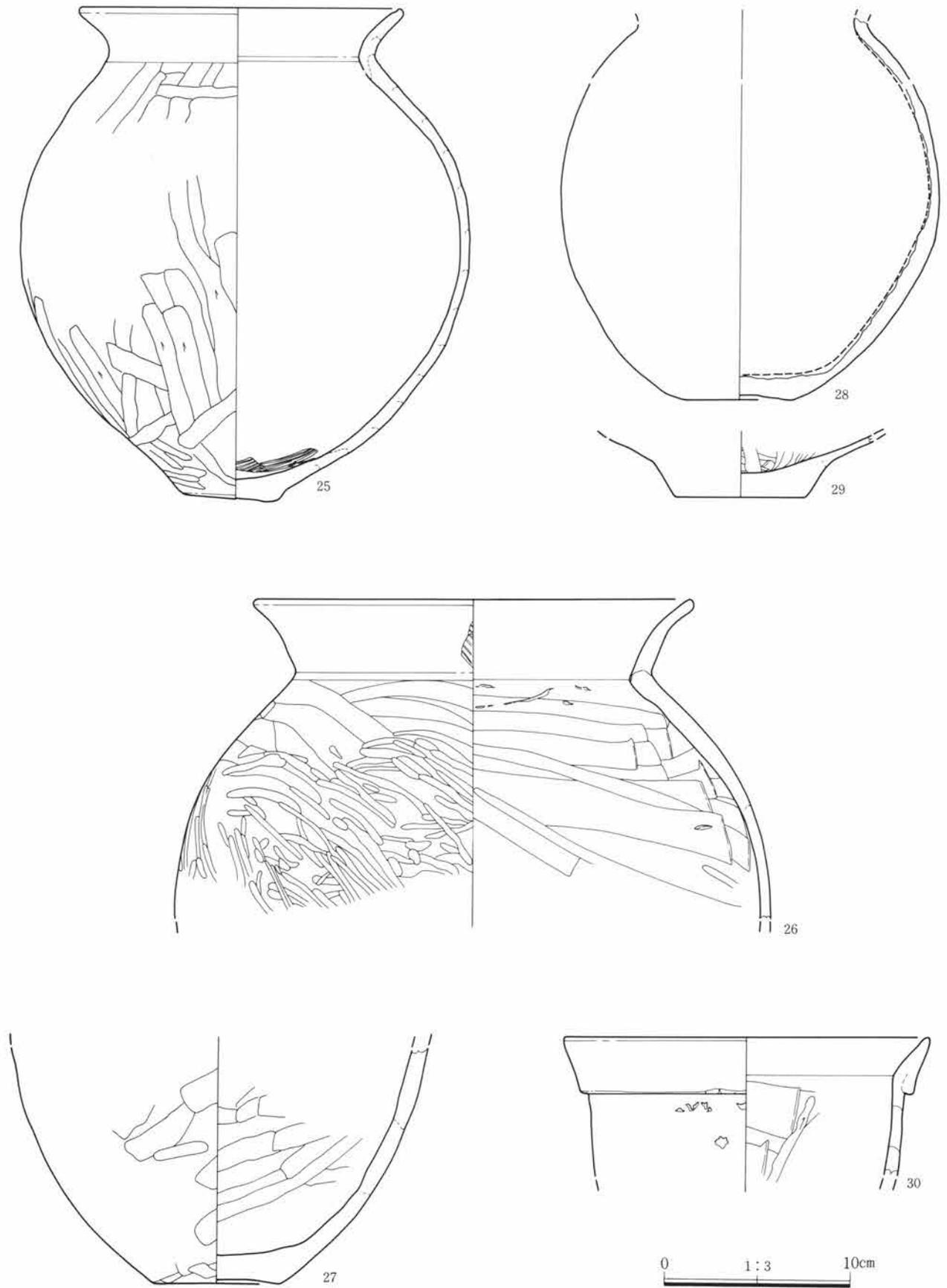


第49図 2区2号住居の遺物出土状況

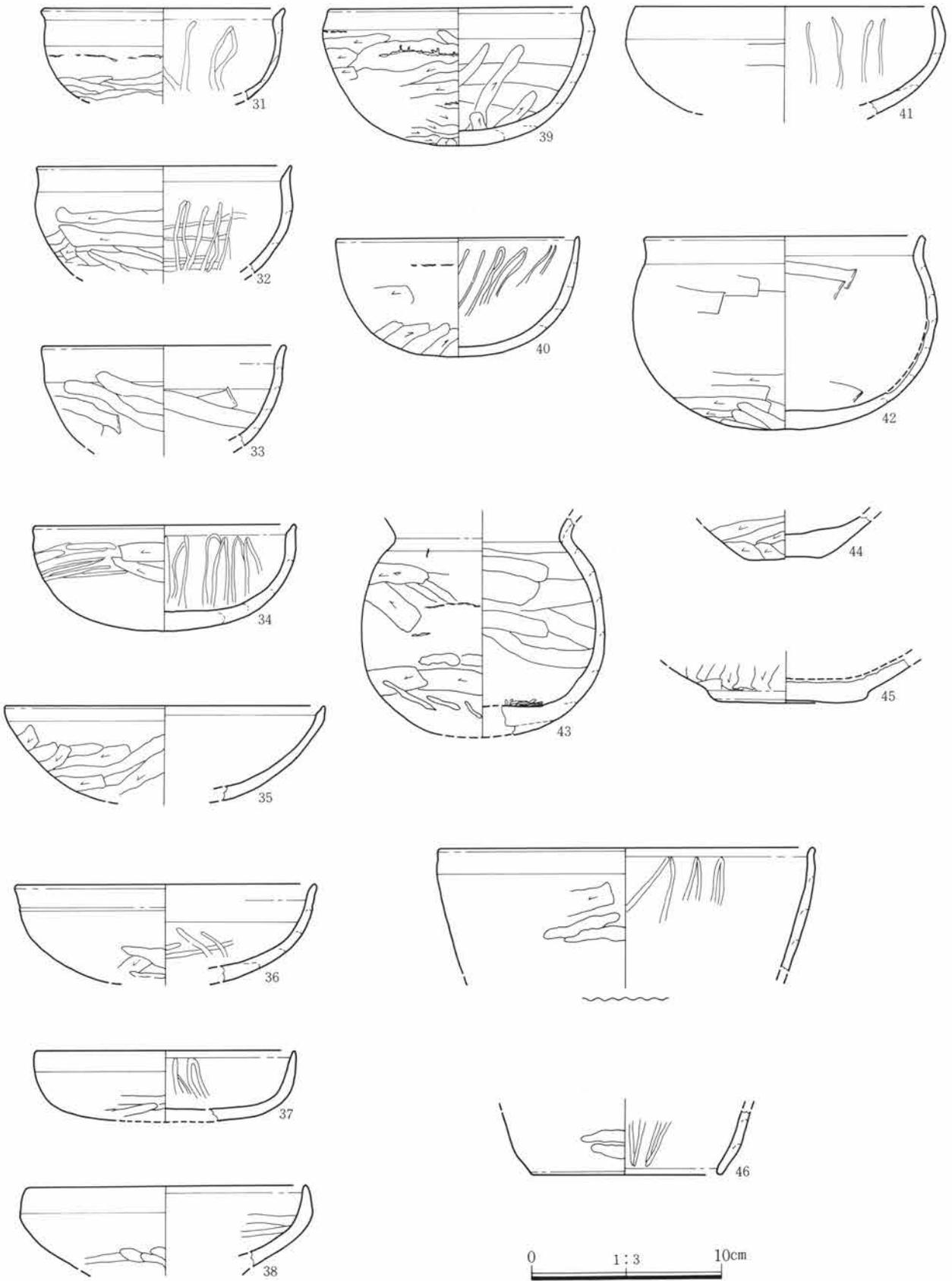


第50図 2区2号住居出土遺物(1)

II 調査の内容



第51図 2区2号住居出土遺物(2)



第52図 2区2号住居出土遺物(3)

II 調査の内容

2区3号住居

位置 F-3グリッド 写真 PL-22

重複 新旧関係は不明であるが、南側で4号住居と重複する。

形状 長軸を東西にもつ長方形を呈する。西壁側は調査時の掘り過ぎのため不明瞭となっているが、四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれるものと思われる。規模は長辺5.5×短辺4.5mである。

面積 (24.79m²) 方位 N-64°-E

床面 ロームを17~37cm掘り込む。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

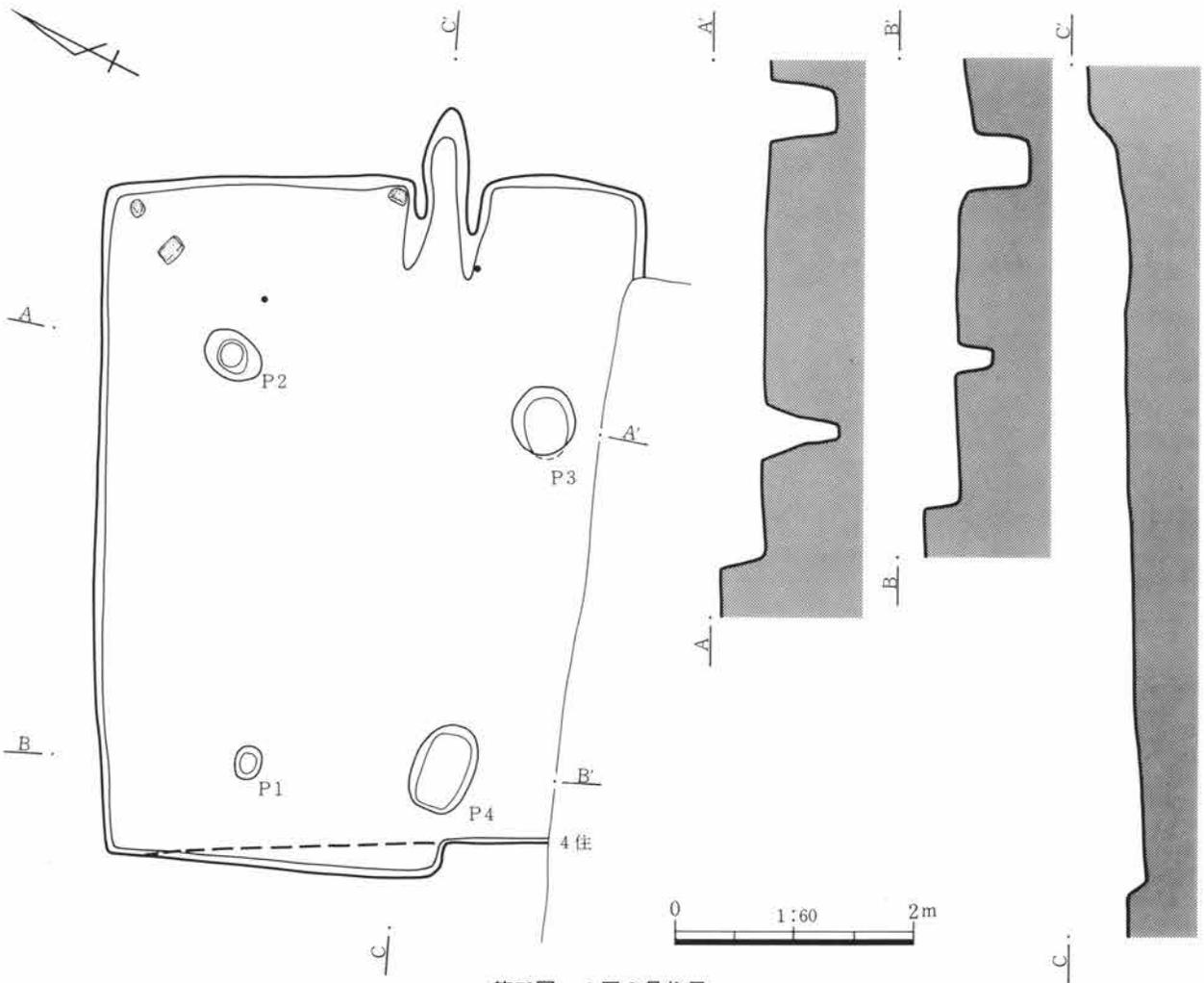
竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられてい

る。燃焼部の規模は長さ70cm、幅32cmである。煙道部は幅38cm、長さ66cmの掘り方のみ残存し、燃焼部より約30°の緩やかな角度で立ち上がる。

貯蔵穴 精査にもかかわらず、検出できなかった。

柱穴 4本検出され、P₃・P₄を除く他の2本は住居の対角線上に位置する。各柱穴の心々間の距離は、P₁~P₂:3.40m、P₂~P₃:2.68m、P₃~P₄:1.66m、P₄~P₁:3.00mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:23×29cm、P₂:37×62cm、P₃:50×55cm、P₄:44×50cmである。

遺物 土器は埋没土中から坏、甕、甗、壺の破片が少量出土したのみである。No.3は2区5号住居の埋没土出土の破片と接合関係にある。また北東隅より2点、竈左袖部近くより1点の河床礫が、床面に密着して出土した。(遺物観察表:20・21頁)



第53図 2区3号住居

2区4号住居

位置 G-2グリッド 写真 PL-22

重複 新旧関係は不明であるが、北壁側で3号住居と重複する。

形状 長軸を東西にもつ長方形を呈する。四隅はほぼ直角で、南壁は外側にやや膨らむものの、他の各周壁は直線的に掘り込まれている。規模は長辺6.08×短辺4.86mである。

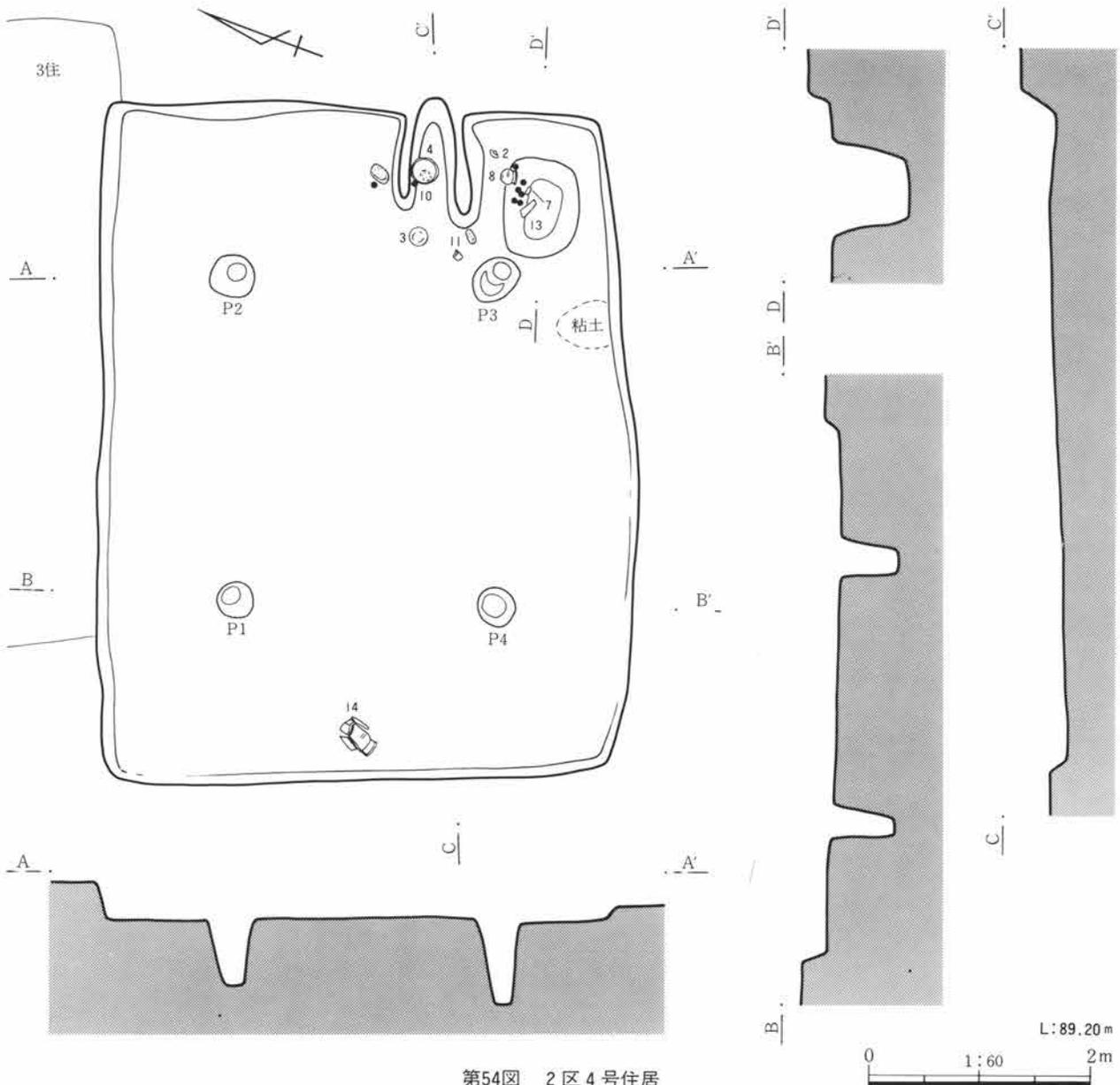
面積 27.44㎡ 方位 N-72°-E

床面 ローム土を9~36cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもち、東から西側へ向かって比高

差約7cmの傾斜が認められる。竈手前や貯蔵穴周辺および主柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられている。燃烧部の規模は長さ80cm、幅42cmである。煙道部の規模は不明であるが、燃烧部より約55°の緩やかな角度で立ち上がる。燃烧部中央より鉢1点(No.4)と甕1点(No.10)とその直下より河床礫を使用した支脚が1点出土した。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長軸87×短軸68



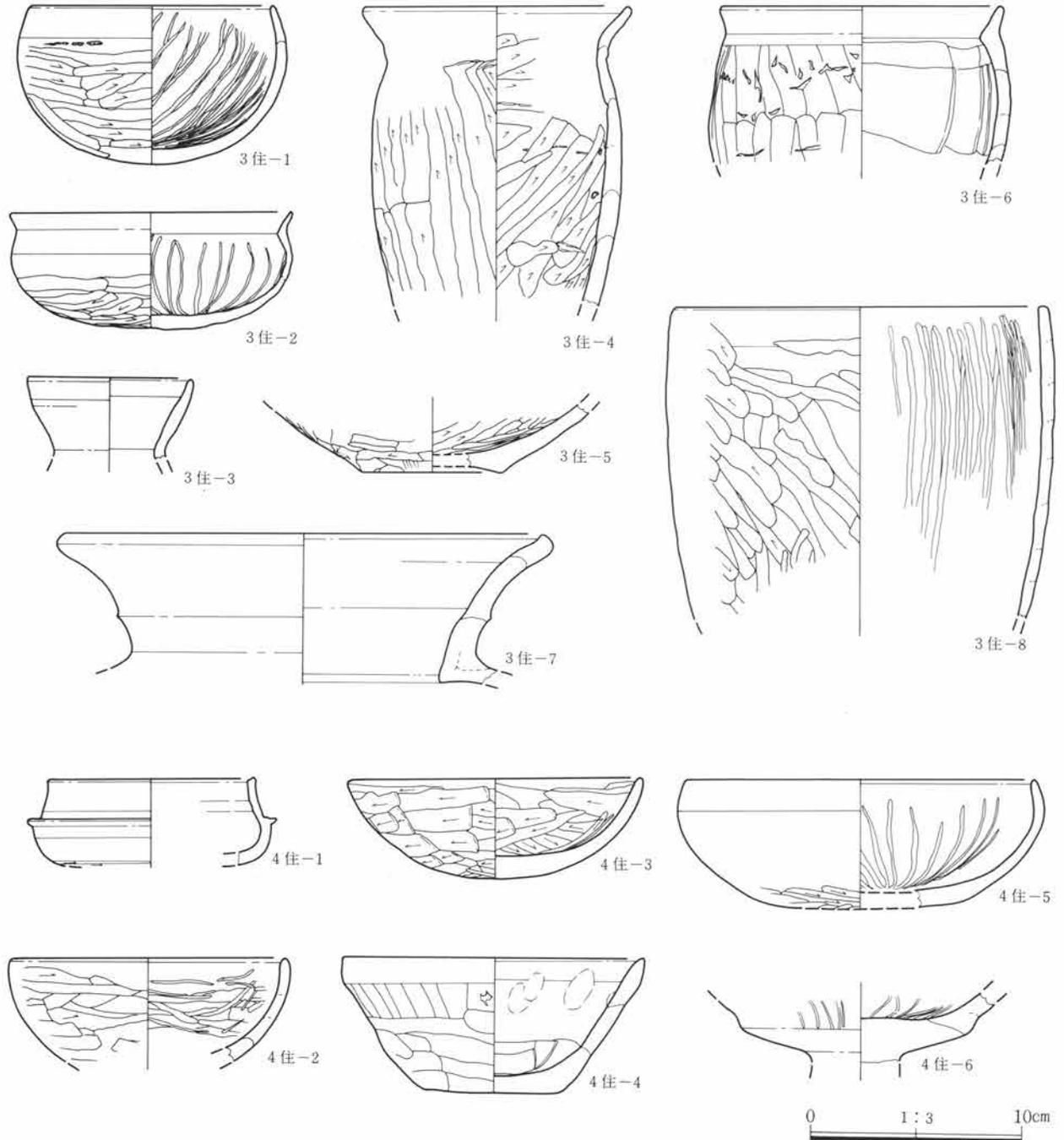
第54図 2区4号住居

II 調査の内容

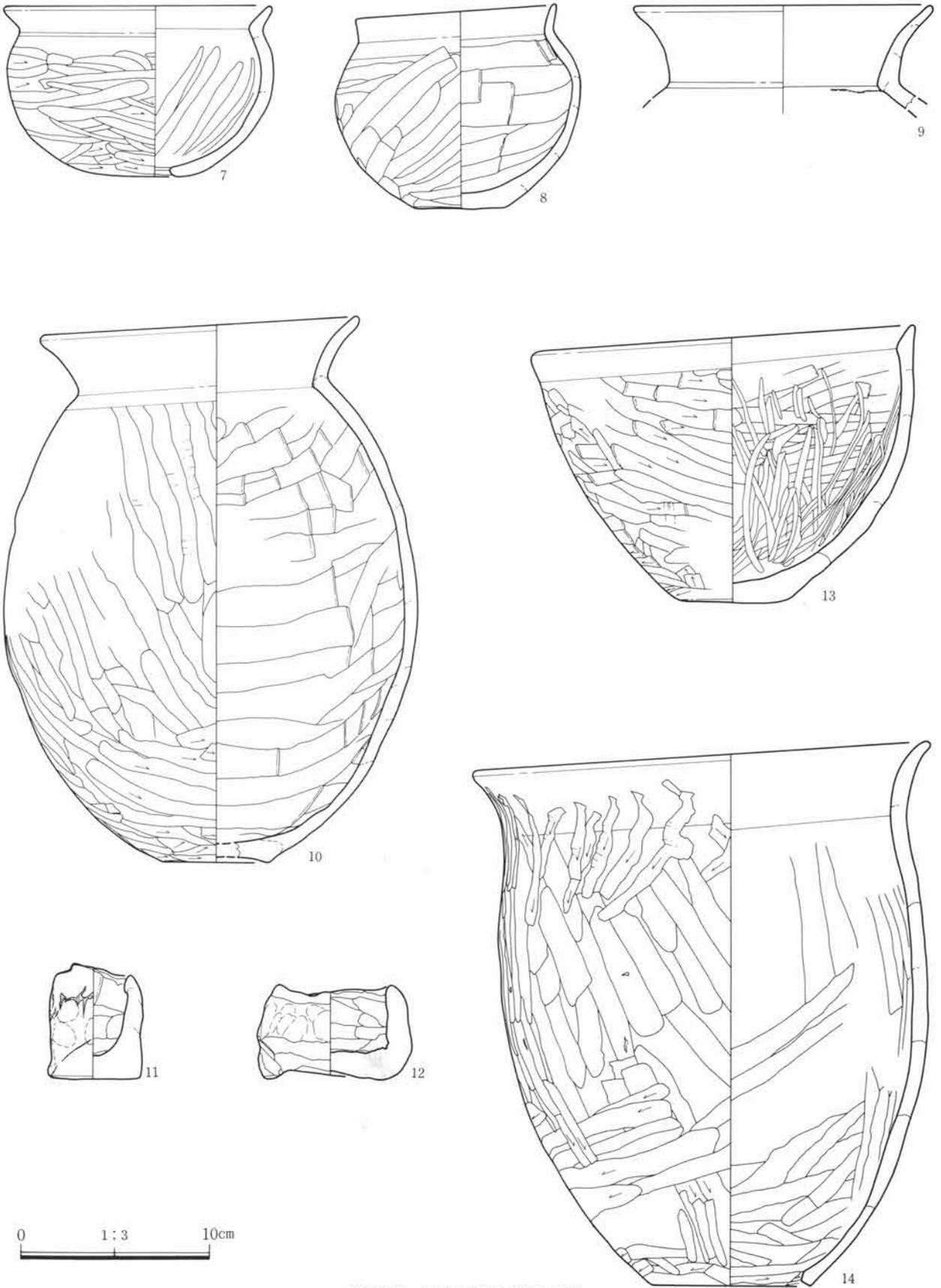
cmの隅丸方形を呈し、深さ70cmである。開口部付近より甕 (No.8)、甗 (No.7)、鉢 (No.13) が出土した。

柱 穴 住居の対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その心々間の距離は $P_1 \sim P_2$: 2.88m、 $P_2 \sim P_3$: 2.38m、 $P_3 \sim P_4$: 2.98m、 $P_4 \sim P_1$: 2.37mである。また各柱穴の規模 (径×深さ) は、 P_1 : 30×67cm、 P_2 : 38×56cm、 P_3 : 37×74cm、 P_4 : 30×54cmである。

遺 物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏3、鉢2、高坏1、小型甕1、甕2、小甗2、小型粗製土器2、須恵器の坏身1の合計14点が出土した。竈と貯蔵穴の周辺に集中した遺物の出土がみられる。No.11・14は床面に密着して、他の土器は3～9cm浮いて出土している。No.5・9は2区3号住居の埋没土出土の破片と接合関係にある。貯蔵穴手前の南壁際より、粘土塊が出土した。 (遺物観察表: 21頁)



第55図 2区3・4号住居出土遺物



第56図 2区4号住居出土遺物

II 調査の内容

2区5号住居

位置 E-5グリッド 写真 PL-23

形状 長軸を東西にもつ長方形を呈する。四隅はほぼ直角で、南壁はやや蛇行するものの、他の周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺5.86×短辺4.58mである。

面積 23.71m² 方位 N-54°-E

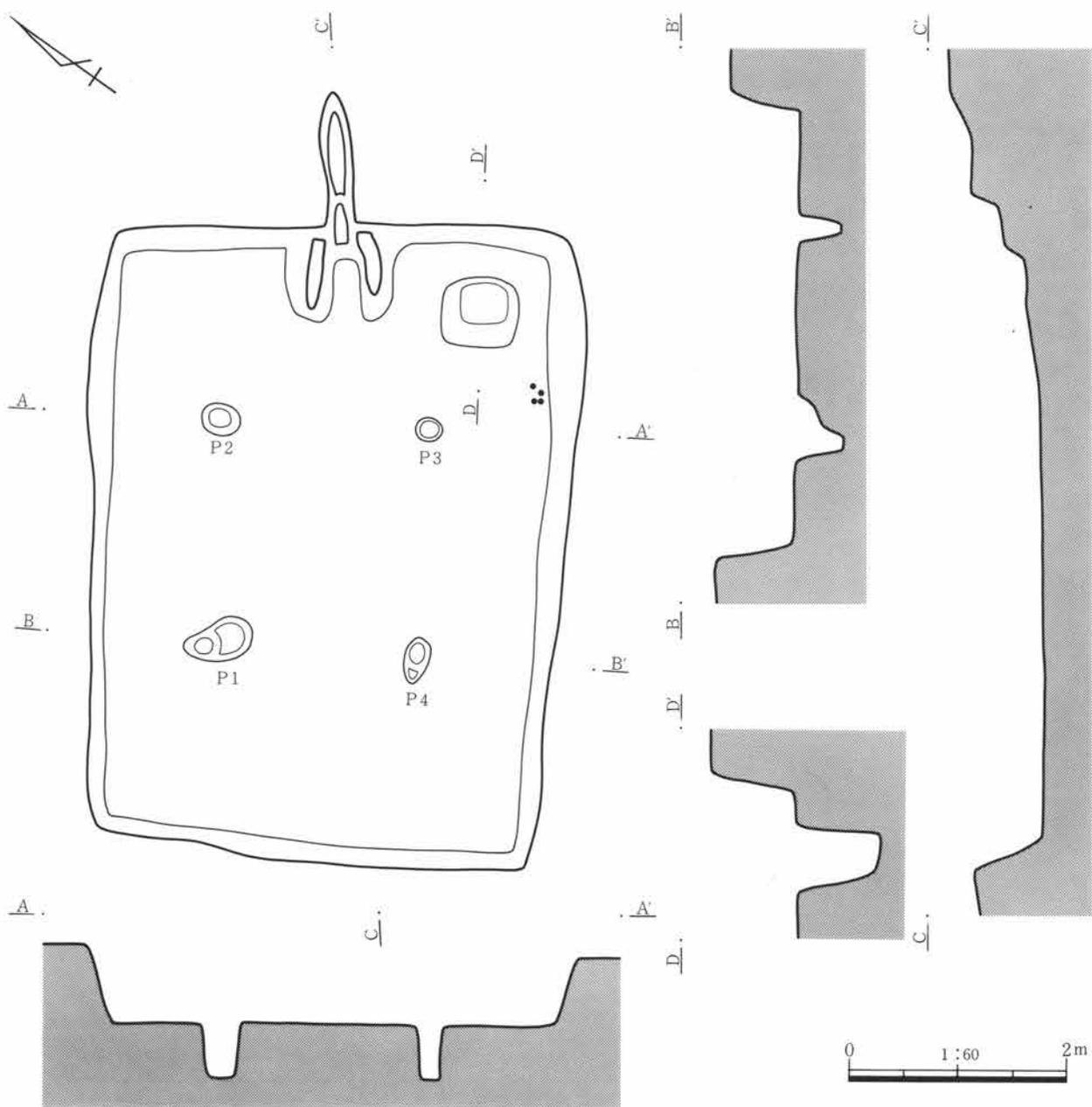
床面 ローム土を53~76cm掘り込んで床面としている。全体的に平坦な床面であるが、北東隅が他に比べて5cm前後高い。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で

囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

竈 東壁中央部に位置し、両袖部が残存する。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられている。燃烧部の規模は長さ60cm、幅46cmである。煙道部は燃烧部の底面から約25cm上位の壁面中途を水平に掘り抜き、その後垂直に近い角度で立ち上がる。幅30cm、長さ88cmである。燃烧部内よりNo.6の坏が出土した。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長軸72×短軸65cmの隅丸方形を呈し、深さ74cmである。

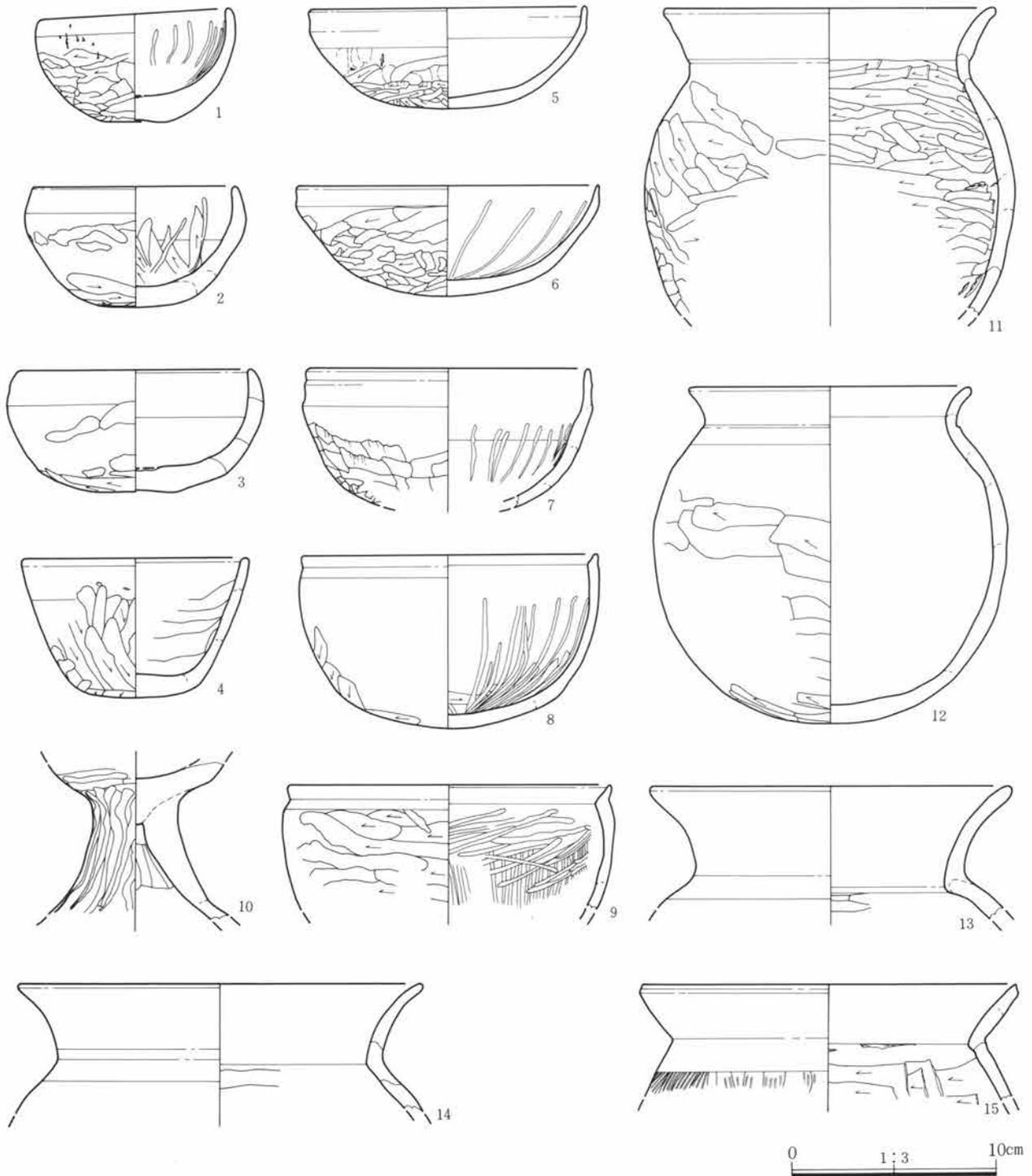
柱穴 住居の対角線上に4本検出された。各柱穴の



第57図 2区5号住居

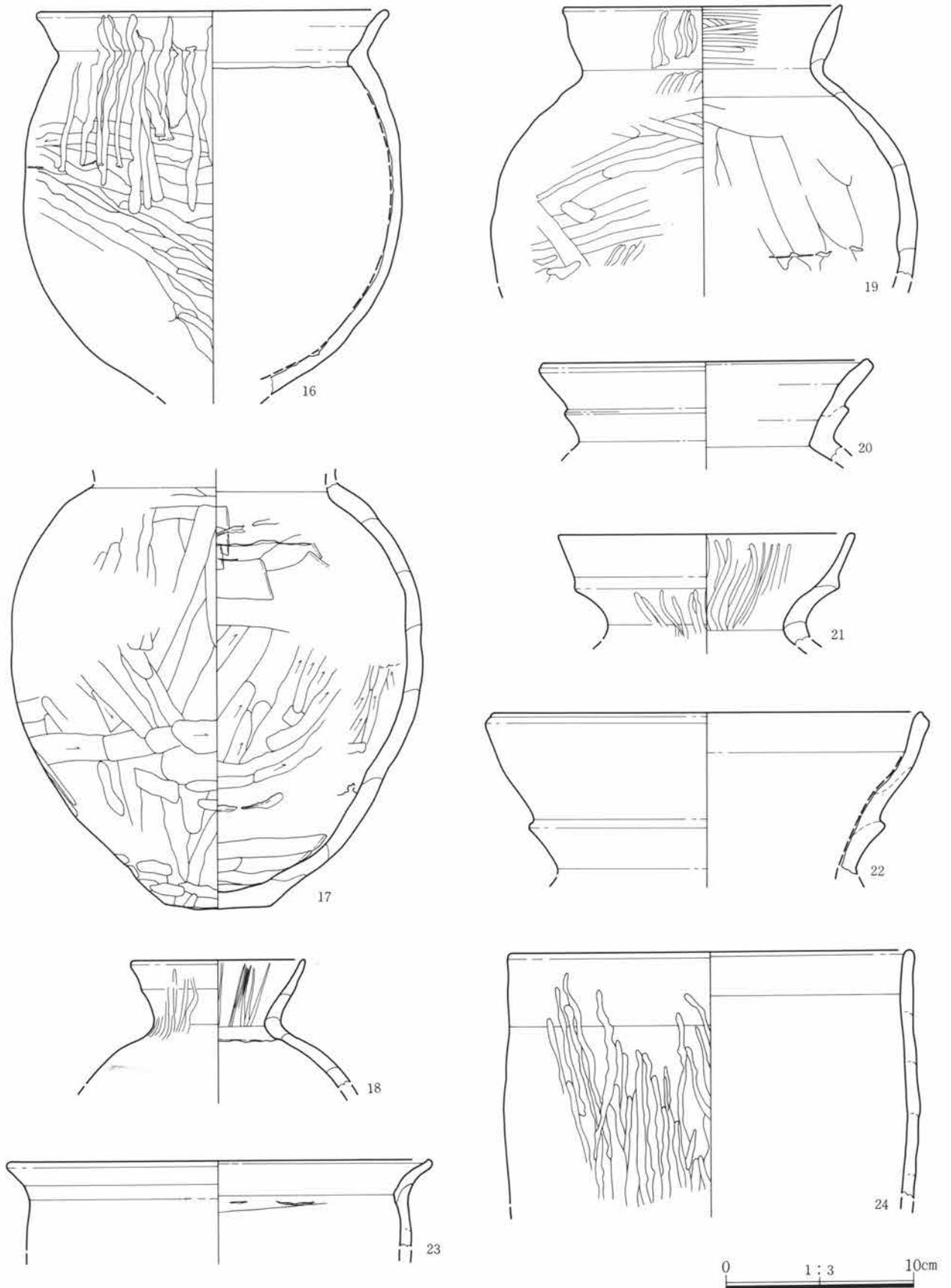
心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その心々間の距離は $P_1 \sim P_2$: 2.07m、 $P_2 \sim P_3$: 1.92m、 $P_3 \sim P_4$: 2.03m、 $P_4 \sim P_1$: 1.97mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、 P_1 : 32×40cm、 P_2 : 30×49cm、 P_3 : 23×47cm、 P_4 : 22×40cmである。

遺物 床面に密着して出土した遺物はなく、総て埋没土中からの出土であるが、実測可能な土器は坏8、高坏1、甕8、鉢1、壺4、甕2の合計24点が出土した。No.14は2区6号住居の埋没土出土の破片と接合関係にある。(遺物観察表: 22・23頁)



第58図 2区5号住居出土遺物(1)

II 調査の内容



第59図 2区5号住居出土遺物(2)

2区6号住居

位置 I-5グリッド 写真 PL-24・25

形状 長軸を東西にもつ長方形を呈する。四隅は丸く、北・東壁は外側に膨らむが西・南壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺5.10×短辺4.73mである。

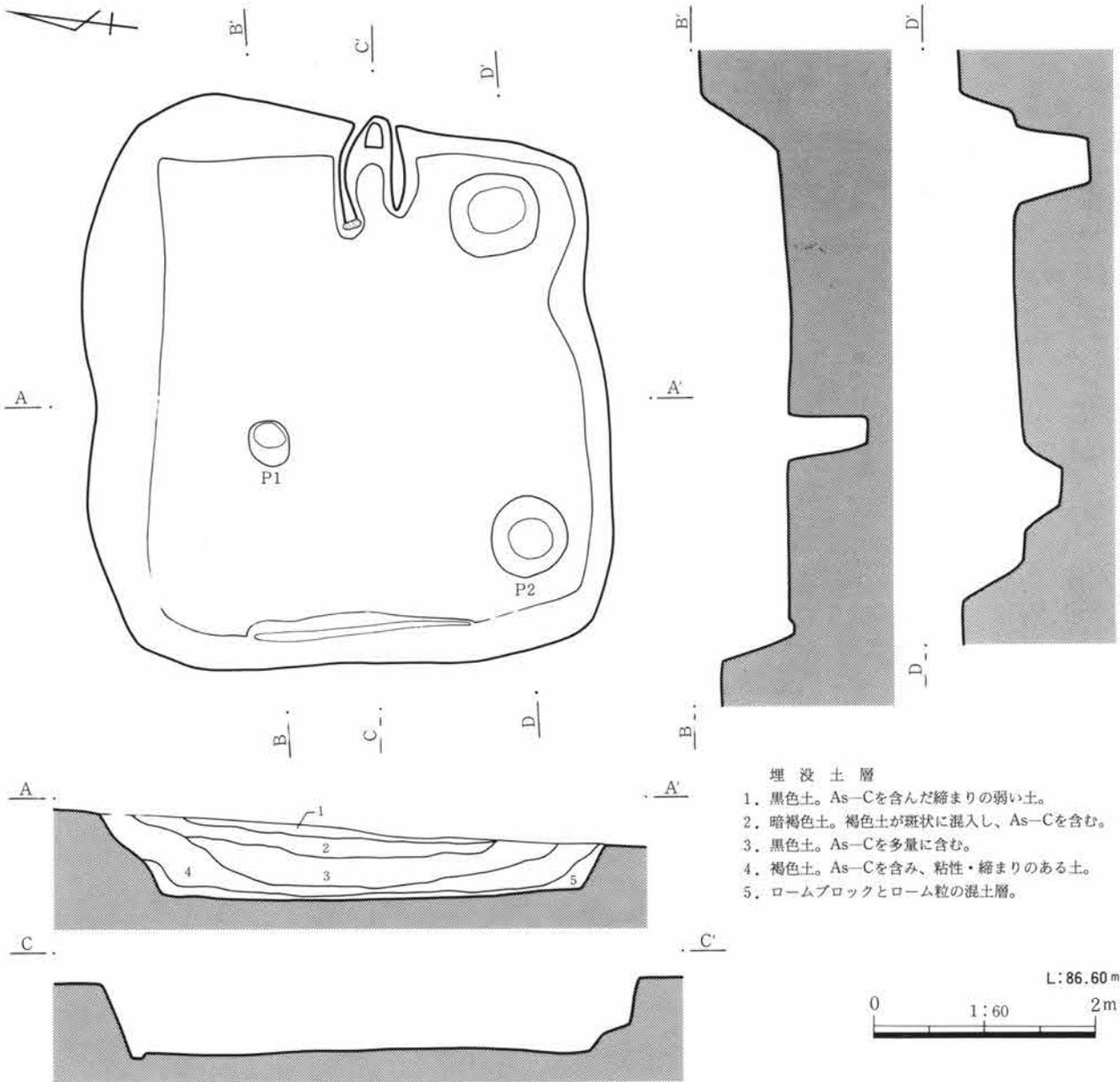
面積 20.70m² 方位 N-84°-E

床面 ローム土を41~77cm掘り込んで床面としている。全体的にかなり激しい凹凸面をもつ。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の

堅固な面となっている。

埋没土 中央部では中～上層にかけてAs-Cまじりの黒色土が堆積する。壁面および底面近くの第一次埋没土は、ロームブロックまじりの褐色土が堆積する。全体的に自然埋没の状態を示す。

竈 東壁中央部に位置し、両袖部が残存する。燃燒部は周壁よりも内側に造り付けられている。燃燒部の規模は長さ60cm、幅46cmである。煙道部は燃燒部の底面から約20cm上位の壁面中途を水平に掘り抜き、その後垂直に近い角度で立ち上がる。



第60図 2区6号住居

II 調査の内容

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長径85×短径70cmの不整形円形を呈し、深さ62cmである。

柱 穴 2本検出されているが、規模・形状・位置等の点で一定せず、支柱穴と断定できない。各柱穴の規模（径×深さ）は、P₁：37×70cm、P₂：70×27cmである。

周 溝 西壁沿いに一部検出されたのみである。幅10～18cm、深さ5cmの規模をもつ。

遺 物 床面に密着して出土した遺物は無い。実測の可能な土器は須恵器の坏蓋1点のみで、他に6点の薦編み石が出土した。（遺物観察表：23頁）

2区7号住居

位 置 J-3グリッド **写 真** PL-24・25

形 状 一辺が4.10mの正方形を呈する。四隅はほぼ直角で、周壁は若干の膨らみをもちながらも直線的に掘り込まれている。

面 積 15.57㎡ **方 位** N-58°-E

床 面 ローム土を26～48cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた

範囲は、叩き床状ほどではないが強く踏み固められている。

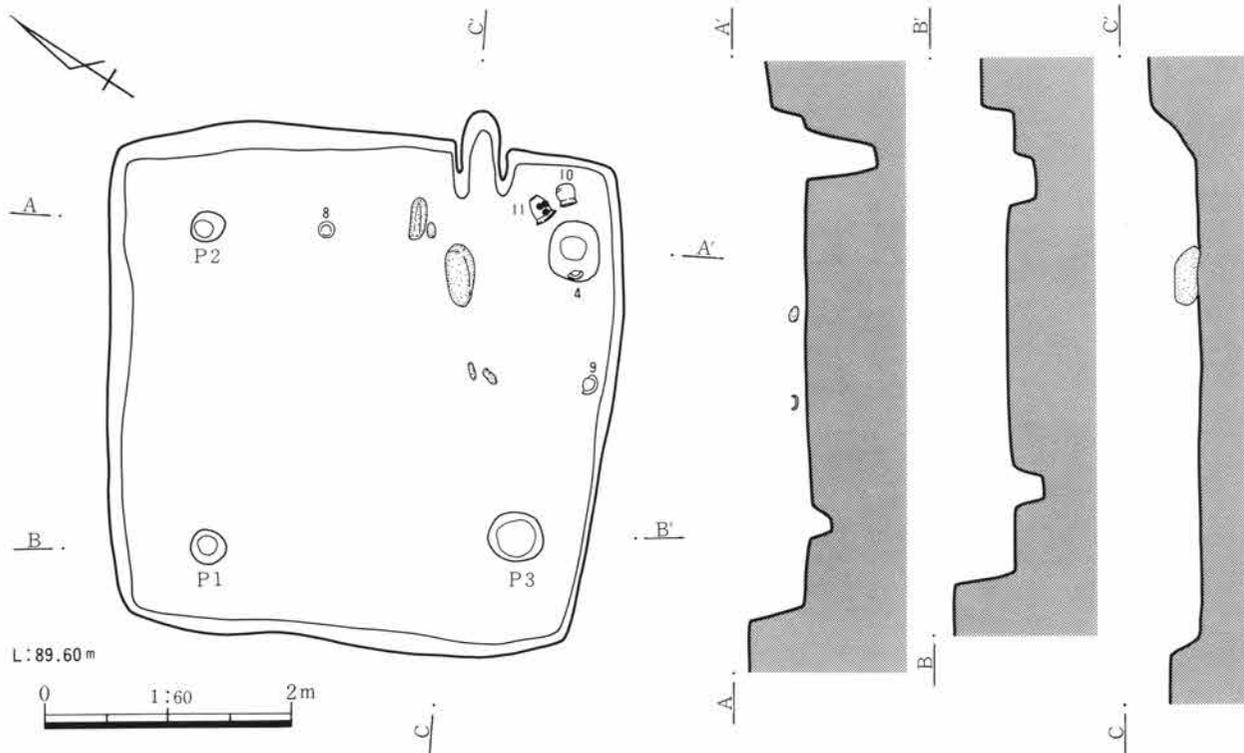
竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部の一部が残存する。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられている。燃烧部の規模は長さ50cm、幅30cmである。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長径47×短径40cmの楕円形を呈し、深さ56cmである。

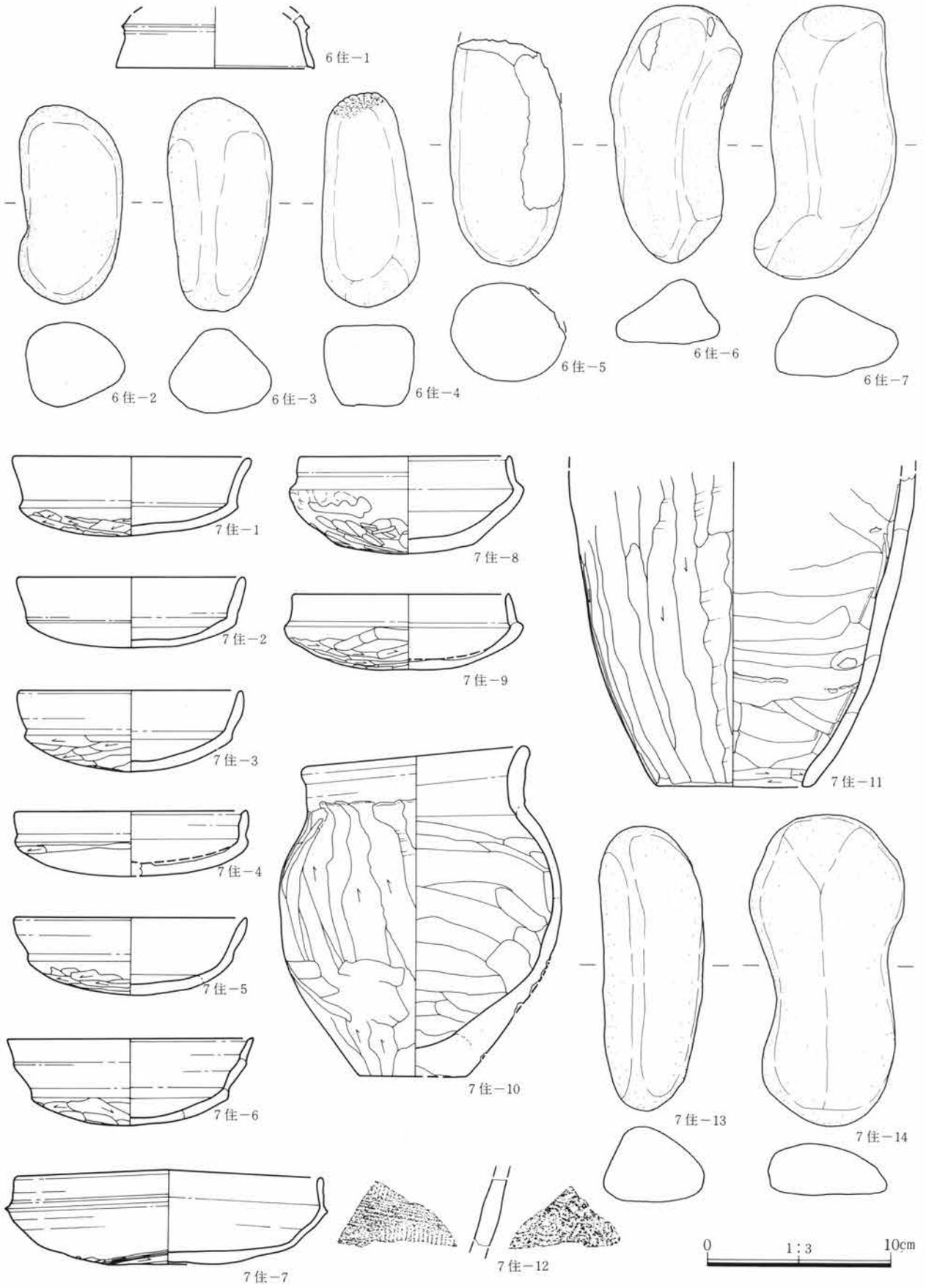
柱 穴 住居の対角線上に3本検出されたが、4本構成と思われる。他の1本については、掘り込みをもたなかったかあるいは規模の点から貯蔵穴と認定したピットが柱穴となる可能性もある。各柱穴の心々間の距離は、P₁～P₂：2.54m、P₃～P₁：2.48mである。また各柱穴の規模（径×深さ）は、P₁：27×23cm、P₂：24×15cm、P₃：40×26cmである。

遺 物 実測の可能な土器は坏8、甕1、甑1、須恵器坏1、甕1の合計12点が出土しているが、いずれも床面より4～10cm浮いて出土した。竈の焚口手前には最大径35～50cmの河床礫が2点出土しているが、竈構築材の可能性もある。また埋没土中より最大径5～7cmの薦編み石が8点出土した。

（遺物観察表：23・24頁）



第61図 2区7号住居



第62図 2区6・7号住居出土遺物

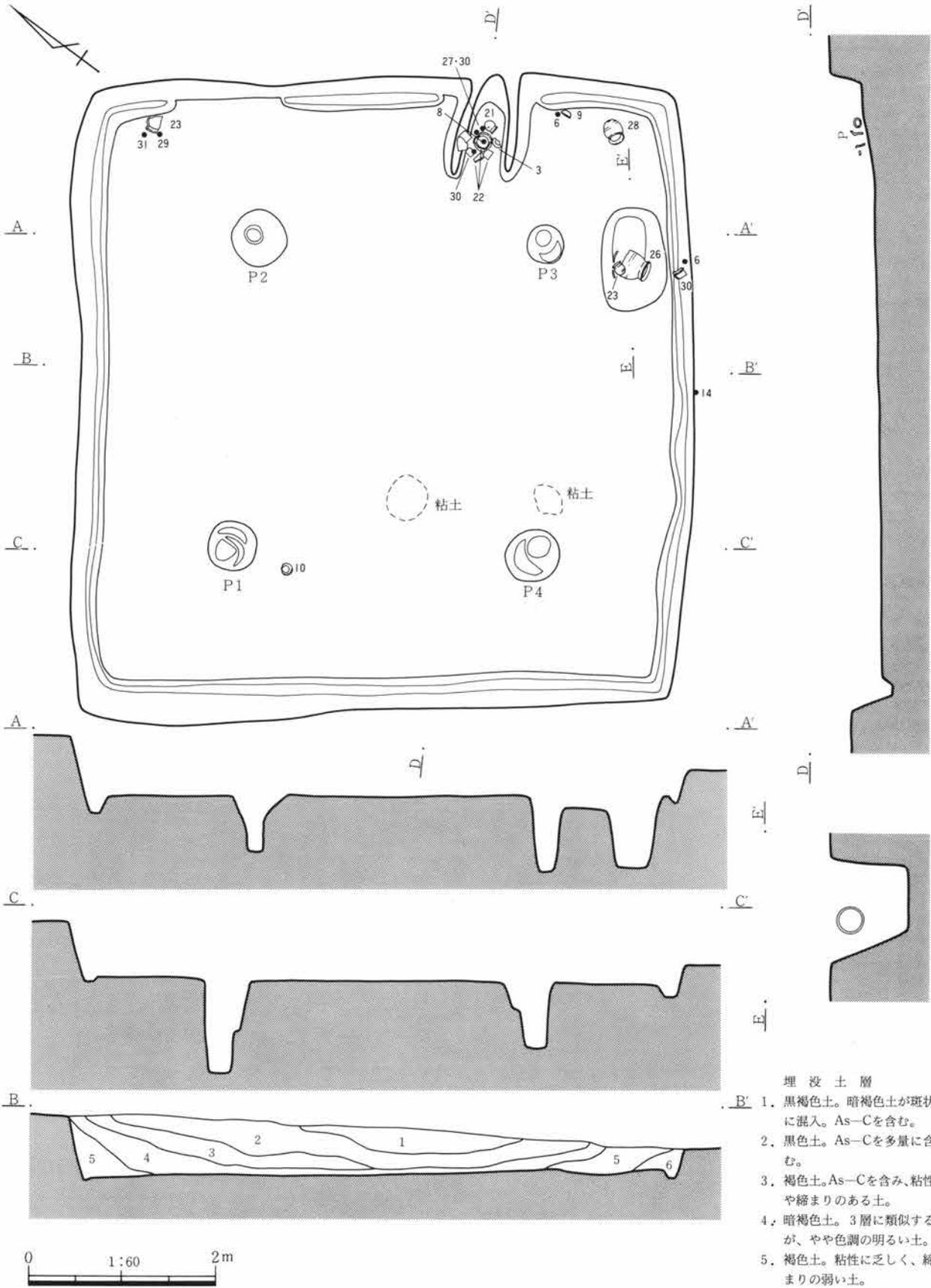
II 調査の内容

2区8号住居

位置 K-4グリッド **写真** PL-24・26
形状 一辺が6.6mの正方形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。
面積 42.93㎡ **方位** N-53°-E
床面 ローム土を21~65cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもち、東から西側へと比高差約10cmの傾斜が認められる。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。
埋没土 上層にはAs-Cまじりの黒色土が、壁際や底面の第1次埋没土にはロームブロックまじりの褐色土がレンズ状に堆積する。自然埋没の状態を示す。
竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられている。燃焼部の規模は長さ82cm、幅44cmである。煙道部の規模は不明であるが、燃焼部より約80°の急な角度で立ち上る。燃焼部内より坏1 (No.3・8)、甕4 (No.21・22・27・30)、の合計6点の土器が出土した。
貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長軸108×短軸70cmの隅丸方形を呈し、深さ80cmである。底面より47cm浮いた位置に、No.26の甕が横転した状態で出土した。
柱穴 住居の対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その距離は $P_1 \sim P_2 : 3.36\text{m}$ 、 $P_2 \sim P_3 : 3.14\text{m}$ 、 $P_3 \sim P_4 : 3.28\text{m}$ 、 $P_4 \sim P_1 : 3.37\text{m}$ である。また各柱穴の規模(径×深さ)は、 $P_1 : 50 \times 76\text{cm}$ 、 $P_2 : 57 \times 59\text{cm}$ 、 $P_3 : 41 \times 80\text{cm}$ 、 $P_4 : 56 \times 68\text{cm}$ である。
周溝 幅16~48cm、深さ5~12cmで壁面に沿ってほぼ全周する。
遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏12、高坏4、小型甕1、甕10、甗1、埴1、小型粗製土器2の合計31点である。床面に密着して出土した土器は少なく、No.6・10・28のみである。近くには床面に密着して、直径約20cmの粘土塊が2点出土した。(遺物観察表：24~26頁)

2区10号住居

位置 M-4グリッド **写真** PL-27・28
形状 長軸を東西にもつ長方形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺5.9×短辺3.9mである。
面積 20.72㎡ **方位** N-61°-E
床面 ローム土を28~51cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもち、東から西側へと比高差約10cmの傾斜が認められる。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。
埋没土 上層にはAs-Cまじりの黒褐色土が、下層にはロームブロックまじりの暗褐色土がレンズ状に堆積する。自然埋没の状態を示す。
竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられている。燃焼部の規模は長さ77cm、幅33cmである。煙道部は幅27cm、長さ34cmの掘り方のみ残存する。壁面の中段より水平に延びた後に、垂直に近い角度で立ち上る。燃焼部内より坏5 (No.3・6・8・9・15)、甕3 (No.20・21・24)、鉢1 (No.23)の合計9点の土器が出土した。No.24の甕は、河床礫を利用した支脚の上に乗って正位の状態出土した。
貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長軸68×短軸63cmの隅丸方形を呈し、深さ41cmである。開口部付近には、No.28の甗が横転した状態で出土した。
柱穴 床面の中央部に1本検出されたのみで、その規模(径×深さ)は30×46cmである。
周溝 幅14~26cm、深さ2~3cmの規模で壁面に沿ってほぼ全周する。
遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏15、高坏2、鉢1、甕9、甗2の合計29点である。竈や貯蔵穴の周辺に集中した出土が認められるが、南西隅にも3個体が集中して出土している。No.1・5・13が床面に密着していた他は、すべて3~10cm浮いた状態で出土した。No.29は2区9号住居の埋没土出土の破片と接合関係にある。(遺物観察表：26~28頁)

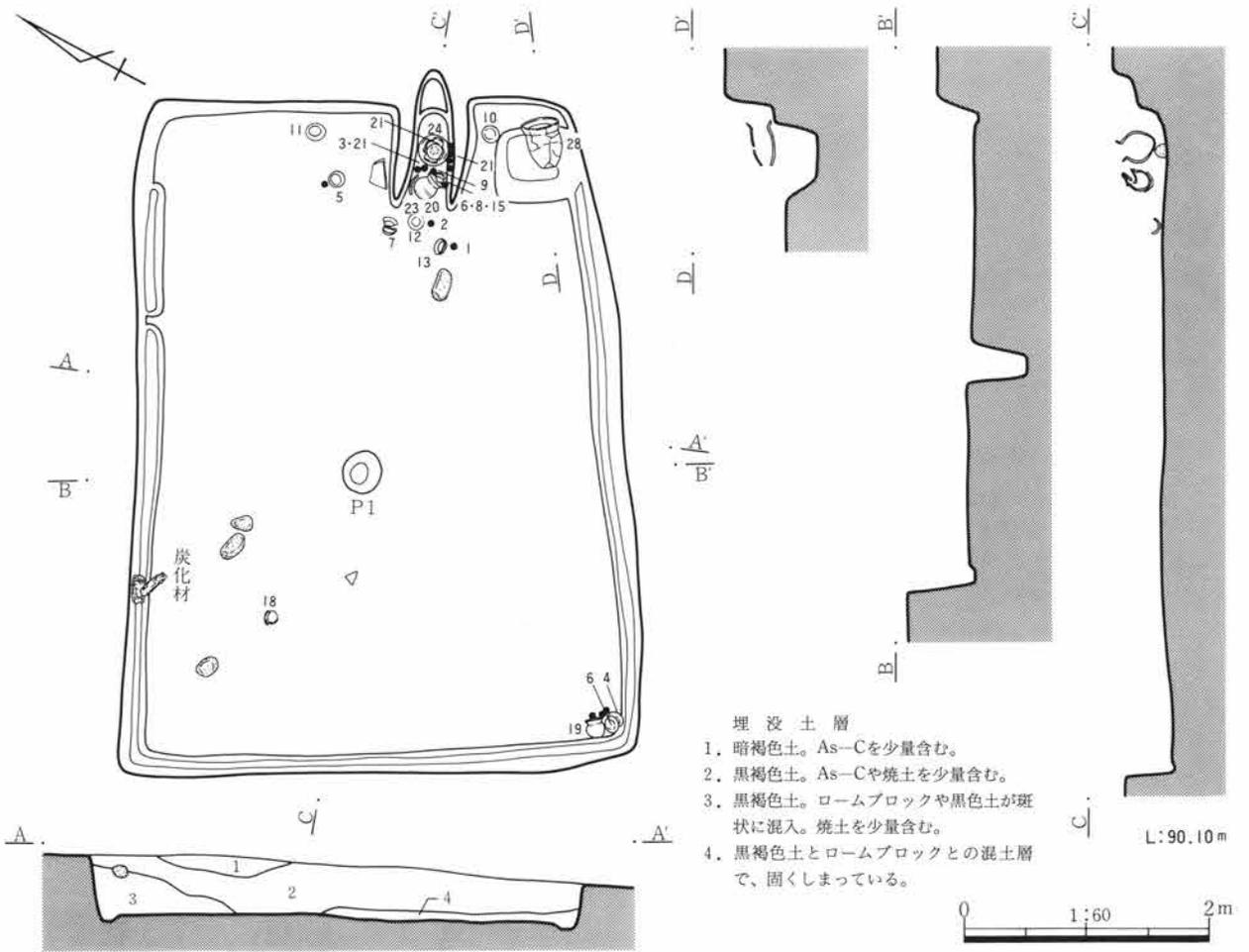


埋没土層

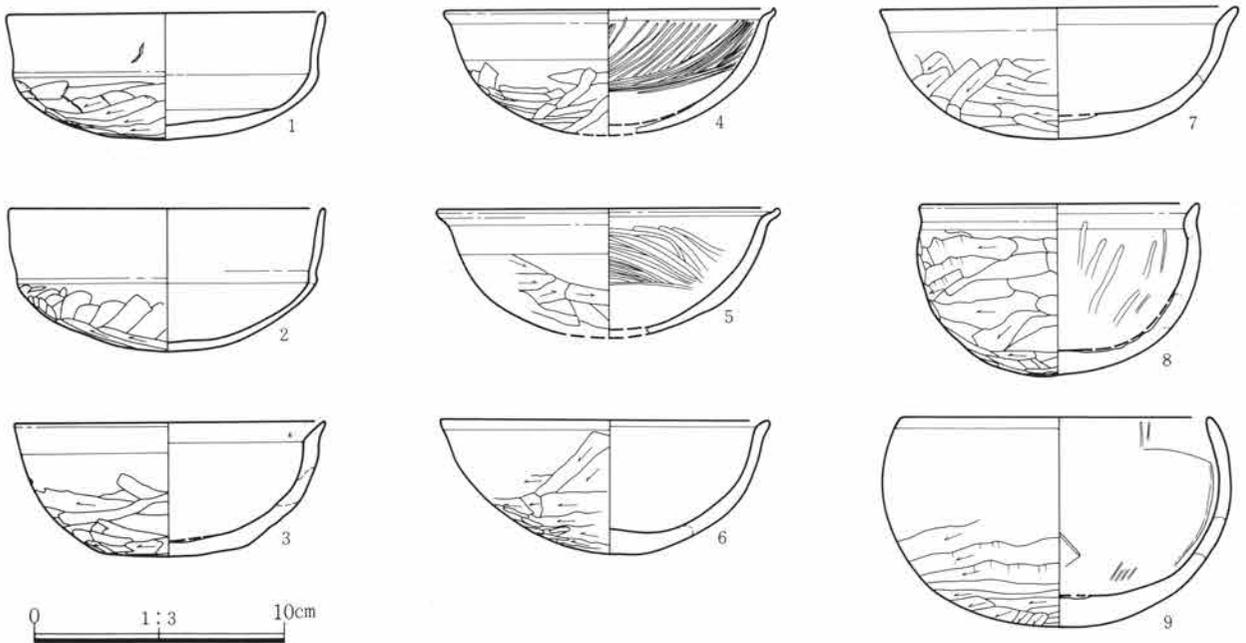
- B' 1. 黒褐色土。暗褐色土が斑状に混入。As-Cを含む。
- 2. 黒色土。As-Cを多量に含む。
- 3. 褐色土。As-Cを含み、粘性や縮まりのある土。
- 4. 暗褐色土。3層に類似するが、やや色調の明るい土。
- 5. 褐色土。粘性に乏しく、縮まりの弱い土。
- 6. 黒色土とロームブロックとの混土層。

第63図 2区8号住居

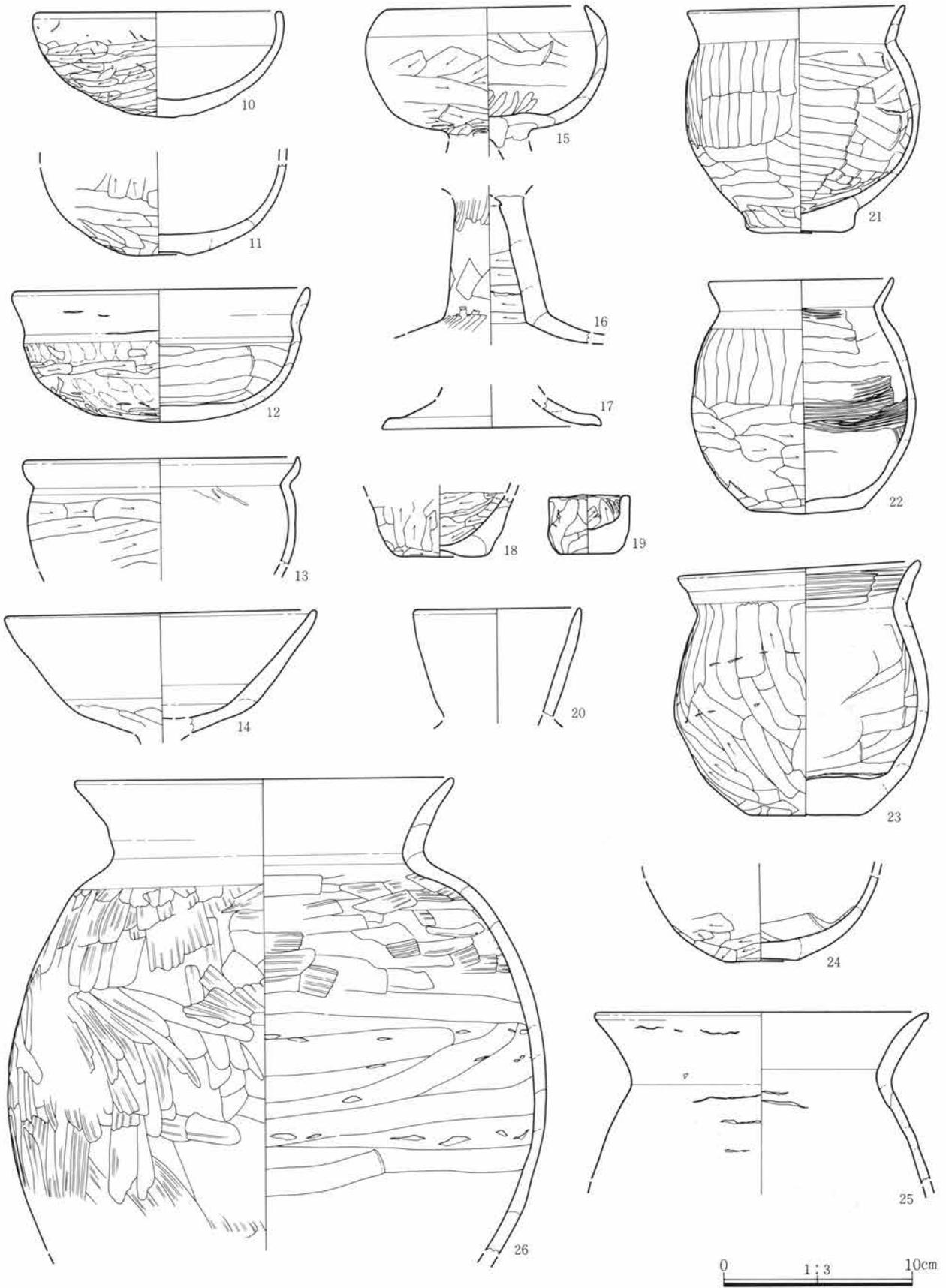
II 調査の内容



第64図 2区10号住居

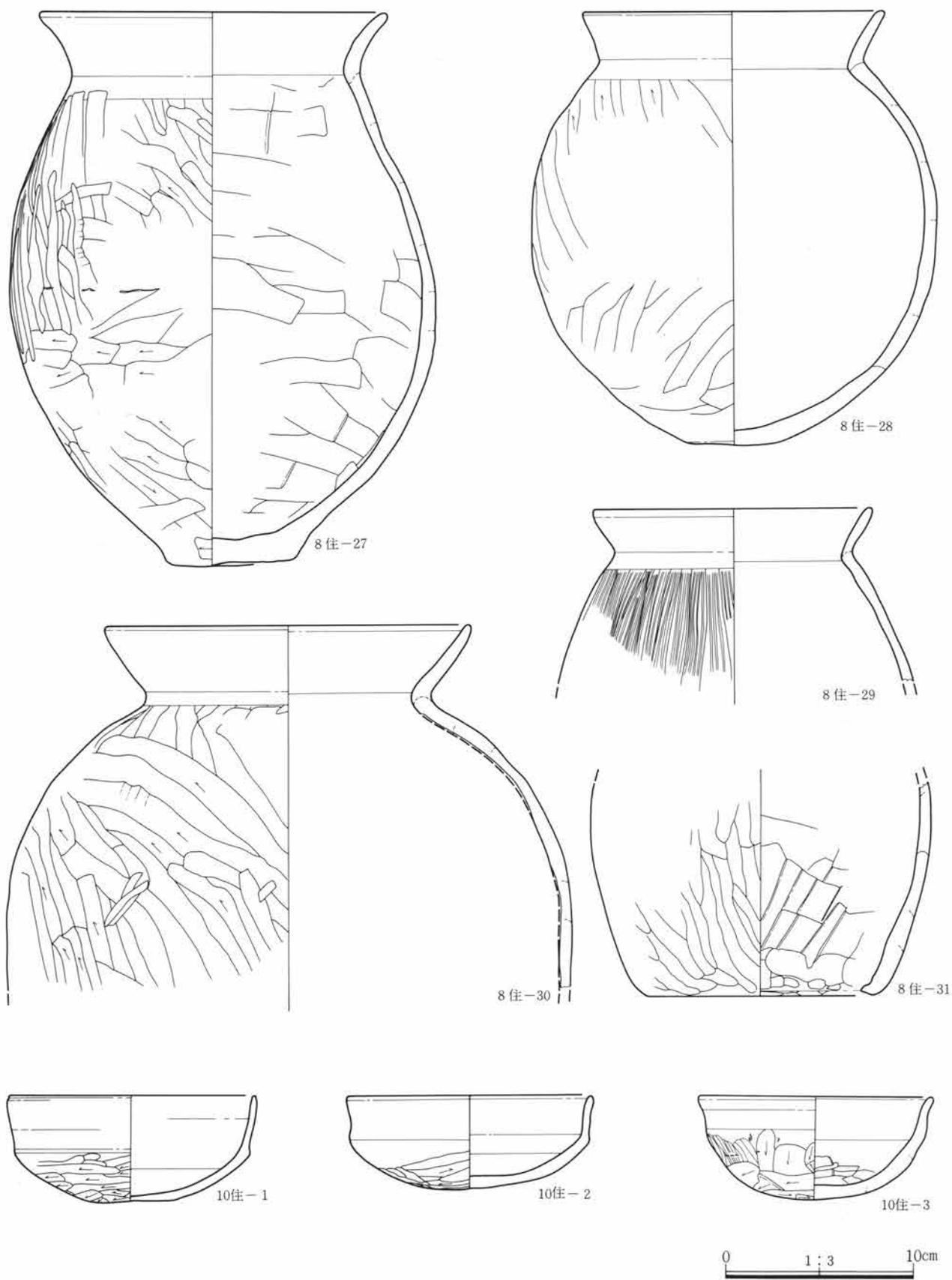


第65図 2区8号住居出土遺物(1)

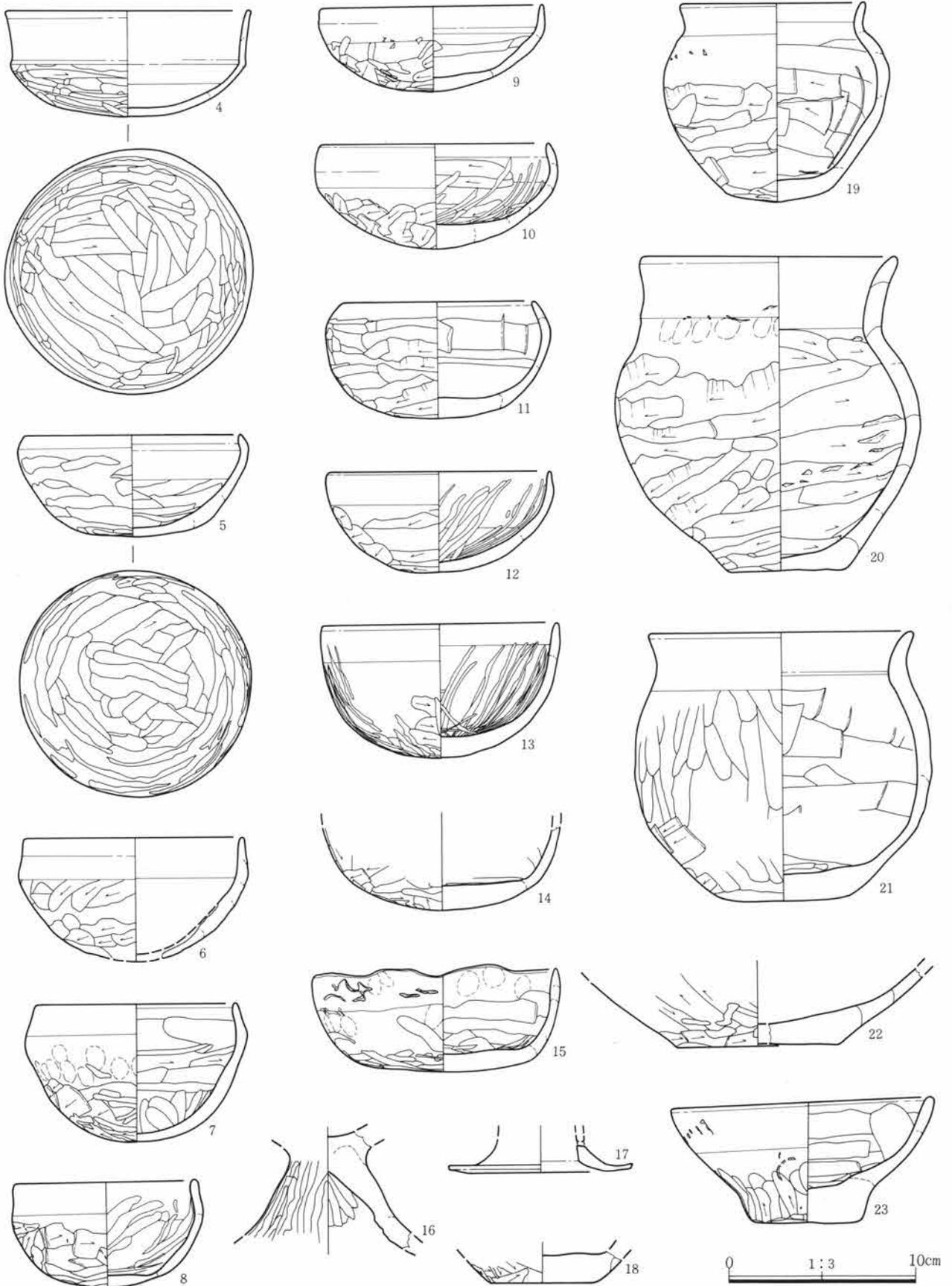


第66図 2区8号住居出土遺物(2)

II 調査の内容

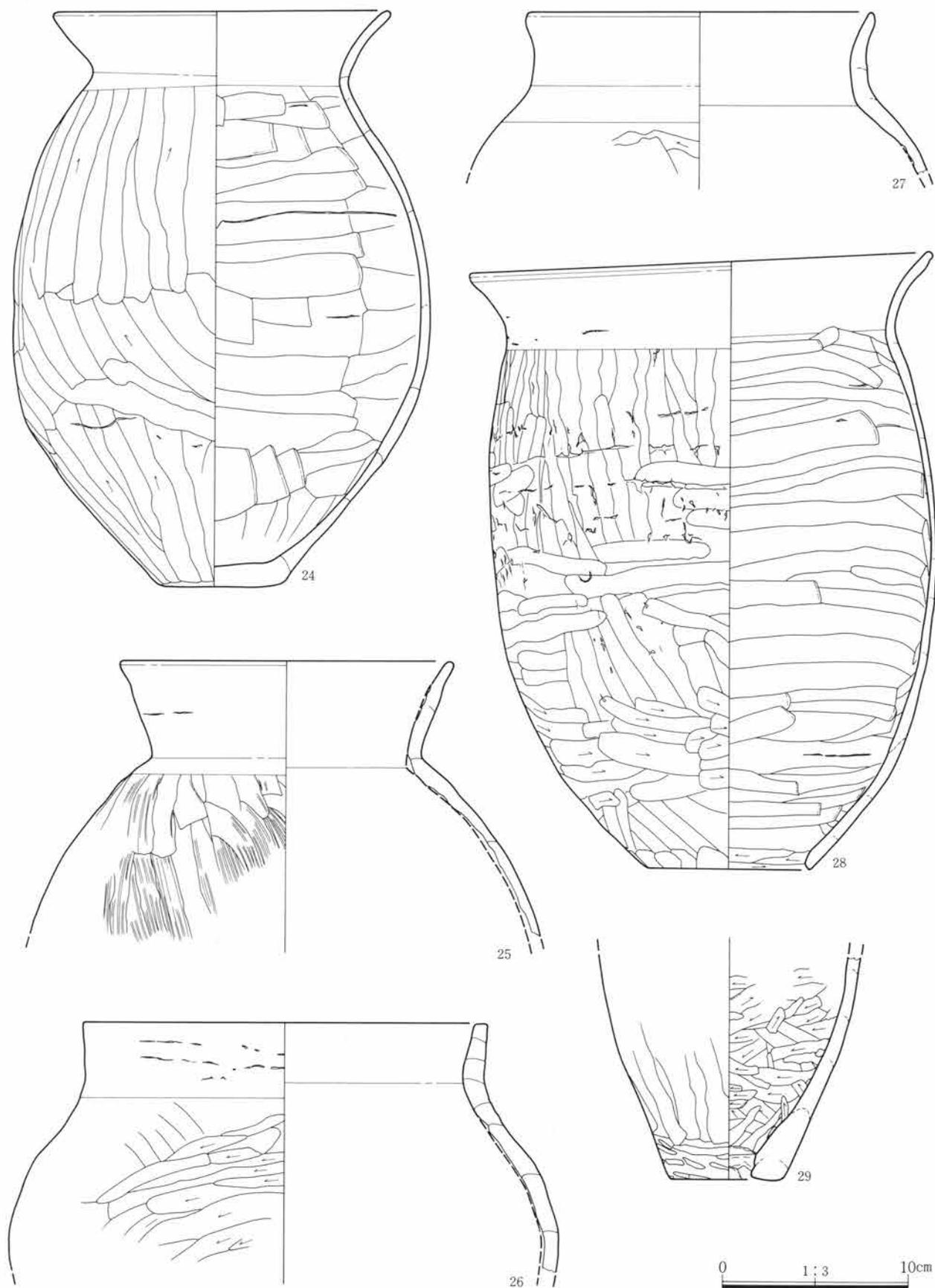


第67図 2区8・10号住居出土遺物



第68図 2区10号住居出土遺物(1)

II 調査の内容



第69図 2区10号住居出土遺物(2)

2区11号住居

位置 N-4グリッド **写真** PL-27・28
形状 後世の攪乱により西壁側の掘り込みが不明であるが、一辺が5.20mの正方形を呈すると思われる。四隅は丸く、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。
面積 (26.90㎡) **方位** N-79°-E
床面 ローム土を7~17cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもち、北から南側へと比高差約16cmの傾斜が認められる。貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。
炉 床面中央からやや西よりに位置する。床面を12cmほどの深さに掘りくぼめた掘り込み炉で、長径77×短径60cmの楕円形を呈する。底面は火熱により焼土化している。

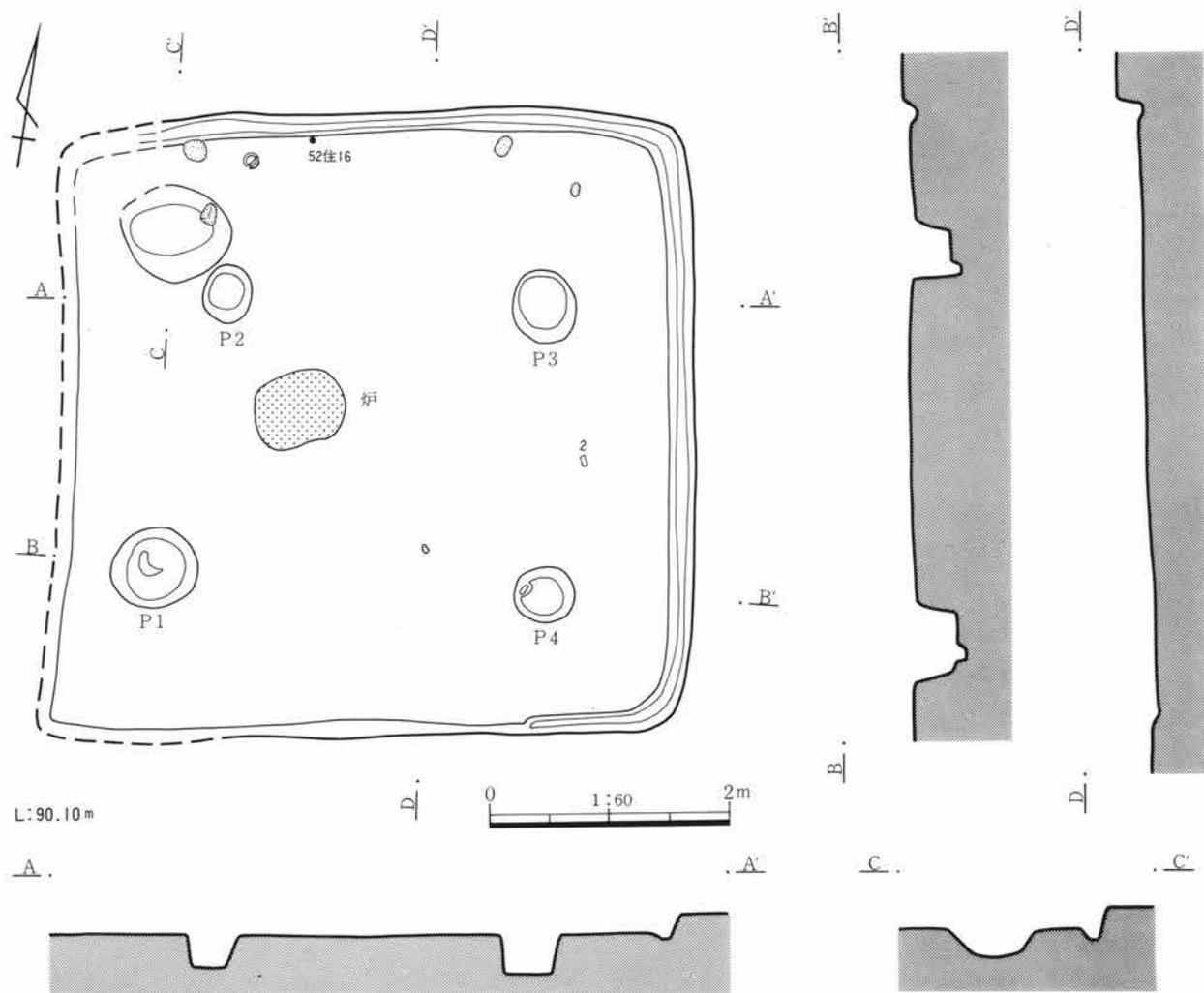
貯蔵穴 北西隅に位置する。長径92×短径78cmの楕円形を呈し、深さ22cmである。

柱穴 4本検出されたが、P₃を除いて住居の対角線上に位置する。各柱穴の心々間を結んだ形状は台形状を呈し、その規模はP₁~P₂:2.37m、P₂~P₃:2.64m、P₃~P₄:2.41m、P₄~P₁:3.28mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:70×43cm、P₂:40×28cm、P₃:53×32cm、P₄:48×30cmである。

周溝 南壁を除いた各壁面に沿って巡る。規模は幅13~26cm、深さ3~10cmである。

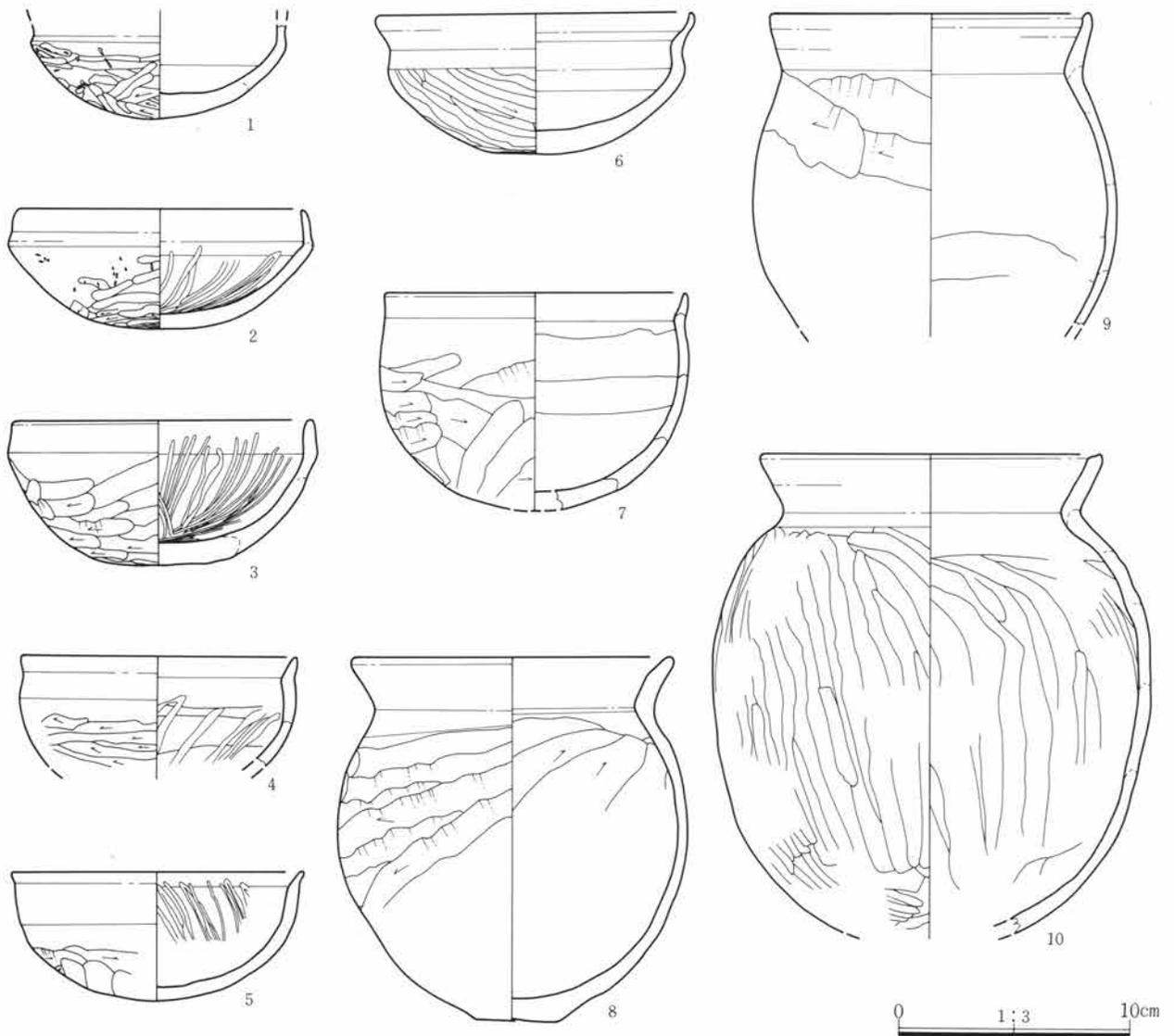
遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏7、甕3の合計10点である。No.2の土器は床面に密着して、他は埋没土中より出土した。

(遺物観察表:28頁)



第70図 2区11号住居

II 調査の内容



第71図 2区11号住居出土遺物

2区12号住居

位置 N-7グリッド 写真 PL-29~31

形状 長軸を東西にもつ長方形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺4.66×短辺4.20mである。

面積 18.14m² 方位 N-57°-E

床面 ローム土を52~58cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

埋没土 上層にはAs-Cまじりの黒褐色土が、下層にはロームブロックまじりの褐色土が堆積する。自然埋

没の状態を示す。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられている。燃烧部の規模は長さ90cm、幅46cmである。煙道部は幅42cm、長さ70cmの掘り方のみ残存し、燃烧部より約50°の緩やかな角度で立ち上がる。両袖部の先端に直径20cmの輝石安山岩を補強材として使用している。燃烧部内よりNo11の壺が出土した。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長軸94×短軸76cmの隅丸方形を呈し、深さ47cmである。

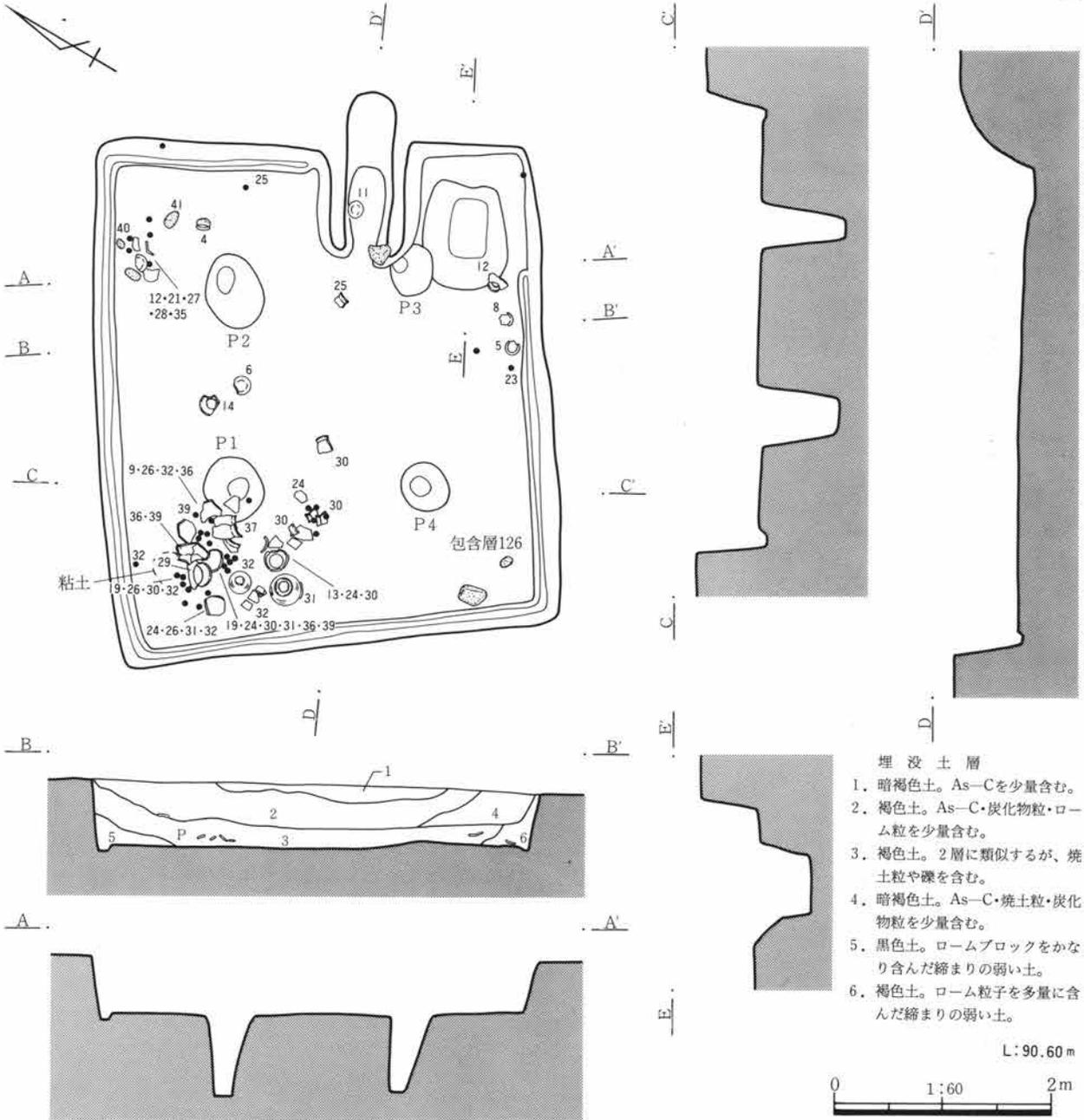
柱穴 住居の対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ距離は、P₁~P₂:1.92m、P₂~P₃:1.

62m、P₃~P₄:2.04m、P₄~P₁:1.70mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:58×75cm、P₂:55×77cm、P₃:37×69cm、P₄:43×77cmである。

周溝 貯蔵穴周辺を除いた壁面に沿ってほぼ全周する。規模は幅15~26cm、深さ3~8cmである。

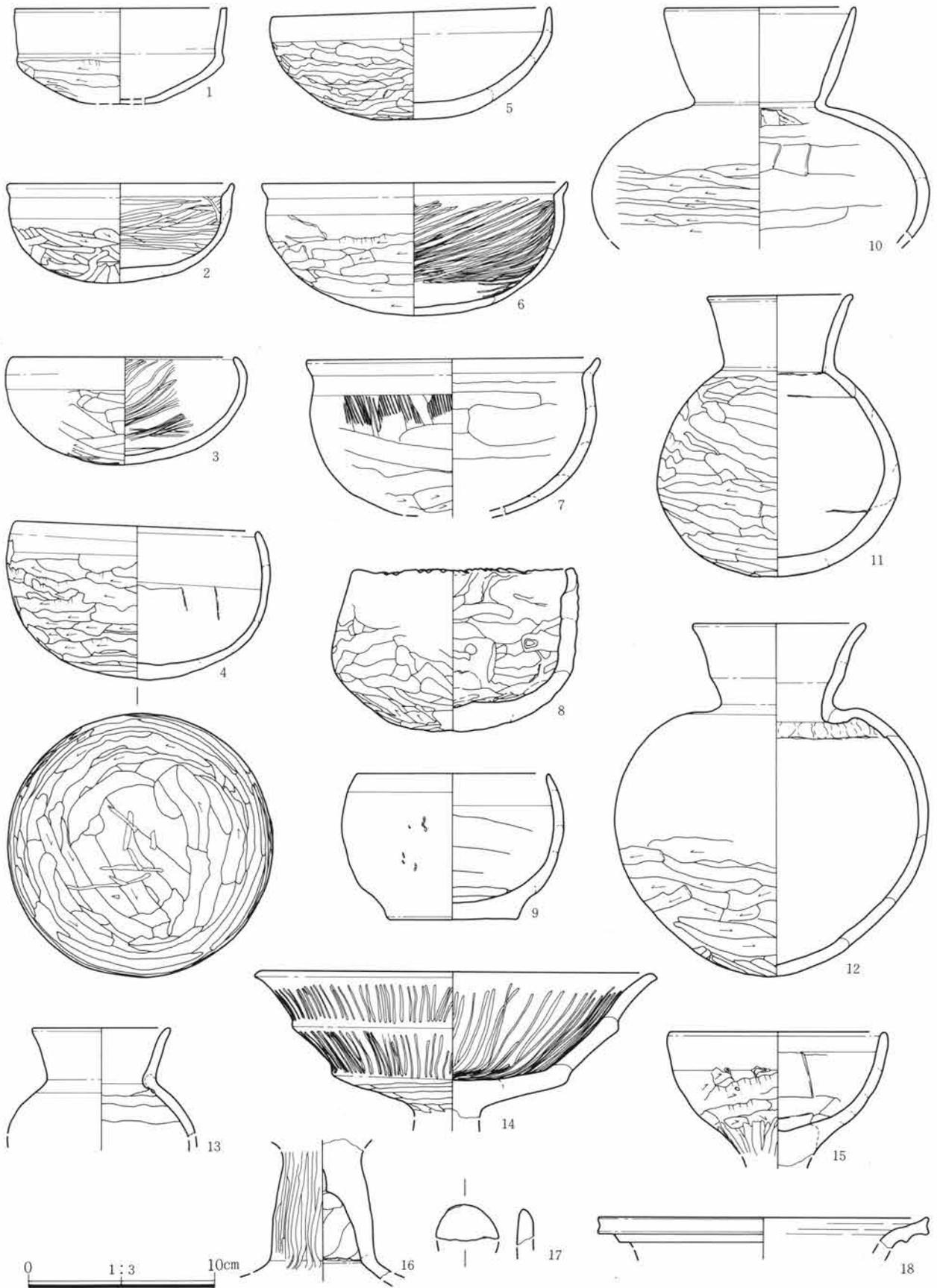
遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏8、高坏3、鉢2、甕15、甗3、壺5、円形土板1、須恵器の高坏1、甕1の合計39点であり、比較的北西隅に集中して出土した。土器のうちNo.5・6・

8・9・12・13・19・24・25・26・30・31・32・36・37・39は床面に密着して、他は3~29cm浮いて出土した。No.3は2区8号住居、No.25・37は同15号住居、No.19は同15・27号住居、No.23は同7号住居の埋没土出土の破片とそれぞれ接合関係にある。P₂の北側より、薦編み石1点が床面から24cm浮いて出土し、南西隅より弥生時代の太型蛤刃石斧1点(242頁No.126)が床面に密着して出土した。また北西隅には床面より10cm浮いて、直径40cmの粘土塊が出土した。(遺物観察表:28~31頁)

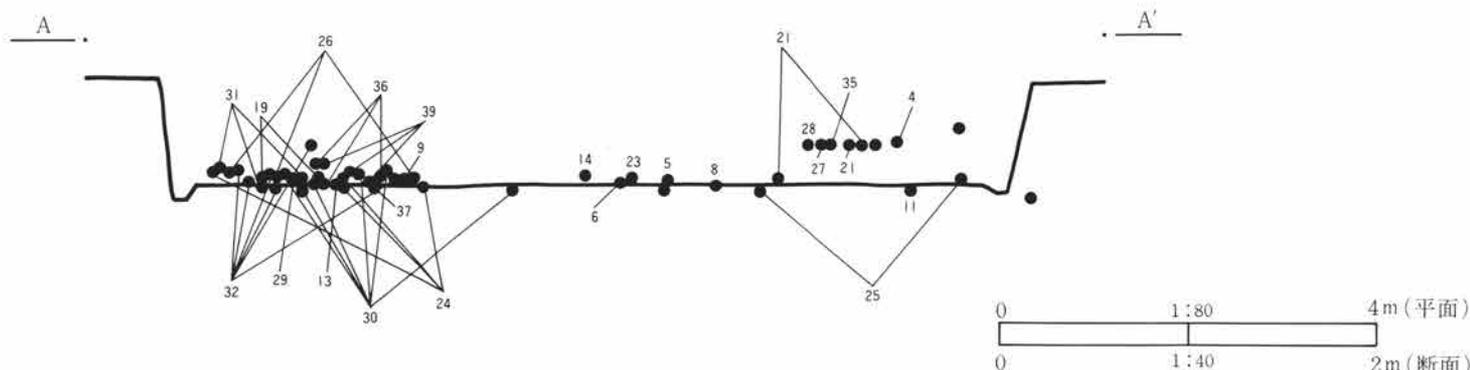
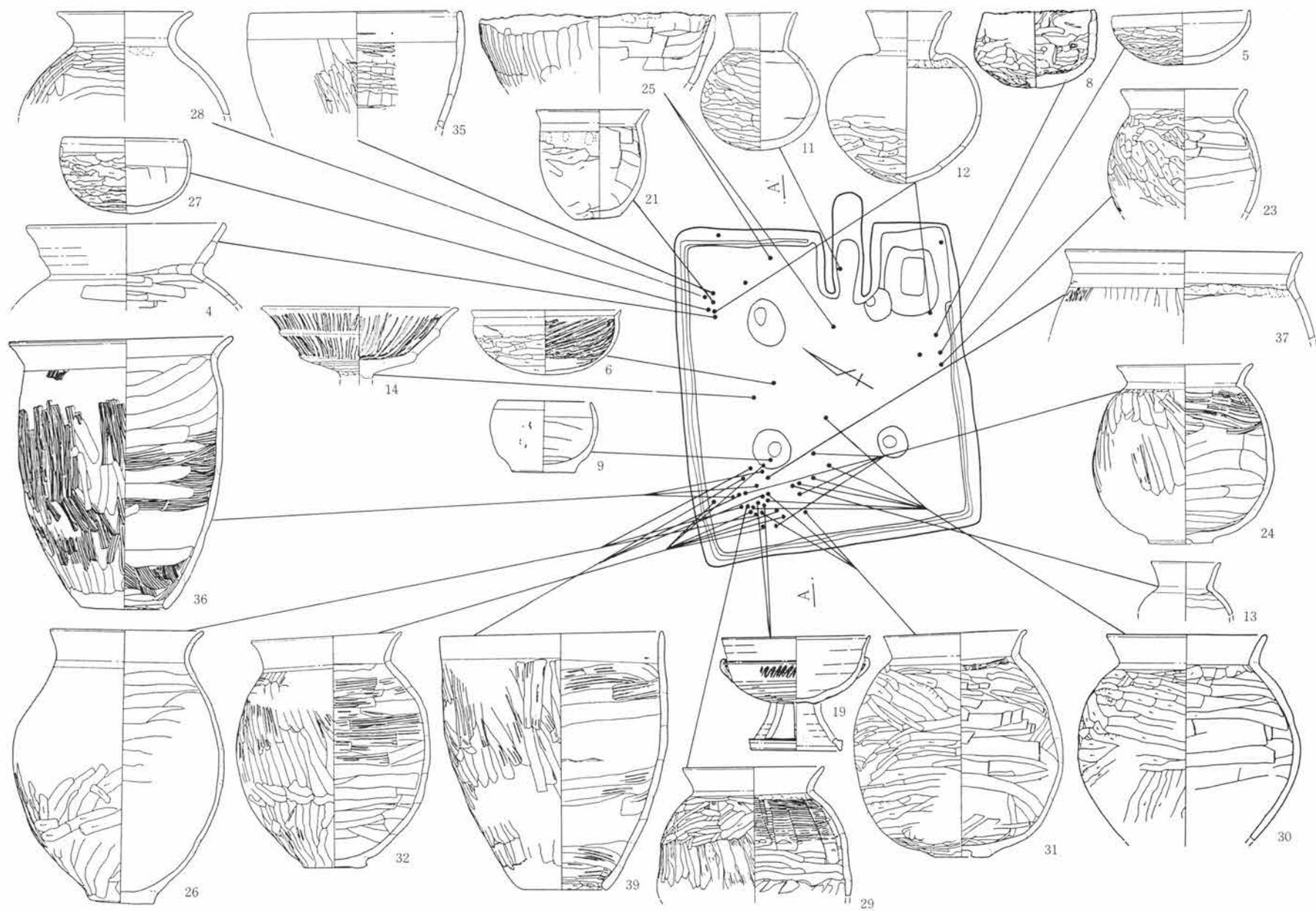


第72図 2区12号住居

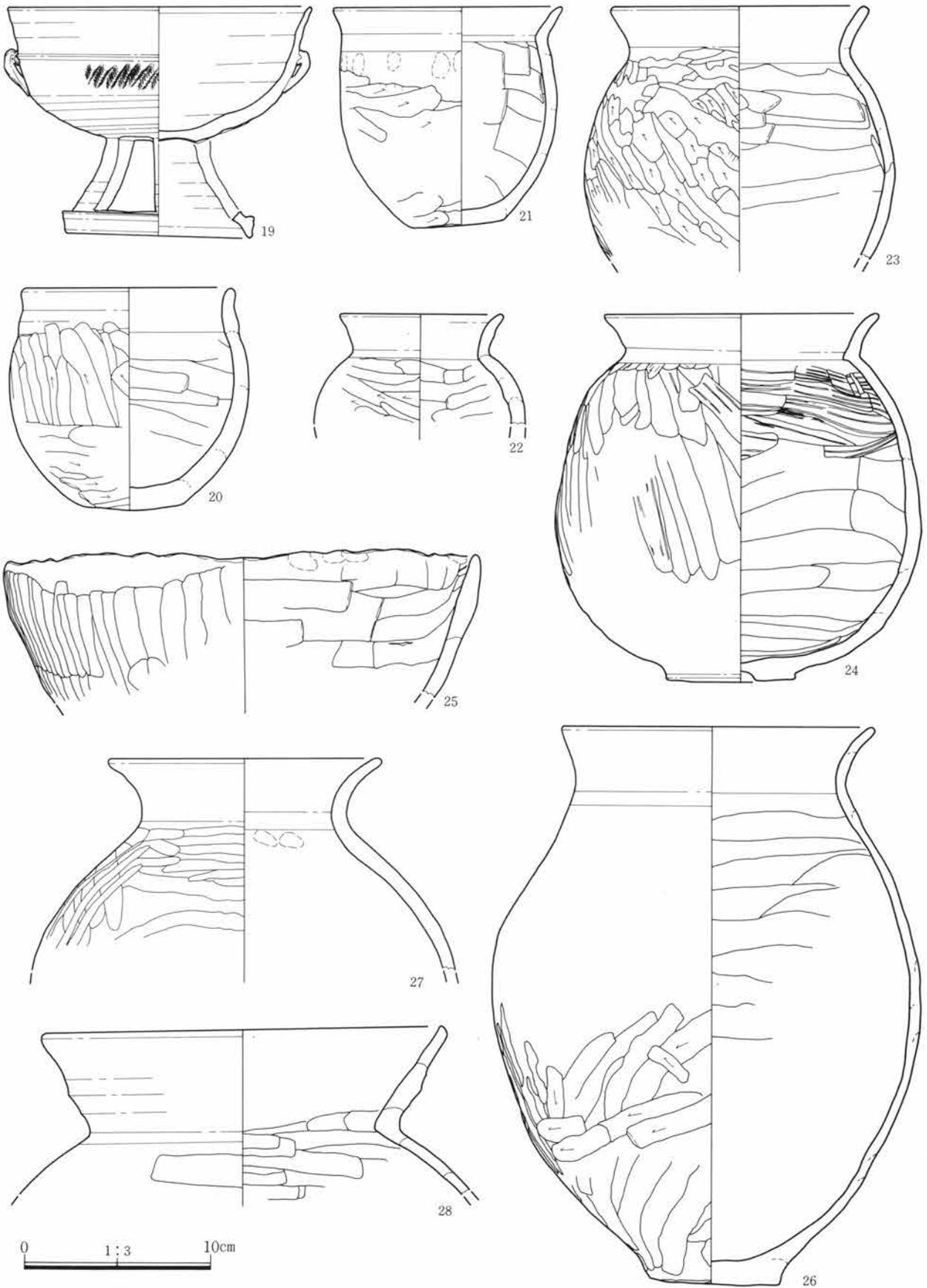
II 調査の内容



第73図 2区12号住居出土遺物(1)

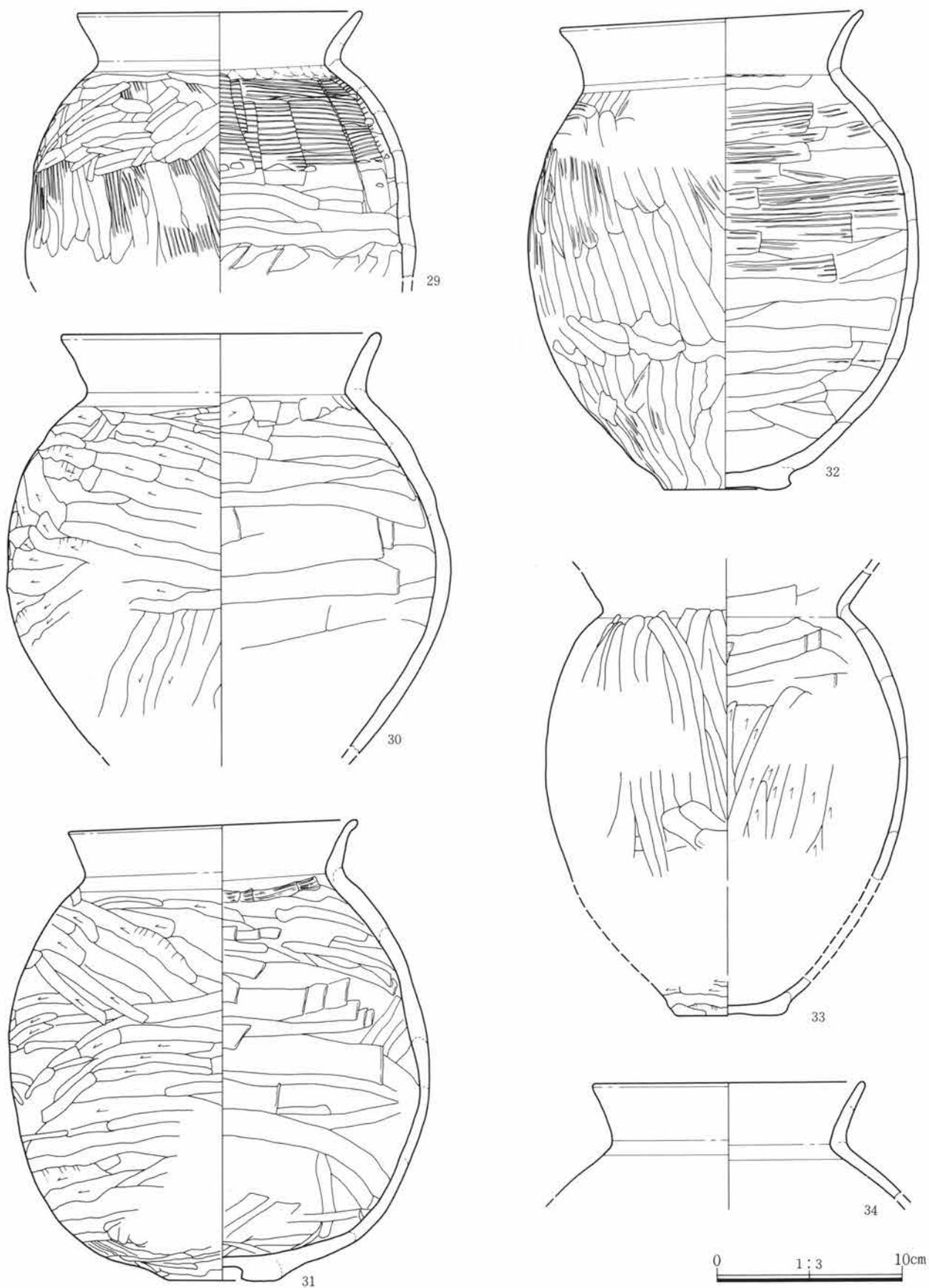


第74図 2区12号住居の遺物出土状況

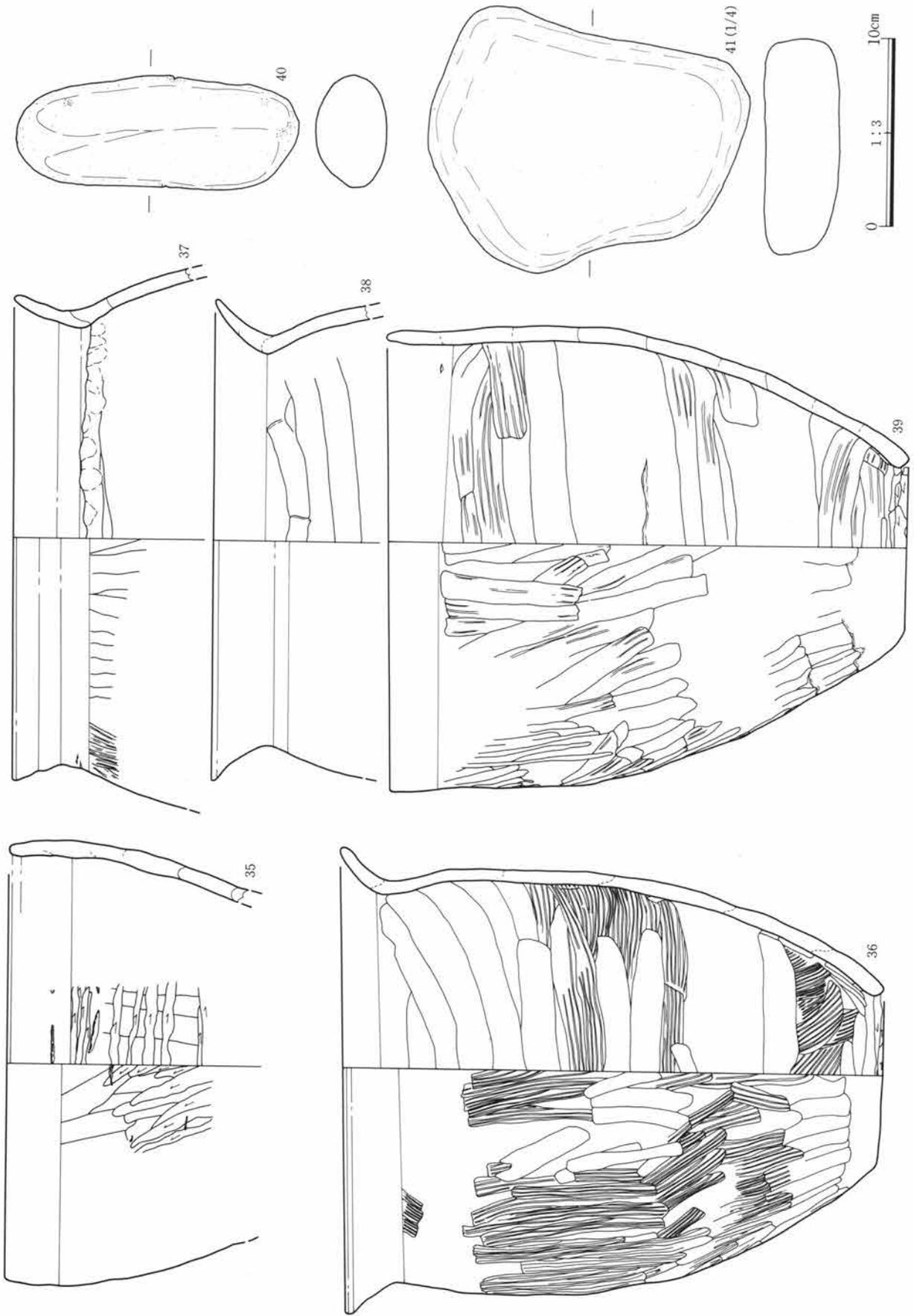


第75図 2区12号住居出土遺物(2)

II 調査の内容



第76図 2区12号住居出土遺物(3)



第77図 2区12号住居出土遺物(4)

II 調査の内容

2区14号住居

位置 M-6グリッド 写真 PL-34

重複 15号住居等は1号溝に先行する。

形状 長軸を南北にもつ長方形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺6.8×短辺5.0mである。

面積 (32.60m²) 方位 N-67°-E

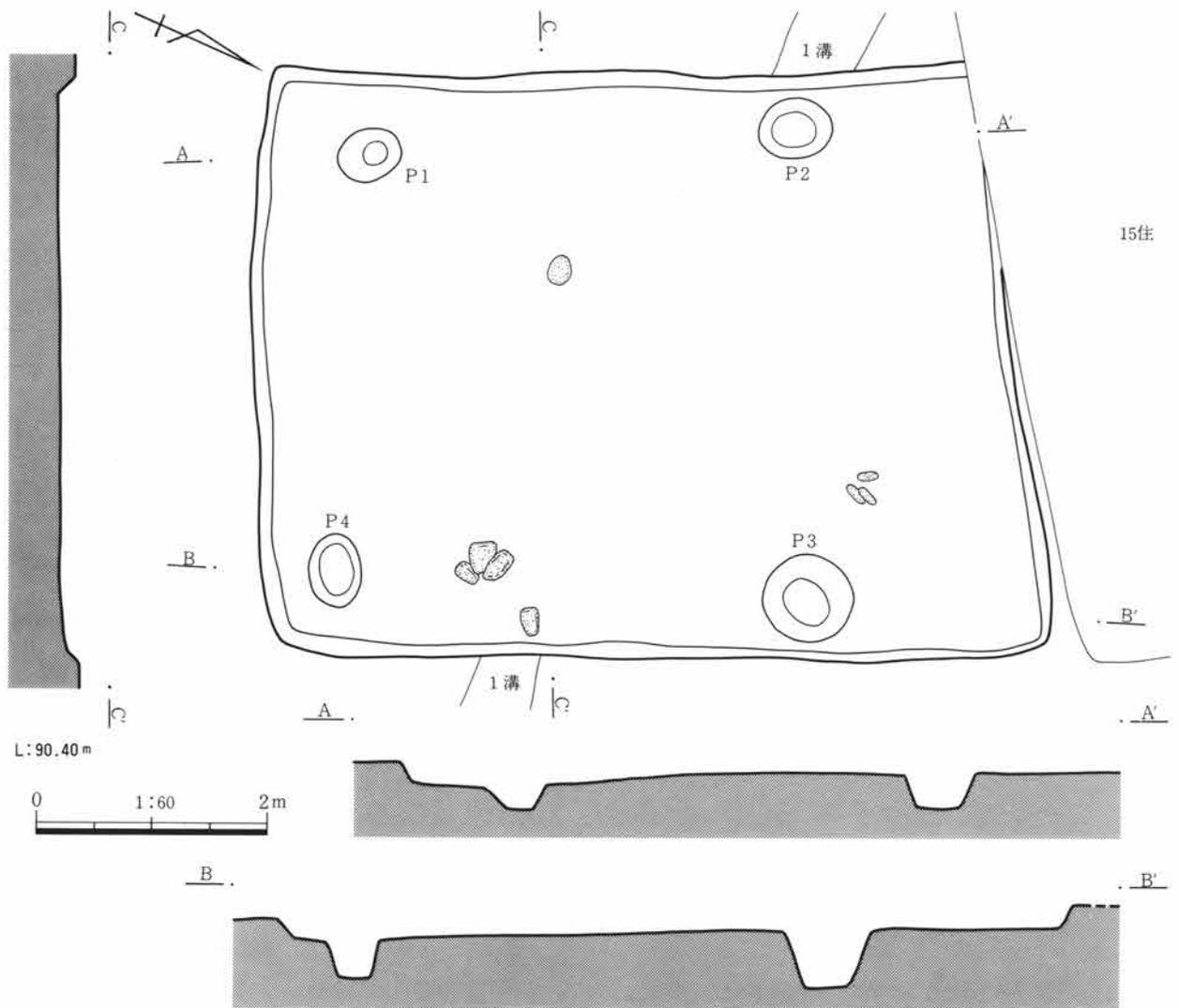
床面 ローム土を11~21cm掘り込んで床面としている。凹凸面は少ないが、北から南に向かって比高差約10cmの傾斜が認められる。支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

炉 床面上には火熱を受けた痕跡は見当たらず、炉の位置を特定することはできなかった。

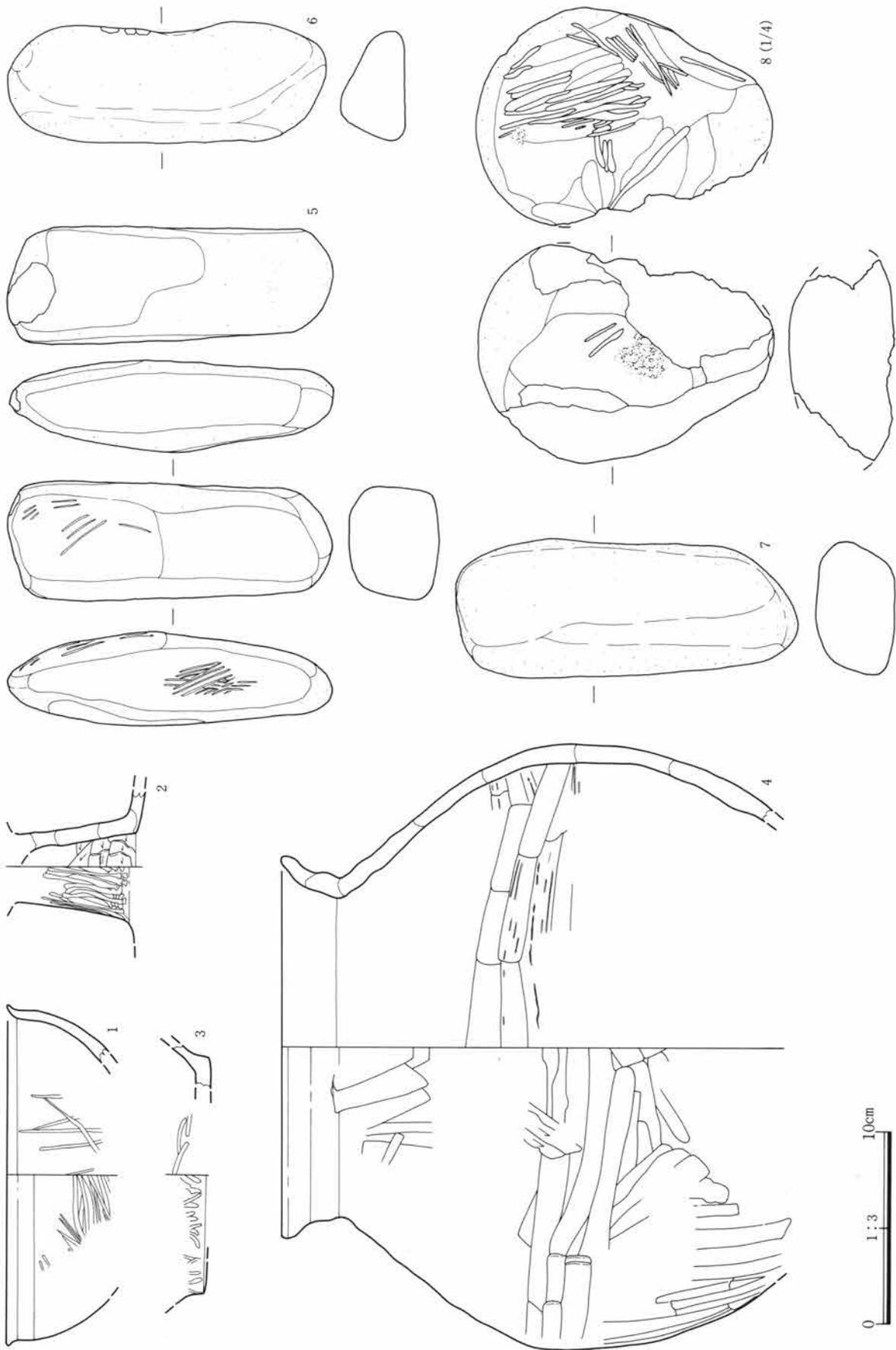
柱穴 4本の柱穴が検出されたが、P₂・P₃を除いた

他の2本は住居の対角線上に位置する。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形よりも長軸比の短い長方形を呈し、その心々間の距離はP₁~P₂:3.60m、P₂~P₃:4.0m、P₃~P₄:4.05m、P₄~P₁:3.57mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:44×20cm、P₂:52×30cm、P₃:75×48cm、P₄:45×30cmである。

遺物 床面に密着して出土した遺物はなく、総て埋没土中より出土した。土器は甕、高坏などの小破片が出土したのみである。P₃やP₄の柱穴の近くより、直径20cm前後の河床礫を使用した薦編み石3点と、線条痕をもつ砥石1点(No.8)が床面より10~15cm浮いて出土した。他に弥生時代の大型蛤刃石斧1点(241頁No.124)が埋没土中より出土した。(遺物観察表:32頁)



第78図 2区14号住居



第79図 2区14号住居出土遺物

II 調査の内容

2区13号住居

位置 L-5グリッド 写真 PL-32・33

形状 長軸を東西にもつ長方形を呈する。四隅は直角で、周壁は若干蛇行して掘り込まれている。規模は長辺4.0×短辺3.4mである。

面積 11.82㎡ 方位 N-43°-E

床面 ローム土を21~28cm掘り込んで床面としている。かなり激しい凹凸面をもち、東から西側へと比高差約10cmの傾斜が認められる。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

竈 東壁中央部に位置し、両袖部が残存する。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ93cm、幅34cmである。煙道部の規模は不明であるが、燃烧部より約60°の角度で立ち上がる。燃烧部内より坏2、甕2の合計4点の土器が出土しているが、No13の甕は河床礫を利用した支脚の上に乗っていた。

貯蔵穴 竈左側の北東隅に位置する。長軸105×短軸88cmの隅丸方形を呈し、深さ10cmである。明瞭な掘り込

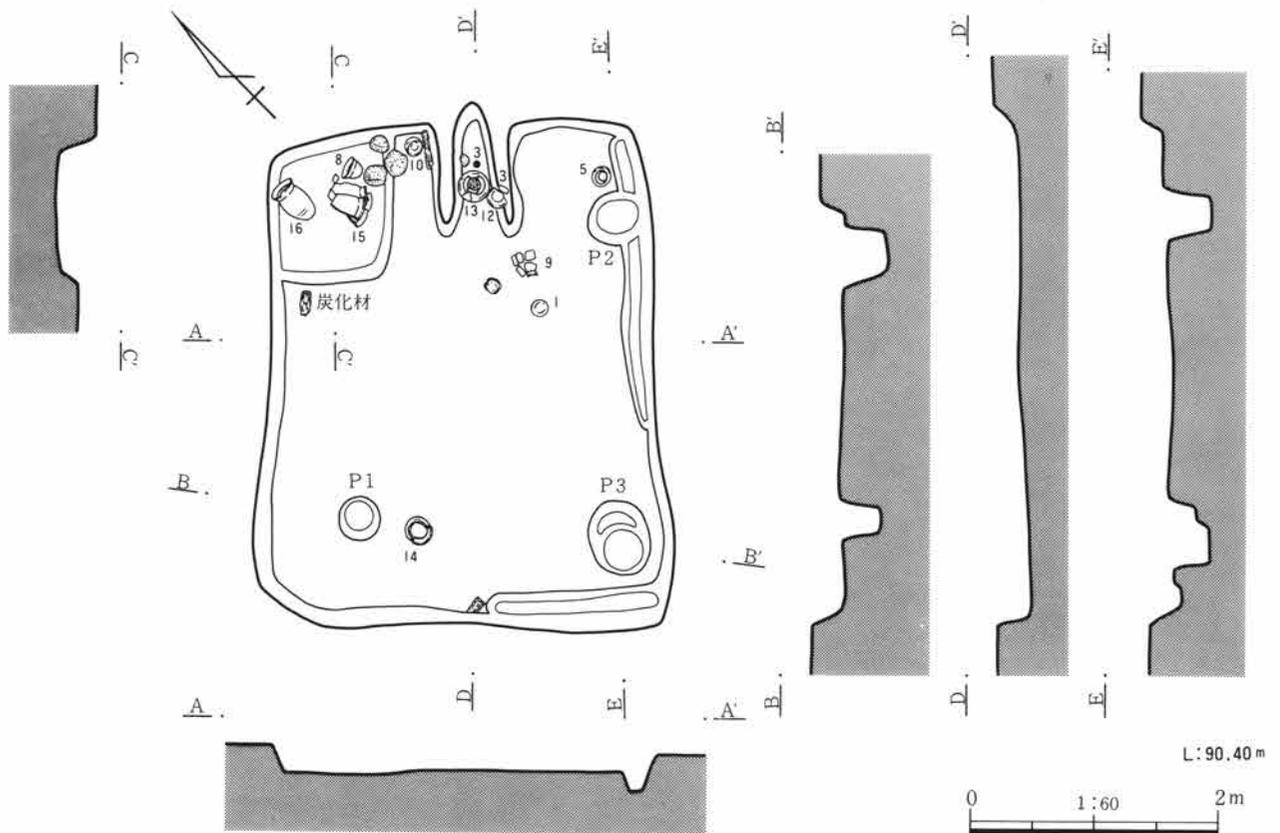
みは無いことから、単に床面の凹凸によるくぼみの可能性もある。内部から甕1点と甗2点が出土しているが、No15の甗は底面に密着して出土した。また土器のほかに最大径17~20cmの河床礫3点が出土した。

柱穴 3本検出されたが、P₂を除いて住居の対角線上に位置する。各柱穴の心々間の距離は、P₂~P₃:2.65m、P₃~P₁:2.10mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:33×29cm、P₂:42×36cm、P₃:45×32cmである。

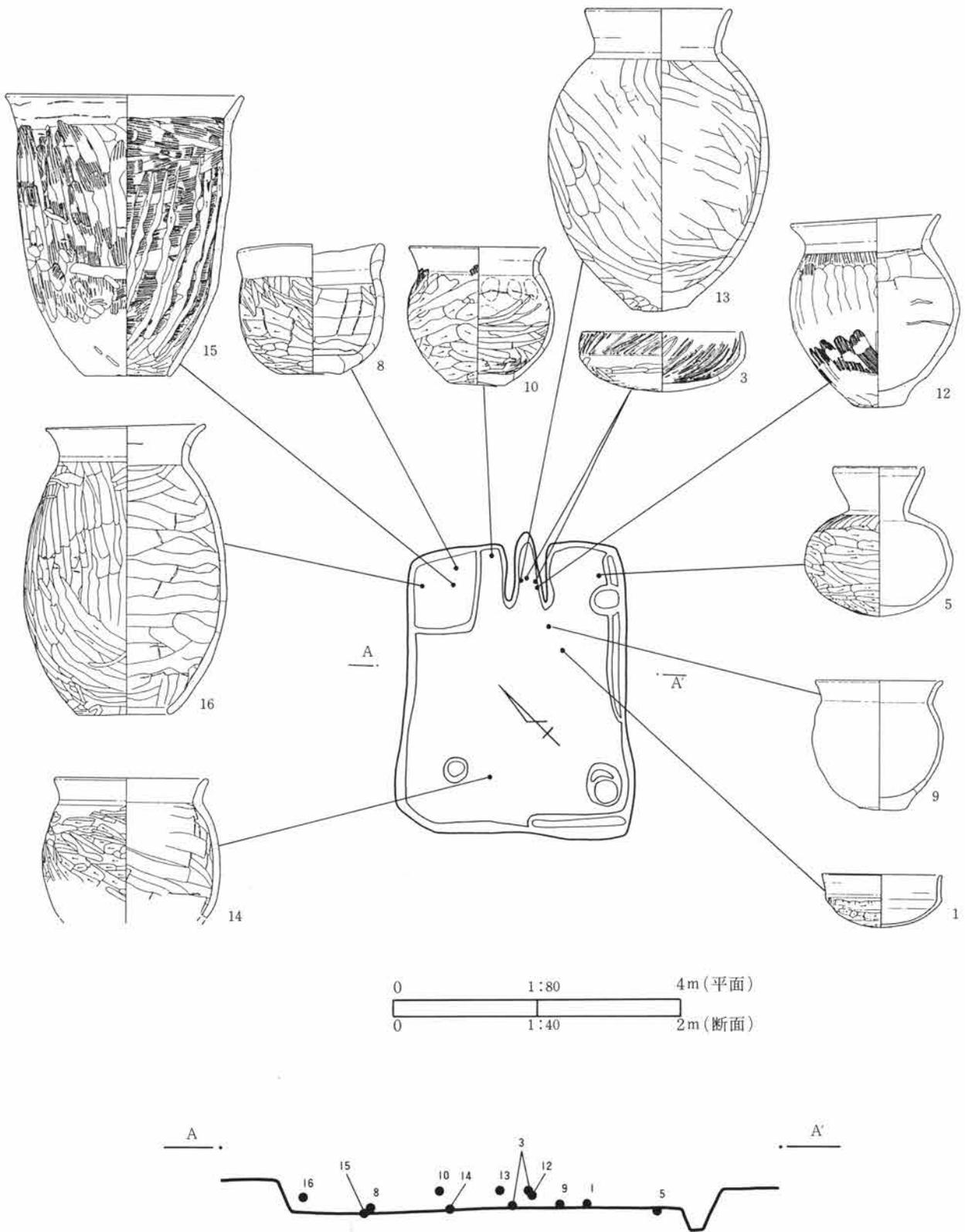
周溝 南壁と西壁の一部にのみ検出された。規模は幅25~33cm、深さ2~5cmである。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏4、高坏1、甕7、甗2、壺1、羽口1の合計16点である。貯蔵穴の周辺に集中した出土が認められる。No1・5・9は床面に密着して、他は床面より3~4cm浮いて出土した。貯蔵穴の西側に近接して、床面より7cm浮いて炭化材1点が出土した。

(遺物観察表:31頁)

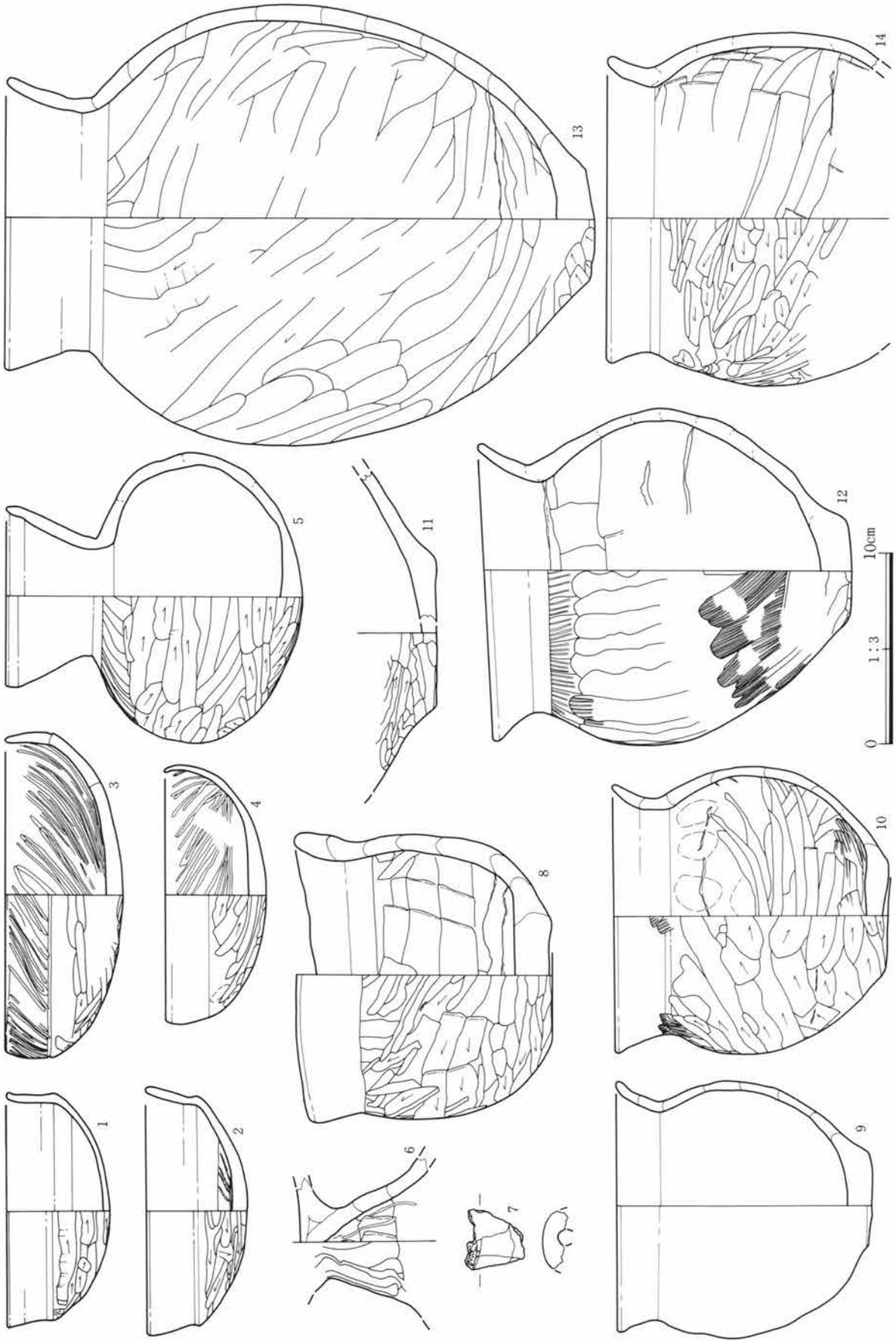


第80図 2区13号住居

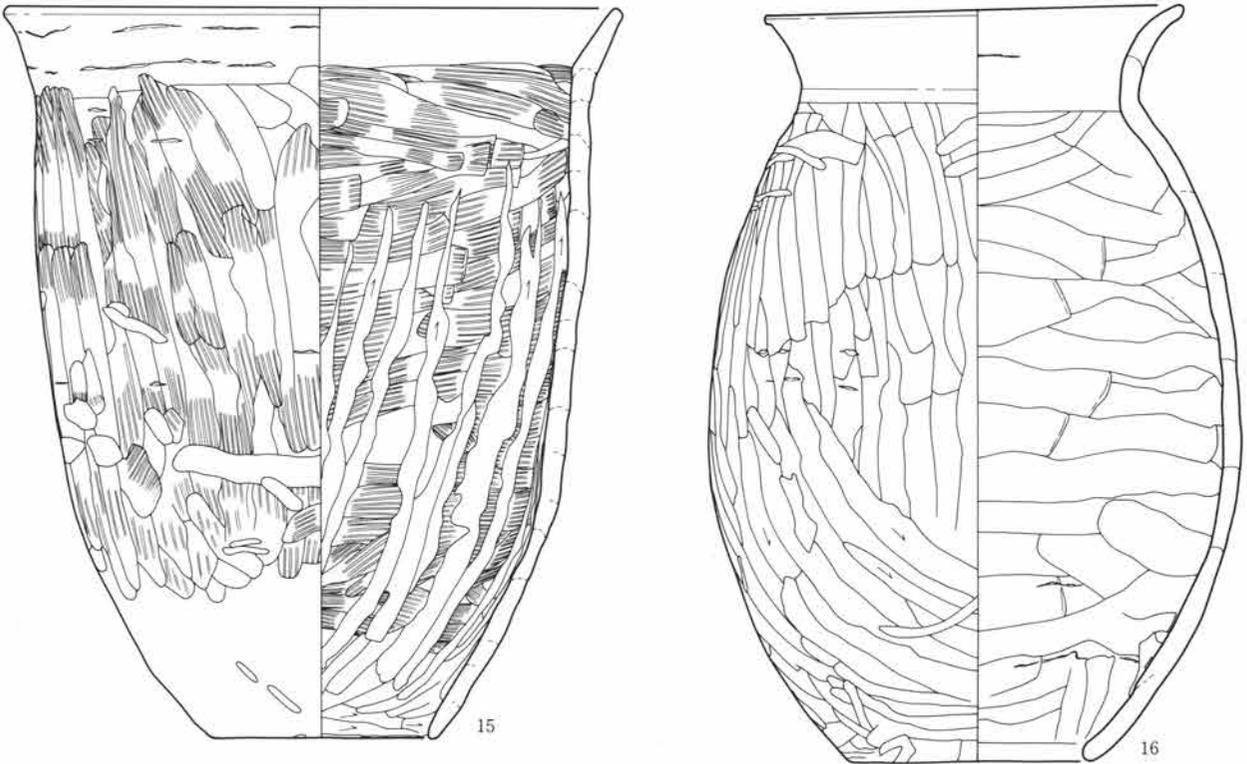


第81図 2区13号住居の遺物出土状況

II 調査の内容



第82図 2区13号住居出土遺物(1)



第83図 2区13号住居出土遺物(2)

2区15号住居

位置 M-7グリッド **写真** PL-34~36・125
重複 14号住居に後出するが、1号溝に先行する。
形状 四辺の長さに若干の差異が認められるが、正方形を基調としている。四隅は直角で、周壁はやや外側に膨らみをもって掘り込まれている。規模は長辺8.15×短辺8.14mである。

面積 63.52㎡ **方位** N-53°-E

床面 ローム土を37~64cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

竈 東壁中央部南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ150cm、幅54cmである。煙道部の規模は不明であるが、燃焼部より約67°の角度で立ち上がる。燃焼部内と焚口部より坏2点(No.4・16)、甕2点(No.31・57)が出土した。

貯蔵穴 精査にもかかわらず検出されなかった。

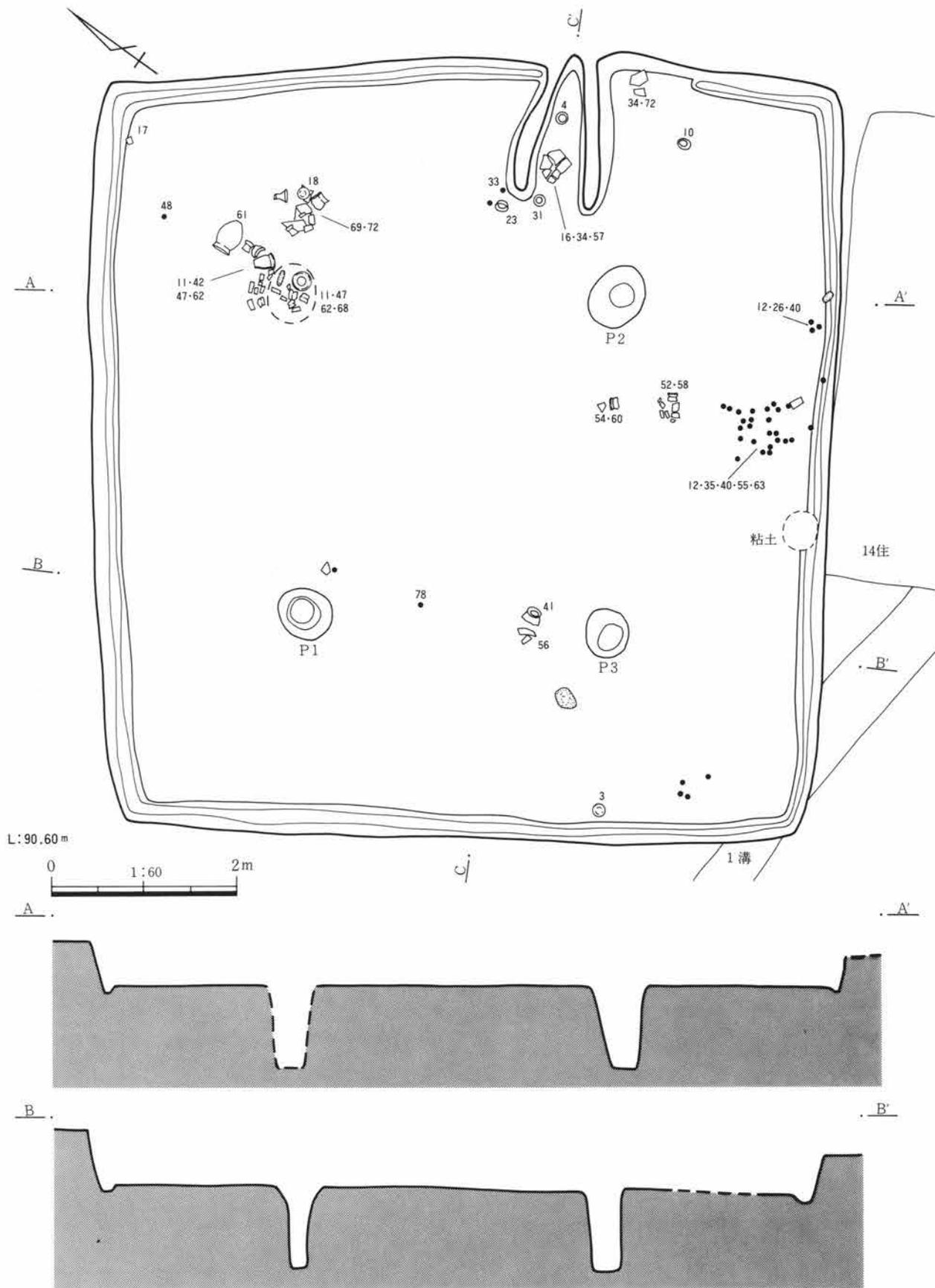
柱穴 住居の対角線上に3本検出されたのみであるが、4本構成になると思われる。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈すると推定される。各柱穴の心々間の距離は、 $P_2 \sim P_3$: 3.68m、 $P_3 \sim P_1$: 3.36mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、 P_1 : 48×87cm、 P_2 : 56×86cm、 P_3 : 46×86cmである。

周溝 幅15~32cm、深さ2~7cmの規模で全周。

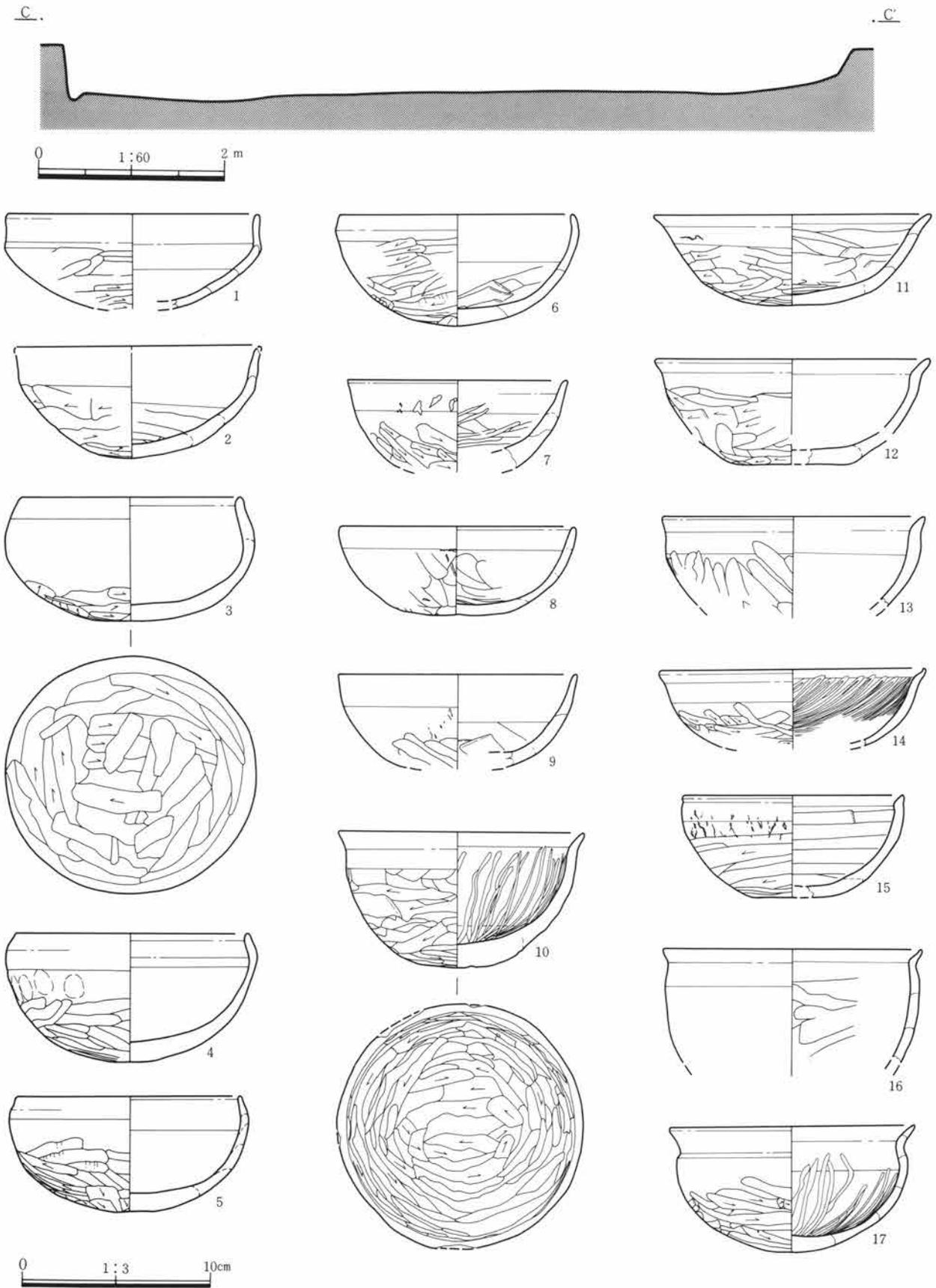
遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏21、高坏2、鉢4、台付甕2、甕38、甑5、壺2、須恵器の蓋1の合計76点が出土した。No.3・23・31・33・35・55・63は床面に密着して、他は床面より3cm以上浮いて出土。No.12・24は2区14号住居、No.28は同12号住居、No.30は同15・32号住居の埋没土出土の破片とそれぞれ接合関係にある。中央部付近の床面上10cmと埋没中より紡錘車各1点と、南壁際の中央部付近より、粘土塊1点が出土した。

(遺物観察表: 32~36頁)

II 調査の内容

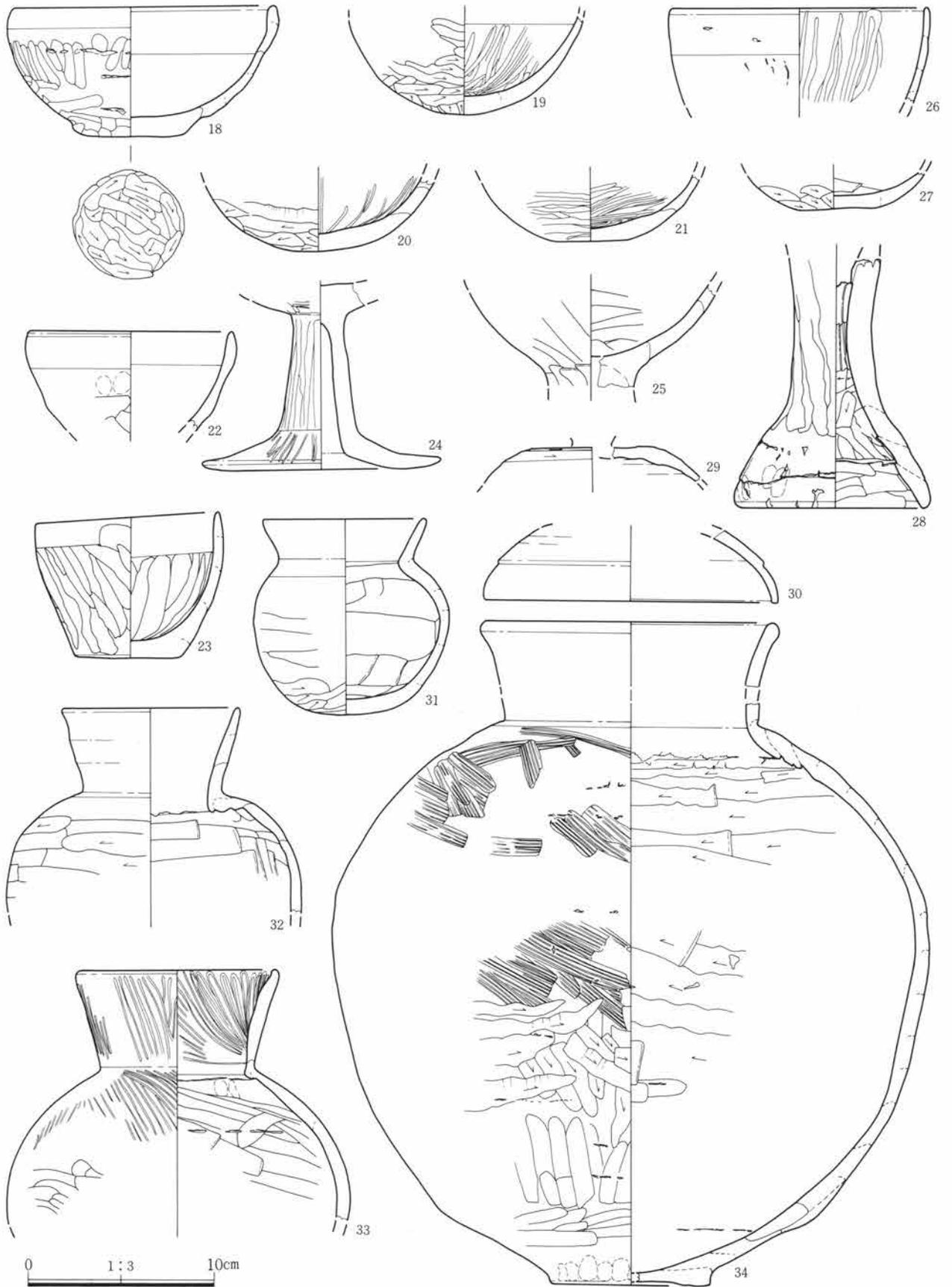


第84図 2区15号住居

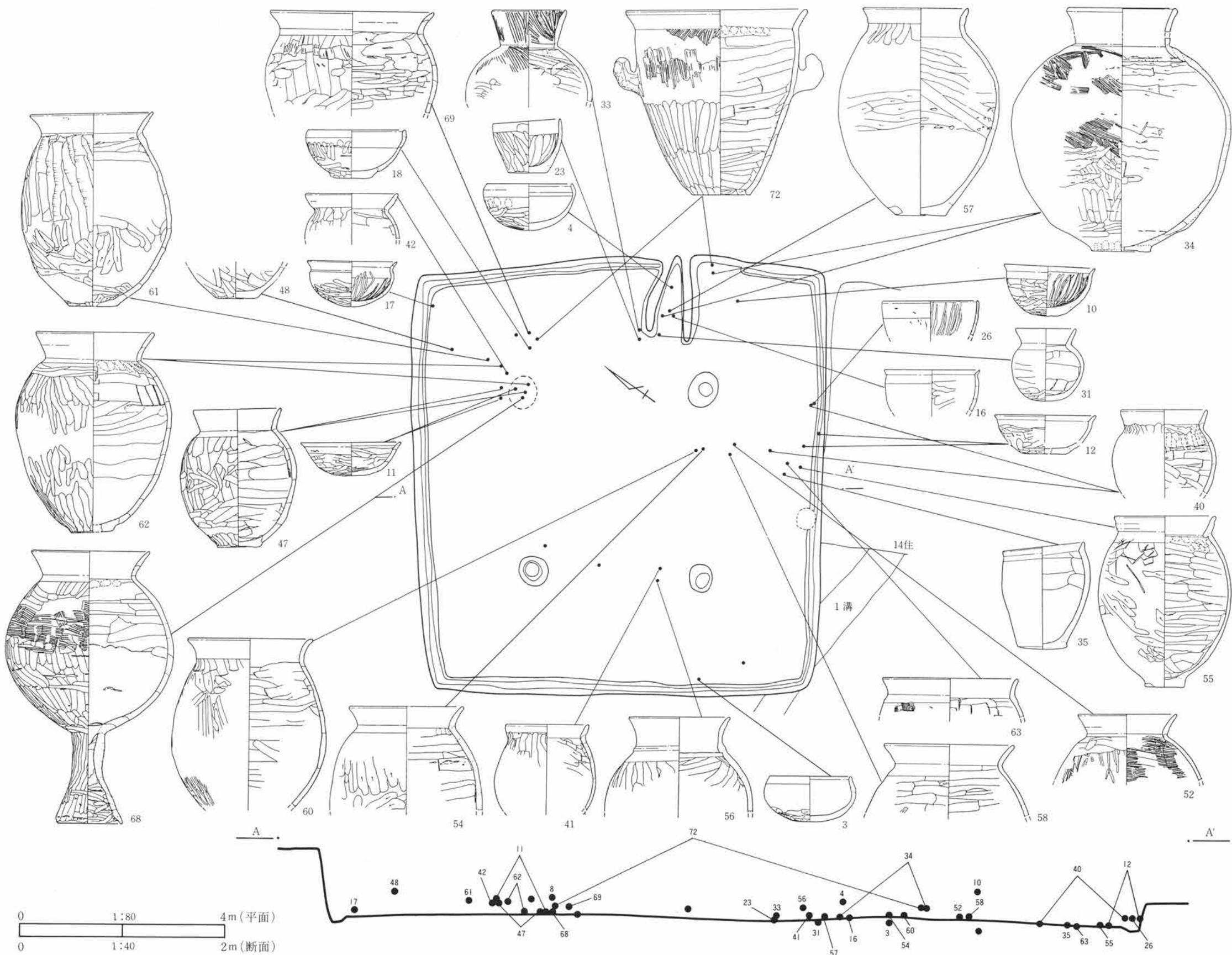


第85図 2区15号住居と出土遺物

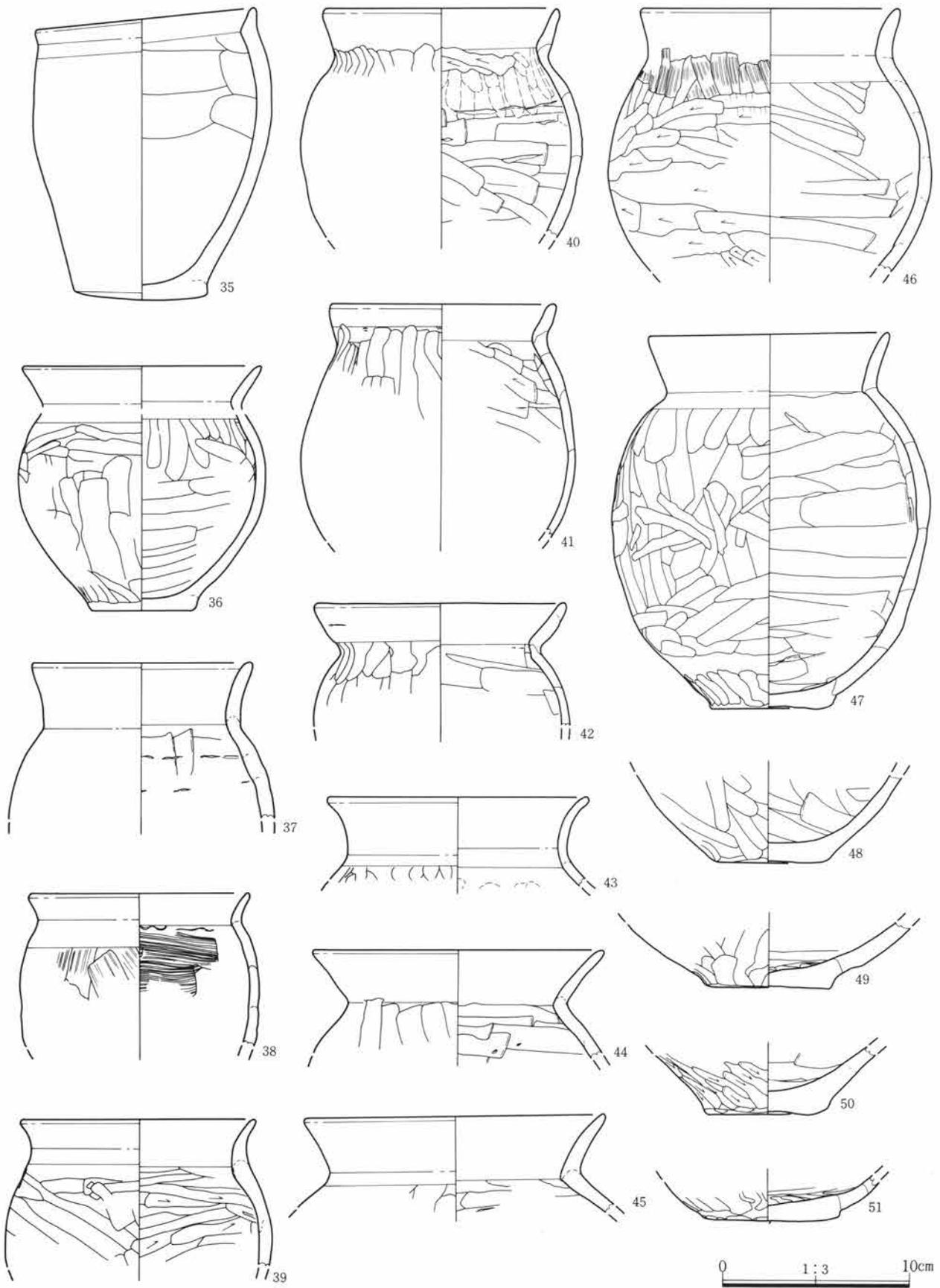
II 調査の内容



第86図 2区15号住居出土遺物(1)

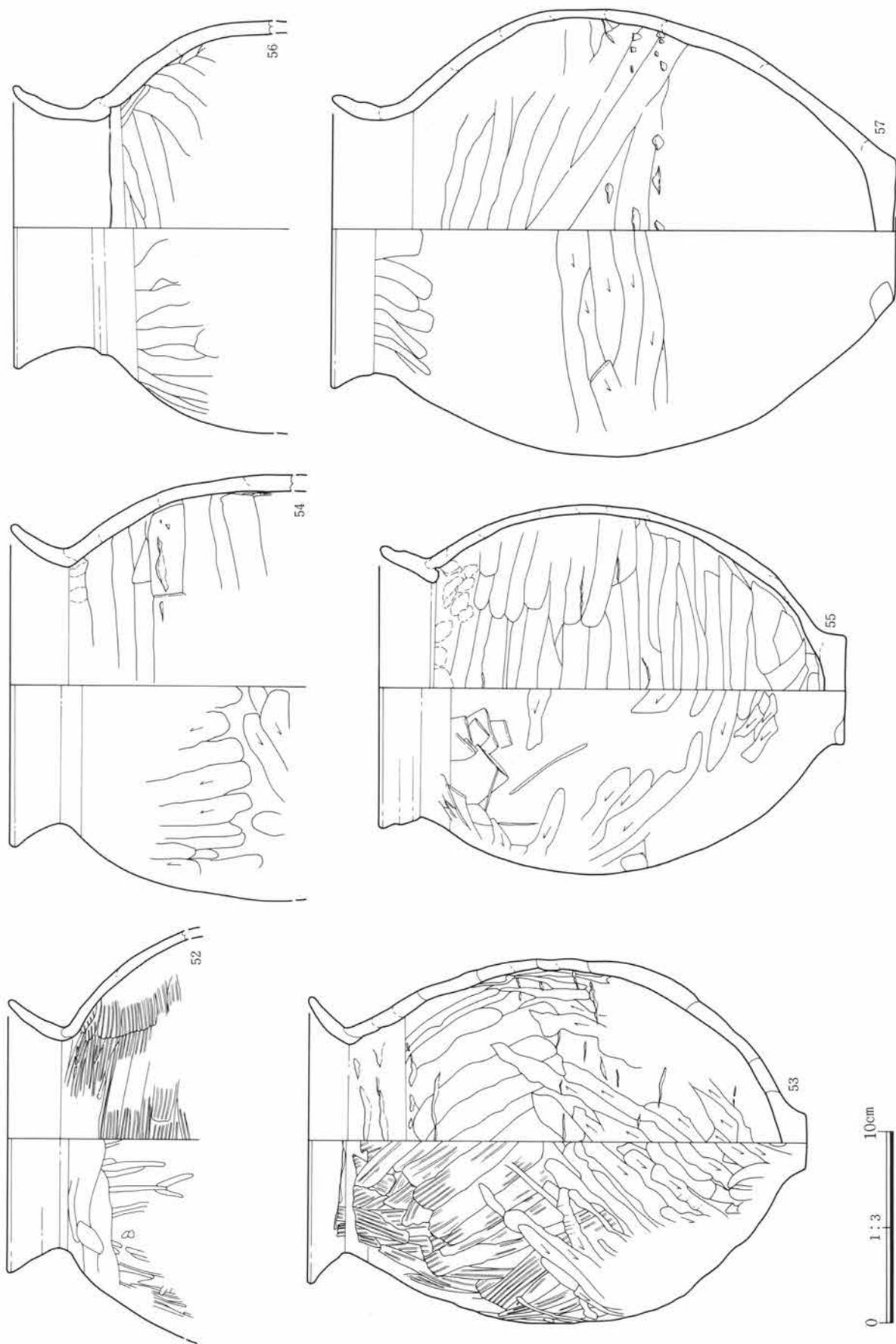


第87図 2区15号住居の遺物出土状況

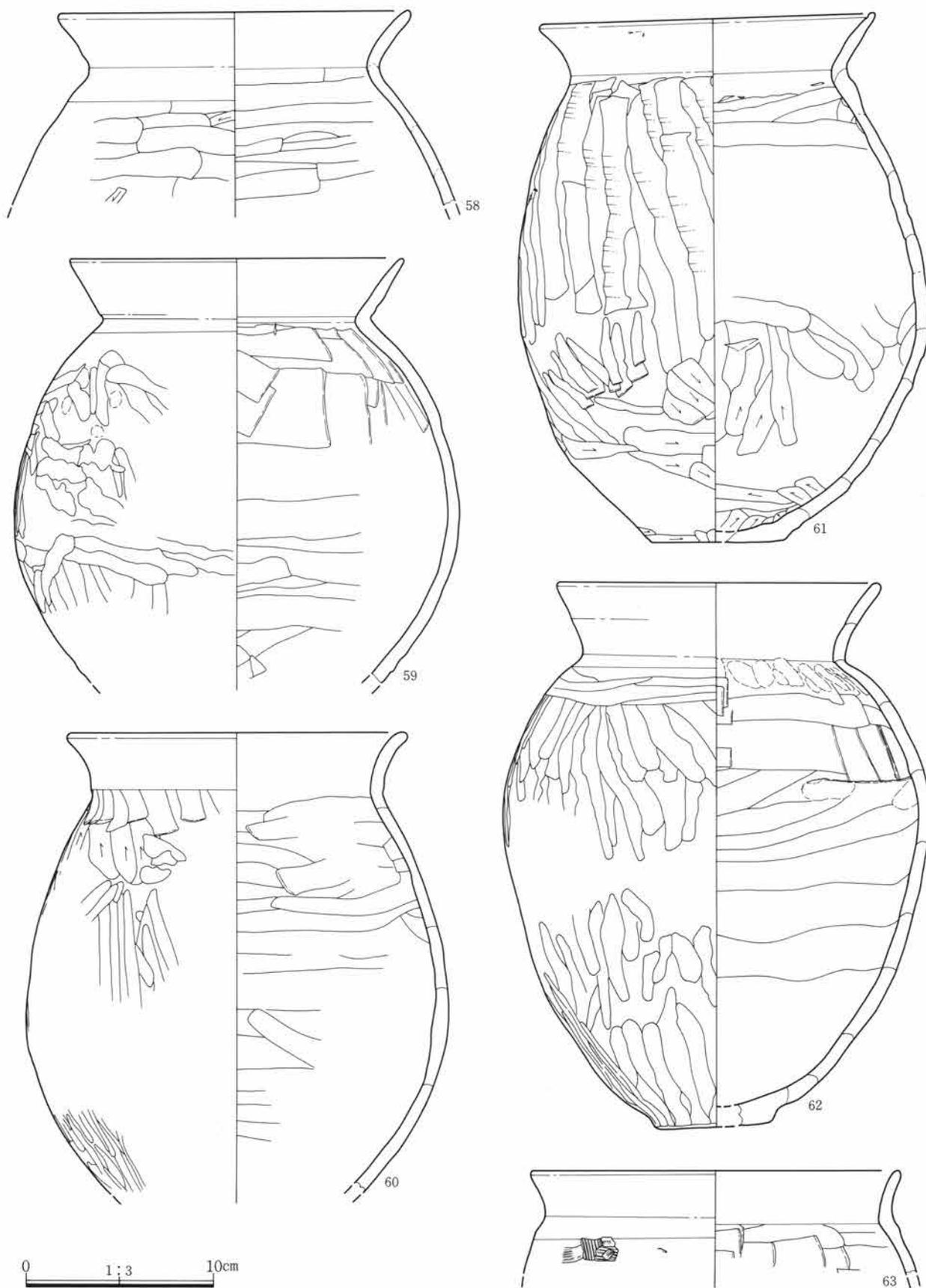


第88図 2区15号住居出土遺物(2)

II 調査の内容

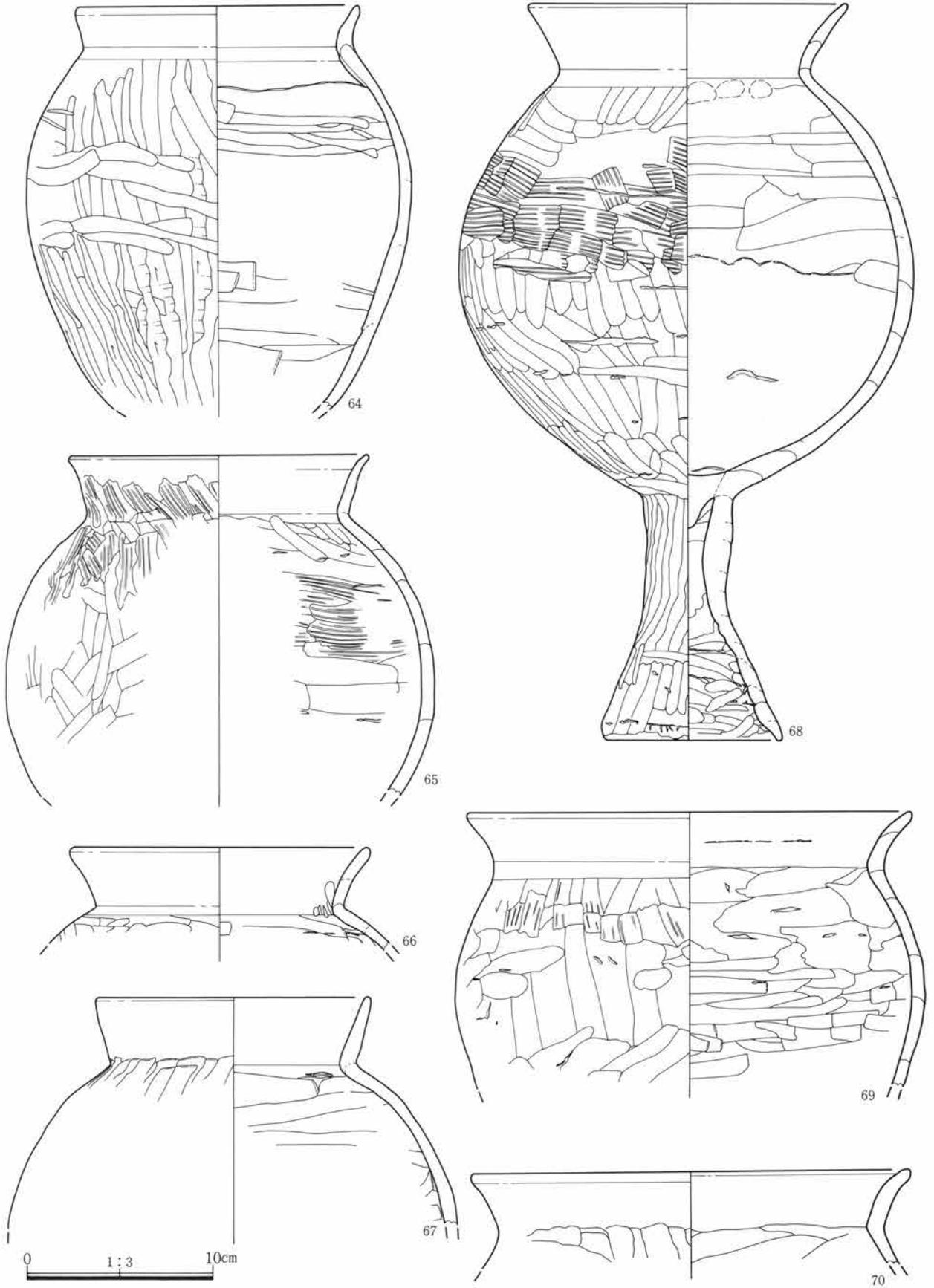


第89図 2区15号住居出土遺物(3)

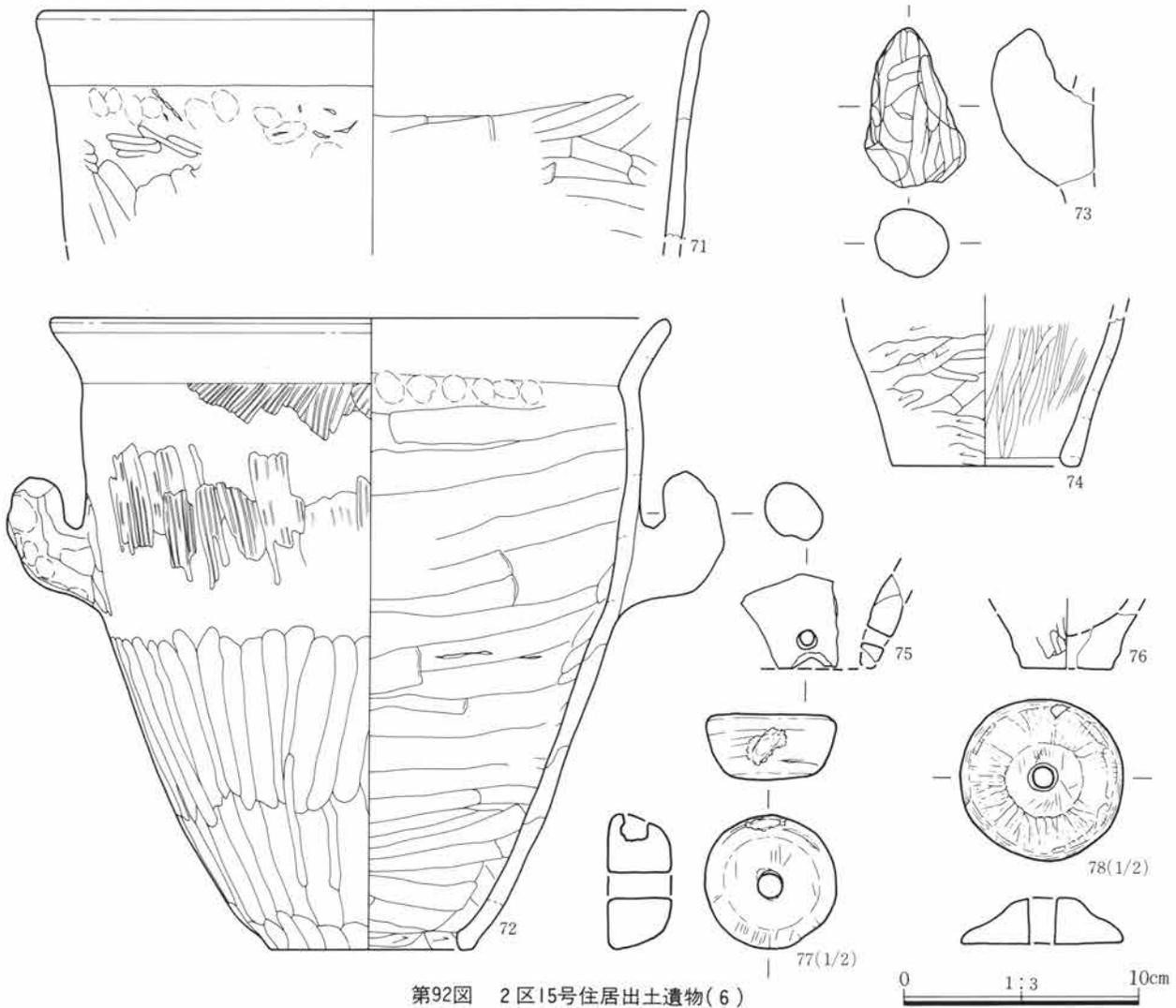


第90図 2区15号住居出土遺物(4)

II 調査の内容



第91図 2区15号住居出土遺物(5)



第92図 2区15号住居出土遺物(6)

2区16号住居

位置 J-6グリッド 写真 PL-37・38

形状 長軸を東西にもつ長方形を呈するが、長・短軸の差が少なく、正方形にちかい。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれているが、南壁中央部には出入口部と思われる張り出しが存在する。規模は長辺9.25×短辺8.35mである。

面積 75.18㎡ 方位 N-69°-E

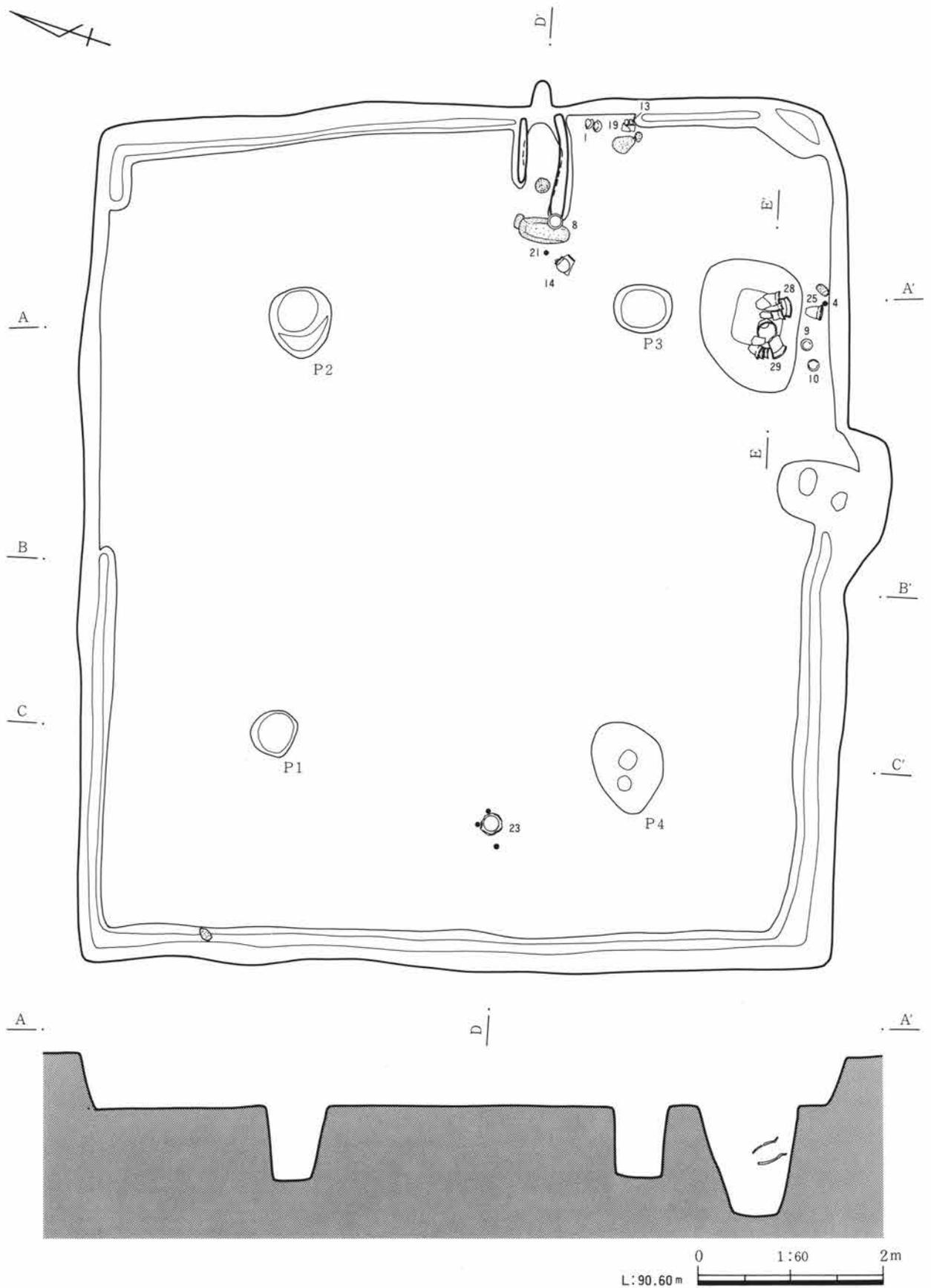
床面 ローム土を51~64cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもち、床面中央部が他に比べて約10cmほど高く、中央部から壁際に向かって放射状に低くなる。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

埋没土 上層にはAs-Cまじりの黒色土が、下層にはロームブロックまじりの暗褐色土がレンズ状に堆積する。自然埋没の状態を示す。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ104cm、幅36cmである。煙道部規模は不明であるが、燃烧部より約55°の角度で立ち上がる。燃烧部内には、長さ30cmの河床礫を埋め込んで支脚として使用している。また焚口部の手前に最大径56cmの輝石安山岩が出土しているが、焚口天井部の部材として使用したものと思われる。

貯蔵穴 南東隅から西側に1.5m離れて位置する。長軸135×短軸110cmの隅丸方形を呈し、深さ118cmである。底面から60cmほど浮いて、甕2点(Na28・29)が出土

II 調査の内容



第93図 2区16号住居

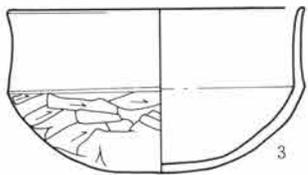
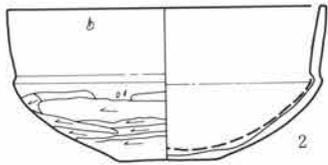
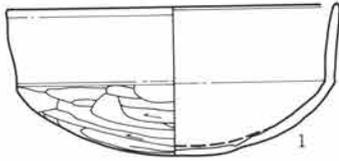
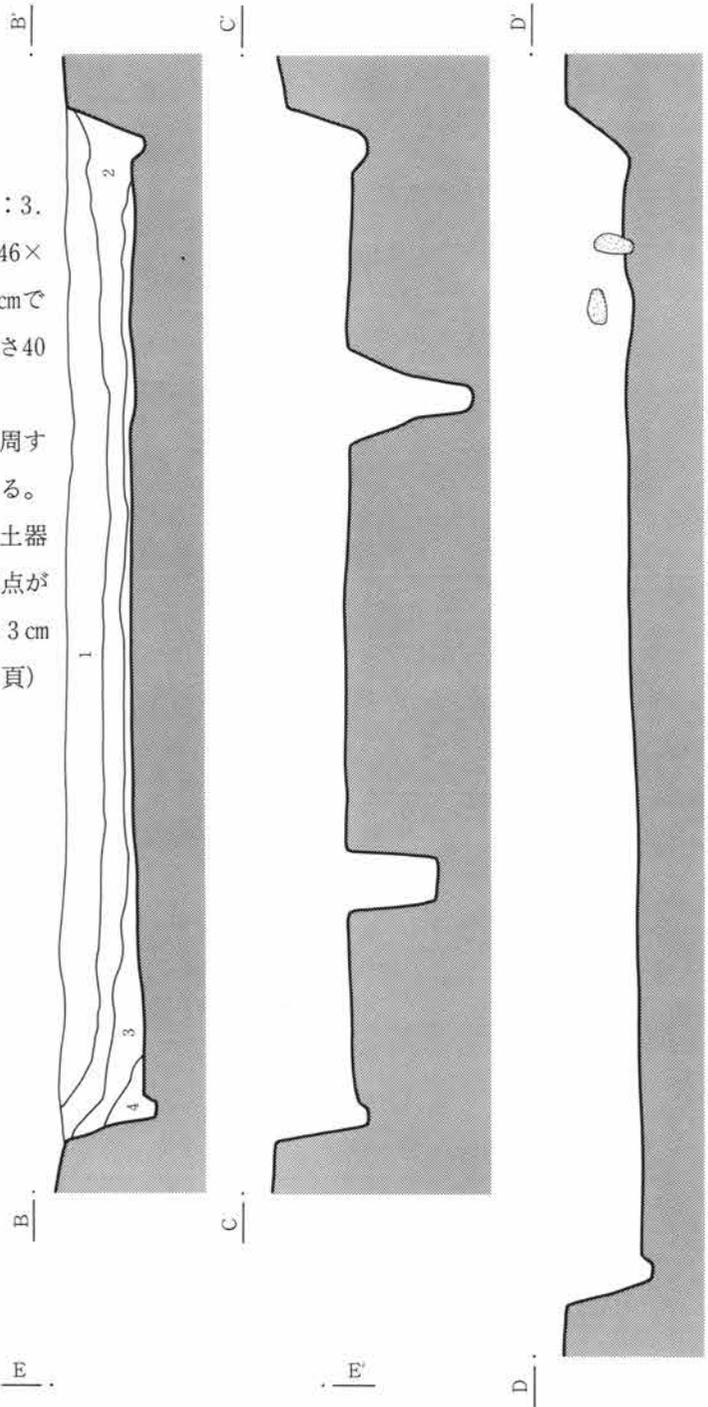
した。

柱 穴 住居の対角線上に4本検出された。

各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その距離は $P_1 \sim P_2 : 4.35\text{m}$ 、 $P_2 \sim P_3 : 3.76\text{m}$ 、 $P_3 \sim P_4 : 4.83\text{m}$ 、 $P_4 \sim P_1 : 3.84\text{m}$ である。また各柱穴の規模(径×深さ)は、 $P_1 : 46 \times 70\text{cm}$ 、 $P_2 : 68 \times 68\text{cm}$ 、 $P_3 : 52 \times 75\text{cm}$ 、 $P_4 : 78 \times 98\text{cm}$ である。出入口部の柱穴は、長径 $95 \times$ 短径 50cm 、深さ 40cm で、2本の柱穴が連結している。

周 溝 北および南側壁面の一部を除いてほぼ全周する。規模は幅 $25 \sim 50\text{cm}$ 、深さ $8 \sim 13\text{cm}$ の規模である。

遺 物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏10、小型甕1、甕11、甗5、壺2の合計29点が出土した。No.9・10・25は床面に密着して、他は 3cm 以上浮いて出土した。(遺物観察表:37・38頁)



0 1:3 10cm

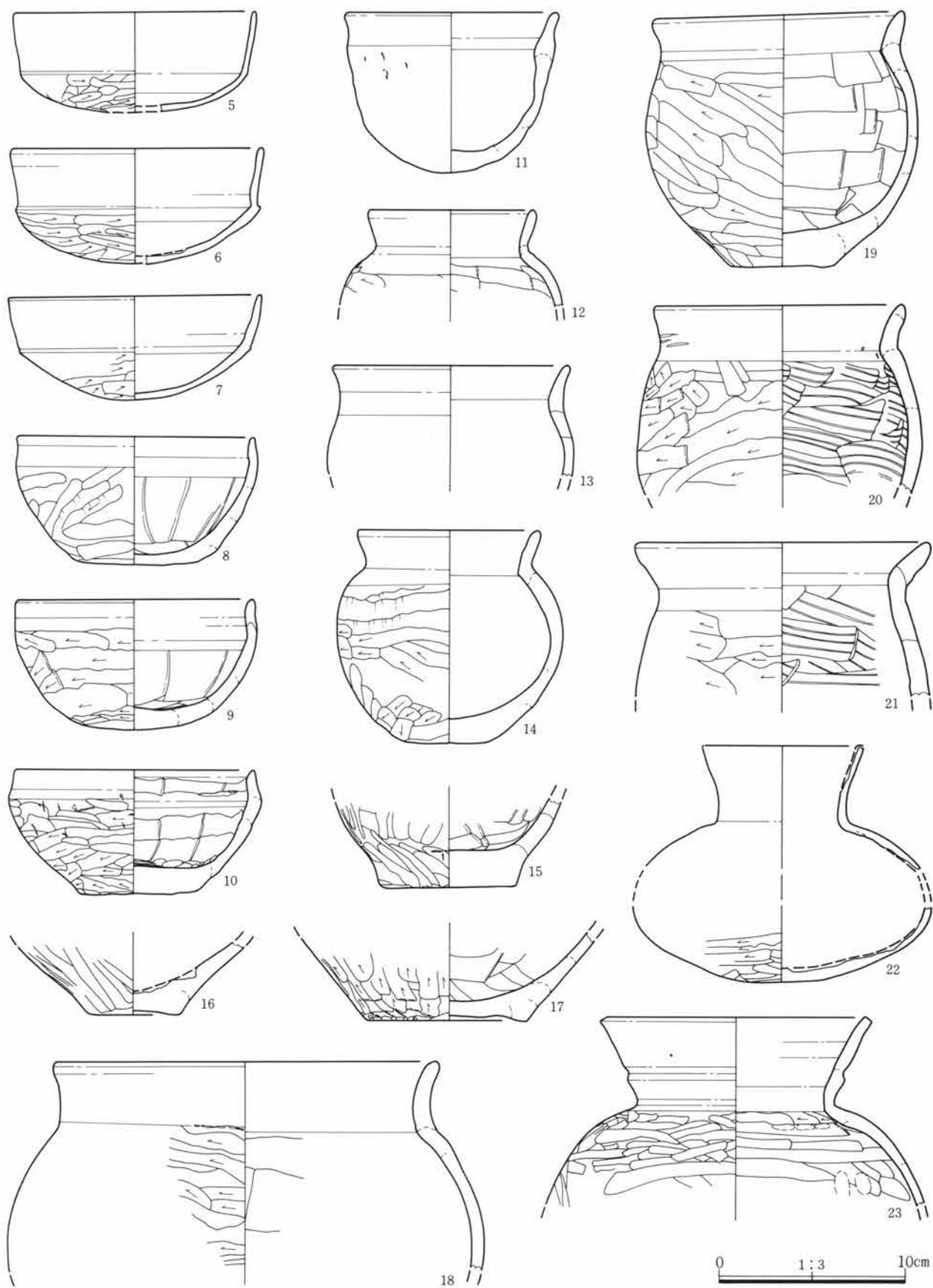
0 1:60 2m

埋 没 土 層

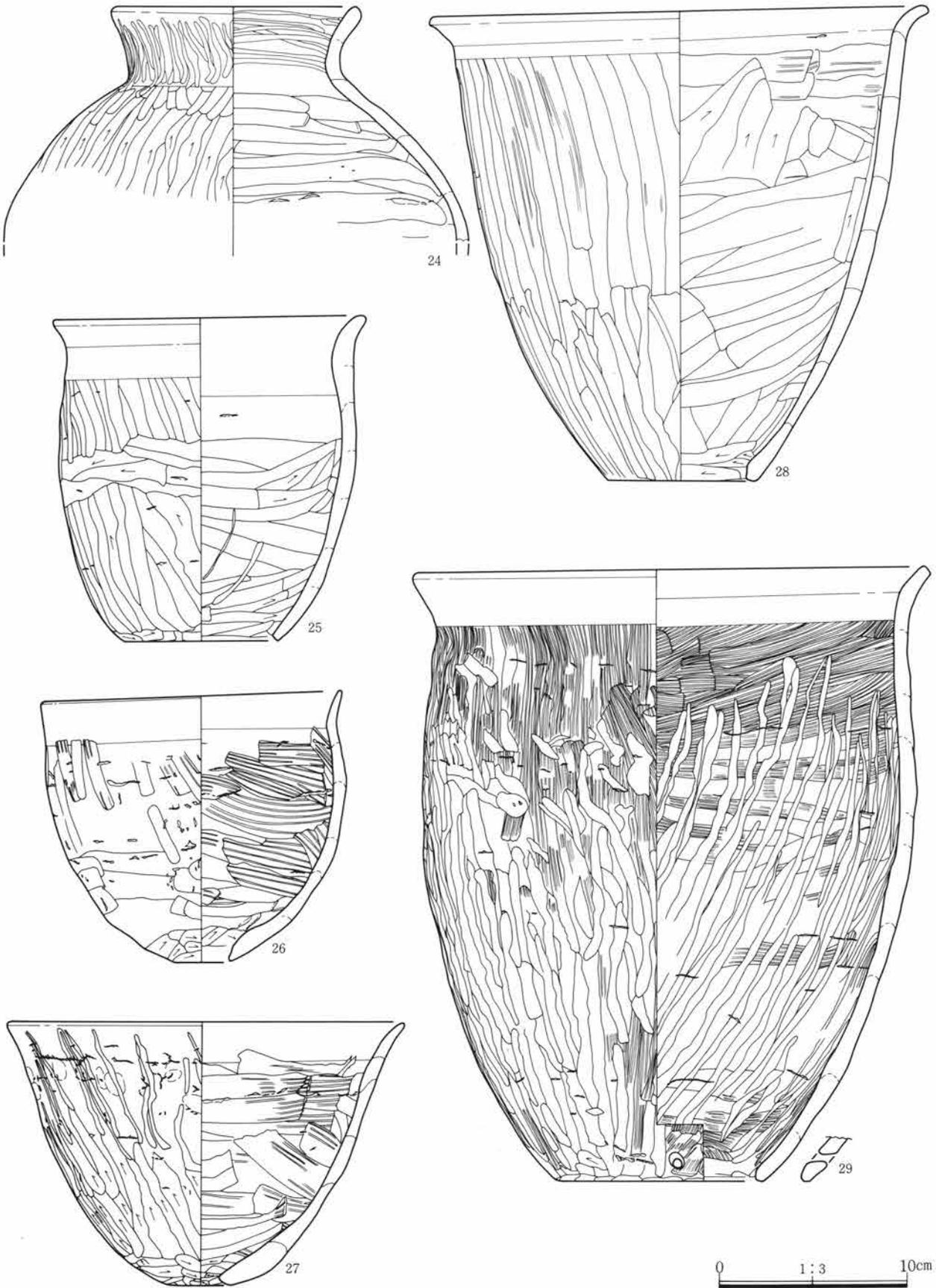
1. 黒色土。褐色土が斑状に混入し、As-Cを多量に含む。
2. 暗褐色土。As-Cを少量含む。
3. 褐色土。As-Cを少量含む。
4. 黒褐色土。炭化物を少量含む。

第94図 2区16号住居と出土遺物

II 調査の内容



第95図 2区16号住居出土遺物(1)



第96図 2区16号住居出土遺物(2)

II 調査の内容

2区18号住居

位置 F-8グリッド 写真 PL-38・39

形状 長軸を東西にもつ長方形を呈する。四隅は直角で、周壁は若干蛇行して掘り込まれている。規模は長辺3.96×短辺3.18mである。

面積 12.60㎡ 方位 N-11°-W

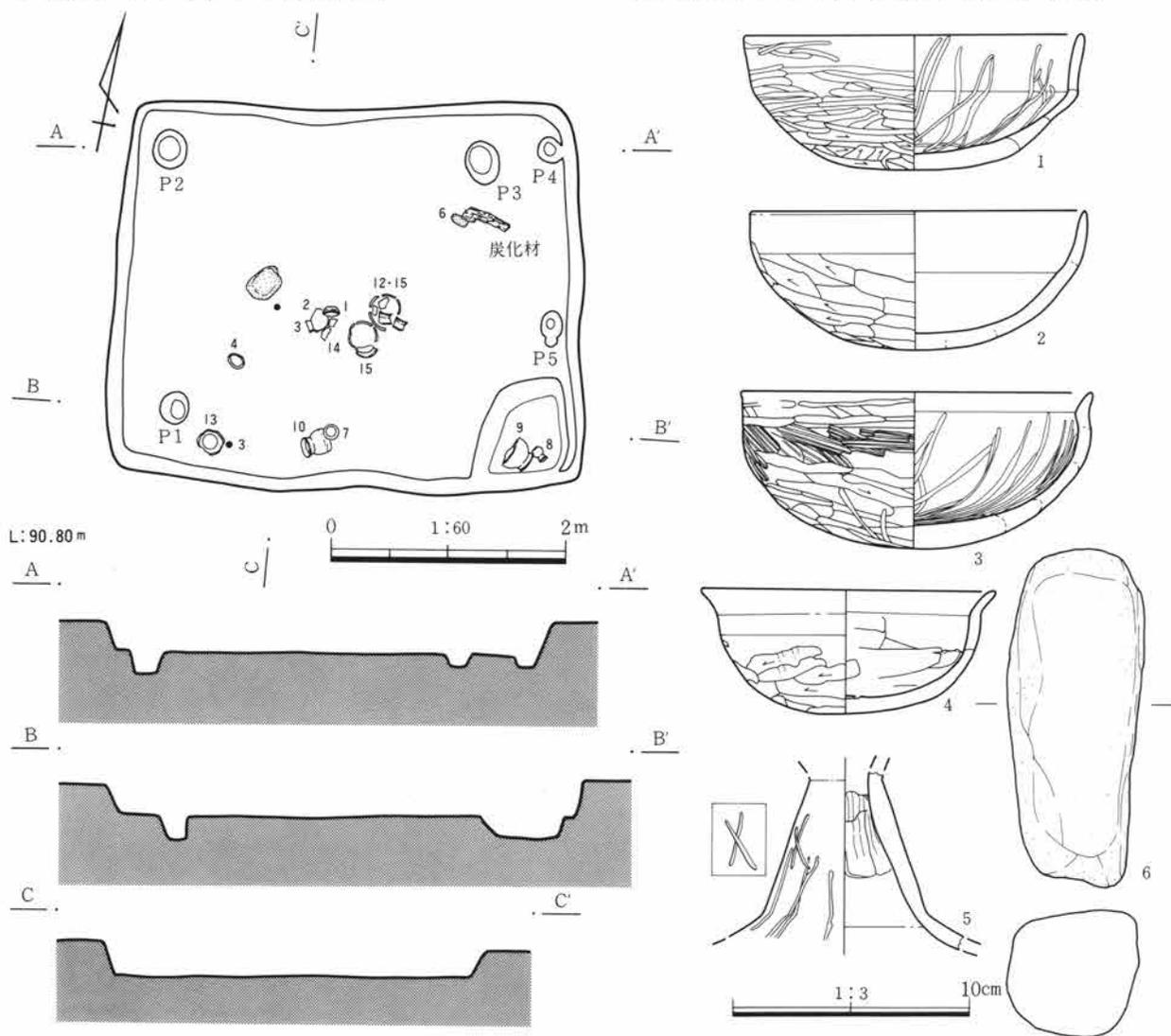
床面 ローム土を21~31cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

貯蔵穴 住居の南東隅に位置する。長軸80×短軸50cmの隅丸方形を呈し、深さ20cmである。埋没土上位より甕 (No.9) と埴 (No.8) が出土した。

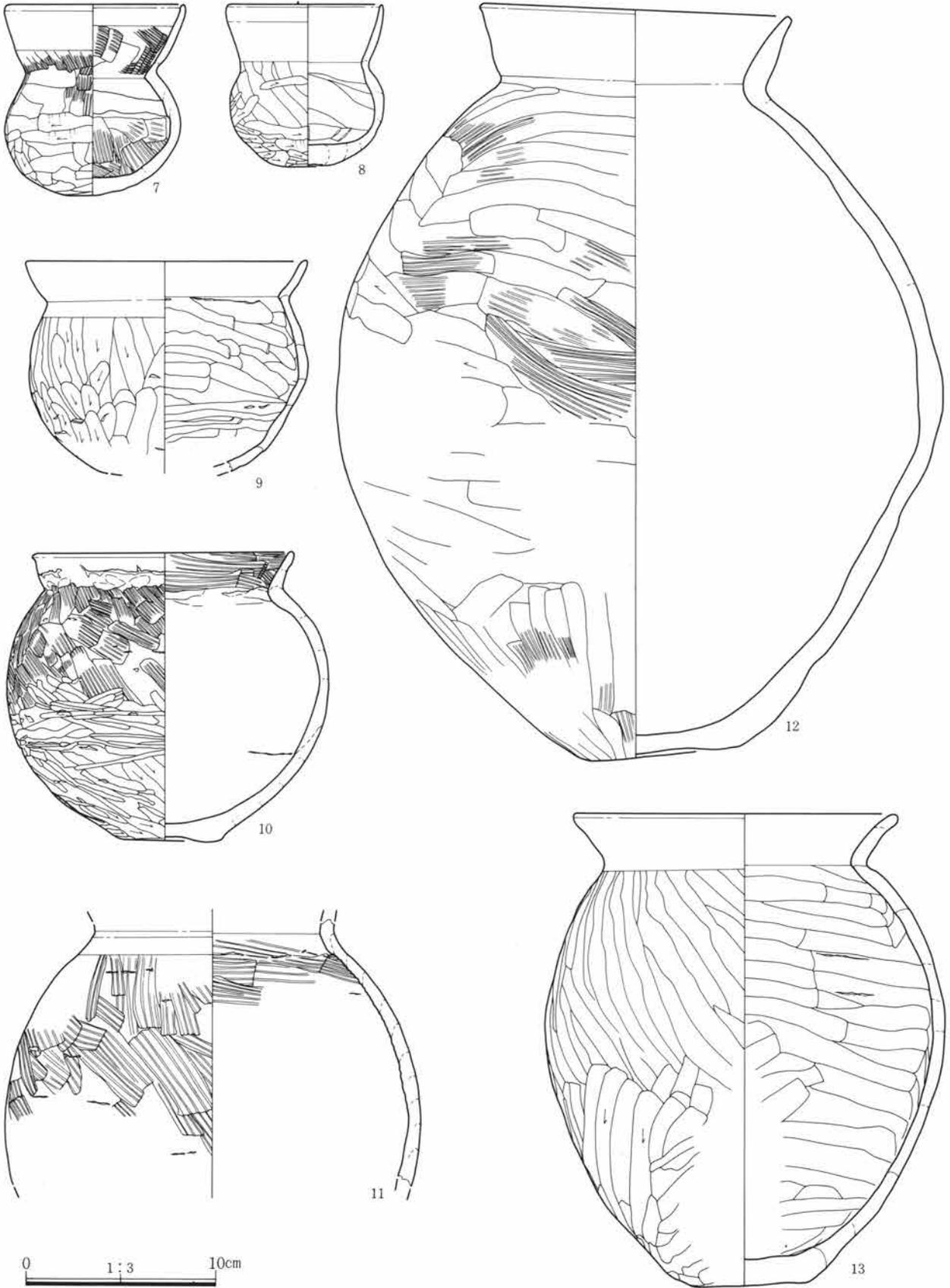
柱穴 柱穴とおもわれるピットが5本検出された。P₄・P₅を除いて、住居の対角線上に位置する。各柱穴の心々間の距離は、P₁~P₂:2.65m、P₃~P₁:2.18m、P₄~P₅:1.50mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:28×20cm、P₂:30×11cm、P₃:23×20cm、P₄:18×10cm、P₅:19×10cmである。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏4、高坏1、甕7、埴2の合計14点が出土した。No.5・11を除いていずれも床面に密着して出土し、柱穴の南側より床面から3cm浮いて薦編み石1点が出土した。(遺物観察表:38・39頁)

備考 竈および炉の痕跡は検出できなかったが、炉付き住居と想定できる。屋根材の一部と思われる炭化材が出土しており、焼失家屋の可能性はある。

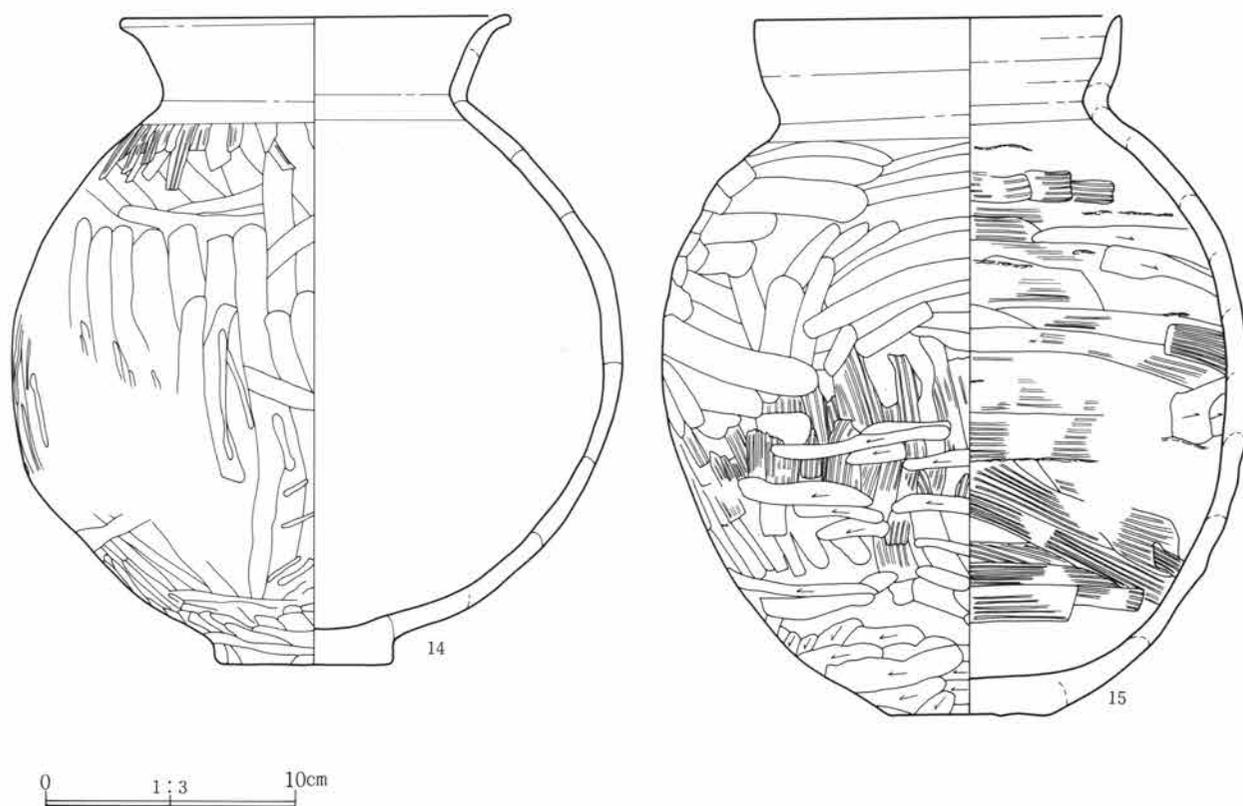


第97図 2区18号住居と出土遺物



第98図 2区18号住居出土遺物(1)

II 調査の内容



第99図 2区18号住居出土遺物(2)

2区20号住居

位置 F-6グリッド 写真 PL-40・41・43・125

形状 長軸を東西にもつ長方形を呈するが、長短軸の差が少なく、正方形に近い形状となる。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺7.4×短辺7.0mである。

面積 50.08㎡ 方位 N-12°-W

床面 ローム土を55~70cm掘り込んで床面としている。凹凸面および傾斜の少ない平坦な床面である。炉の周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

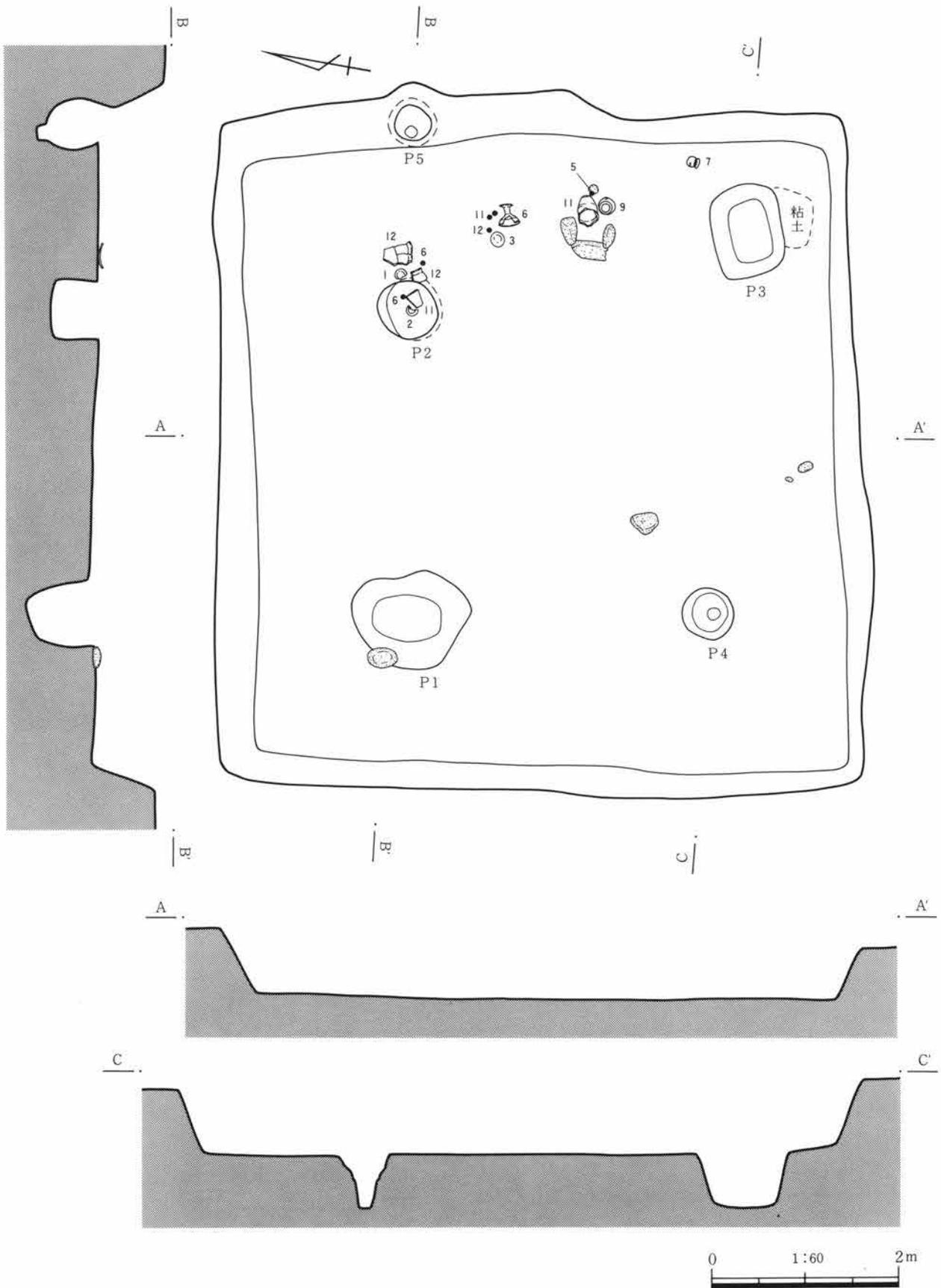
竈 東壁中央部から50cmほど西側に離れた位置に、両袖部および天井部の補強材に使用されたと推定される河床礫が残存するのみで、竈本体は崩落してその規模は不明である。補強材がほぼ原位置とみられることから、東壁中央部の周壁内側に造り付けられていたと判断される。補強材には最大径20~30cmの輝石安山岩を用い、両袖部は立てて使用されている。

甕2点が出土しているが、No.9の甕はNo.5の高坏脚部

と河床礫を併用した支脚の上に乗った状態で出土。

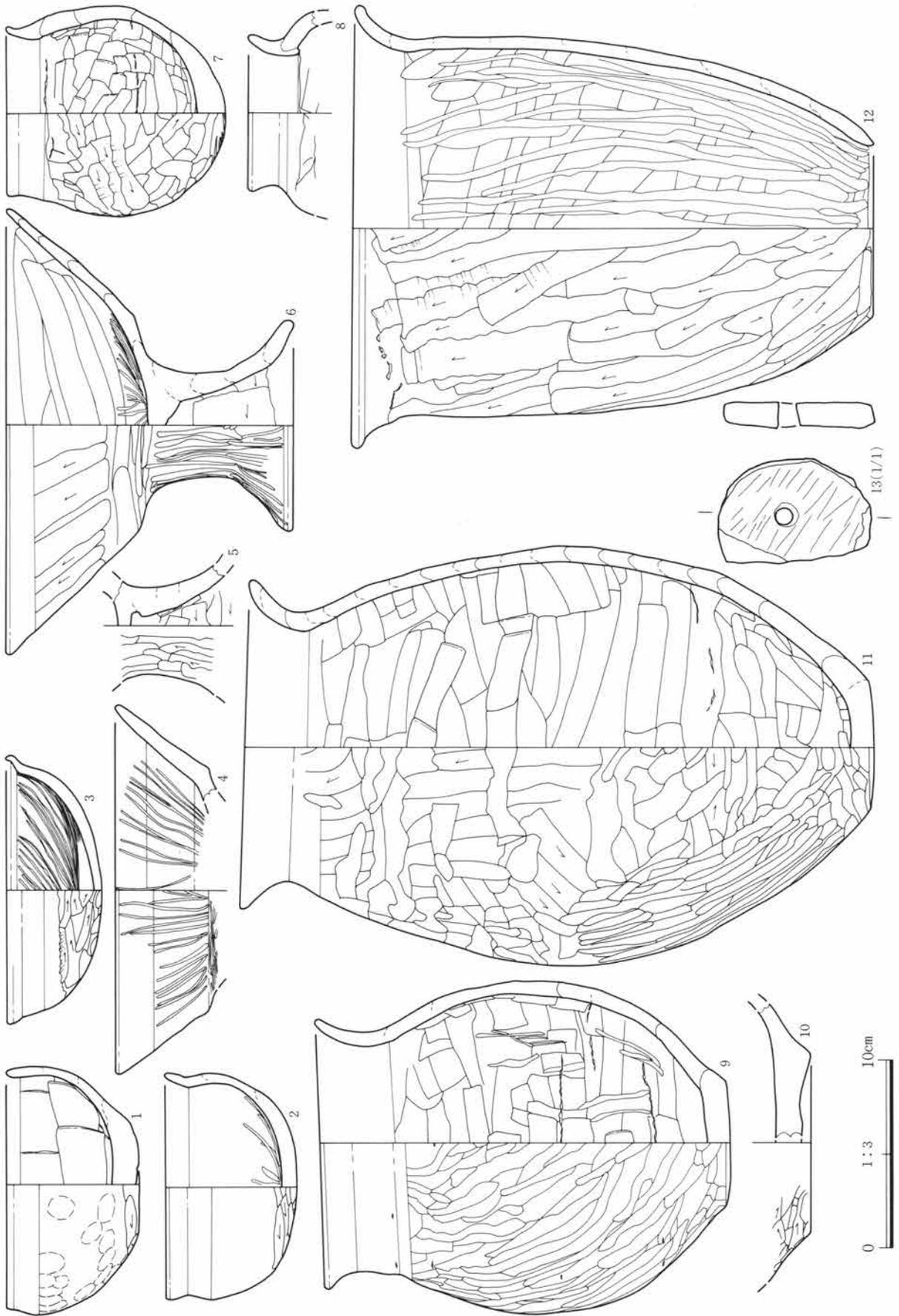
柱穴 住居のほぼ対角線上に4本、東壁際に1本の合計5本が検出された。P₁~P₄の各柱穴の心々間を結んだ形状は、P₃の位置が若干ずれているために、住居の外形と相似形にならない。P₃については形状が方形でもあることから、貯蔵穴かあるいは貯蔵穴と柱穴が重複している可能性もある。各柱穴の心々間の距離は、P₁~P₂:3.34m、P₂~P₃:3.78m、P₃~P₄:4.10m、P₄~P₁:3.30mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:100×70cm、P₂:62×50cm、P₃:75×57cm、P₄:55×55cm、P₅:38×67cmである。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏3、高坏3、甕5、甑1の合計12点である。No.1・6・12は床面に密着して、他は3cm以上浮いた状態で出土した。No.2は2区30号住居の床面より41cm浮いて出土した破片と、No.4は住居周辺のH-5グリッドから出土している。埋没中より滑石製模造品1点、P₃の南側に接して直径60cmの範囲に粘土塊が出土している。(遺物観察表:39・40頁)



第100図 2区20号住居

II 調査の内容



第101図 2区20号住居出土土遺物

2区21号住居

位置 N-5グリッド 写真 PL-42~44

形状 長軸を南北にもつ長方形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。南壁中央部には、出入口部と思われる地山のロームを掘り残した長さ90cm、幅40cmのスロープが存在し、その上面は堅く踏み固められている。住居の規模は長辺4.60×短辺3.60mである。

面積 15.31㎡ 方位 N-117°-W

床面 ローム土を18~41cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

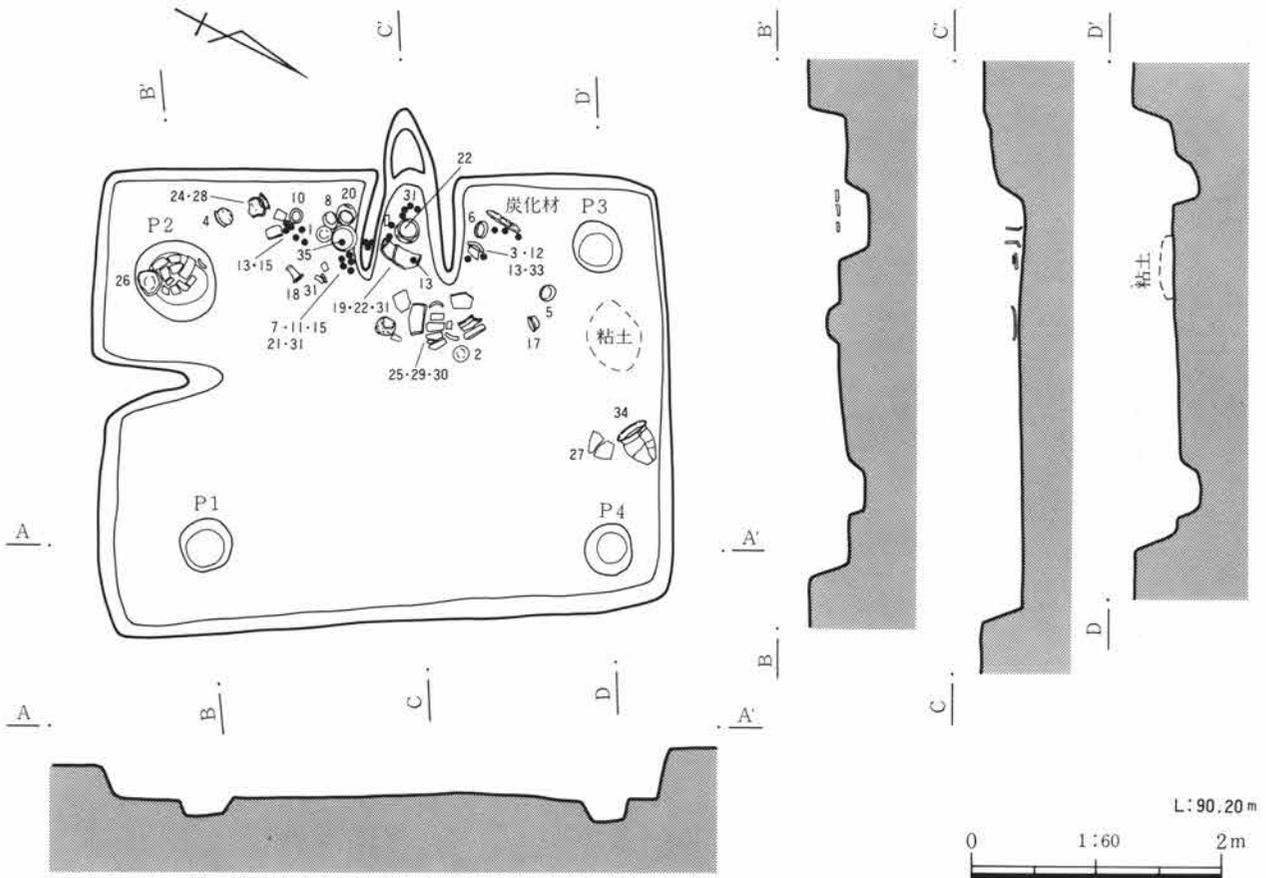
竈 西壁中央部に位置し、両袖部が残存する。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ90cm、幅52cmである。煙道部は幅38cm、長さ50cmの掘り方のみ残存する。燃烧部内より鉢 (No19)、甕

(No22・31) の3点が出土した。

柱穴 住居の対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その距離はP₁~P₂:2.15m、P₂~P₃:3.40m、P₃~P₄:2.38m、P₄~P₁:3.25mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:40×13cm、P₂:60×18cm、P₃:38×20cm、P₄:38×17cmである。

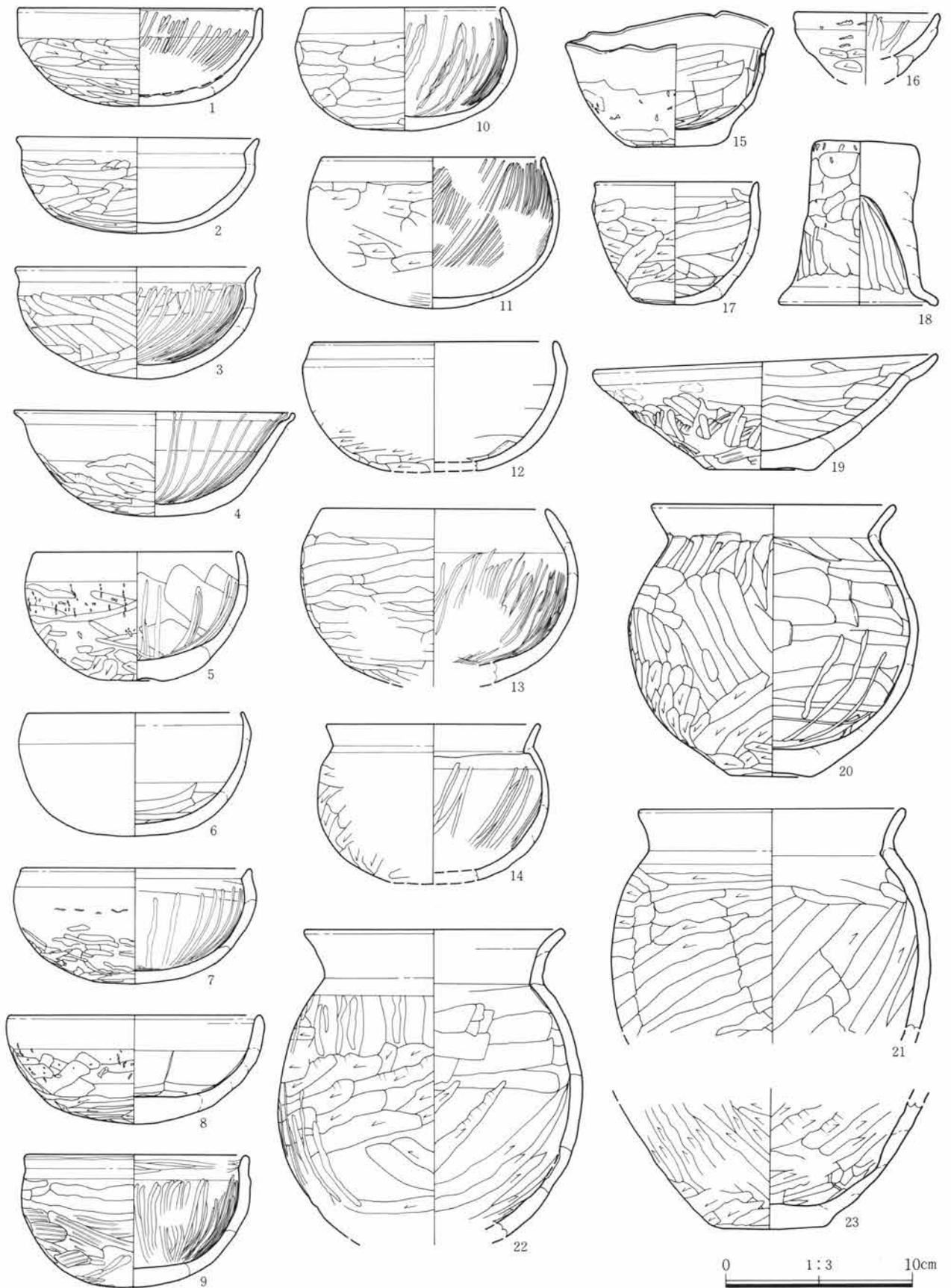
遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏17、鉢1、甕13、甗3、支脚1の合計35点が出土した。No3・5・7・8・10~13・15・17・18・21・24~26・28~31・33は床面に密着して、他は3cm以上浮いて出土した。P₂の上面は壺の破片と粘土塊によって覆われていた。またP₃の東隣には、直径50cmの範囲に粘土塊が出土した。(遺物観察表:40~42頁)

備考 屋根材の一部と思われる炭化材が出土しており、焼失家屋の可能性もある。柱穴のP₂は、貯蔵穴の可能性もある。

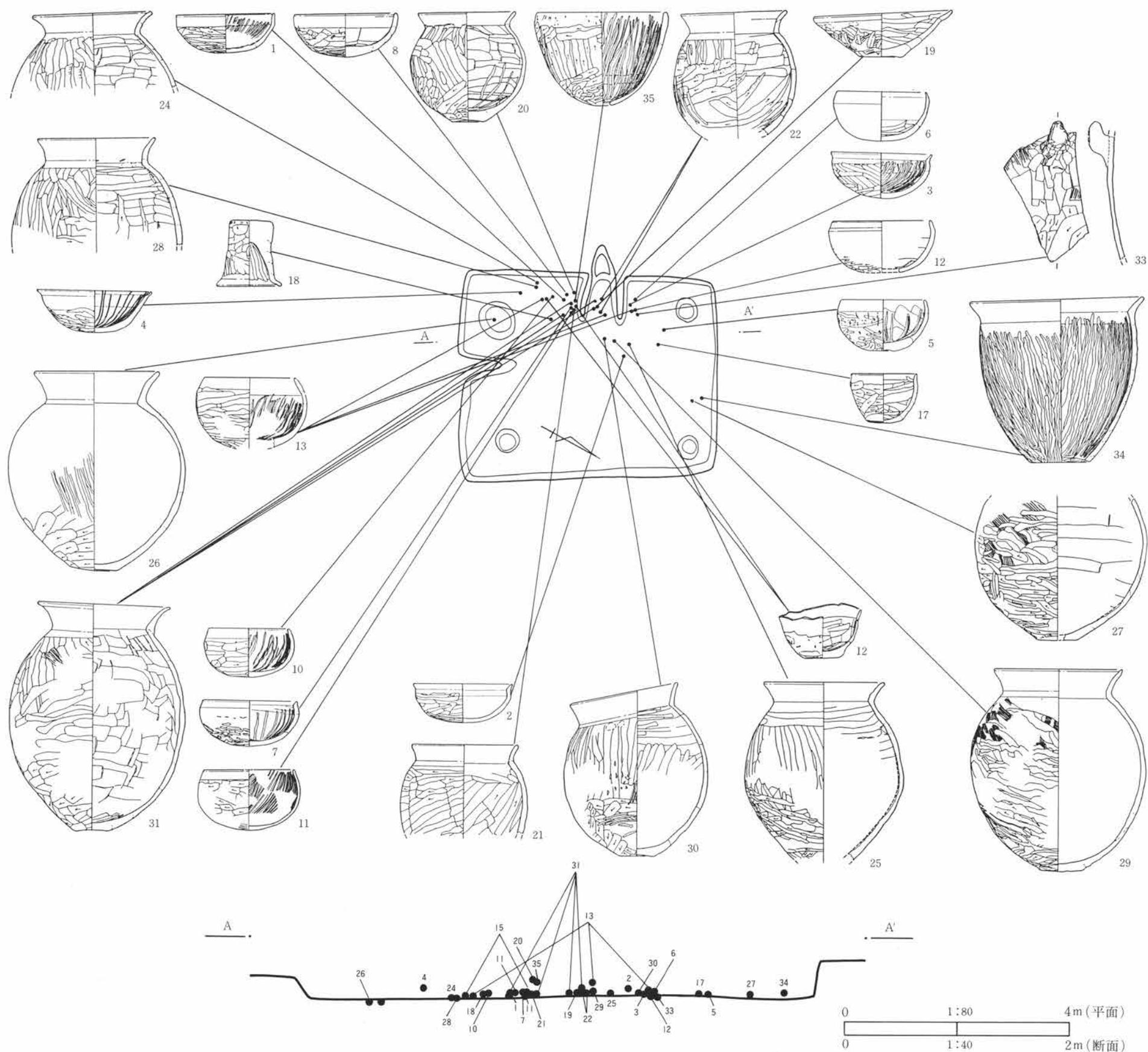


第102図 2区21号住居

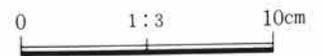
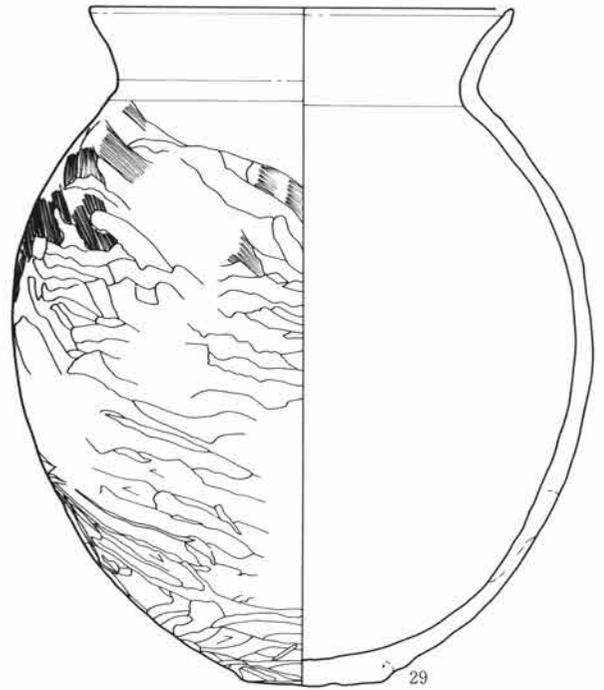
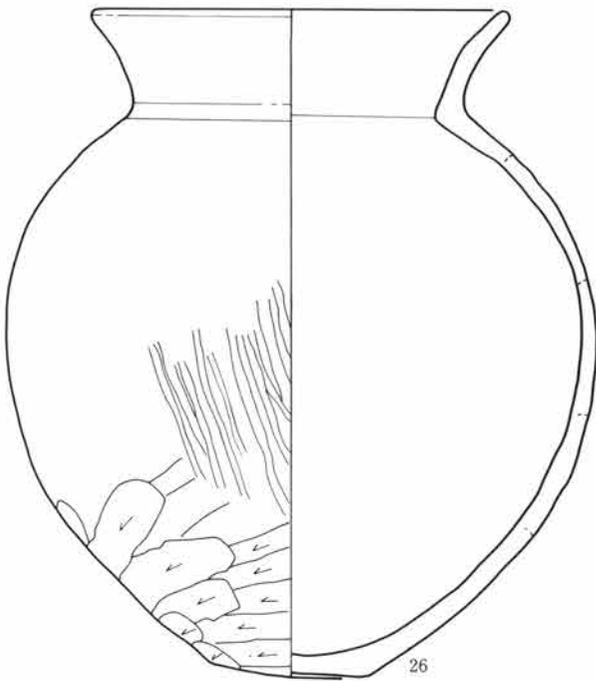
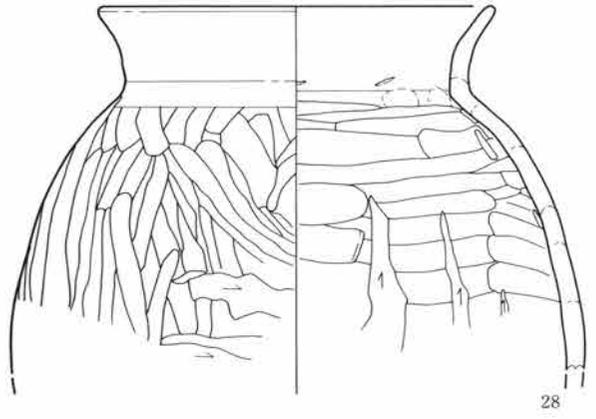
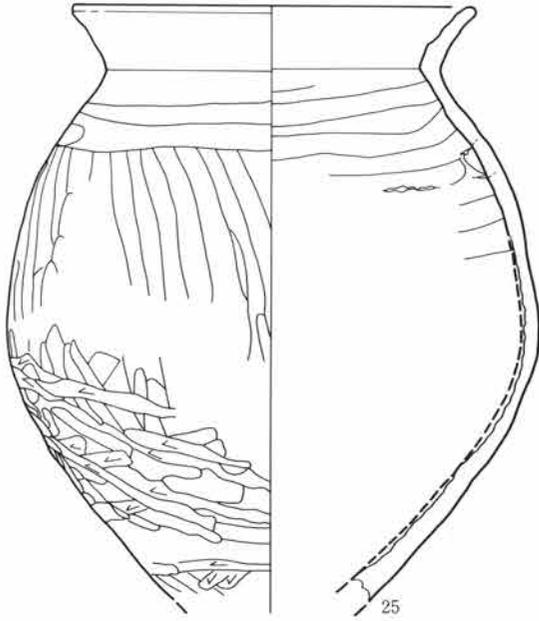
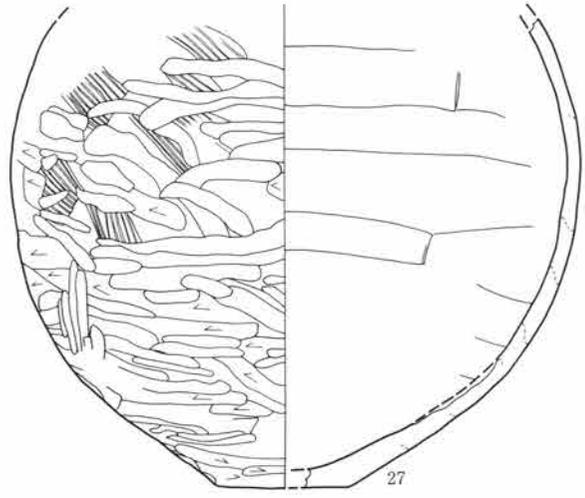
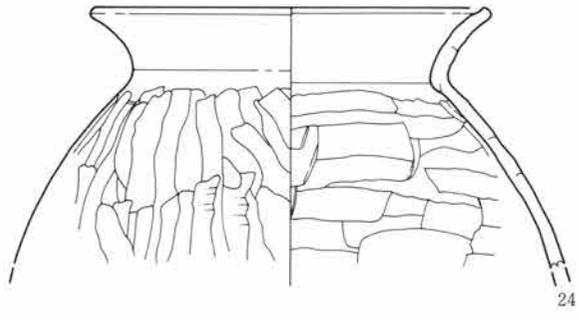
II 調査の内容



第103図 2区21号住居出土遺物(1)

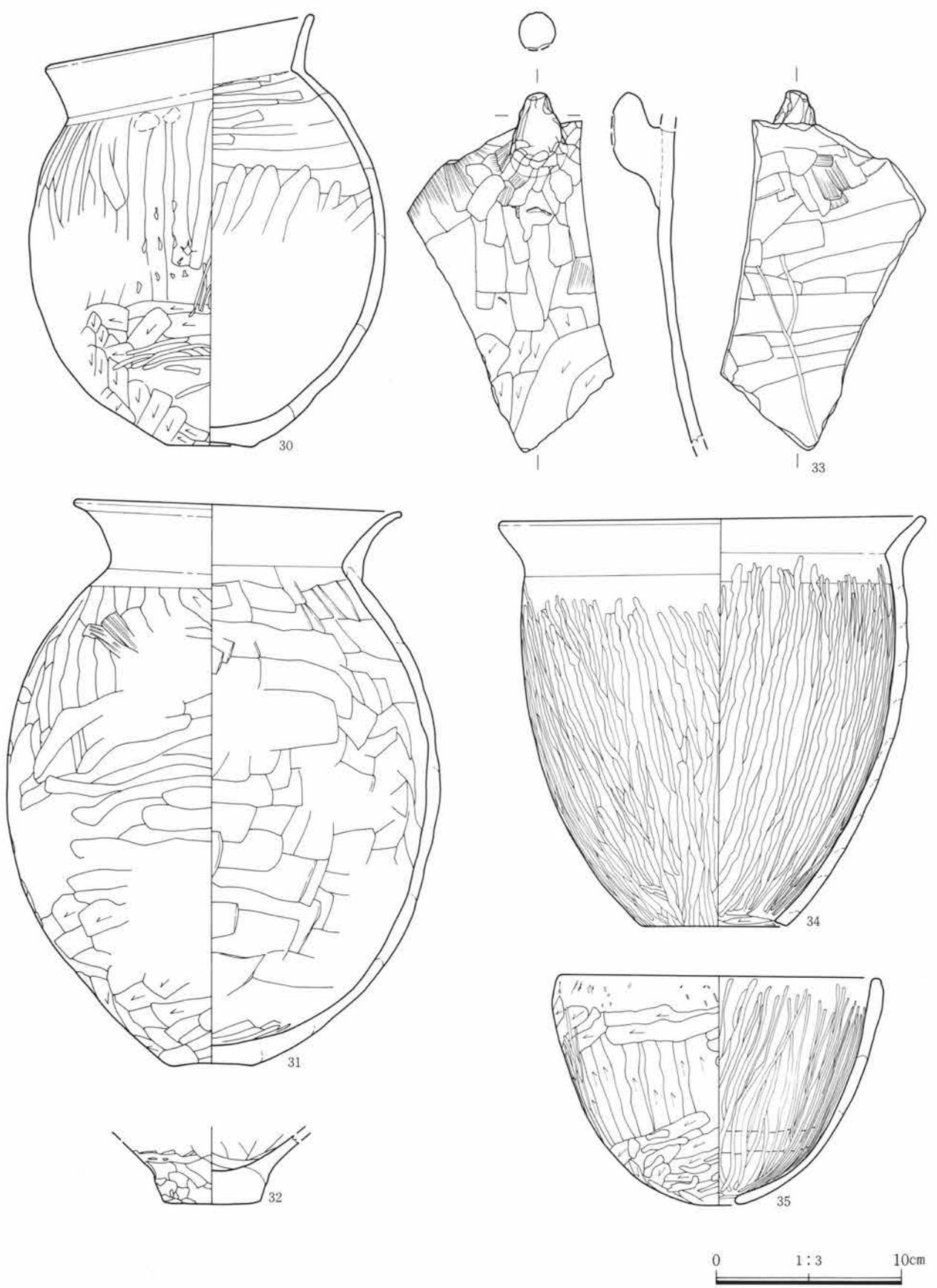


第104図 2区21号住居の遺物出土状況

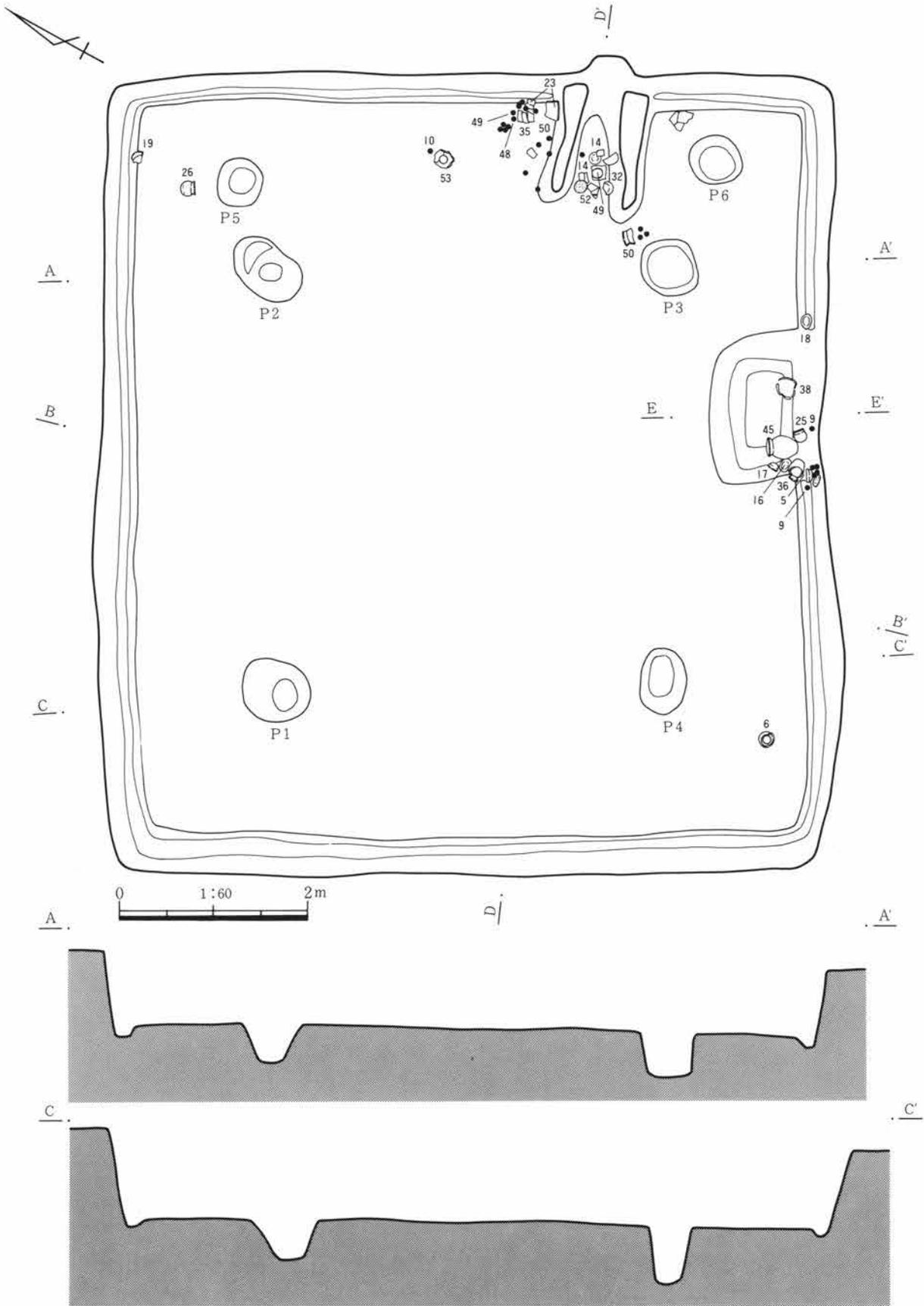


第105図 2区21号住居出土遺物(2)

II 調査の内容

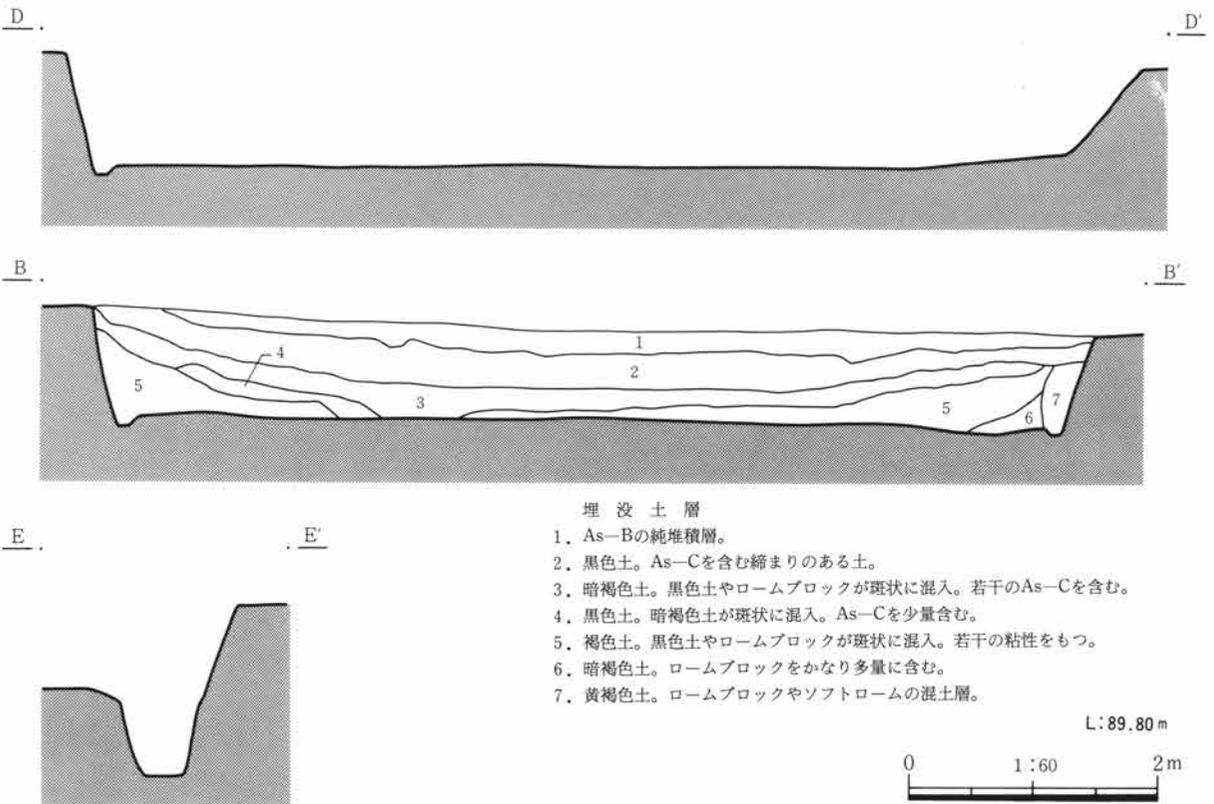


第106図 2区21号住居出土遺物(3)



第107図 2区22号住居(1)

II 調査の内容



第108図 2区22号住居(2)

2区22号住居

位置 Q-4グリッド 写真 PL-45~47

形状 正方形に近似するが、東西軸の若干長い長方形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺8.4×短辺7.7mである。

面積 62.77㎡ 方位 N-60°-E

床面 ローム土を73~97cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもち、北から南側へと比高差約12cmの傾斜が認められる。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

埋没土 最上層に最大25cm厚のAs-Bが堆積する。各層ともレンズ状に堆積し、自然埋没の状態を示す。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ110cm、幅60cmである。

貯蔵穴 南壁中央部に位置する。長軸150×短軸100cmの長方形を呈し、深さ70cmである。開口部付近には坪4点 (No.5・9・16・17)、小型甕1点 (No.25)、甕3

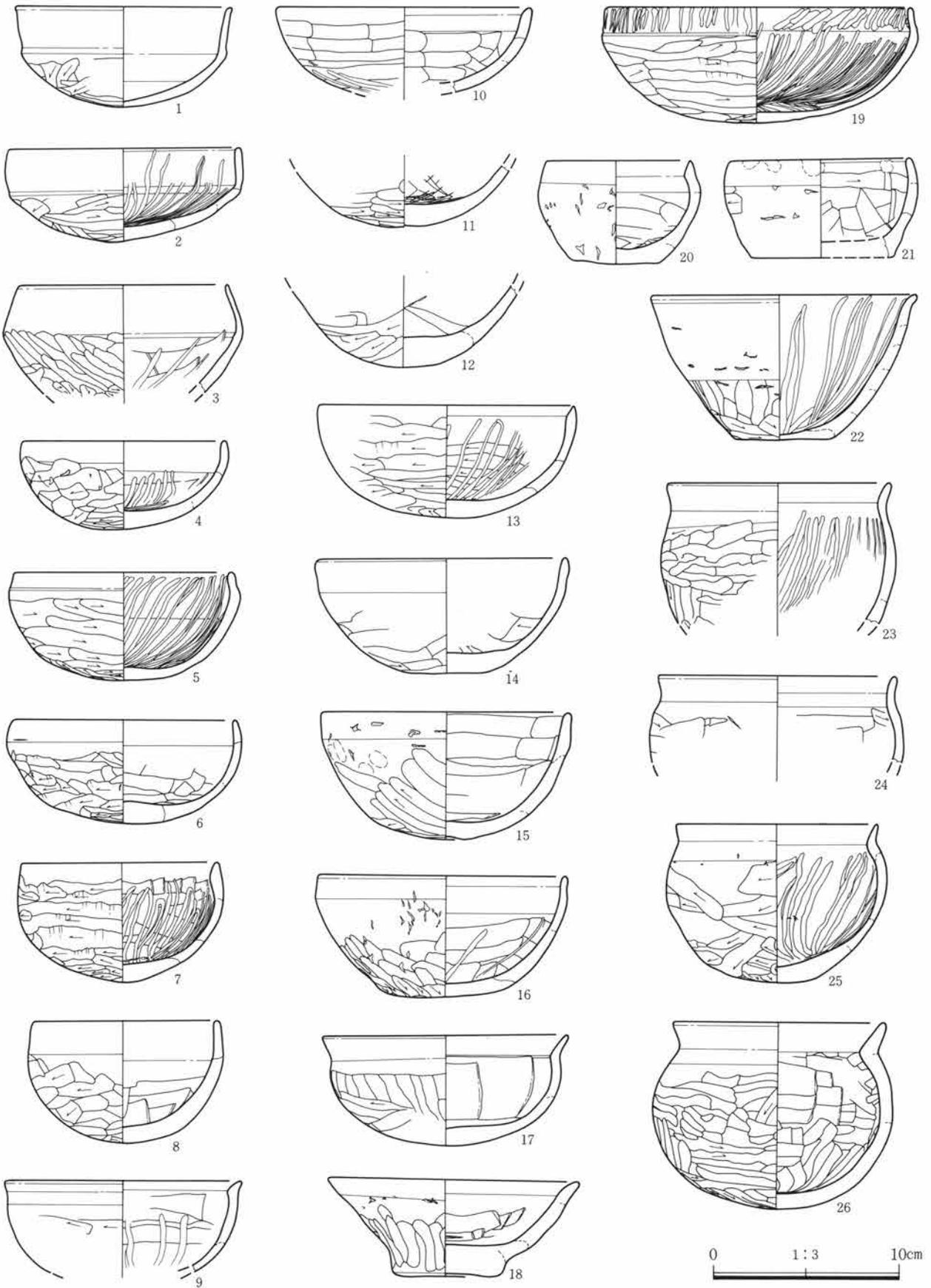
点 (No.36・38・45) が落ち込むように出土した。

柱穴 住居の対角線上にP₁~P₄の支柱穴4本と、性格不明の2本の柱穴が検出された。各支柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その距離はP₁~P₂:4.40m、P₂~P₃:4.20m、P₃~P₄:4.25m、P₄~P₁:4.00mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:65×42cm、P₂:53×36cm、P₃:60×46cm、P₄:50×30cm、P₅:50×30cm、P₆:50×35cmである。

周溝 幅26~47cm、深さ6~9cmの規模で壁面に沿ってほぼ全周する。

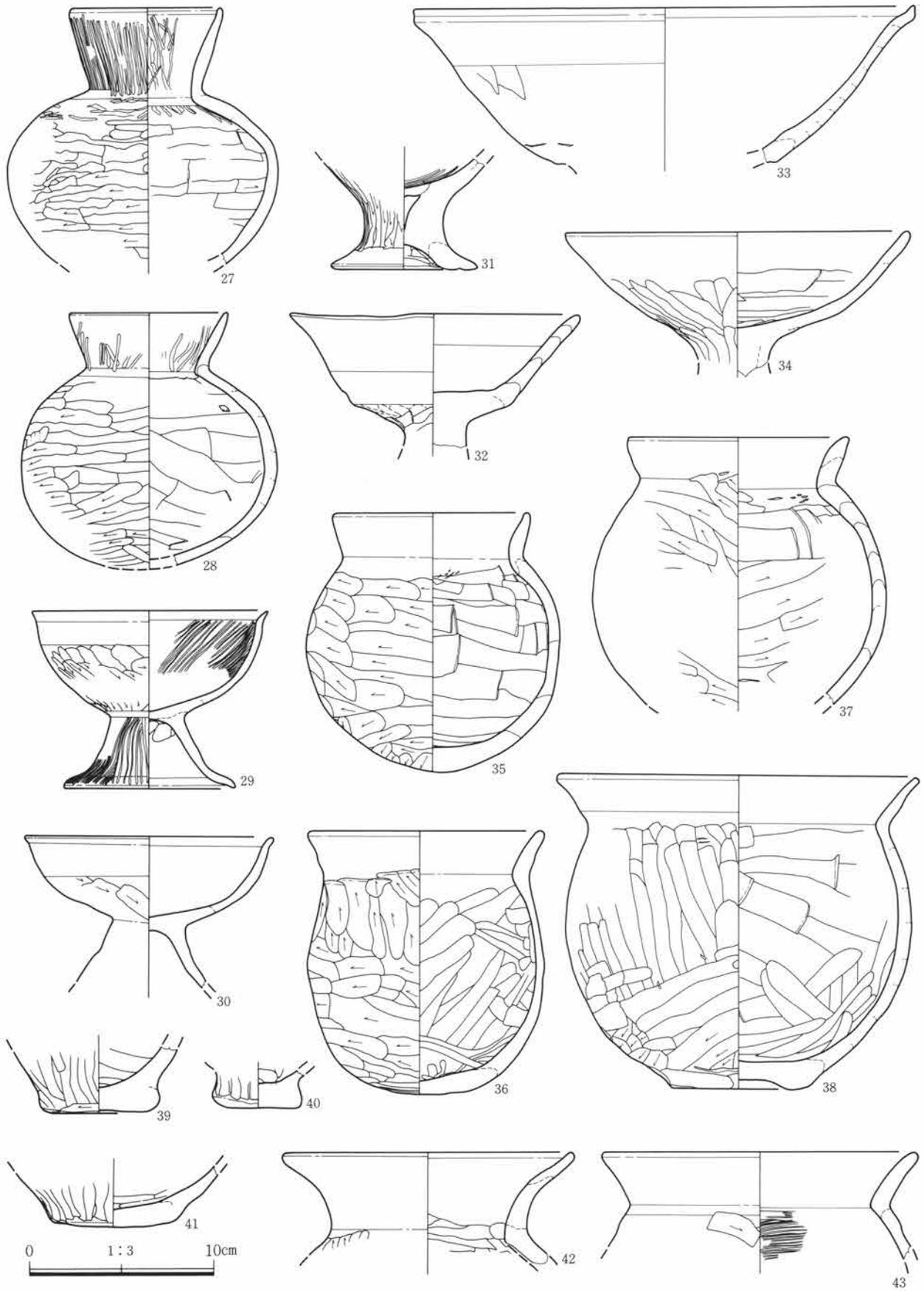
遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏20、高坏6、鉢2、小型甕4、甕19、甗1、壺3、須恵器の高坏1、坏1、甕1の合計58点が出土した。No.10の坏とNo.53の甕が床面に密着し、他はすべて3cm以上浮いて出土した。No.27は2区23号住居、No.57は同8・12・15・21・22・46・47号住居および同3号土壌の埋没土出土の破片とそれぞれ接合関係にある。

(遺物観察表:42~46頁)

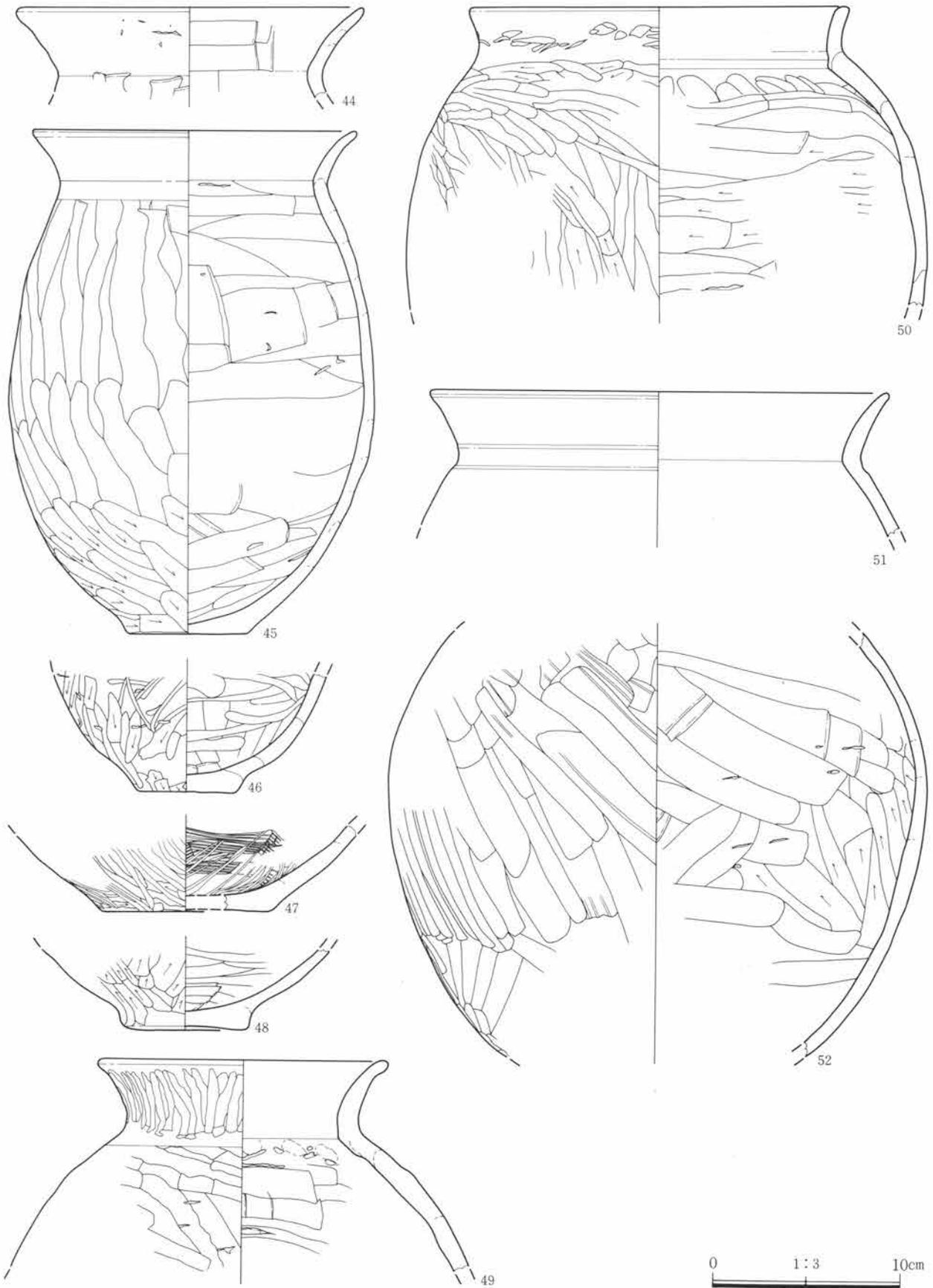


第109図 2区22号住居出土遺物(1)

II 調査の内容

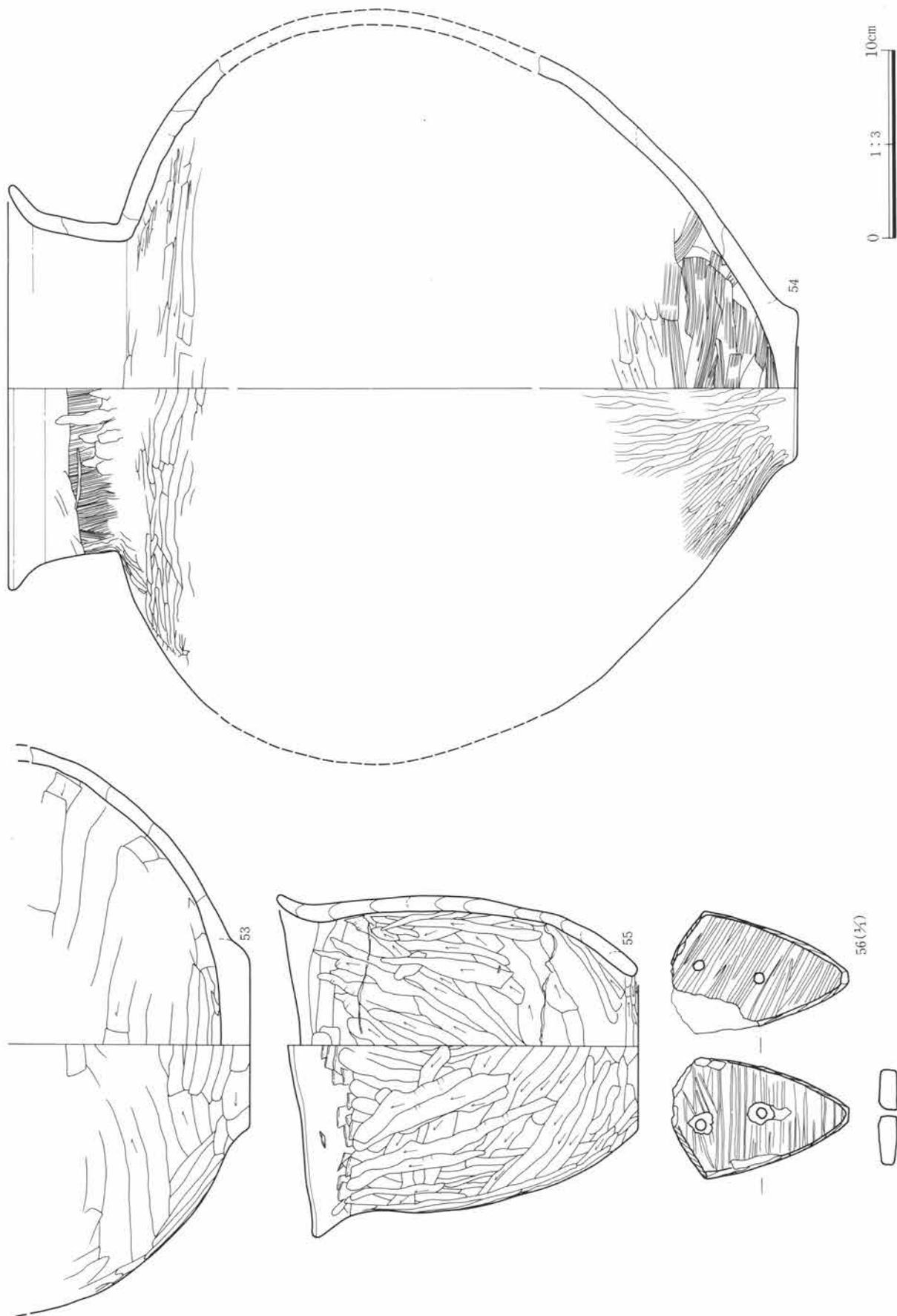


第110図 2区22号住居出土遺物(2)

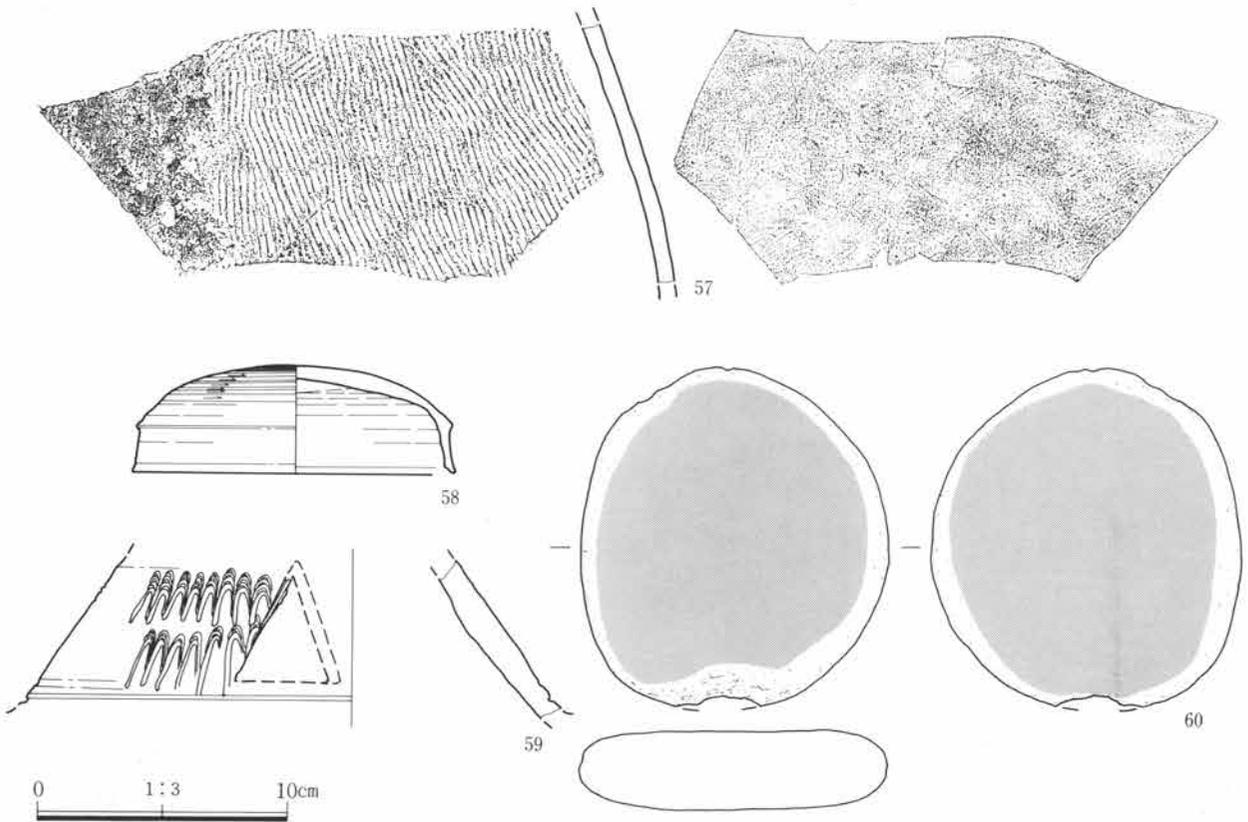


第1111図 2区22号住居出土遺物(3)

II 調査の内容



第112図 2区22号住居出土遺物(4)



第113図 2区22号住居出土遺物(5)

2区23号住居

位置 N-9グリッド 写真 PL-48・49

重複 北側で重複する24号住居に後出する。

形状 正方形を基調としているが、長軸を南北にもつ台形状を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺5.25・4.68×短辺5.10mである。

面積 24.67㎡ 方位 N-65°-E

床面 ローム土を48~62cm掘り込んで床面としている。凹凸面および傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

埋没土 上層にはAs-Cまじりの黒褐色土が、下層にはロームブロックまじりの褐色土が堆積する。自然埋没の状態を示す。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ90cm、幅30cmである。煙道部は幅30cm、

長さ85cmの掘り方のみ残存し、燃焼部より約30°の角度で立ち上がる。燃焼部内には甕 (No.30) と鉢 (No.19) が掛けられた状態で出土した。また左袖上には坏 (No.3) が置かれていた。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長径75×短径65cmの円形を呈し、深さ60cmである。

柱穴 住居の対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その距離は $P_1 \sim P_2$:1.95m、 $P_2 \sim P_3$:2.17m、 $P_3 \sim P_4$:1.88m、 $P_4 \sim P_1$:2.16mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、 P_1 :45×66cm、 P_2 :38×40cm、 P_3 :33×48cm、 P_4 :45×55cmである。

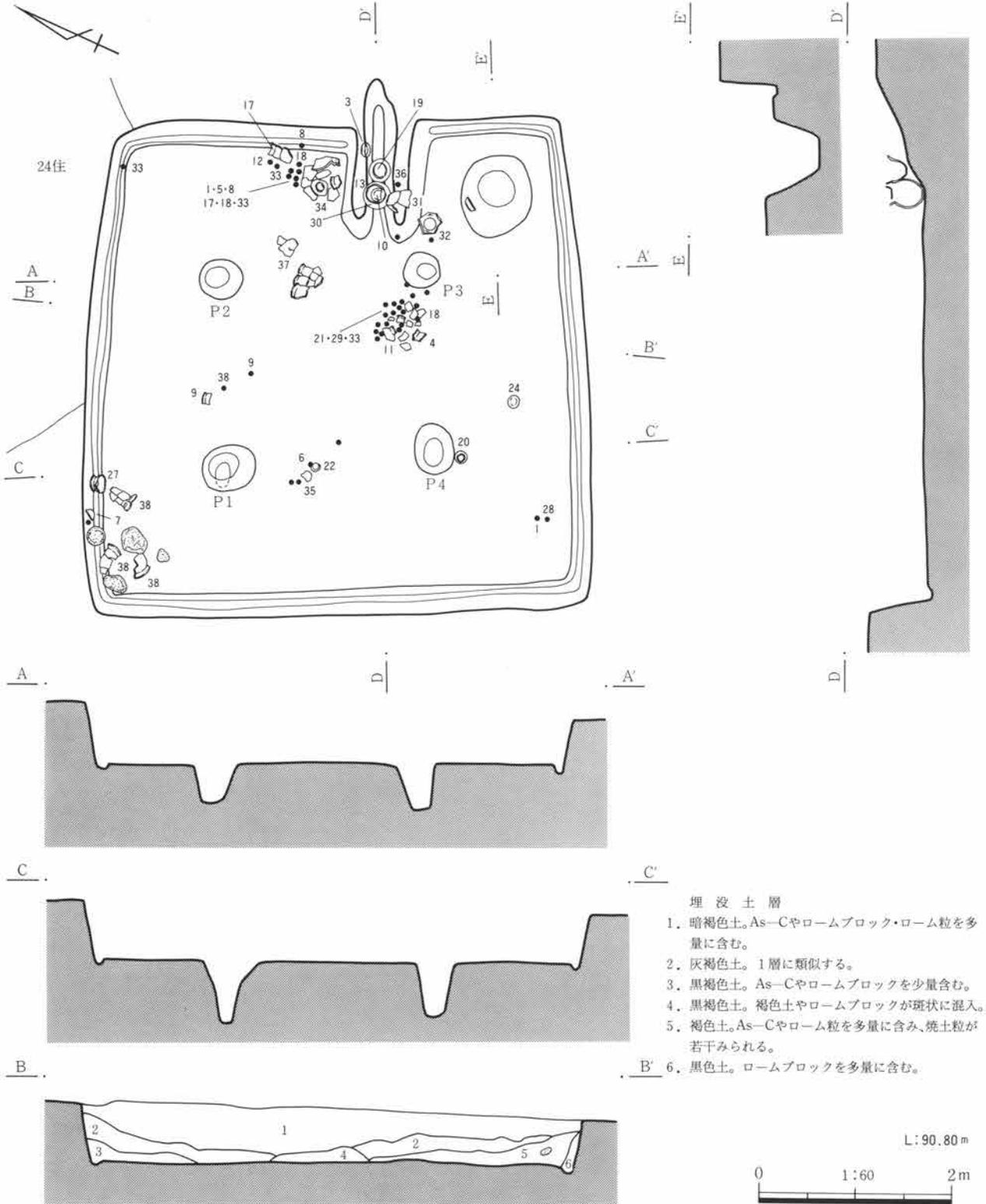
周溝 幅15~29cm、深さ4~6cmの規模で壁面に沿ってほぼ全周する。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏13、高坏1、鉢5、甕15、甗5の合計39点が出土した。No.1・4・5・8・9・11・12・17・18・20・21・23・24・29・32~34・37・38は床面に密着して、

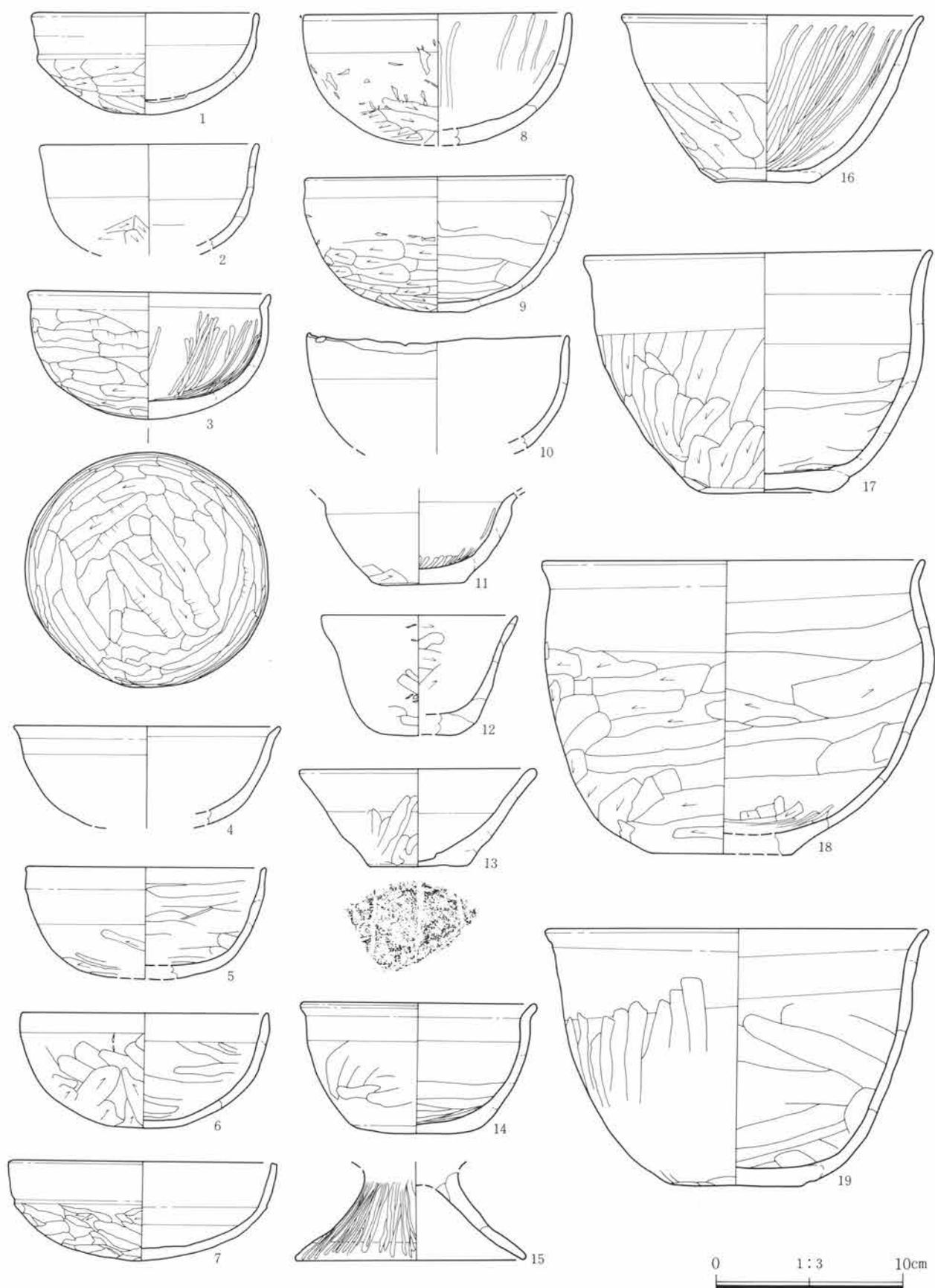
II 調査の内容

他は床面より15~30cm浮いて出土した。No.37の甗は床面に押し潰された状態で出土している。また北西隅より最大径20~30cmの河床礫4点とNo.38の甗とNo.27の

甗が、住居内に流れ込んだような状態で床面より浮いて出土している。(遺物観察表:46~48頁)

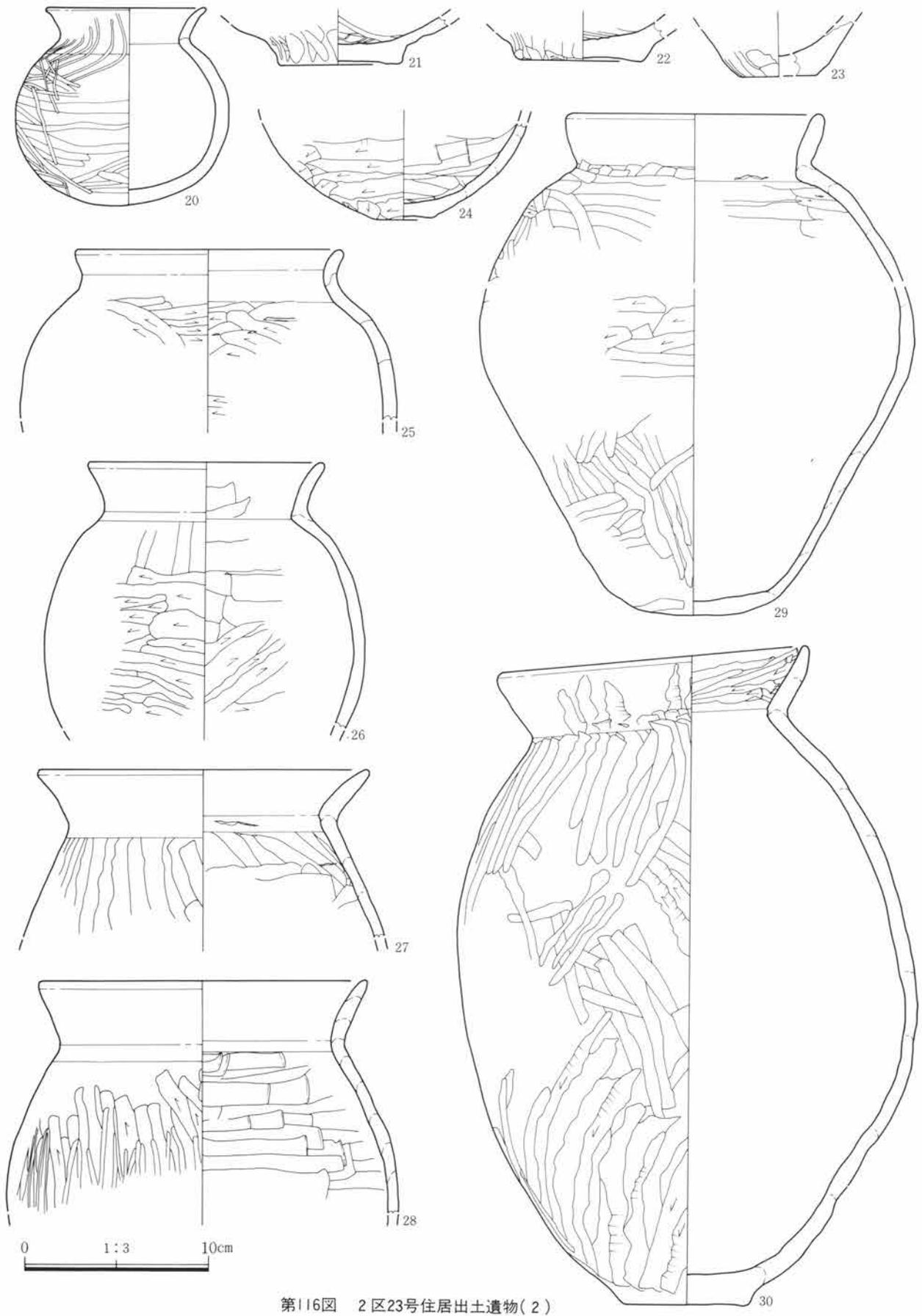


第114図 2区23号住居

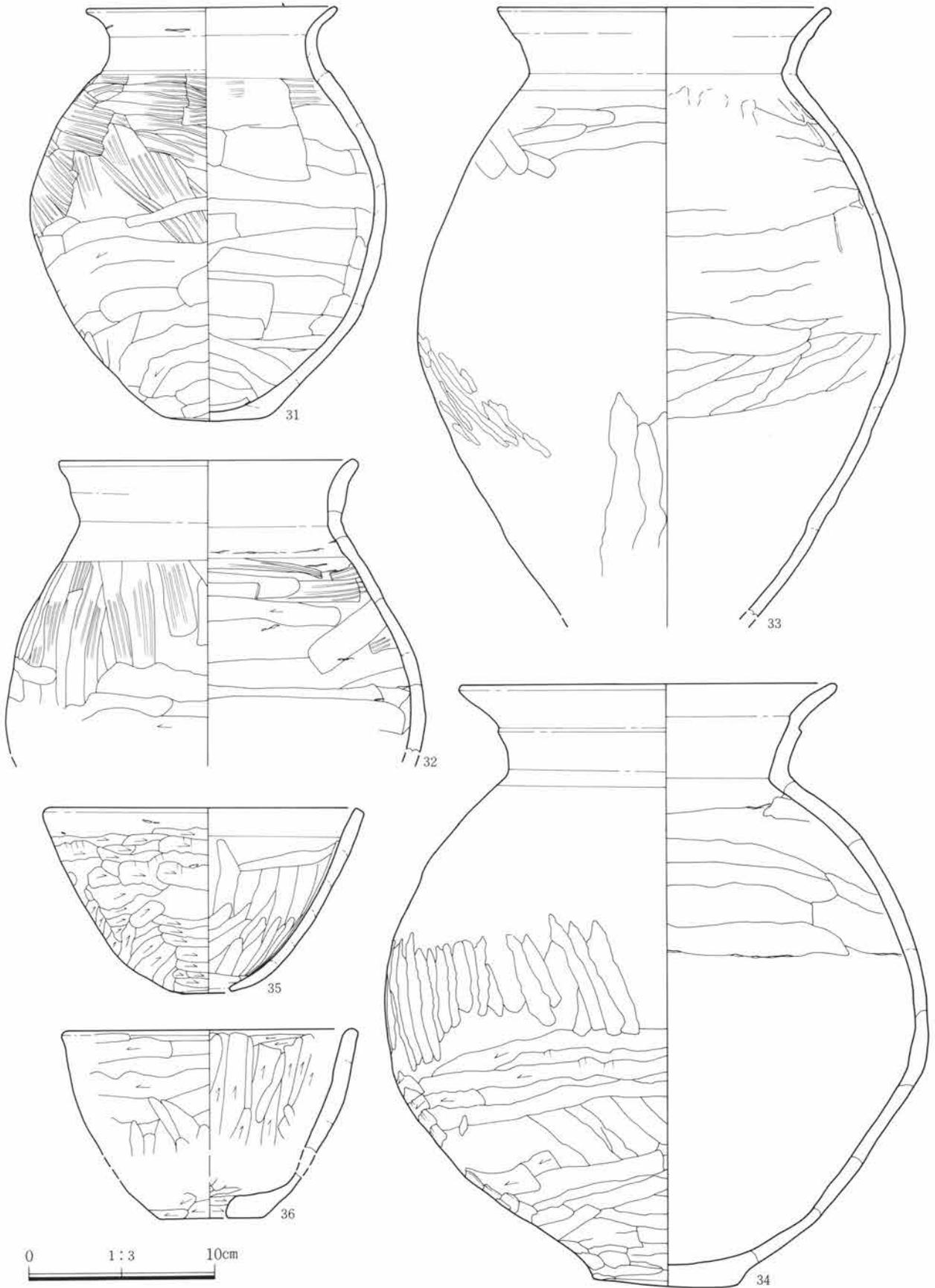


第115図 2区23号住居出土遺物(1)

II 調査の内容

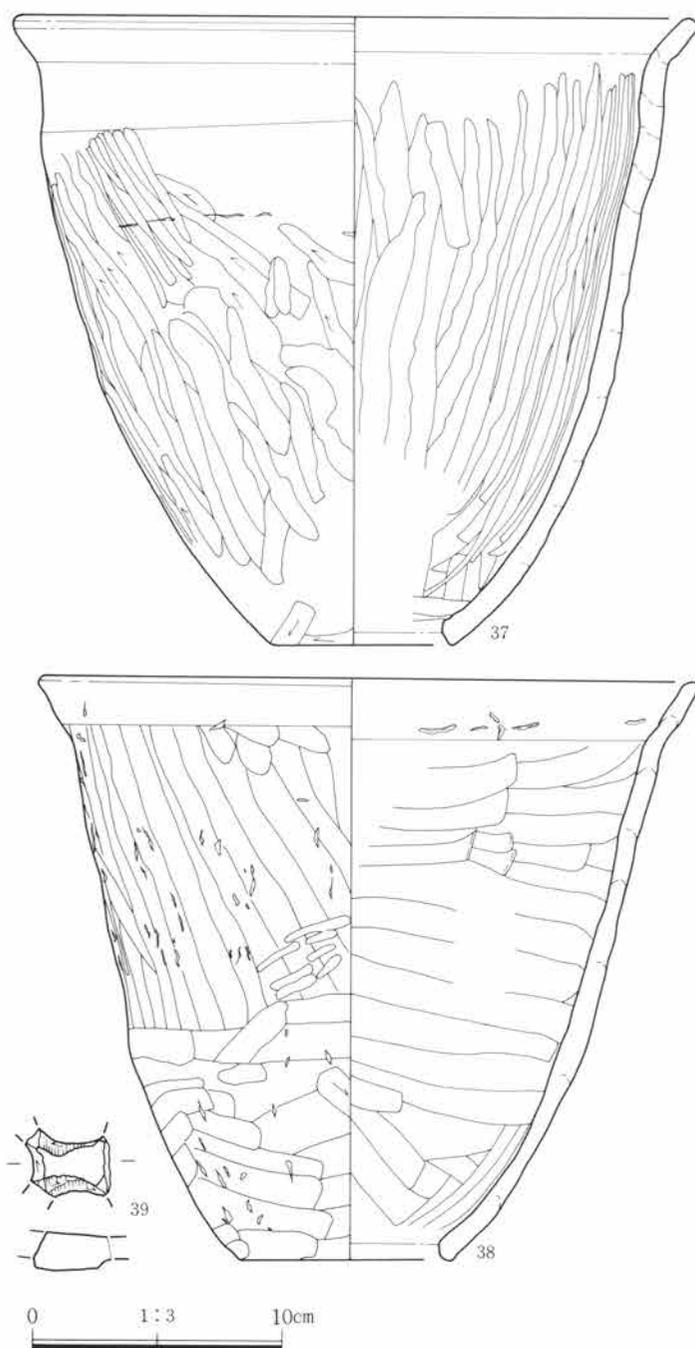


第116図 2区23号住居出土遺物(2)



第117図 2区23号住居出土遺物(3)

II 調査の内容



第118図 2区23号住居出土遺物(4)

2区24号住居

位置 N-10グリッド 写真 PL-50・51

重複 23・40号住居に先行する。

形状 一辺が6.9mの正方形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。

面積 (45.72m²) 方位 N-37°-E

床面 ローム土を54~71cm掘り込んで床面としてい

る。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

埋没土 中層にロームブロックを多量に含んだ黒褐色土が堆積するが、部分的にロームブロックと互層に堆積している。23号住居あるいは40号住居を掘削した排土で当住居内を埋めもどした可能性が高い。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ110cm、幅43cmである。煙道部は燃焼部の底面から約30cm上位の壁面中途を水平に掘り抜き、その後垂直に近い角度で立ち上がる。燃焼部内より坏(No.4・10)、甗(No.46)が出土した。

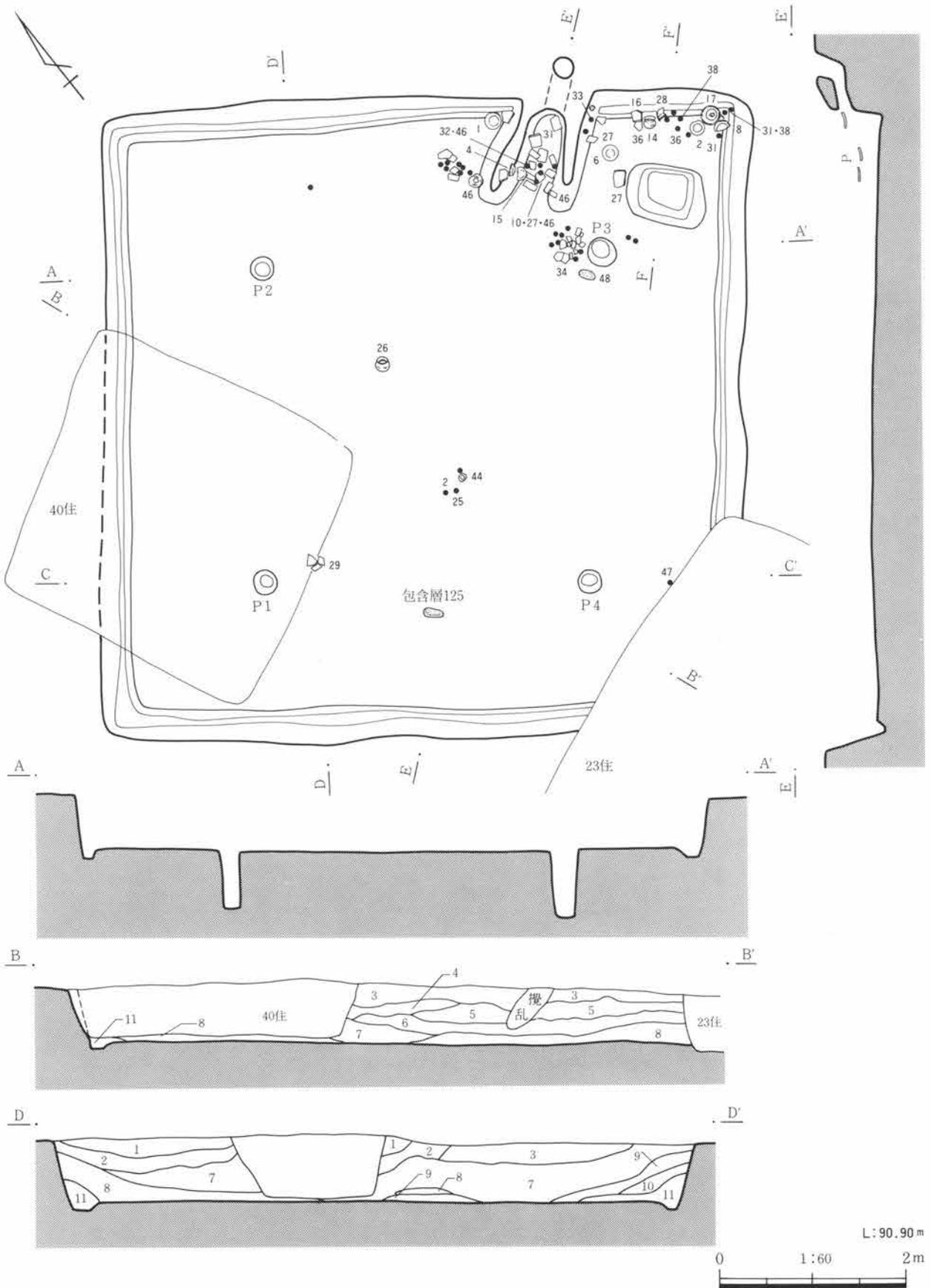
貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長軸87×短軸62cmの隅丸方形を呈し、深さ52cmである。

柱穴 住居の対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その距離はP₁~P₂: 3.35m、P₂~P₃: 3.67m、P₃~P₄: 3.53m、P₄~P₁: 3.51mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁: 27×58cm、P₂: 25×61cm、P₃: 28×73cm、P₄: 26×60cmである。

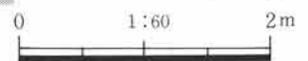
周溝 幅25~34cm、深さ3~9cmの規模で壁面に沿ってほぼ全周する。

遺物 埋没中からの出土を含め実測可能な土器は、坏16、高坏4、甗17、甗5、壺4、小型粗製土器1の合計47点が出土した。No.27・34・46・47は床面に密着して、他は床面より3~11cm浮いて出土した。P₃南西の床面に密着して薦編み石No.48 1点と、南壁近くの床面上10cmより弥生時代の太型蛤刃石斧1点(242頁No.125)が出土した。

(遺物観察表: 48~51)

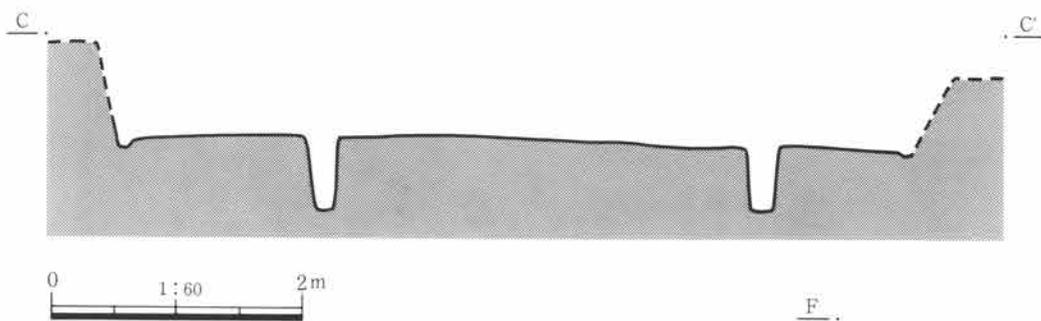


L: 90.90 m



第119図 2区24号住居

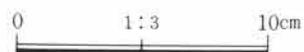
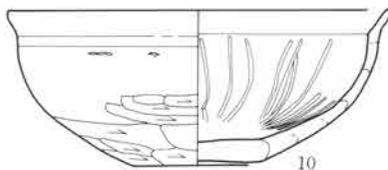
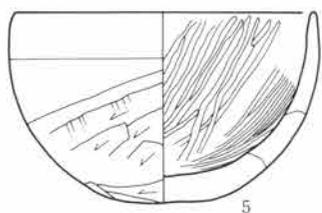
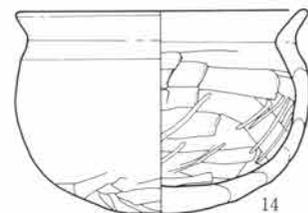
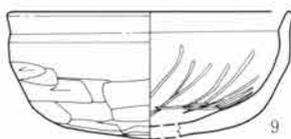
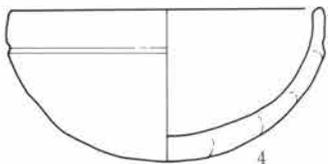
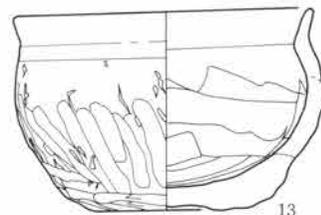
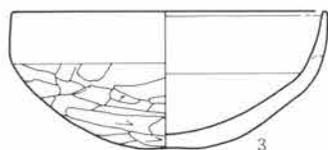
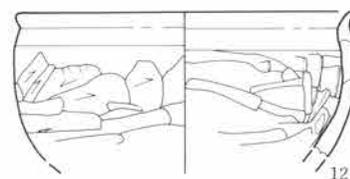
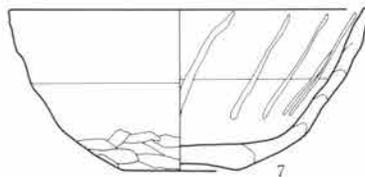
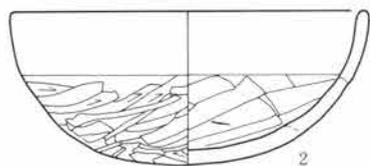
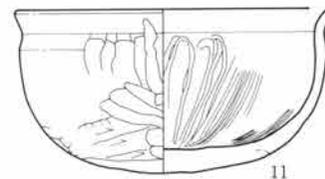
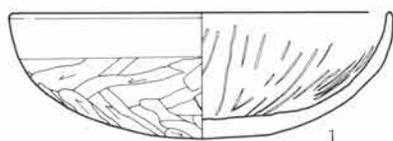
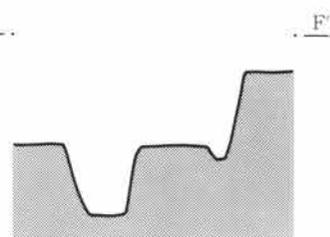
II 調査の内容



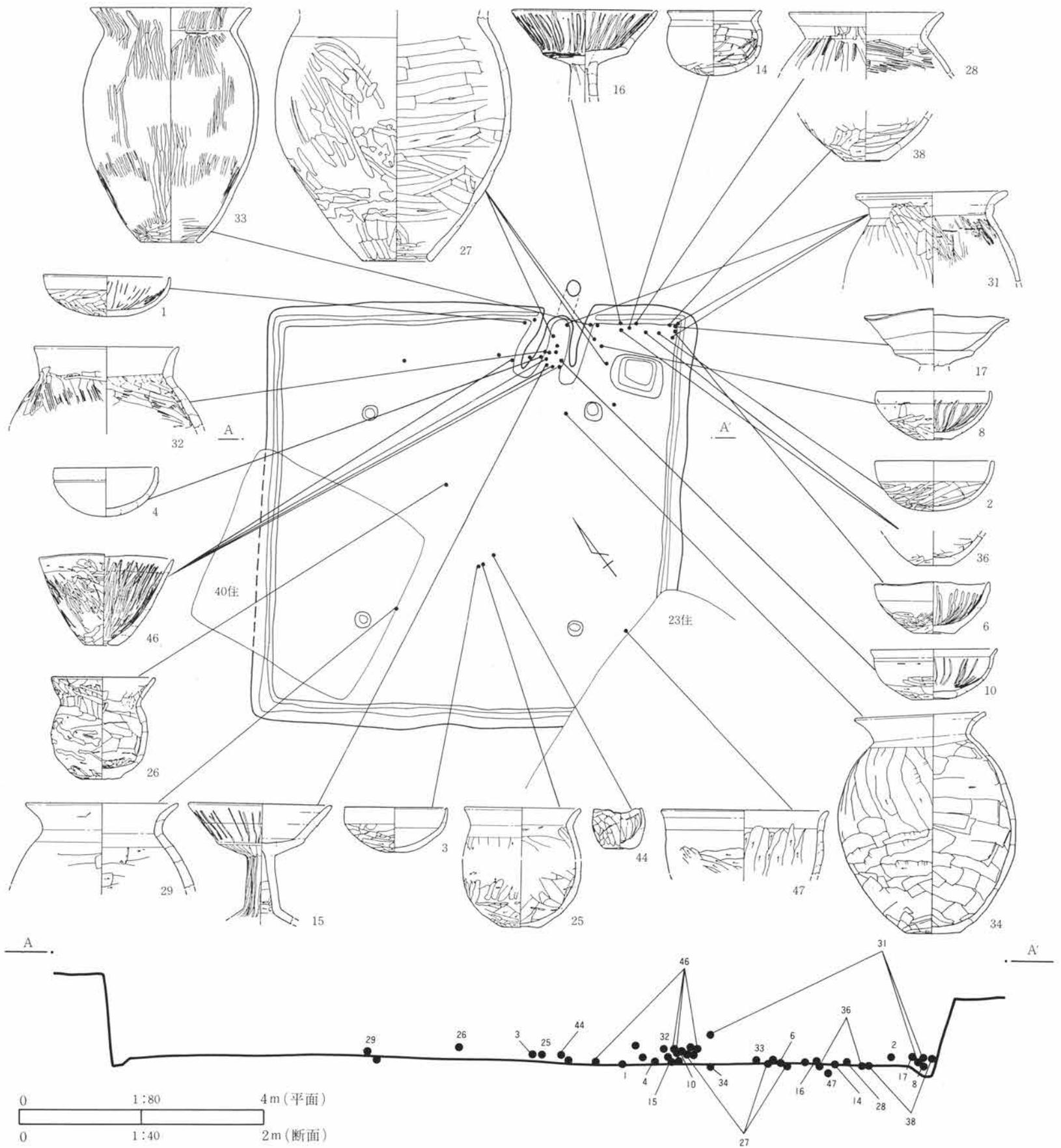
埋没土層

1. 暗褐色土。As-Cや焼土粒を多量に含む。
2. 黒色土。As-Cやロームブロックを多量に含む。
3. 黒褐色土。As-Cを多量に含む。
4. 黒褐色土。3層に類似するが、ロームブロックを少量含む。
5. 暗褐色土。As-Cやロームブロックを少量含む。
6. 黒色土。2層に類似するが、As-Cやロームの混入

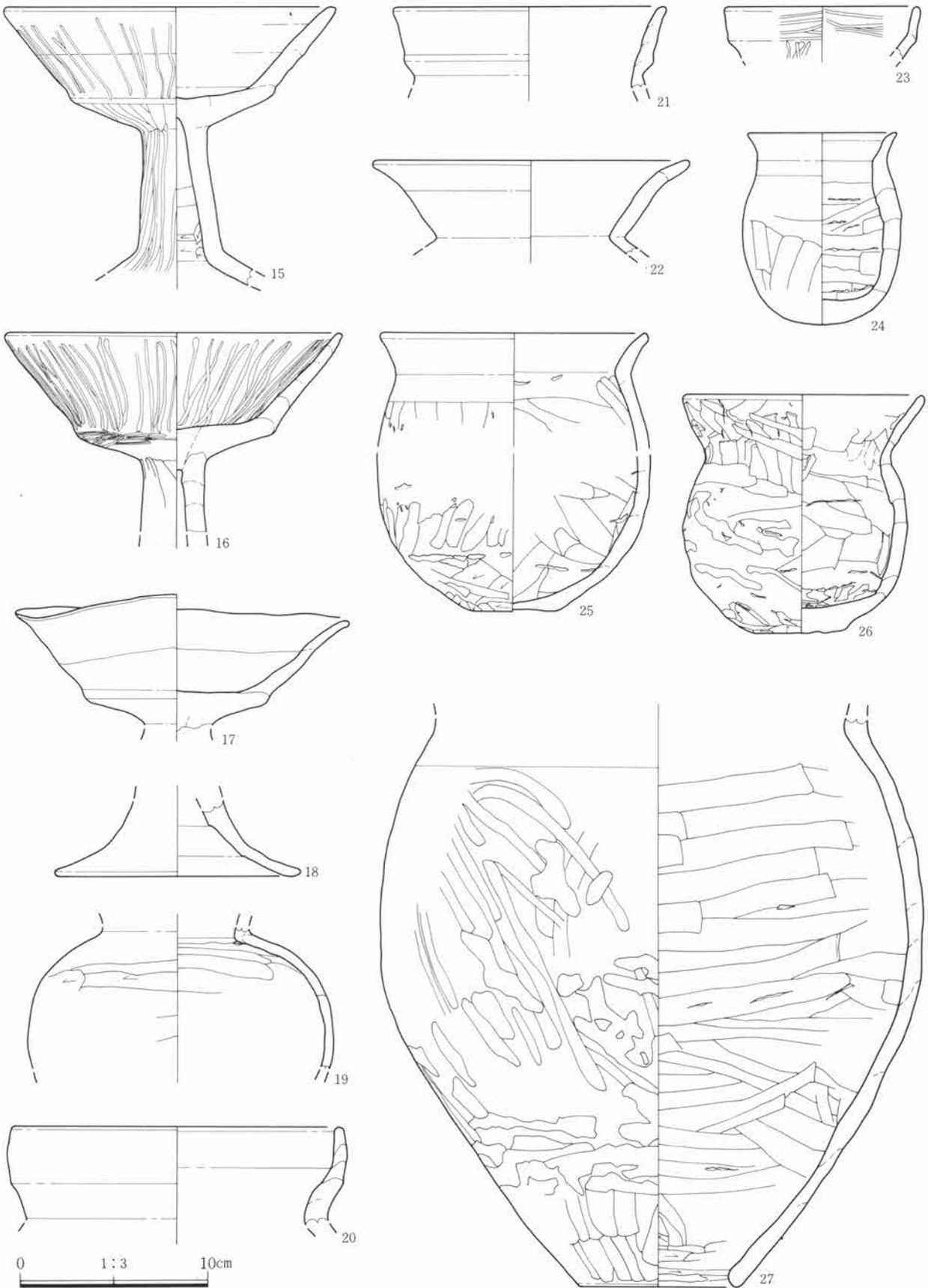
7. 暗褐色土。ロームブロックを多量に含む。
8. 暗黄褐色土。黒色土やロームブロックを斑状に含む固く締まった土。
9. 黒色土。ローム粒を多量に含む。
10. 黒色土。9層に類似するが、ローム粒が少ない。
11. 暗褐色土。7層に類似する。



第120図 2区24号住居と出土遺物

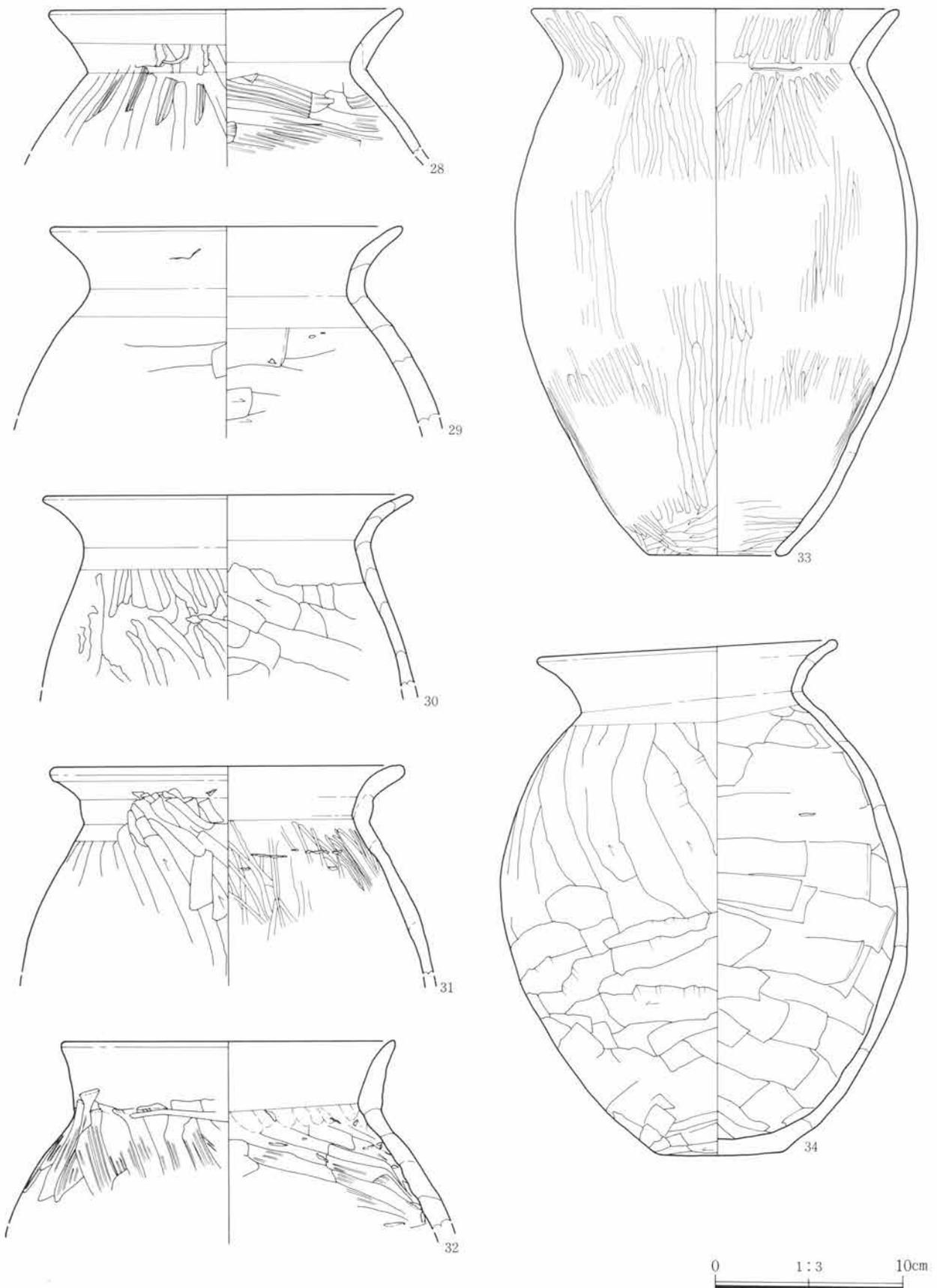


第121図 2区24号住居の遺物出土状況

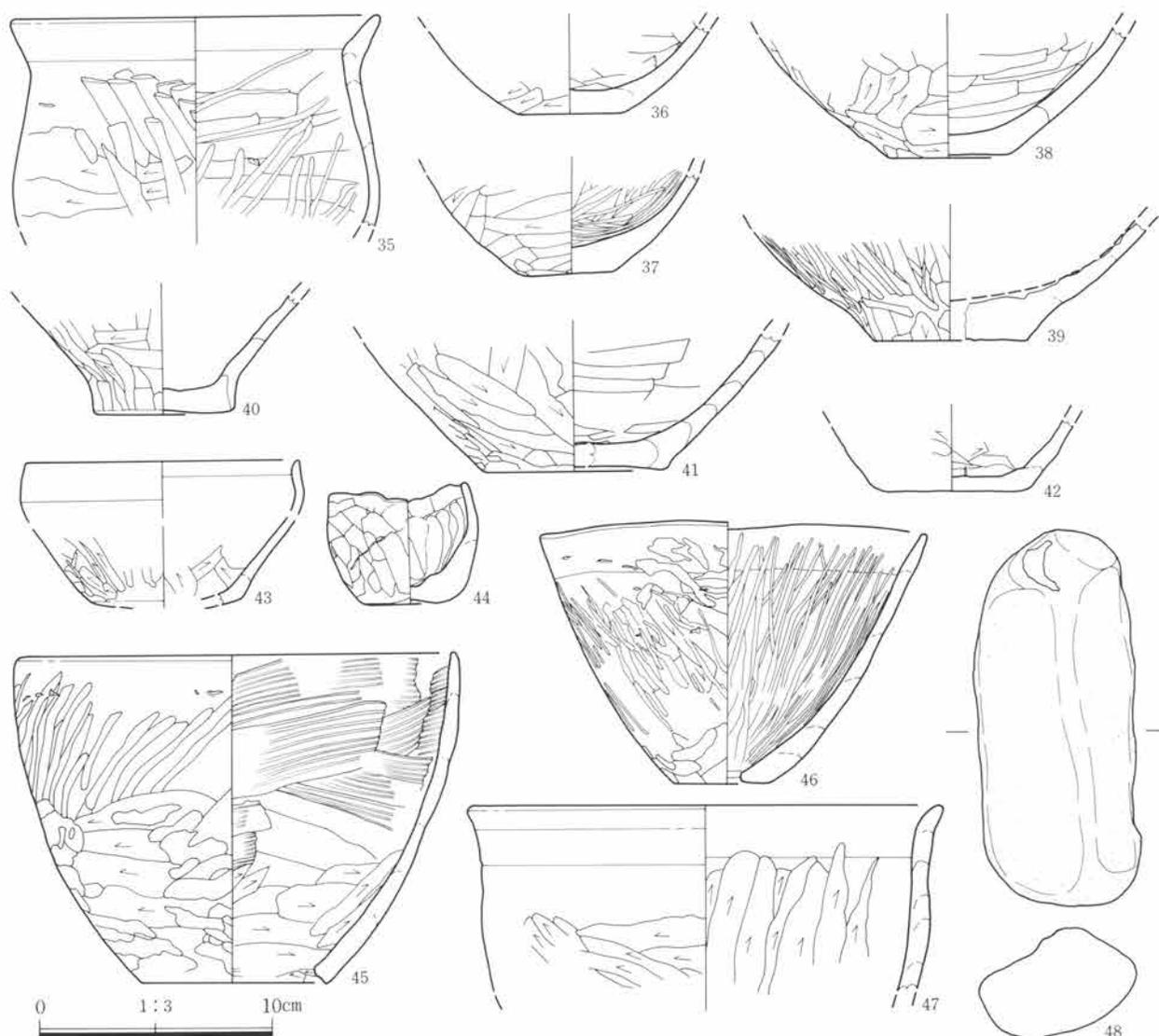


第122図 2区24号住居出土遺物(1)

II 調査の内容



第123図 2区24号住居出土遺物(2)



第124図 2区24号住居出土遺物(3)

2区25号住居

位置 P-11グリッド 写真 PL-52

形状 長軸を東西にもつ長方形を呈する。四隅はやや丸く、南北両辺の周壁は弧状に外側へ膨らむ。規模は長辺4.70×短辺3.50mである。

面積 15.22m² 方位 N-60°-E

床面 ローム土を55~90cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

埋没土 上層には黒ボク的な黒色土が、底面に近い下

層にはFAの純層が堆積する。自然埋没の状態を示す。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ75cm、幅35cmである。煙道部は幅32cm、長さ30cmの掘り方のみ残存するが、燃焼部の底面から約40cm上位の壁面中途を水平に掘り抜いている。燃焼部内にはNo.11の甕が掛けられた状態で出土した。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長軸57×短軸47cmの方形を呈し、深さ68cmである。

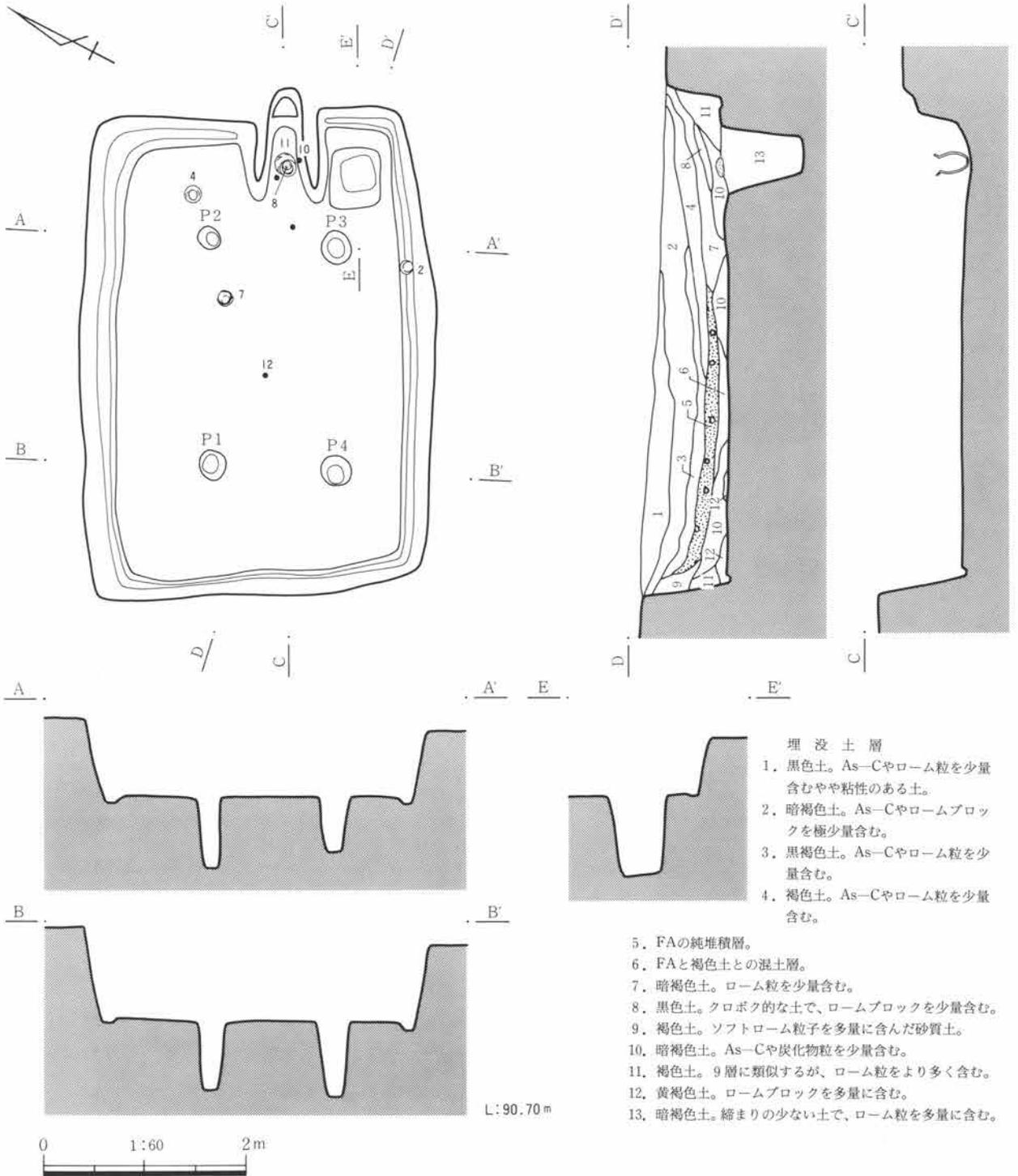
柱穴 住居の対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その距離はP₁~P₂:2.20m、P₂~P₃:1.24m、P₃~

II 調査の内容

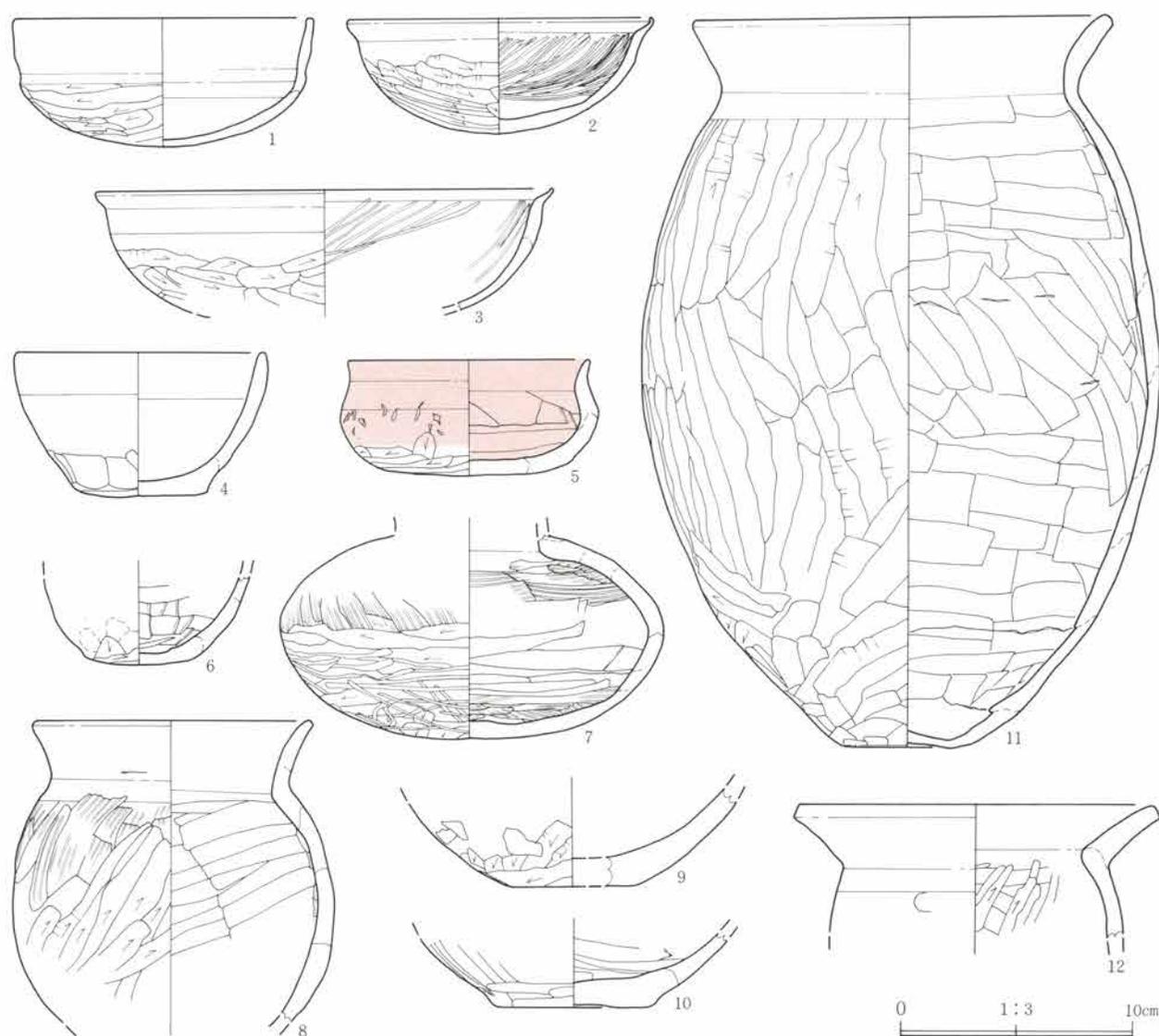
P₄:2.22m、P₄~P₁:1.26mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:28×66cm、P₂:20×69cm、P₃:27×56cm、P₄:30×74cmである。

周溝幅18~40cm、深さ4~7cmの規模で壁面に沿って全周する。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏5、甕6、壺1の合計12点が出土した。No.4・7・12は床面に密着して、他は床面より21cm以上浮いて出土した。No.7は2区16号住居埋没土中の破片と接合関係にある。(遺物観察表:51・52頁)



第125図 2区25号住居



第126図 2区25号住居出土遺物

2区27号住居

位置 K-10グリッド 写真 PL-53・55

形状 正方形を基調とするが、東西軸の若干長い菱形形状を呈する。四隅は角張り、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺4.8×短辺4.6mである。

面積 21.32㎡ 方位 N-70°-E

床面 ローム土を44~58cm掘り込んで床面としている。凹凸面および傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられ、そ

の規模は長さ70cm、幅26cmである。煙道部は幅28cm、長さ30cmの掘り方のみ残存する。燃烧部内より坏や甕の破片が出土し、その中央部には河床礫を利用した支脚が据えられていた。

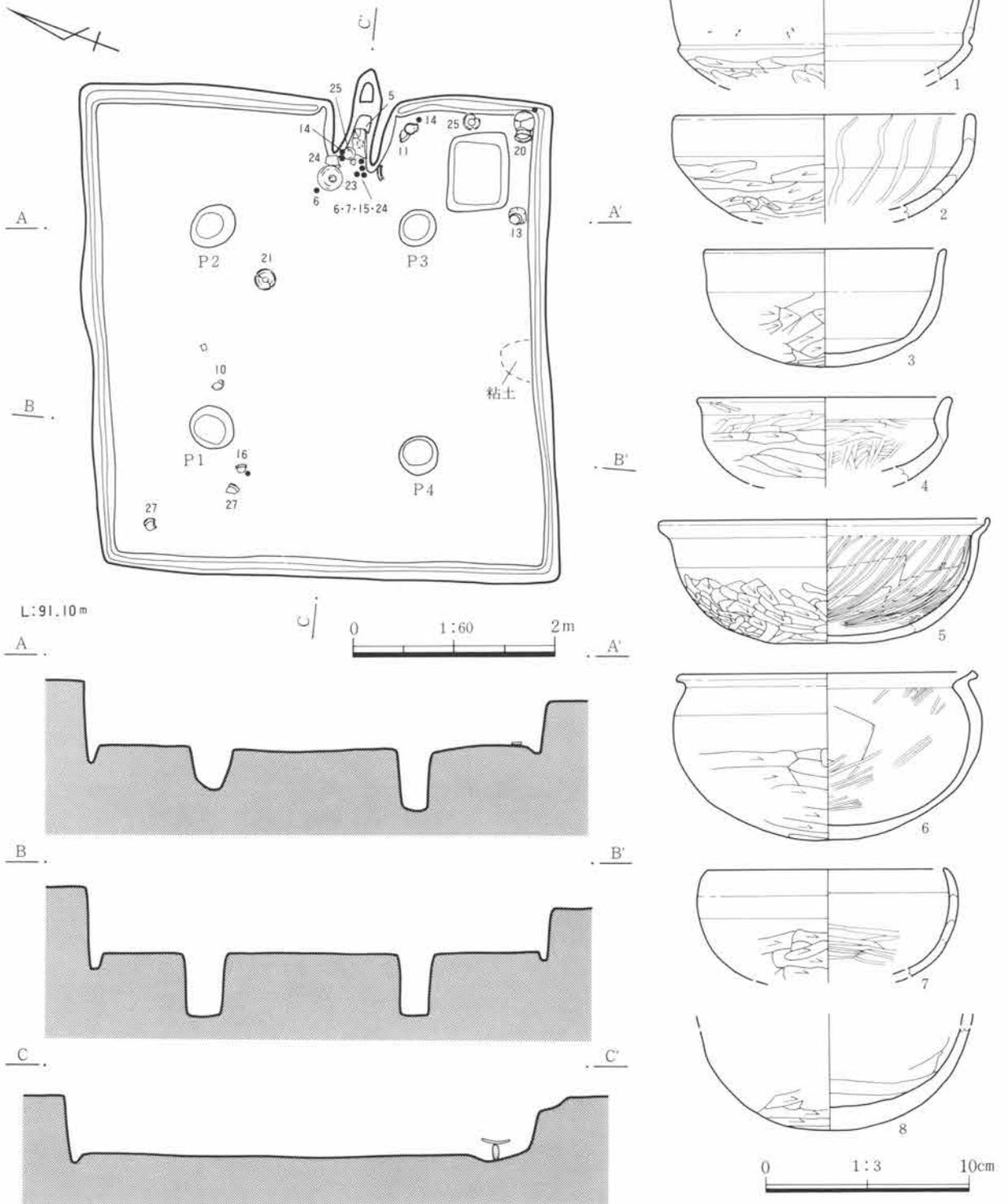
貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長軸75×短軸60cmの方形を呈し、深さ55cmである。

柱穴 住居の対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その規模は $P_1 \sim P_2 : 2.00\text{m}$ 、 $P_2 \sim P_3 : 2.05\text{m}$ 、 $P_3 \sim P_4 : 2.20\text{m}$ 、 $P_4 \sim P_1 : 2.10\text{m}$ である。また各柱穴の規模(径×深さ)は、 $P_1 : 42 \times 60\text{cm}$ 、 $P_2 : 40 \times 40\text{cm}$ 、 $P_3 : 35 \times 62\text{cm}$ 、 $P_4 : 38 \times 60\text{cm}$ である。

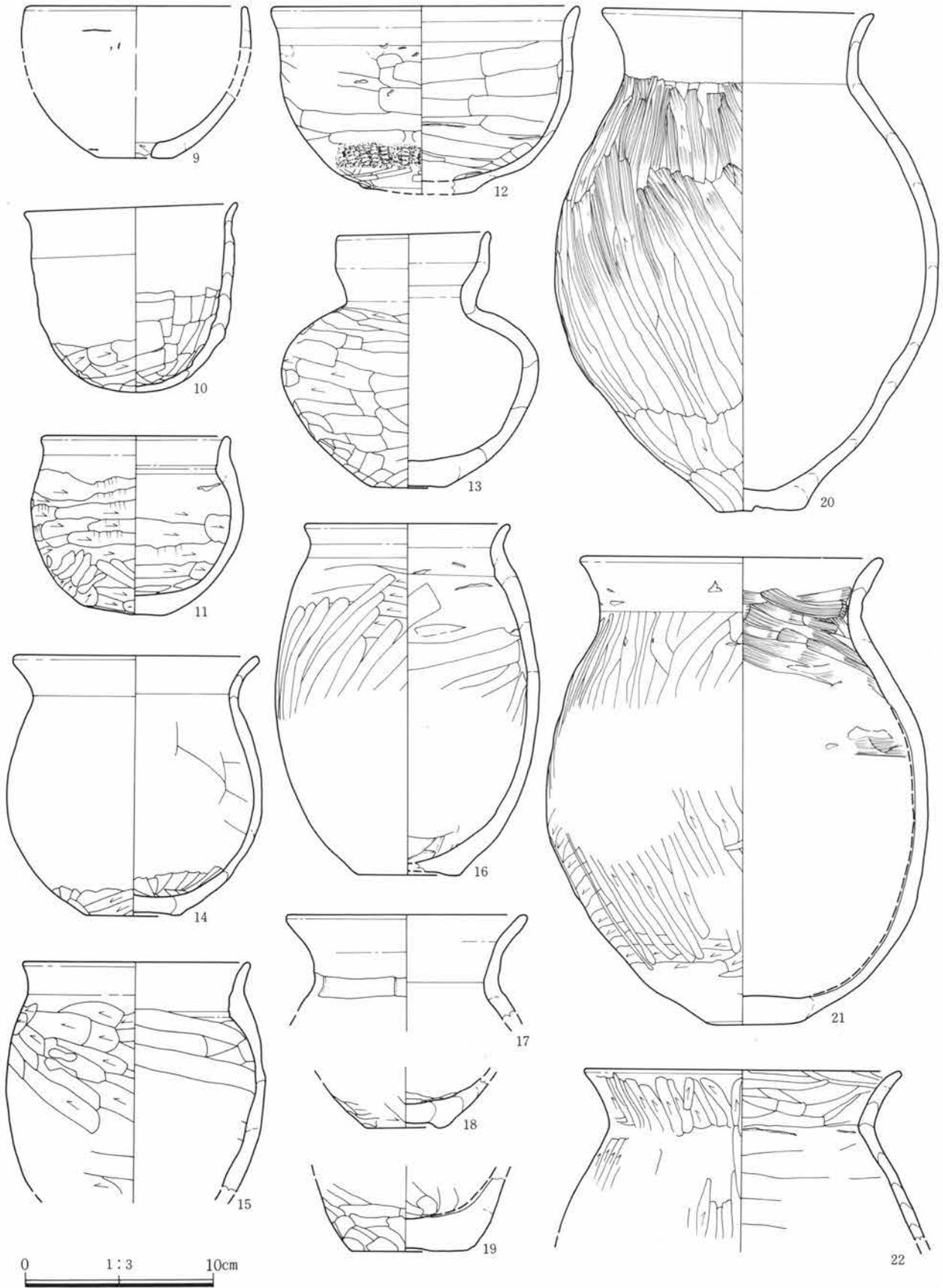
II 調査の内容

周溝 幅12~22cm、深さ7~17cmの規模で全周。
 遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、
 坏8、鉢1、小型甕2、甕12、甗2、壺1の合計
 26点が出土した。比較的貯蔵穴の周辺にまとまって出
 土している。No.10・11・13・14・21・25は床面に密着

して、他は床面から3~34cm浮いて出土した。No.26は
 埋没土出土の円筒埴輪破片。南壁際の中央部付近より
 粘土塊1点と、埋没中より弥生時代の球状土製品1点
 (242頁No.129) が出土した。(遺物観察表：52・53頁)

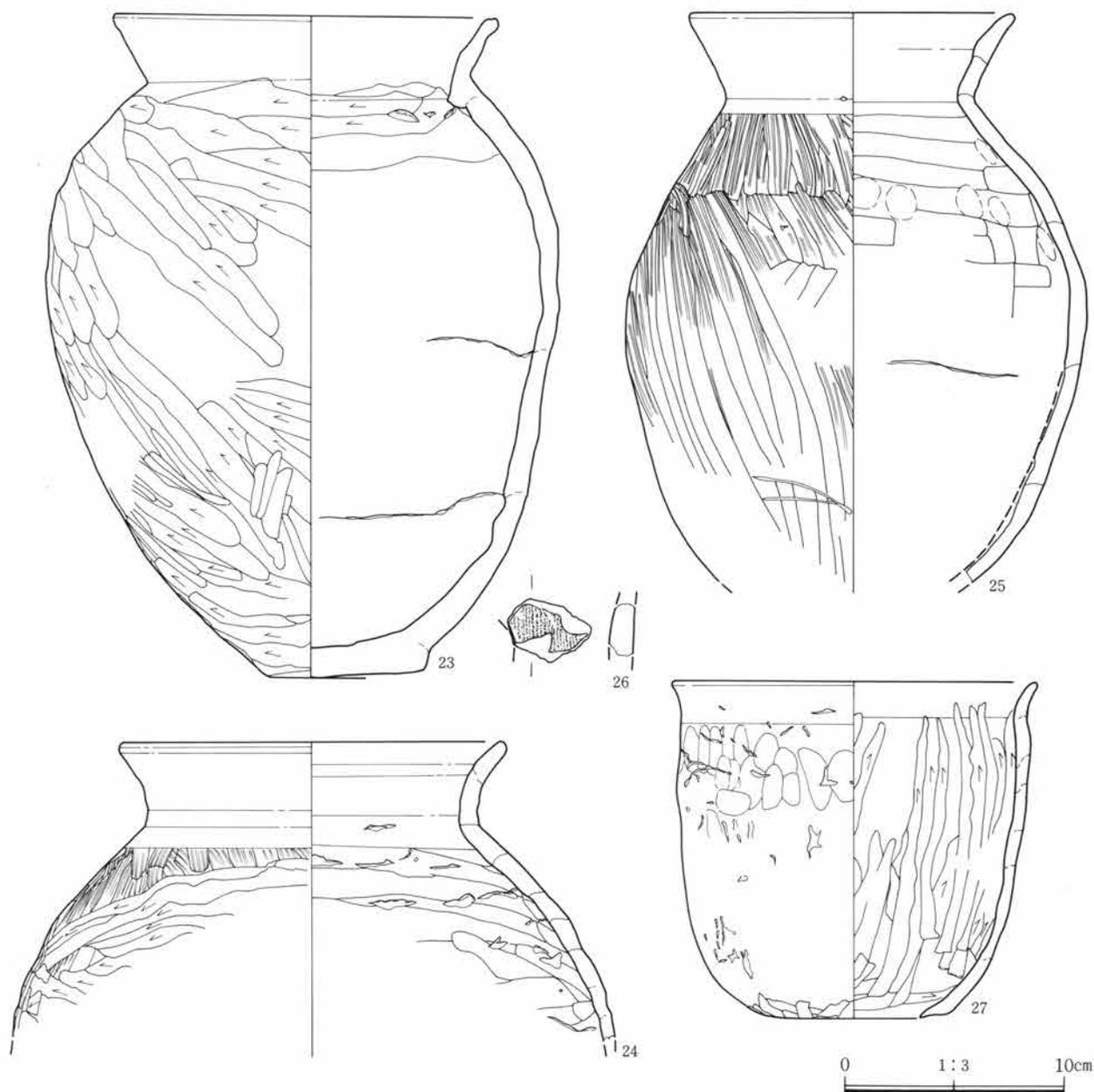


第127図 2区27号住居と出土遺物



第128図 2区27号住居出土遺物(1)

II 調査の内容



第129図 2区27号住居出土遺物(2)

2区28号住居

位置 H-6グリッド 写真 PL-54・55

形状 正方形を基調とするが、若干形が歪んで台形状を呈する。四隅は角張り、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺5.8・5.4×短辺5.7mである。

面積 30.29㎡ 方位 N-73°-E

床面 ローム土を58~67cm掘り込んで床面としている。凹凸面および傾斜の少ない平坦な床面である。電手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩

き床状の堅固な面となっている。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。両袖部の先端に河床礫を立てて補強材として使用している。燃焼部周壁より内側に造り付けられ、その規模は長さ120cm、幅55cmである。煙道部は掘り方のみ残存するが、燃焼部の底面から約45cm上位の壁面中途を水平に掘り抜いている。燃焼部内より椀や甕などの土器片が出土した。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長径67×短径60

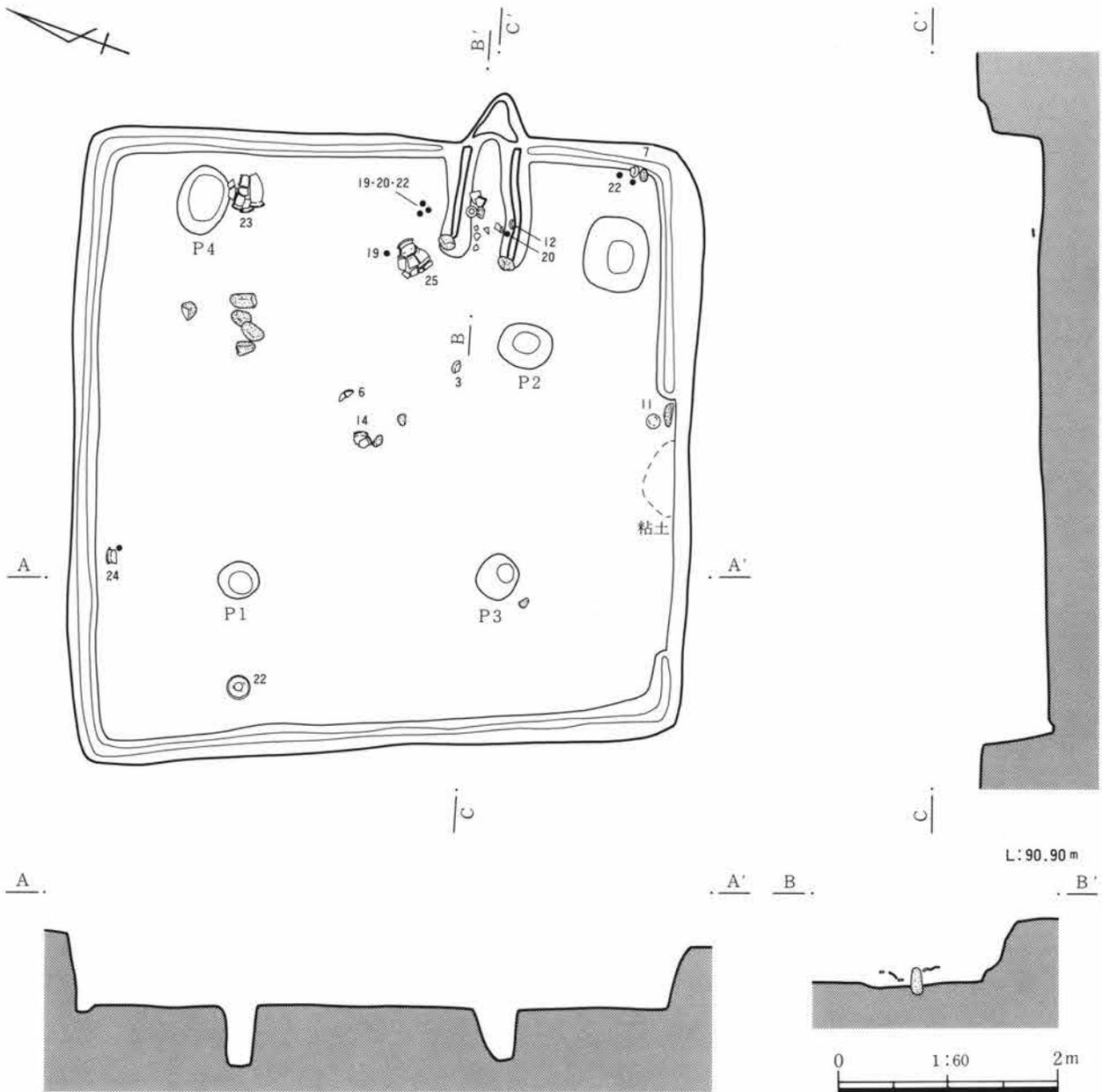
cmの楕円形を呈し、深さ65cmである。

柱 穴 主柱穴は住居の対角線上に3本検出されたのみであるが、4本柱を基本にすると思われる。他に北東隅より性格不明の小ピットが1本検出された。各主柱穴の心々間の距離は、 $P_2 \sim P_3 : 2.10\text{m}$ 、 $P_3 \sim P_1 : 2.44\text{m}$ である。また各柱穴の規模(径×深さ)は、 $P_1 : 23 \times 54\text{cm}$ 、 $P_2 : 28 \times 50\text{cm}$ 、 $P_3 : 27 \times 45\text{cm}$ 、 $P_4 : 40 \times 30\text{cm}$ である。

周 溝 南壁の一部のみ途切れているが、幅16~41cm、深さ4~7cmの規模で壁面に沿ってほぼ全周する。

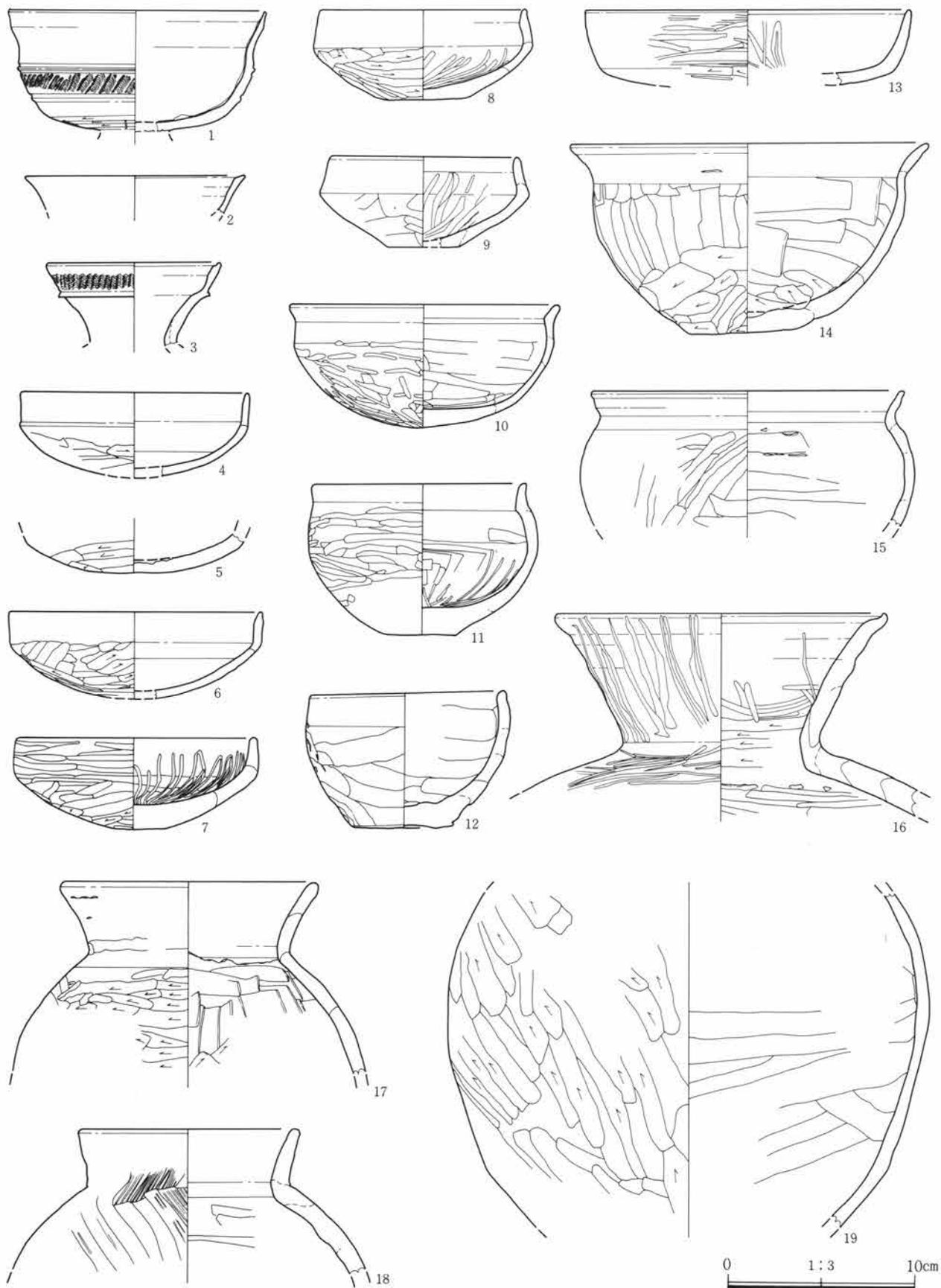
遺 物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏10、壺1、小型甕1、甕10、鉢1、小型粗製土器1、須恵器の高坏1、甕1、樽形甕1の合計27点が出土した。No.3・6・11・14・19・23・25は床面に密着して、他は床面から3~6cm浮いて出土した。No.16は2区20号土壌の埋没土出土の破片と接合関係にある。 P_4 の南側には、最大径15~25cmの河床礫が密集して5点出土している。また南壁中央部に粘土塊が出土した。

(遺物観察表：54・55頁)

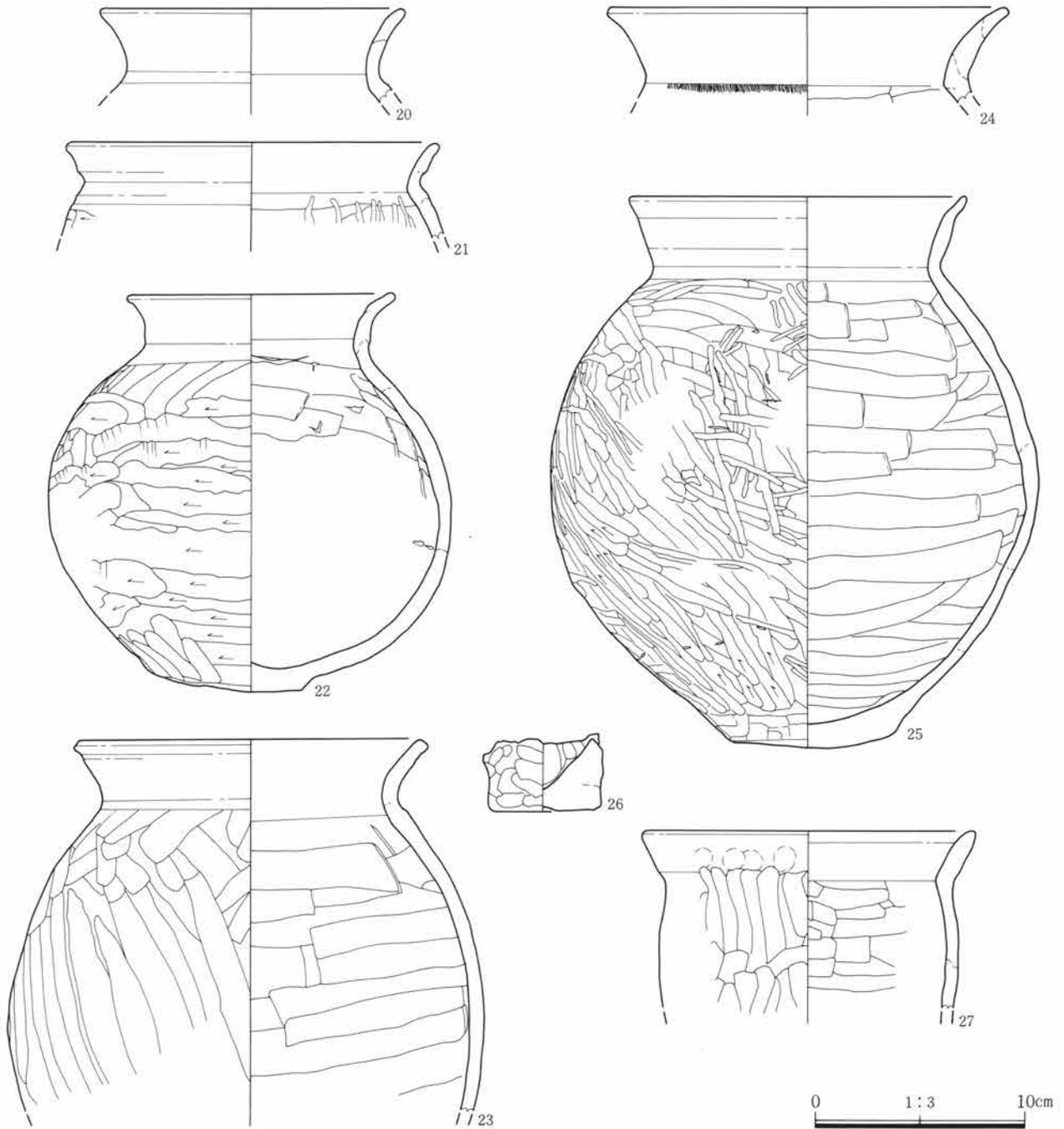


第130図 2区28号住居

II 調査の内容



第131図 2区28号住居出土遺物(1)



第132図 2区28号住居出土遺物(2)

2区29号住居

位置 M-12グリッド 写真 PL-56

重複 南東隅で重複する30・33号住居に後出する。

形状 一辺が4.45mの正方形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。

面積 (19.73m²) 方位 N-79°-E

床面 ローム土を30~52cm掘り込んで床面としてい

る。凹凸面および傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および主柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

埋没土 上層にはAs-Cまじりの黒色土が、壁際や底面の第1次埋没土にはロームブロックまじりの暗褐色土が堆積する。自然埋没の状態を示す。

竈 東壁中央部に位置する。幅50cm、長さ80cmの

II 調査の内容

掘り方が残存するのみである。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。30号住居との重複によって、その輪郭を検出することができなかった。開口部近くより、No. 8の甕が出土している。

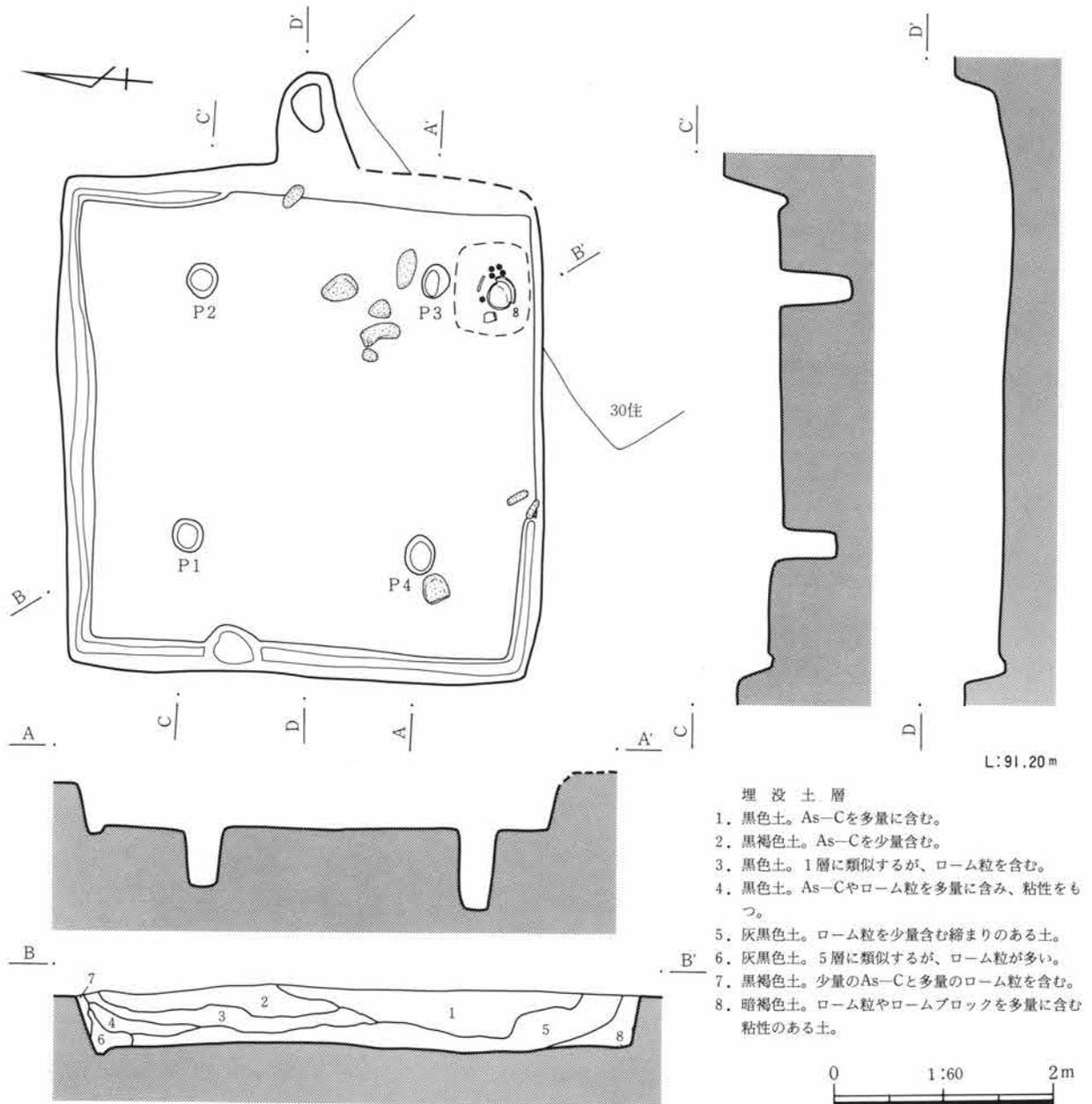
柱穴 住居の対角線上に支柱穴が4本、西壁際に性格不明の小ピット1本が検出された。各支柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その規模はP₁~P₂:2.30m、P₂~P₃:2.10m、P₃~P₄:2.50m、P₄~P₁:2.15mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:29×56cm、P₂:31×66cm、P₃:30×80

cm、P₄:30×51cm、P₅:50×23cmである。

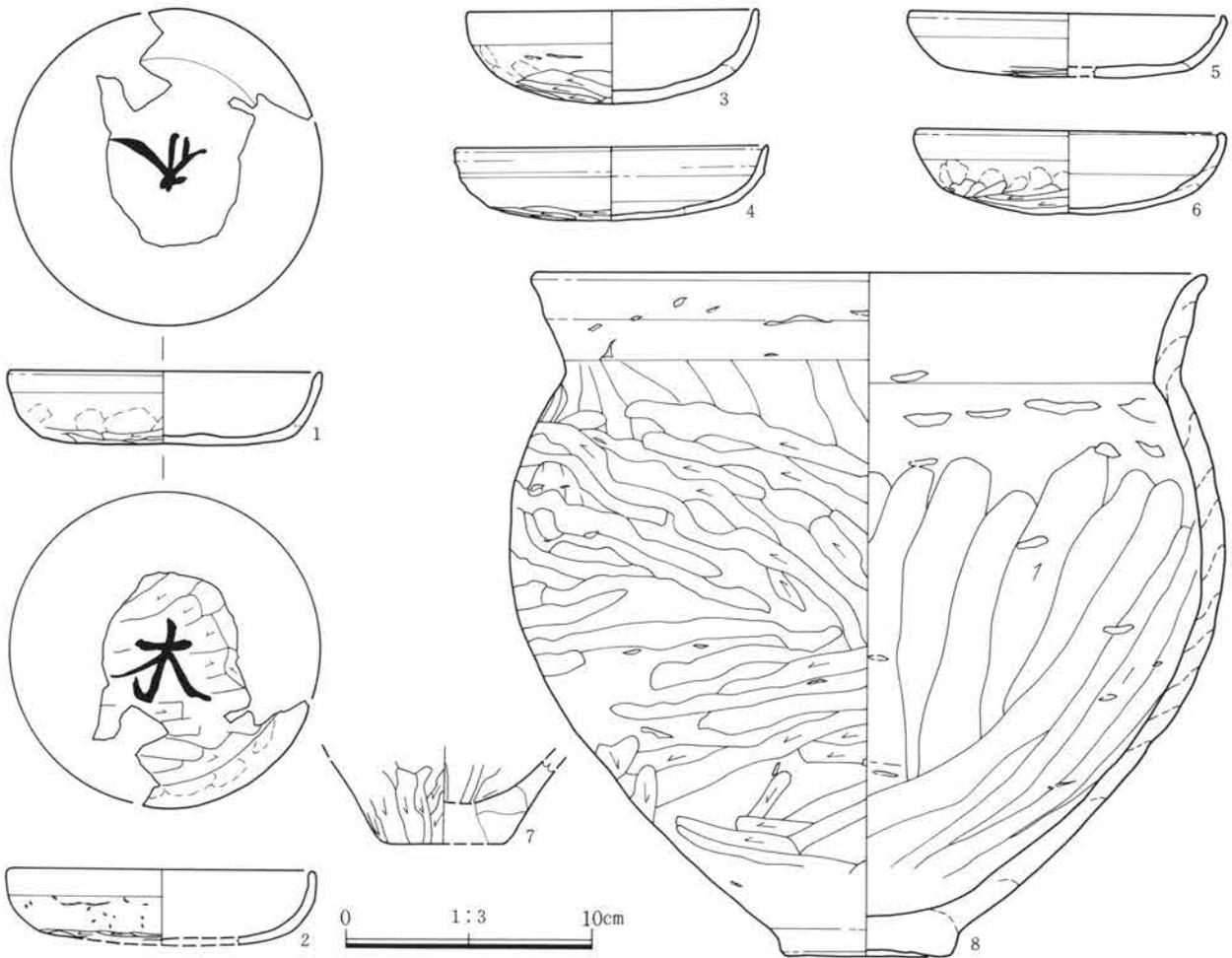
周溝 壁面に沿って全周していると思われるが、33号住居との重複部分は検出できなかった。幅25~30cm、深さ5~12cmの規模をもつ。

遺物 実測可能な土器は坏6、甕2の合計8点存在するが、いずれも埋没土中より出土している。No. 6は2区42号住居、No. 8は同36号住居の埋没土出土の破片とそれぞれ接合関係にある。貯蔵穴の北側より、最大径20~35cmの河床礫5点が床面に密着して出土した。

(遺物観察表:55・56頁)



第133図 2区29号住居



第134図 2区29号住居出土遺物

2区30号住居

位置 M-12グリッド 写真 PL-56~61・125

重複 西側で重複する29・33号住居に先行する。

形状 長軸を南北にもつ長方形を呈する。四隅は直角で、周壁は若干蛇行して掘り込まれている。規模は長辺4.40×短辺2.75mである。

面積 11.44㎡ 方位 N-37°-E

床面 ローム土を77~85cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

埋没土 褐色土を主体にして、レンズ状に堆積する。自然埋没の状態を示す。

竈 北壁中央部の北東隅寄りに位置し、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられ、

その規模は長さ62cm、幅30cmである。周壁際の左袖部の付け根付近や右袖内には、河床礫や土器片が存在するが、補強材あるいは構築材として使用したものか。

貯蔵穴 竈左側に位置する。長軸80×短軸48cmの隅丸方形を呈し、深さ109cmである。

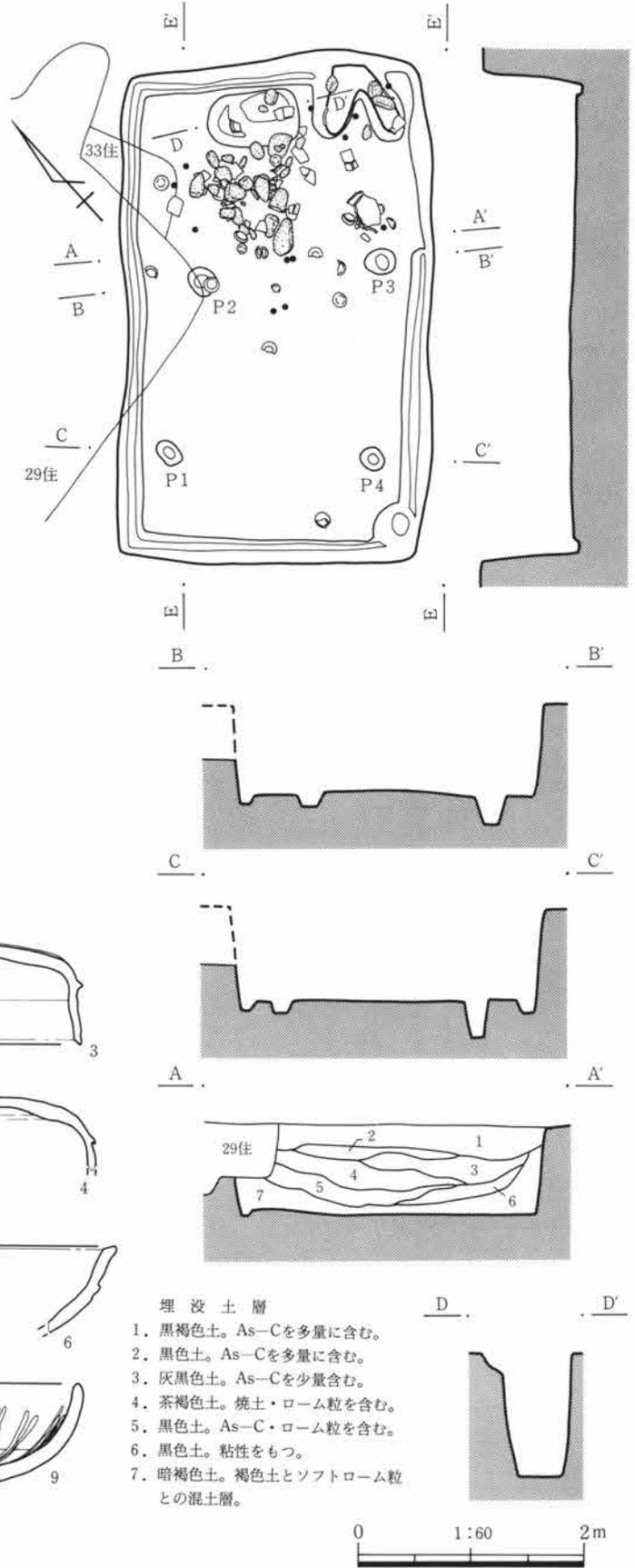
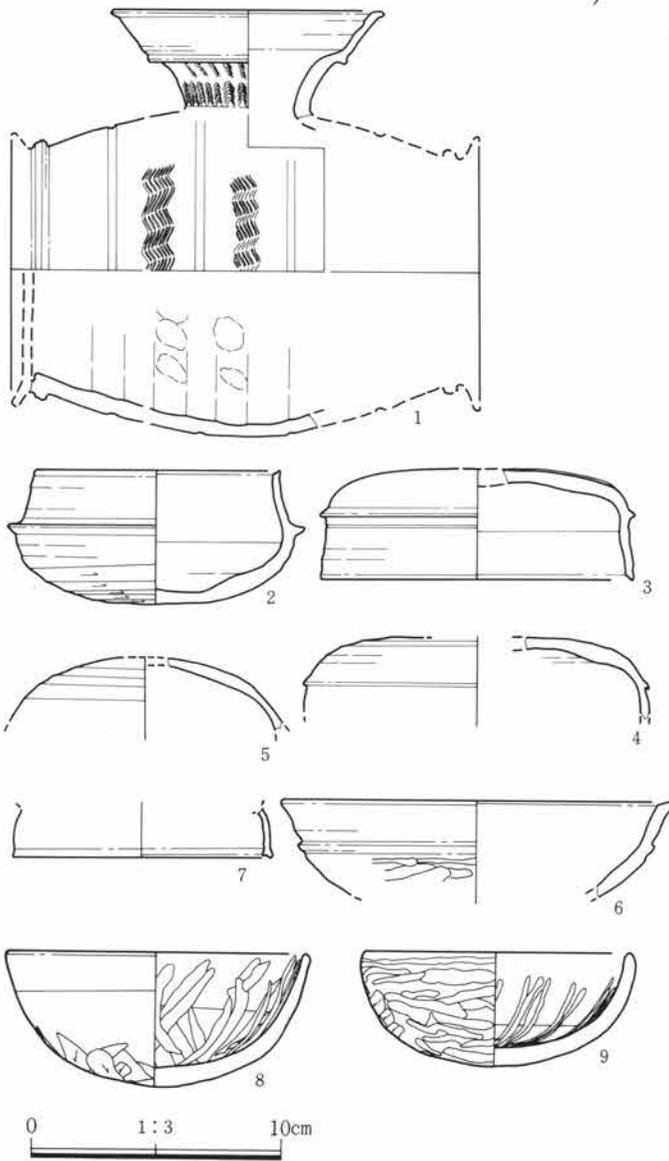
柱穴 住居の対角線上に2本、ややずれた位置に2本の合計4本が検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、長軸を東西にもつ台形を呈し、その規模はP₁~P₂:1.55m、P₂~P₃:1.60m、P₃~P₄:1.70m、P₄~P₁:1.80m。各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:18×11cm、P₂:24×12cm、P₃:25×24cm、P₅:19×32cm。

周溝 竈右側の一部を除き、幅19~27cm、深さ4~14cmの規模で壁面に沿って全周する。

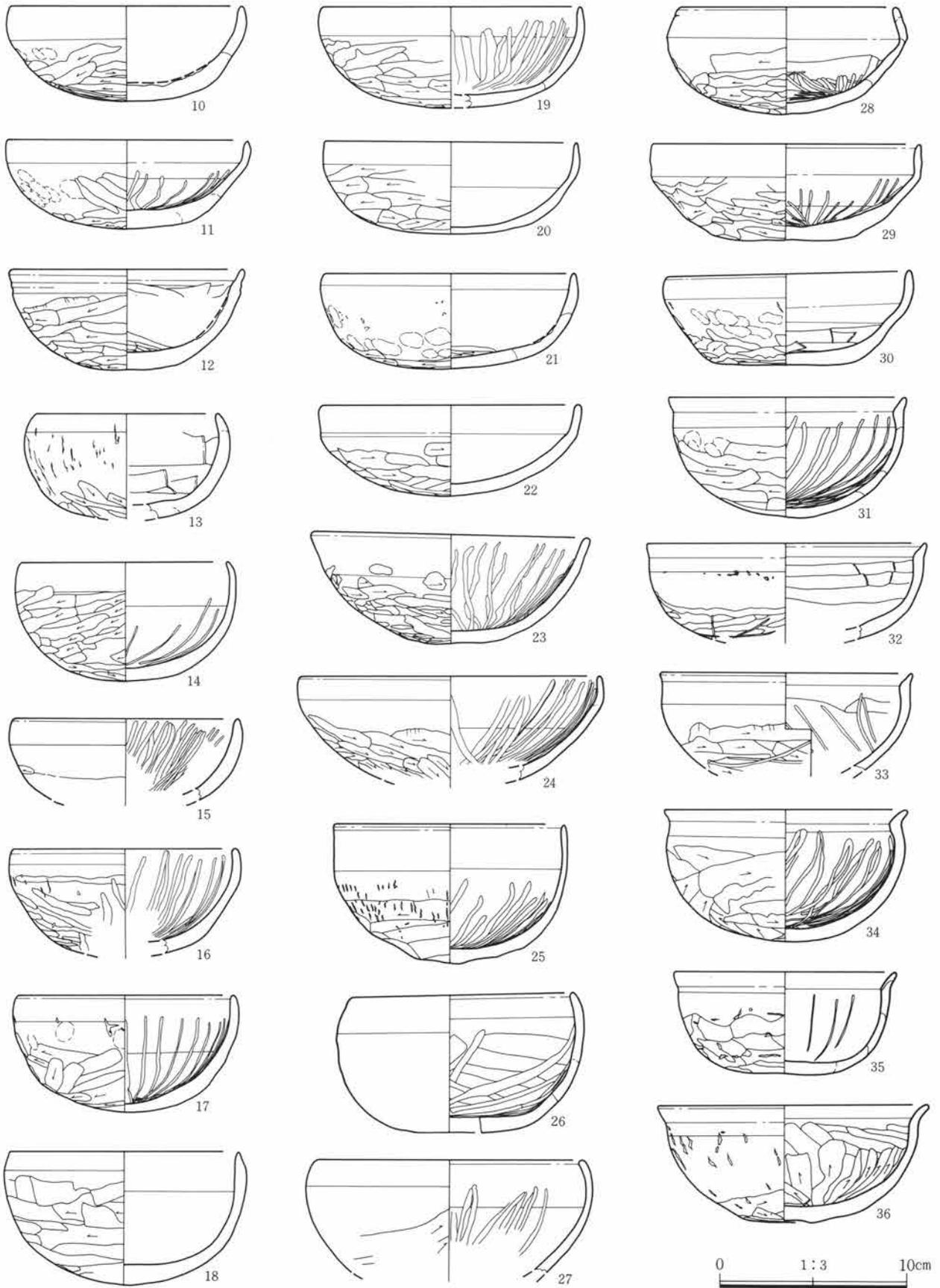
遺物 実測可能な土器は坏39、高坏1、鉢3、小型甕4、甕39、甗12、壺3、小型粗製土器3、須恵器の

II 調査の内容

坏1、樽形甕1、甕1、蓋4、高坏1の合計110点が出土した。No.78・94は2区51号住居出土の破片と、No.4は同24号住居出土の破片と、No.1は同3・24・51号住居出土の破片とそれぞれ接合関係にある。また土器に混じって直径20cm前後の河展床礫が30点ほど出土しているが、各遺跡ともに第1次埋没土よりも上位層に包含され、床面から15~25cm浮いて「吹上パターン」的な出土をしている。他に埋没中より砥石・紡錘車各1点と、炭化した桃の種子3点が出土している。
(遺物観察表：56~62頁)

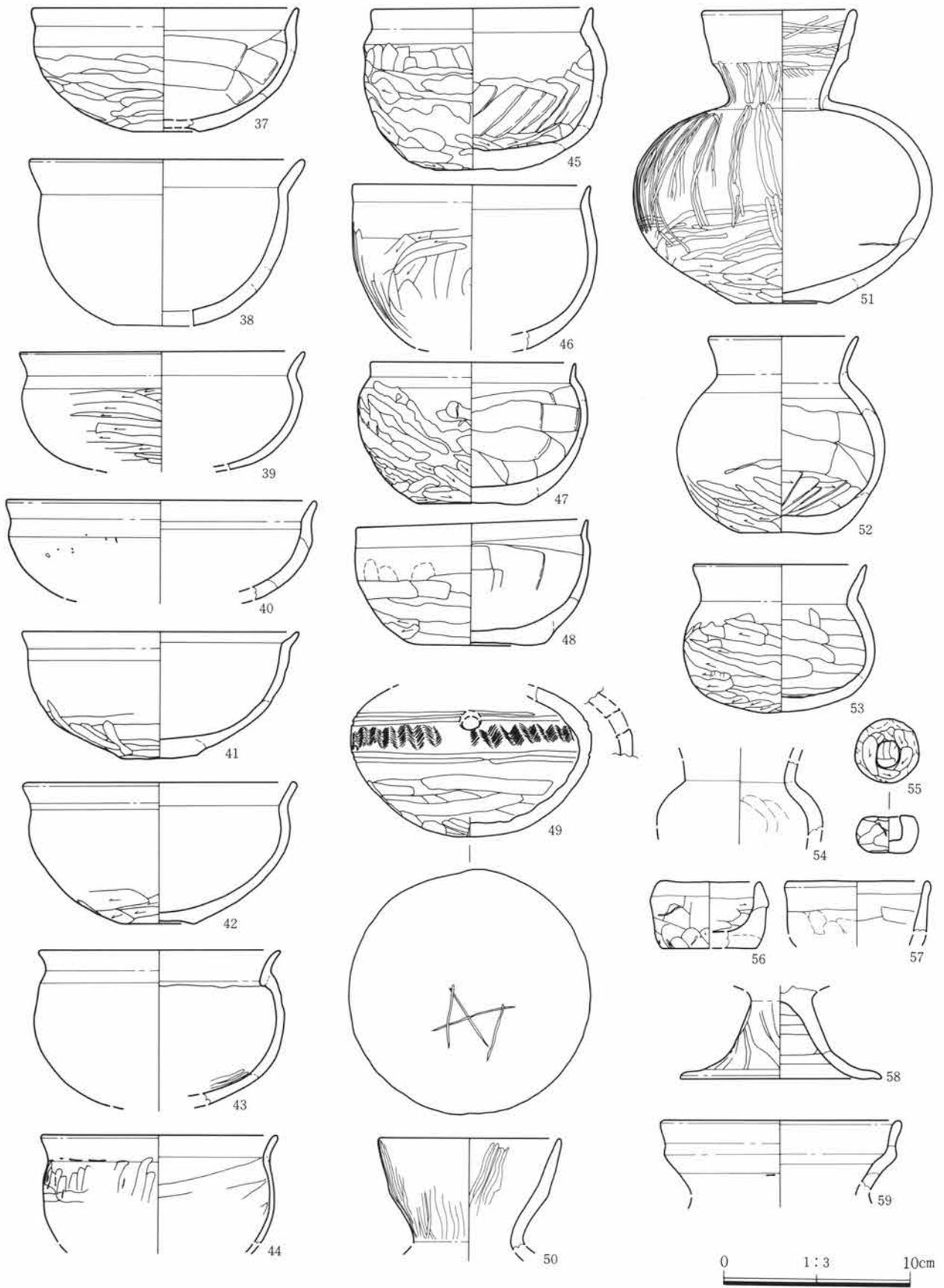


第135図 2区30号住居と出土遺物

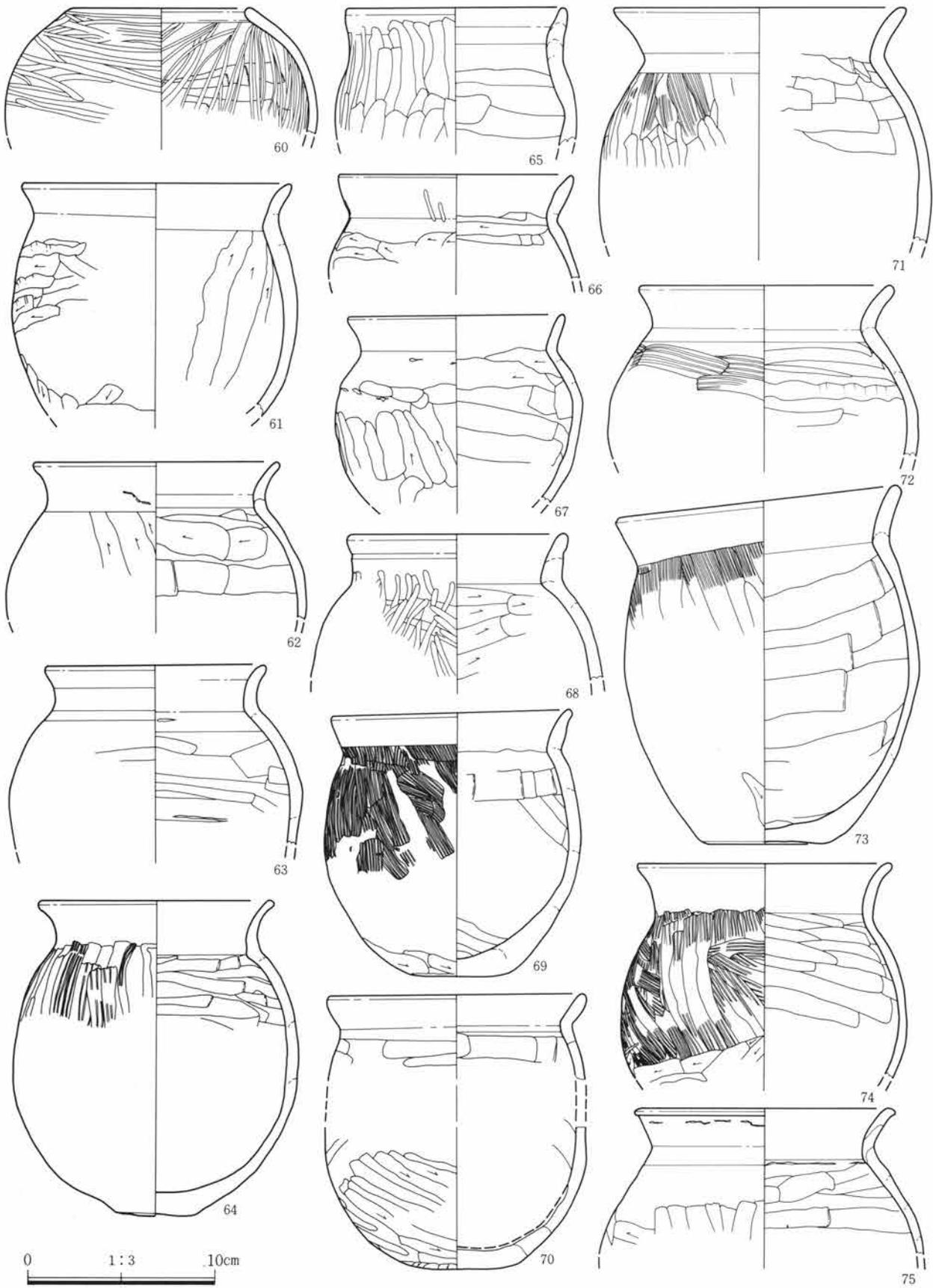


第136図 2区30号住居出土遺物(1)

II 調査の内容

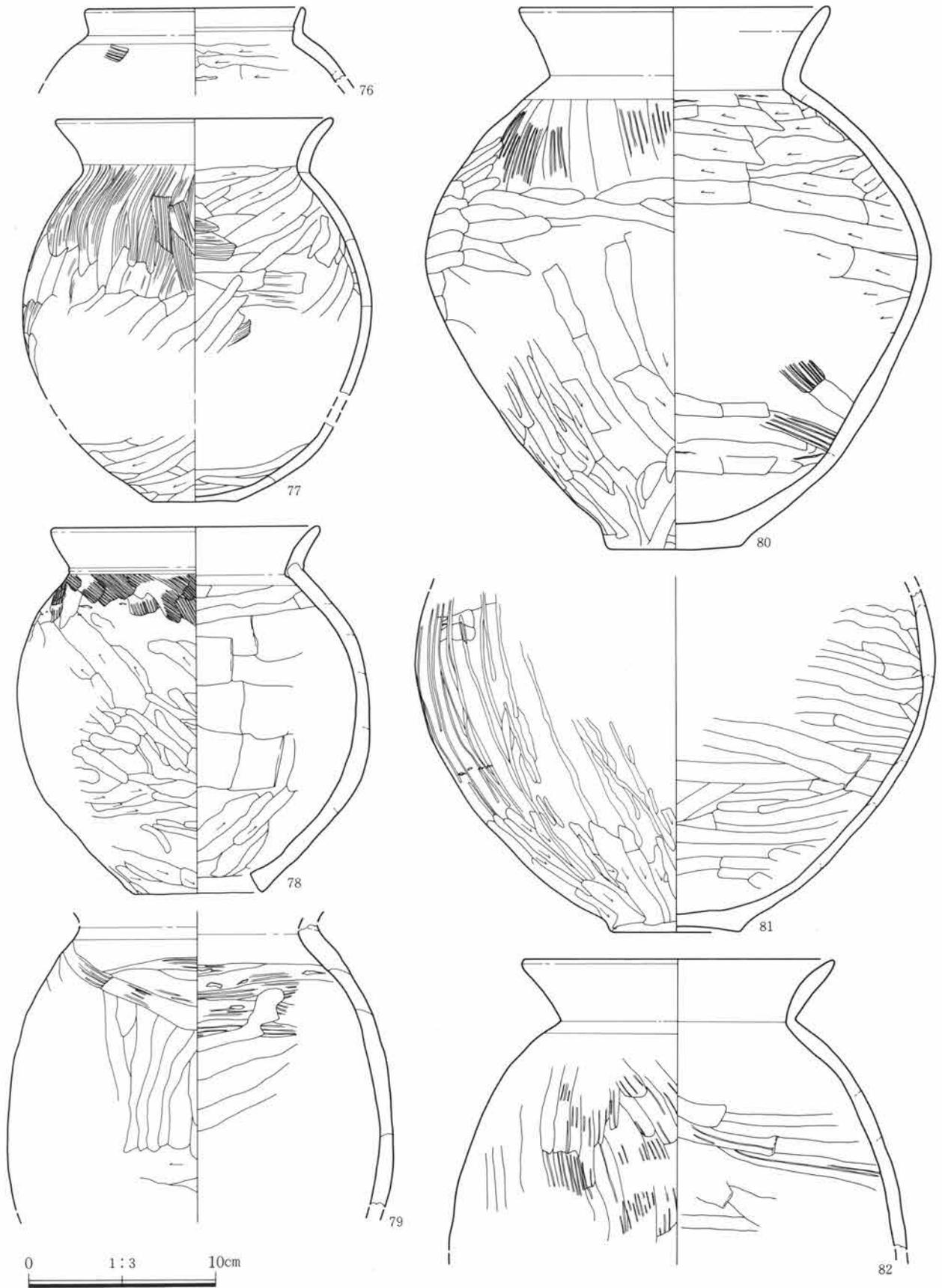


第137図 2区30号住居出土遺物(2)

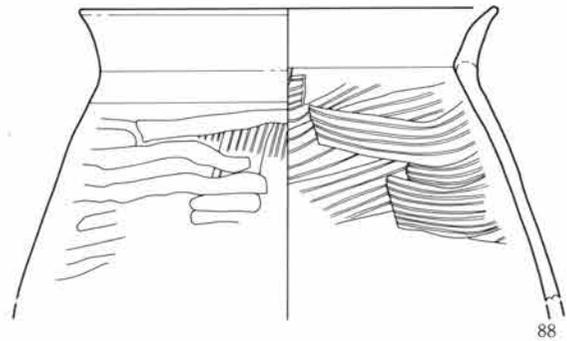
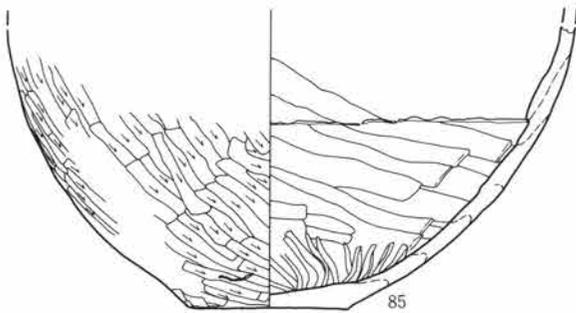
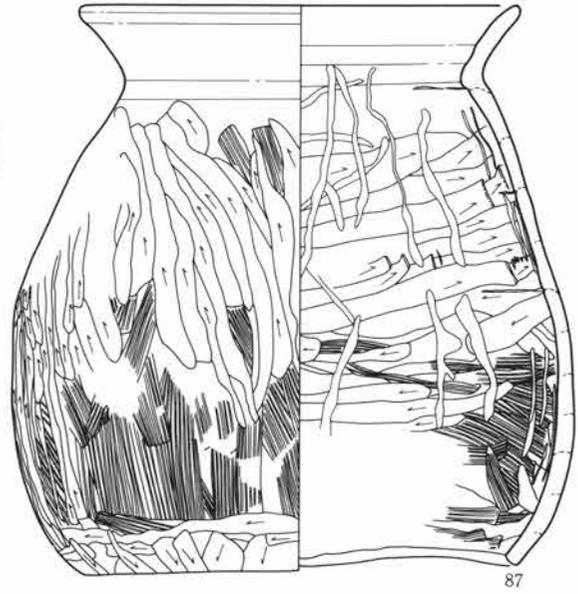
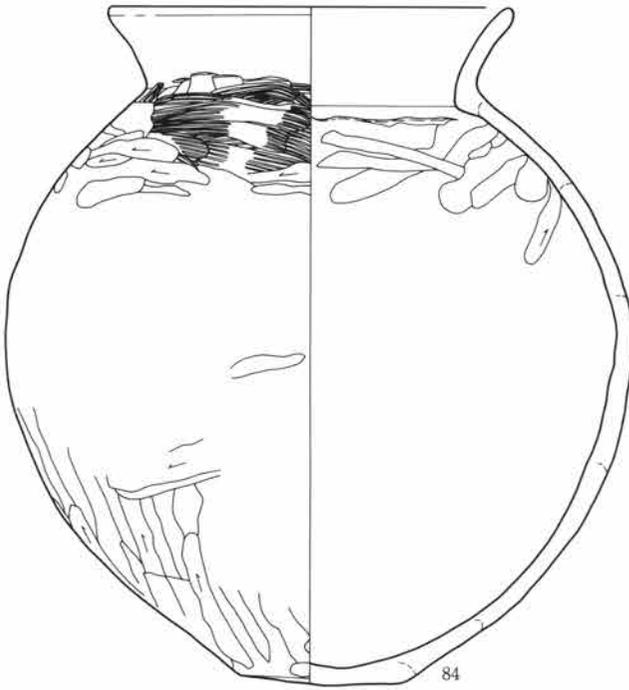
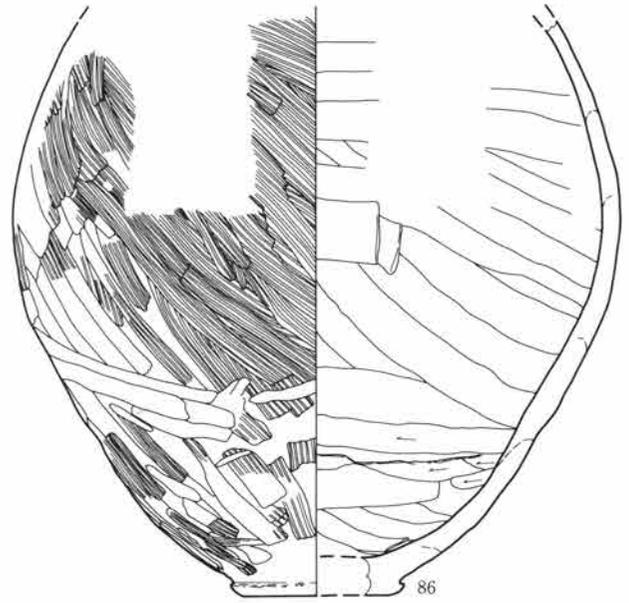
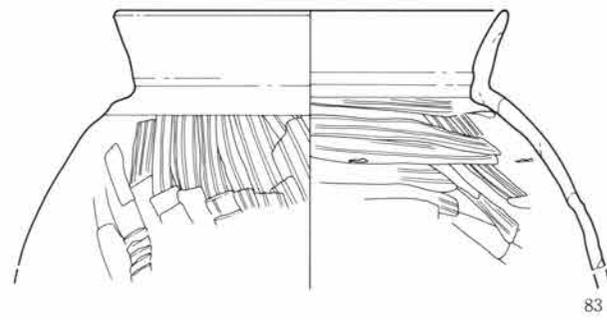


第138図 2区30号住居出土遺物(3)

II 調査の内容



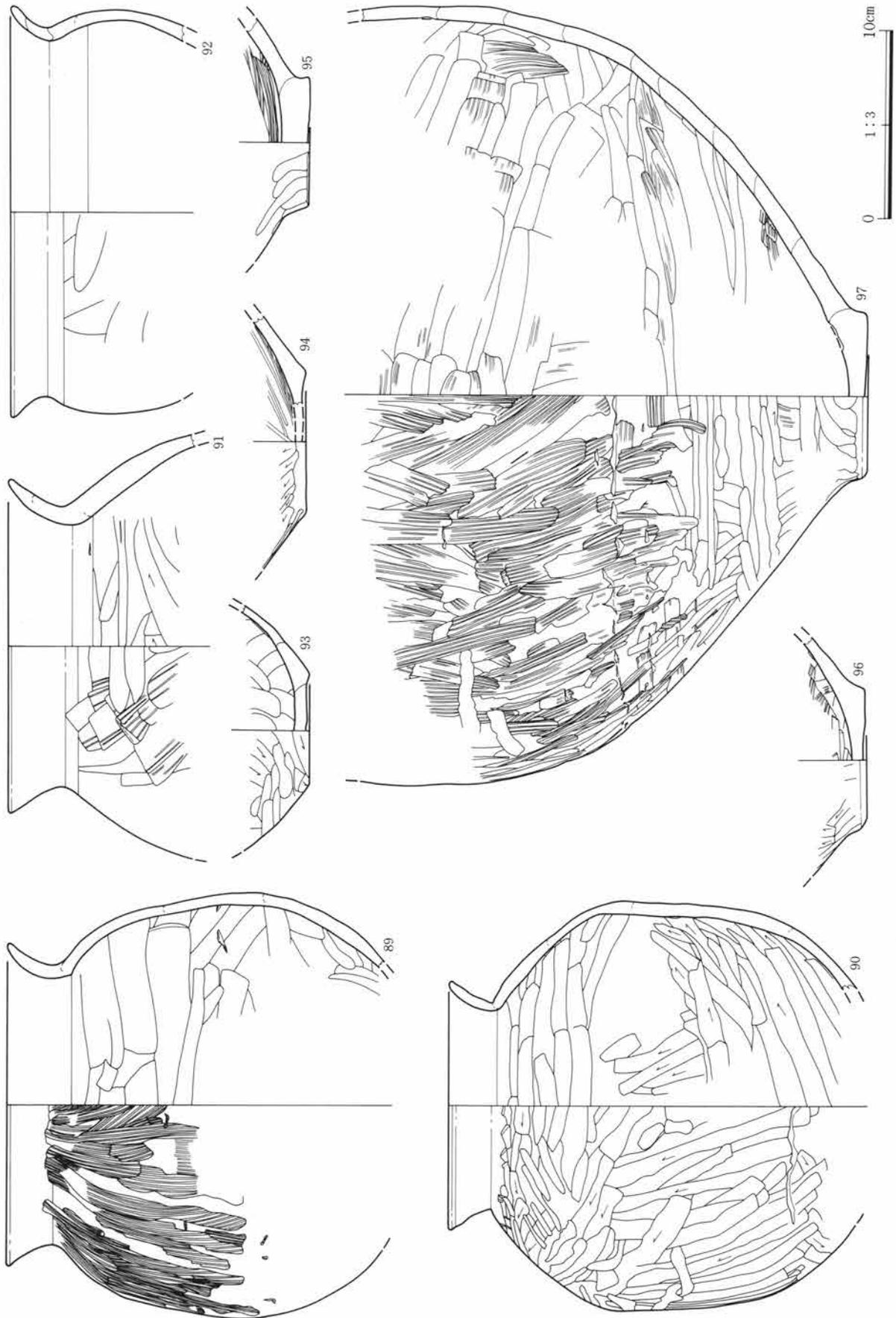
第139図 2区30号住居出土遺物(4)



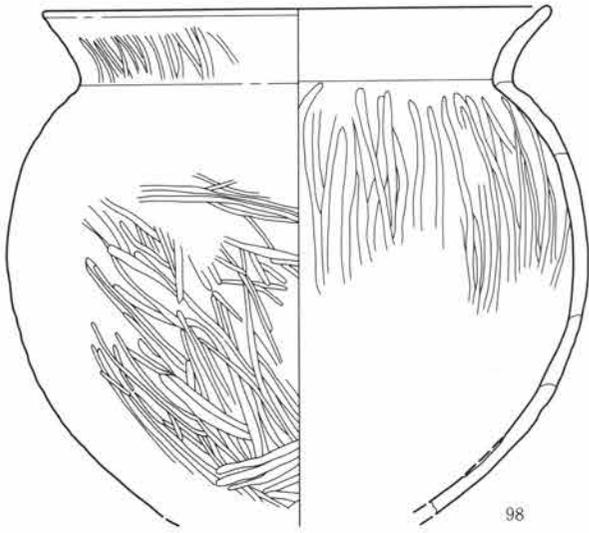
0 1:3 10cm

第140図 2区30号住居出土遺物(5)

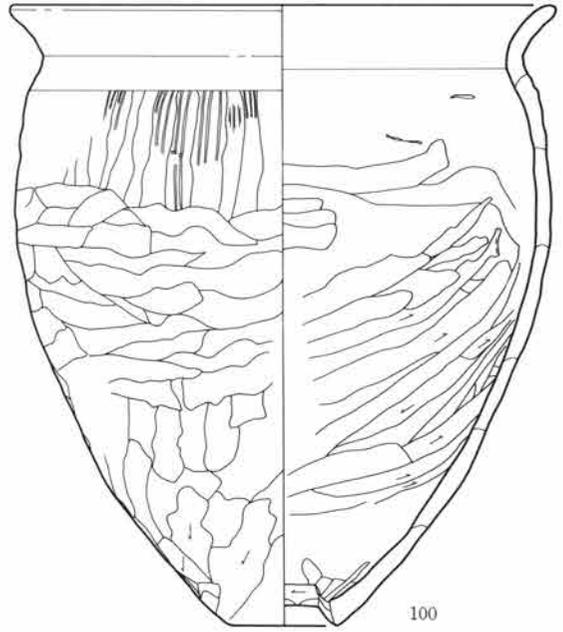
II 調査の内容



第14|图 2区30号住居出土遺物(6)



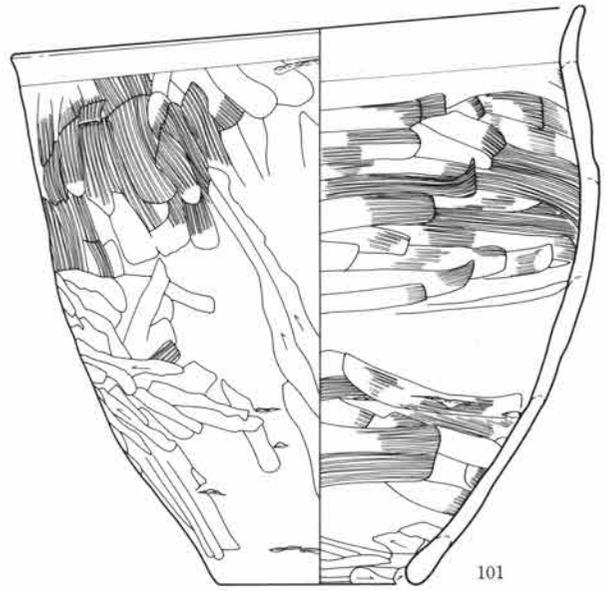
98



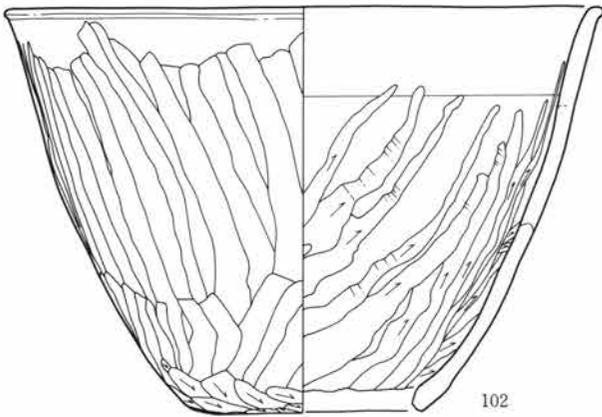
100



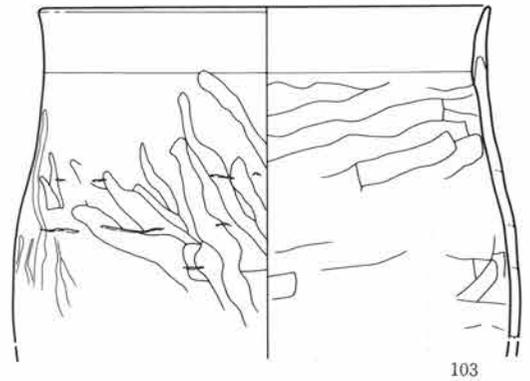
99



101



102

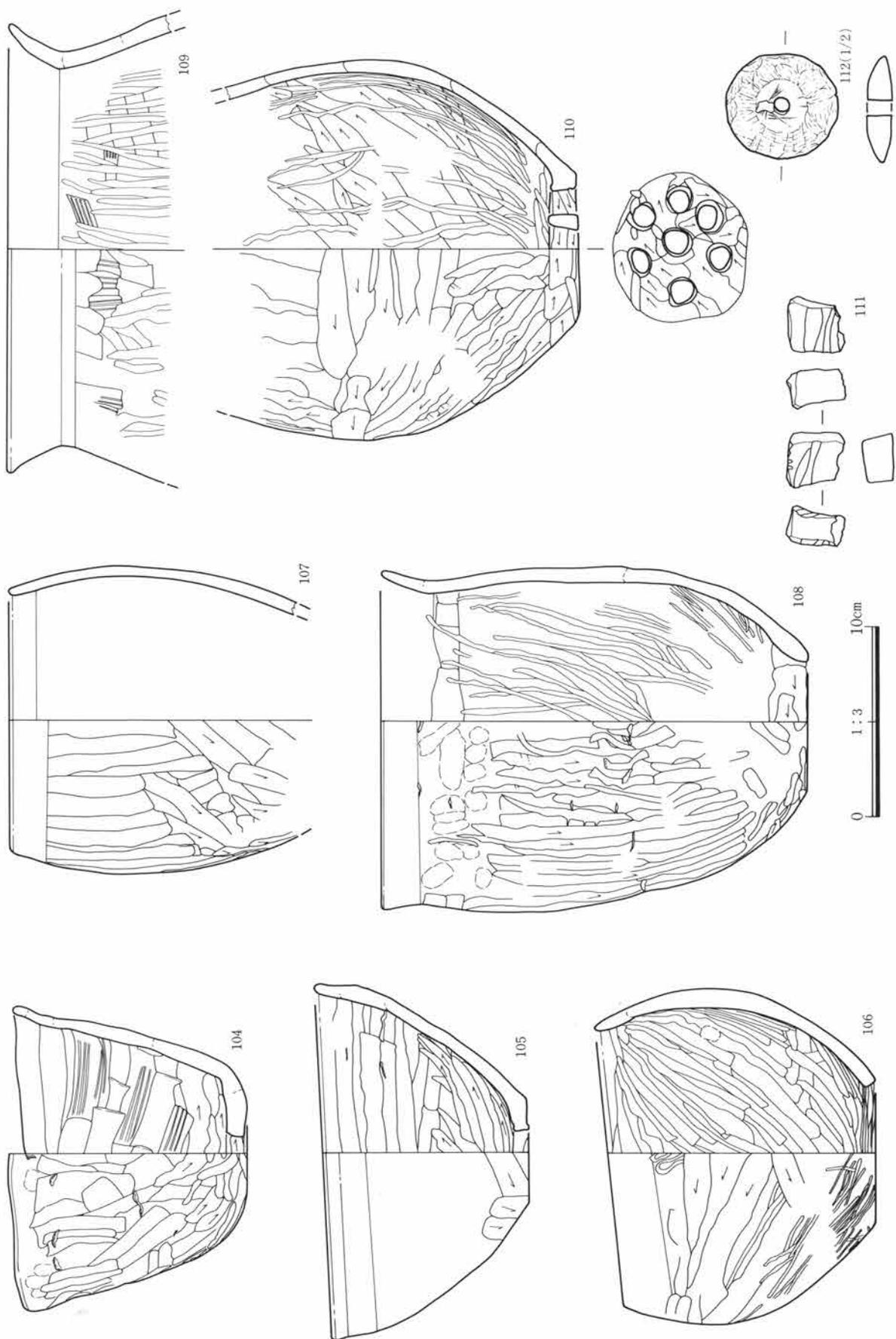


103

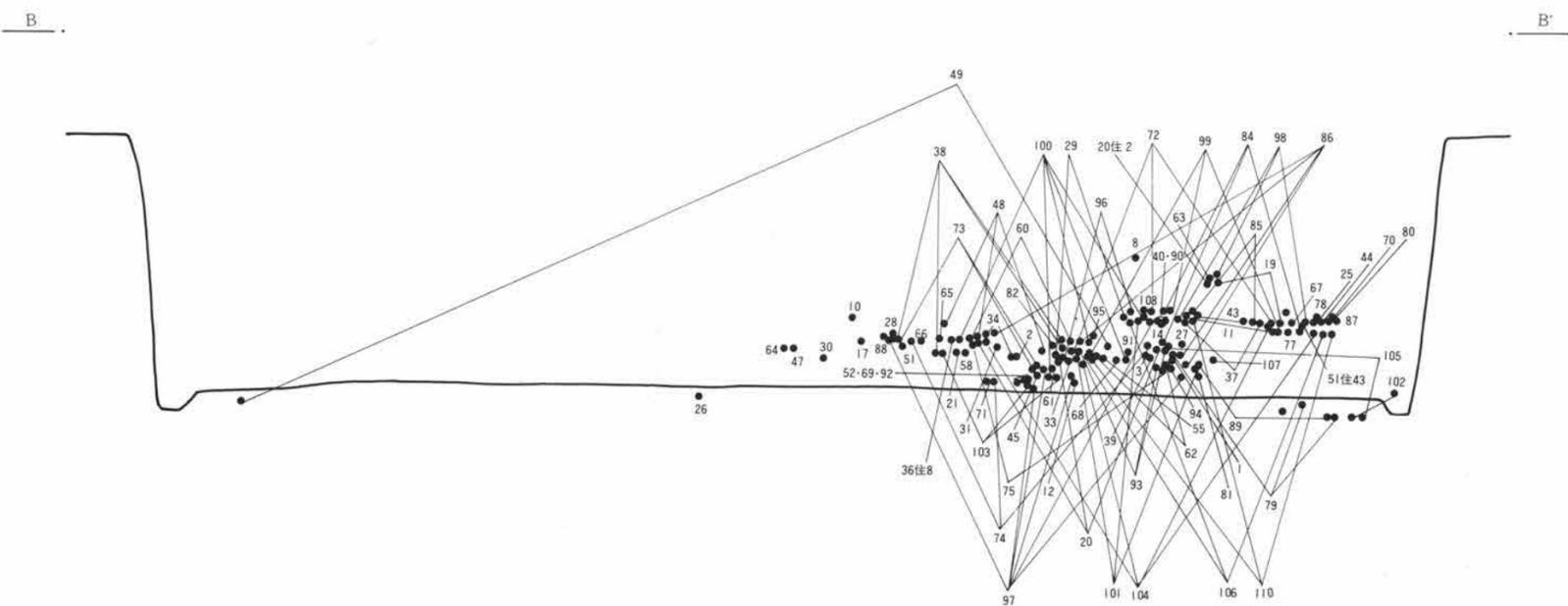
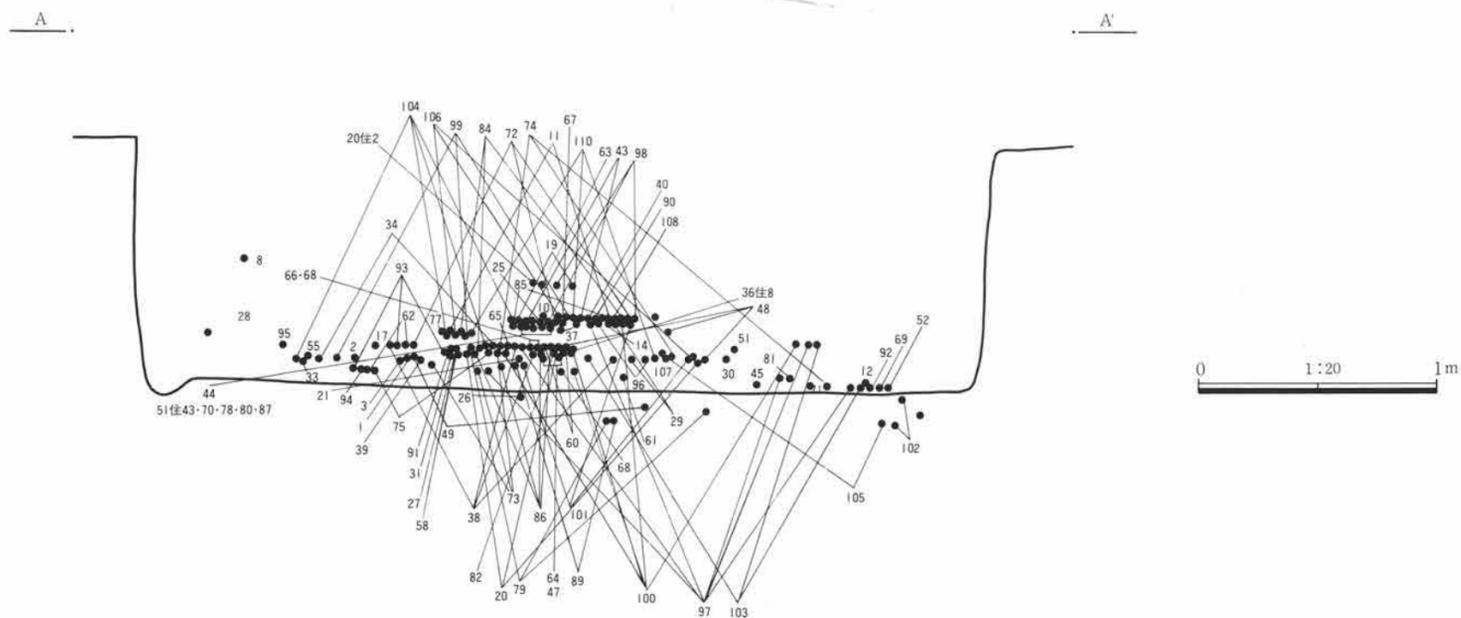
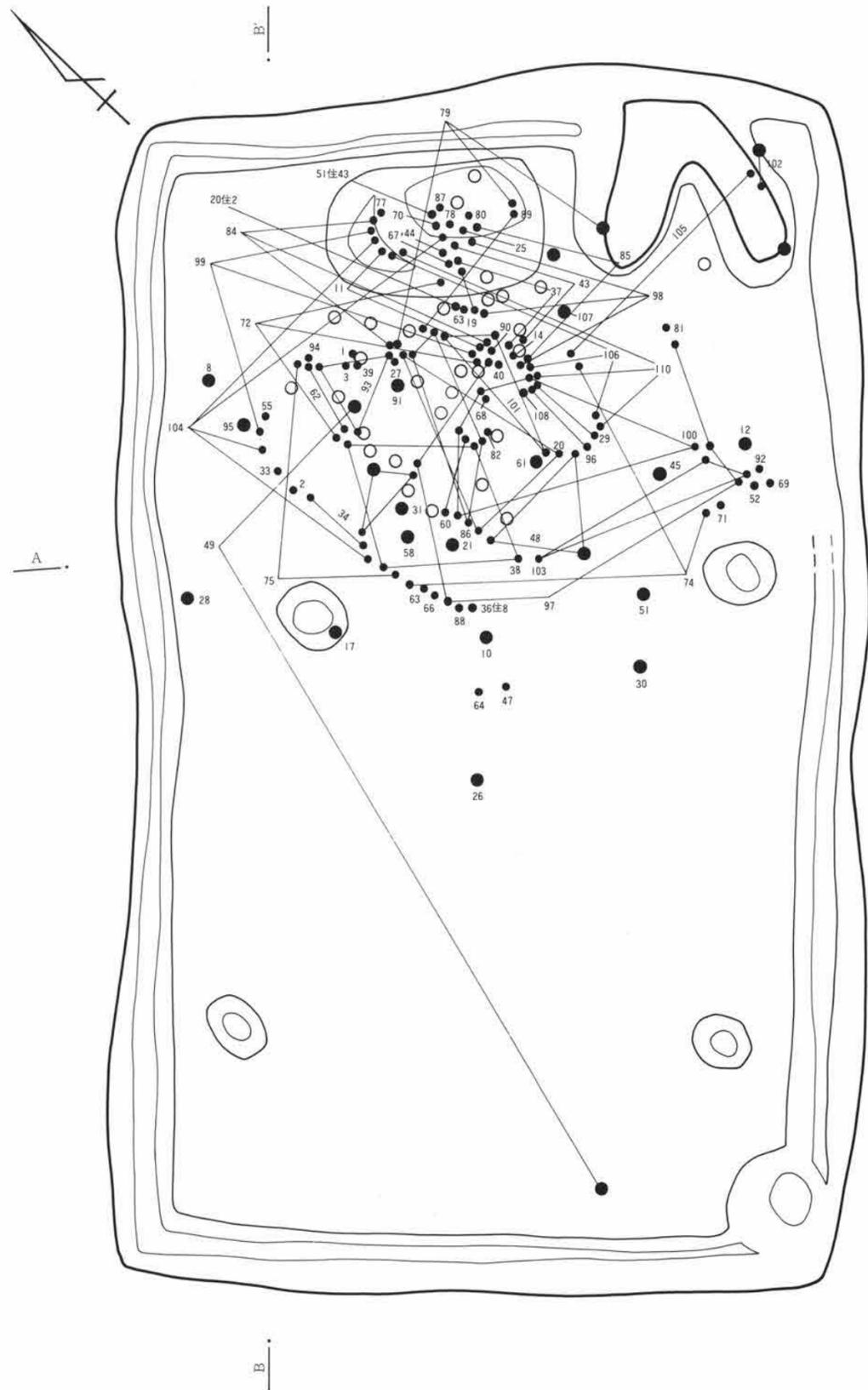
0 1:3 10cm

第142図 2区30号住居出土遺物(7)

II 調査の内容



第143図 2区30号住居出土遺物(8)



第144図 2区30号住居の遺物出土状況

2区32号住居

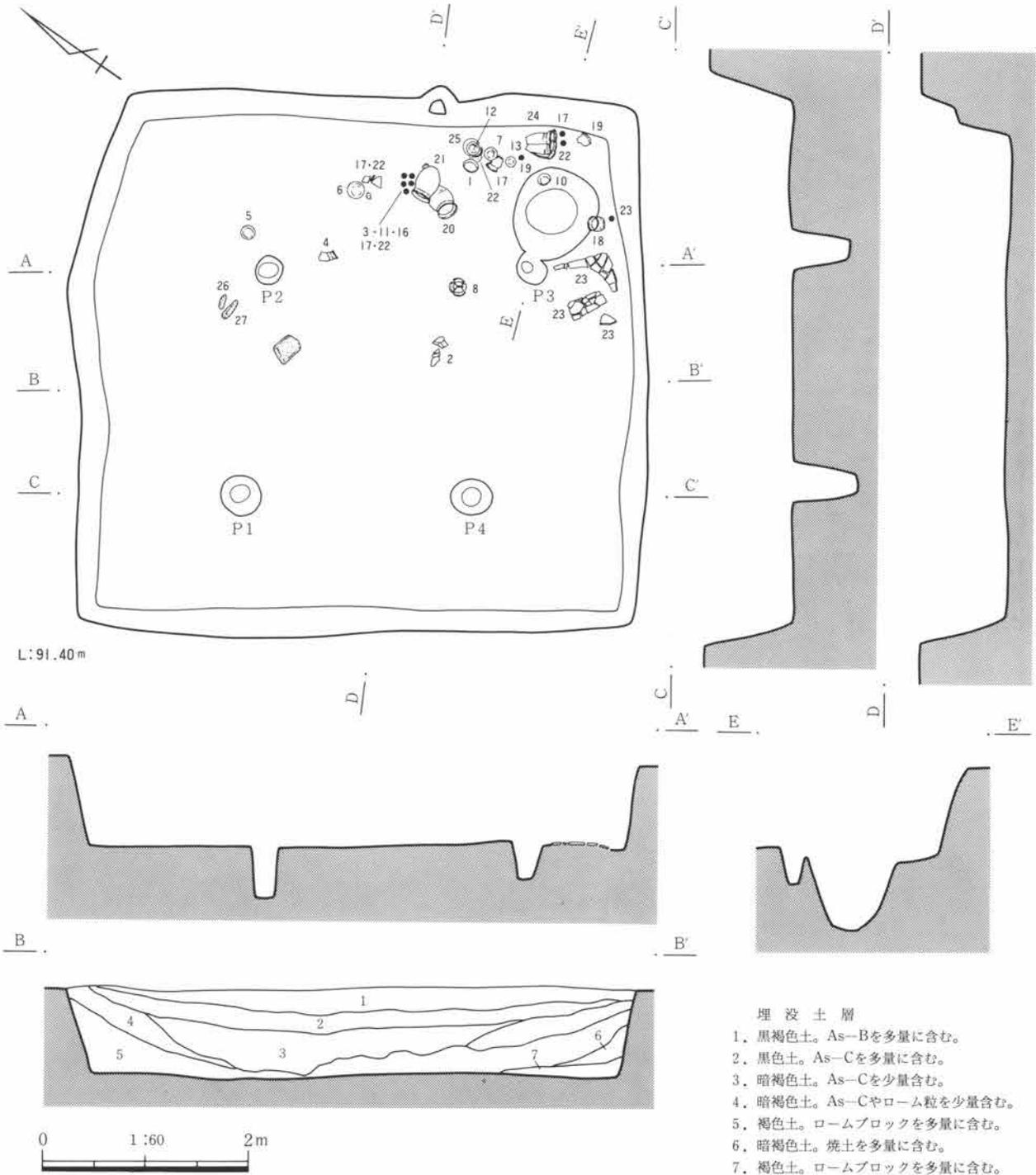
位置 H-11グリッド 写真 PL-62・63

形状 正方形を基調とするが、南北軸の若干長い長方形を呈する。四隅は直角で、周壁は北壁を除いてほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺5.50×短辺5.20mである。

面積 27.90㎡ 方位 N-57°-E

床面 ローム土を72~85cm掘り込んで床面としている。凹凸面および傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

埋没土 中層にはAs-Cまじりの黒色土が、壁際や底



第145図 2区32号住居

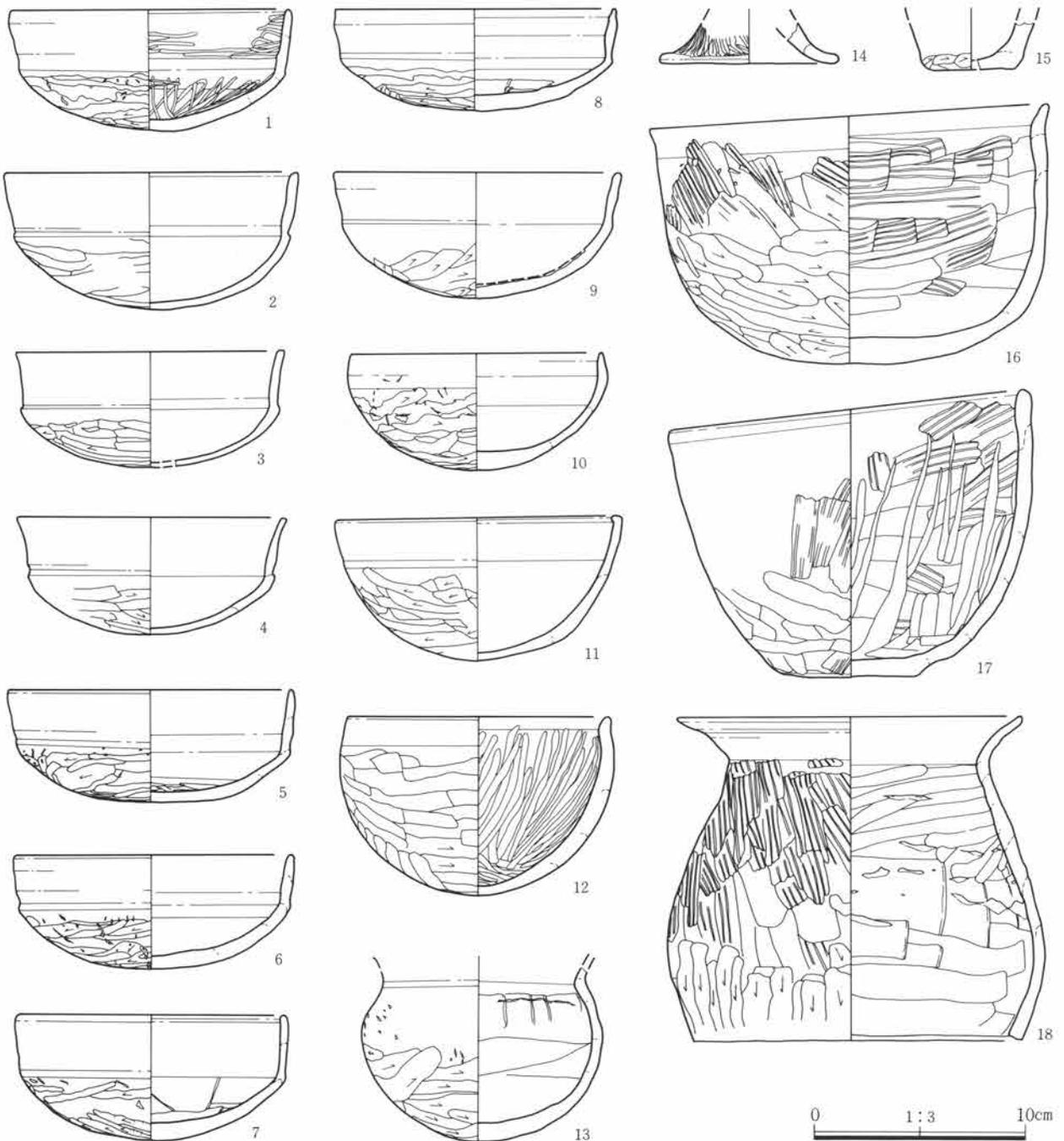
II 調査の内容

面の第1次埋没土にはロームブロックまじりの褐色土が堆積する。自然埋没の状態を示す。

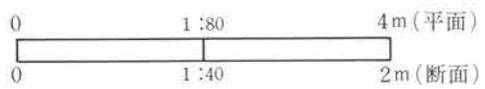
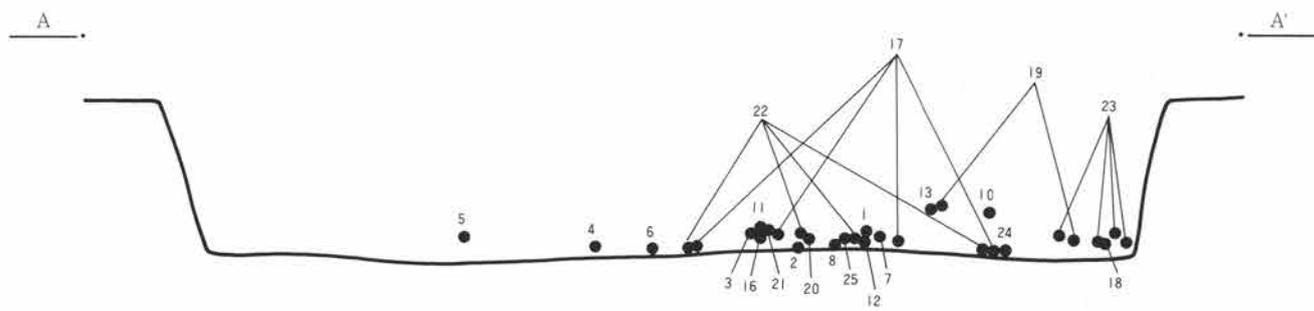
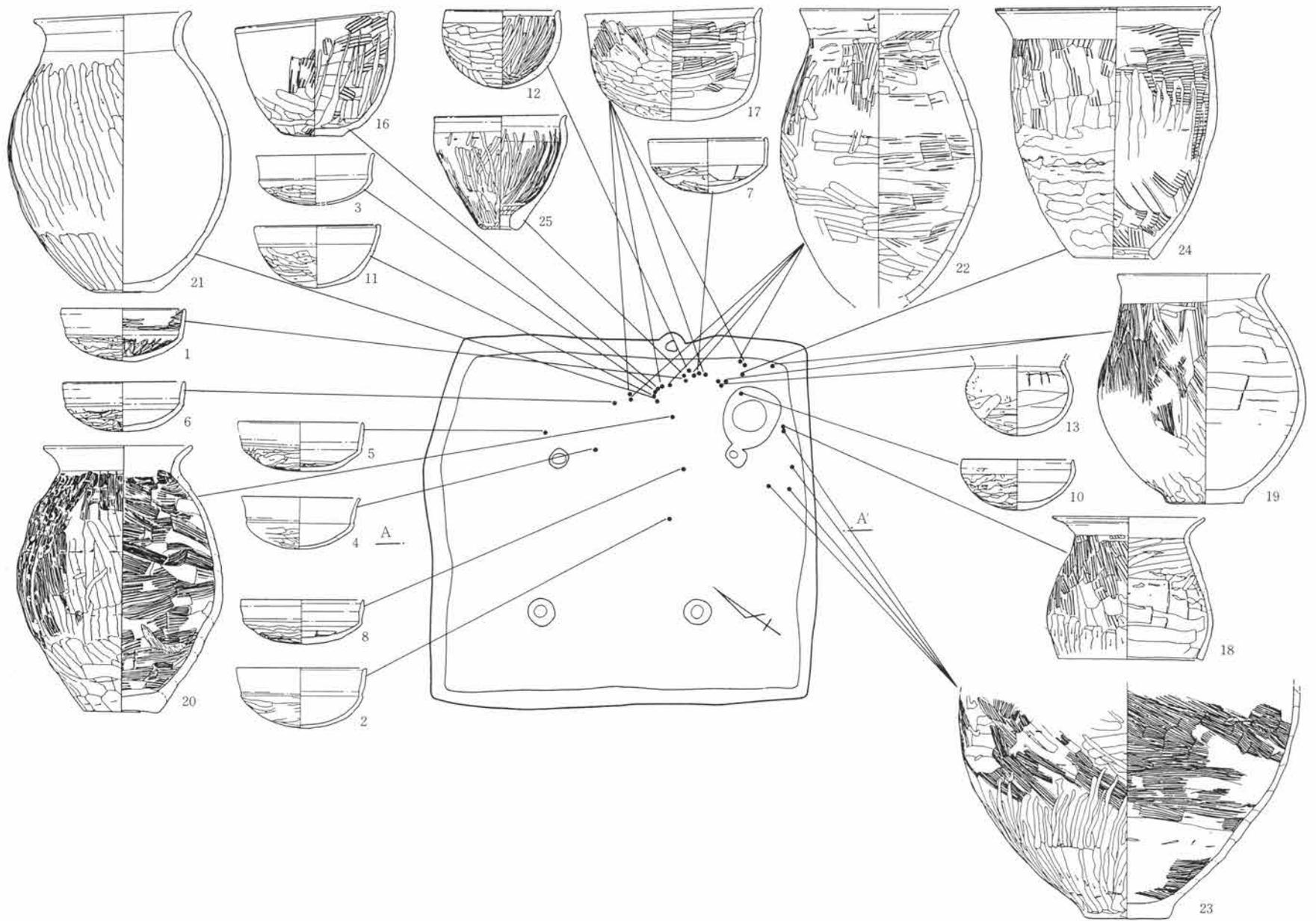
竈 東壁中央部の南側寄りに位置する。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられていると思われるが、煙道部の掘り方を残すのみで、他は崩落している。煙道部は燃烧部の底面から約50cm上位の壁面中途を水平に掘り抜き、その後約75°の角度で立ち上がる。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏13、鉢2、器台1、甕6、甑2、小型粗製土器1の合計25点が出土した。竈や貯蔵穴の周辺に集中して出土している。No.2・8・17・19・23は床面に密着して、他は床面から3~26cm浮いて出土した。P₂の西側より、薦編み石2点が出土している。

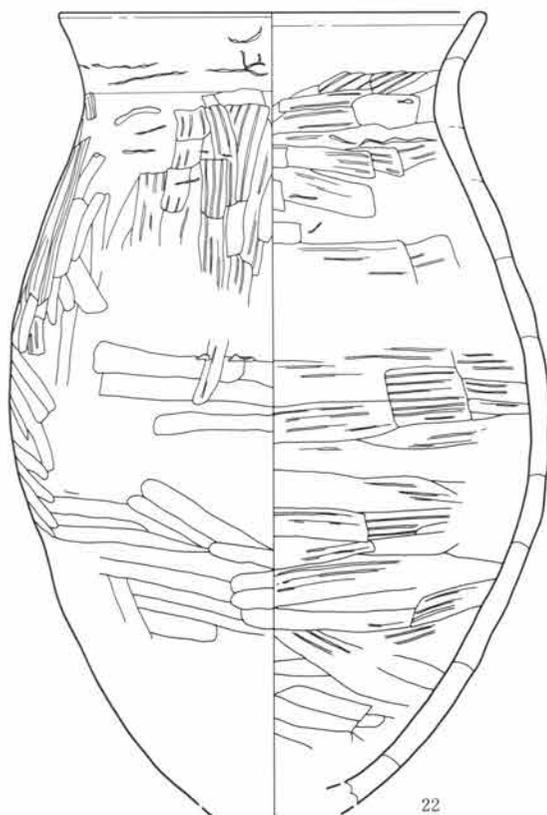
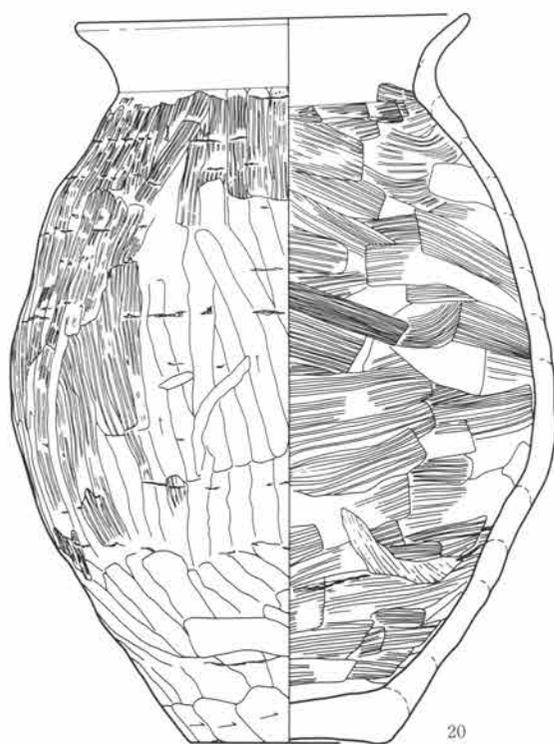
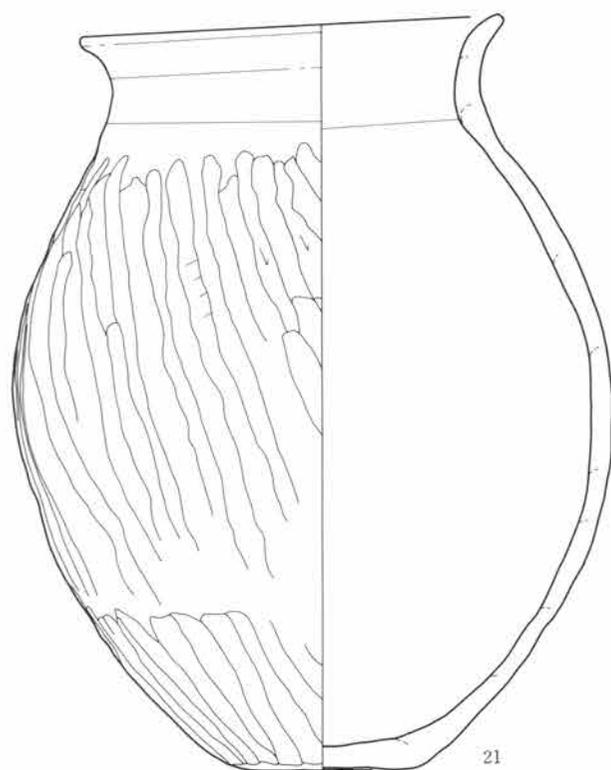
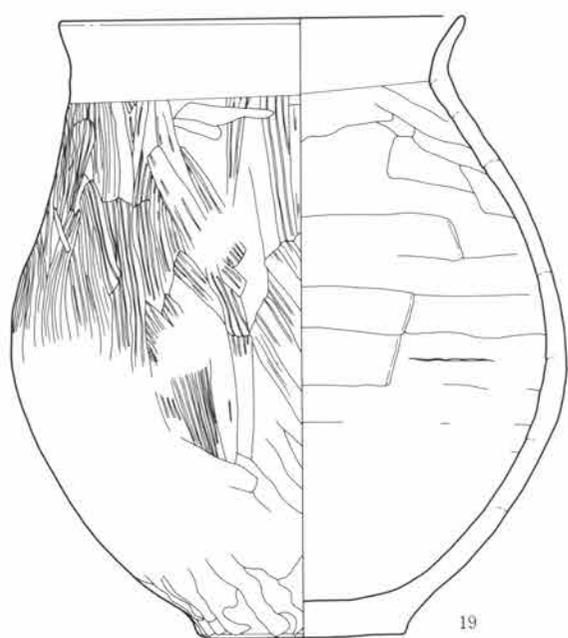
(遺物観察表：62~64頁)



第146図 2区32号住居出土遺物(1)



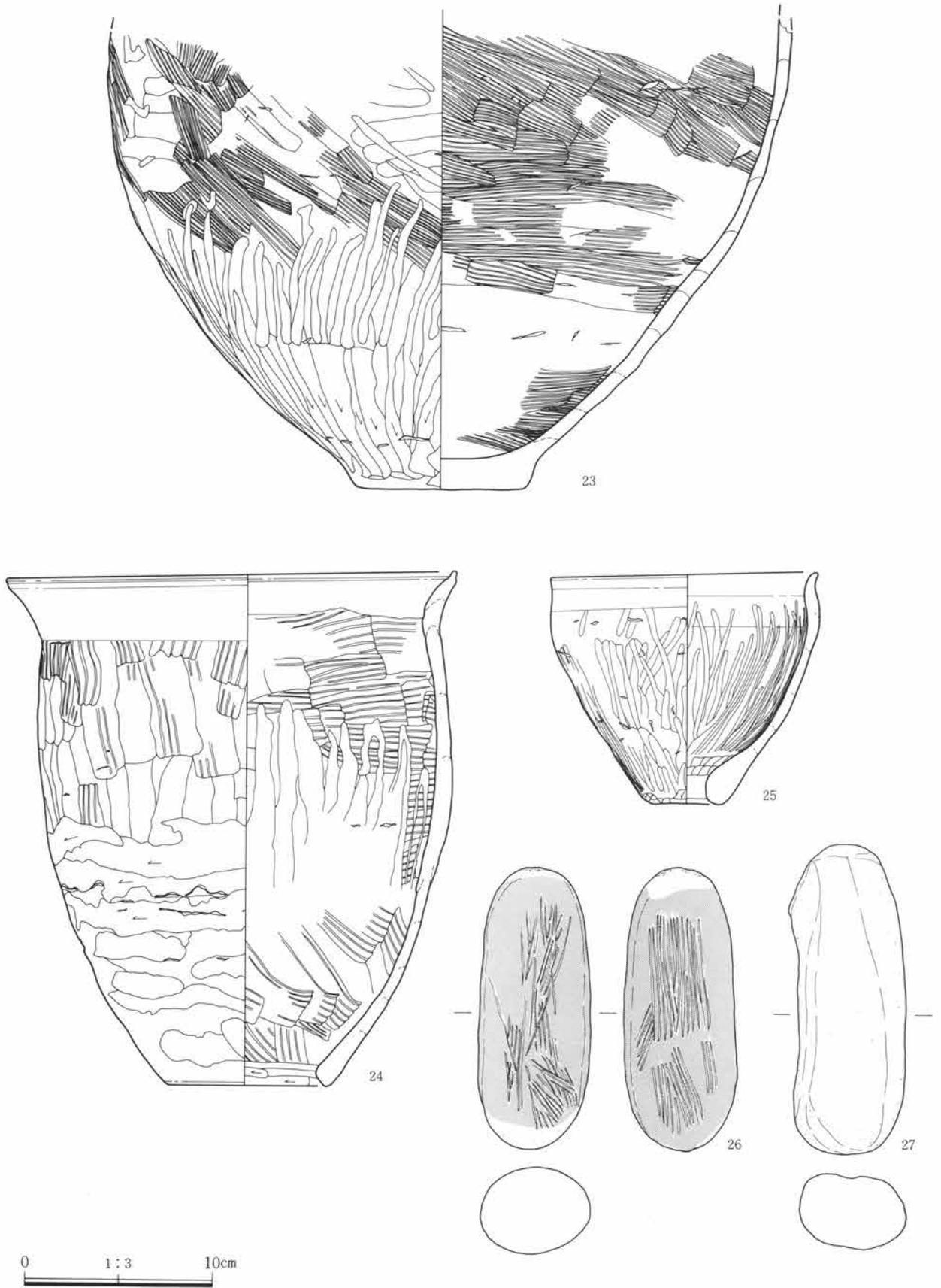
第147図 2区32号住居の遺物出土状況



0 1:3 10cm

第148図 2区32号住居出土遺物(2)

II 調査の内容



第149図 2区32号住居出土遺物(3)

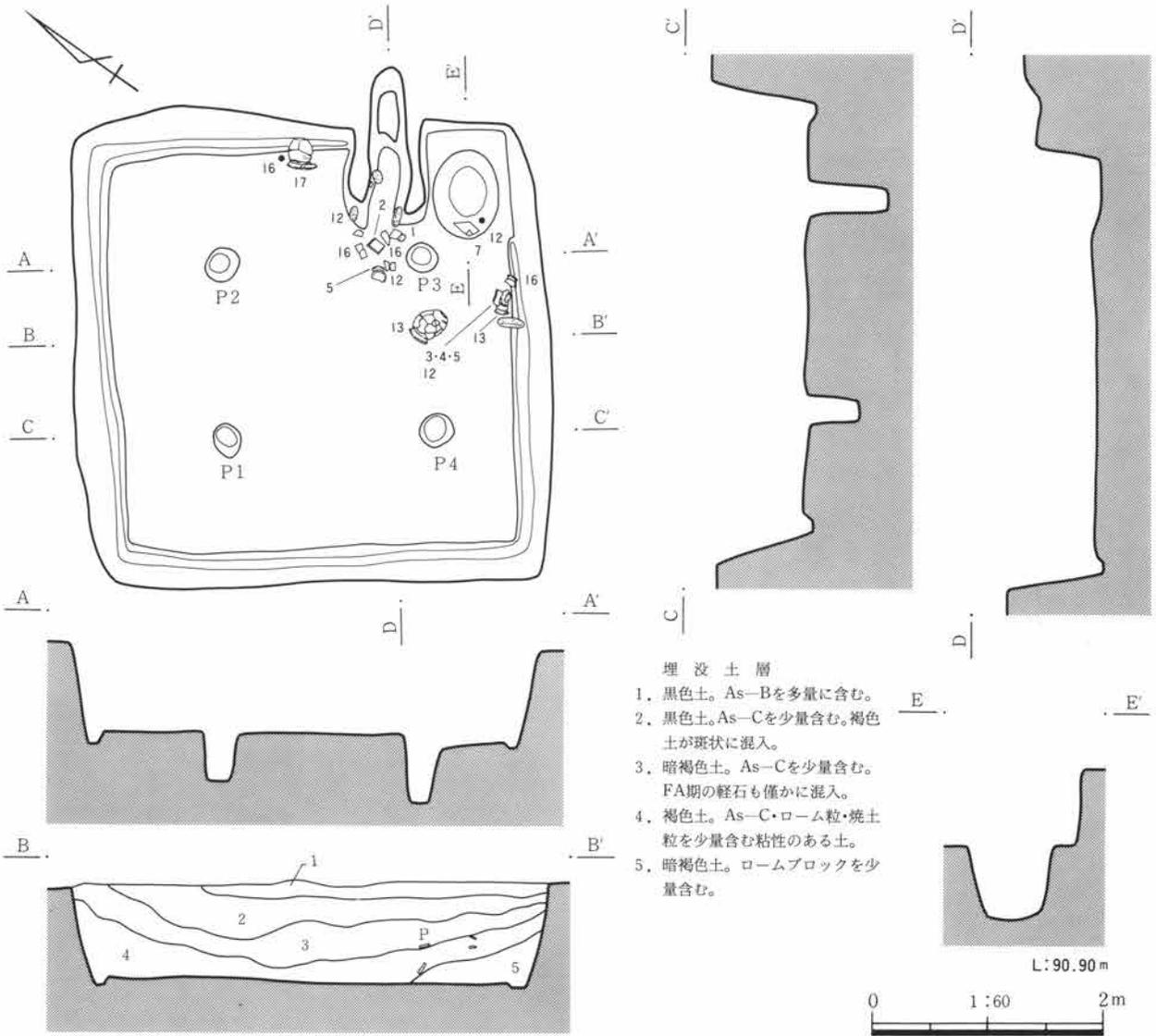
2区34号住居

位置 D-9グリッド 写真 PL-64・65
 形状 一辺が4mの正方形を呈する。四隅は直角で、周壁はわずかに外側へ弧状に膨らむ。
 面積 15.46㎡ 方位 N-52°-E
 床面 ローム土を71~88cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。
 埋没土 中層にはAs-Cまじりの黒色土が、壁際や底面の第1次埋没土にはロームブロックまじりの暗褐色土が堆積する。自然埋没の状態を示す。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ70cm、幅37cmである。両袖部の先端に河床礫を立てて補強材として使用している。煙道部は燃焼部の底面から約55cm上位の壁面を水平に掘り抜き、その後緩やかに立ち上がる。燃焼部内に支脚に使用したと思われる河床礫1点が、左壁に寄り掛かって出土した。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長径77×短径58cmの楕円形を呈し、深さ77cmである。開口部付近より坏(No.7)と甕(No.12)の一部破片が出土した。

柱穴 住居の対角線上に4本検出された。各柱穴の

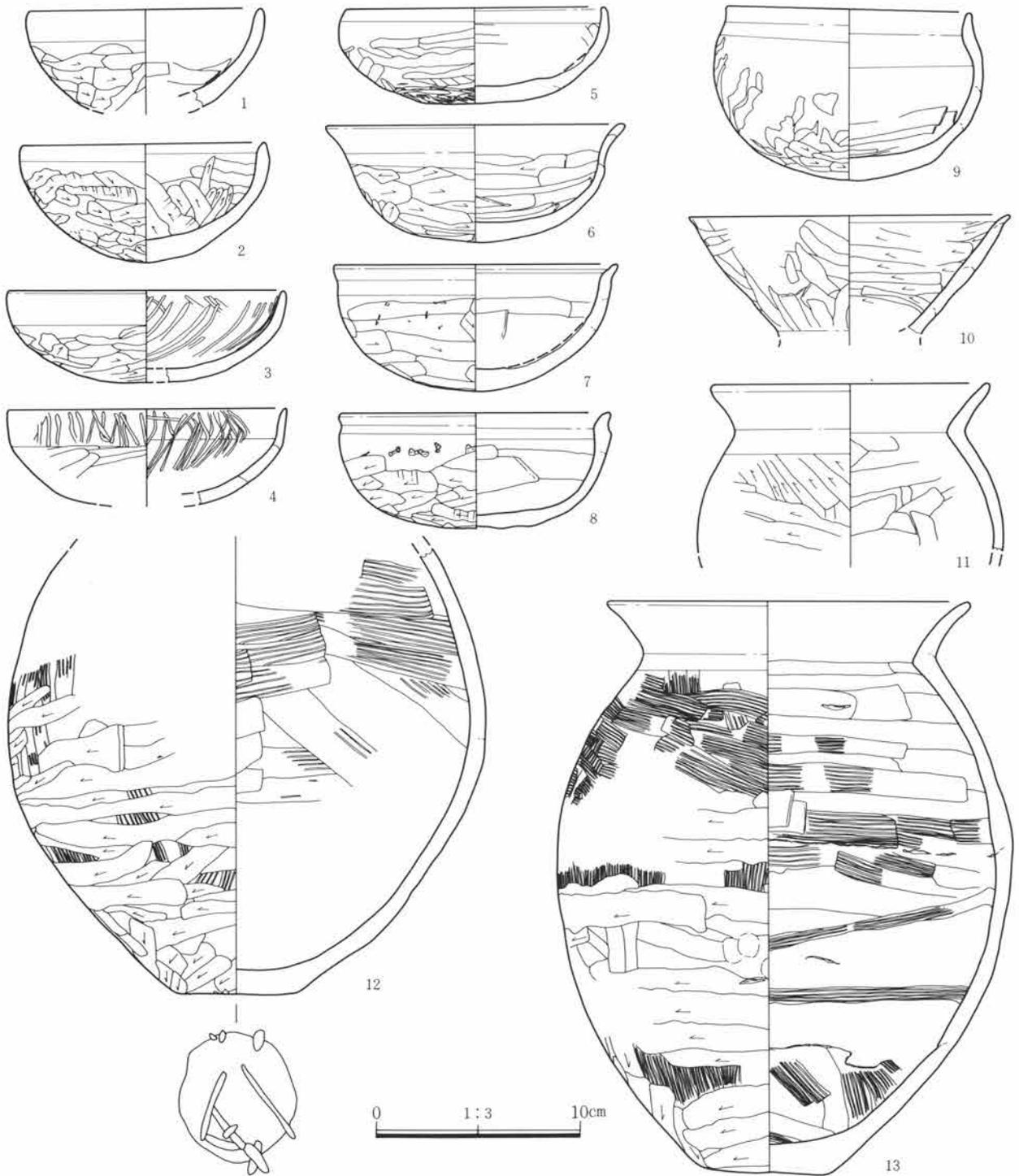


第150図 2区34号住居

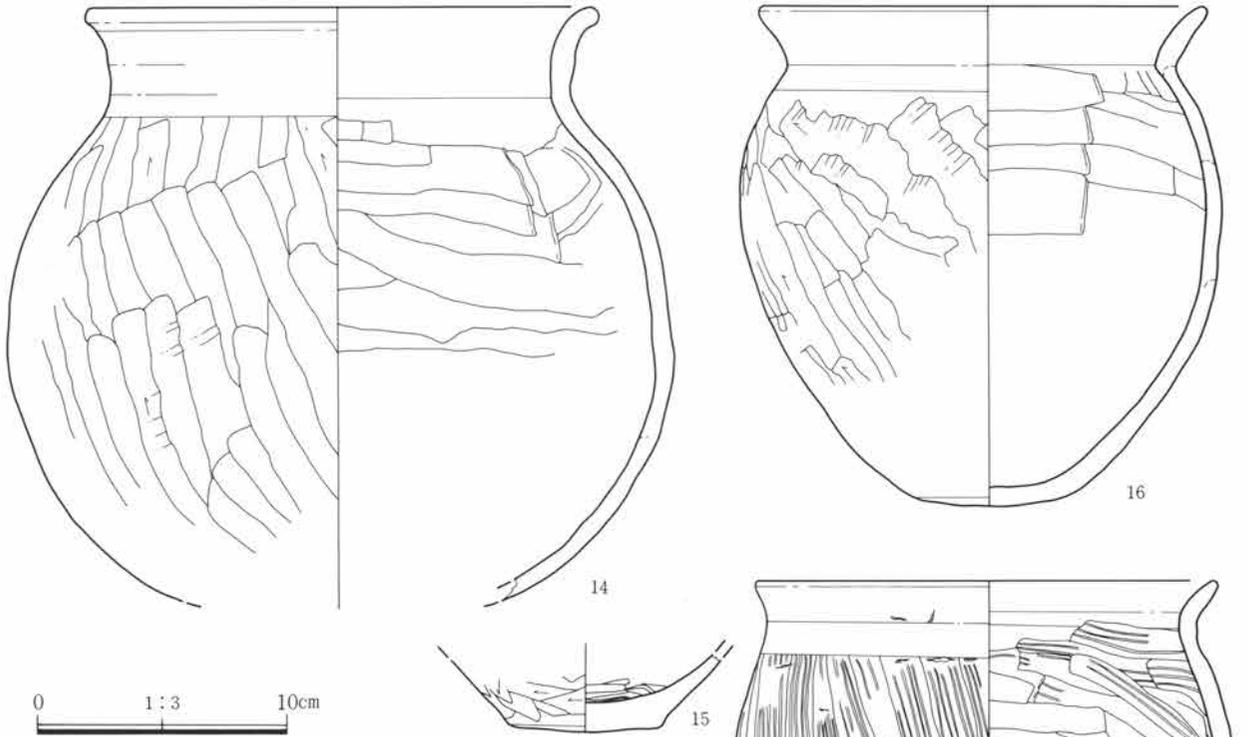
II 調査の内容

心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その距離は $P_1 \sim P_2$: 1.50m、 $P_2 \sim P_3$: 1.75m、 $P_3 \sim P_4$: 1.50m、 $P_4 \sim P_1$: 1.80mである。各柱穴の規模(径×深さ)は、 P_1 : 25×44cm、 P_2 : 30×40cm、 P_3 : 25×54cm、 P_4 : 30×67cmである。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏9、鉢1、甕6、甌1、の合計17点が出土した。No.5・13・16・17は床面に密着して、他は床面から4cm以上浮いて出土した。(遺物観察表: 64・65頁)



第151図 2区34号住居出土遺物(1)



2区35号住居

位置 R-7グリッド 写真 PL-69~73

重複 39号住居と1号溝と重複する。39号住居に後出するが、1号溝との関係は不明である。

形状 一辺が5.8mの正方形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。

面積 (32.02㎡) 方位 N-48°-E

床面 ローム土を38~70cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもち、北から南側へと比高差約10cmの傾斜が認められる。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

埋没土 上・中層にロームブロックまじりの暗黄褐色土が堆積するが、各層ともレンズ状の堆積をし、自然埋没の状態を示す。

竈 北壁中央部の東側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ130cm、幅38cmである。煙道部は掘り方のみ残存し、燃烧部より約60°の角度で立ち上がる。

貯蔵穴 南東隅に位置する。長径73×短径67cmの不整円形を呈し、深さ61cmである。39号住居の貯蔵穴とも

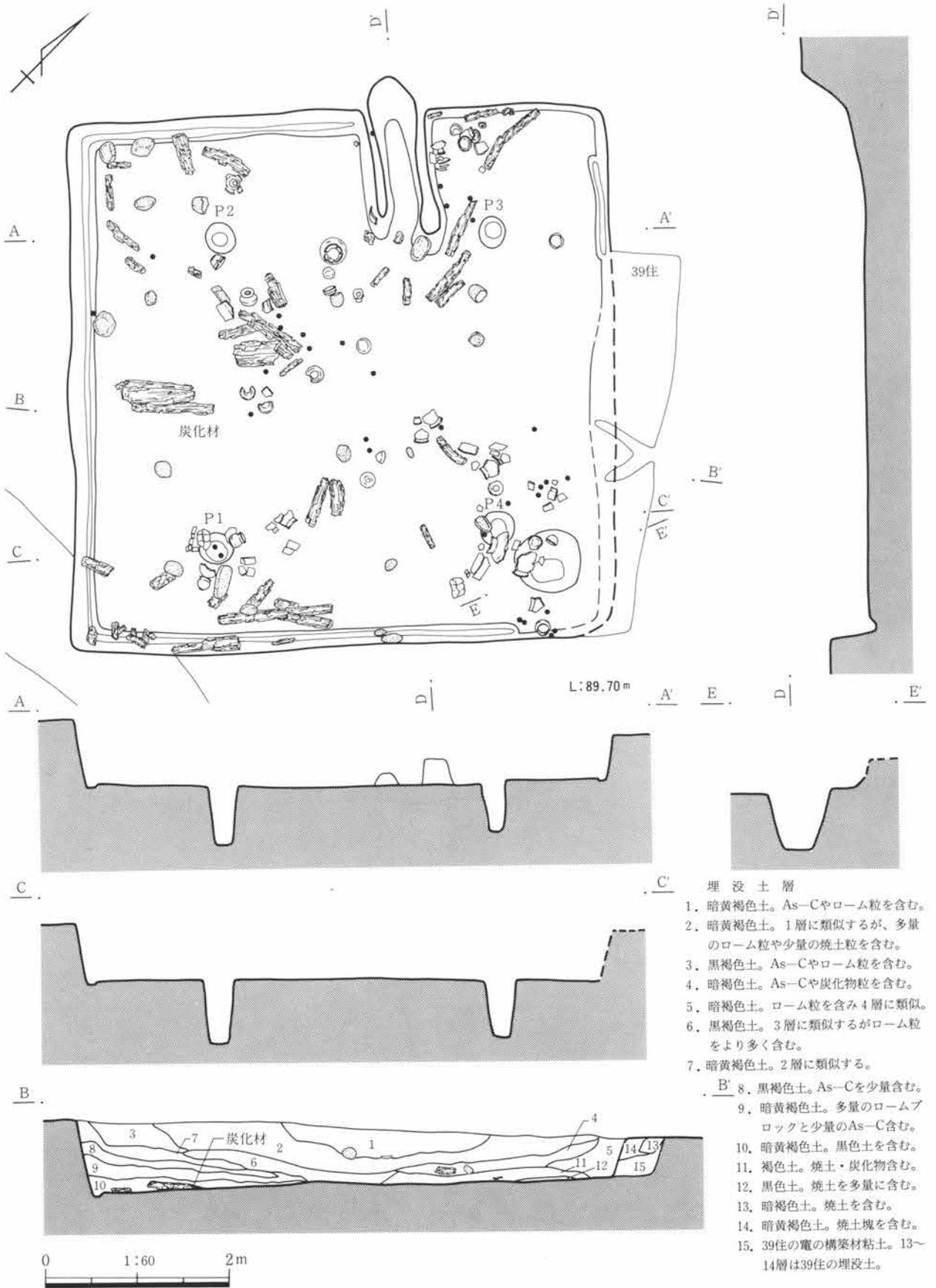
第152図 2区34号住居出土遺物(2)

重複関係にあるが、それよりも若干北側にずれた位置に掘り込まれている。

柱穴 住居のほぼ対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その規模は $P_1 \sim P_2 : 3.35\text{m}$ 、 $P_2 \sim P_3 : 2.95\text{m}$ 、 $P_3 \sim P_4 : 3.20\text{m}$ 、 $P_4 \sim P_1 : 3.10\text{m}$ である。各柱穴の規模(径×深さ)は、 $P_1 : 30 \times 68\text{cm}$ 、 $P_2 : 32 \times 64\text{cm}$ 、 $P_3 : 28 \times 51\text{cm}$ 、 $P_4 : 36 \times 64\text{cm}$ である。

周溝 東壁際のみ39号住居との重複により不明瞭であるが、他は幅18~30cm、深さ2~5cmの規模で壁面

II 調査の内容



- 埋没土層
1. 暗黄褐色土。As-Cやローム粒を含む。
 2. 暗黄褐色土。1層に類似するが、多量のローム粒や少量の焼土粒を含む。
 3. 黒褐色土。As-Cやローム粒を含む。
 4. 暗褐色土。As-Cや炭化物粒を含む。
 5. 暗褐色土。ローム粒を含み4層に類似。
 6. 黒褐色土。3層に類似するがローム粒をより多く含む。
 7. 暗黄褐色土。2層に類似する。
 8. 黒褐色土。As-Cを少量含む。
 9. 暗黄褐色土。多量のロームブロックと少量のAs-C含む。
 10. 暗黄褐色土。黒色土を含む。
 11. 褐色土。焼土・炭化物含む。
 12. 黒色土。焼土を多量に含む。
 13. 暗褐色土。焼土を含む。
 14. 暗黄褐色土。焼土塊を含む。
 15. 39住の竈の構築材粘土。13~14層は39住の埋没土。

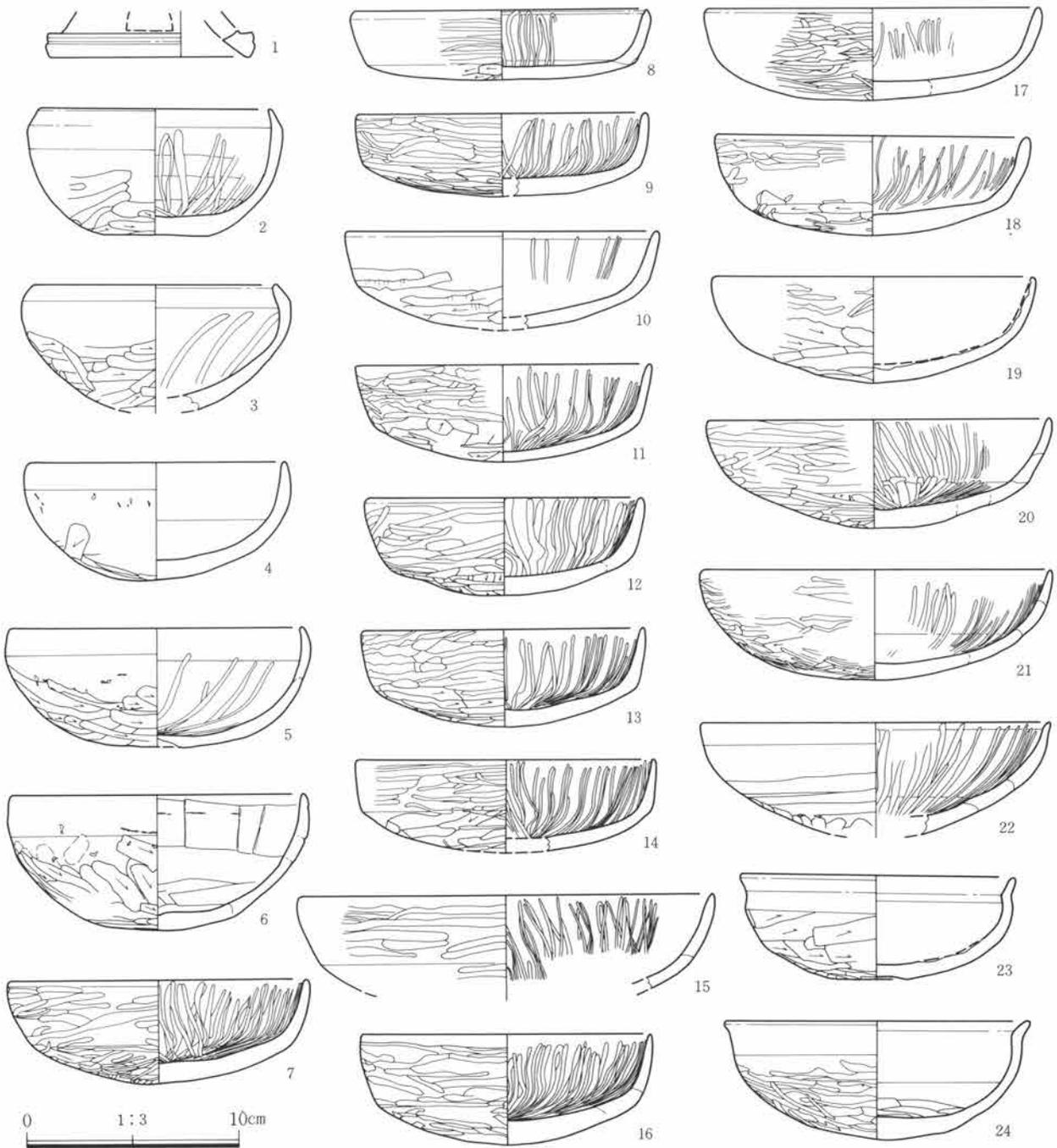
第153図 2区35号住居

に沿って巡る。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏35、高坏2、鉢1、小型甕4、甕23、甑3、壺8、小型粗製土器1、支脚2、須恵器の高坏1の合計80点が出土した。No.6・12・13・15・19・28・29・32・38・39・45・47・56・68・80は床面に密着して、他は床面から3cm以上浮いて出土した。No.44はH-13グリッ

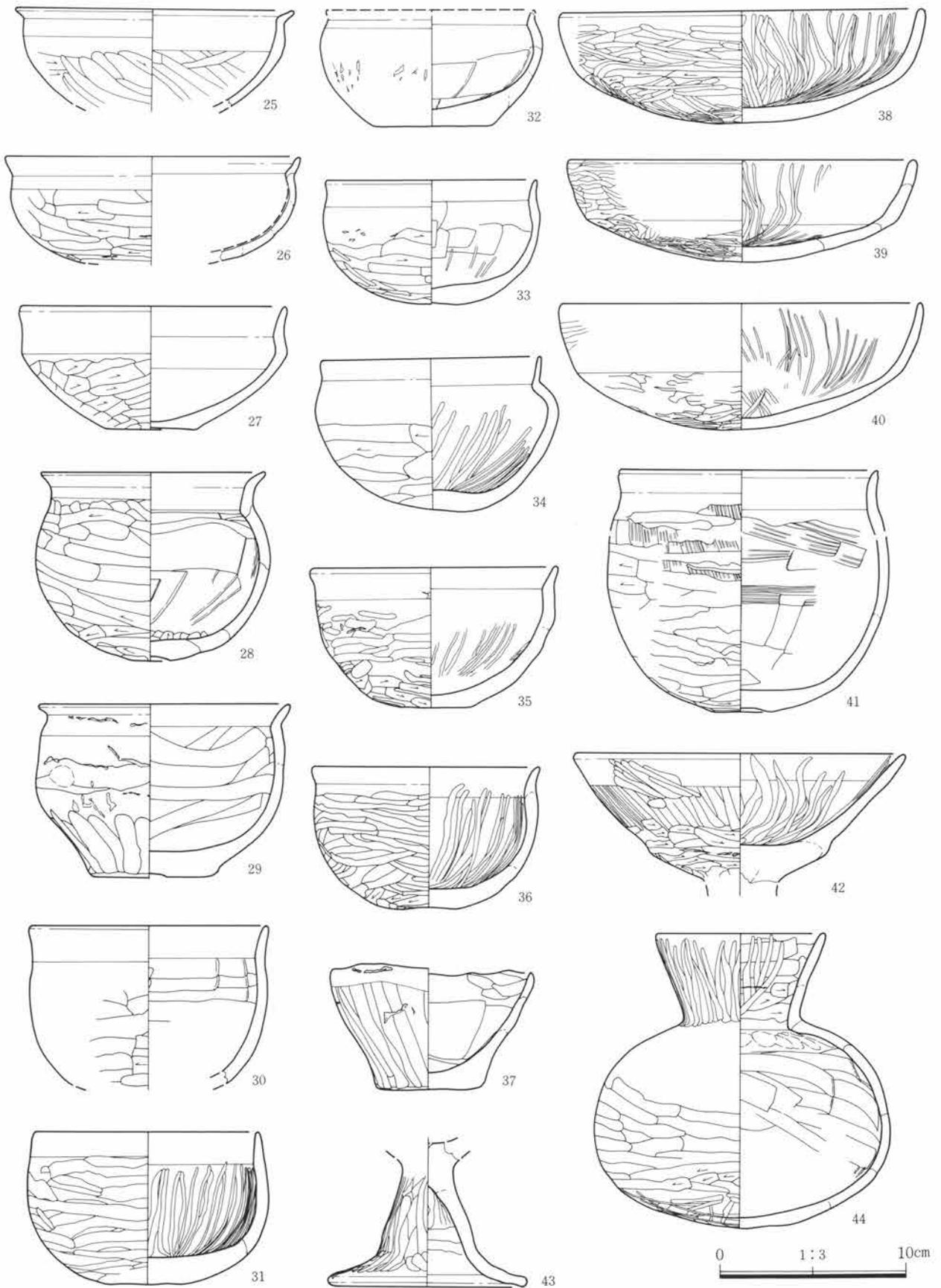
ド出土の破片と接合している。また直径20cm前後の河床礫が20点余り出土した。(遺物観察表:65~70頁)

備考 屋根材の一部と思われる炭化材が出土しており、焼失家屋と思われる。また39号住居とは貯蔵穴や周壁の一部共有などからみて、拡張による建て替えの可能性もある。

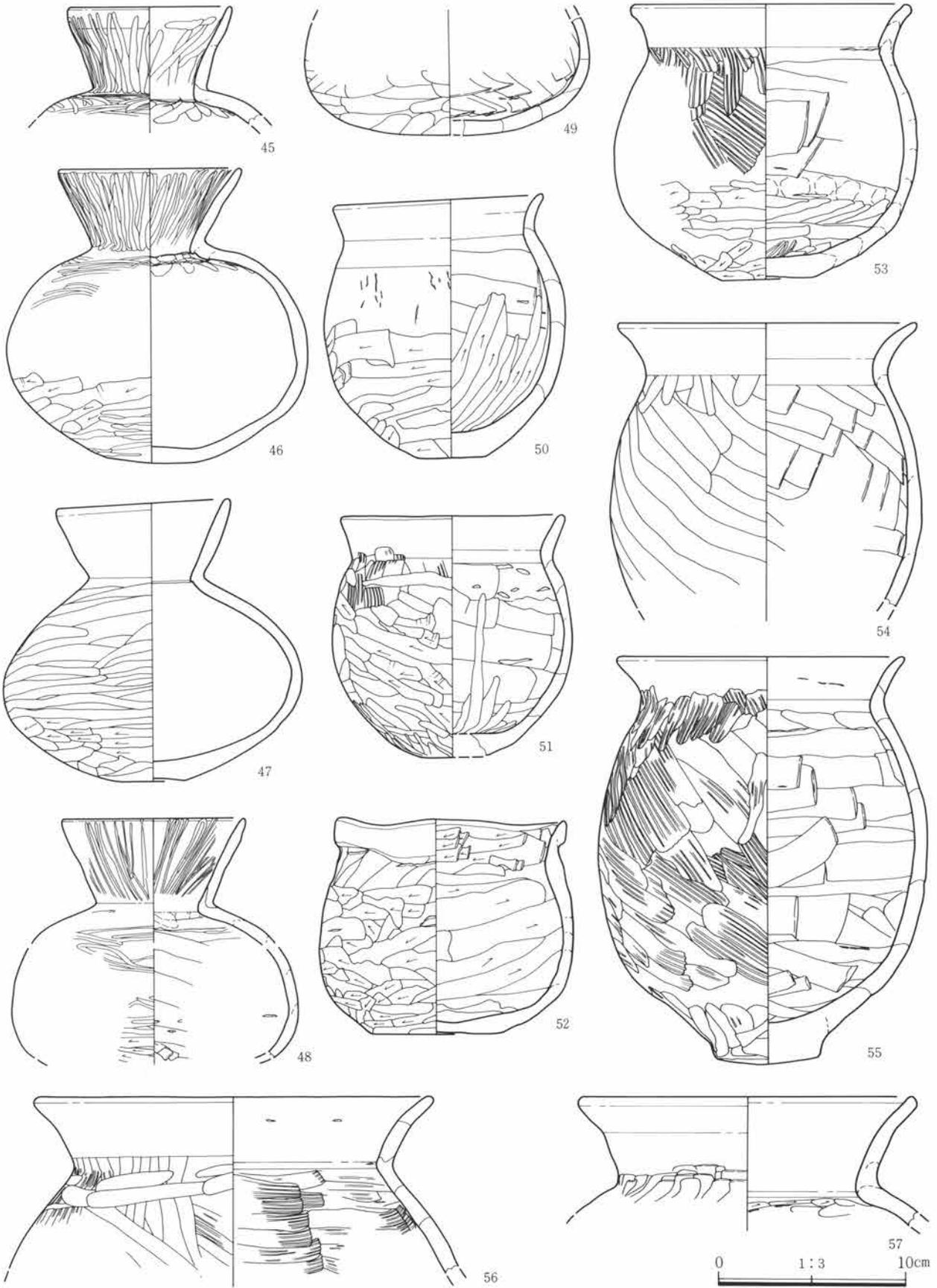


第154図 2区35号住居出土遺物(1)

II 調査の内容

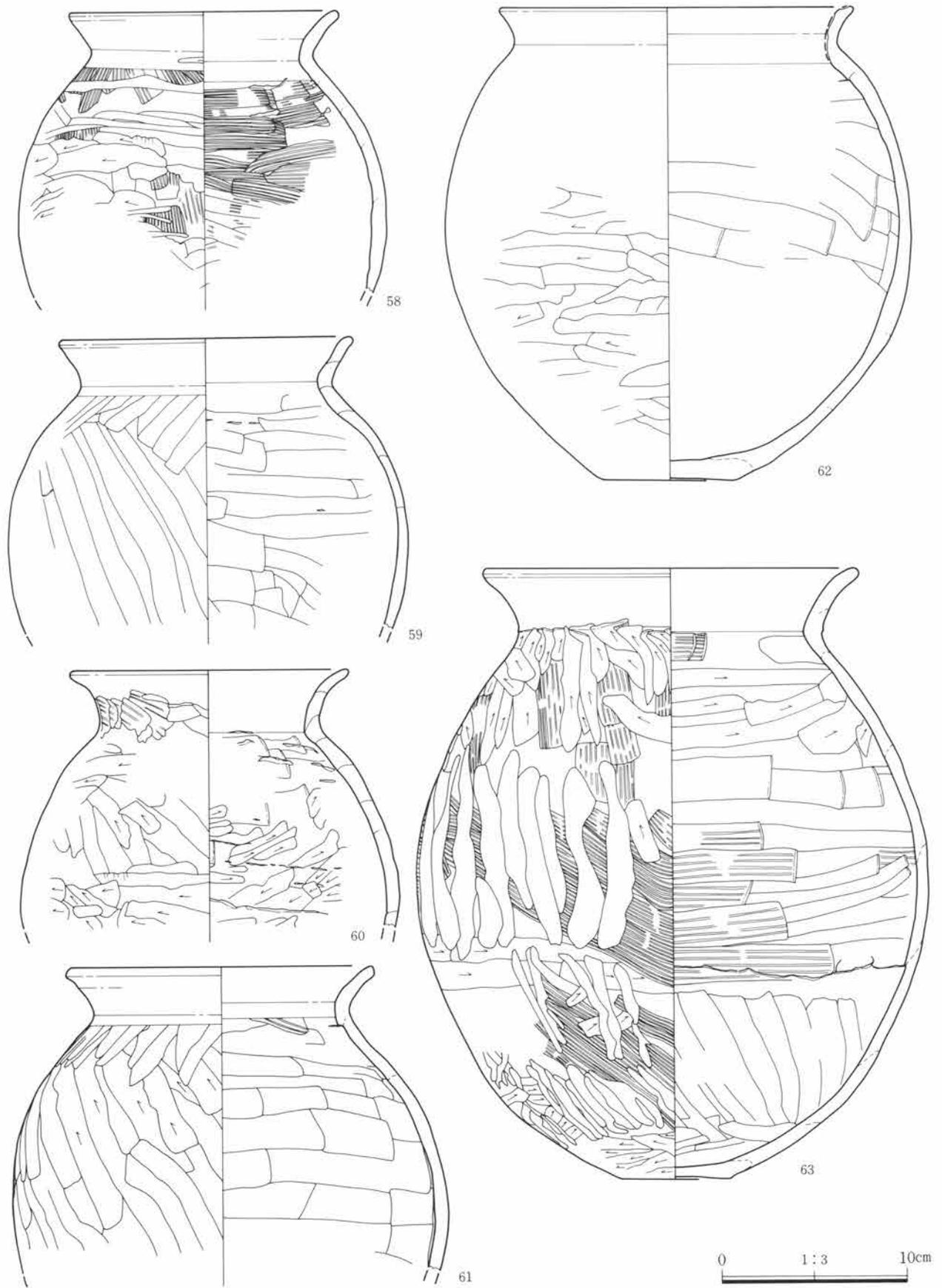


第155図 2区35号住居出土遺物(2)

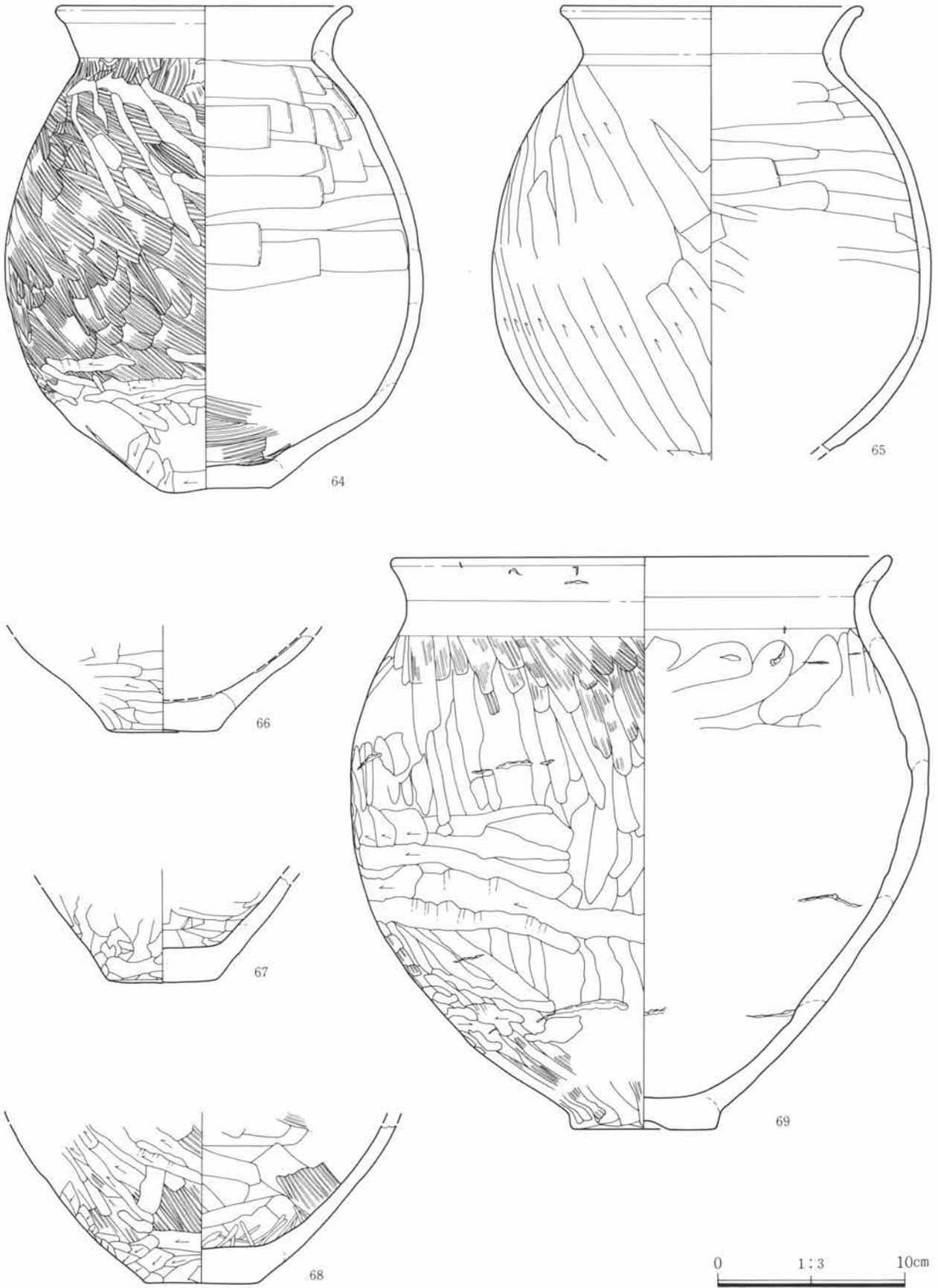


第156図 2区35号住居出土遺物(3)

II 調査の内容

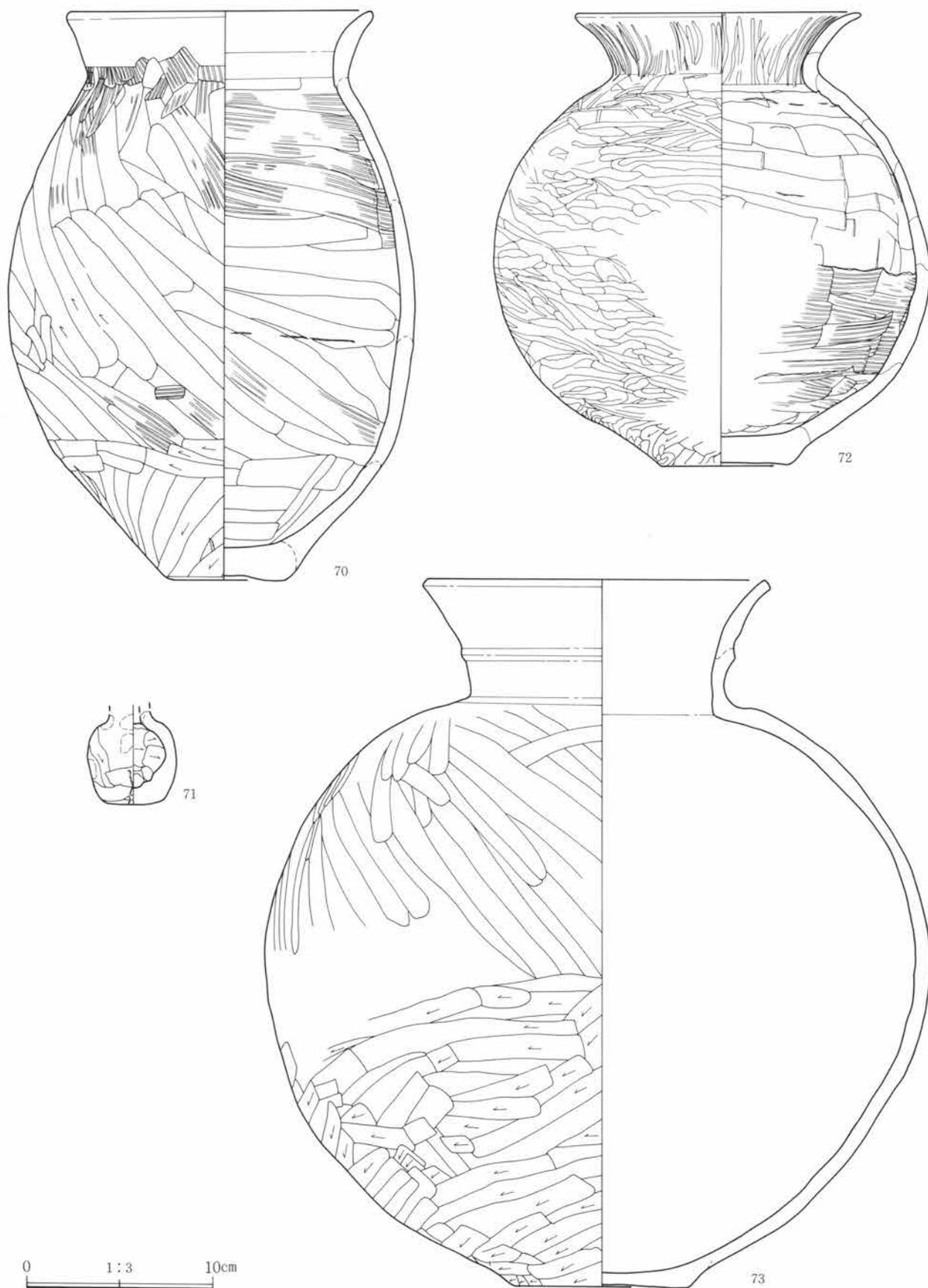


第157図 2区35号住居出土遺物(4)

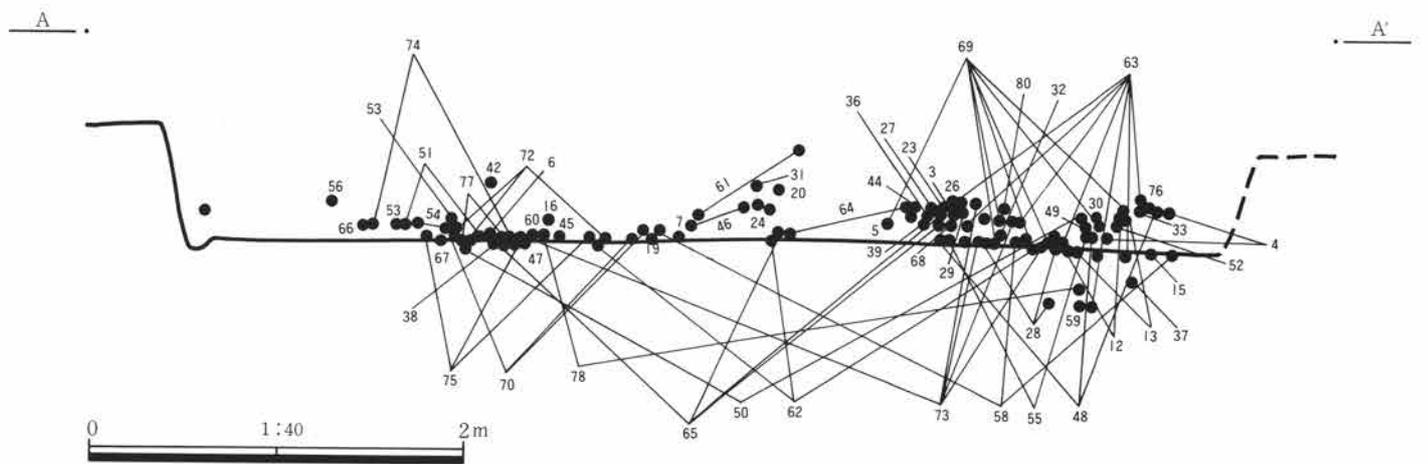
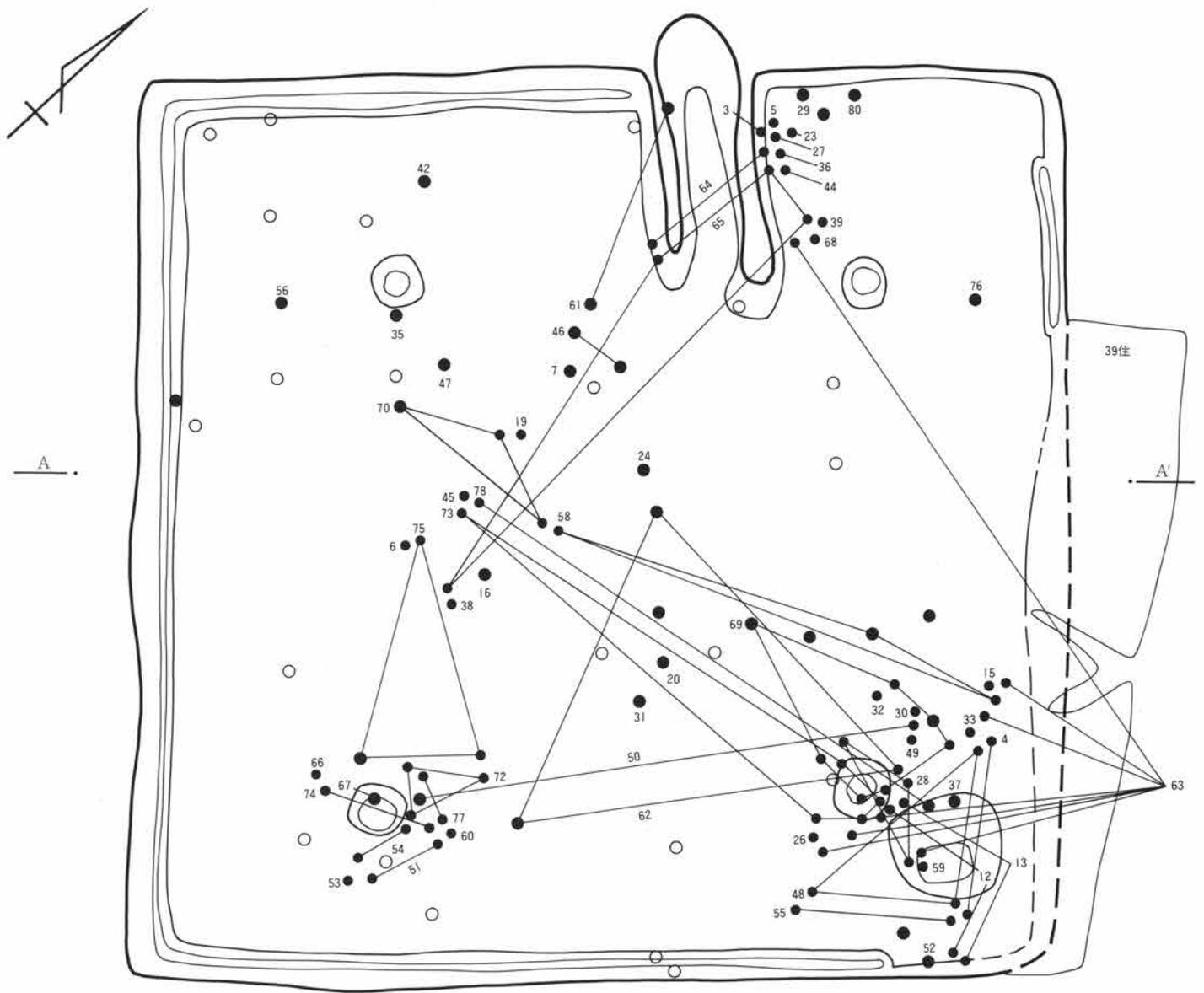


第158図 2区35号住居出土遺物(5)

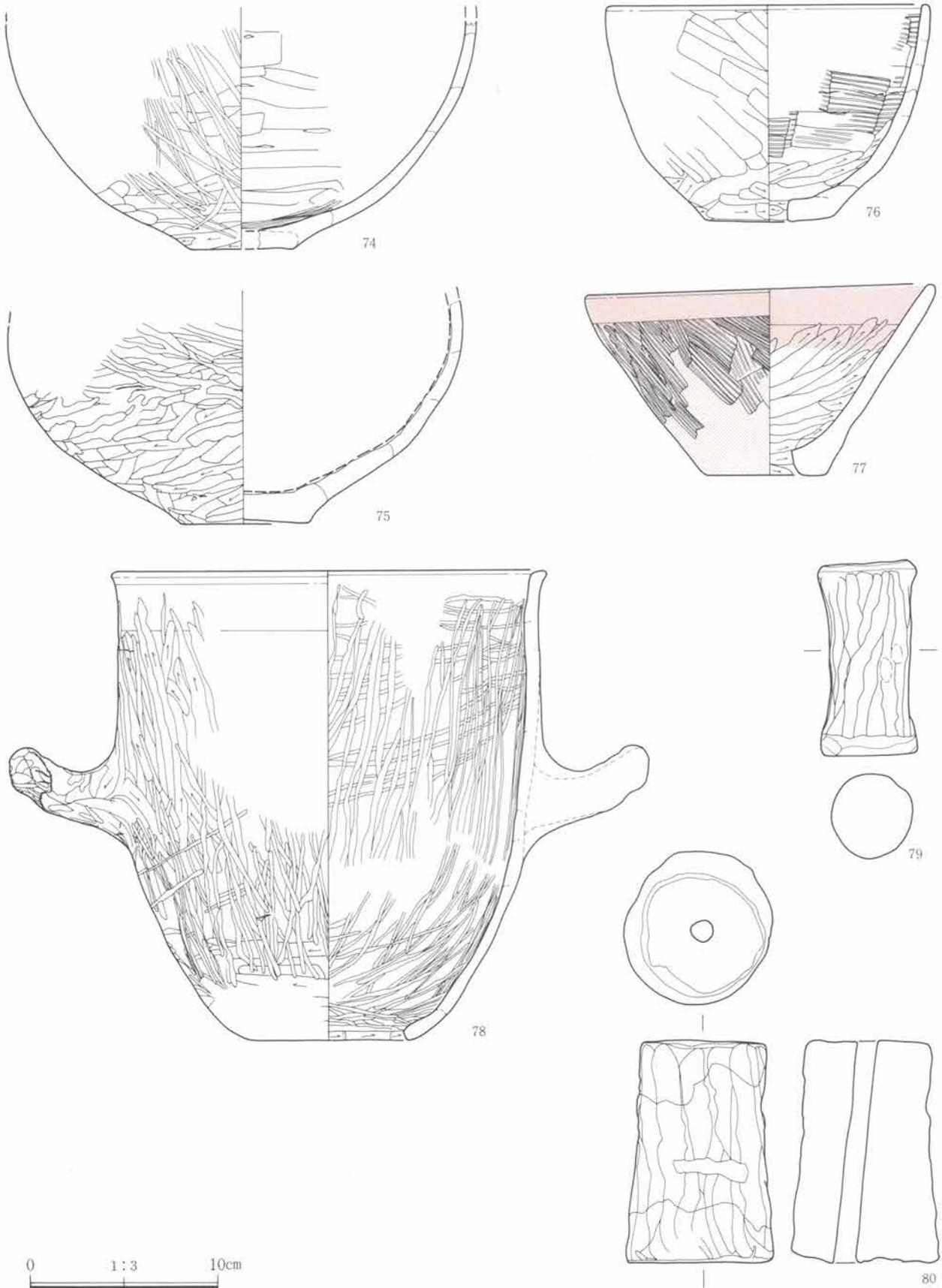
II 調査の内容



第159図 2区35号住居出土遺物(6)



第160図 2区35号住居の遺物出土状況



第161図 2区35号住居出土遺物(7)

II 調査の内容

2区36号住居

位置 L-15グリッド 写真 PL-65~67

形状 長軸を東西にもつ台形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺4.10×短辺3.10・2.65mである。

面積 11.18㎡ 方位 N-49°-E

床面 ローム土を44~56cm掘り込んで床面としている。凹凸面および傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

埋没土 上層には黒ボク的な黒色土が、また下層にはロームブロックまじりの褐色土がレンズ状に堆積する。自然埋没の状態を示す。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部と煙道部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ80cm、幅32cmである。両袖先端部に河床礫を立てて、補強材として使用している。また焚口部の天井部には、最大径38cmの河床礫を使用し

ている。煙道部は燃焼部の底面から約15cm上位の壁面中途を水平に掘り抜き、その後約80°の角度で立ち上がる。燃焼部内よりNo.3の甕が逆位に出土した。

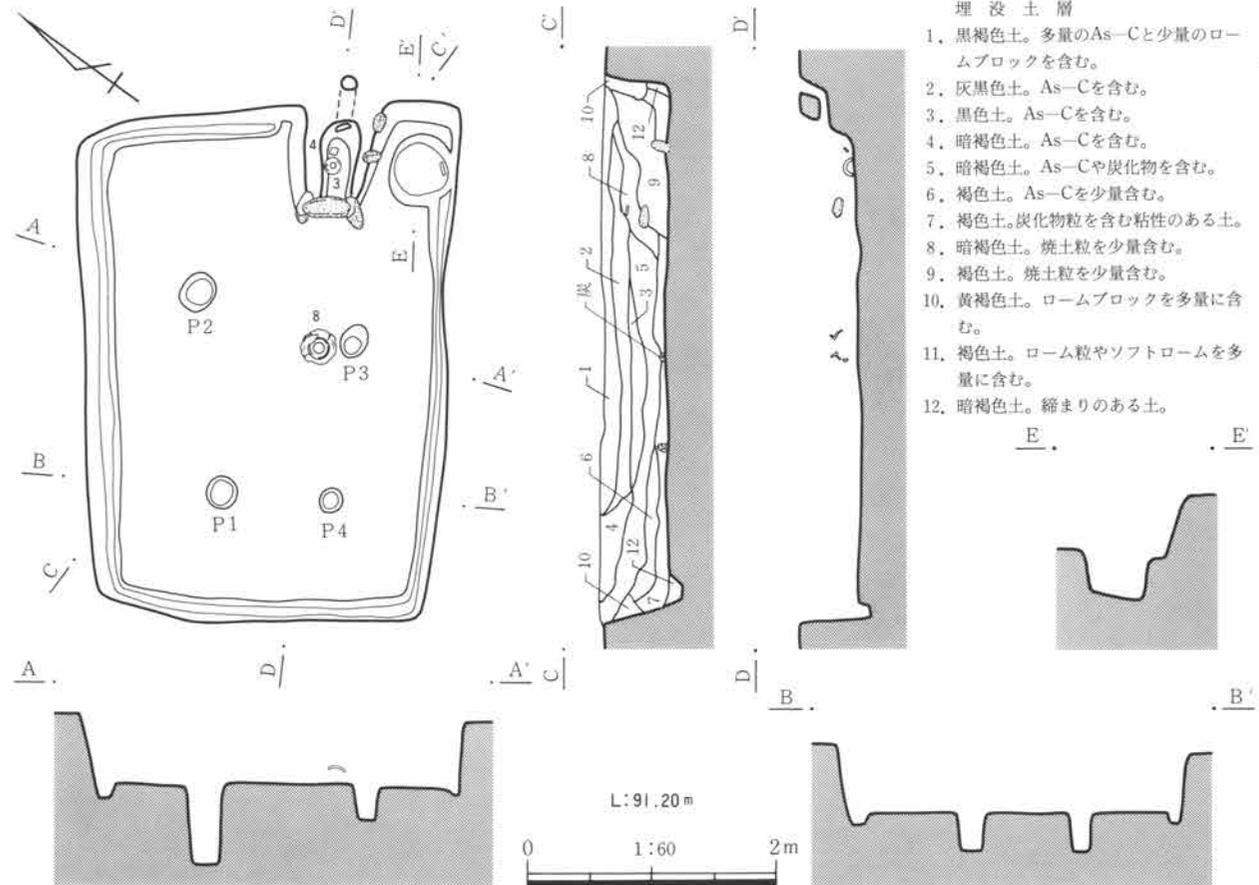
貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。直径58cmの円形を呈し、深さ38cmである。

柱穴 4本検出され、P₂・P₄は住居の対角線上に位置している。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形にならず、台形状を呈する。各柱穴の心々間の距離は、P₁~P₂:1.60m、P₂~P₃:1.30m、P₃~P₄:1.25m、P₄~P₁:0.90mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:25×28cm、P₂:31×63cm、P₃:25×31cm、P₄:19×30cmである。

周溝 幅6~30cm、深さ5~10cmの規模で全周。

遺物 実測可能な土器は、坏2、高坏1、甕5の合計9点が存在するが、No.9の砥石を含めて総て床面から10cm以上浮いて出土。No.8は2区30・51号住居の床直出土の破片と接合関係にある。

(遺物観察表:70・71頁)



第162図 2区36号住居

2区37号住居

位置 G-15グリッド 写真 PL-74・75

形状 長軸を南北にもつ長方形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺4.80×短辺3.50mである。

面積 16.20m² 方位 N-17°-E

床面 ローム土を47~76cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

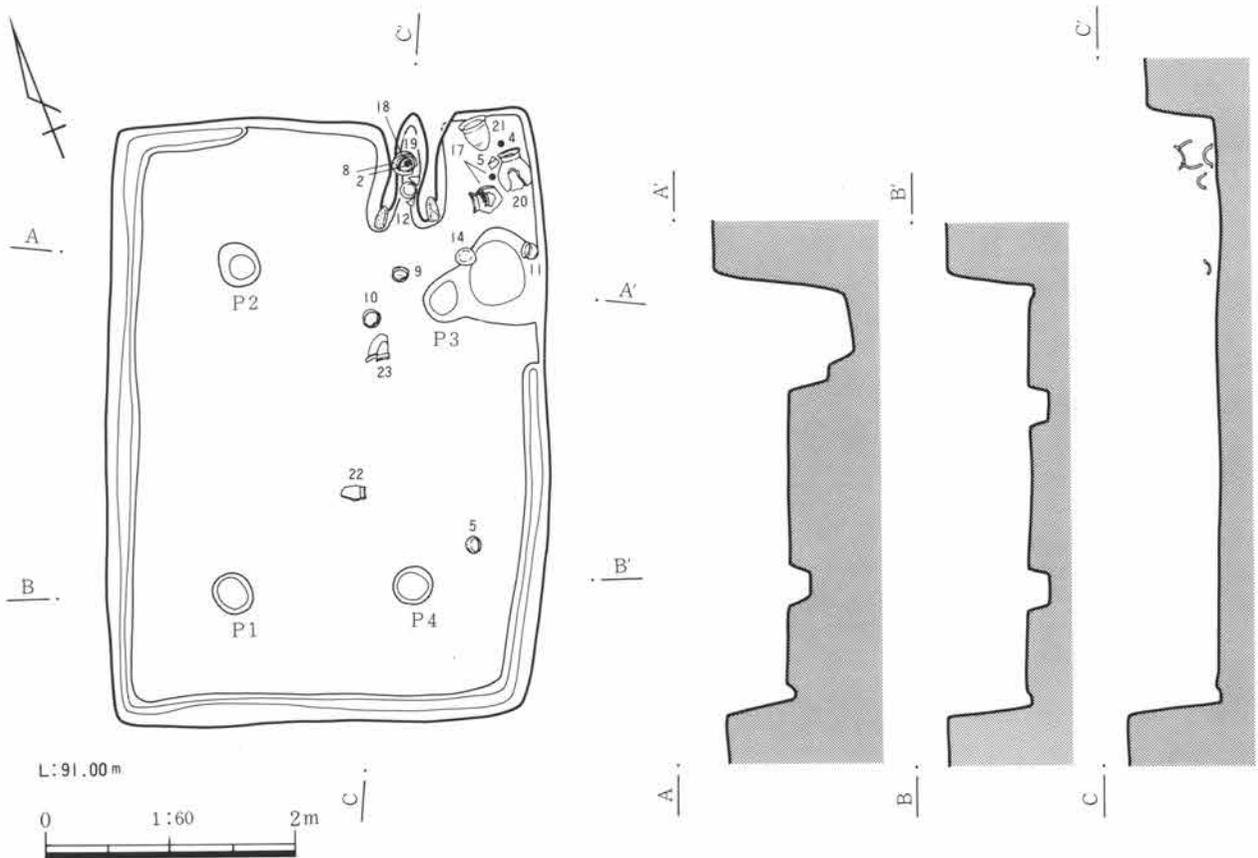
竈 北壁中央部の東側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ90cm、幅26cmである。両袖先端部に河床礫を立てて補強材として使用している。燃焼部の中央よりNo.19の甕が据えられた状態で、またその口縁部に入れ子の状態でNo.2の坏が出土した。甕の手前にはNo.12の坏が出土している。

貯蔵穴 北東隅より90cm手前の東壁際に位置する。長径74×短径63cmの不整形円形を呈し、深さ50cmである。開口部付近よりNo.14の坏とNo.11の小型甕が出土した。

柱穴 住居のほぼ対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と近似するが、台形状を呈する。各柱穴の心々間の距離はP₁~P₂:2.60m、P₂~P₃:1.65m、P₃~P₄:2.30m、P₄~P₁:1.45mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:30×17cm、P₂:34×15cm、P₃:34×31cm、P₄:30×16cm。

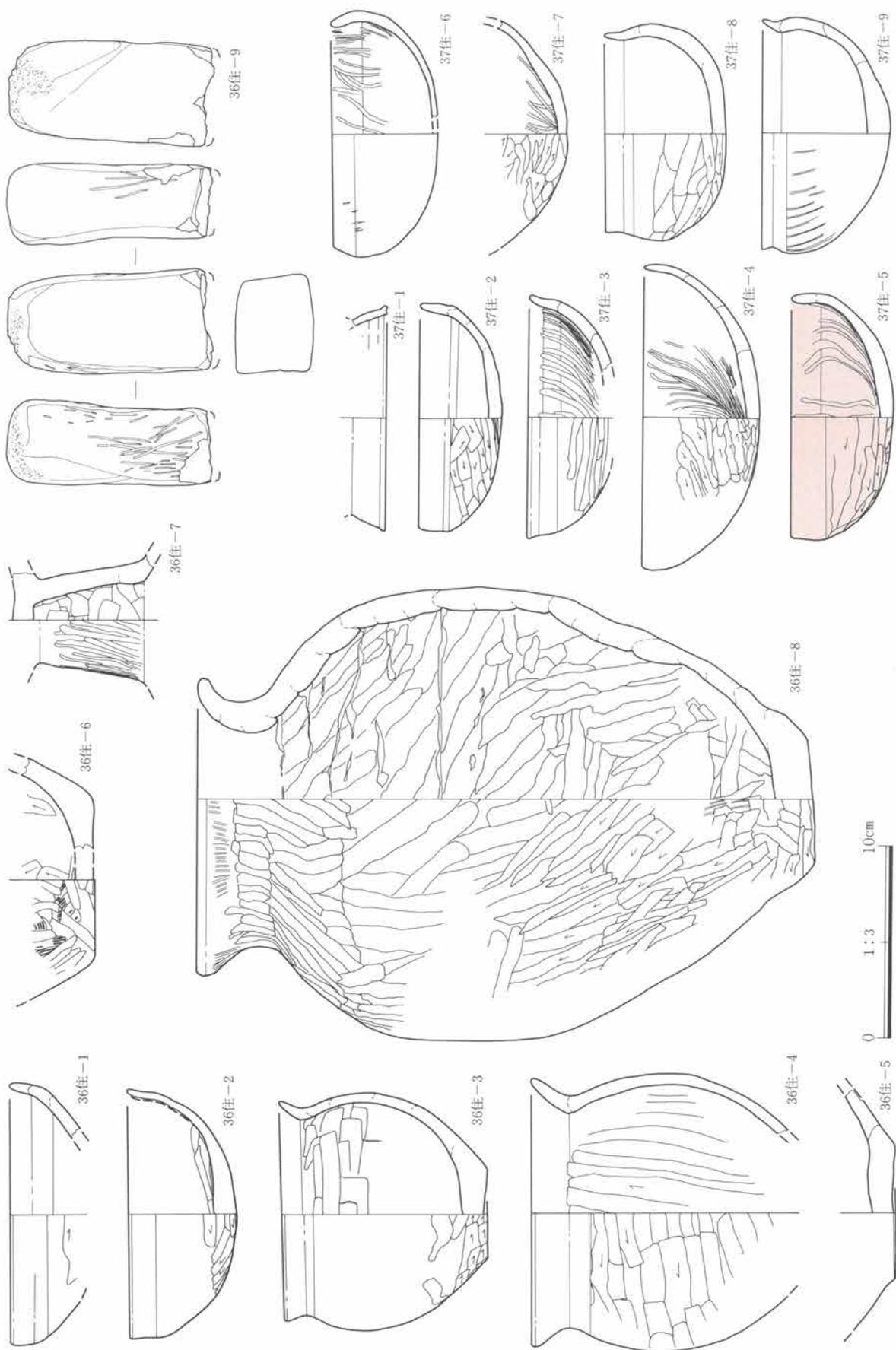
周溝 竈および貯蔵穴周辺の一部を除いて全周する。規模は幅19~26cm、深さ4~7cmである。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏13、小型甕1、甕4、甗2、壺1、須恵器の蓋1の合計22点が出土した。No.17の甕とNo.21の甗が床面に密着して、他は床面から3cm以上浮いて出土した。No.20は2区33号住居の埋没土出土の破片と接合関係にある。(遺物観察表:71・72頁)

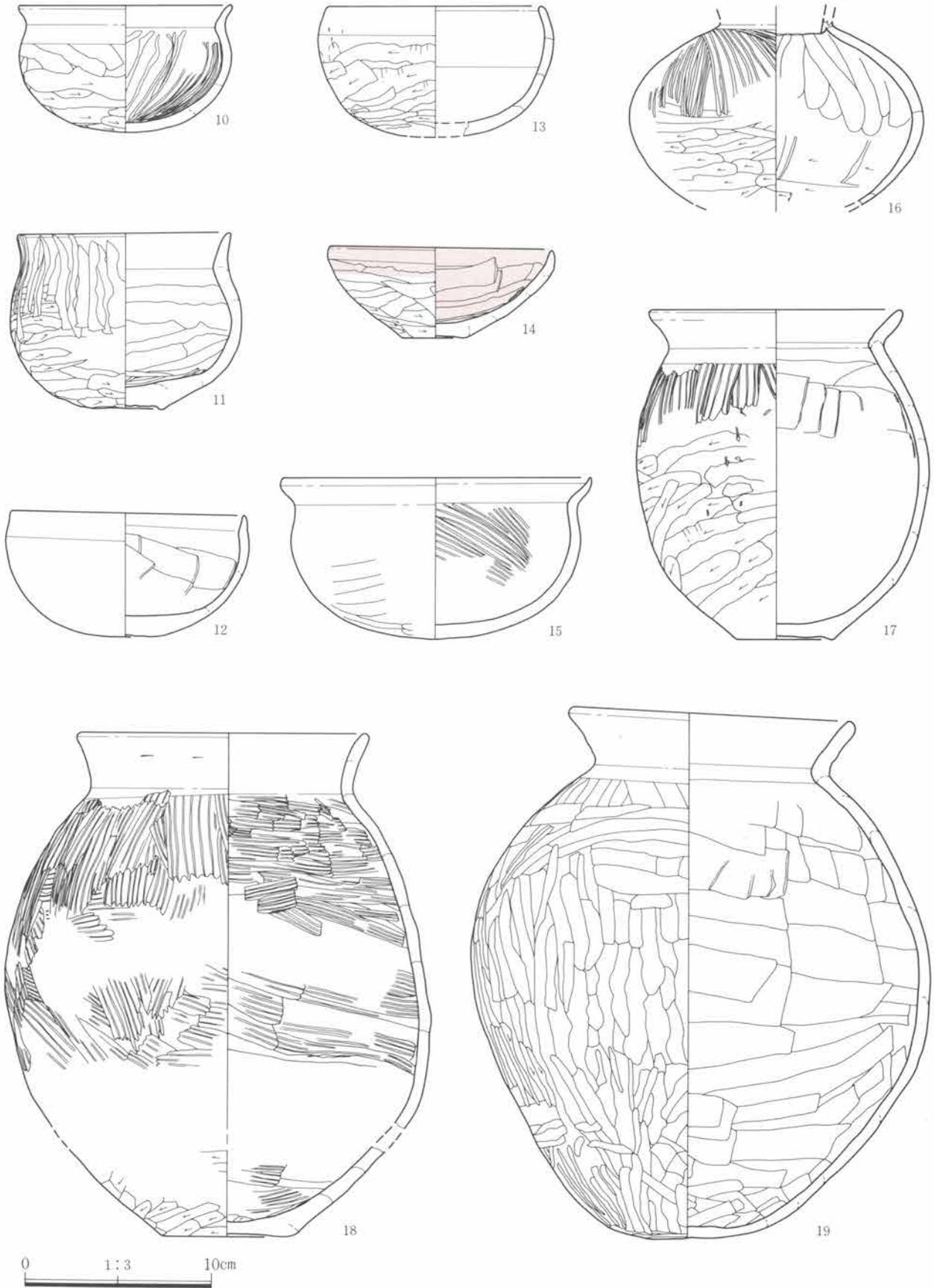


第163図 2区37号住居

II 調査の内容

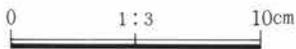
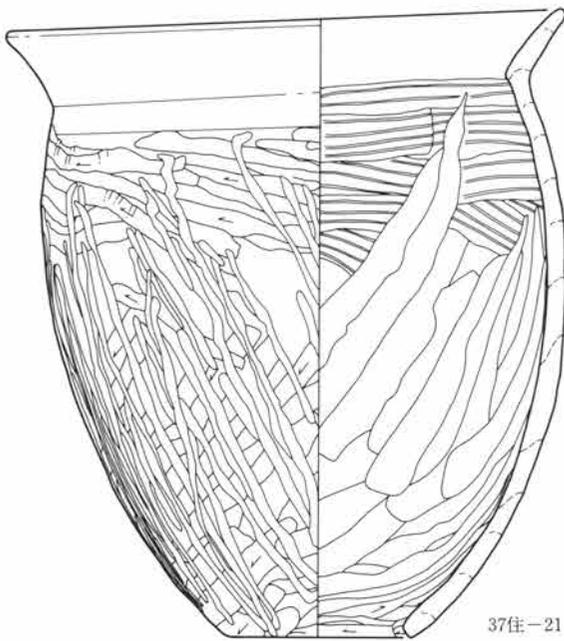
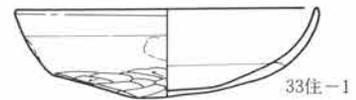
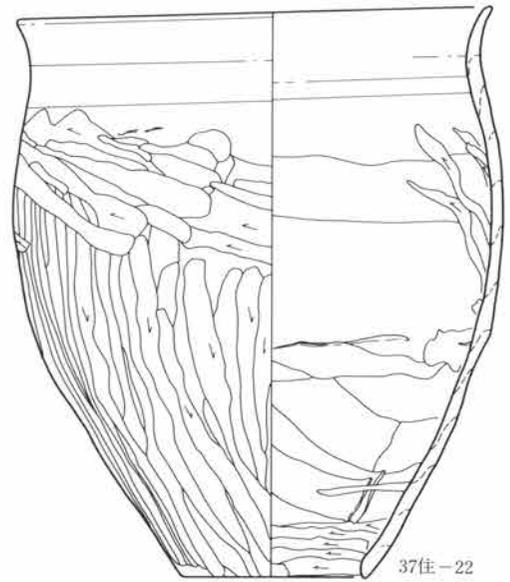
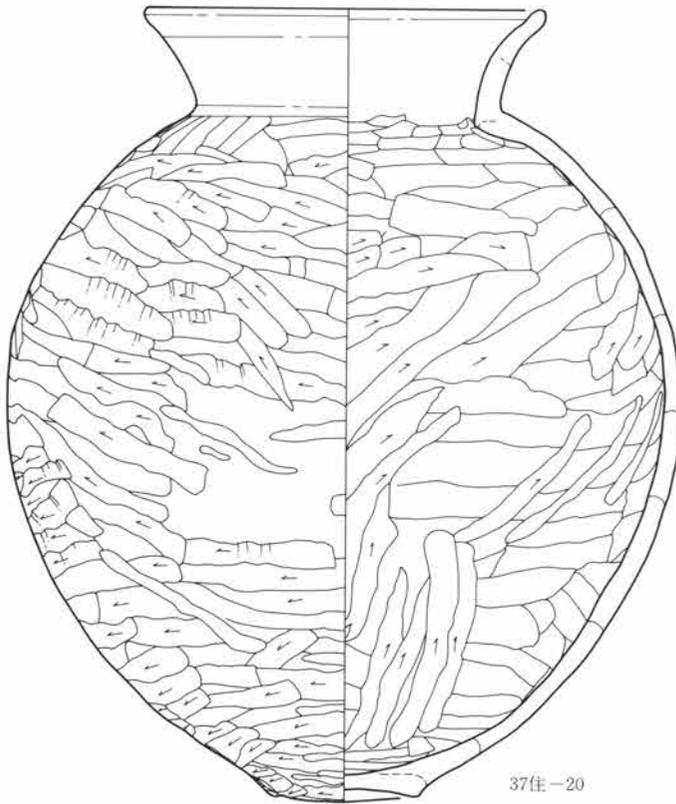


第164図 2区36・37号住居出土遺物



第165図 2区37号住居出土遺物

II 調査の内容



第166図 2区37・33号住居出土遺物

2区33号住居

位置 M-12グリッド 写真 PL-56

重複 住居のほぼ全体が、本住居に後出する29号住居と重複する。

形状 一辺が約3.1mの正方形を呈する。四隅は直角で、周壁はわずかに外側へ弧状に膨らむ。

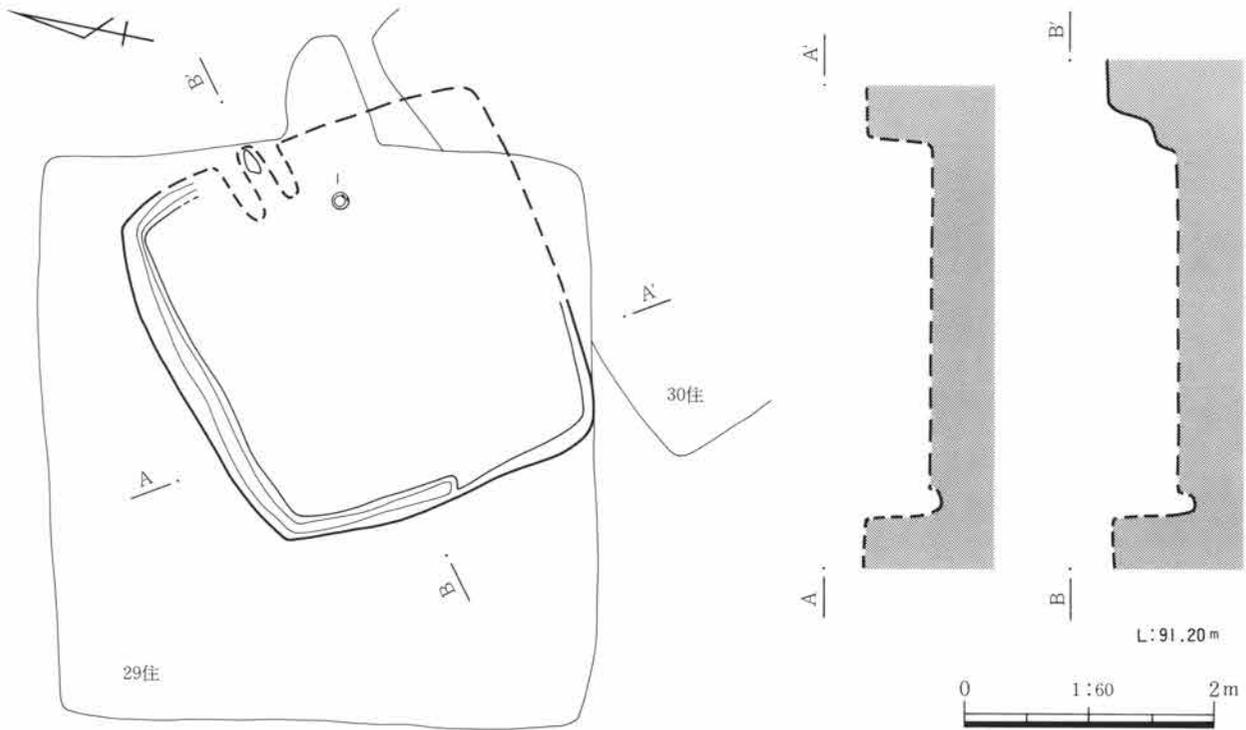
面積 (9.10㎡) 方位 N-54°-E

床面 ローム土をおよそ50cm掘り込んで床面としている。29号住居との重複により、住居の掘り方が確認できたのみである。

竈 東壁中央部の北側寄りに位置するが、煙道部の掘り方の一部を残すのみである。煙道部は燃焼部より約70°の角度で立ち上がる。

周溝 北壁際と西壁沿いの一部に検出された。深さは不明であるが、幅は20cm前後と思われる。

遺物 実測可能な土器は坏1点のみであり、埋没土中より出土した。(遺物観察表：64頁)



第167図 2区33号住居

2区38号住居

位置 E-15グリッド 写真 PL-67・68

形状 長軸を南北にもつ長方形を呈し、北西隅に長辺2.00×短辺1.15mの張出部が付設される。主体部の四隅は直角で、周壁は若干蛇行するもののほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺4.05×短辺3.10mである。

面積 14.05㎡ 方位 N-56°-E

床面 ローム土を69～89cm掘り込んで床面としている。凹凸面および傾斜の少ない平坦な床面であるが、張出部は主体部よりも10～13cm低くなる。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。張出部も同様の堅固な床面である。

竈 東壁中央部に位置し、両袖部が残存する。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ70cm、幅25cmである。煙道部は燃烧部の底面から約35cm上位の壁面中途を水平に掘り抜き、その後垂直に近い角度で立ち上がる。燃烧部内よりNo.6の小型甕とNo.11の甕とNo.9の鉢が出土している。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長軸85×短軸65cmの隅丸方形を呈し、深さ80cmである。開口部の南壁際にNo.5の甕とNo.4の坏が出土した。

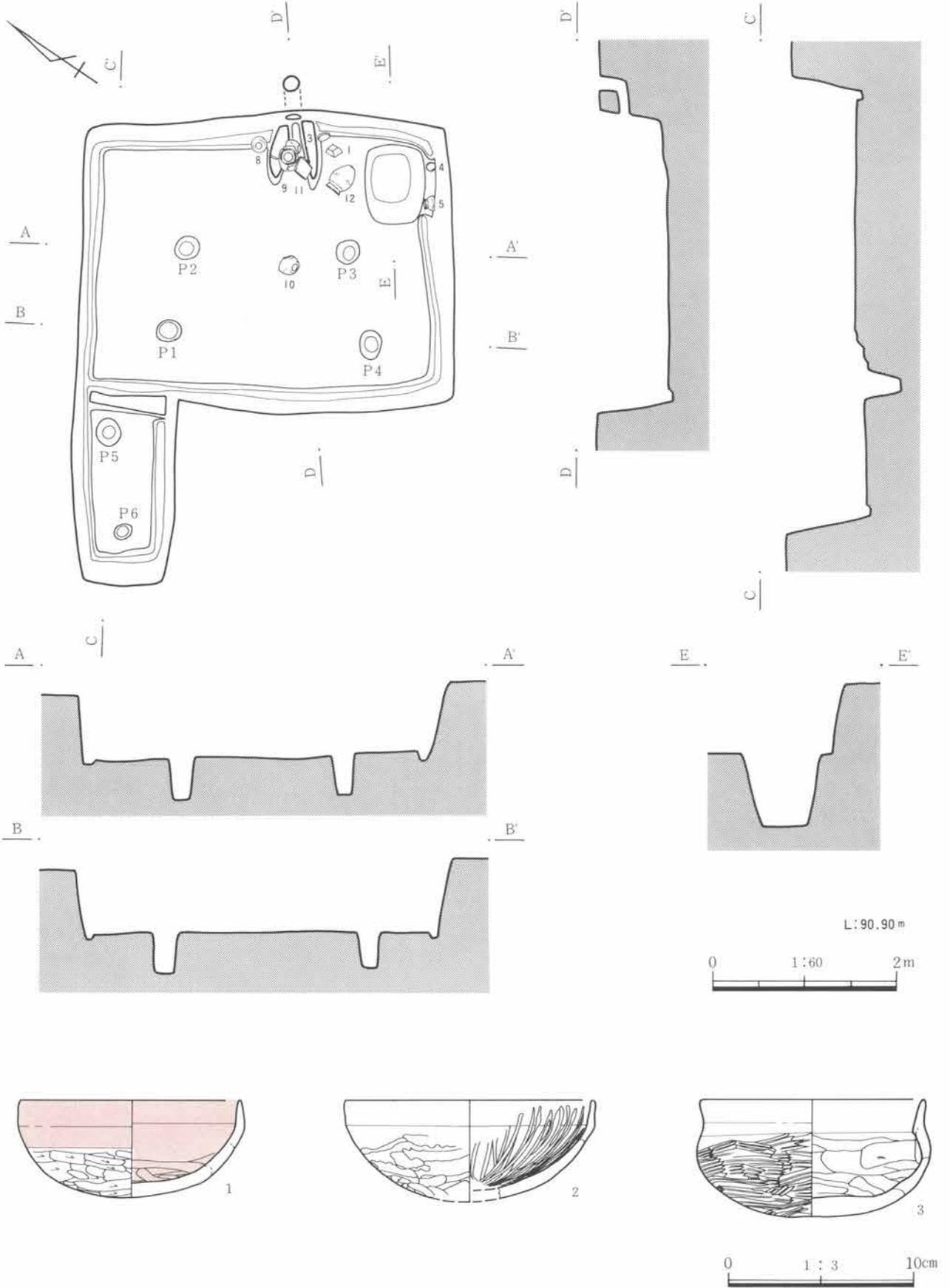
柱穴 主体部に4本、張出部に2本の合計6本が検出された。P₁～P₄の各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形にならずに台形状を呈する。各柱穴の心々間の距離は、P₁～P₂:0.90m、P₂～P₃:1.80m、P₃～P₄:1.00m、P₄～P₁:2.20m、P₅～P₆:1.10mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:23×42cm、P₂:25×44cm、P₃:26×44cm、P₄:25×35cm、P₅:28×38cm、P₆:18×41cmである。

周溝 幅16～31cm、深さ4～7cmの規模で壁面に沿ってほぼ全周するが、張出部の周溝は主体部と接続していない。

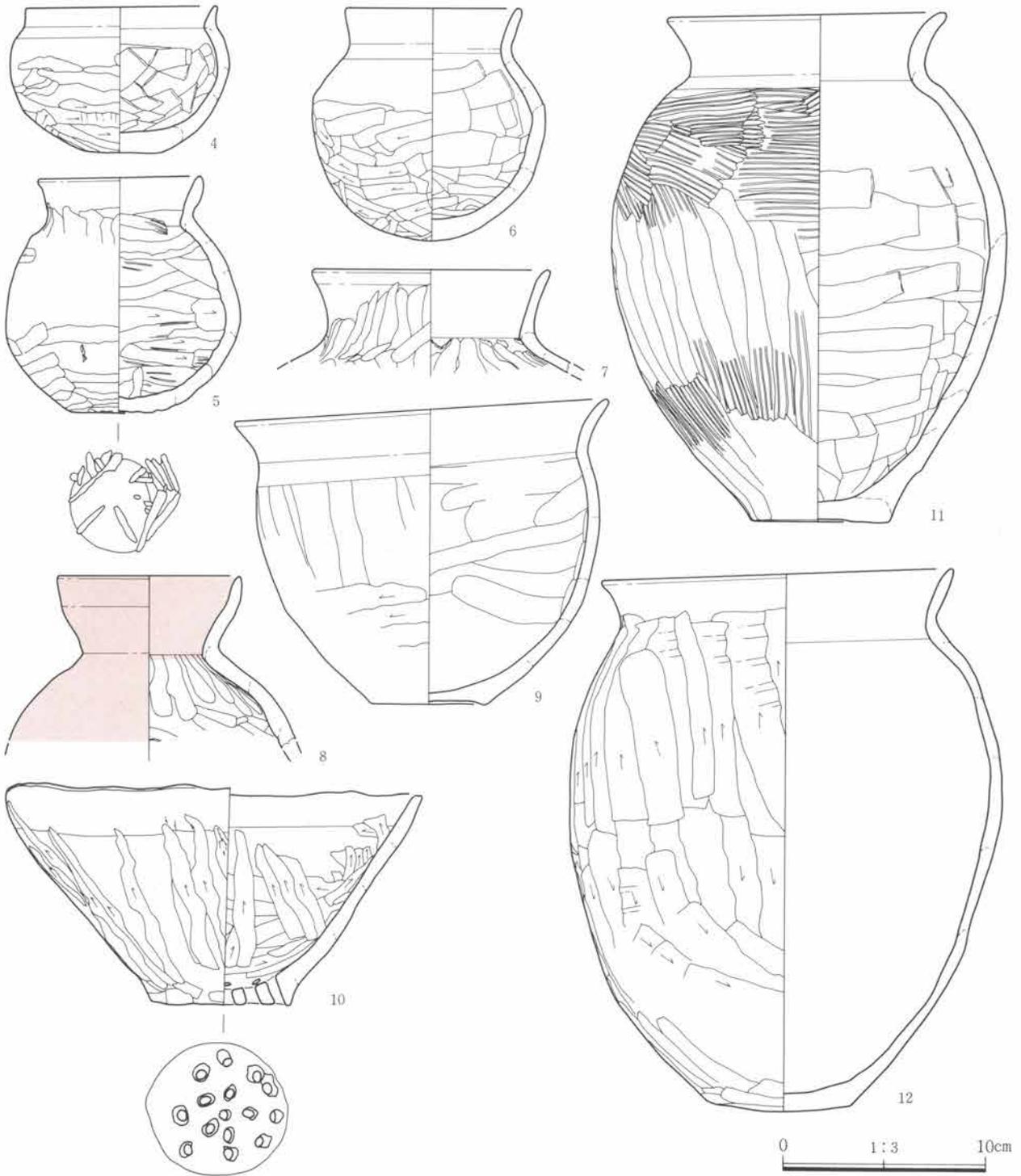
遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏4、鉢1、小型甕2、甕3、甑1、壺1の合計12点が出土した。土器の出土は、竈や貯蔵穴の周辺に集中している。No.1・3・10・12は床面に密着して、他は床面から6cm以上浮いて出土した。

(遺物観察表:72・73頁)

II 調査の内容



第168図 2区38号住居と出土遺物



第169図 2区38号住居出土遺物

2区39号住居

位置 R-7グリッド 写真 PL-69・73

重複 35号住居に後出する。

形状 一辺が5.3~5.5mの正方形を基調としているが、竈の付設される東壁は張出状となり、変則的な形

状となっている。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれるものと思われる。

面積 34.75m² 方位 N-61°-E

床面 ローム土を42~50cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面

II 調査の内容

である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部の一部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられている。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長径70×短径65cmの不整円形を呈し、深さ61cmである。

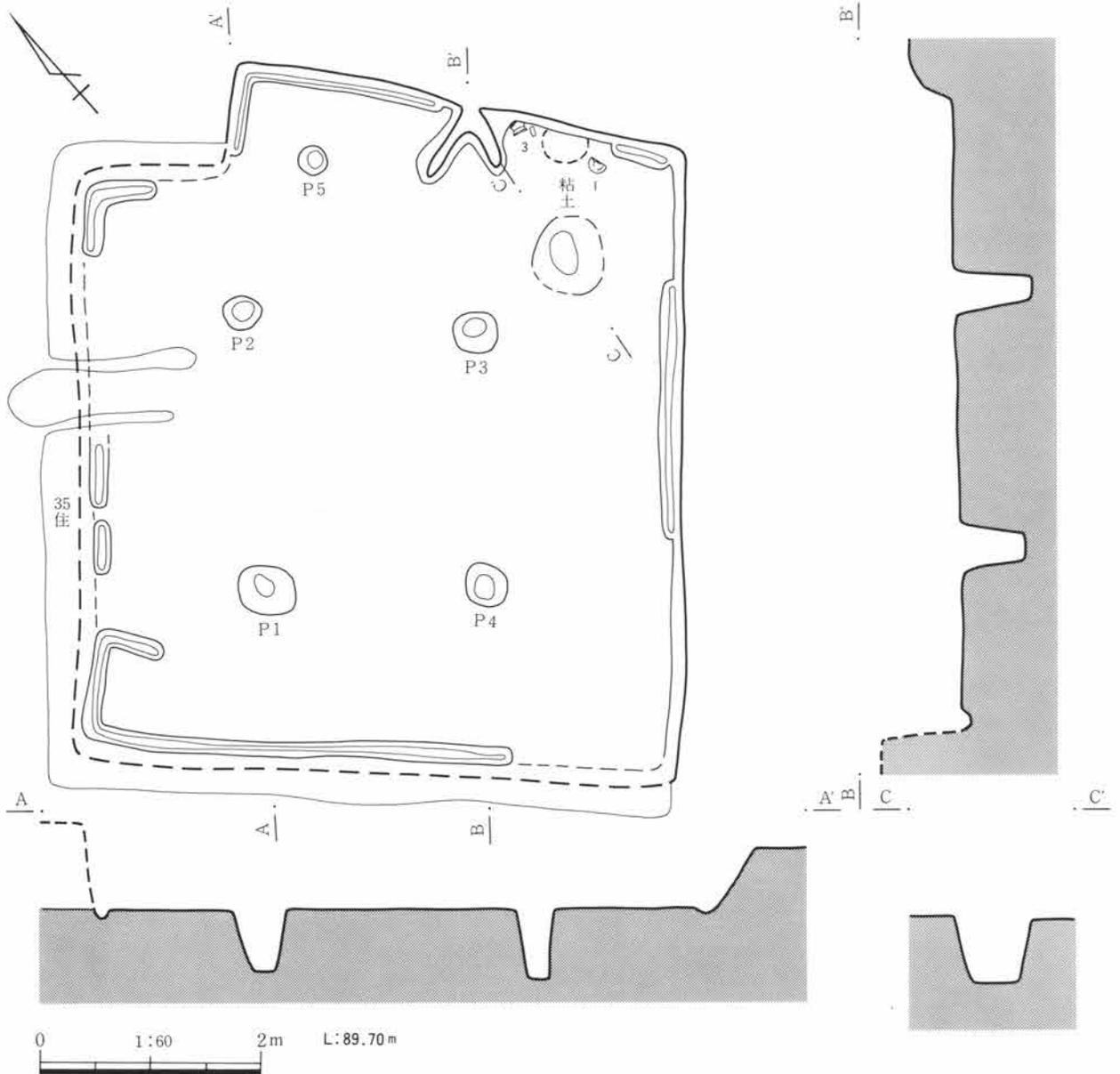
柱 穴 住居の対角線上に4本と張出部に1本の合計5本が検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その距離は $P_1 \sim P_2 : 2.45$

m、 $P_2 \sim P_3 : 2.10$ m、 $P_3 \sim P_4 : 2.30$ m、 $P_4 \sim P_1 : 2.00$ mである。各柱穴の規模(径×深さ)は、 $P_1 : 44 \times 55$ cm、 $P_2 : 30 \times 50$ cm、 $P_3 : 38 \times 59$ cm、 $P_4 : 40 \times 67$ cm、 $P_5 : 27 \times 25$ cmである。

周 溝 35号住居との重複もあり、部分的に検出されたのみである。規模は幅10~20cm、深さ3~11cmである。

遺 物 僅かに3点の土器が出土したのみである。いずれの土器も床面から3cm以上浮いて出土した。竈の右側より粘土塊が出土している。

(遺物観察表：73頁)



第170図 2区39号住居



第171図 2区39号住居出土遺物

2区40号住居

位置 M-10グリッド 写真 PL-76

重複 24号住居に後出する。

形状 一辺が3.10mの正方形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。

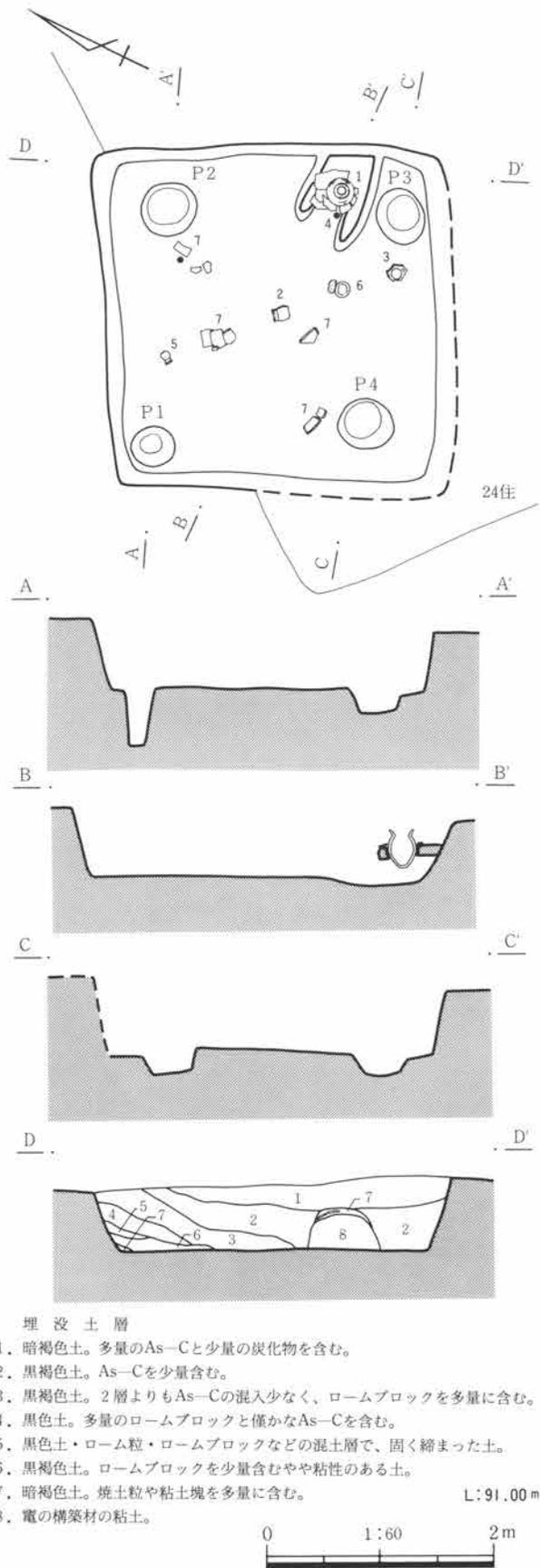
面積 (8.72m²) 方位 N-63°-E

床面 ローム土を約69cm掘り込んで床面としている。凹凸面および傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが強く踏み固められている。

埋没土 各層ともレンズ状に堆積し、斜面上方の北側から自然埋没している。

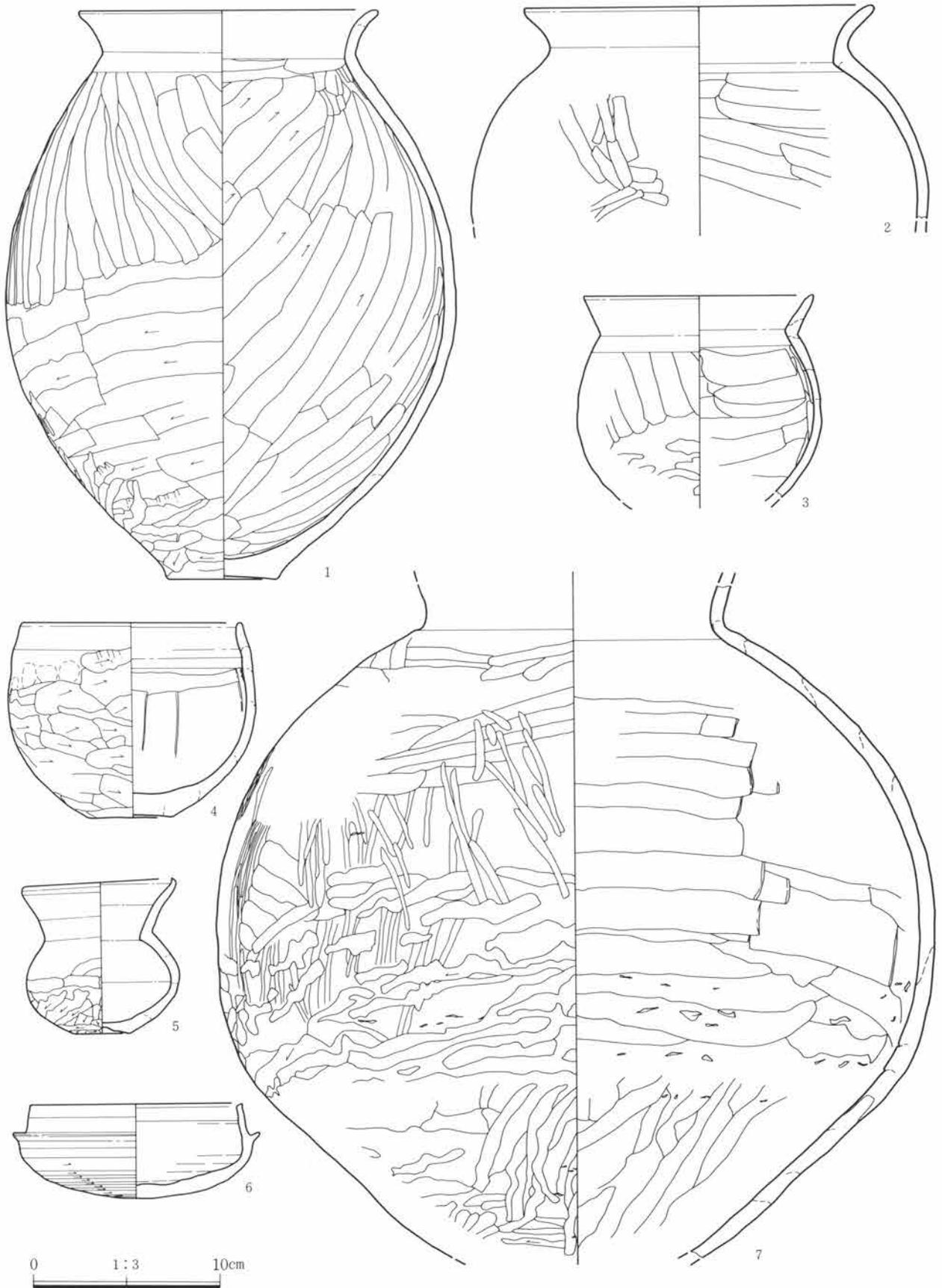
竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ75cm、幅30cmである。煙道部は24号住居との重複により不明。竈は東壁面に対して直角に付設されずに、約65°の傾きをもつ。燃焼部内よりNo.1の甕が掛け口に据えられた状態で出土しているが、No.4の鉢の破片を利用して固定されていた。

柱穴 住居の対角線上に4本検出された。各柱穴の



第172図 2区40号住居

II 調査の内容



第173図 2区40号住居出土遺物

心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形にならずに台形状を呈する。各柱穴の心々間の距離は、 $P_1 \sim P_2 : 2.05\text{m}$ 、 $P_2 \sim P_3 : 2.05\text{m}$ 、 $P_3 \sim P_4 : 1.85\text{m}$ 、 $P_4 \sim P_1 : 1.90\text{m}$ である。各柱穴の規模（径×深さ）は、 $P_1 : 35 \times 51\text{cm}$ 、 $P_2 : 45 \times 20\text{cm}$ 、 $P_3 : 45 \times 18\text{cm}$ 、 $P_4 : 45 \times 20\text{cm}$ である。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、鉢1、壺1、甕3、埴1、須恵器の坏1の合計7点が出土した。Na 3は床面に密着して、他は床面から5cm以上浮いて出土した。（遺物観察表：74頁）

2区41号住居

位置 E-14グリッド **写真** PL-77

形状 長軸を東西にもつ長方形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は

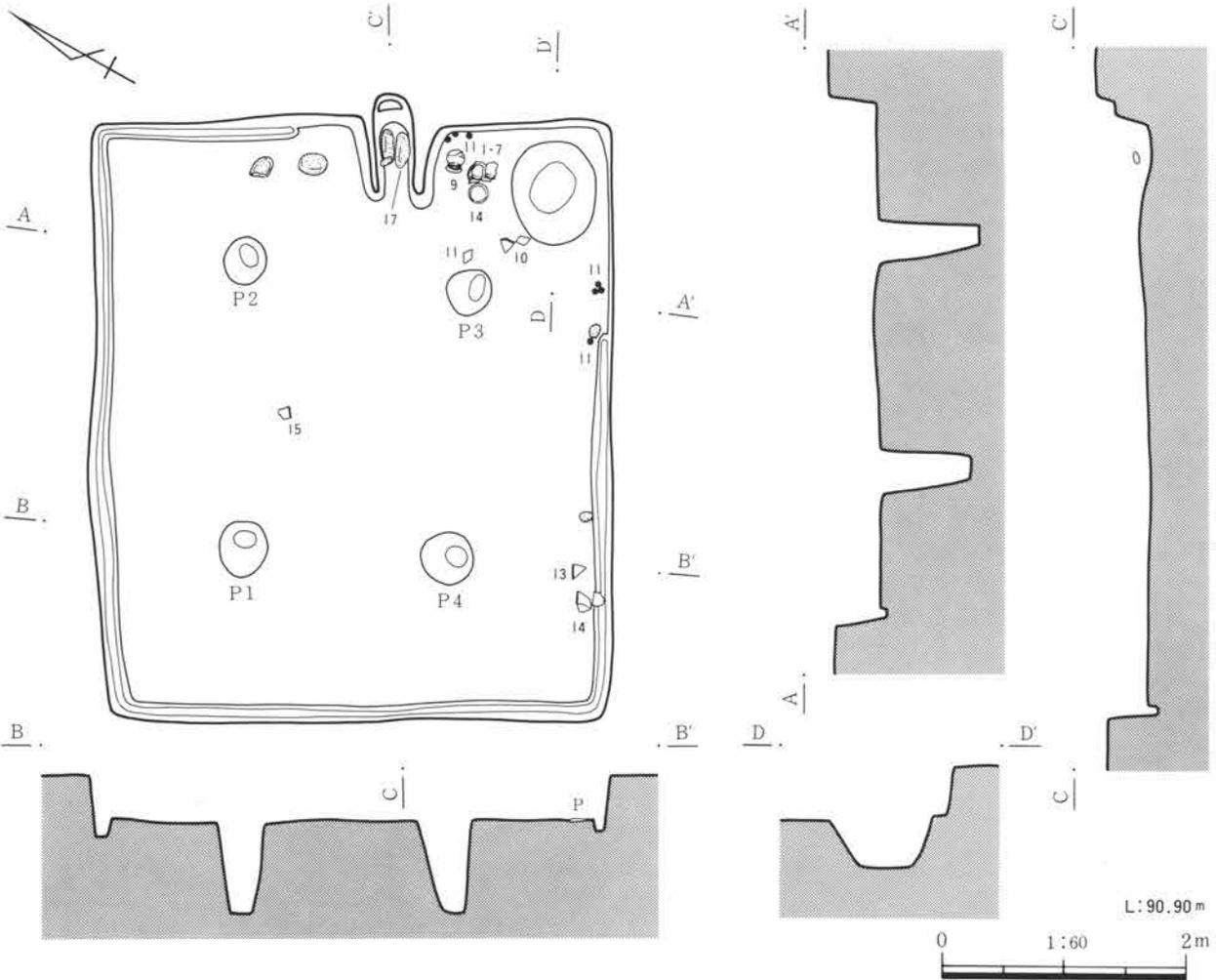
長辺4.90×短辺4.25mである。

面積 20.26㎡ **方位** N-60°-E

床面 ローム土を31~40cm掘り込んで床面としている。凹凸面および傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ70cm、幅32cmである。煙道部は燃烧部の底面から約30cm上位の壁面中途を水平に掘り抜き、その後垂直に近い角度で立ち上がる。燃烧部内より天井部の補強材として用いられていたと思われる河床礫2点が出土した。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長径85×短径70cmの楕円形を呈し、深さ41cmである。



第174図 2区41号住居

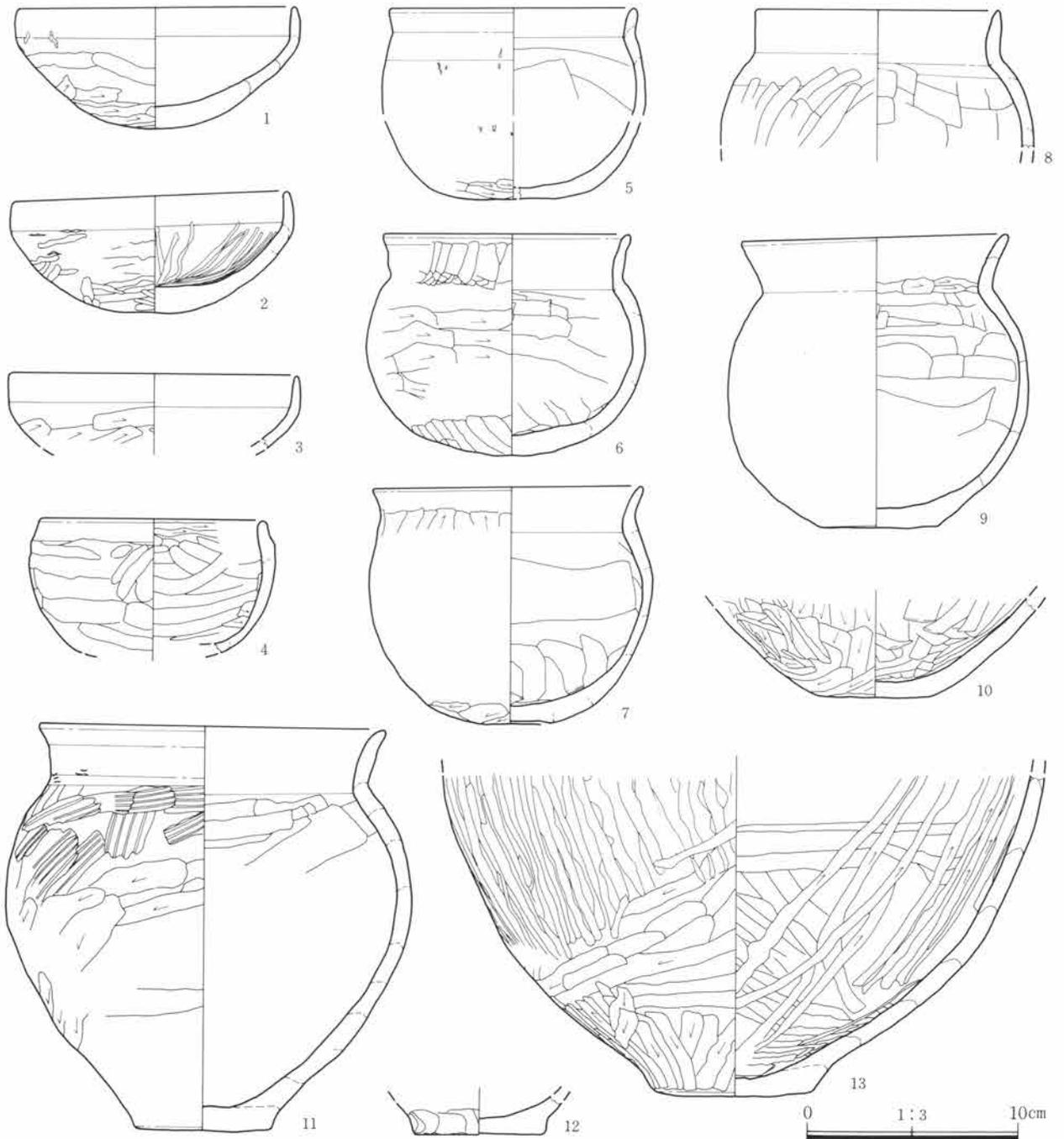
II 調査の内容

柱 穴 住居の対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その距離は $P_1 \sim P_2$: 2.30m、 $P_2 \sim P_3$: 1.90m、 $P_3 \sim P_4$: 2.20m、 $P_4 \sim P_1$: 1.75mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、 P_1 : 40×75cm、 P_2 : 35×73cm、 P_3 : 37×83cm、 P_4 : 43×75cmである。

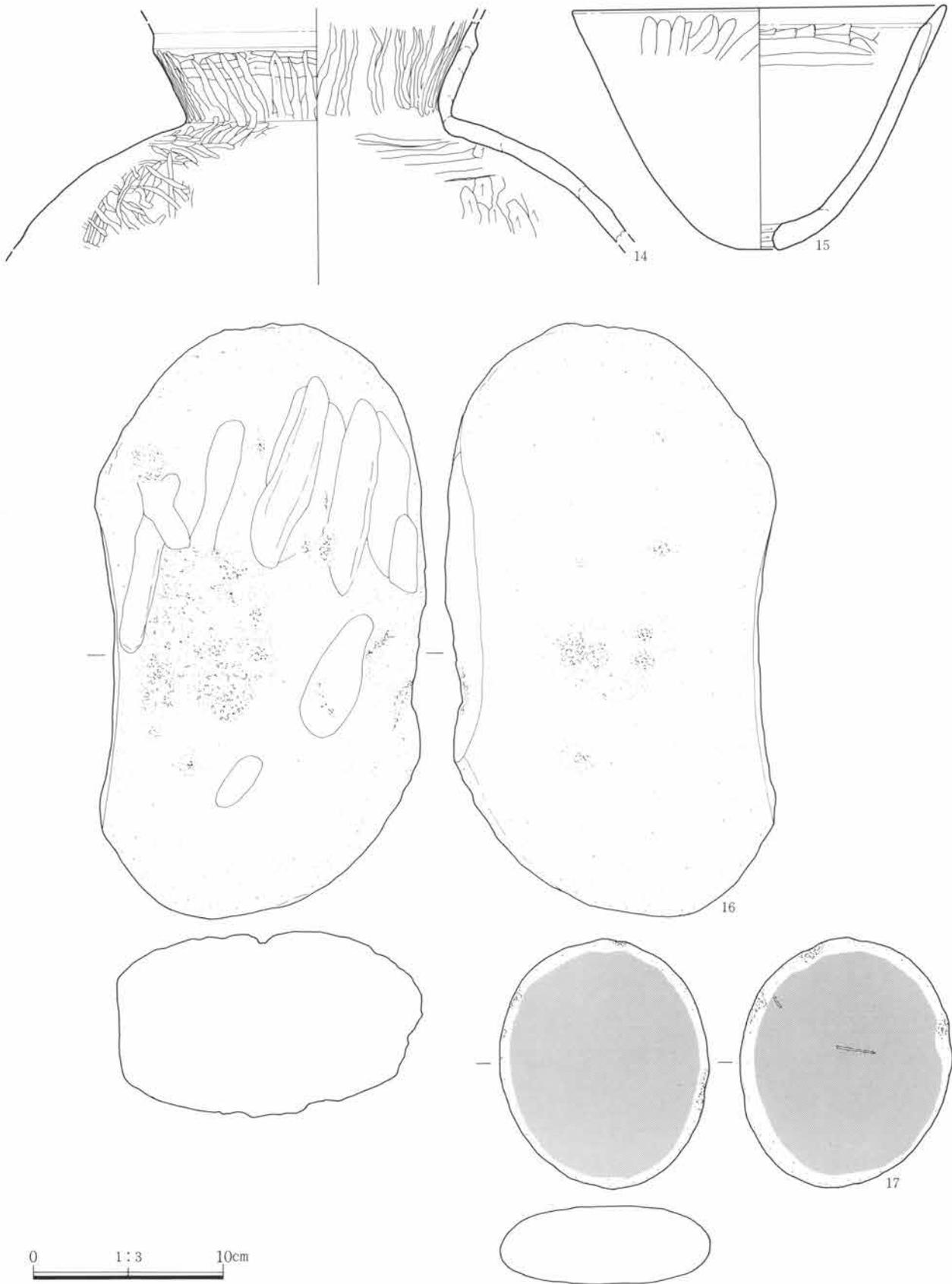
周 溝 貯蔵穴の周辺を除いて全周する。規模は幅

13~19cm、深さ7~16cmである。

遺 物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏4、壺2、小型甕2、甕6、甗1の合計15点が出土した。No.1・7・9~11・13~15は床面に密着して、他は床面から3cm以上浮いて出土した。No.13は2区51号住居、No.15は同38号住居の埋没土出土の破片とそれぞれ接合関係にある。(遺物観察表：74・75頁)

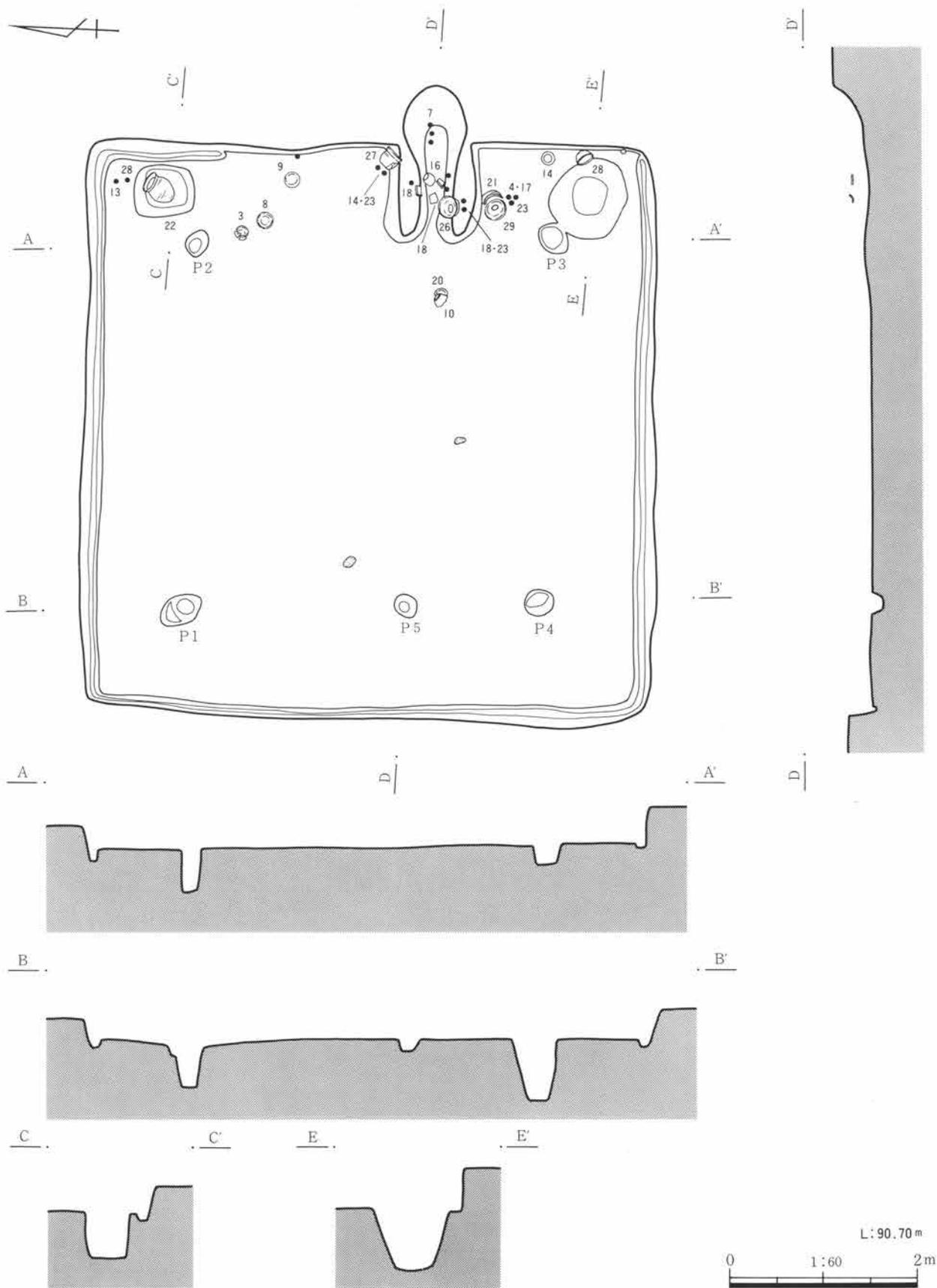


第175図 2区41号住居出土遺物(1)



第176図 2区41号住居出土遺物(2)

II 調査の内容



第177図 2区42号住居

2区42号住居

位置 F-18グリッド 写真 PL-78・79

形状 一辺が6.10mの正方形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。

面積 36.22㎡ 方位 N-87°-E

床面 ローム土を19~42cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもち、南東から北西側へと比高差約10cmの傾斜が認められる。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ65cm、幅20cmである。燃焼部内よりNo.7・16・18・23・26の土器が出土した。

貯蔵穴 竈の左右両側の南東隅と北東隅に2基存在する。各貯蔵穴の規模は、右側が長径85×短径75cmの不整円形で深さ67cm、左側が長軸65×短軸55cmの隅丸方

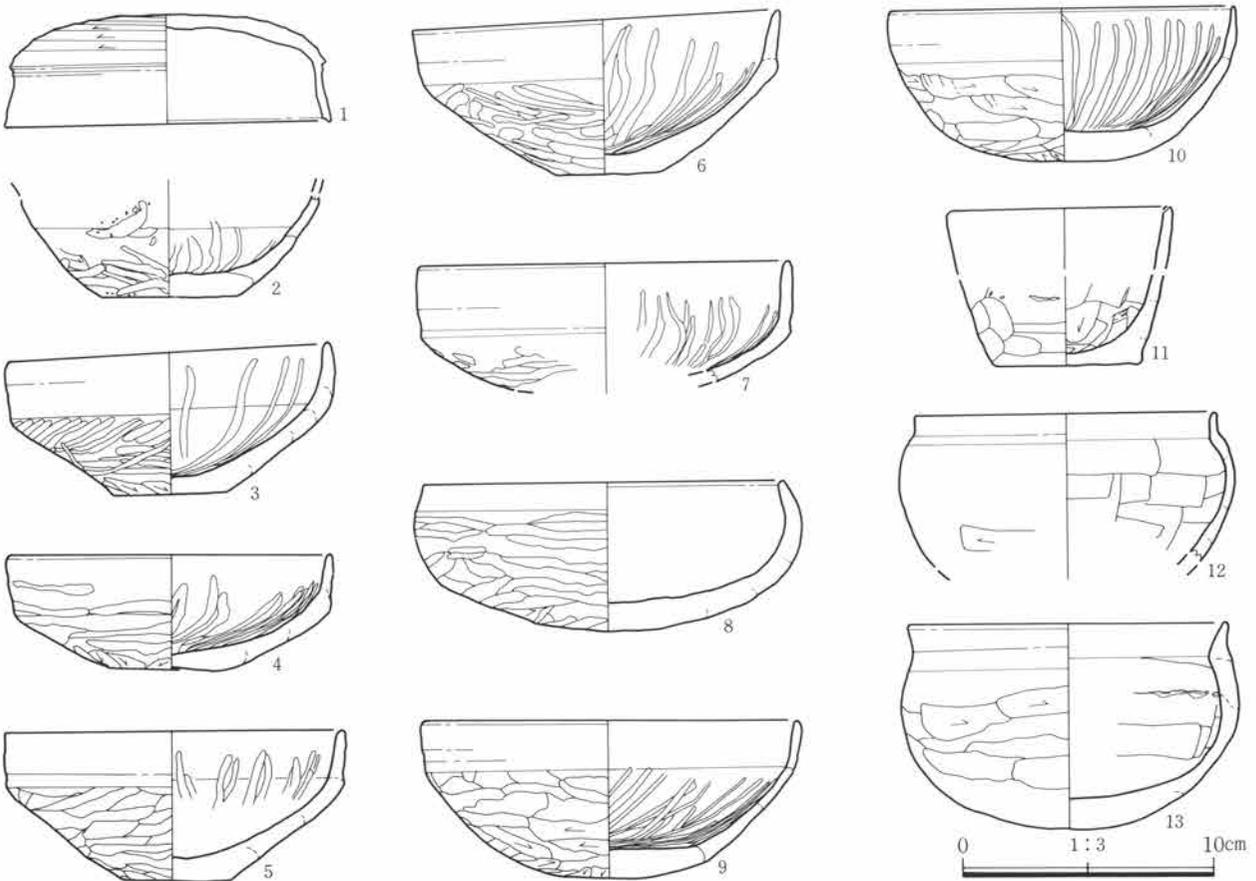
形で深さ50cmである。左側貯蔵穴の底面に密着してNo.22の甕が出土した。

柱穴 住居の対角線上に4本、P₁とP₄を結んだ線上に1本の合計5本が検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その距離はP₁~P₂:3.85m、P₂~P₃:3.80m、P₃~P₄:3.85m、P₄~P₁:3.80mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:30×47cm、P₂:25×45cm、P₃:30×21cm、P₄:30×68cm、P₅:25×11cmである。

周溝 東壁の一部を除いて全周する。規模は幅8~23cm、深さ3~12cmである。

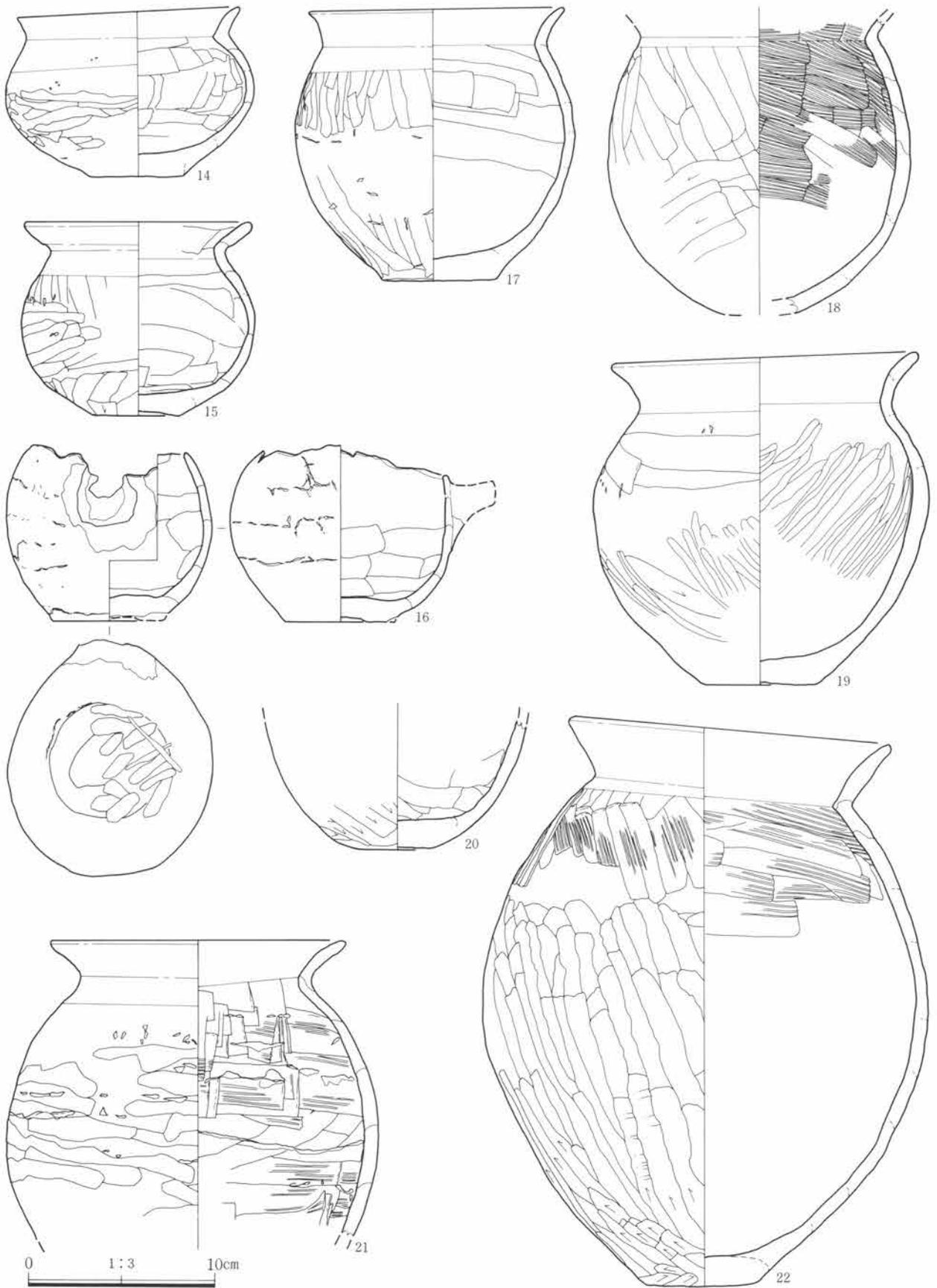
遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏11、鉢2、小型甕1、甕10、甗2、壺1、把手付小型甕1、須恵器の蓋1の合計29点が出土した。No.3・8・9・13・14・17・18・21・23・28・29は床面に密着して、他は床面から3cm以上浮いて出土した。

(遺物観察表:75~77頁)

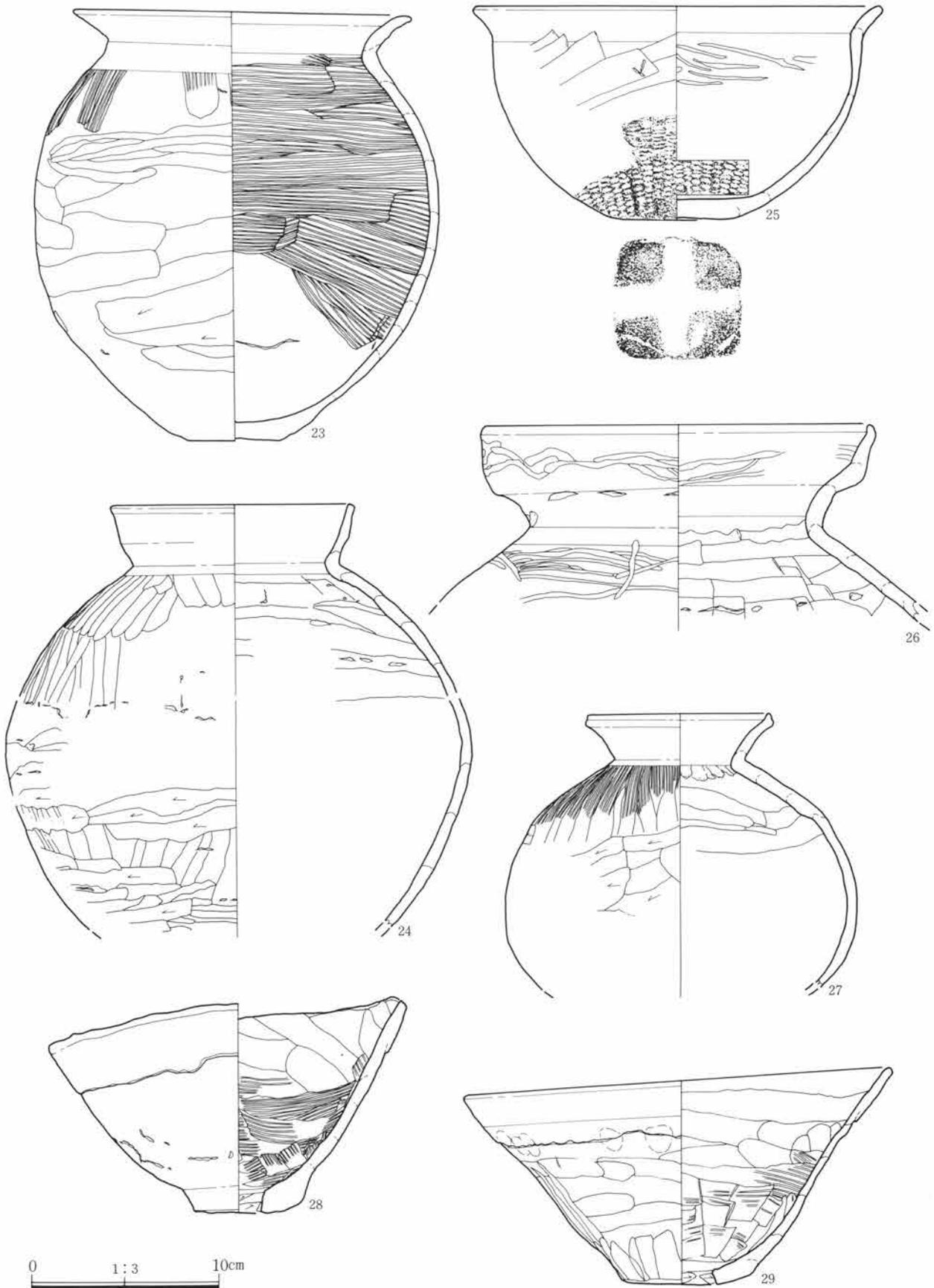


第178図 2区42号住居出土遺物(1)

II 調査の内容



第179図 2区42号住居出土遺物(2)



第180図 2区42号住居出土遺物(3)

II 調査の内容

2区43号住居

位置 M-17グリッド 写真 PL-80・81

形状 長軸を南北にもつ不整形を呈する。四隅は丸く、周壁はわずかに外側へ弧状に膨らむ。規模は長辺6.0・6.4×短辺3.5・4.0mである。

面積 24.16㎡ 方位 N-45°-E

床面 ローム土を5~20cm掘り込んで床面としている。凹凸面および傾斜の少ない平坦な床面である。支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

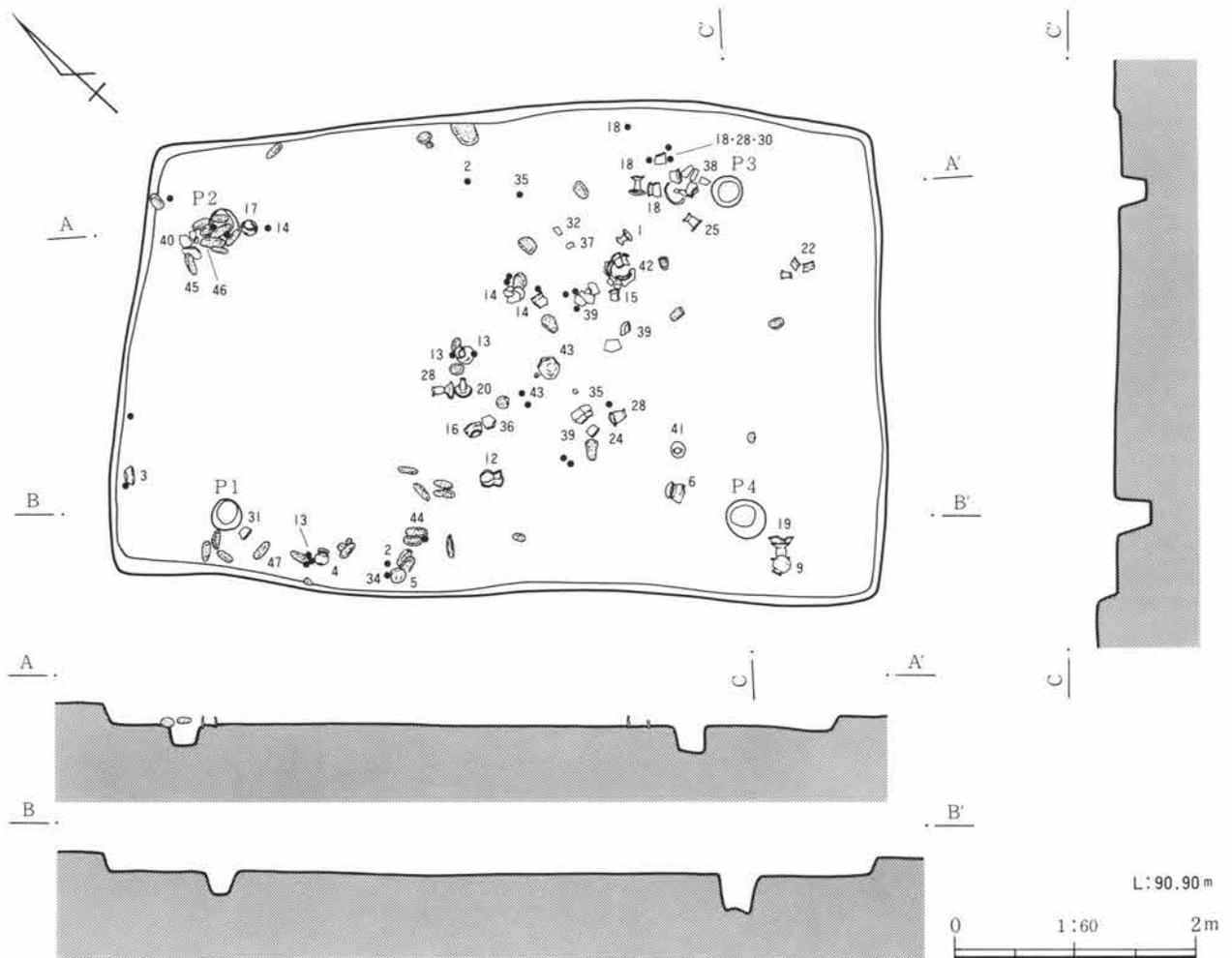
炉 炉付き住居と考えられるが、床面上には火熱を受けた痕跡は見当たらず、その位置を特定することはできなかった。

柱穴 住居の対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、

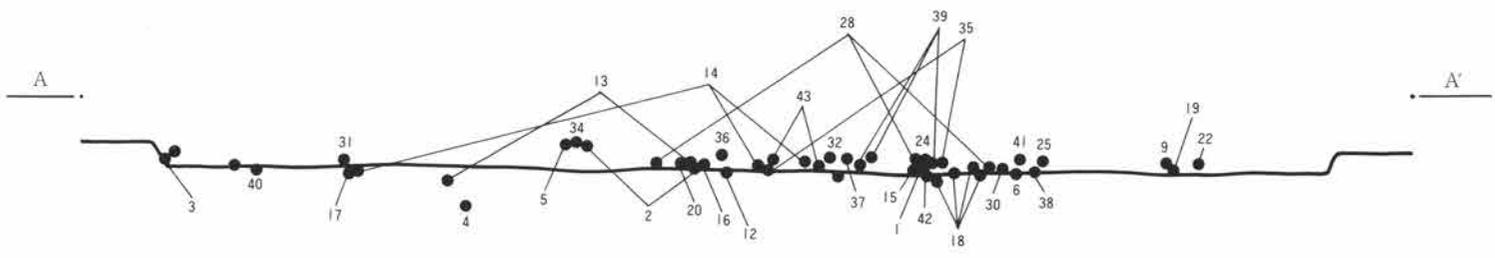
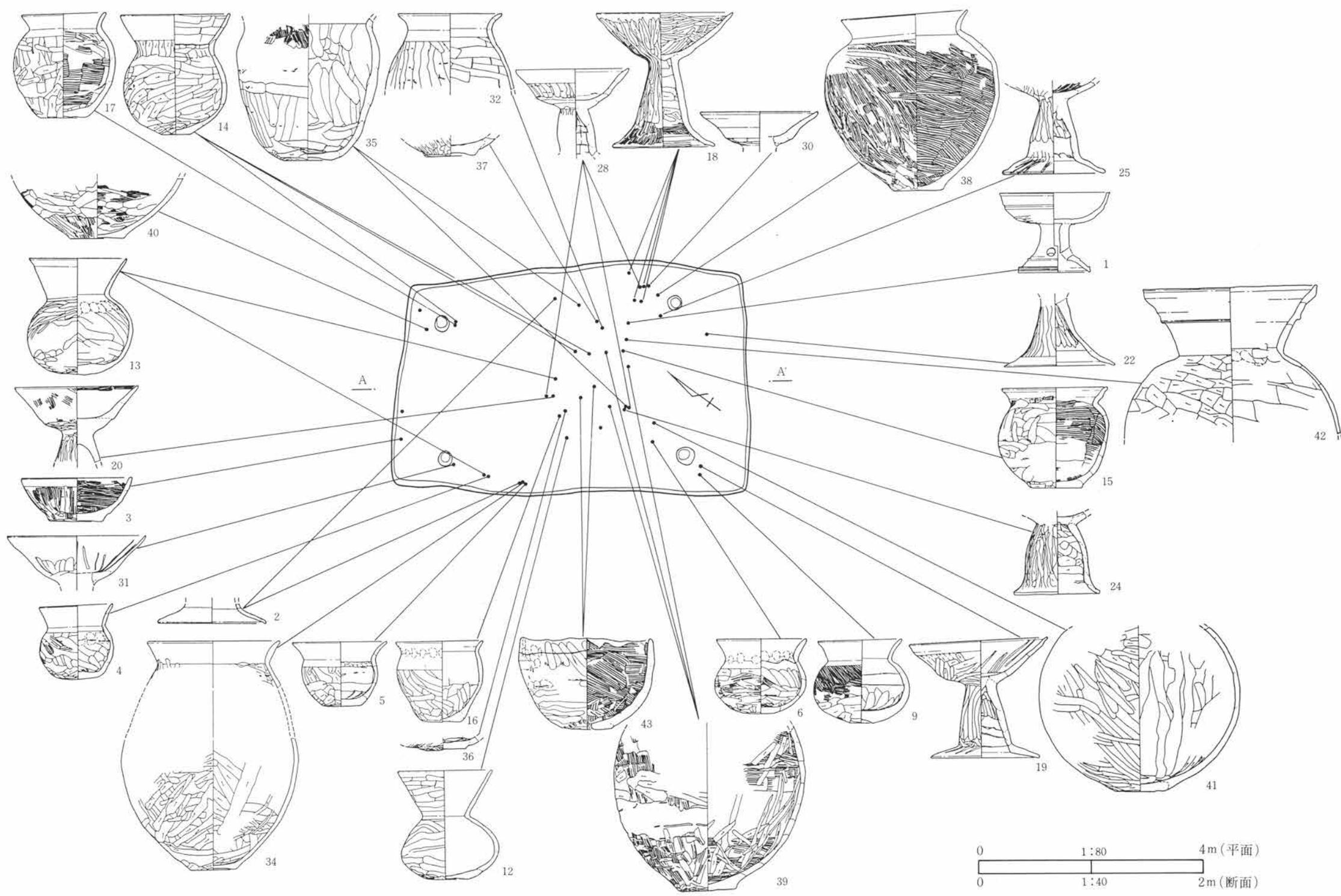
その距離はP₁~P₂:2.35m、P₂~P₃:4.20m、P₃~P₄:2.65m、P₄~P₁:4.30mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:25×17cm、P₂:30×18cm、P₃:25×20cm、P₄:30×29cmである。

遺物 床面の中央部を中心として、密集した出土が認められる。埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、高坏15、鉢1、小型甕5、甕13、甕1、壺6、甕1、須恵器の高坏1の合計43点が出土した。No.2~4・6・9・12・14・15・17~20・28・35・38~42は床面に密着して、他の土器も床面から5cm前後浮いていたのみで、床面密着に近い状態で出土した。No.1の須恵器は1区1号住居埋没土から出土した脚部の破片と接合している。他に長径15×短径5cmの薦編み石状の河床礫45点が出土している。(遺物観察表:77~80頁)

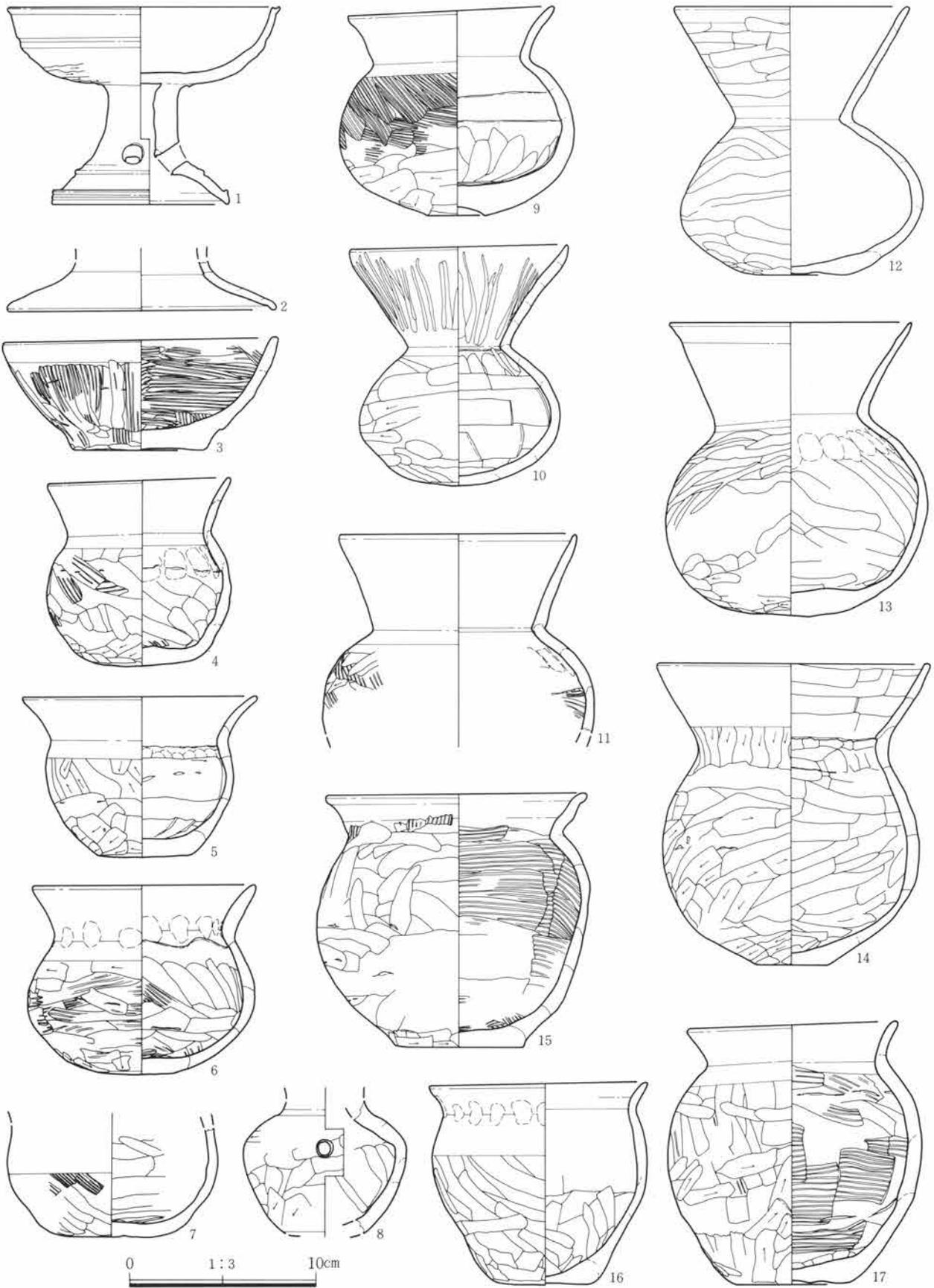
備考 貯蔵穴および周溝は検出されなかった。



第181図 2区43号住居

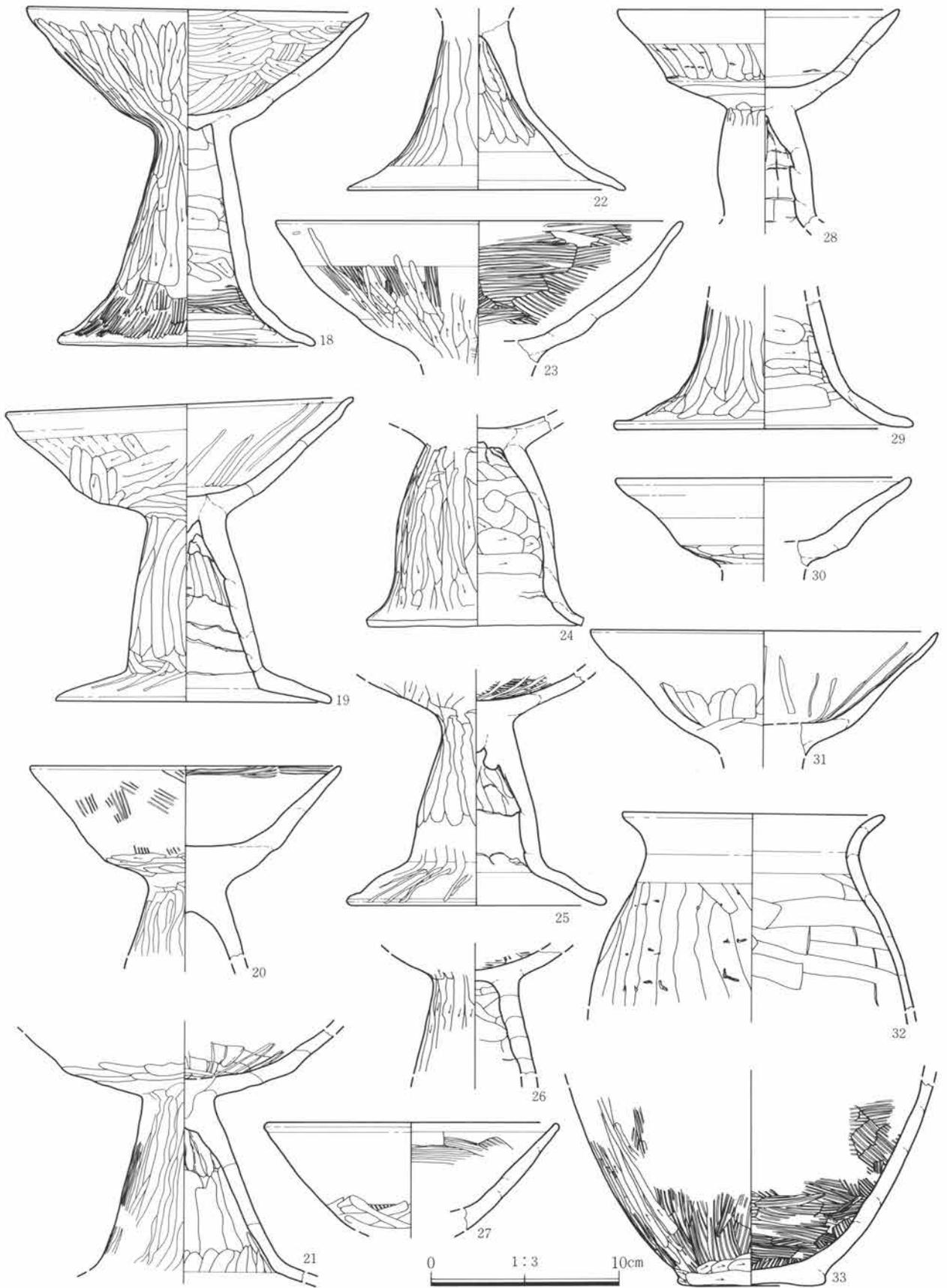


第182図 2区43号住居の遺物出土状況

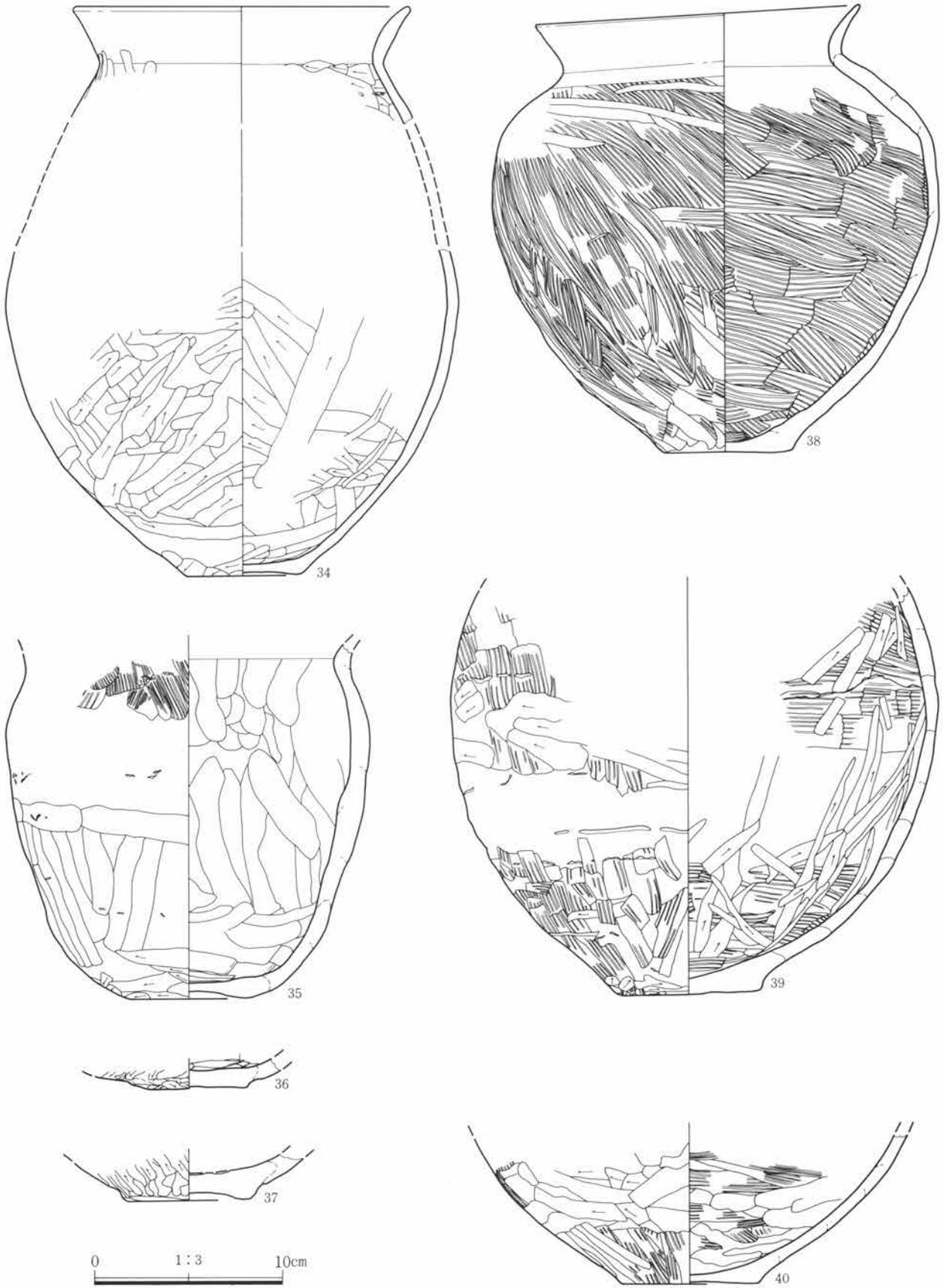


第183図 2区43号住居出土遺物(1)

II 調査の内容

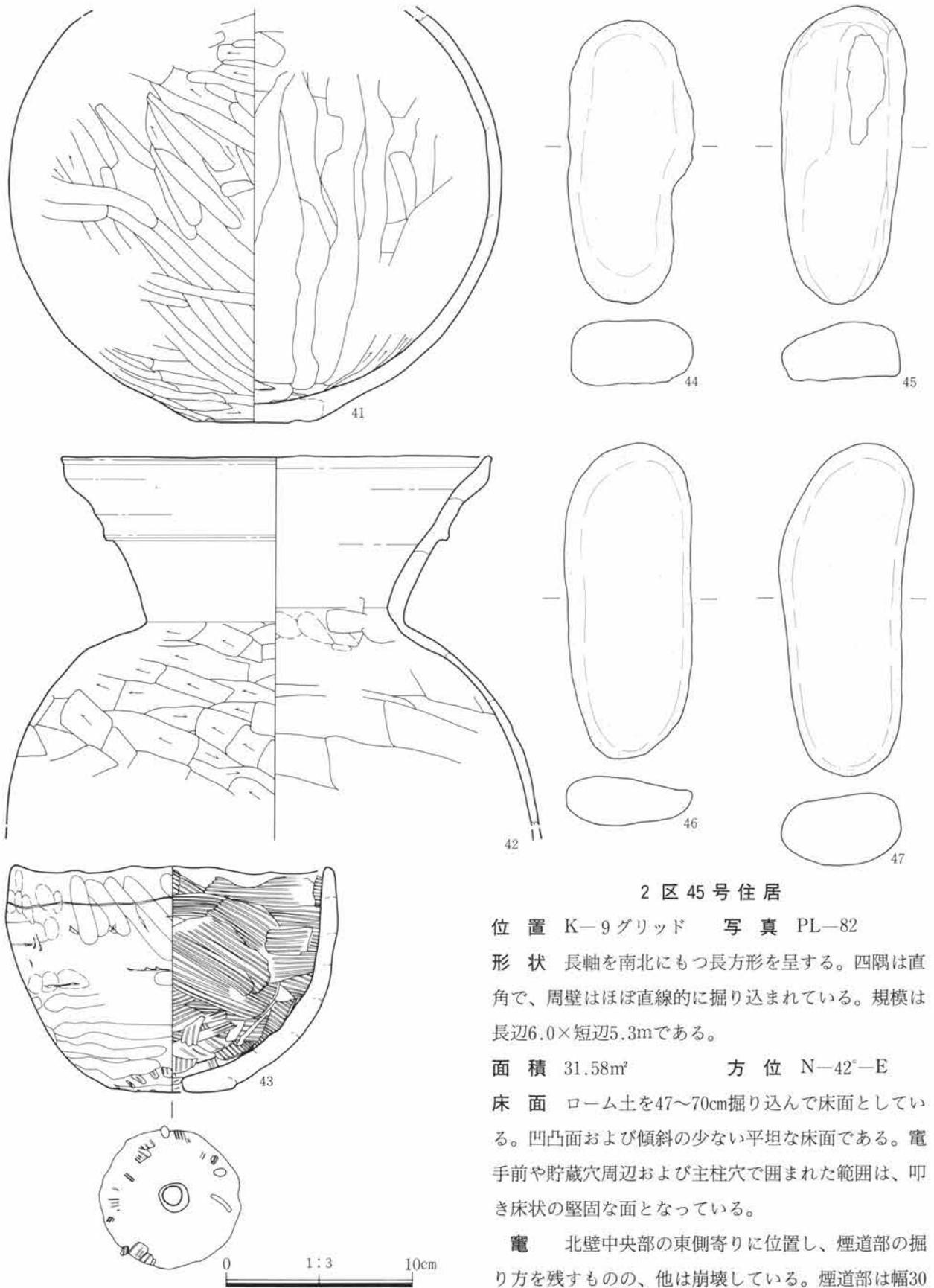


第184図 2区43号住居出土遺物(2)



第185図 2区43号住居出土遺物(3)

II 調査の内容



2区45号住居

位置 K-9グリッド 写真 PL-82

形状 長軸を南北にもつ長方形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺6.0×短辺5.3mである。

面積 31.58㎡ 方位 N-42°-E

床面 ローム土を47~70cm掘り込んで床面としている。凹凸面および傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

竈 北壁中央部の東側寄りに位置し、煙道部の掘り方を残すものの、他は崩壊している。煙道部は幅30

第186図 2区43号住居出土遺物(4)

cm、長さ30cmで、燃焼部より約70°の角度で立ち上がる。

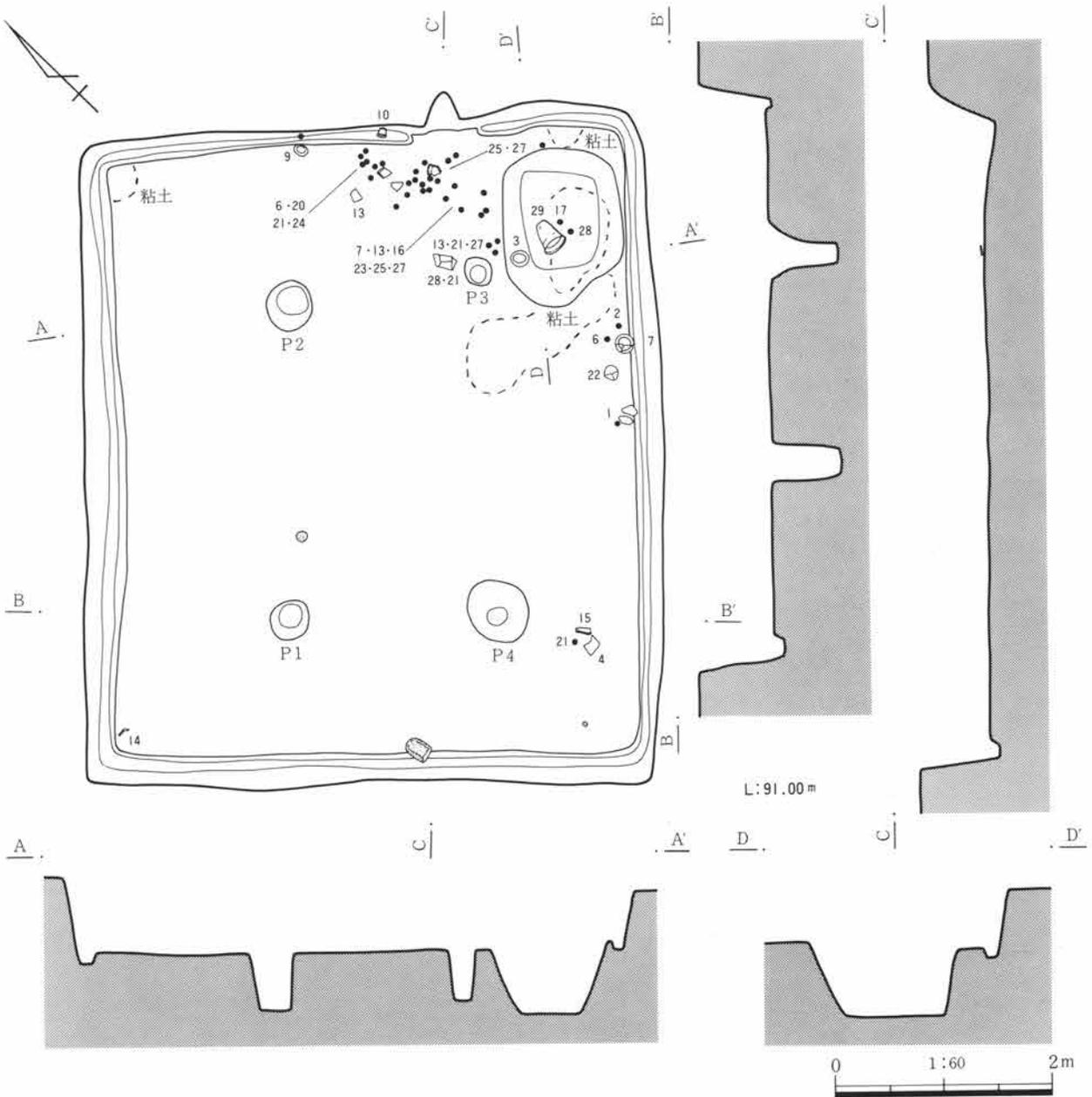
貯蔵穴 竈右側の北東隅に位置する。長軸165×短軸110cmの隅丸方形を呈し、深さ65cmである。開口部付近よりNo.3の坏が、また底面に密着してNo.29の甗が出土した。開口部下20cmに10cm厚の粘土蒐が出土。

柱 穴 住居の対角線上に2本と若干ずれた位置に2本の合計4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形にならずに台形状を呈し、その距離はP₁~P₂:2.85m、P₂~P₃:1.74m、P₃~P₄:3.12m、P₄~P₁:1.88mである。また各柱穴の規

模(径×深さ)は、P₁:31×62cm、P₂:40×52cm、P₃:25×47cm、P₄:50×59cmである。

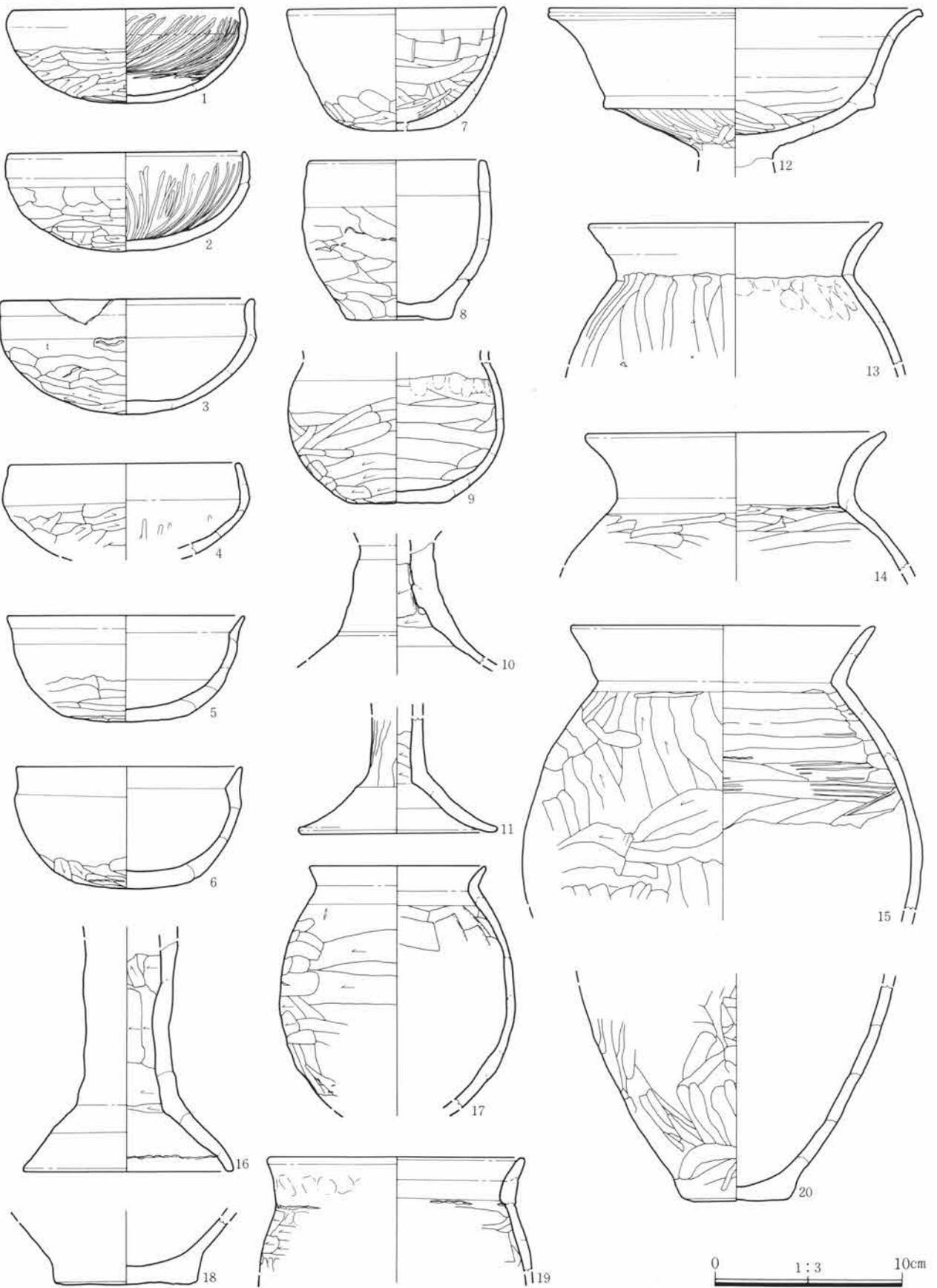
周 溝 幅13~40cm、深さ3~10cmの規模で壁面に沿ってほぼ全周する。

遺 物 竈および貯蔵穴の周辺に集中した出土がみられる。埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏7、鉢1、甗15、甗1、小型甗1、高坏3の合計29点が出土した。No.2・6・9・13・21・28は床面に密着して、他は床面から3cm以上浮いて出土した。貯蔵穴を中心に粘土蒐の出土がみられた。(遺物観察表:80~82頁)

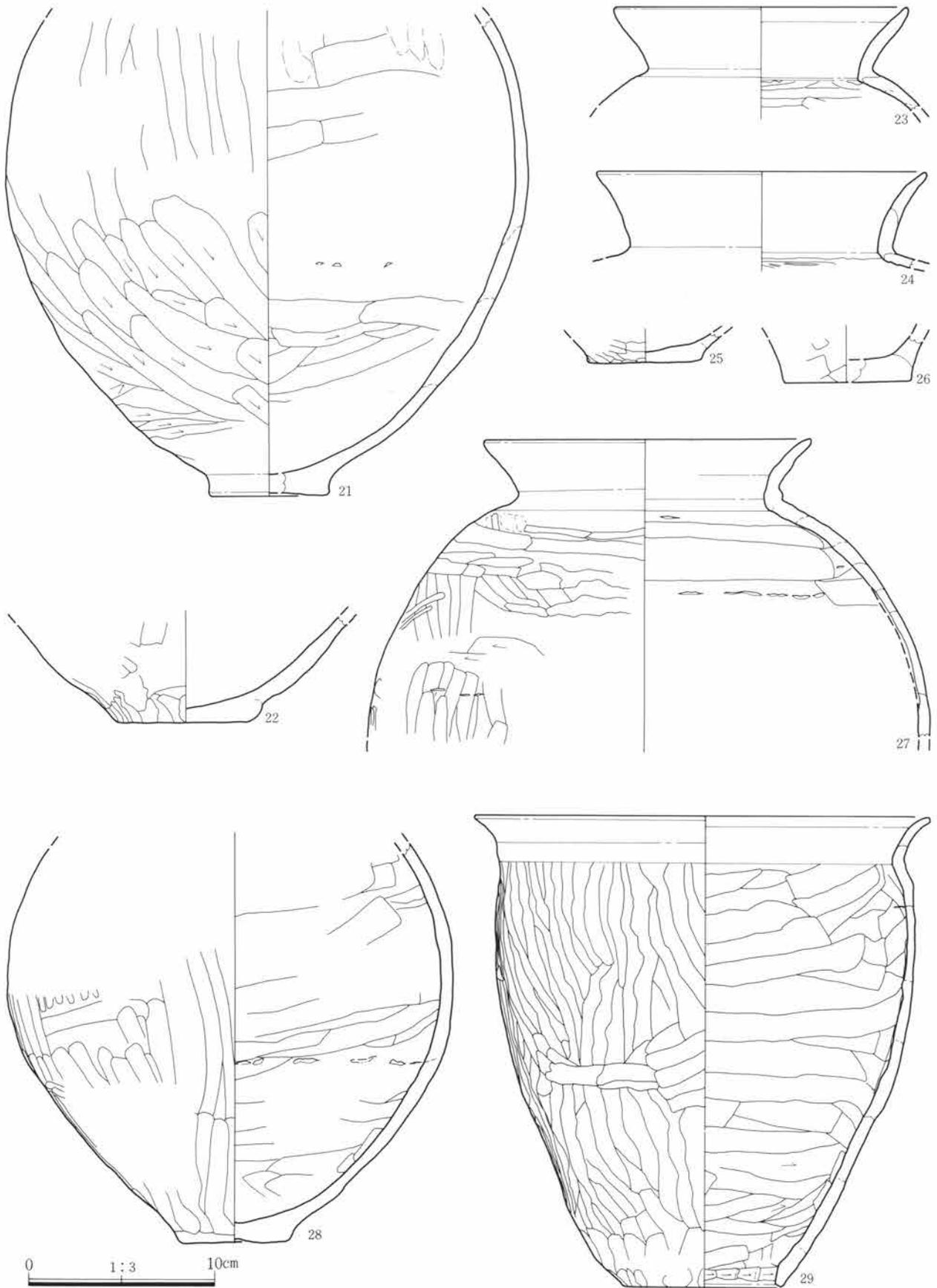


第187図 2区45号住居

II 調査の内容



第188図 2区45号住居出土遺物(1)



第189図 2区45号住居出土遺物(2)

II 調査の内容

2区46号住居

位置 S-5グリッド 写真 PL-83・84・90・125

重複 47・55号住居および1号溝と重複する。55号住居に後出するが、47号住居と1号溝との関係は不明。

形状 長軸を東西にもつ台形状を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺4.80・4.50×短辺4.05mである。

面積 18.22㎡ 方位 N-52°-E

床面 ローム土を36~68cm掘り込んで床面としている。凹凸面および傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられ、そ

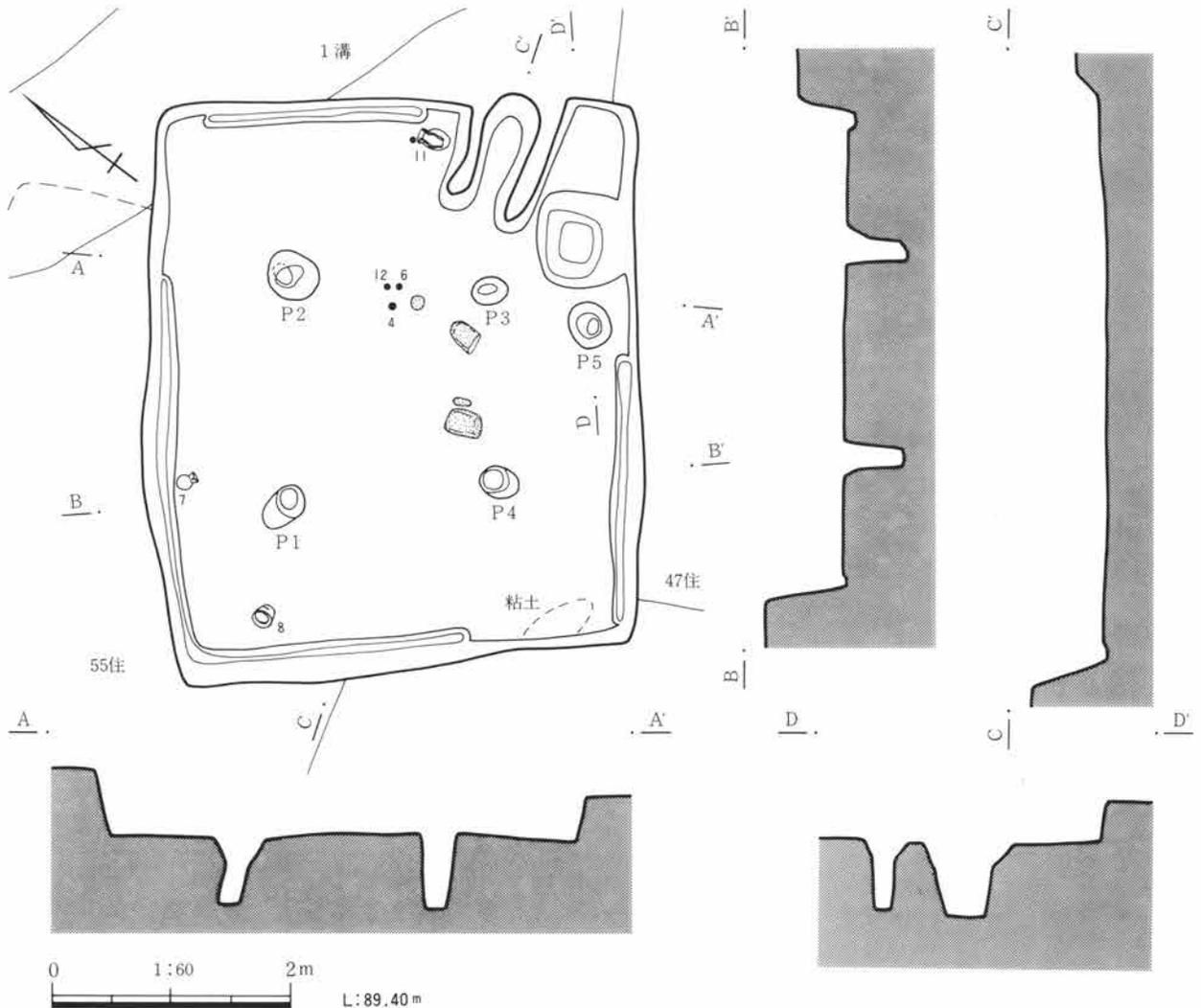
の規模は長さ90cm、幅45cmである。竈は周壁に対して、南方向へ約25°傾いて設置されている。

貯蔵穴 南東隅から約70cm西側の周壁際に位置する。長軸80×短軸70cmの隅丸方形を呈し、深さ62cmである。

柱穴 住居の対角線上に4本、貯蔵穴の西隣に1本の合計5本が検出された。各柱穴の心々間を結んだ距離は、P₁~P₂:1.85m、P₂~P₃:1.70m、P₃~P₄:1.60m、P₄~P₁:1.70mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:28×51cm、P₂:34×57cm、P₃:28×62cm、P₄:33×50cm、P₅:34×60cmである。

周溝 周壁に沿って断続的に巡っている。規模は幅17~35cm、深さ3~8cmである。

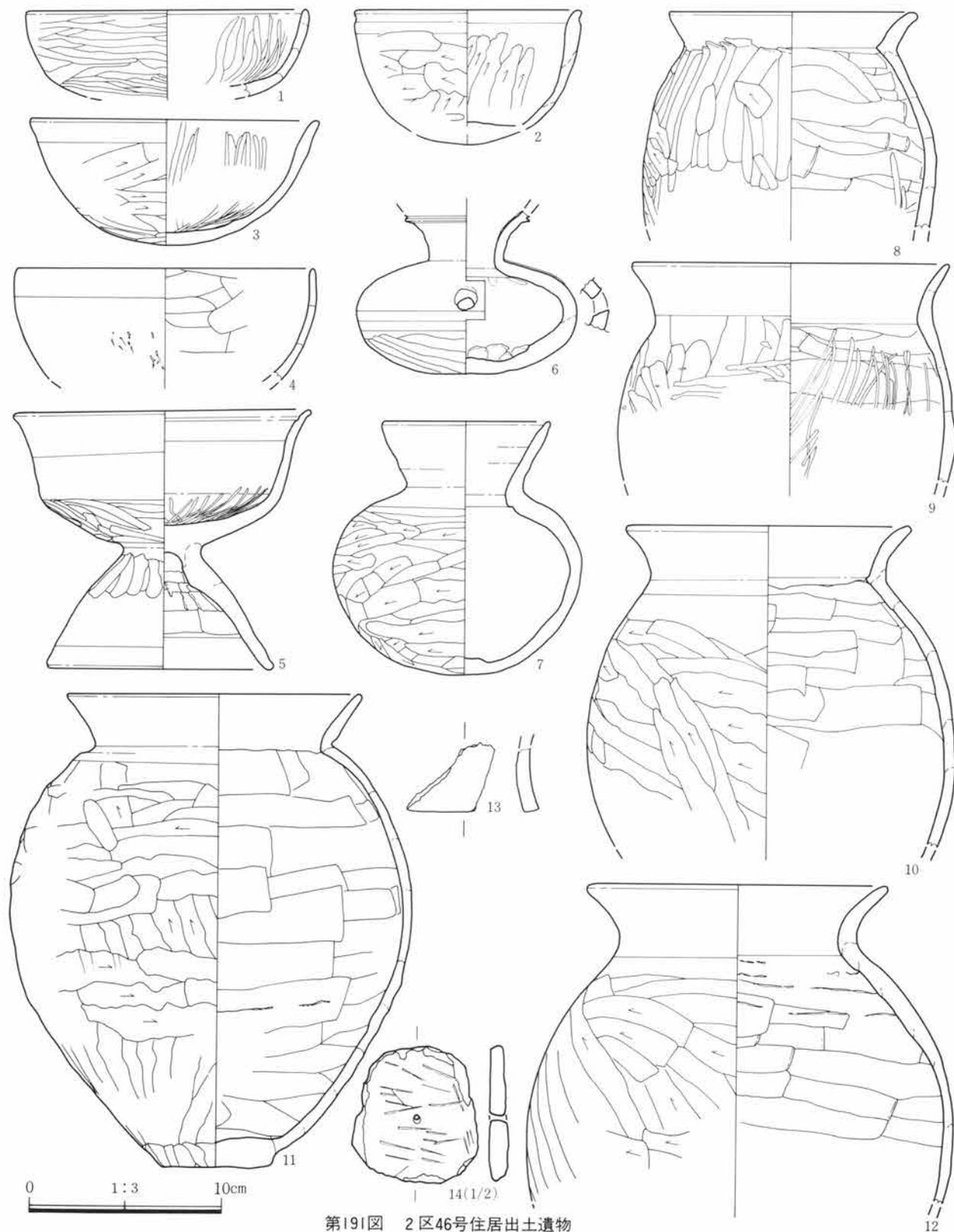
遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏4、高坏1、甕5、壺1、須恵器の甗1、断面



第190図 2区46号住居

に磨耗痕をもつ坏の破片1の合計13点が出土した。
No.4・6・8・12は床面に密着して、他は床面から7
cm以上浮いて出土した。No.1・3・9・11は2区47号
住居、No.10は同42号住居、No.6は同1号溝埋没土出土

の破片とそれぞれ接合関係にある。床面中央部より、
直径25~30cmの河床礫2点と、南西隅付近の壁際より、
粘土塊1点が出土した。また埋没土中より、滑石製模
造品1点が出土。(遺物観察表:82・83頁)



第191図 2区46号住居出土遺物

II 調査の内容

2区47号住居

位置 S-5グリッド 写真 PL-83・84

重複 46号住居と重複するが、新旧関係は不明。

形状 南半部が未調査区域にかかっているため、全体の規模や形状は不明である。検出し得た東西軸長は、6.3mである。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれていると思われる。

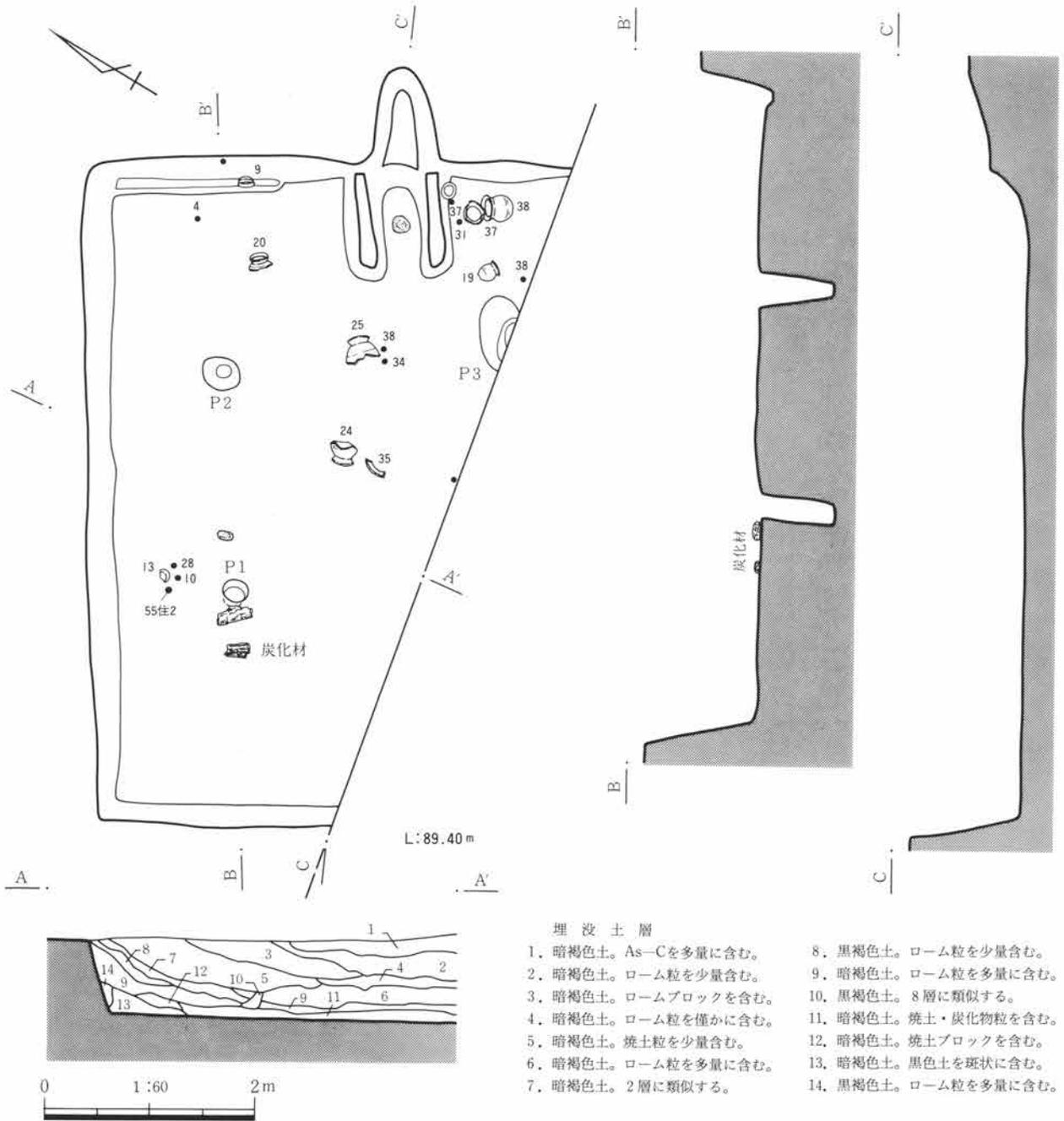
面積 不明

方位 N-58°-E

床面 ローム土を54~104cm掘り込んで床面としている。凹凸面および傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および主柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

埋没土 各層ともレンズ状の堆積をなし、自然埋没の状態を示す。床面近くには、炭化物や焼土粒を含んだ褐色土が堆積している。

竈 東壁に位置し、両袖部が残存する。燃焼部は



第192図 2区47号住居

周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ90cm、幅52cmである。煙道部は幅60cm、長さ90cmの掘り方のみ残存する。燃焼部に直径20cmの河床礫を据えて、支脚として利用している。

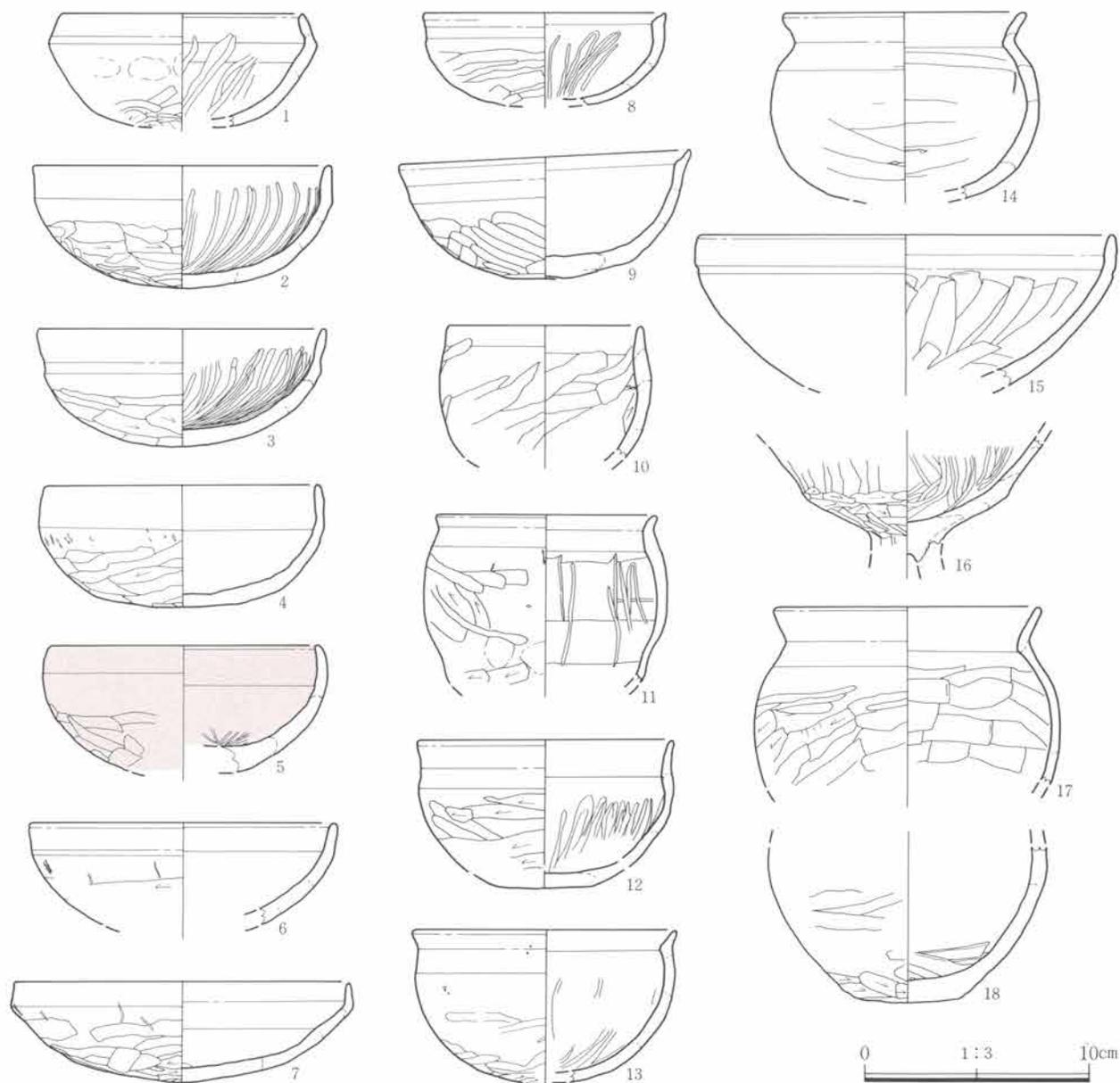
柱 穴 3本検出し得たのみであるが、4本柱で構成されるものと思われる。各柱穴の心々間の距離は、 $P_1 \sim P_2$: 2.10m、 $P_2 \sim P_3$: 2.70mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、 P_1 : 25×71cm、 P_2 : 30×71cm、 P_3 : ?×42cmである。

周 溝 東壁沿いの一部にのみ、検出された。規模は幅32~37cm、深さ6~11cmである。

遺 物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏14、小型甕3、甕16、甗4、高坏1の合計38点が出土した。No.4・10・13・19・20・24・28・37・38は床面に密着して、他は床面から4cm以上浮いて出土した。No.10・14は2区55号住居、No.23は同21号土壇の埋没土出土の破片と接合関係にある。 P_1 の近くより、炭化材2点が床面に密着して出土した。

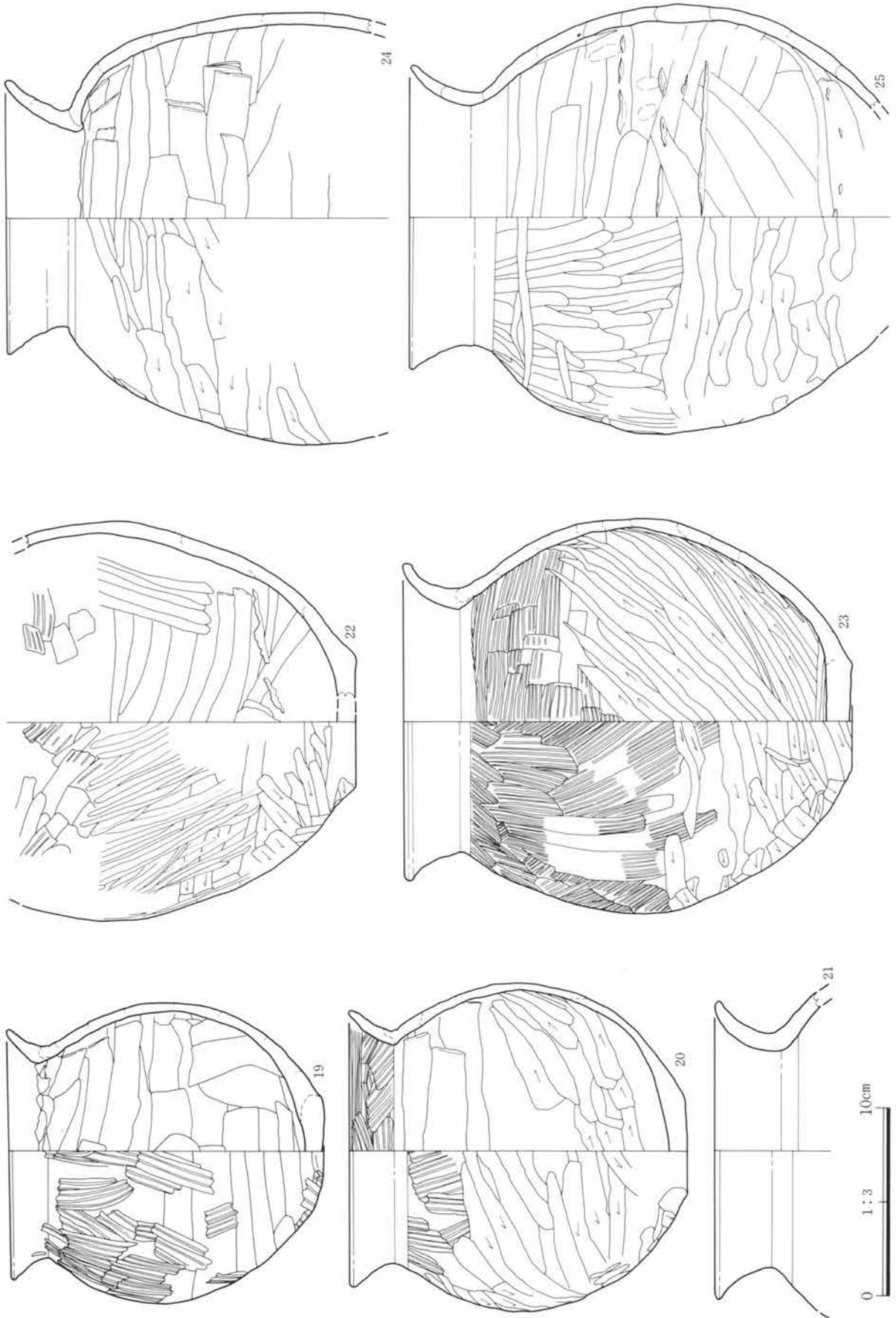
(遺物観察表：83~85頁)

備 考 屋根材の一部と思われる炭化材が出土しており、焼失家屋の可能性はある。

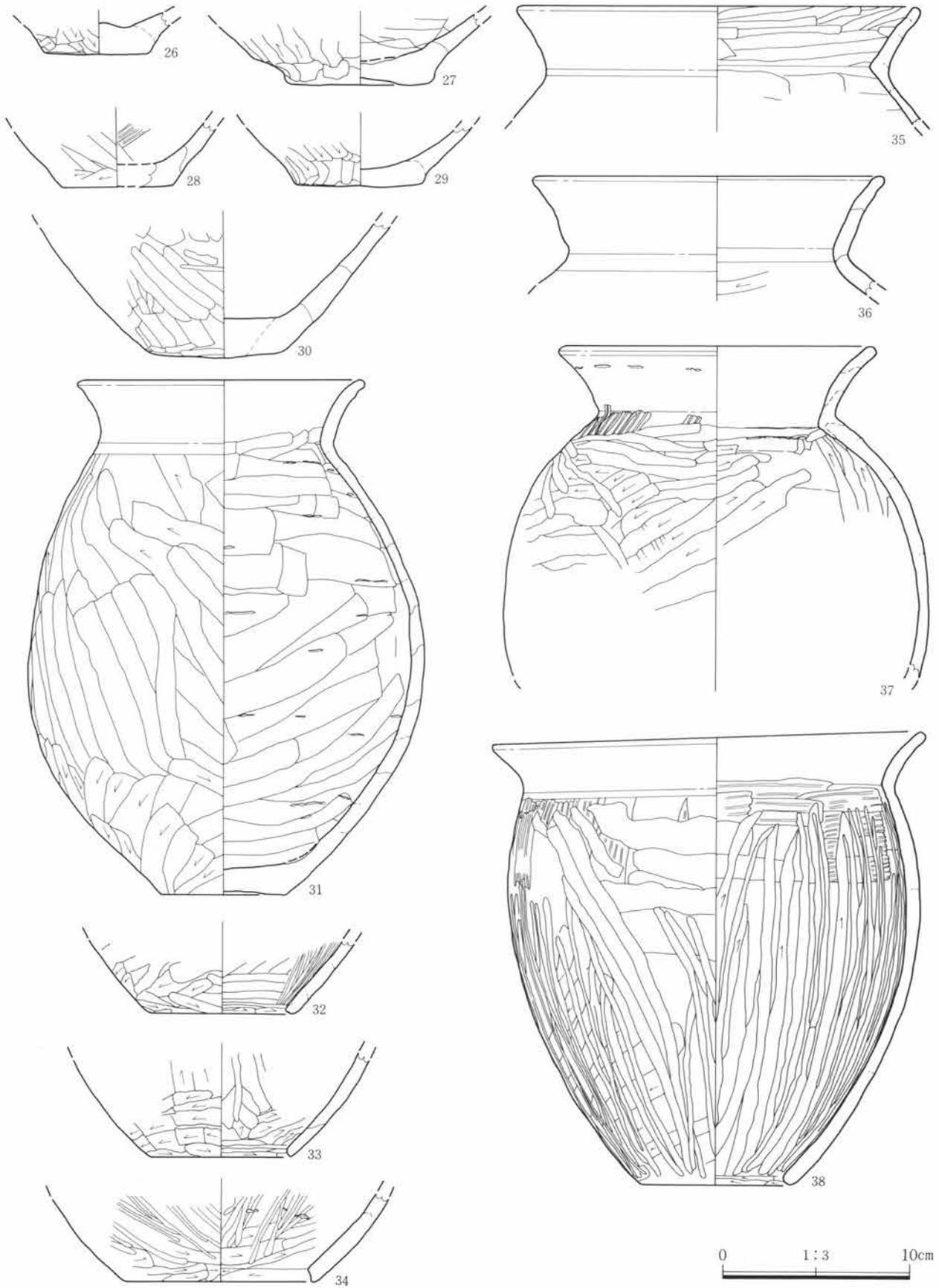


第193図 2区47号住居出土遺物(1)

II 調査の内容



第194図 2区47号住居出土遺物(2)



第195図 2区47号住居出土遺物(3)

II 調査の内容

2区48号住居

位置 R-6グリッド 写真 PL-90・91

重複 46・55号住居に後出する。

形状 他の住居との重複や後世の攪乱等によって、外形を明瞭に把握することはできないが、おそらく一辺が4m前後の正方形を呈すると思われる。検出された隅部は、直角に掘り込まれている。

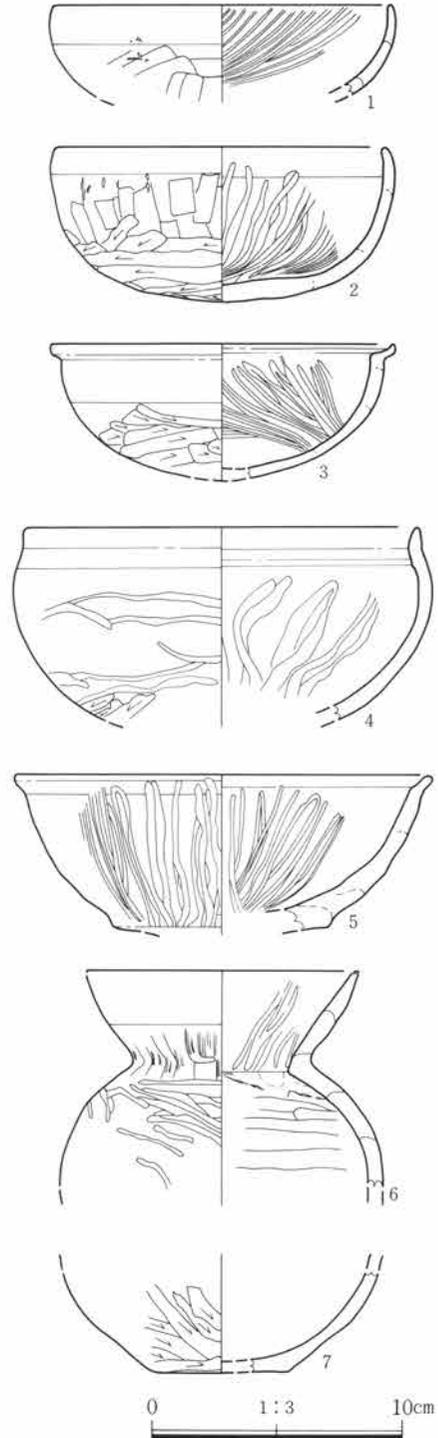
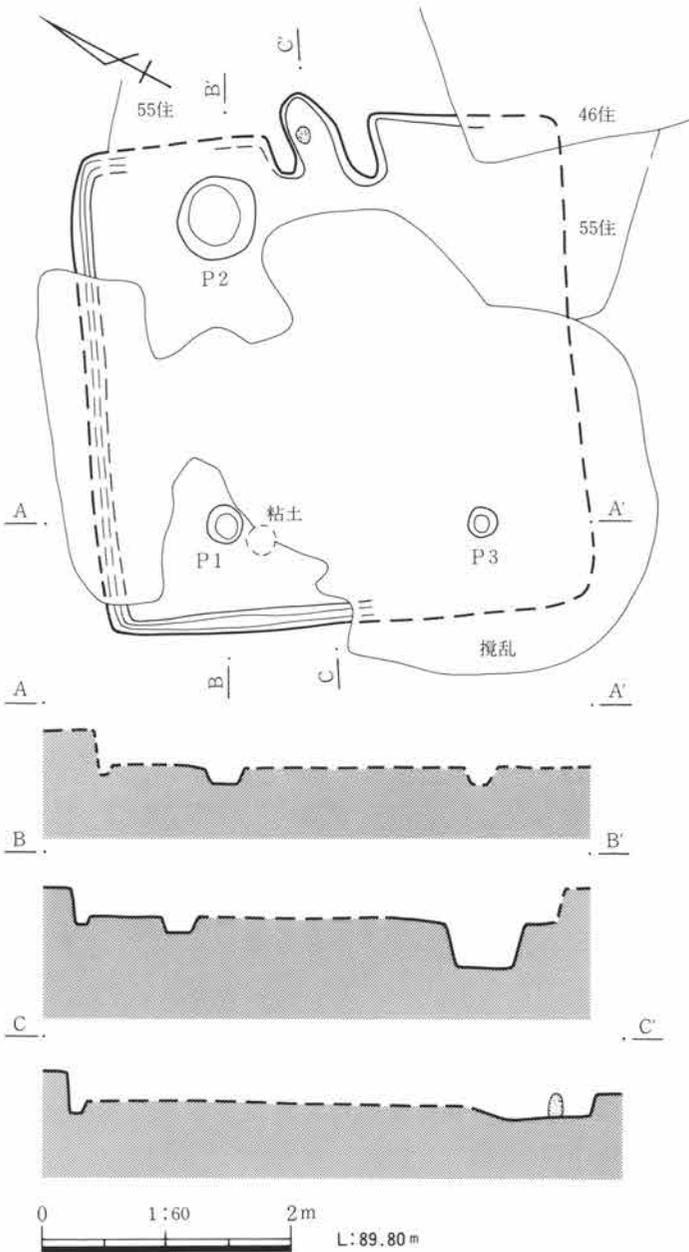
面積 (14.93㎡) 方位 N-57°-E

床面 ローム土を23cm掘り込んで床面としている。

攪乱により、残存状況は不良である。

竈 東壁中央部に位置すると推定され、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ70cm、幅38cmである。

柱穴 他の住居との重複や攪乱もあり、住居の対角線上に3本検出されたのみである。各柱穴の心々間を



第196図 2区48号住居と出土遺物

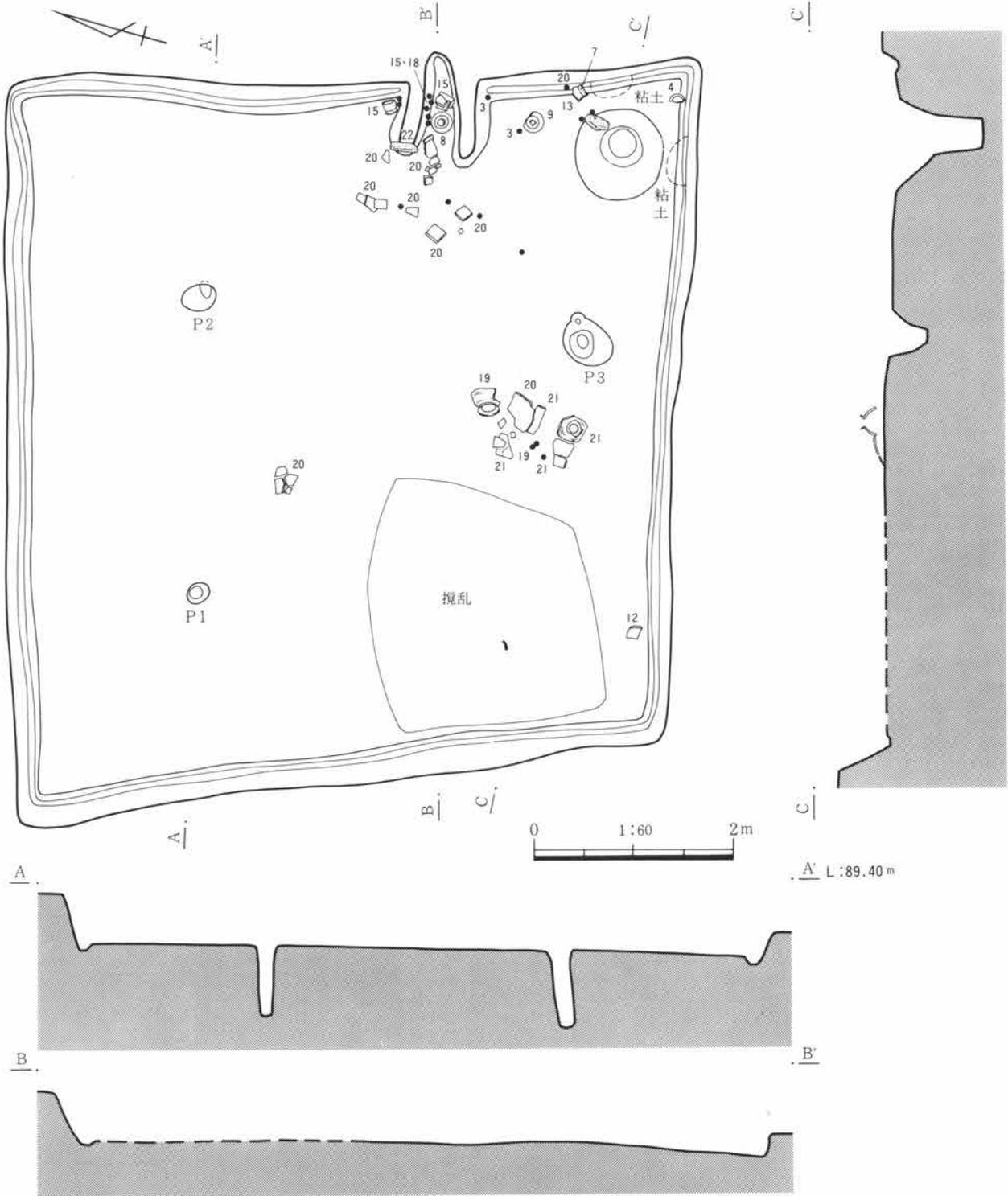
結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈すると推定され、その規模はP₁~P₂:2.50m、P₁~P₃:2.05mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:25×14cm、P₂:30×13cm、P₃:70×34cmである。

周溝 周壁に沿って全周すると推定される。規模は

幅12~18cm、深さ4~6cmである。

遺物 床面に密着して出土した遺物はなく、埋没土中より坏4、甕1、壺1、高坏1の合計7点が出土した。P₁の南側に近接して、粘土塊が出土した。

(遺物観察表:85・86頁)



第197図 2区50号住居

II 調査の内容

2区50号住居

位置 T-9グリッド 写真 PL-85・86

形状 正方形を基調とするが、若干歪んだ菱形状を呈する。四隅は角張り、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺7.4・6.8×短辺6.9・6.6mである。

面積 46.18㎡ 方位 N-72°-E

床面 ローム土を14~66cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもち、北西隅から南東隅側へと比高差約20cmの傾斜が認められる。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ100cm、幅40cmである。燃焼部内より支脚に使用したと推定されるNo.8の高坏が逆位に出土した他に、No.15・18の甕の破片が出土した。左袖の先端部に線条痕をもつ砥石 (No.22) が出土しており、竈の補強材として転用されたものと推定される。

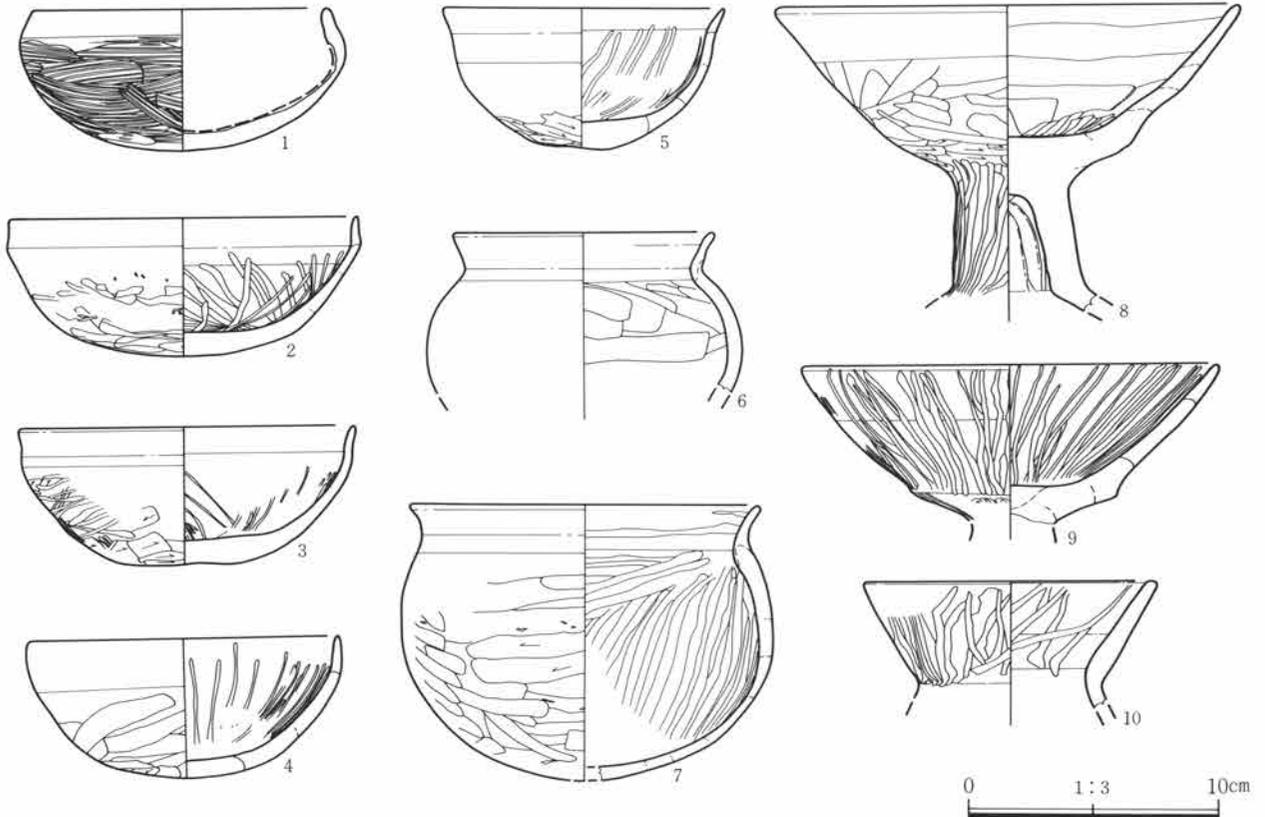
貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。直径90cmの円形を呈し、深さ86cmである。開口部付近に直径25cmの河床礫1点が出土した。

柱穴 4本柱の構造と推定されるが、1カ所に後世の攪乱が入り3本が検出されたのみである。P₃を除いた他の2本は、住居の対角線上に位置する。各柱穴の心々間の距離は、P₁~P₂:3.00m、P₂~P₃:3.80mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:20×67cm、P₂:25×73cm、P₃:40×38cmである。

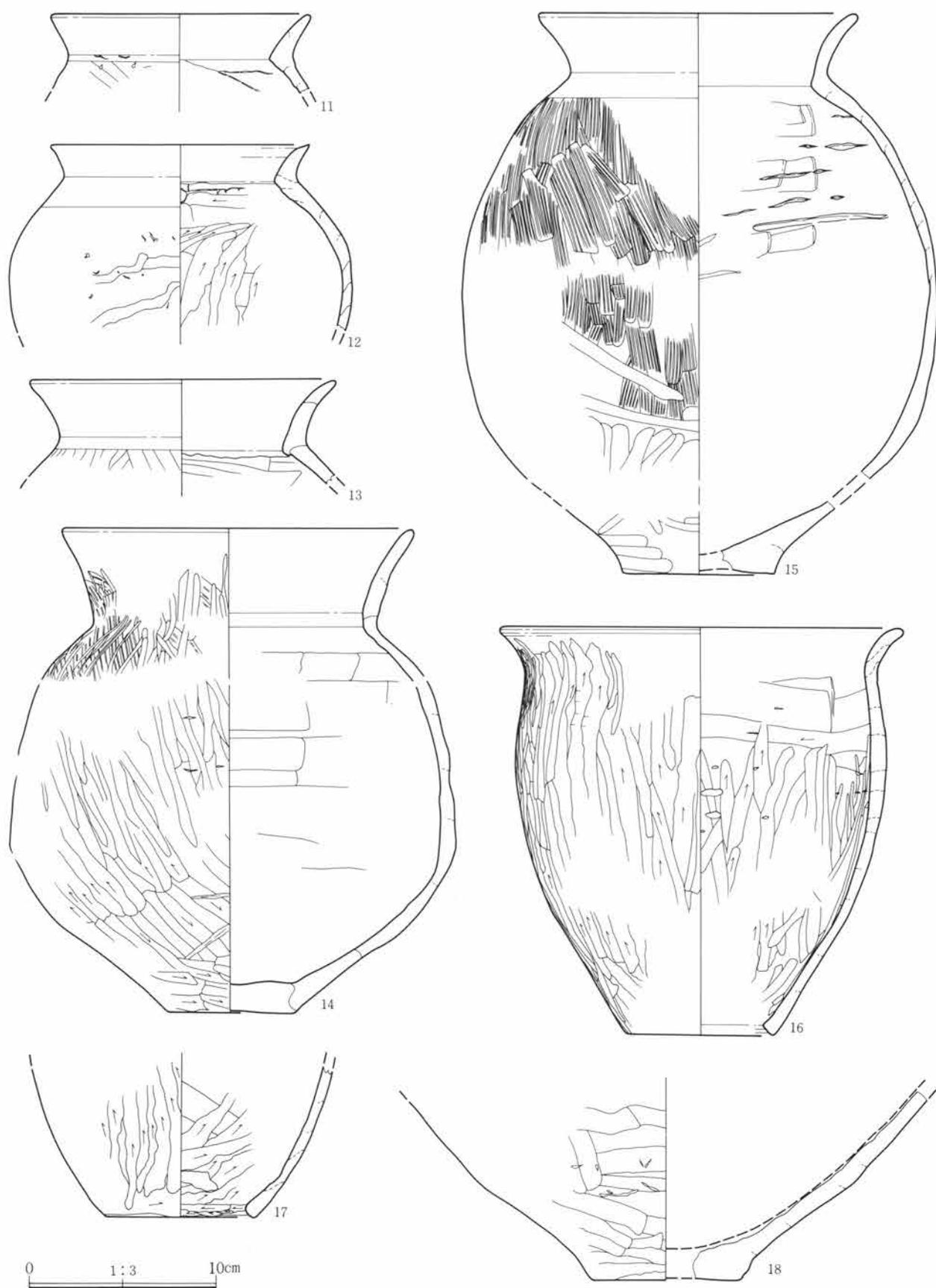
周溝 幅15~41cm、深さ4~11cmの規模で壁面に沿って全周する。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏5、小型甕2、甕6、甑2、壺4、高坏2の合計21点が出土している。No.4・7・13・19・20・21は床面に密着して、他は床面から3~10cm浮いて出土した。貯蔵穴に近接した東壁と南壁際に粘土塊が出土している。

(遺物観察表:86・87頁)

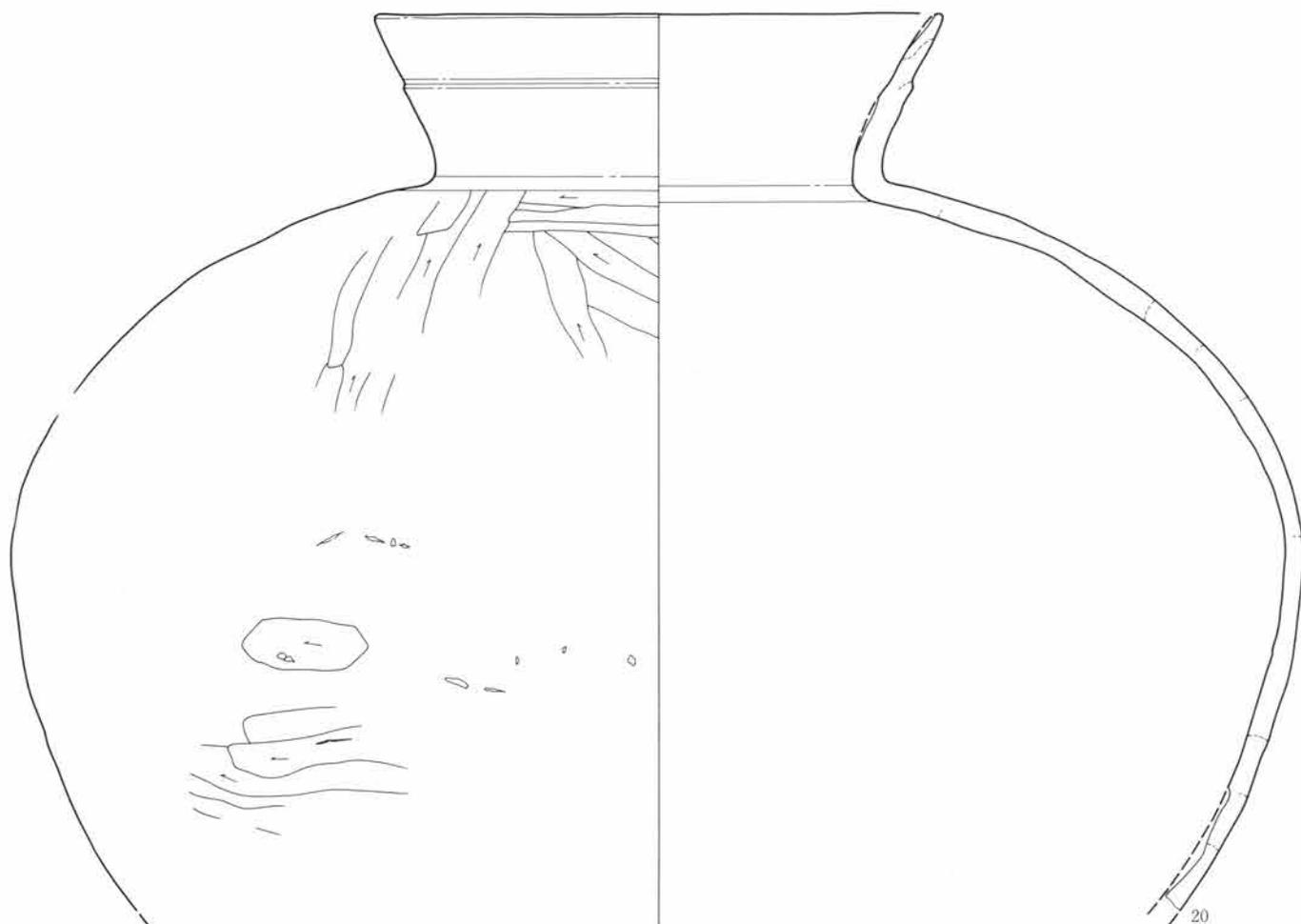
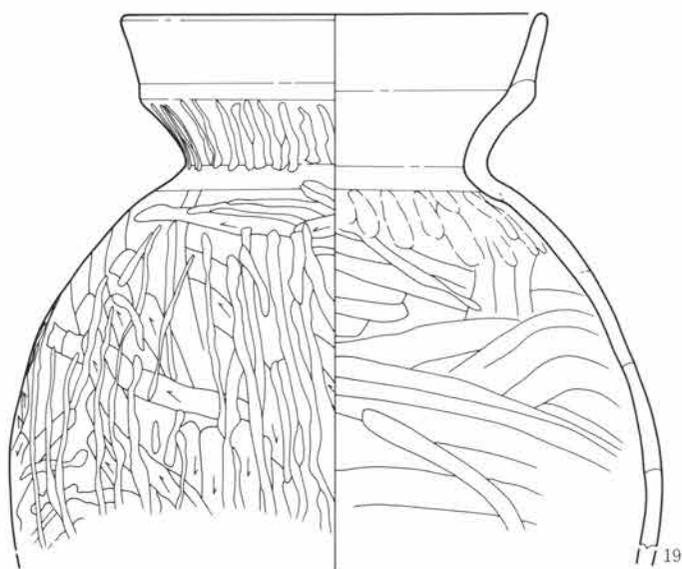


第198図 2区50号住居出土遺物(1)



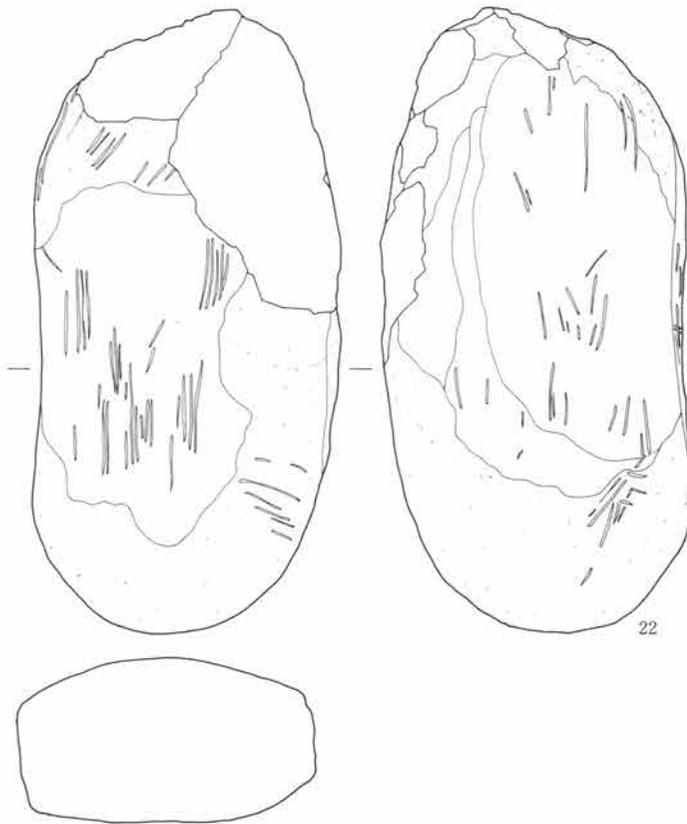
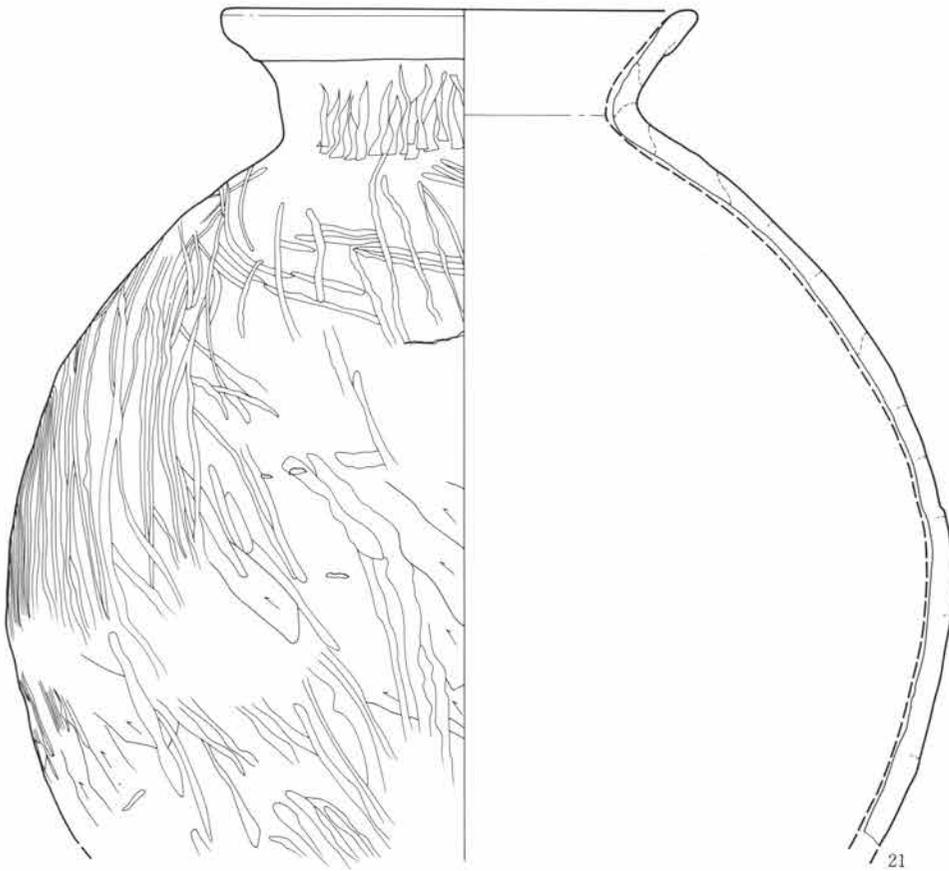
第199図 2区50号住居出土遺物(2)

II 調査の内容



0 1:3 10cm

第200図 2区50号住居出土遺物(3)



0 1:3 10cm

第201図 2区50号住居出土遺物(4)

II 調査の内容

2区51号住居

位置 J-11グリッド 写真 PL-87~89

重複 44号住居に後出する。

形状 一辺が3.90mの正方形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。

面積 14.38㎡ 方位 N-68°-E

床面 ローム土を60~67cm掘り込んで床面としている。凹凸面および傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

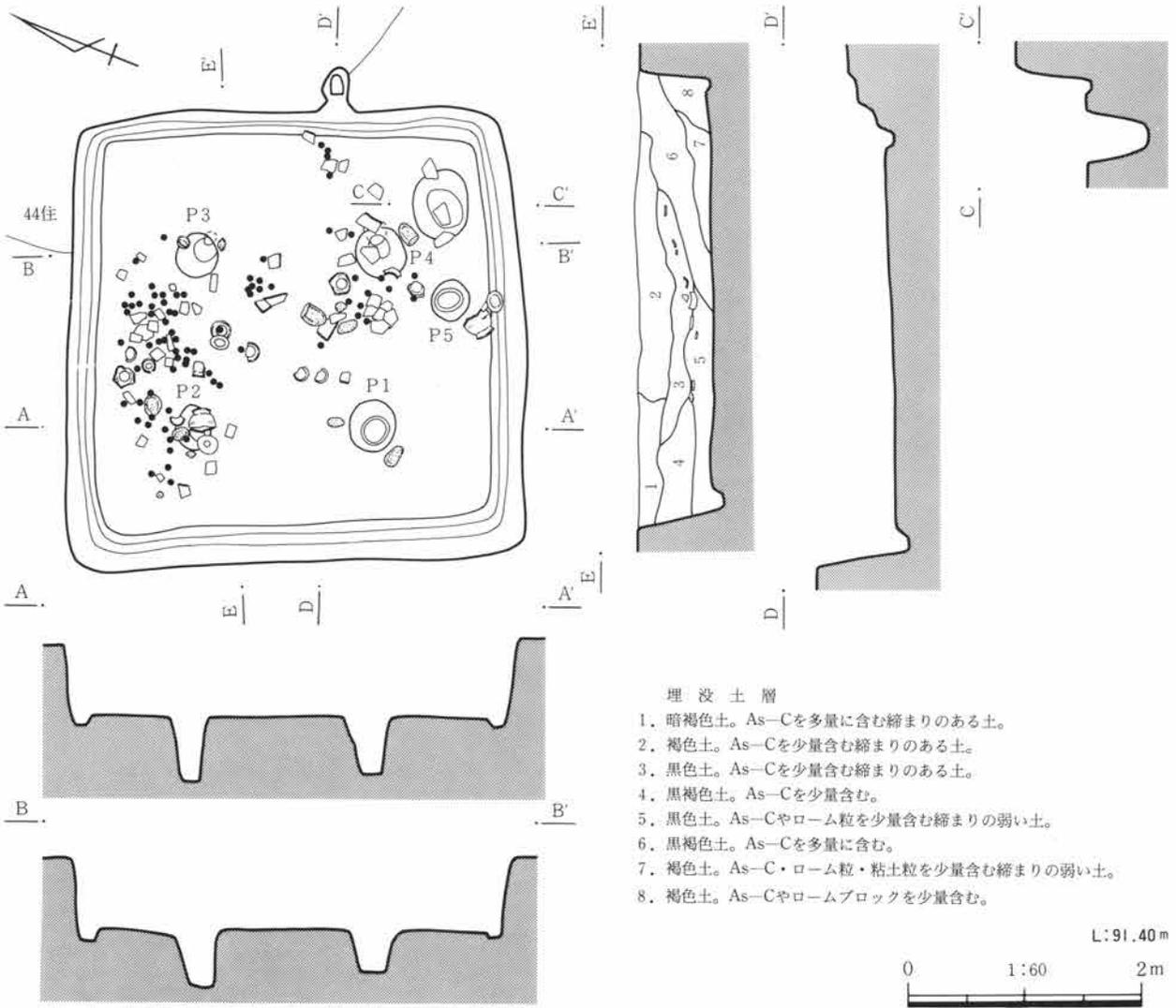
埋没土 各層ともレンズ状に堆積し、自然埋没の状態を示す。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置するが、煙道部

の掘り方が残存するのみである。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられていると推定され、煙道部は幅40cm、長さ20cmである。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長径55×短径45cmの楕円形を呈し、深さ63cmである。内部および開口部付近より、No.30の甕の破片が出土している。

柱穴 住居の対角線上に主柱穴が4本と、南壁に近接して1本の合計5本が検出された。各支柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その距離はP₁~P₂:1.52m、P₂~P₃:1.65m、P₃~P₄:1.40m、P₄~P₁:1.65mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:38×47cm、P₂:28×55cm、P₃:37×46cm、P₄:40×39cm、P₅:30×25cm。P₅は位置的にみて、



第202図 2区51号住居

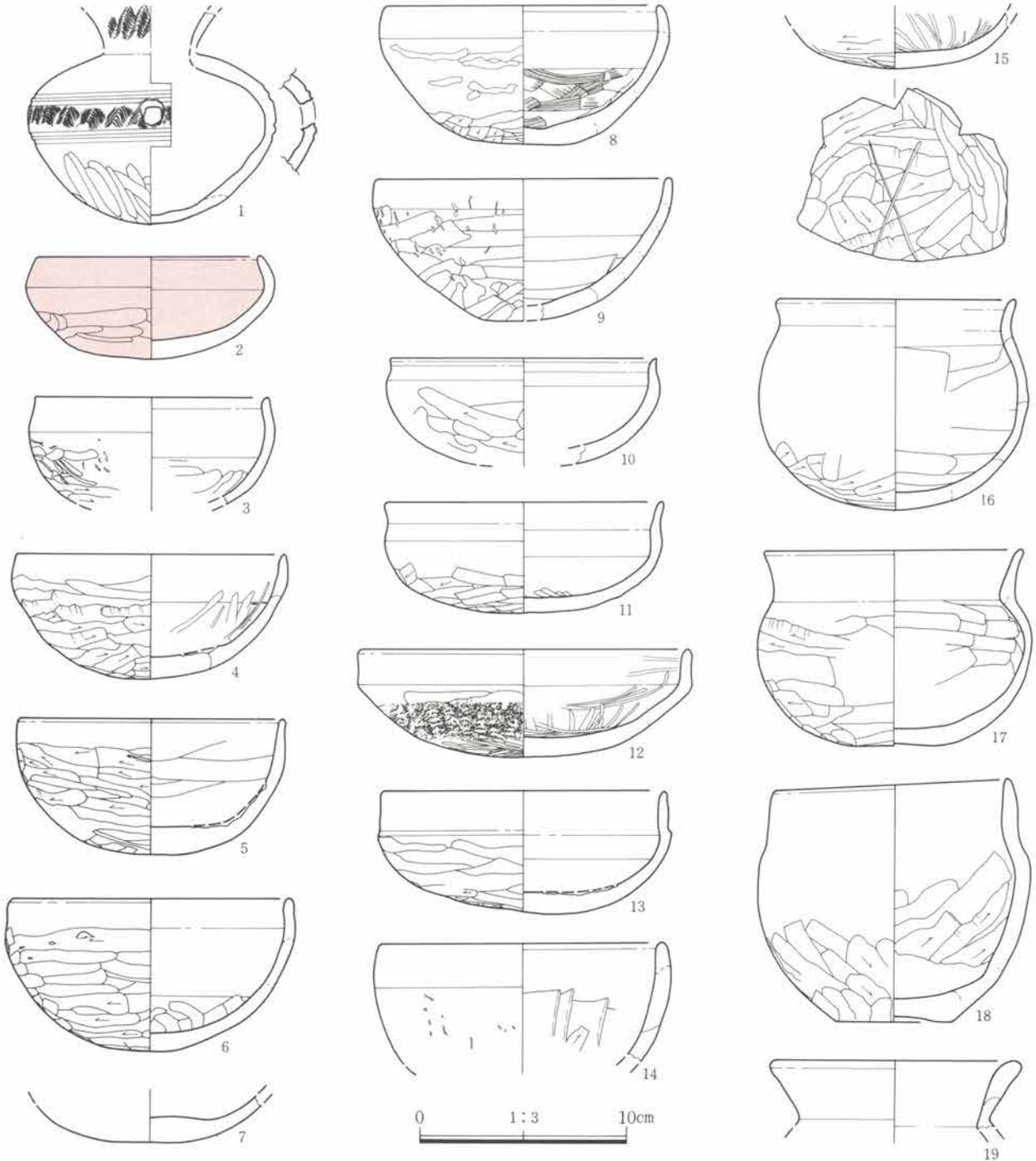
出入口施設に関係したピットの可能性がある。

周溝 幅17~36cm、深さ3~11cmの規模で壁面に沿って全周する。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏14、小型甕2、甕26、甌4、壺2、須恵器の甕1の合計49点が出土した。床面中央部に集中した出土がみられるが、床面に密着して出土したものはNo26・

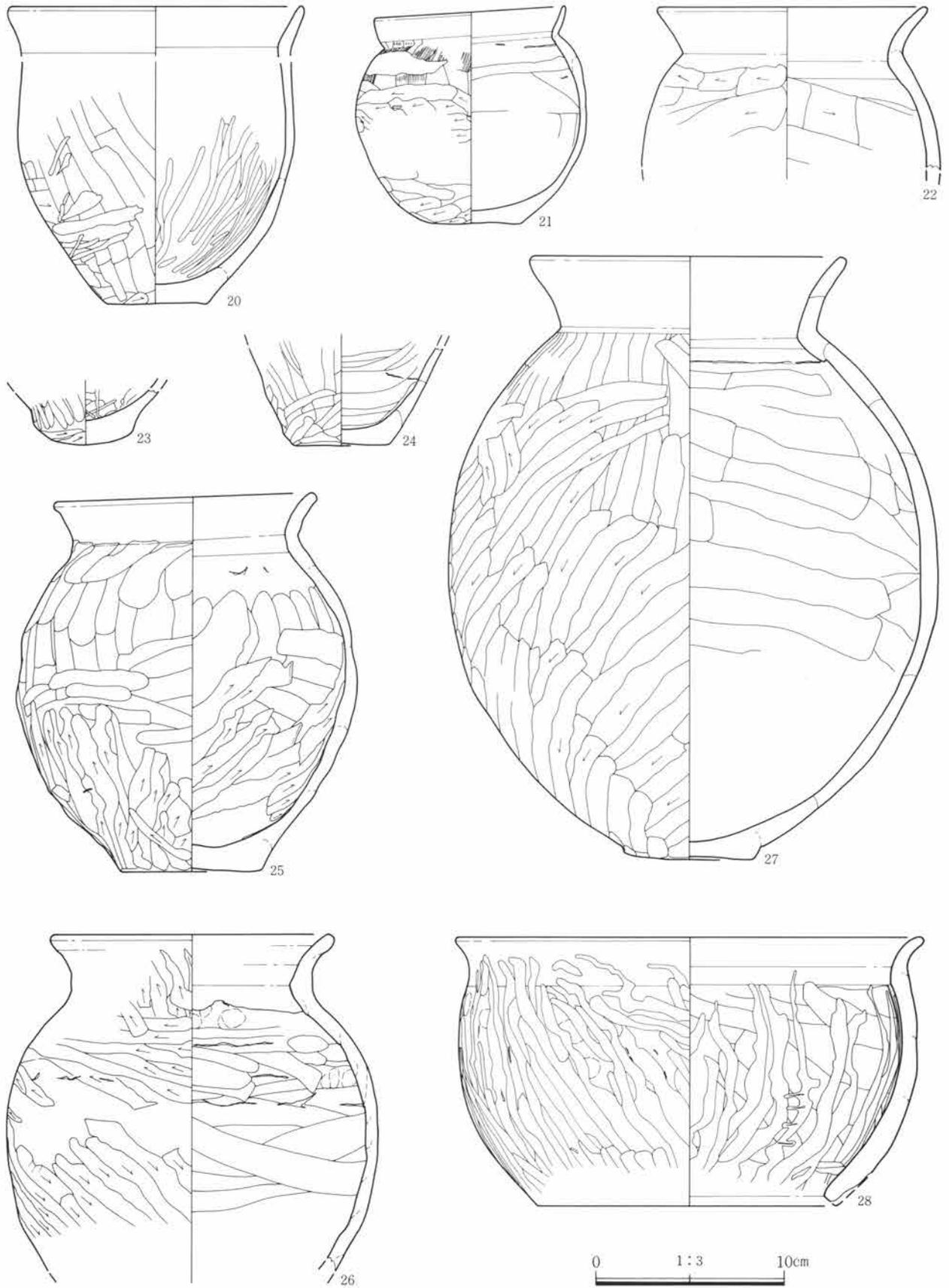
30・31・33・44・46のみで、他は第一次埋没土よりも上位層に包含され、床面から10~20cm浮いて「吹上パターン」的な状態で出土した。No26・28・31・37・43・48は2区30号住居出土の破片と、No49は同52号住居出土の破片とそれぞれ接合関係にある。その他に、埋没土中より炭化した桃の種子約60点が出土した。

(遺物観察表：87~90頁)

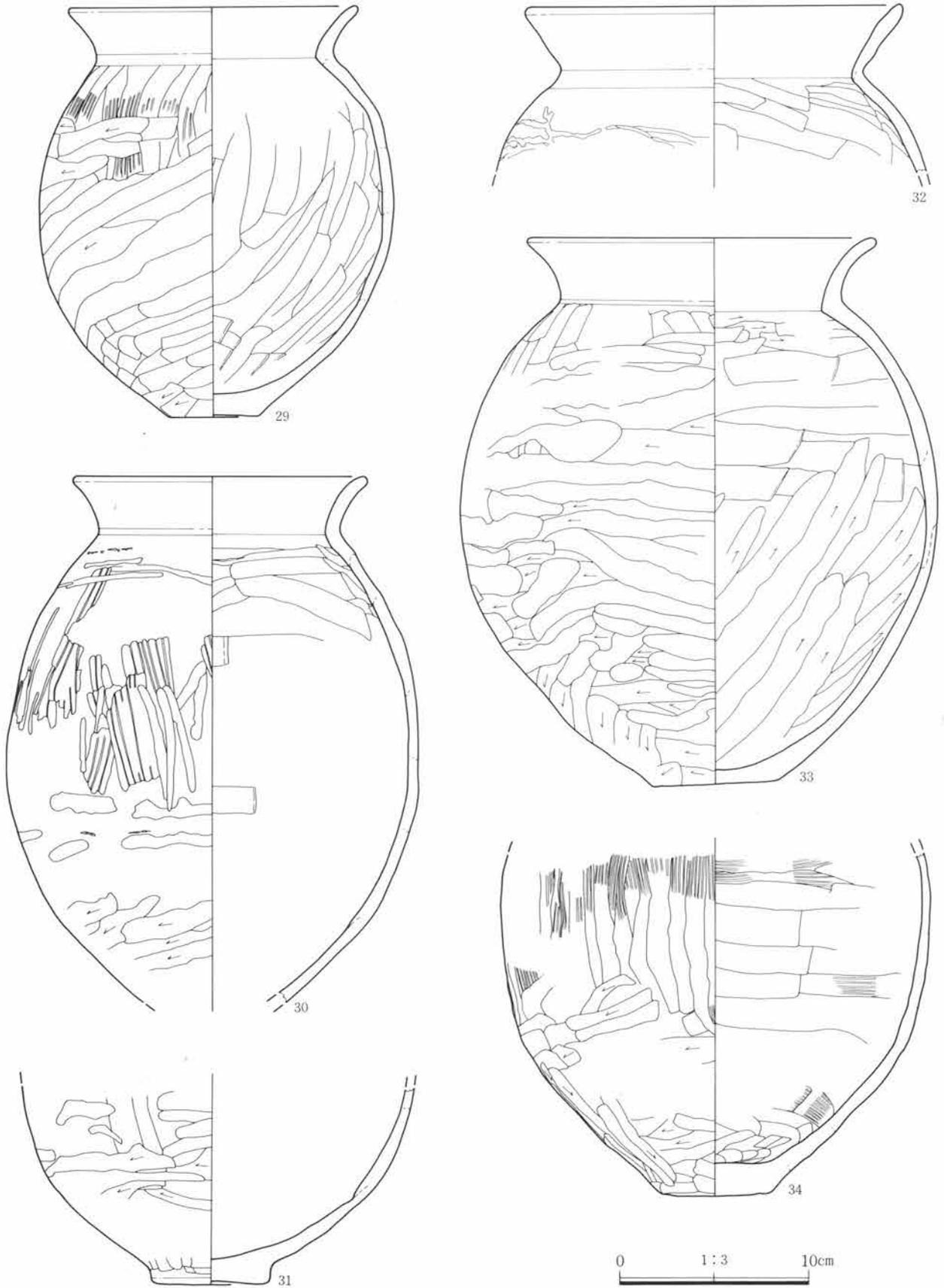


第203図 2区51号住居出土遺物(1)

II 調査の内容

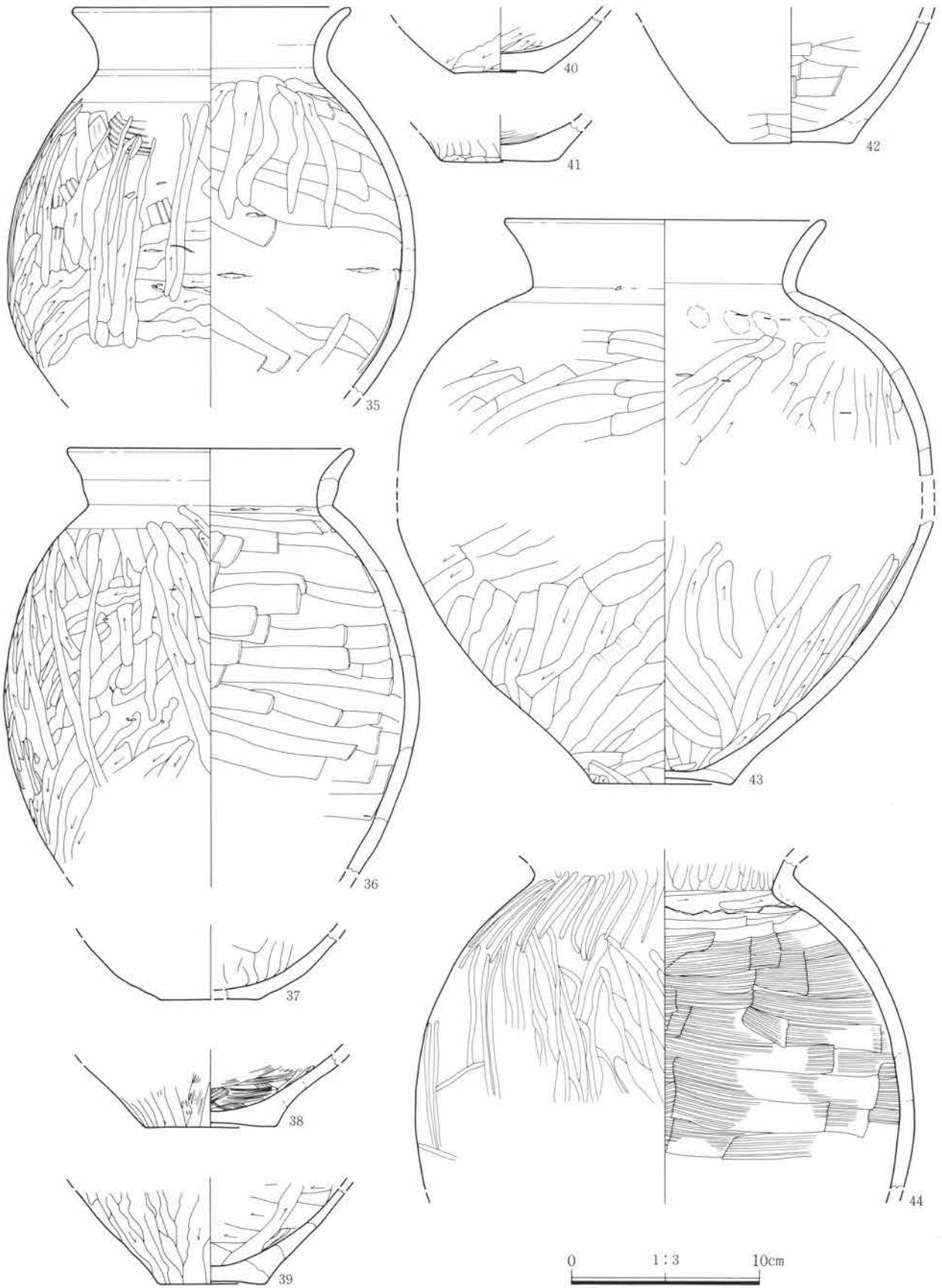


第204図 2区51号住居出土遺物(2)

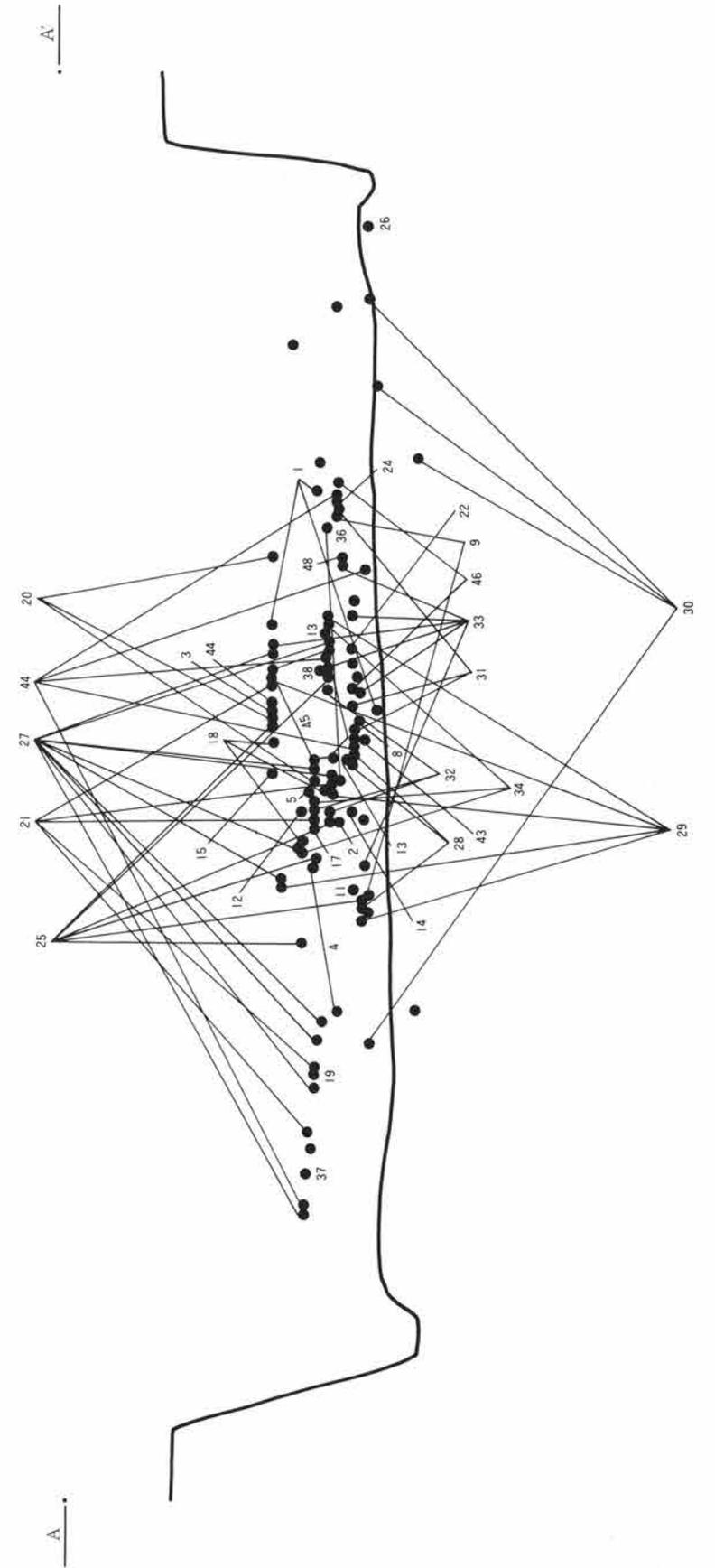
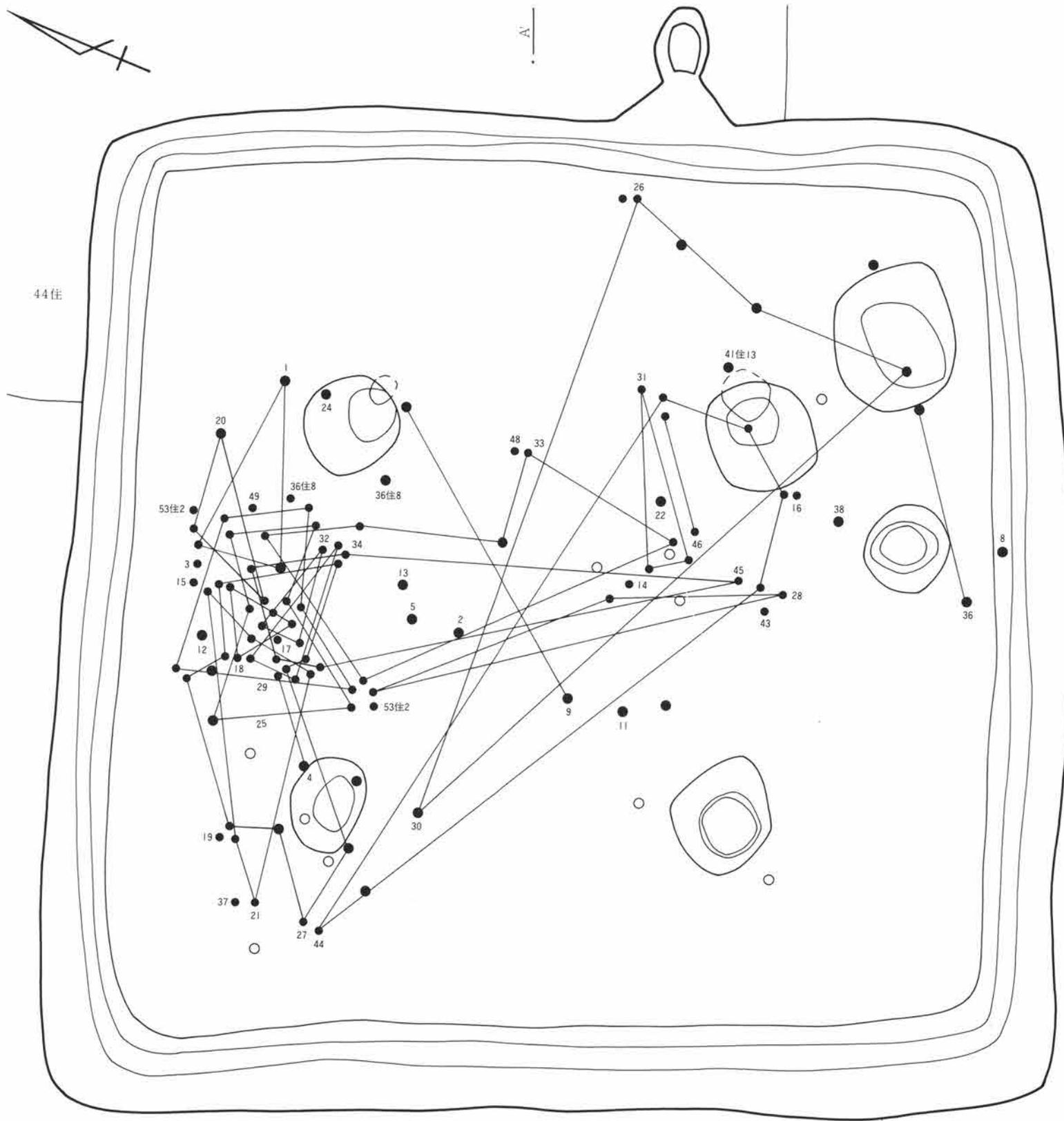


第205図 2区51号住居出土遺物(3)

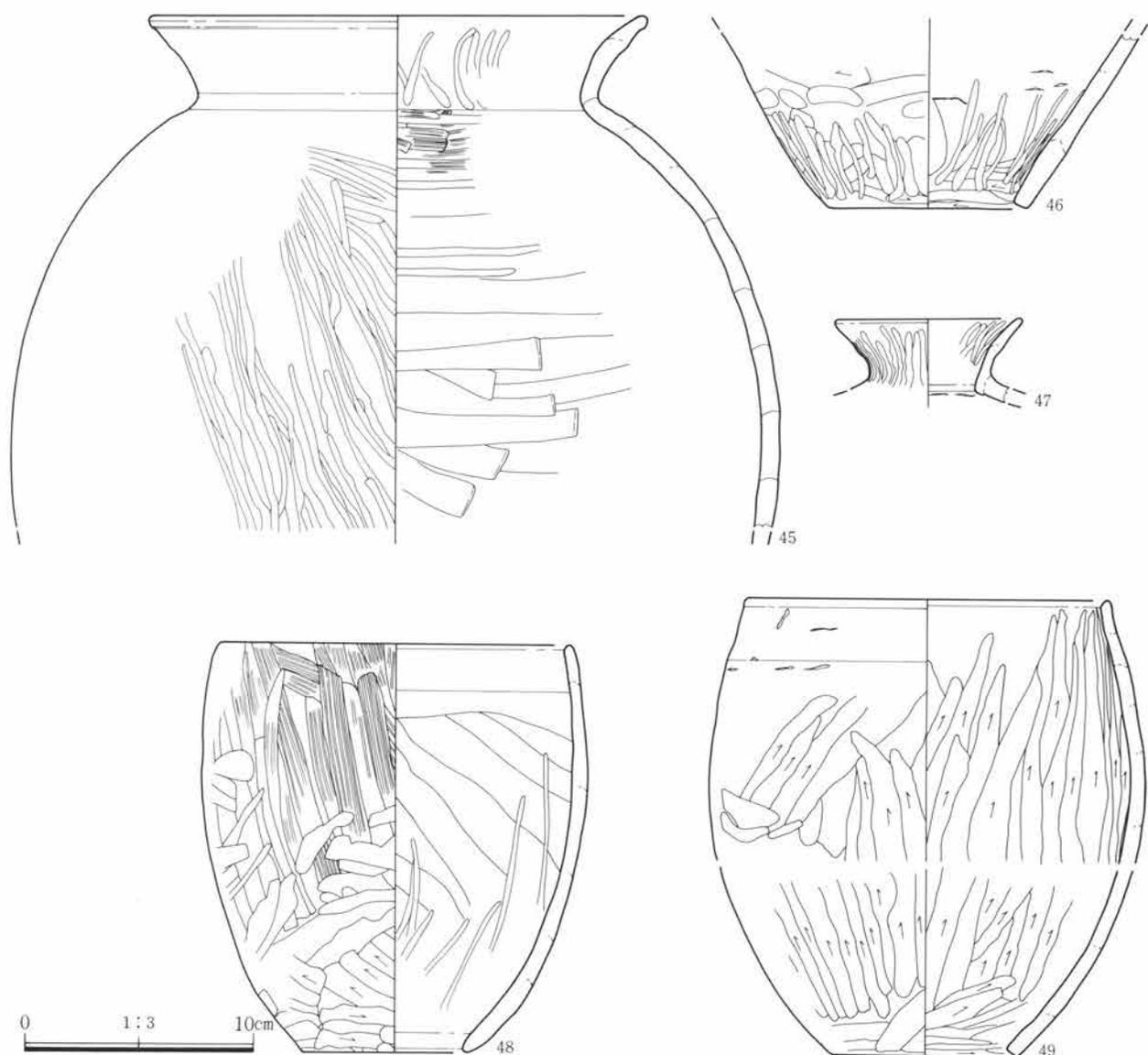
II 調査の内容



第206図 2区51号住居出土遺物(4)



第207図 2区51号住居の遺物出土状況



第208図 2区51号住居出土遺物(5)

2区52号住居

位置 K-12グリッド 写真 PL-90・91

重複 44号住居に後出する。

面積 30.06㎡ 方位 N-46°-E

床面 ローム土を37~68cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが強く踏み固められている。

埋没土 上層にはAs-Cまじりの黒褐色土が、中・下層にはロームブロックまじりの褐色土が堆積する。自然

埋没の状態を示す。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ75cm、幅28cmである。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。開口部上面は円形に近い隅丸方形であるが、底面は方形を呈する。規模は長軸150×短軸140cm、深さ66cmである。開口部付近より、No.4・11・12・16の土器が出土している。

柱穴 住居の対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その距離は $P_1 \sim P_2$: 2.50m、 $P_2 \sim P_3$: 2.35m、 $P_3 \sim$

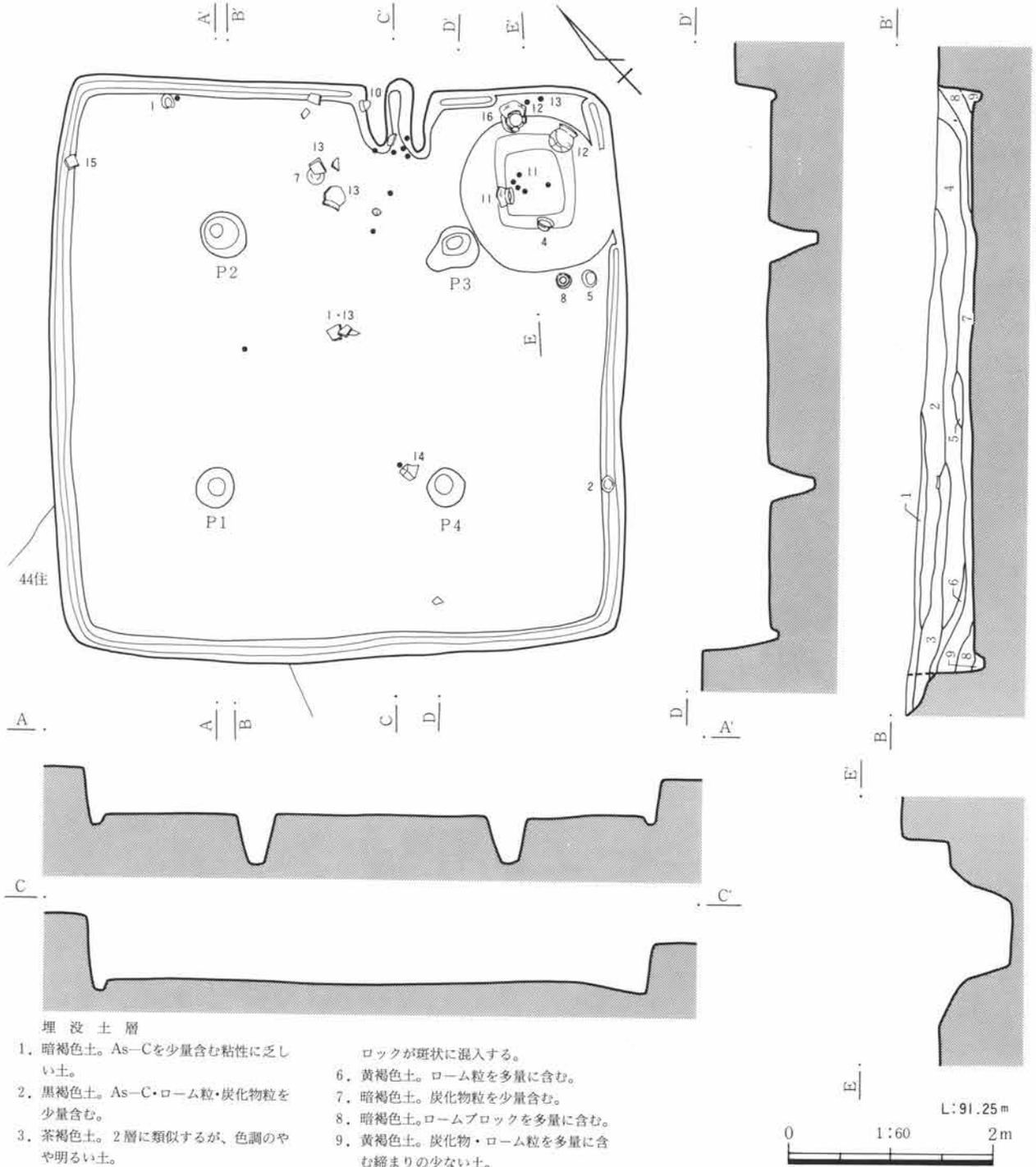
II 調査の内容

P₄: 2.35m、P₄~P₁: 2.25mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁: 35×47cm、P₂: 45×44cm、P₃: 40×44cm、P₄: 35×45cmである。

周溝 幅16~25cm、深さ 3~12cmの規模で全周。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏6、鉢1、甕7、壺1、須恵器の甕1の合計16

点が出土している。No 1・2・14・15は床面に密着して、他は床面から3cm以上浮いて出土した。No15は2区30号住居、No16は同10・11・22・29・30・32号住居のそれぞれ埋没土出土の破片と接合関係にある。なお、埋没土中より弥生時代の紡錘車1点(242頁No131)が出土している。(遺物観察表: 90・91頁)

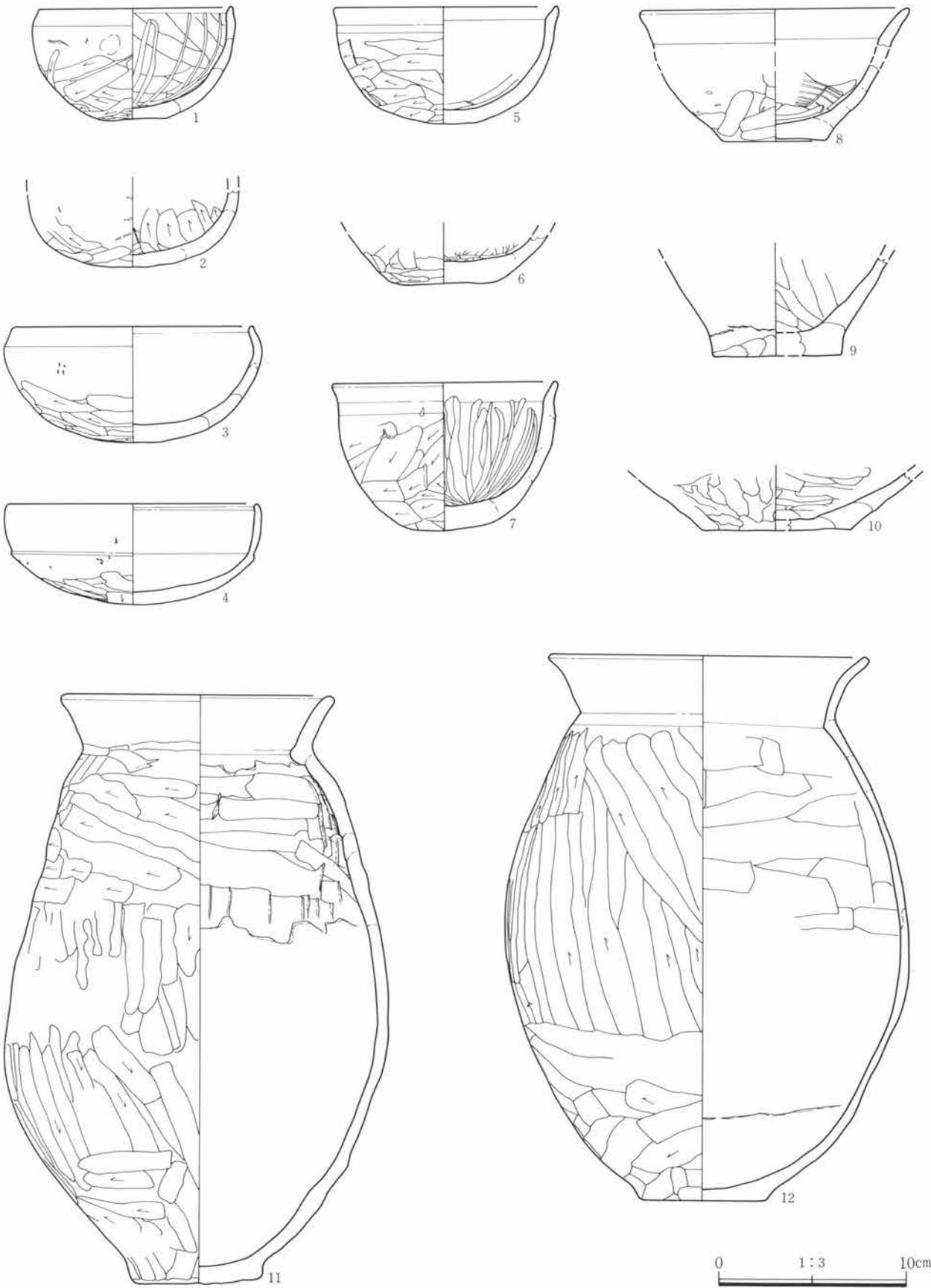


埋没土層

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. 暗褐色土。As-Cを少量含む粘性に乏しい土。 2. 黒褐色土。As-C・ローム粒・炭化物粒を少量含む。 3. 茶褐色土。2層に類似するが、色調のやや明るい土。 4. 暗褐色土。ローム粒を少量含む。 5. 暗褐色土。As-Cを少量含む、ロームブ | <ul style="list-style-type: none"> 6. 黄褐色土。ローム粒を多量に含む。 7. 暗褐色土。炭化物粒を少量含む。 8. 暗褐色土。ロームブロックを多量に含む。 9. 黄褐色土。炭化物・ローム粒を多量に含む締まりの少ない土。 |
|--|--|

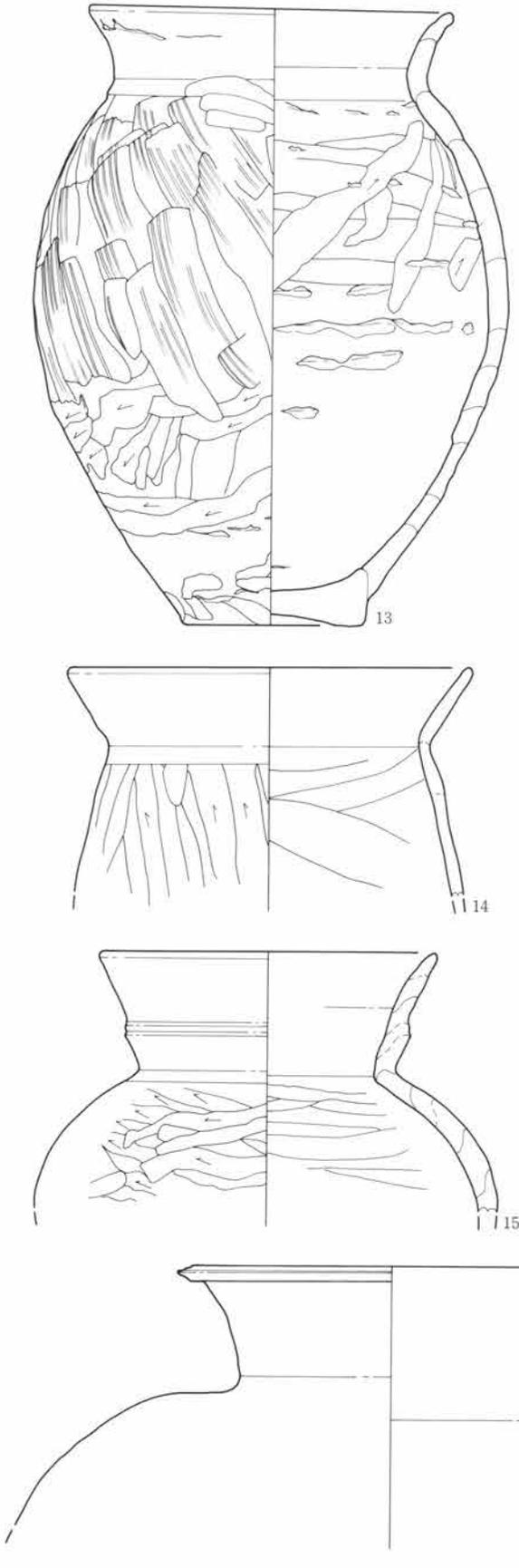
ロックが斑状に混入する。

第209図 2区52号住居



第210図 2区52号住居出土遺物(1)

II 調査の内容



2区53号住居

位置 F-16グリッド 写真 PL-92・93

形状 長軸を東西にもつ長方形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺4.50×短辺3.05mである。

面積 12.44㎡ 方位 N-71°-E

床面 ローム土を51~62cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

埋没土 上層には黒ボク的な黒色土が、また下層および壁際にはロームブロックまじりの褐色土がレンズ状に堆積する。自然埋没の状態を示す。

竈 東壁中央部の南東隅寄りに位置し、両袖部が残存する。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ80cm、幅30cmである。竈の長軸は東壁に直交せず、約15°南側へ傾いている。煙道部は幅32cm、長さ50cmの掘り方のみ残存するが、燃烧部の底面から約40cm上位の壁面中途を水平に掘り抜いている。燃烧部内中央よりNo.13の甕が掛け口から落ち込んだ状態で、焚口部には上半部を欠損したNo.18の甕が出土。

貯蔵穴 南壁のほぼ中央に位置する。開口部は楕円形、底面は方形を呈する。長軸85×短軸60cm、深さ54cmである。底面より21cm浮いた状態でNo.20が、またNo.12が密着した状態でそれぞれ出土している。

柱穴 住居の対角線上に3本、若干ずれた位置に2本の合計5本検出された。主軸穴はP₁~P₄と思われる、各柱穴の心々間の距離は、P₁~P₂:1.70m、P₂~P₃:1.70m、P₃~P₄:1.80m、P₄~P₁:1.55mである。また

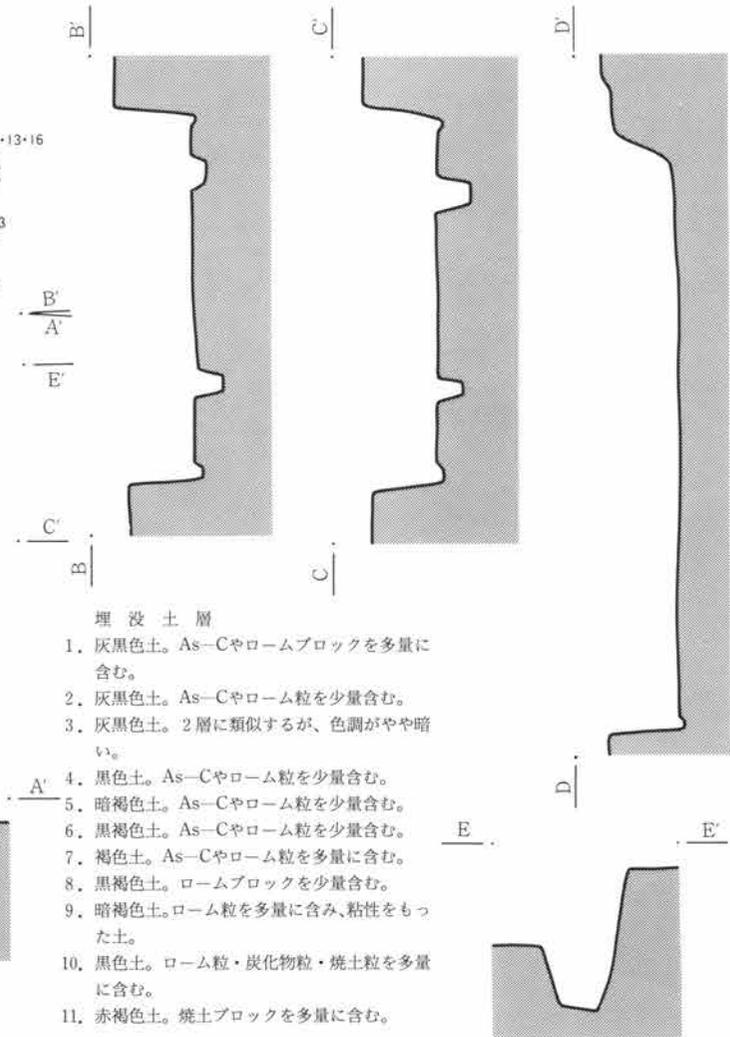
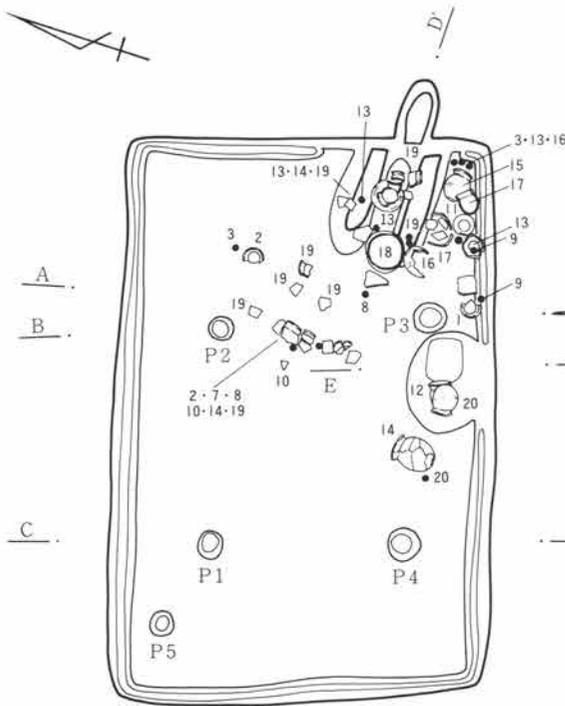
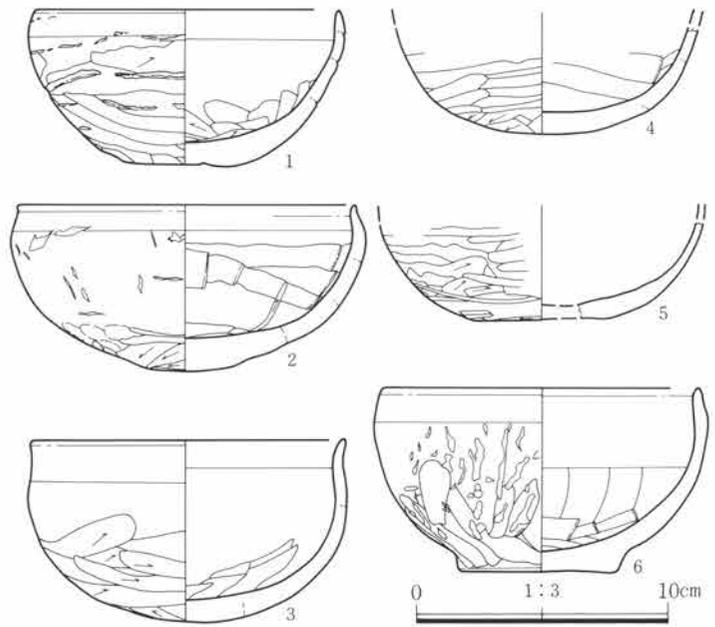
第211図 2区52号住居出土遺物(2)

各柱穴の規模（径×深さ）は、P₁：19×21cm、P₂：17×21cm、P₃：22×11cm、P₄：25×27cm、P₅：18×35cmである。

周溝幅11～20cm、深さ3～8cmの規模で壁面に沿って全周する。

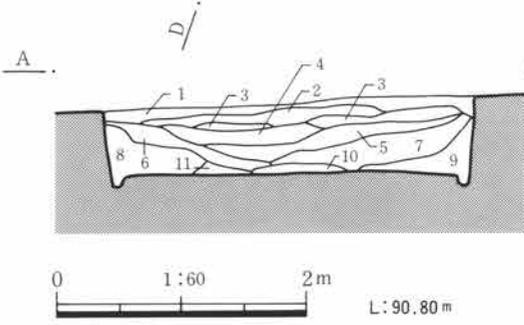
遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は坏5、鉢1、小型甕2、甕10、壺2の合計20点が出土した。No.8・10・11・15・17・20は床面に密着して、他は床面から5cm以上浮いて出土した。No.5・7は2区52号住居、No.2は同51号住居の埋没土出土の破片とそれぞれ接合関係にある。

（遺物観察表：91～93頁）



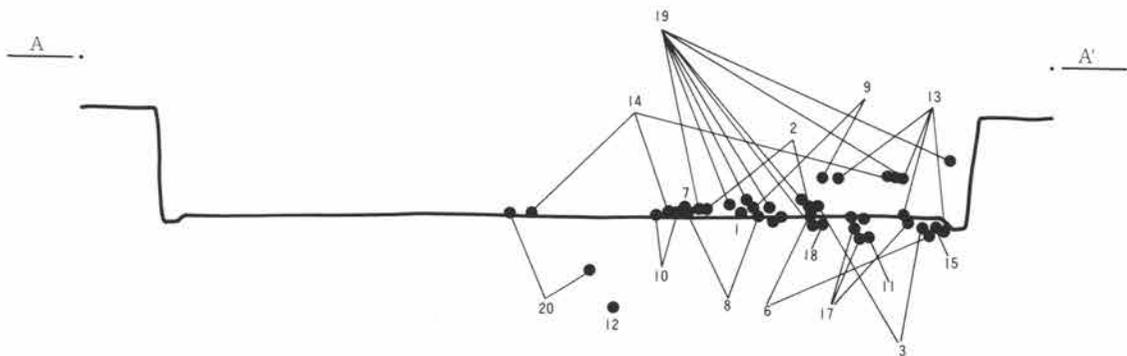
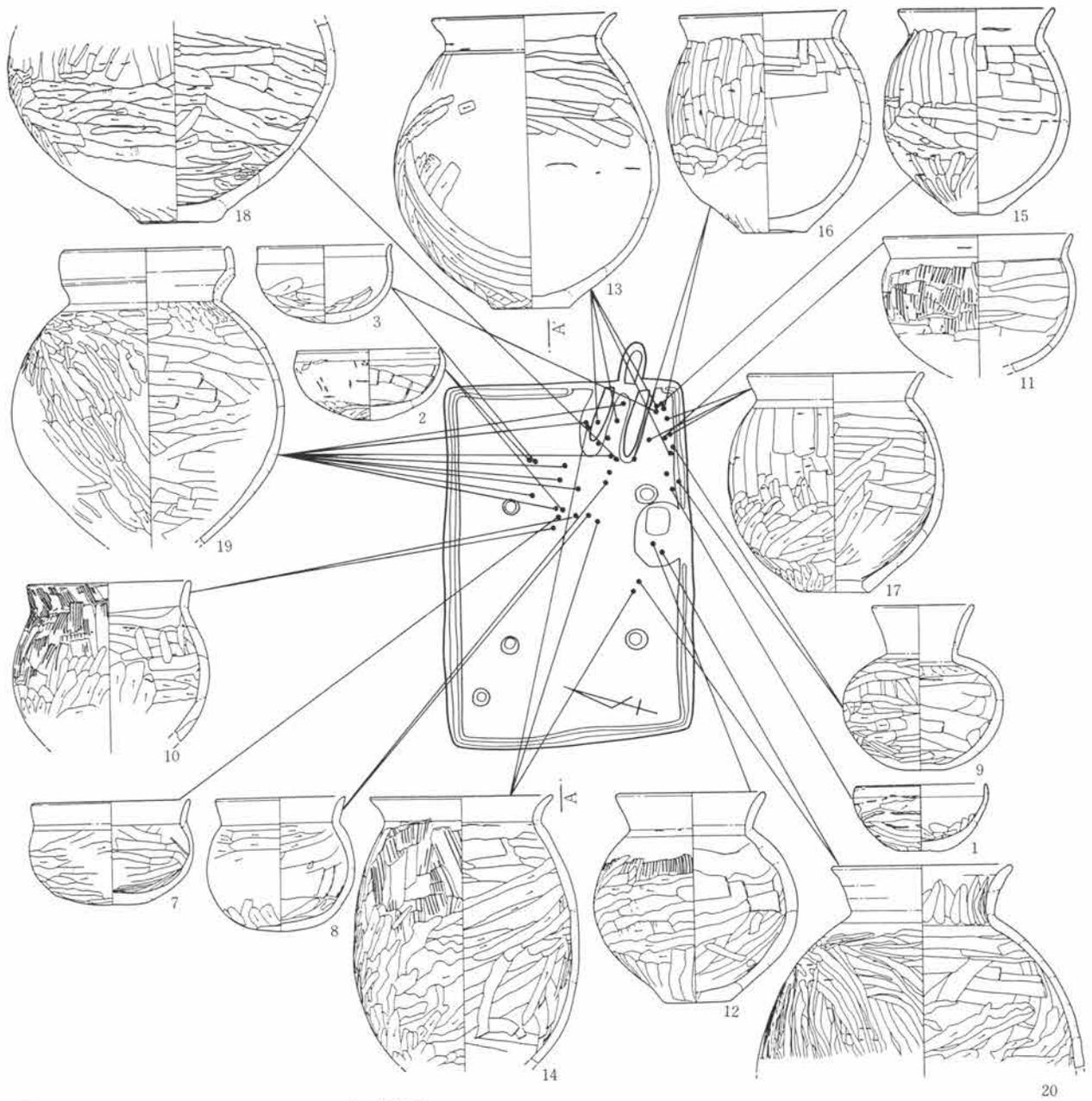
埋没土層

1. 灰黒色土。As-Cやロームブロックを多量に含む。
2. 灰黒色土。As-Cやローム粒を少量含む。
3. 灰黒色土。2層に類似するが、色調がやや暗い。
4. 黒色土。As-Cやローム粒を少量含む。
5. 暗褐色土。As-Cやローム粒を少量含む。
6. 黒褐色土。As-Cやローム粒を少量含む。
7. 褐色土。As-Cやローム粒を多量に含む。
8. 黒褐色土。ロームブロックを少量含む。
9. 暗褐色土。ローム粒を多量に含む、粘性をもった土。
10. 黒色土。ローム粒・炭化物粒・焼土粒を多量に含む。
11. 赤褐色土。焼土ブロックを多量に含む。

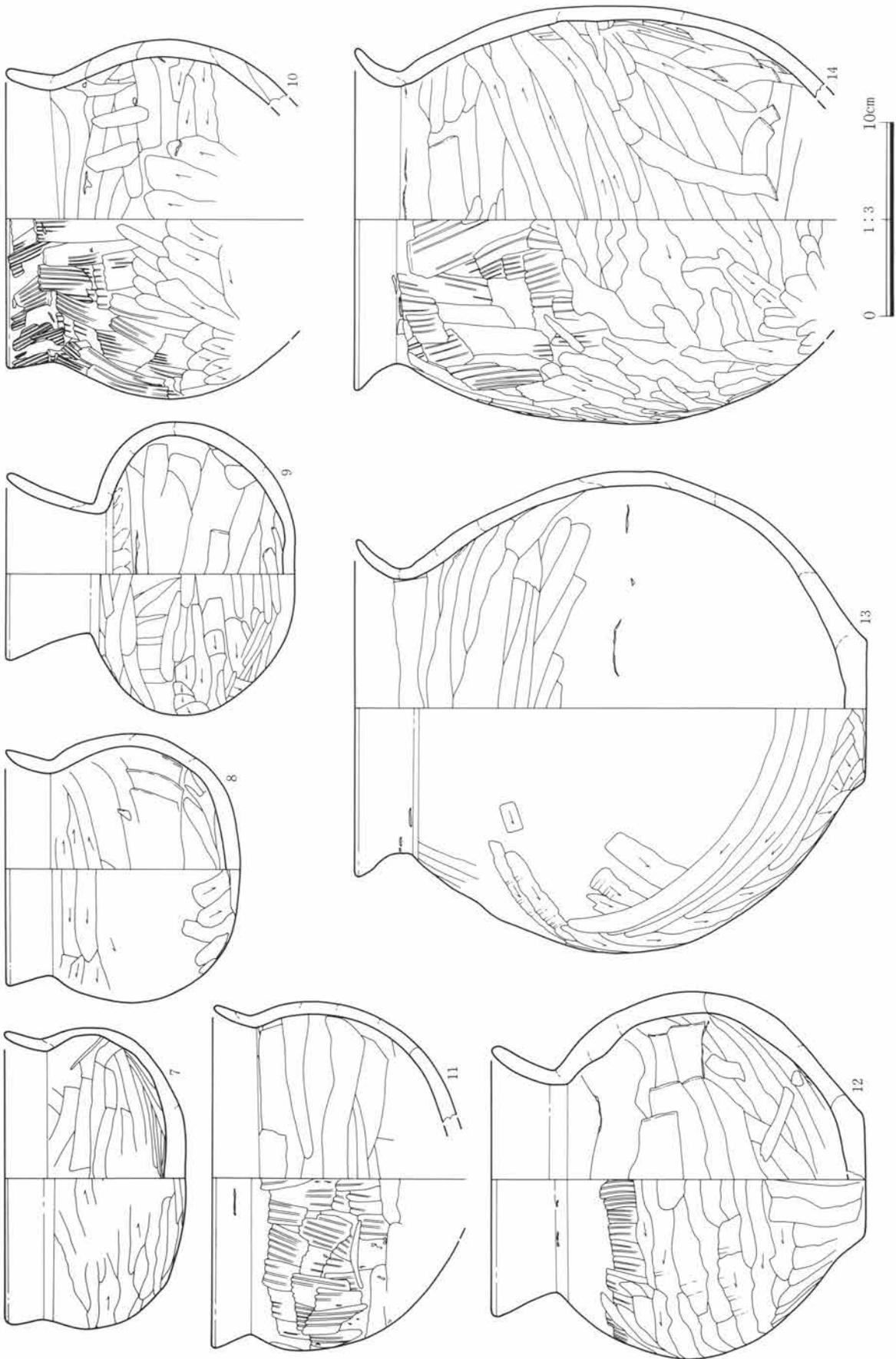


第212図 2区53号住居と出土遺物

II 調査の内容

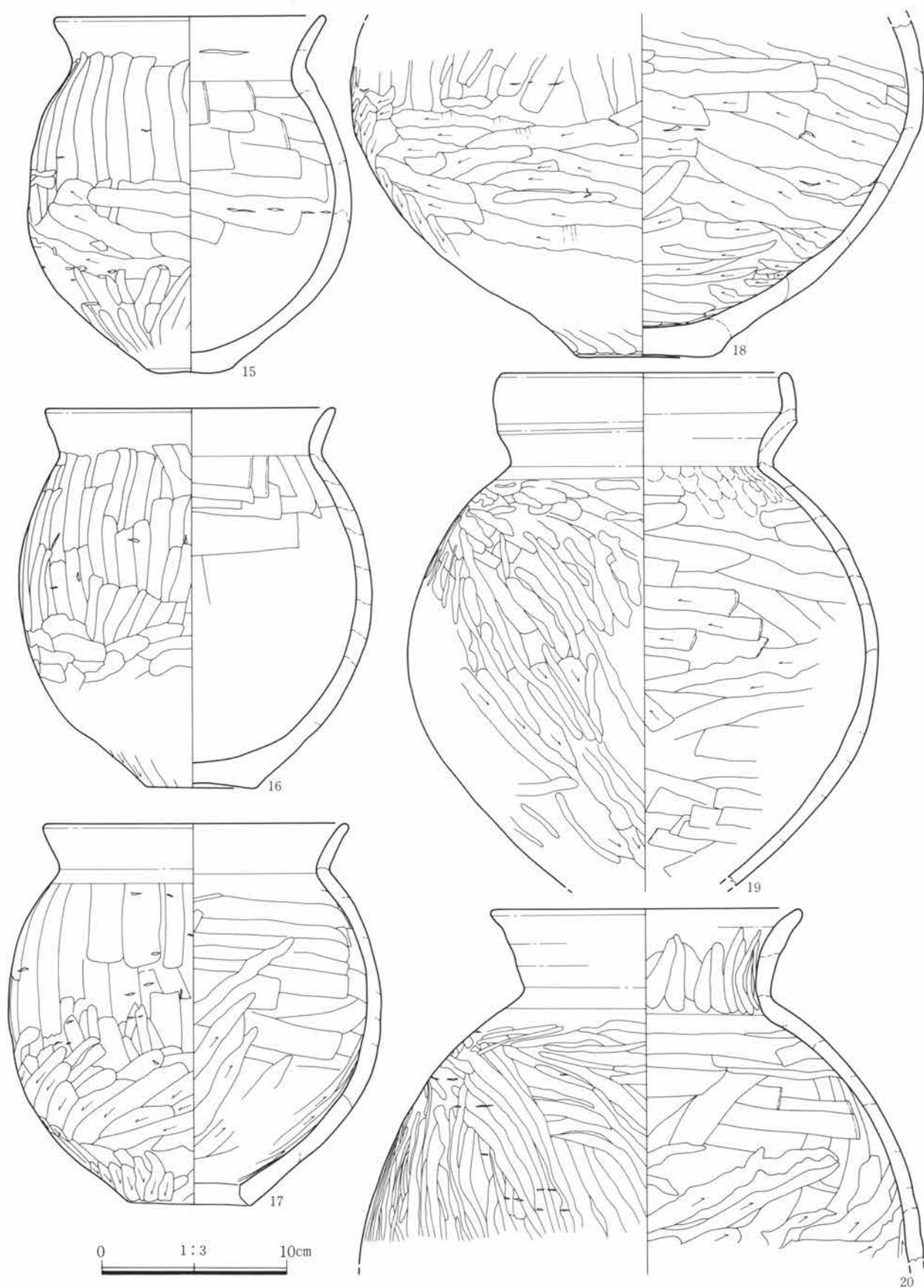


第213図 2区53号住居の遺物出土状況



第214図 2区53号住居出土遺物(1)

II 調査の内容



第215図 2区53号住居出土遺物(2)

2区55号住居

位置 R-6グリッド 写真 PL-90・91

重複 46・48号住居に先行する。1号溝との新旧関係は不明である。

形状 長軸を東西にもつが、若干歪んでいて菱形に近い長方形を呈する。隅部は角張り、周壁はわずかに外側へ弧状に膨らむ。規模は長辺5.1×短辺4.3mである。

面積 (21.93m²) 方位 N-68°-E

床面 ローム土を13~15cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもち、西から東側へと比高差約10

cmの傾斜が認められる。電手前や主柱穴P₁・P₂を結んだラインの南側は、叩き床状の堅固な面となっている。

竈 46号住居との重複により左袖部の一部を残すのみであるが、東壁中央部に位置し、燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられていると推定される。

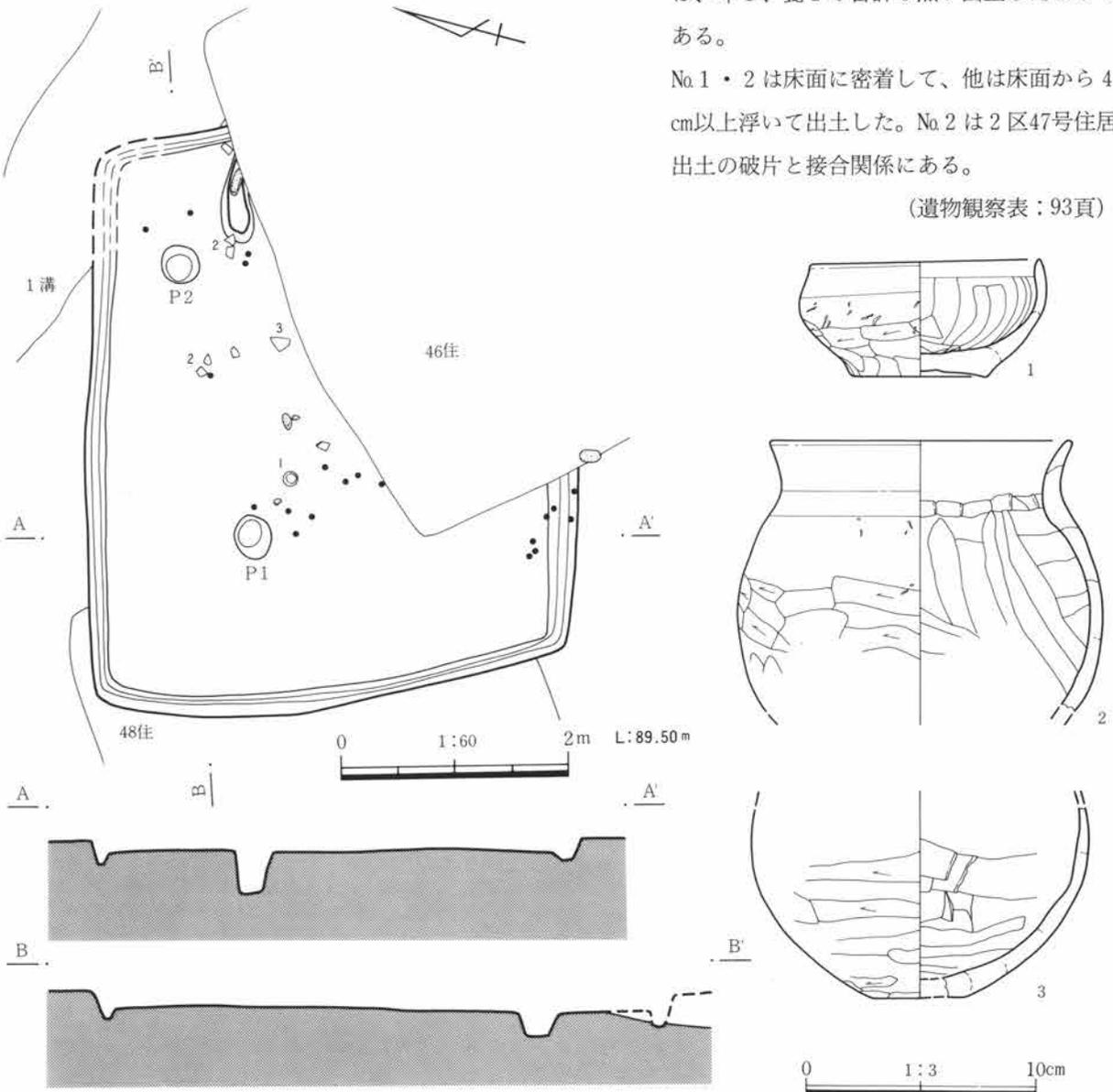
柱穴 2本検出されたのみである。各柱穴の心々間の距離は、P₁~P₂:2.40mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:31×35cm、P₂:35×18cmである。

周溝 幅15~27cm、深さ7~12cmの規模で壁面に沿ってほぼ全周すると推定される。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏1、甕2の合計3点が出土したのみである。

No1・2は床面に密着して、他は床面から4cm以上浮いて出土した。No2は2区47号住居出土の破片と接合関係にある。

(遺物観察表:93頁)



第216図 2区55号住居と出土遺物

II 調査の内容

2区56号住居

位置 M-18グリッド 写真 PL-94

形状 後世の攪乱により全体の形状は不明であるが、隅部は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれるものと推定される。

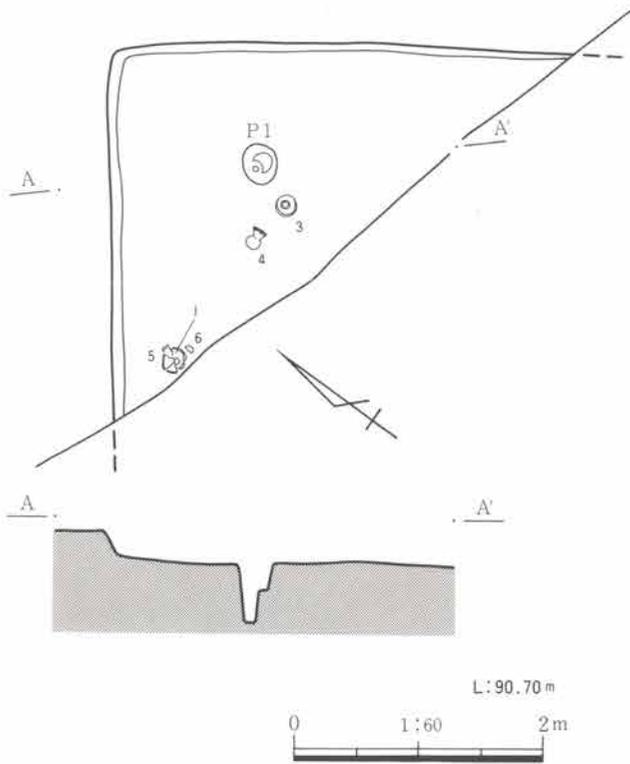
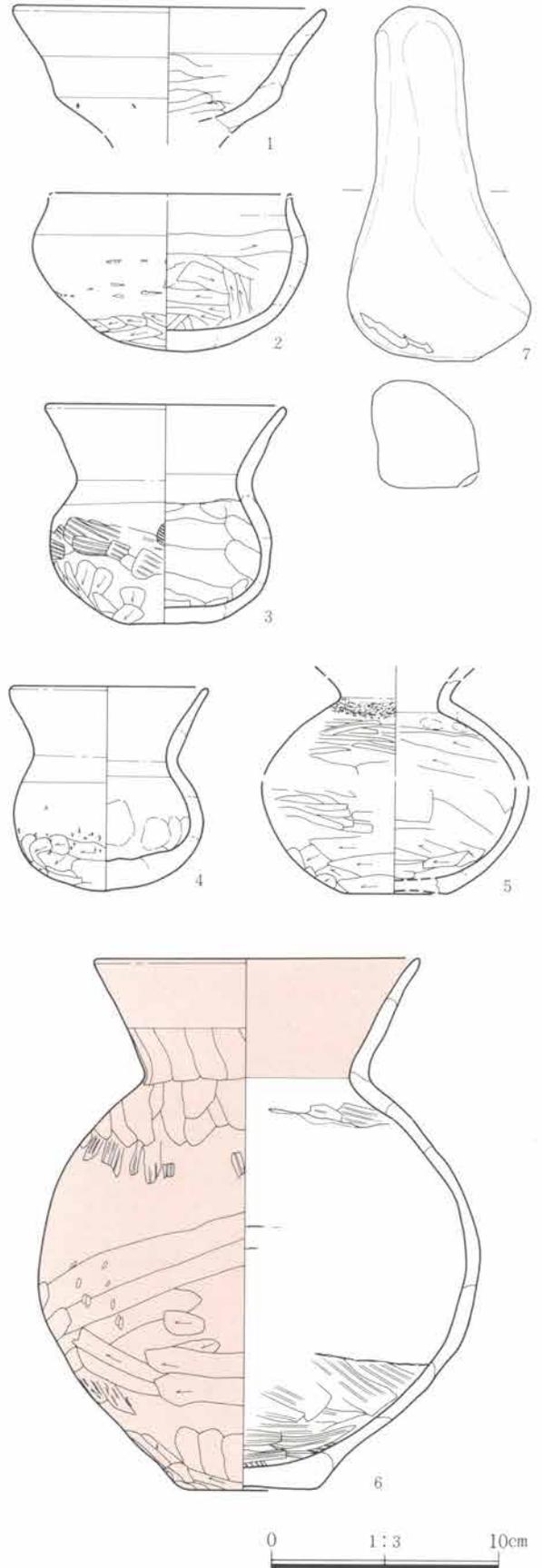
面積 不明 方位 不明

床面 調査し得た範囲では、ローム土を9~18cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。特に堅固な面は認められない。

炉 所属時期が5世紀前半であることからみて、炉付き住居であることは確実であるが、攪乱によって検出できなかった。

柱穴 1本検出されたのみである。柱穴の規模は、直径29×深さ42cmである。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏1、壺2、埴2、高坏1の合計6点が出土している。No.1・5・6は床面に密着して、他は床面から5cm以上浮いて出土した。（遺物観察表：93・94頁）



第217図 2区56号住居と出土遺物

(2) 墳 墓

円形周溝墓と円墳が各1基検出されているのみで、両遺構ともに2区の中で最高位の地点に選地している。後世の削平や攪乱により、盛り土および主体部などは残存せず、地表面からの観察ではその存在を確認することはできなかった。また円墳については、1938（昭和13）年に編纂された上毛古墳総覧に未登載の古墳である。伴出遺物を持たないために時期については確定できないが、それら遺構の周辺より古墳時代初頭の石田川式の土器片や6世紀後半の円筒埴輪の破片が出土しており、円形周溝墓については石田川式に、円墳については6世紀後半にそれぞれ比定される可能性が高い。

2区1号周溝墓

位置 L-11グリッド 写真 PL-95

重複 2区26号住居に後出する。

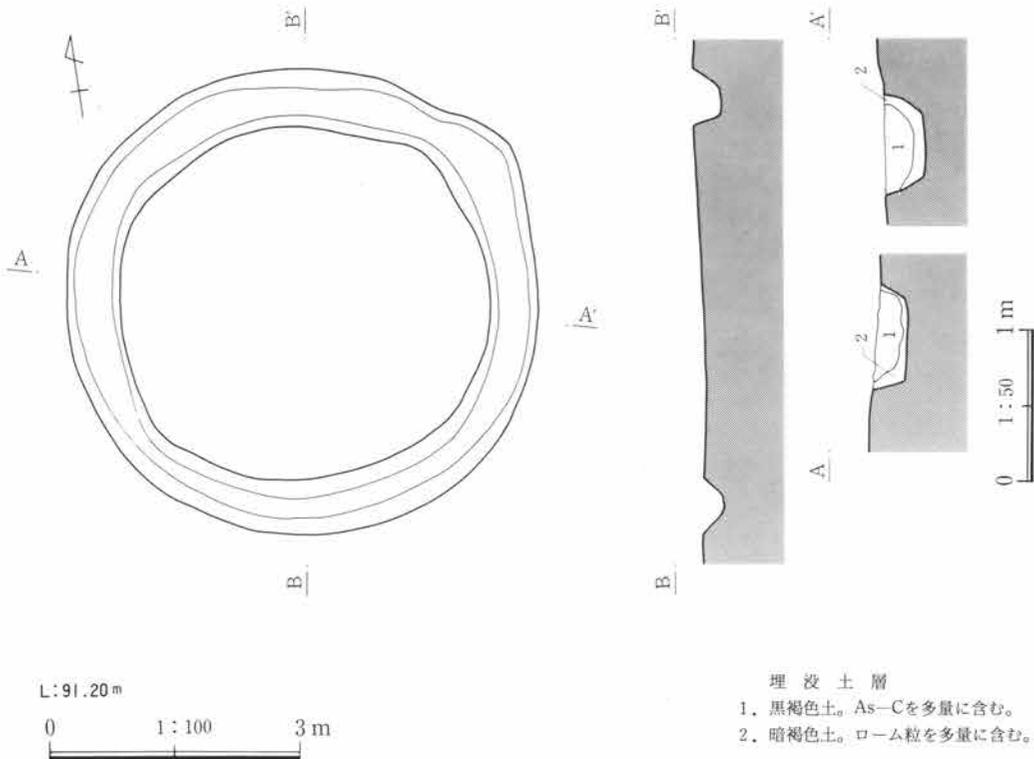
形状 小規模な周溝墓であり、平面形は円形を呈する。周堀も含めた規模は、直径6.2mで、台状部は直径4.7mである。

面積 台状部：74.43㎡ 全形：124.86㎡

周溝 断面形は逆台形状を呈する。規模は上幅58～100cm、底面幅16～65cmである。溝の掘り込みの深さは27～36cmであり、底面の勾配はほとんどなく、水平に近い。法面の勾配は、50～70°である。周溝内には暗褐色土がレンズ状に堆積しており、自然埋没の状態を示す。

遺物 周溝内より縄文時代の石皿の破片が出土したのみであり、当周溝墓の時期を決定できるような遺物の出土は認められなかった。

備考 台状部には盛り土および主体部の掘り込みを検出することはできなかった。当周溝墓の調査区内における立地は、2区1号古墳と同様に丘陵の頂部に近い標高90.80mに位置しており、より高位の地点を選定して立地しているものと推定される。



第218図 2区1号周溝墓

II 調査の内容

2区1号古墳

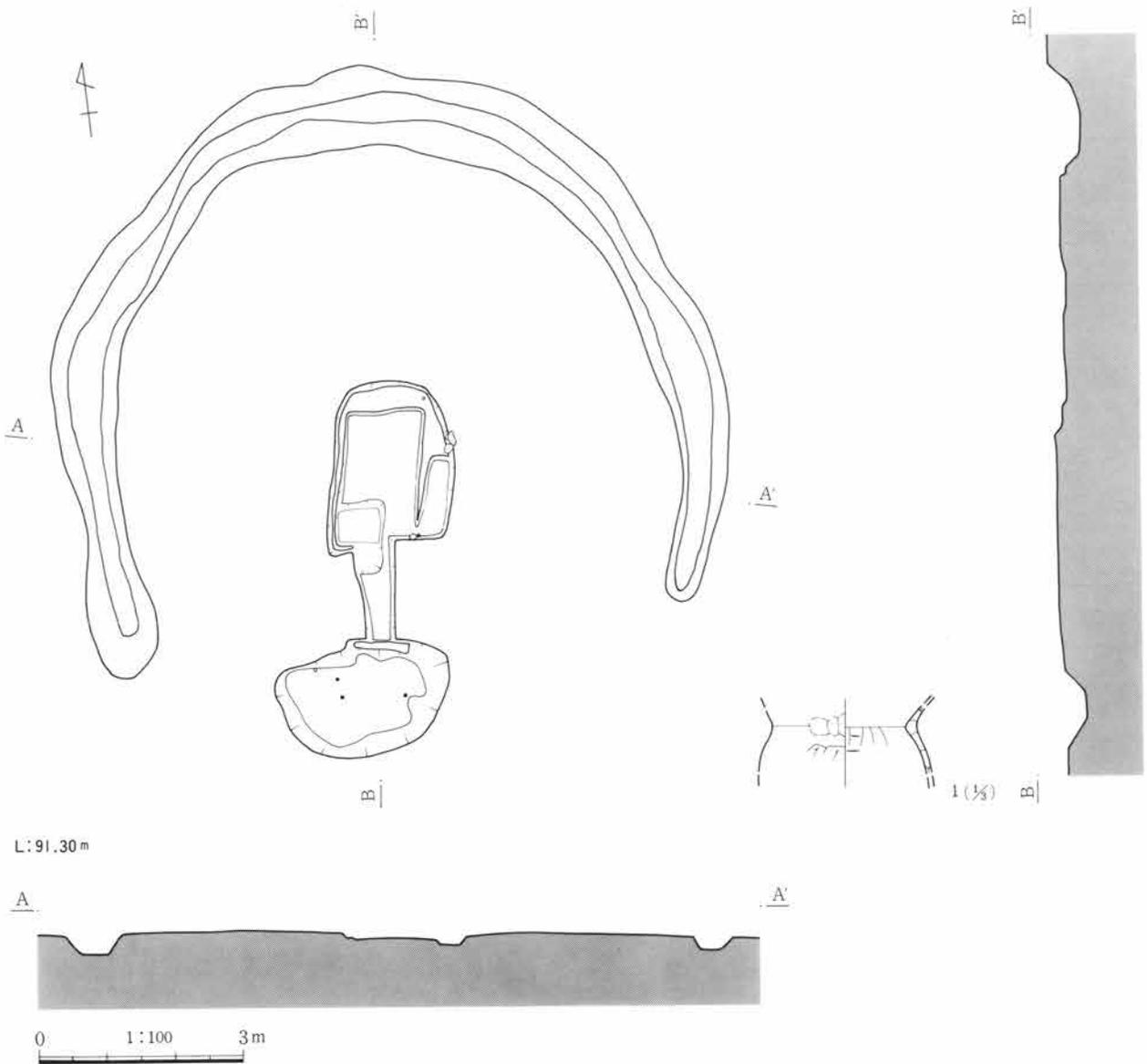
位置 J-15グリッド 写真 PL-96

墳丘と外部施設 周堀と前庭および主体部の掘り方を残すのみであり、墳丘や主体部の石室等は後世の攪乱により、破壊されている。周堀を含めた規模は、東西軸、南北軸ともに10mである。また、周堀を除いた墳丘部の規模は、東西軸8.2×南北軸7.2mである。周堀は前庭部の両脇で途切れ、全周していない。周堀の規模は、上幅0.56~1.20m、深さ0.2~0.3mであり、底面の勾配は少なく、ほぼ平坦に掘り込まれている。断面形は弧状を呈する。石室羨道部手前には、長径2.6×短径1.7m、深さ0.45mの前庭状の掘り込みがある。遺物は周堀

内より甕の破片1点が出土したのみ。

主体部の構造 石室底面の石敷きを残すのみで、他の石室および羨道部の用石は総て抜去されているために、主体部の構造は不明である。石室底面の石敷きは、直径10cm前後の輝石安山岩の河床礫を用材としている。主体部の掘り方の規模は、全長3.7mであり、玄室部は東西幅2.3×南北幅2.3m、羨道部は長さ1.3×幅0.4~0.6mである。掘り方の深さは、10cm前後と浅い。主体部の主軸方位はおおよそN-3°-Wである。

出土遺物 周堀内より甕の破片1点が出土したのみである。
(遺物観察表：94頁)



第219図 2区1号古墳と出土遺物

(3) 土 壙

1区から3基、2区から15基の合計18基が検出された。2区では沖積地に面した南東斜面に集中しており、竪穴住居と重複するものはない。遺物を伴出する土壙は1区1～3号、2区17・20・21号で、古墳時代中期の竪穴住居と同時期に比定されるが、他の土壙は遺物を伴わないために時期不明である。ただ、各土壙内の埋没土が竪穴住居の埋没土と類似することから、竪穴住居と併存した可能性が高い。また各土壙の性格については判明しないが、埋没土はいずれも自然堆積の状態を示しており、人為的に埋めもどされたものはない。各土壙の規模・形状については、第1表に一括して記載しており、特徴的な土壙について、概括的に説明を加える。

1区の土壙 1～3号土壙の3基のみであるが、各土壙ともに遺物を伴出し、黒褐色土(Ⅲ層)上面にて検出された。土壙内には褐色土がレンズ状に堆積し、自然埋没の状態を示す。1号の平面形は長方形を呈し、四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。2号土壙とともに、埋没土の上層より土器片が出土している。3号土壙からは、ほぼ完形のNo.1とNo.2の坏が2点出土しているが、これらは土壙の確認面でNo.1の上位にNo.2が乗って入れ子の状態で出土した。

2区の土壙 15基の土壙が検出されているが、古墳時

代の竪穴住居と重複しているものはなく、15・17～19号土壙を除いた他の土壙は、調査区の南東隅に集中している。南東隅の土壙は平面形が円形を呈し、直径0.5～1.0m、深さ30cm以内の小規模なものが多い。

15号土壙は掘り込みの浅い台形状の土壙で、東壁際の底面の直径1mの範囲は火熱を受けて焼土化し、それ以外の底面には炭化物粒が多量に認められた。17号土壙は規模の大きな隅丸方形の土壙であり、底面はほぼ平坦に掘り込まれている。内部は褐色土を主体に自然埋没している。18号土壙は正方形に近い隅丸方形を呈し、底面の中央部に直径1.1m、深さ0.3mの小ピットが存在する。竪穴住居に匹敵する規模をもつもので、炉や柱穴をもたない5区3・5号住居に類似するが、掘り込みが1.32mと深く、底面の中央部に掘り込みをもつなどの点で相違しており、とりあえず土壙として分類しておく。19号土壙は黒褐色土を主体に自然埋没している。調査期間の都合により図化し得ていないが、55号住居の南側に近接している20・21号土壙からは、坏をはじめとした多数の土師器が出土している。両土壙とも直径50cm、深さ10cm程の小規模なものであり、他の土壙とはその性格を異にすると推定される。17号土壙では、埋没土の上層より甕の底部破片が1点出土している。(PL-97、遺物観察表：94～96頁)



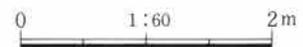
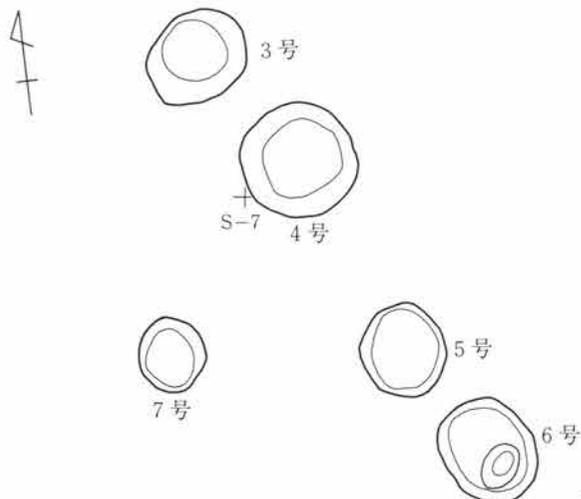
8号



9号

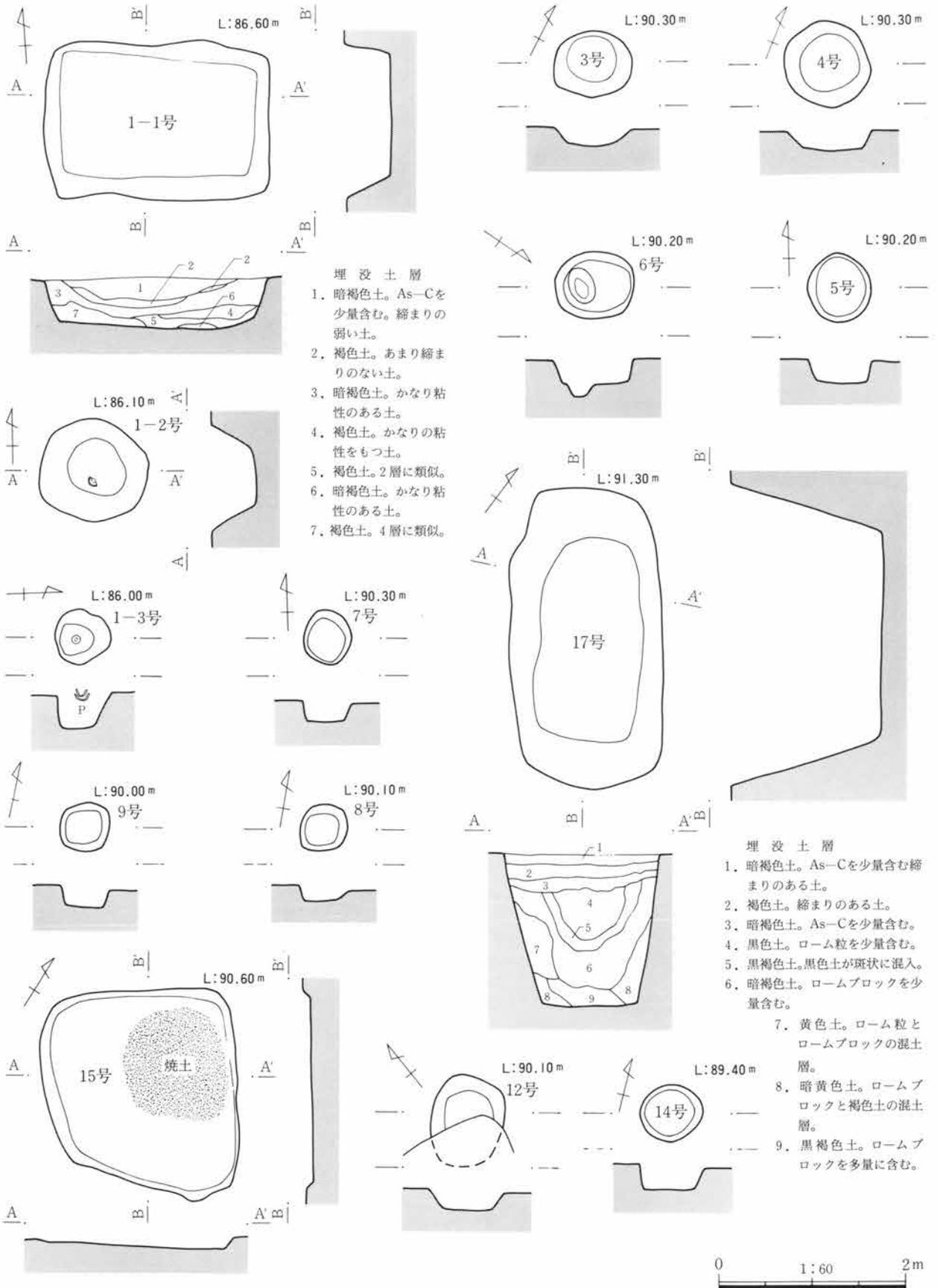


T-7



第220図 2区の土壙の位置

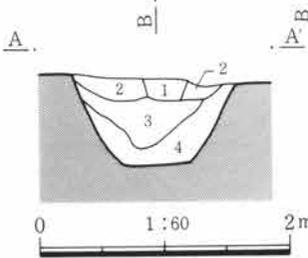
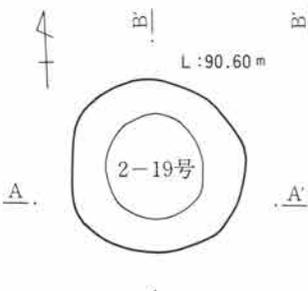
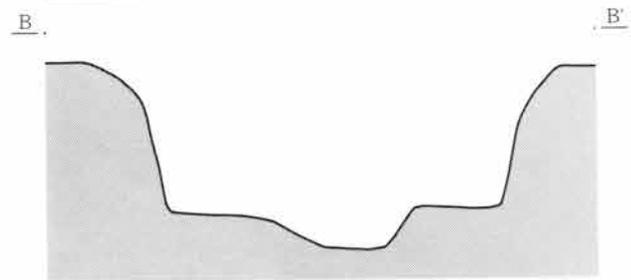
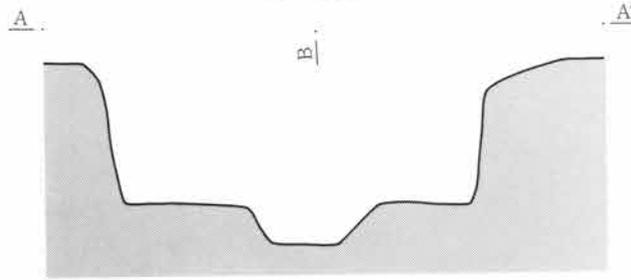
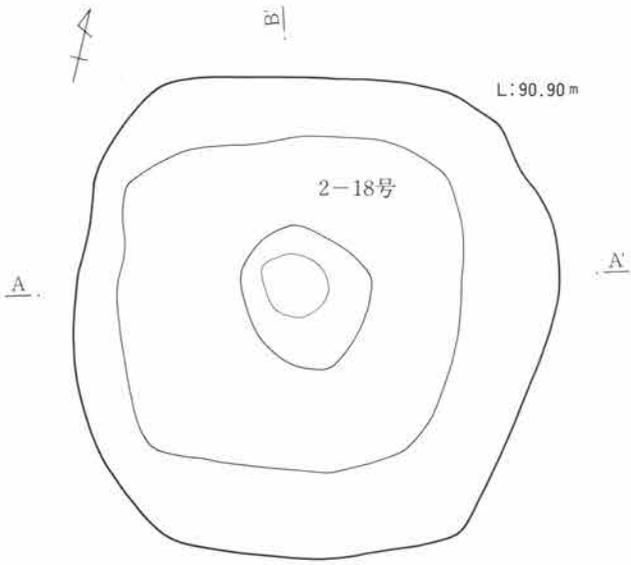
II 調査の内容



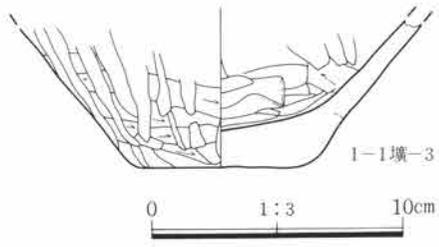
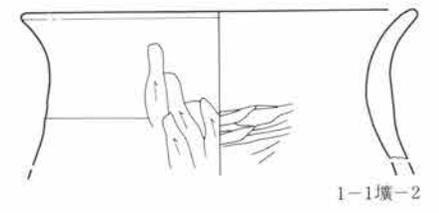
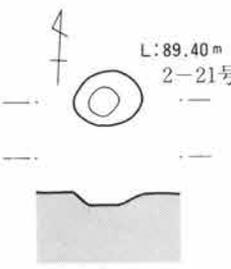
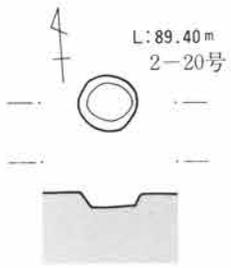
第221図 1・2区の土壌

第1表 1・2区土壌の規模一覧 (単位:m)

番号	位置	形態	規模 (①直径②深さ)
1区1号	A-21	長方形	①2.40×1.63 ②0.57
1区2号	C-11	円形	①1.15 ②0.45
1区3号	C-11	円形	①0.60 ②0.34
2区3号	S-7	円形	①0.85×0.70 ②0.21
2区4号	S-7	円形	①0.92×0.90 ②0.22
2区5号	S-6	円形	①0.74×0.70 ②0.26
2区6号	S-6	円形	①0.85×0.70 ②0.27
2区7号	R-6	円形	①0.59×0.52 ②0.23
2区8号	S-7	円形	①0.51 ②0.18
2区9号	S-7	円形	①0.52 ②0.24
2区12号	O-5	円形	①0.78 ②0.23
2区14号	Q-5	円形	①0.69 ②0.27
2区15号	M-8	不整形	①2.19×2.10 ②0.16
2区17号	I-11	長方形	①3.20×1.64 ②1.67
2区18号	H-16	隅丸方形	①3.90×3.80 ②1.32
2区19号	O-14	円形	①1.38 ②0.77
2区20号	R-5	円形	①0.48 ②0.12
2区21号	R-5	円形	①0.55×0.45 ②0.11

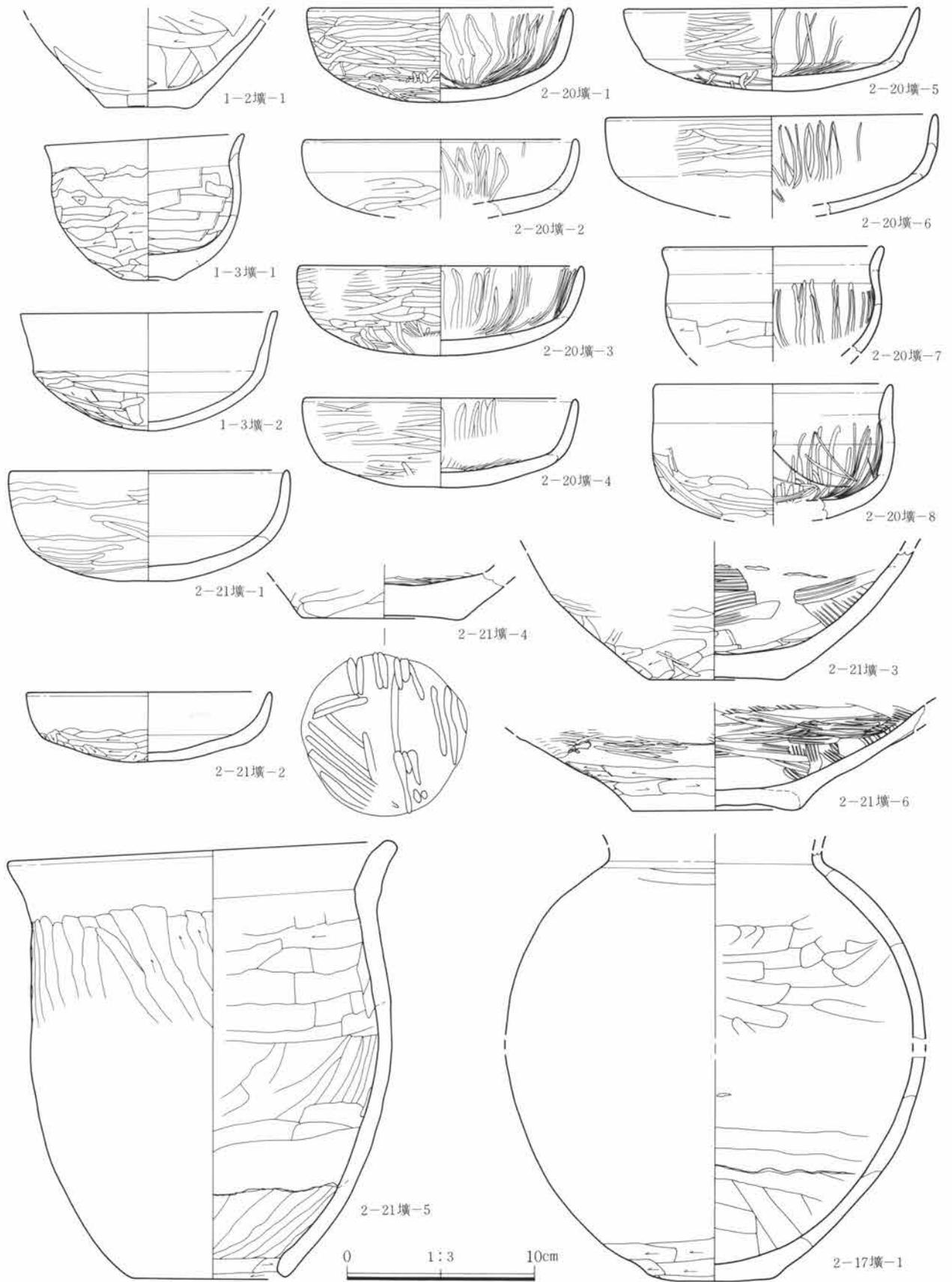


- 埋没土層
1. 黒色土。As-Cを含む。
 2. 黒褐色土。
 3. 黒褐色土。締まり弱い。
 4. 暗褐色土。ローム粒を少量含む。



第222図 1・2区の土壌と出土遺物

II 調査の内容



第223図 1・2区の土壌出土遺物

(4) 掘立柱建物遺構

1区に近接した2区の南側緩斜面より、1棟が検出されたのみである。伴出遺物を持たないために時期不明で、竪穴住居との関係も不明である。建物の向きは方位をあまり意識しておらず、長軸が地形の等高線に対してほぼ直交するように配置されている。

2区1号掘立柱建物

位置 J-4グリッド

形状 長軸を南北にもつ2×1間の建物で、築行3.7×桁行1.8mの規模をもつ。各桁間には柄柱が存在する。各柱穴の規模は直径18～43cm、深さ8～42cmで、柱痕は検出できなかった。

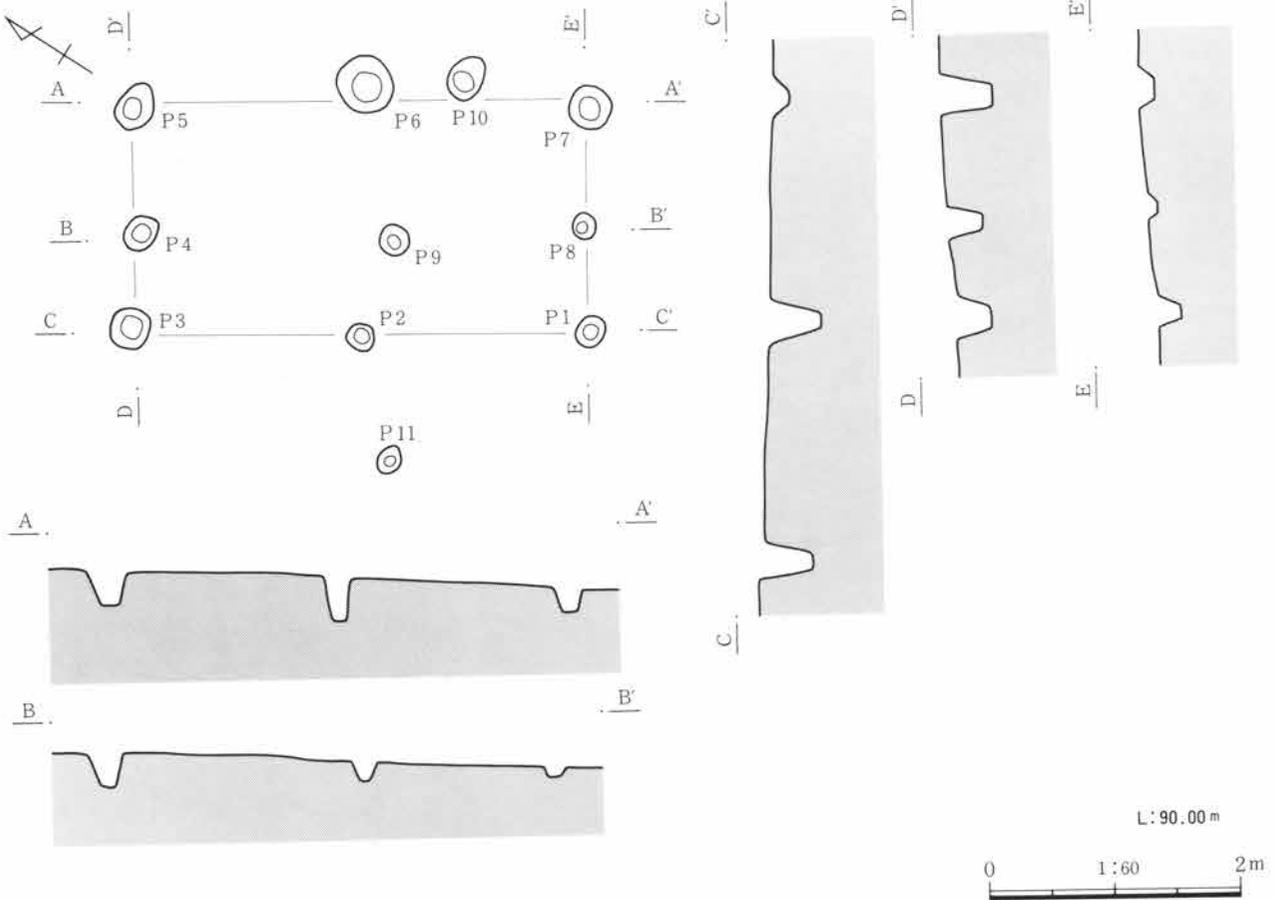
方位 N-54°-E

備考 伴出遺物がまったく存在しないために、時期については特定できない。

第2表 2区1号掘立柱建物の規模一覧

柱間間隔	番号	柱穴の規模		
		直径	深さ	
P ₁ -P ₂	1.84	P ₁	0.22	0.18
P ₂ -P ₃	1.86	P ₂	0.22	0.34
P ₃ -P ₄	0.79	P ₃	0.34	0.27
P ₄ -P ₅	1.00	P ₄	0.26	0.26
P ₅ -P ₆	1.90	P ₅	0.30	0.42
P ₆ -P ₇	1.82	P ₆	0.43	0.42
P ₇ -P ₈	0.95	P ₇	0.32	0.12
P ₈ -P ₁	0.84	P ₈	0.18	0.08
P ₈ -P ₉	1.54	P ₉	0.24	0.16
P ₉ -P ₄	2.06	P ₁₀	0.28	0.18
P ₂ -P ₉	0.79	P ₁₁	0.17	0.12
P ₉ -P ₆	1.25			
P ₆ -P ₁₀	0.79			

(単位：m)



第224図 2区1号掘立柱建物

II 調査の内容

(5) 溝状遺構

2区より1条が検出されたのみである。その時期については、埋没土中から少量の土器片の出土がみられるものの、伴出遺物とするに足る状況ではないことから、確定できていない。またその性格についても判明しないが、溝内の埋没土を観察した限りでは、ともに流水の痕跡は認められないことから、少なくとも用水路的な性格はもっていないと判断される。

2区1号溝 台地の末端をほぼ東西に横断しているが、その走行はL-6グリッド付近で長さ4mにわたって途切れ、若干蛇行しながら西端部で2つに分岐している。残存状態の良い箇所での断面形は、法面勾配が約60°の逆台形状を呈する。またその規模は、確認延長105m、上幅0.40~2.40m、下幅0.15~0.85m、深さ0.10~0.40mである。底面の勾配は一定しておらず、I-6グリッド近辺を最高位として、東および西側の両方向へと低下している。こうした底面勾配の在り方は、溝全体が地形に即してある程度の深度を確保するよう

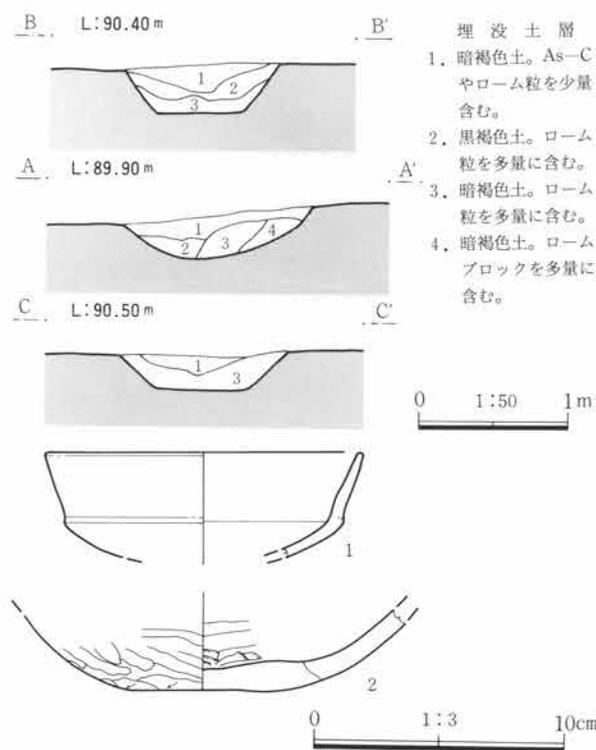
に掘削されたことを示すものであろう。溝内の埋没土は、上層にAs-Cを含む黒褐色土が、下層にはロームブロックを含む暗褐色土がレンズ状に堆積し、自然埋没の状態を示す。遺物としては、埋没土中より出土した坏・甕の破片各1点がある。掘削の時期については、重複関係にある5世紀後半の14・15号住居に後出することから、少なくともそれ以降の時期に属することは明らかである。 (遺物観察表：96頁)

(6) 包含層の出土遺物

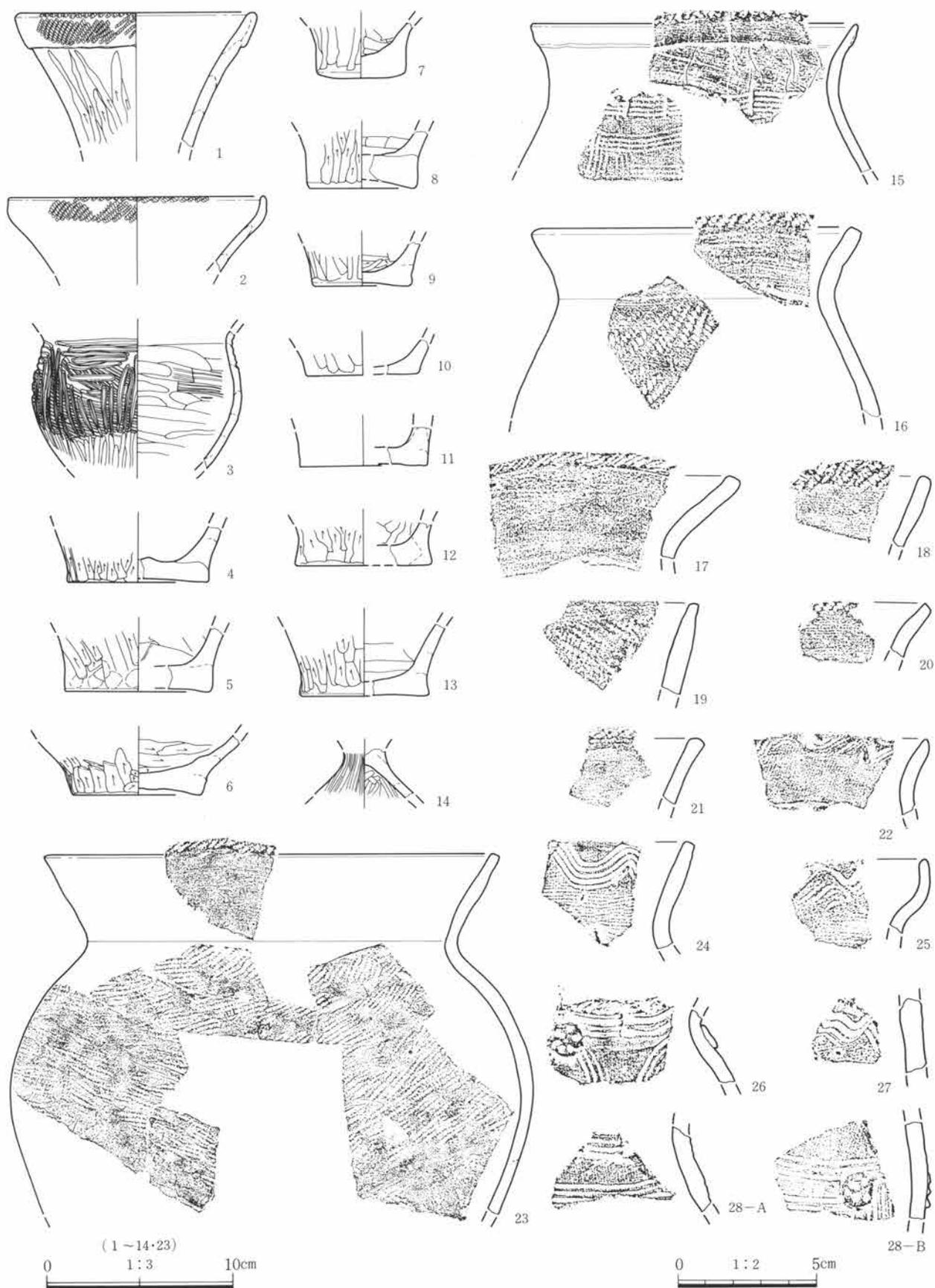
当遺跡では、後世の耕作等による土壌攪乱もあり、弥生時代以降の明瞭な遺物包含層は存在しない。本項で扱う遺物は、表土のI層中に包含されていたものや、明確に時期の異なる遺構から出土したものを主体とする。(P L-98~100・125、遺物観察表：96~102頁)

弥生時代の遺物は、土器を中心に特徴的な太型蛤刃石斧が2区より出土しているが、それらのほとんどが5軒の弥生時代の竪穴住居に近接した19軒におよぶ古墳時代中期の竪穴住居の埋没土中より出土している。これらの遺物は時期的に弥生時代中期末葉に比定され、同時代の竪穴住居から出土した弥生土器とも共通していることから、それらの竪穴住居の周辺に散在していたものが、古墳時代の竪穴住居の構築・廃絶に伴ってその内部に混入したものであると思われる。総個体数では約200余点が検出されている。

古墳時代の遺物はI層内より出土したものが多く、No89~94・97などは2区の東側に位置する今井沼の堤の崩落土(U-8グリッド付近)より集中して出土したものであり、住居等の遺構に伴う一括遺物の可能性が高い。竪穴住居等の遺構からの出土はみられなかった、S字状口縁をもつ石田川式期の台付甕の破片が10余点検出されているが、これらも古墳時代中期の2区24・30号などの竪穴住居内から出土したものが多く、これらの竪穴住居は1号周溝墓の周辺に位置しており、同周溝墓に伴う遺物が流れ込んだ可能性もある。また同様に、1号古墳と近い位置にある2区53号住居の埋没土内より、No114の円筒埴輪の破片が出土しているが、これも1号古墳と関係する遺物であろう。

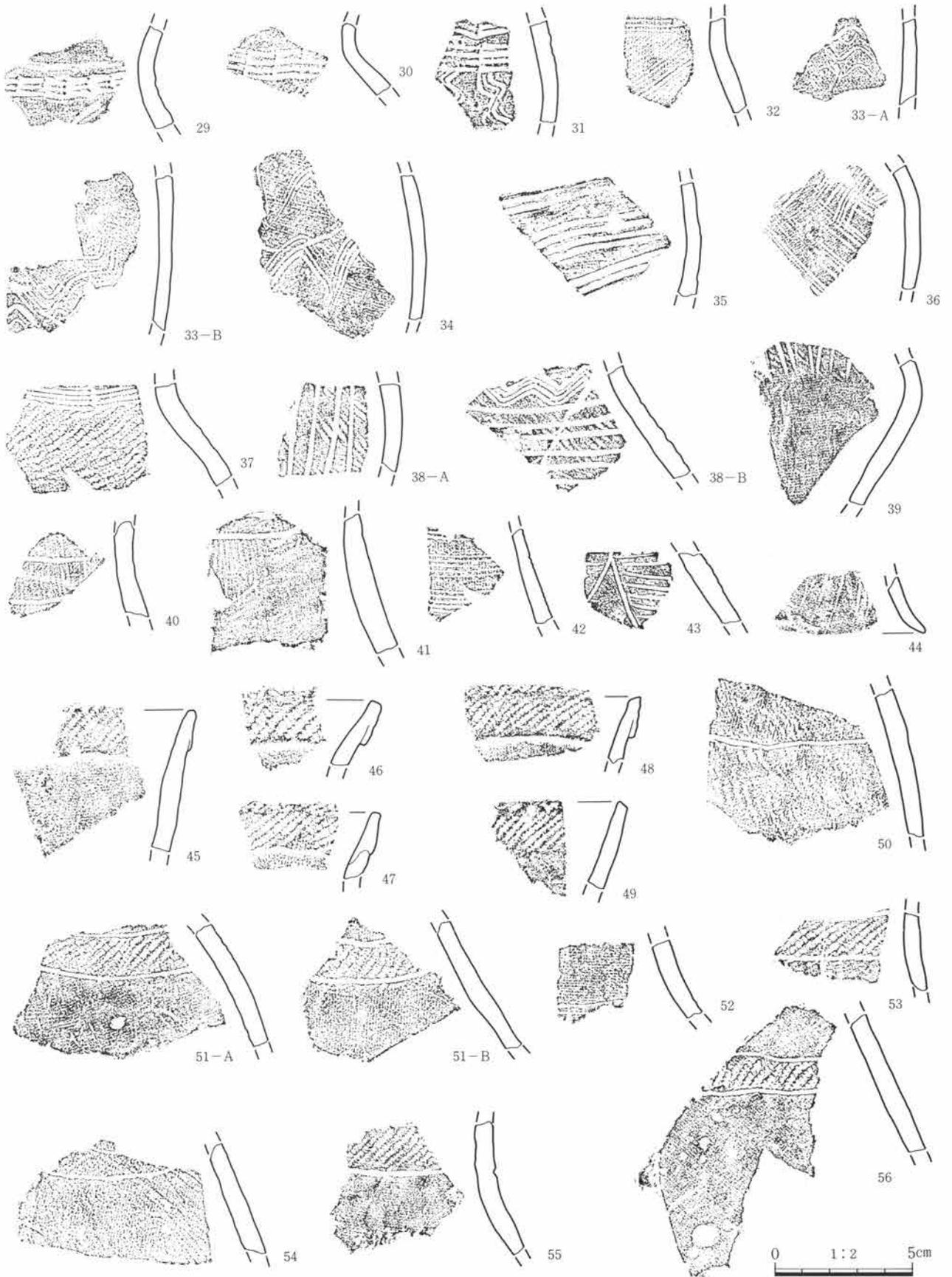


第225図 2区1号溝と出土遺物

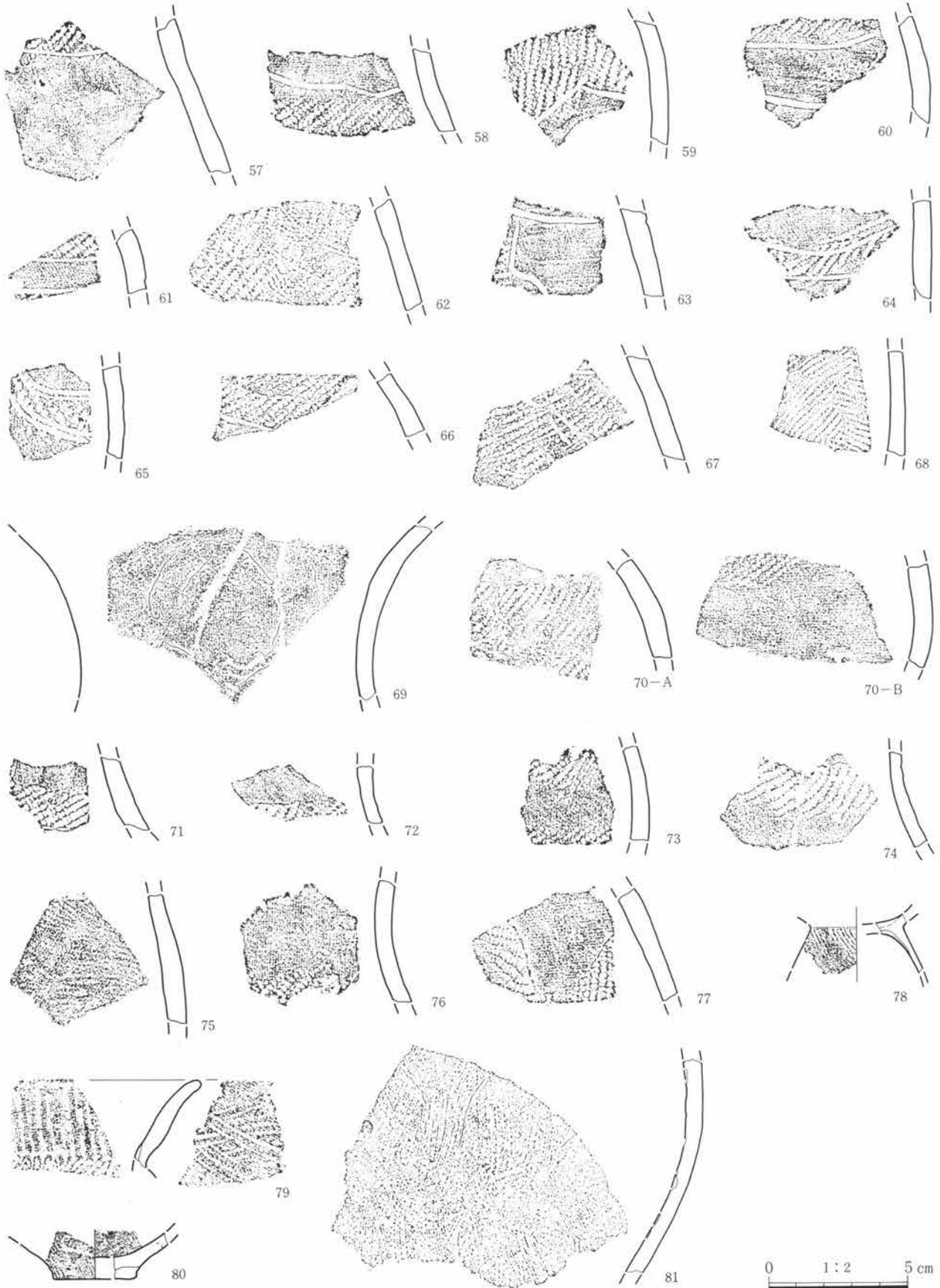


第226図 包含層の出土遺物(1)

II 調査の内容

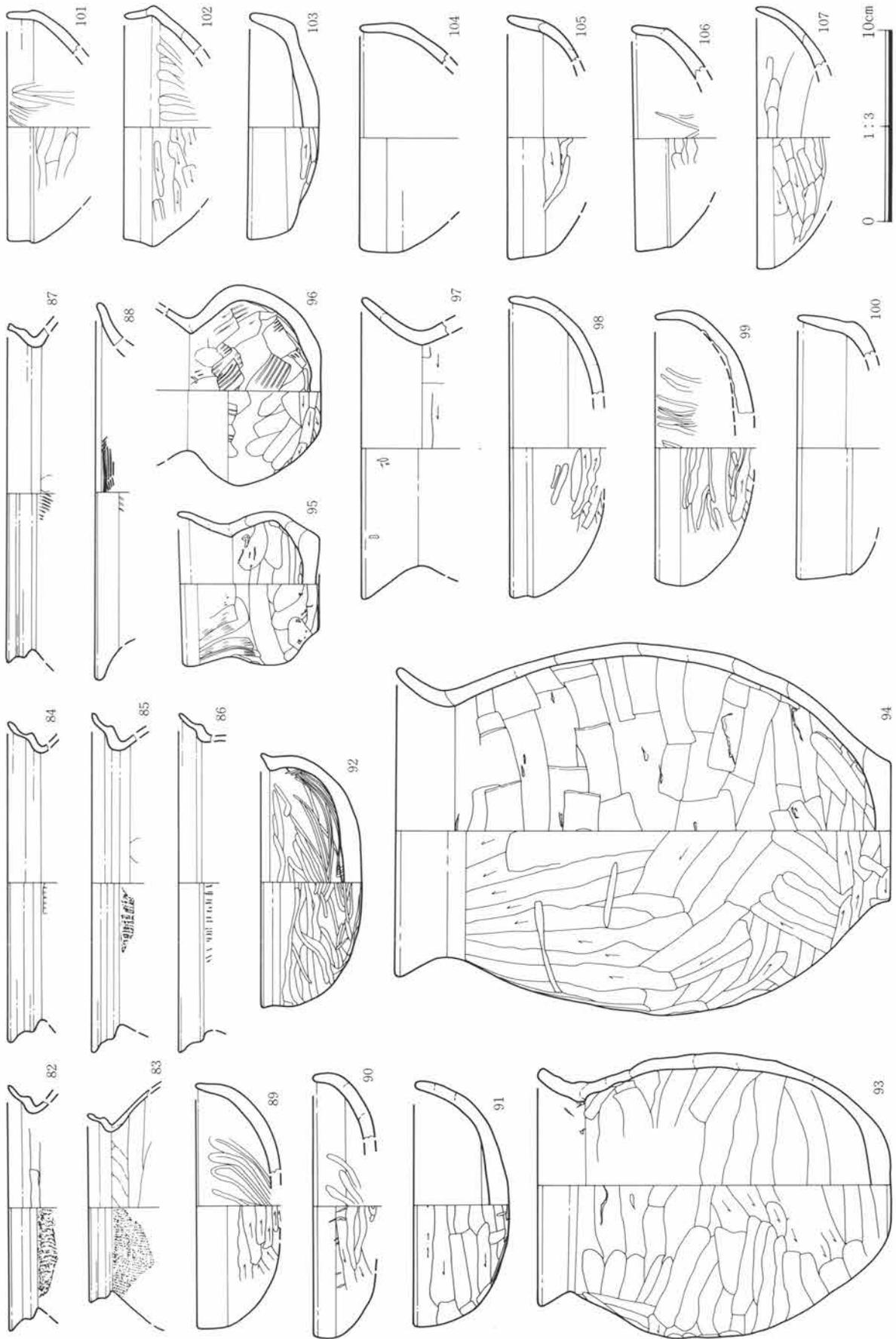


第227図 包含層の出土遺物(2)

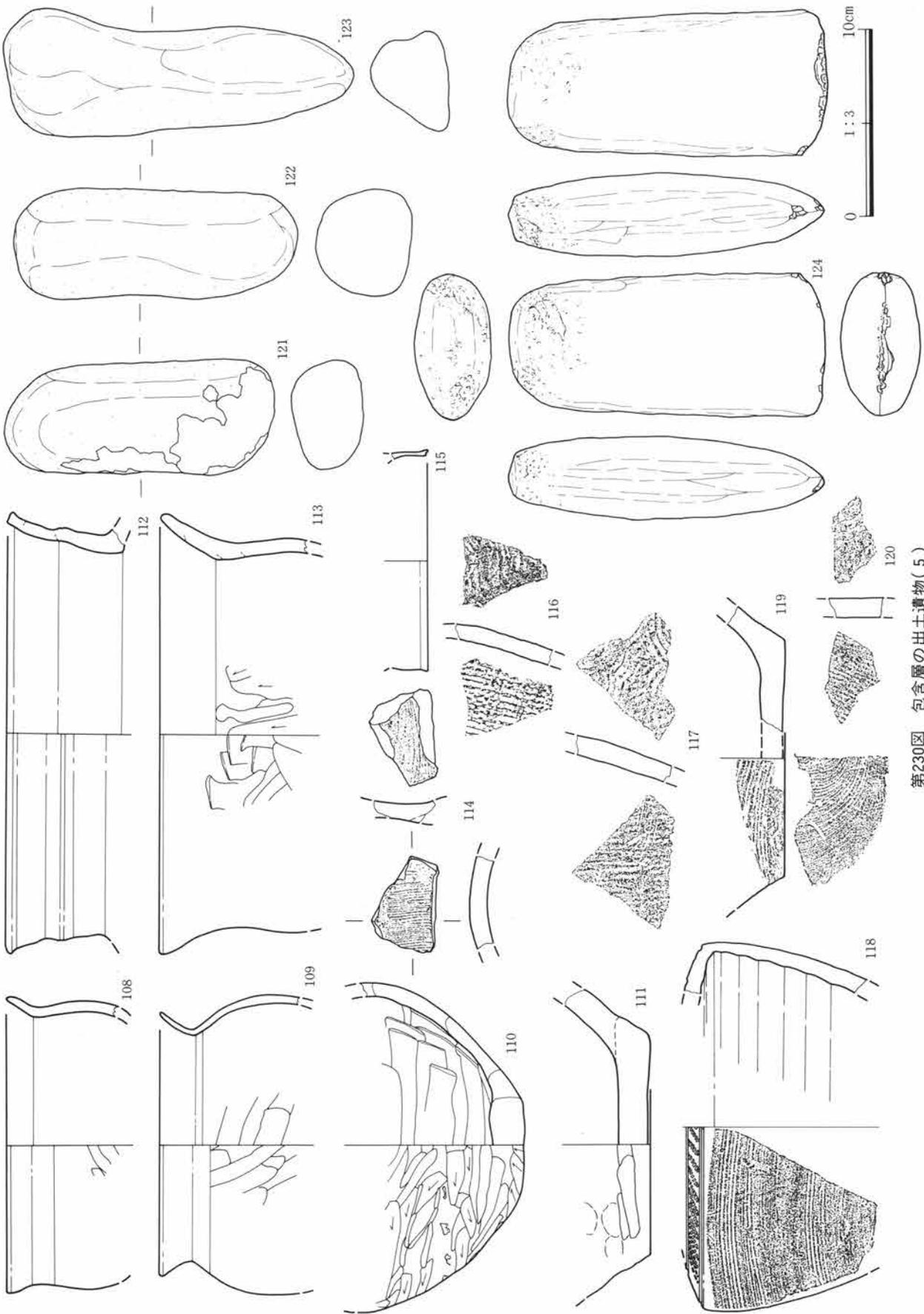


第228図 包含層の出土遺物(3)

II 調査の内容

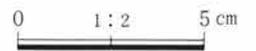
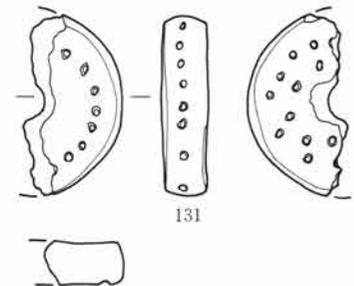
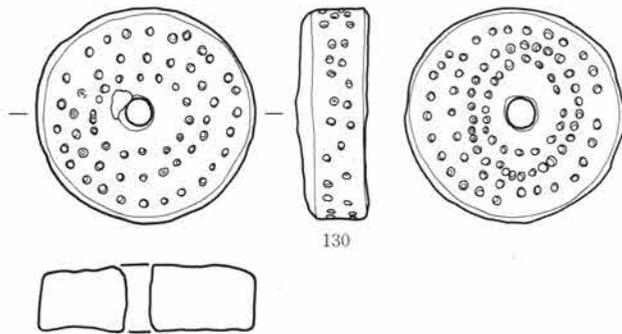
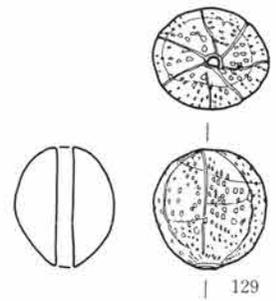
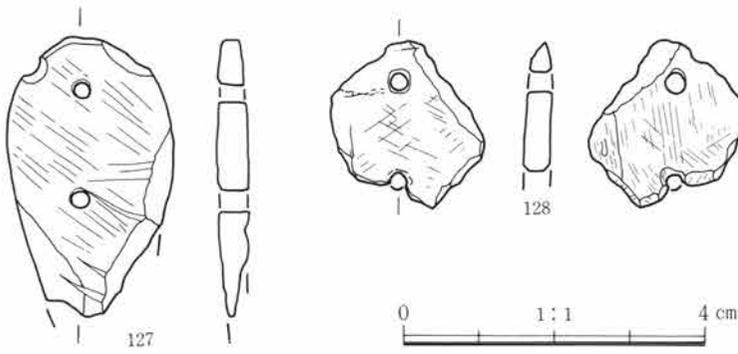
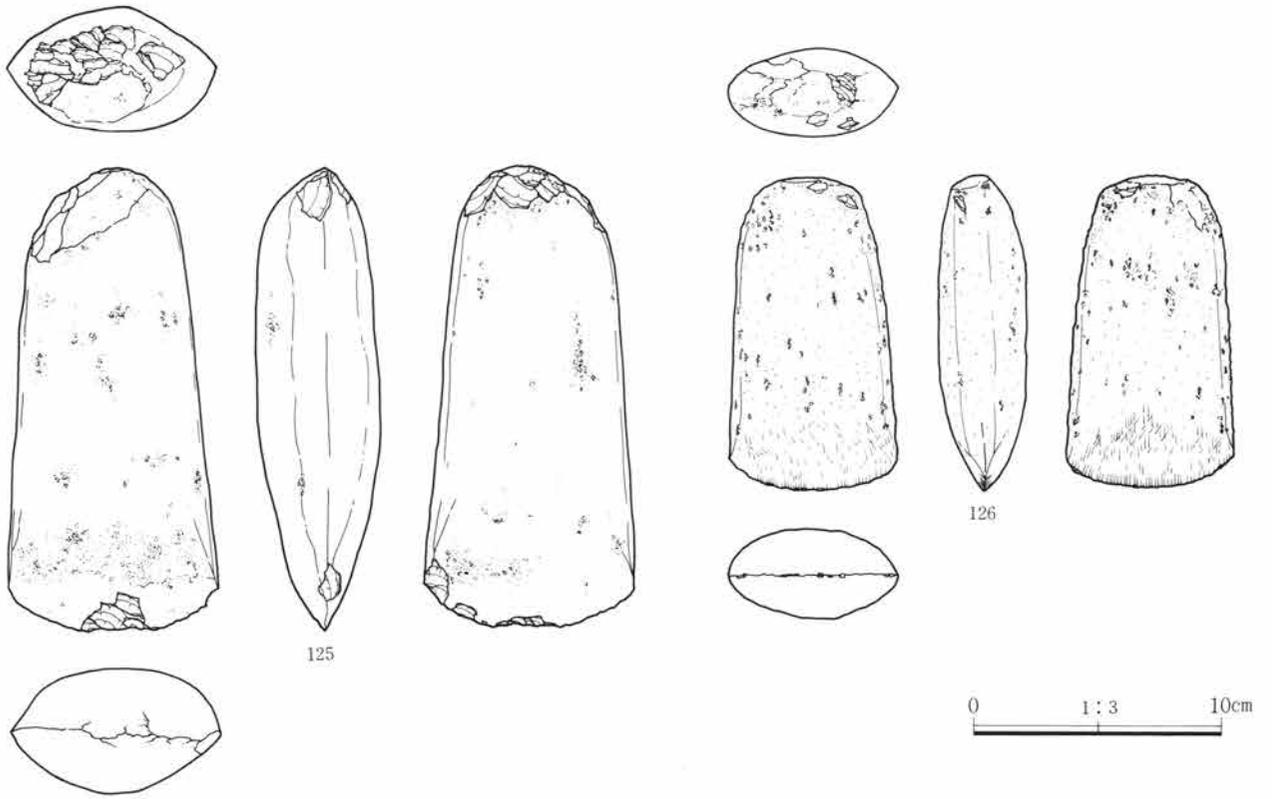


第229図 包含層の出土遺物(4)



第230図 包含層の出土遺物(5)

II 調査の内容



第231図 包含層の出土遺物(6)

2 3・5区の遺構と遺物

沖積地を隔てて1・2区の東側の台地に立地する両区は、1・2区と同様に生活道を挟んで南北に接し、東西100m、南北250mの範囲の内の約14,000㎡について調査された。検出された遺構は奈良～平安時代の竪穴住居10軒と土壇8基、14世紀代の墓(土壇)12基と定期的にそれと並行する可能性の高い掘立柱建物遺構2棟、そのほかに時期の判定できない掘立柱建物遺構1棟である。調査面積に比べて遺構の分布は疎であるが、3区では奈良～平安時代の遺構が東側の小規模な開析谷沿いに、中世の遺構は今井沼の存在する西側の沖積地沿いに集中している。

(1) 竪穴住居

9軒が検出されている。平面形はいずれも長方形を基調とし、長辺が4m弱と小規模である。住居内の施設には、竈や柱穴および貯蔵穴が認められるが、5区1・4・6号住居は明確な柱穴を持たない。1・2区の古墳時代中期の竪穴住居に比べて、各住居とも出土遺物は貧弱であるが、5区2号住居からは「當」「吉」「十」を墨書した坏が、5区4号住居からは「寺」を墨書した須恵器の坏蓋がそれぞれ出土している。これらの住居の時期は、出土した土器の年代から判断して8世紀後半～9世紀前半に比定される。

一方、3区2号住居や5区3・5号住居は、炉や竈などの厨房施設をもたないもので、機能的に他の竪穴住居とは異なっていると思われるが、方形に掘り込んで底面を平坦にすることやその規模などの点で他の竪穴住居と変わりが無く、とりあえず住居として扱っておきたい。これらの所属時期については、3区2号住居は埋没土の上層にAs-Bが堆積し、中層からは8世紀後半の布目瓦の破片が出土していることから、少なくとも1108年以前であることは確実であり、可能性としては8世紀代にまでさかのぼると想定される。また、5区3・5号住居は伴出遺物が全くないために時期決定ができないが、付属施設の内容が3区2号住居と類

似することや、埋没土の状態が他の竪穴住居ともあまり差がみられないことから、それらの住居と近似した時期に比定されよう。

3区1号住居

位置 E-19グリッド 写真 PL-101

形状 若干歪んでいるが、正方形を基調としていると思われる。四隅は丸く、周壁はわずかに外側へ弧状に膨らむ。規模は長辺3.30×短辺3.18mである。

面積 9.61㎡ 方位 N-12°-E

床面 ローム土を21～42cm掘り込んで床面としている。壁際から中央部に向かって、比高差10～20cmですり鉢状に低くなる。また竈手前は浅い窪地状となる。竈手前や支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

埋没土 上層には黒ボク的な黒色土が、また下層にはロームブロックまじりの黄褐色土がレンズ状に堆積する。自然埋没の状態を示す。

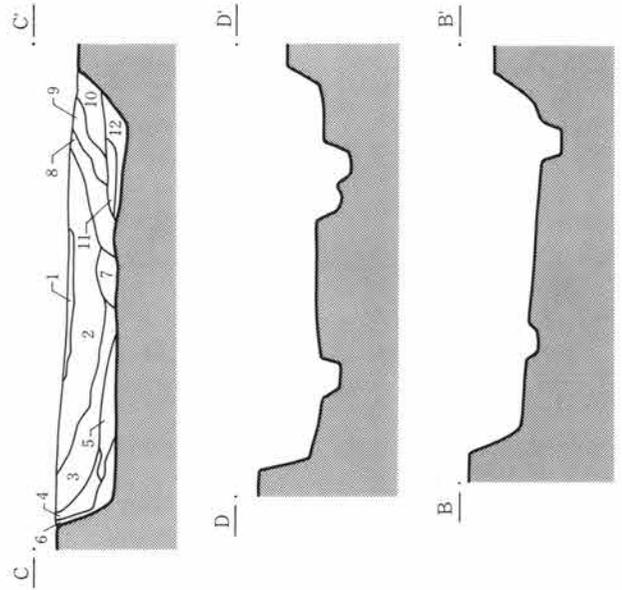
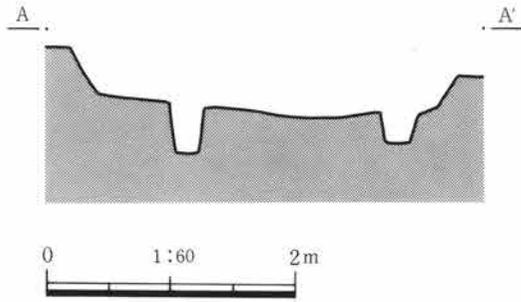
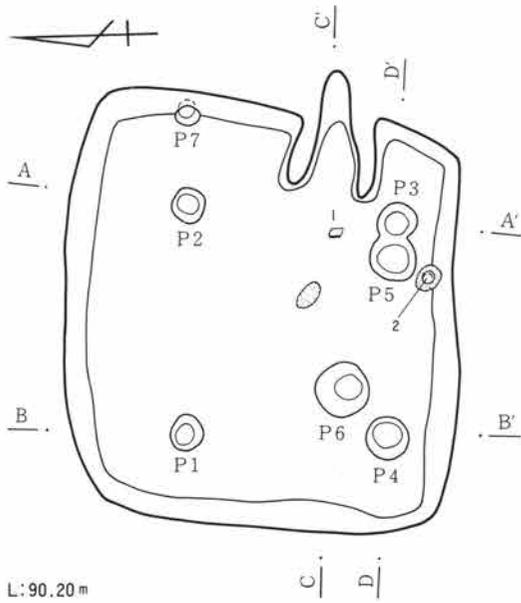
竈 北壁中央部の東側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃烧部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ60cm、幅40cmである。煙道部は幅24cm、長さ39cmの掘り方のみ残存し、燃烧部より約55°の角度で立ち上がる。

柱穴 住居の対角線上に4本の支柱穴と性格不明の3本の小ピットの合計7本が検出された。各支柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その規模は $P_1 \sim P_2 : 1.83\text{m}$ 、 $P_2 \sim P_3 : 1.70\text{m}$ 、 $P_3 \sim P_4 : 1.68\text{m}$ 、 $P_4 \sim P_1 : 1.62\text{m}$ である。各柱穴の規模(径×深さ)は、 $P_1 : 27 \times 10\text{cm}$ 、 $P_2 : 25 \times 40\text{cm}$ 、 $P_3 : 30 \times 23\text{cm}$ 、 $P_4 : 32 \times 15\text{cm}$ 、 $P_5 : 38 \times 20\text{cm}$ 、 $P_6 : 40 \times 19\text{cm}$ 、 $P_7 : 20 \times 42\text{cm}$ である。

遺物 埋没土中からの出土を含め、実測可能な土器は須恵器の坏身1、坏蓋1の2点のみである。床面よりNa1は6cm、Na2は15cmそれぞれ浮いて出土しているが、Na1は5区2号住居の埋没土中より出土した破片と接合関係にある。他に床面中央部と東壁際から、床面より6～10cm浮いて河床礫2点が出土している。

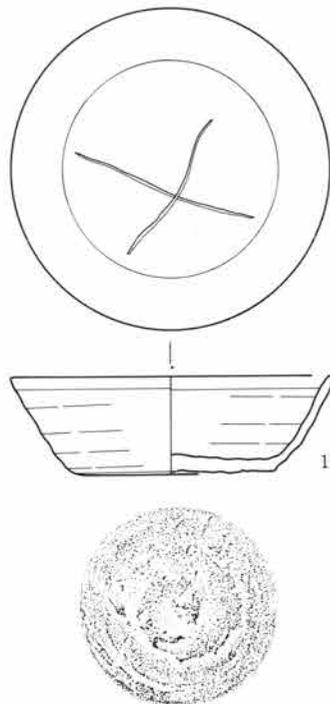
(遺物観察表：102頁)

II 調査の内容



埋没土層

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 1. As-Bの純堆積層。 | 7. 黒褐色土。3層に類似するが、炭化物粒を少量含む。 |
| 2. 黒色土。多量のAs-Cと少量のFAを含む。 | 8. 灰褐色土。As-Cや焼土粒を少量含む。 |
| 3. 黒褐色土。As-Cを少量含む。 | 9. 褐色土。焼土粒を多量に含む。 |
| 4. 暗褐色土。As-Cとロームブロックを少量含む。 | 10. 黄褐色土。ソフトローム粒を多量に含む。 |
| 5. 暗褐色土。4層に類似するが、ローム粒を含む。 | 11. 灰層。 |
| 6. 黄褐色土。ローム粒やロームブロックを多量に含む。 | 12. ローム・焼土・粘土塊・灰などの混土層。 |



0 1:3 10cm

第232図 3区1号住居と出土遺物

3区2号住居

位置 D-8グリッド 写真 PL-102~104

重複 南壁の中央部が風倒木痕によって土壌攪乱をうけている。

形状 風倒木痕による攪乱のために、南壁中央部付近の形状がやや不明確であるが、長軸を東西にもつ長方形を基本形態としている。北壁の中央部から南方へかけて、長さ2.60m、幅15~25cmの規模で地山をブリッジ状に掘り残し、居住空間を東西に二分割している。四隅はやや丸く、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は、ブリッジで仕切られた西側が長辺3.65×短辺2.45mで、東側がそれよりも一回り大きく、長辺4.35×短辺3.70mである。両方を合わせた長辺の最大長は、6.30mである。

面積 (23.90m²) 方位 N-18°-E

床面 ローム土を40~73cm掘り込んで床面としている。周壁に沿ってその30~50cm内側を幅20~50cm、床面からの高さ2~8cmの帯状の高まりが、コ字状に巡っている。その性格については明確ではないが、間仕切りかあるいは周壁際の寝間等の施設に関連した痕跡の可能性が高い。他の床面は若干の凹凸面をもつが、ブリッジで仕切られた東と西側との比高差はほとんどみられず、傾斜の少ない平坦な床面である。叩き床状ほどではないが全体的に堅く踏み固められている。

埋没土 最上層に層厚20cmのAs-Bの純層が堆積する。その直下にAs-Cまじりの黒ボク的な黒色土が、また底面付近や周壁際にはロームブロックを多く含んだ褐色土が、それぞれ堆積する。各層ともレンズ状に堆積して自然埋没の状態を示すが、底面や周壁際のロームブロックを含む埋没土は、竪穴住居の外部に周堤帯状に積まれたものが崩落して埋没したものと推定される。

柱穴 周壁際に6個の小ピットが検出されている。その配列はやや規則性に欠けるが、住居のコーナーや周壁に近接することからみて、柱穴と判断される。各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:26×25cm、P₂:19×22cm、P₃:33×10cm、P₄:20×18cm、P₅:28×18cm、P₆:30×23cmである。

周溝 南壁の風倒木痕周辺では、攪乱により検出されていないが、それ以外の箇所ではブリッジをも含めて幅14~32cm、深さ2~11cmの規模で壁面に沿って全周する。

遺物 床面より20~30cmほど浮いた状態で、布目瓦の破片1点と輝石安山岩の河床礫3点が出土したのみである。(遺物観察表:103頁)

備考 炉や竈等の施設は検出されていない。

3区3号住居

位置 g-30グリッド 写真 PL-105

形状 長軸を南北にもつ若干歪んだ長方形を呈する。四隅は丸く、周壁はわずかに外側へ弧状に膨らむ。北東隅は、わずかに張り出し状となる。規模は長辺3.80×短辺2.85mである。

面積 10.46m² 方位 S-54°-E

床面 ローム土を28~52cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

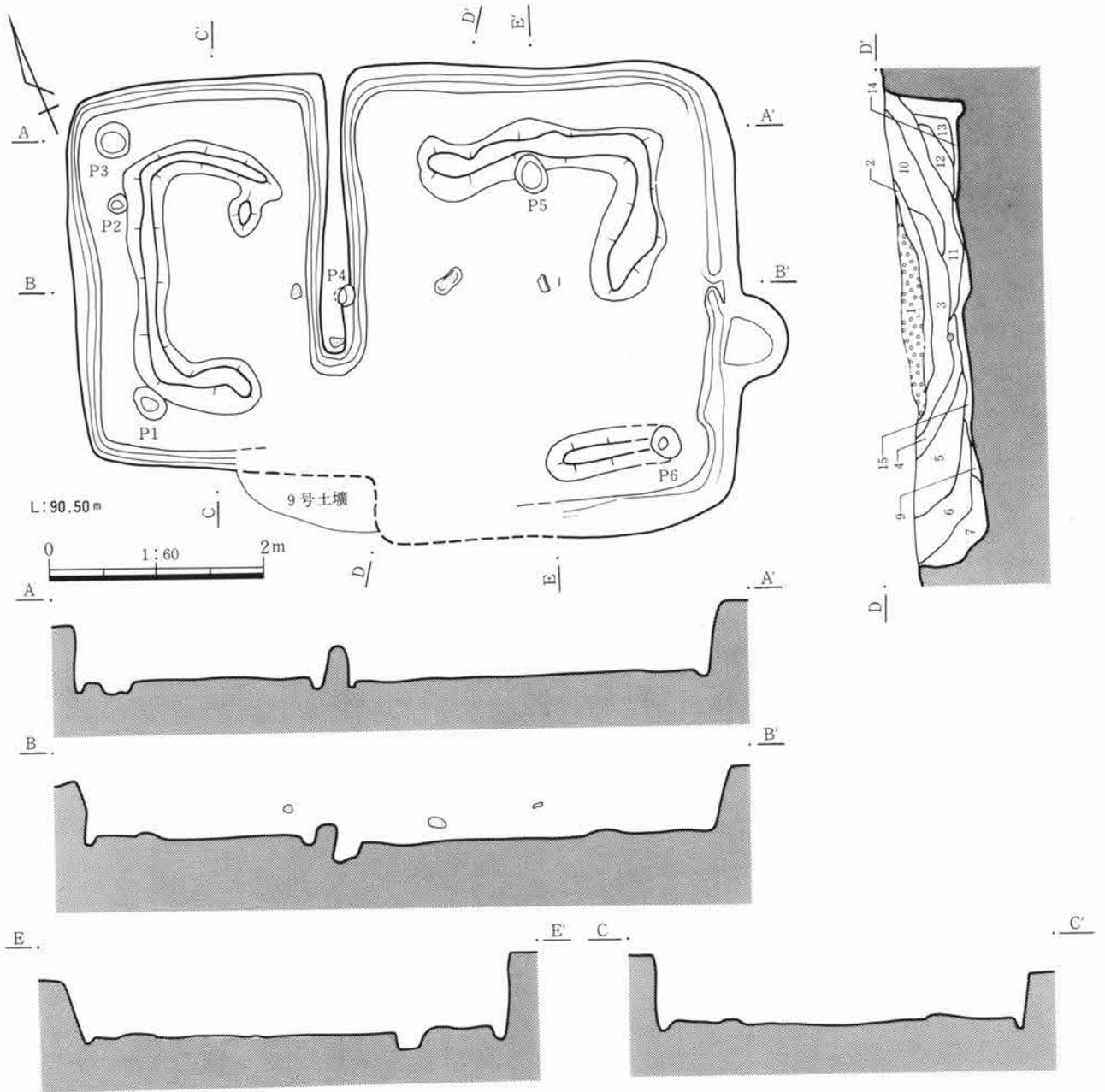
埋没土 上層にはAs-Cまじりの黒色土が、壁際や底面の第1次埋没土にはロームブロックまじりの暗褐色土がレンズ状の堆積をする。自然埋没の状態を示す。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも外側に造り付けられ、その規模は長さ90cm、幅66cmである。両袖部の先端に輝石安山岩の河床礫を立てて、補強材として使用している。また焚口部に長径38×短径20cmの河床礫が1点出土しているが、焚口部の天井部に使用されたものと推定される。煙道部規模は不明であるが、燃焼部より約35°の角度で立ち上がる。

柱穴 住居の対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その距離はP₁~P₂:1.27m、P₂~P₃:1.66m、P₃~P₄:1.21m、P₄~P₁:1.86mである。各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:40×8cm、P₂:40×17cm、P₃:31×13cm、P₄:80×18cmである。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器

II 調査の内容

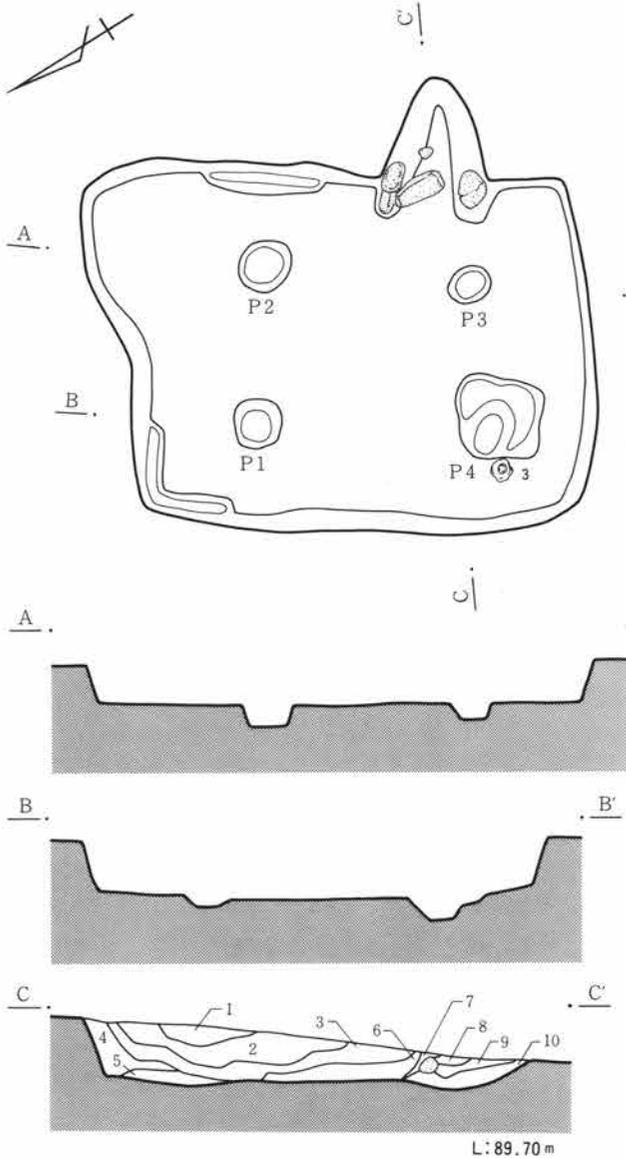


埋没土層

1. As-Bの純堆積層。
2. 黒褐色土。多量のAs-Bや少量のローム粒を含む。
3. 黒色土。As-Cを少量含む。
4. 黒褐色土。多量のロームブロックや少量のAs-Cを含む。
5. 4層に類似するが、色調のやや暗い土。
6. 黒褐色土。As-Cを少量含む。
7. 黒褐色土。ローム粒やロームブロックを多量に含む。
8. 暗褐色土。7層に類似するが、締まりの弱い土。
9. 暗褐色土。8層に類似するが、やや色調の明るい土。
10. 黄褐色土。ロームブロックを多量に含む。
11. 暗褐色土。As-Cを少量含む。
12. 黒褐色土。As-Cを少量含む。
13. 暗褐色土。ローム粒やロームブロックを多量に含む締まりのある土。
14. ローム粒とロームブロックとの混土層。
15. 暗褐色土。13層に類似するが、粘性のある土。11~15層は風倒木によると思われる攪乱層である。

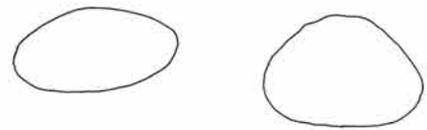
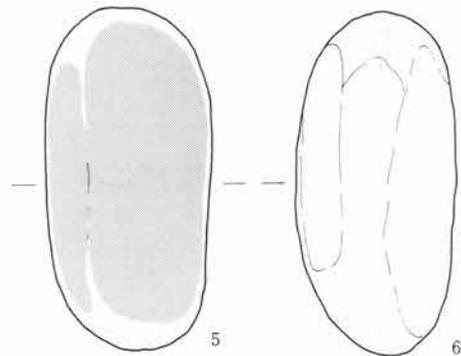
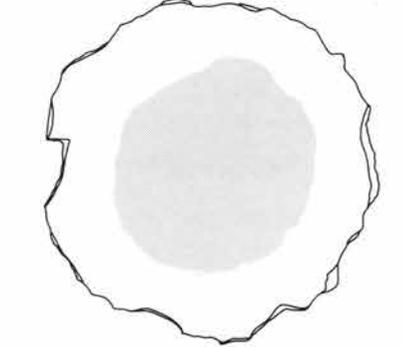
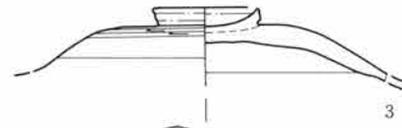
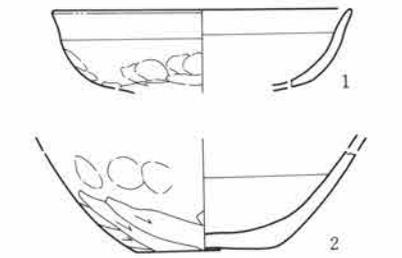
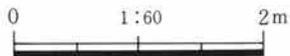
第233図 3区2号住居と出土遺物

は、坏1、甕1、須恵器の蓋1、台付長頸壺1の合計4点が出土しているが、いずれも床面から6cm以上浮いて出土した。(遺物観察表：103頁)



埋没土層

1. 暗褐色土。As-Cやロームブロックを少量含む。
2. 黒褐色土。As-Cやロームブロックを少量含む。
3. 暗褐色土。2層に類似するが、ロームブロックの量が多い。
4. 黒褐色土。As-Cを少量含む。
5. 暗褐色土。3層に類似するが、やや色調が明るい。
6. 暗褐色土。5層に類似するが、締まりの弱い土。
7. 黒褐色土。焼土のブロックや粒子を多量に含む。
8. 灰白色粘土層。
9. 褐色土。焼土ブロックを多量に含む。
10. 暗褐色土。焼土粒やロームブロックを多量に含む。



第234図 3区3号住居と出土遺物

II 調査の内容

3区5号住居

位置 h-29グリッド 写真 PL-104

形状 長軸を東西にもつ台形を呈する。四隅は丸く、南・北壁はわずかに外側へ弧状に膨らむ。規模は長辺3.70×短辺3.48・2.65mである。

面積 10.78㎡ 方位 S-80°-E

床面 ローム土を14~46cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

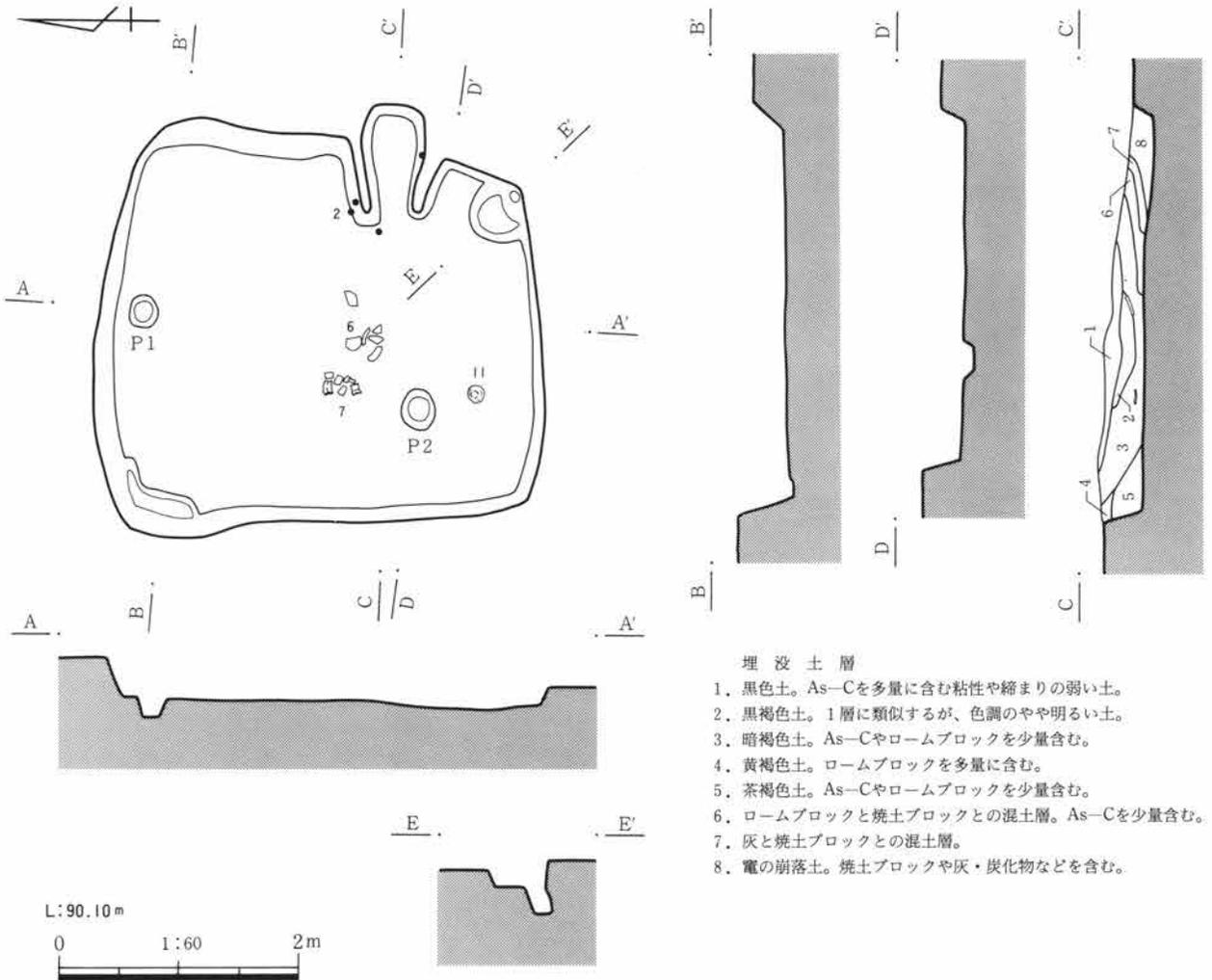
埋没土 上層にはAs-Cまじりの黒色土が、壁際や底面の第1次埋没土にはロームブロックまじりの褐色土がレンズ状に堆積する。自然埋没の状態を示す。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃烧部は周壁の内側から外側にかけて造り出され、その規模は長さ90cm、幅50cmである。

貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。直径56cmの円形を呈し、深さ14cmである。

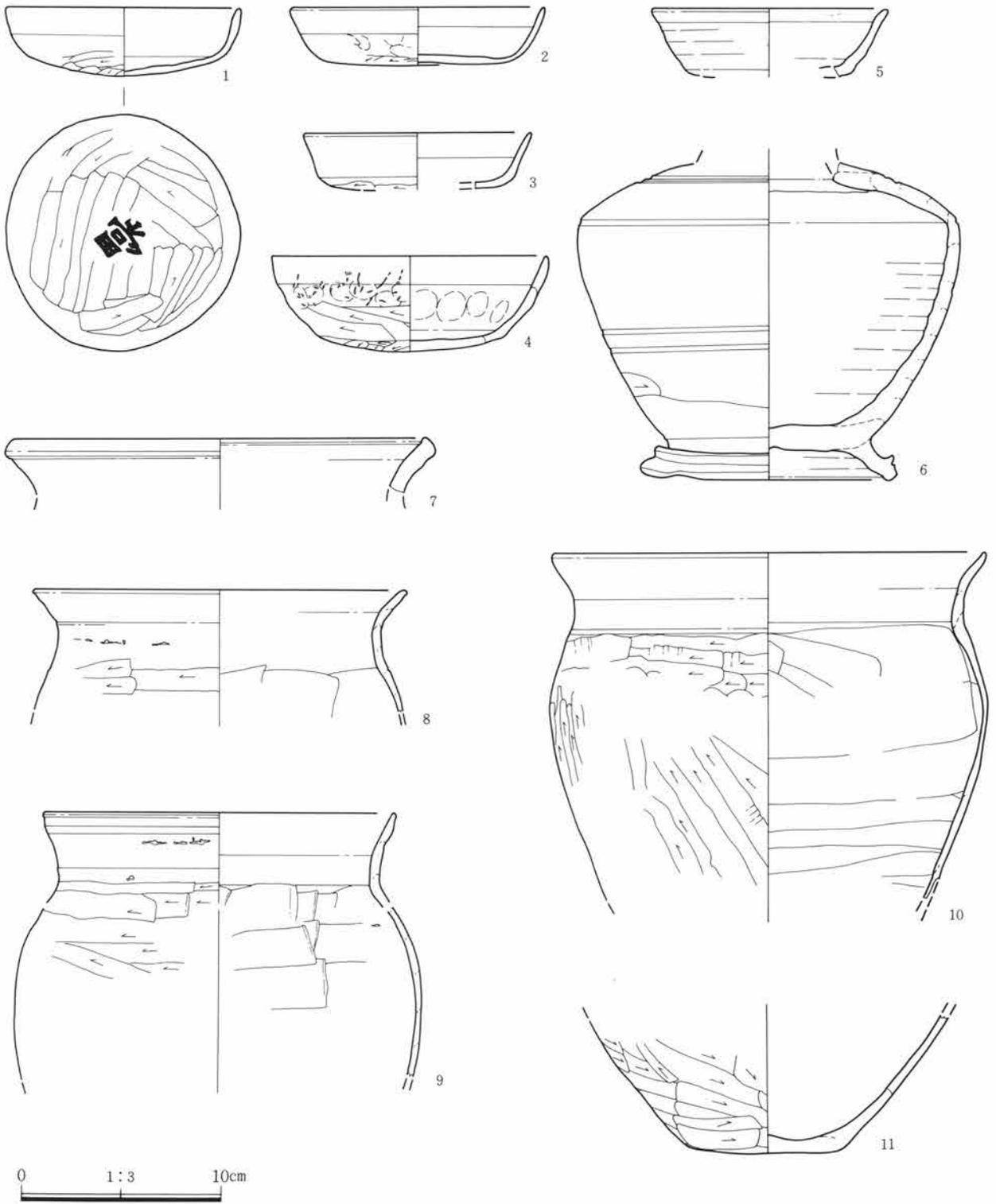
柱穴 主柱穴と断定できるものはないが、2本の小ピットが検出された。柱穴の心々間の距離は、P₁~P₂:2.41mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:25×17cm、P₂:30×9cmである。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏4、甕4、須恵器の坏身1、甕1、長頸壺1の合計11点が出土している。Na2は床面に密着して、他は床面から浮いて出土した。(遺物観察表:103・104頁)



- 埋没土層
1. 黒色土。As-Cを多量に含む粘性や締まりの弱い土。
 2. 黒褐色土。1層に類似するが、色調のやや明るい土。
 3. 暗褐色土。As-Cやロームブロックを少量含む。
 4. 黄褐色土。ロームブロックを多量に含む。
 5. 茶褐色土。As-Cやロームブロックを少量含む。
 6. ロームブロックと焼土ブロックとの混土層。As-Cを少量含む。
 7. 灰と焼土ブロックとの混土層。
 8. 竈の前落土。焼土ブロックや灰・炭化物などを含む。

第235図 3区5号住居



第236図 3区5号住居出土遺物

II 調査の内容

5区1号住居

位置 I-40グリッド 写真 PL-106・107

形状 一辺が3.85mの正方形を呈する。四隅は丸く、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。

面積 13.97㎡ 方位 N-78°-E

床面 ローム土を最大70cm掘り込み、18~37cm厚の貼り床をしている。掘り方内は、ロームブロックを主体とする暗褐色土で埋填されている。張り床面は若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や貯蔵穴周辺および床面中央部は、叩き床状の堅固な面となっている。

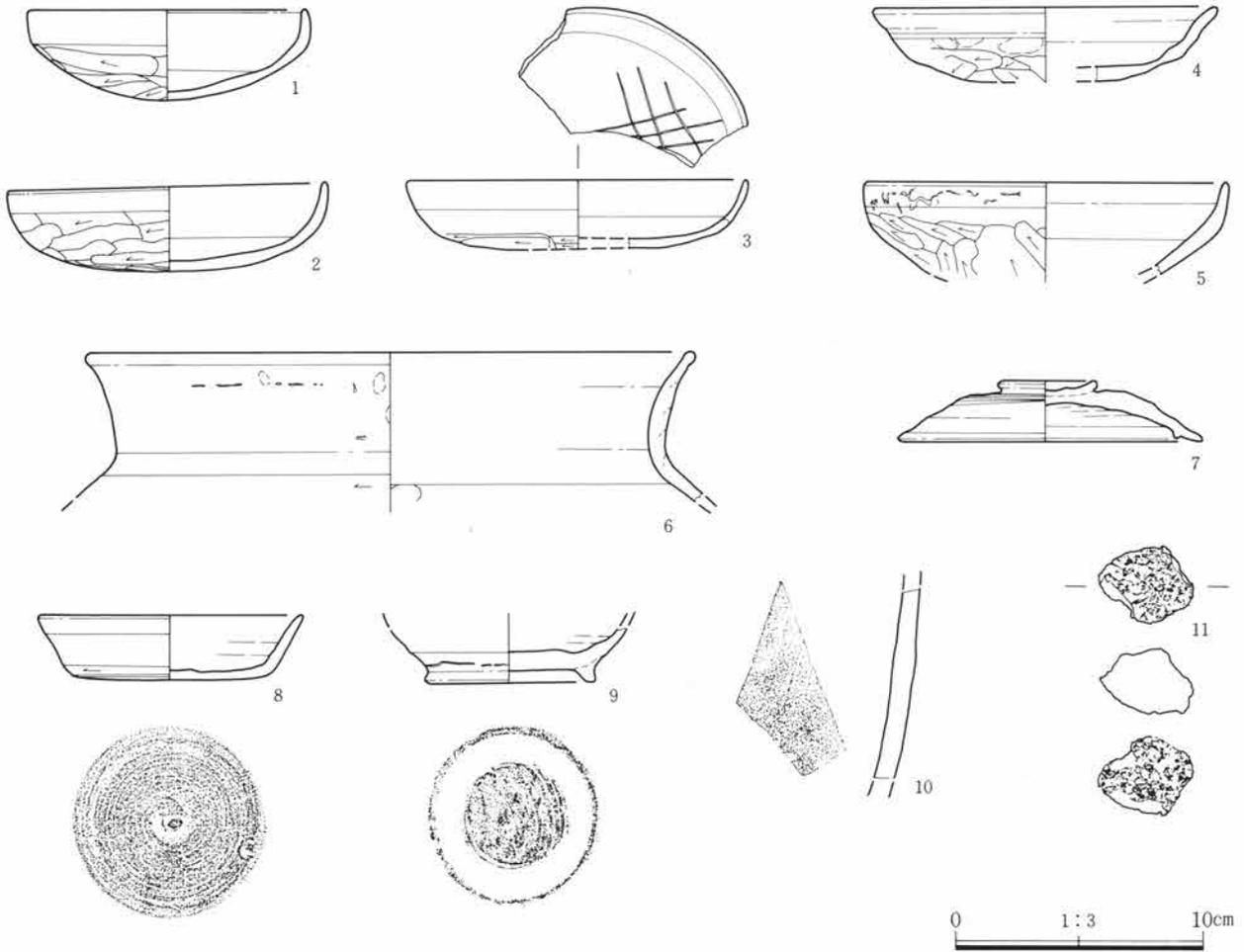
埋没土 全体的に黒褐色土で埋没しているが、壁際や底面の第1次埋没土にはロームブロックまじりの褐色土がレンズ状に堆積する。自然埋没の状態を示す。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置する。燃焼部は周壁よりも外側に造り付けられ、その規模は長さ100cm、幅82cmである。焚口部の左側に最大径25~27cmの河床礫2点が出土しているが、補強材として使用されたものと推定される。

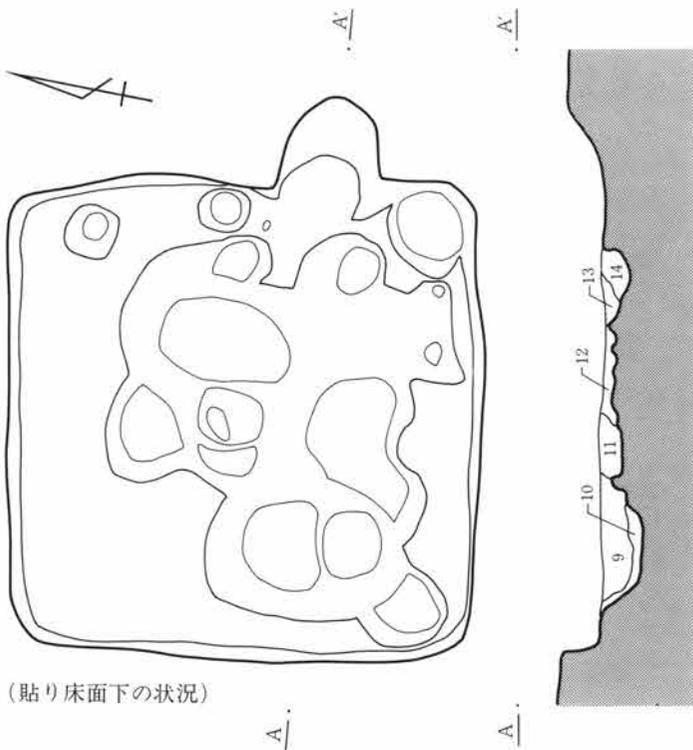
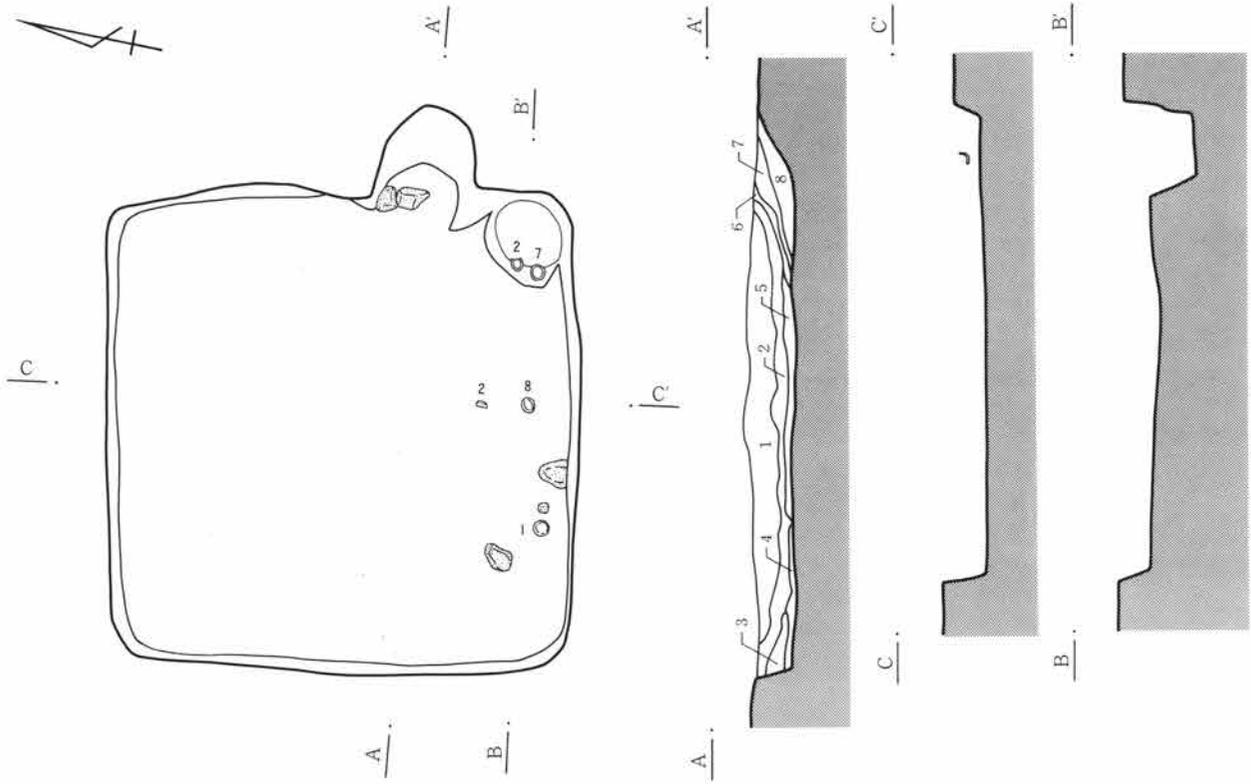
貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。直径70cmの円形を呈し、深さ30cmである。

遺物 坏5、甕1、須恵器の坏身1、坏蓋1、甕1、高台付碗1の合計10点の土器が出土しているが、No.1が床面に密着していた他は、すべて床面から4cm以上浮いて出土した。南壁際から最大径10~20cmの河床礫2点が床面に密着して出土している。ほかに碗状鉄滓1点が埋没土中より出土した。

(遺物観察表：104・105頁)



第237図 5区1号住居出土遺物



埋没土層

1. 黒褐色土。As-Cを少量含み、暗褐色土が斑状に混入する。
2. 黒褐色土。1層に類似するが、やや粘性を帯びた土。
3. 暗褐色土。ロームブロックを多量に含む締まりの弱い土。
4. 暗褐色土。締まりの強い土。
5. 暗褐色土。ロームブロックや焼土ブロックを少量含む。
6. 焼土と褐色土との混土層。
7. 6層に類似するが、より焼土を多く含む。
8. 黒褐色土。焼土のブロックや粒子を多量に含む。
9. 暗褐色土。ロームと黒色土ブロックとの混土層。粘性をもち、全体的に堅くしまっている。
10. 黒褐色土。9層に類似するが、黒色土をより多く含む。
11. 黒黄褐色土。9層よりも多くのロームブロックを含む。
12. 暗褐色土。9層に類似する。
13. 黒褐色土。9層に類似するが、焼土ブロックを少量含む。
14. 橙褐色土。焼土と褐色土との混土層。

L: 91.50 m



第238図 5区1号住居

II 調査の内容

5区2号住居

位置 E-26グリッド 写真 PL-108・109
 形状 長軸を東西にもつ長方形を呈する。四隅は丸く、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺3.80×短辺2.27mである。

面積 10.13m² 方位 N-57°-E

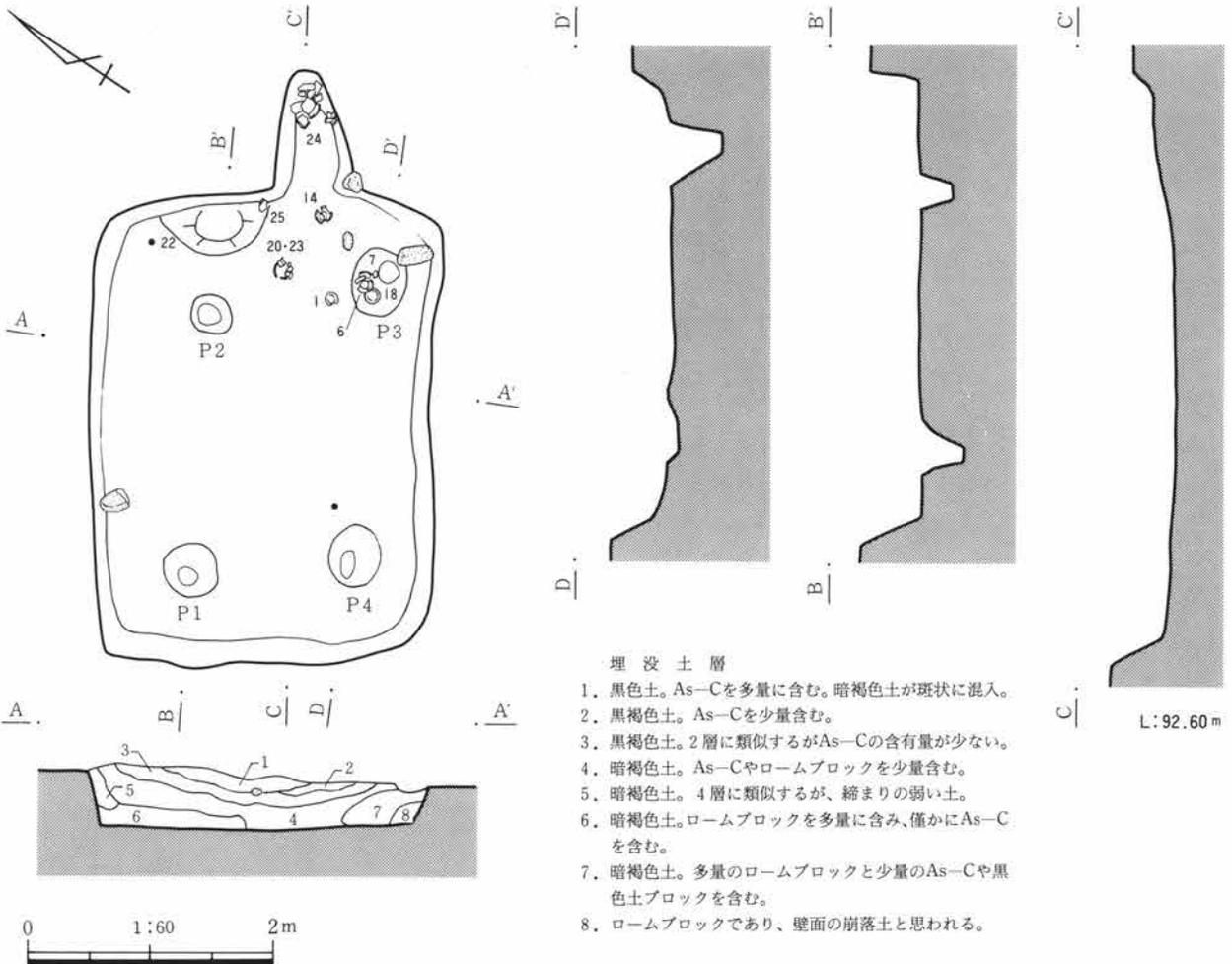
床面 ローム土を18~47cm掘り込んで床面としている。かなりの凹凸面をもち、竈左側の周壁付近やP₄から南西隅にかけての周壁際は、比高差10~20cmほどの高まりがみられる。竈手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状ほどではないが強く踏み固められている。

埋没土 中央部の上層にはAs-Cまじりの黒色土が、周壁際にはロームブロックまじりの暗褐色土がレンズ状に堆積する。自然埋没の状態を示す。

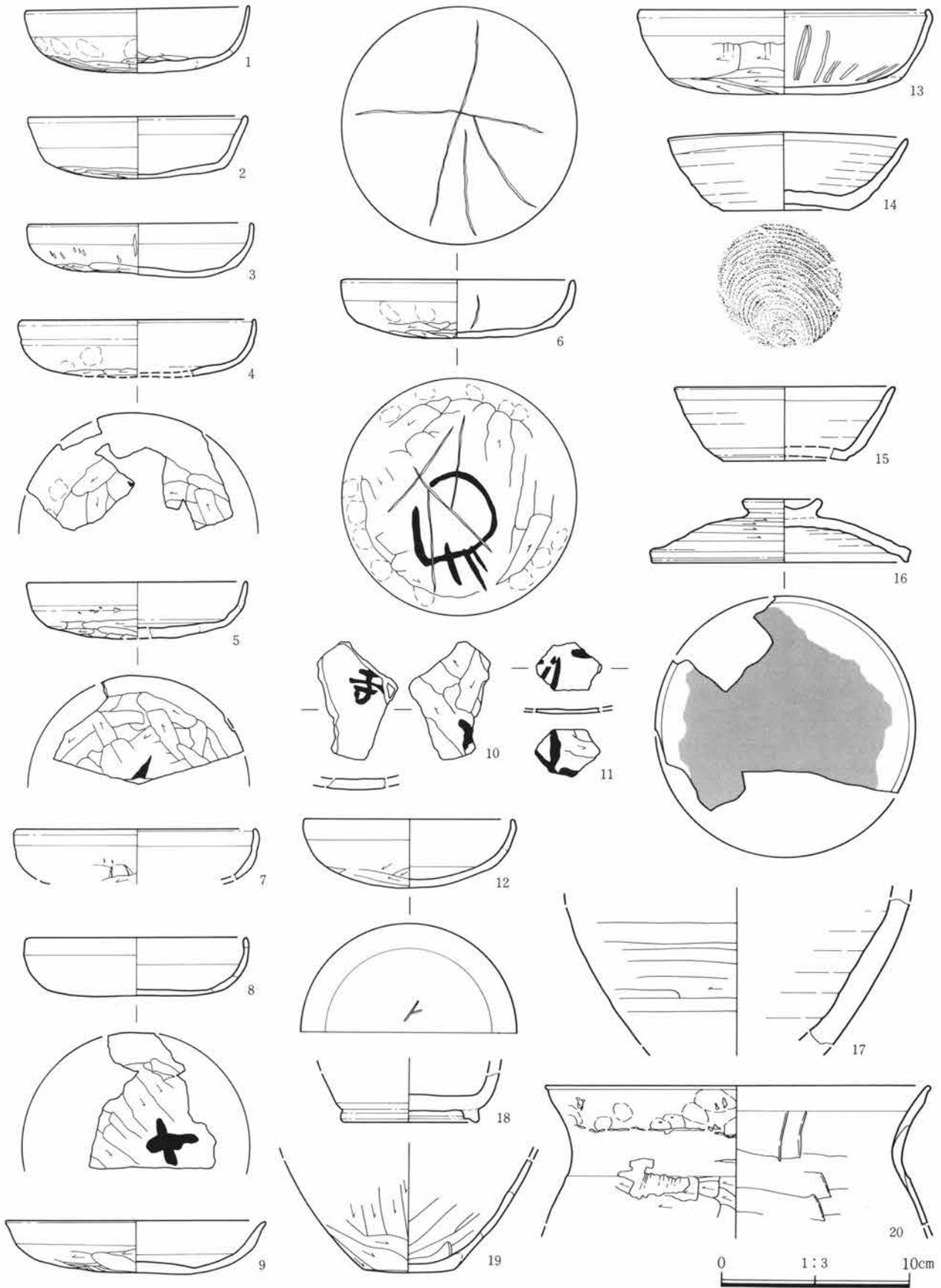
竈 東壁中央部の南側寄りに位置する。燃焼部は周壁よりも外側に造り付けられ、その規模は長さ110cm、幅66cmである。焚口部の右側に最大径15cmの河床礫を埋め込んで補強材として使用している。

柱穴 住居の対角線上に4本検出された。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈し、その距離はP₁~P₂:2.13m、P₂~P₃:1.49m、P₃~P₄:2.40m、P₄~P₁:1.30mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:40×33cm、P₂:31×22cm、P₃:45×42cm、P₄:42×9cmである。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏13、甕7、須恵器の坏身2、坏蓋1、高台付碗1、長頸壺1の合計25点が出土している。No1・6・7・18・24は床面に密着して、他は床面から10cm以上浮いて出土した。(遺物観察表:105・106頁)

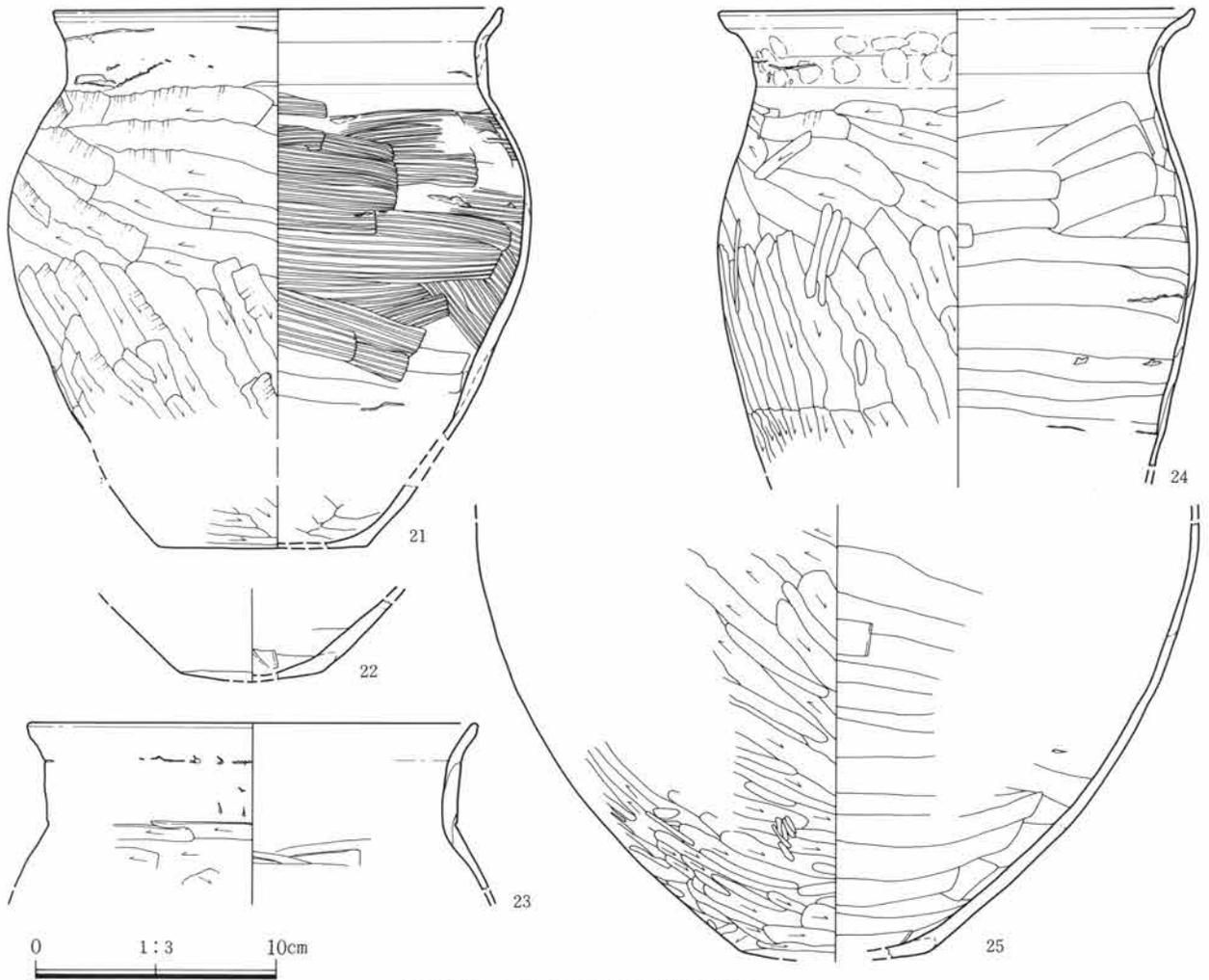


第239図 5区2号住居



第240図 5区2号住居出土遺物(1)

II 調査の内容



第241図 5区2号住居出土遺物(2)

5区4号住居

位置 V-24グリッド **写真** PL-110・111
形状 長軸を東西にもつ長方形を呈する。四隅は丸く、周壁はわずかに外側へ弧状に膨らむ。規模は長辺3.50×短辺2.70mである。

面積 8.66㎡ **方位** N-72°-E

床面 ローム土を70~78cm掘り込んで床面としている。明確な貼り床を検出することはできなかったが、床面の凹凸の激しさからみて、何等かの貼り床が存在したと判断される。

埋没土 最上層にはAs-Bの純層が、その下位にAs-Cまじりの黒色土が堆積し、壁際や底面の第1次埋没土にはロームブロックまじりの暗褐色土が堆積する。自然埋没の状態を示す。

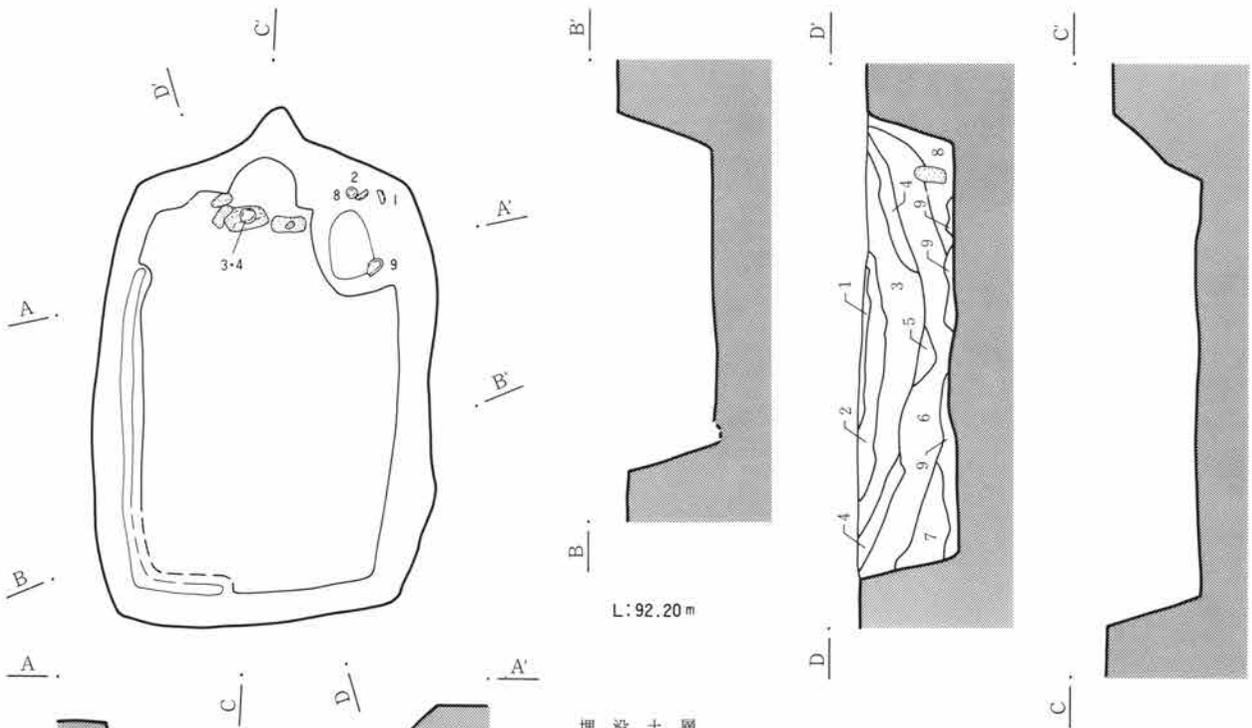
竈 東壁の中央部に位置する。燃焼部は周壁の内

側から外側にかけて造り出され、その規模は長さ60cm、幅55cmである。煙道部の規模は不明であるが、燃焼部より約50°の角度で立ち上がる。焚口部付近に最大径20~35cmの河床礫4点が出土しているが、竈の補強材に使用されたものと推定される。

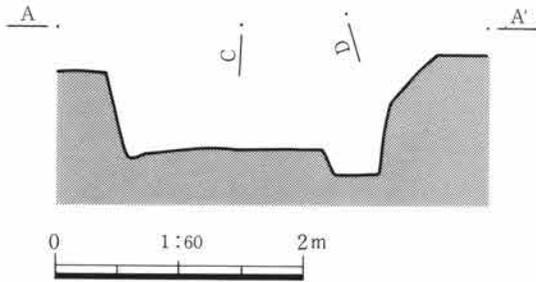
貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長径92×短径58cmの楕円形を呈し、深さ21cmである。

周溝 北壁沿いにのみ検出された。規模は幅32~39cm、深さ13~15cmである。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏6、甕1、須恵器の坏蓋1、坏身2の合計10点が出土している。Na1・2・9は南東隅の壁面にもたれ掛かるようにして、またNa3・4は竈の焚口部に崩落した河床礫の直下より出土した。Na11~13の椀状鉄滓は埋没土中より出土した。(遺物観察表:106・107頁)

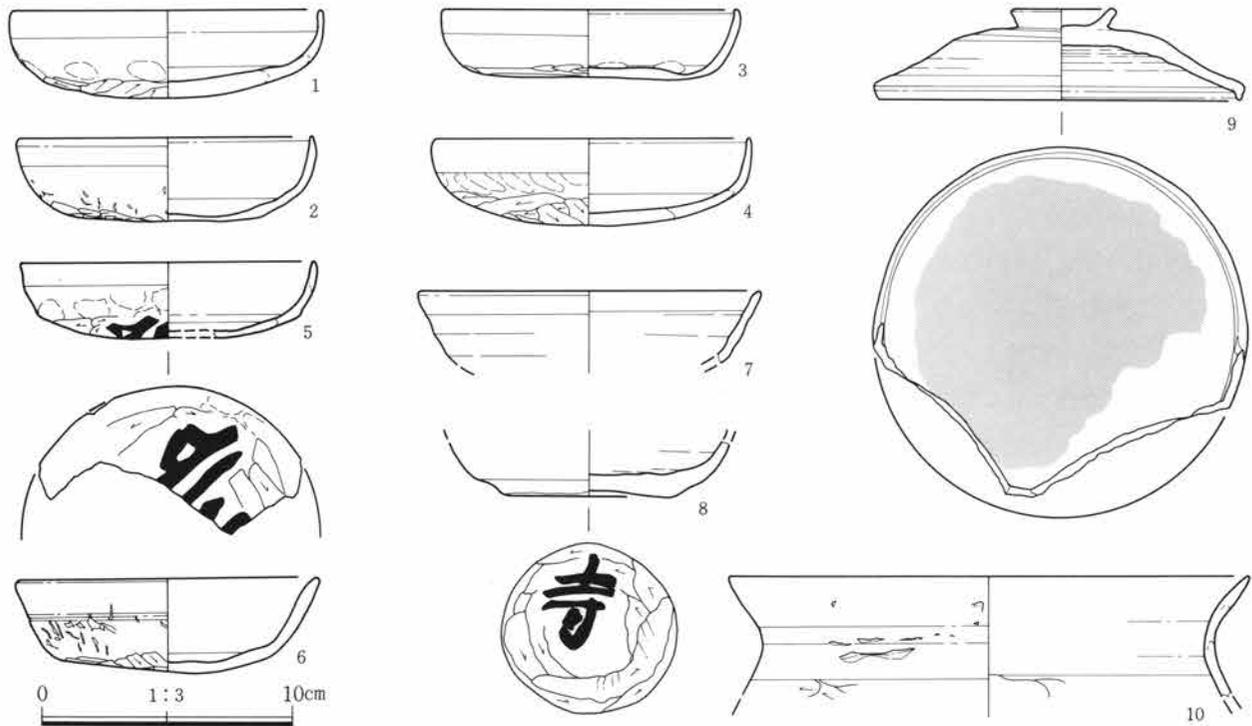


L: 92.20 m



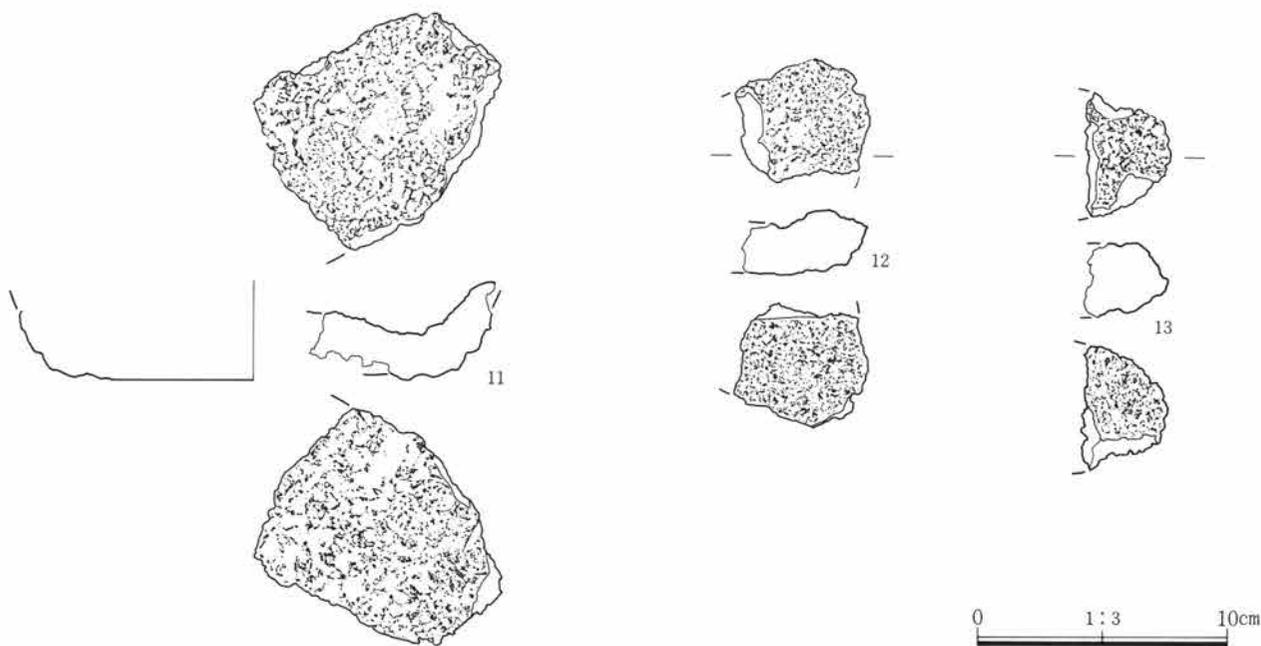
埋没土層

- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1. 黒褐色土。As-Bを多量に含む。 | 7. 暗褐色土。6層に類似するが、As-Cの含有量が少ない。 |
| 2. As-Bの純堆積層。 | 8. 暗褐色土。As-Cや焼土粒を少量含む。 |
| 3. 黒色土。As-Cを多量に含む。 | 9. 褐色土。多量のロームブロックと少量の焼土粒を含む。 |
| 4. 黒褐色土。As-Cや焼土粒を少量含む。 | |
| 5. 黒褐色土。As-Cを少量含む、黒色土が斑状に混入。 | |
| 6. 暗褐色土。多量のロームブロックと少量のAs-Cを含む。 | |



第242図 5区4号住居と出土遺物

II 調査の内容



第243図 5区4号住居出土遺物

5区3号住居

位置 H-21グリッド 写真 PL-111

形状 長軸を東西にもつ長方形を呈する。四隅は丸く、周壁はやや蛇行して掘り込まれている。規模は長辺2.75×短辺2.35mである。

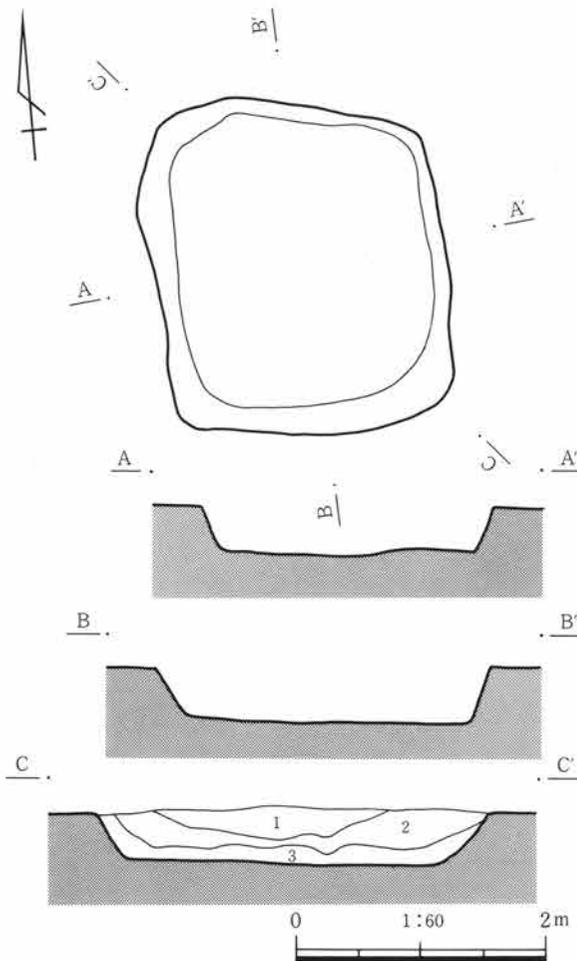
面積 5.77㎡ 方位 N-79°-E

床面 ローム土を36~43cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもち、南から北側へと比高差約5cmのわずかな傾斜が認められる。全体的に特に堅固な面は認められない。

埋没土 上~中層にかけてAs-Cまじりの黒色土が、下層および周壁際にはロームブロックまじりの暗褐色土がレンズ状に堆積する。自然埋没の状態を示す。

遺物 全く検出されなかった。

備考 炉あるいは竈や貯蔵穴、柱穴などの施設が全く存在しない点で住居と認定するには問題があるが、ここではとりあえず住居として扱っておく。



埋没土層

1. 黒色土。多量のAs-Cと少量のFP・ローム粒を含む。
2. 暗褐色土。As-Cやローム粒を少量含む。
3. 褐色土。ロームブロックを多量に含む。

第244図 5区3号住居

5区5号住居

位置 Q-29グリッド 写真 PL-112

形状 長軸を東西にもつ長方形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺3.15×短辺2.45mである。

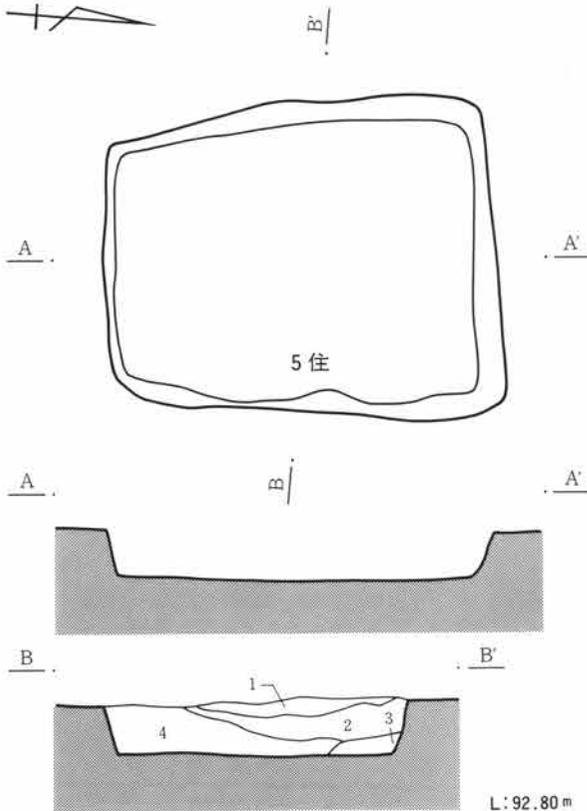
面積 7.39㎡ 方位 N-80°-E

床面 ローム土を約38cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。全体的に踏み固めが弱く、特に堅固な面はない。

埋没土 上層にはAs-Cまじりの黒色土が、壁際や底面の第1次埋没土にはロームブロックまじりの暗褐色土がレンズ状に堆積する。自然埋没の状態を示す。

遺物 全く検出されていない。

備考 竈、貯蔵穴、柱穴などの施設をもたない点で3号住居と共通している。住居と認定する積極的な根拠はないが、とりあえず住居として分類しておく。



- 埋没土層
1. 黒色土。As-Cを多量に含む。
 2. 黒褐色土。As-Cやロームブロックを少量含む。
 3. 暗褐色土。As-C・ロームブロック・黒褐色土ブロックを少量含む。
 4. 褐色土。ロームブロックを多量に含む。

第245図 5区5・6号住居

5区6号住居

位置 I-28グリッド 写真 PL-112

形状 長軸を東西にもつ長方形を呈する。四隅は丸く、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺2.42×短辺1.90mである。

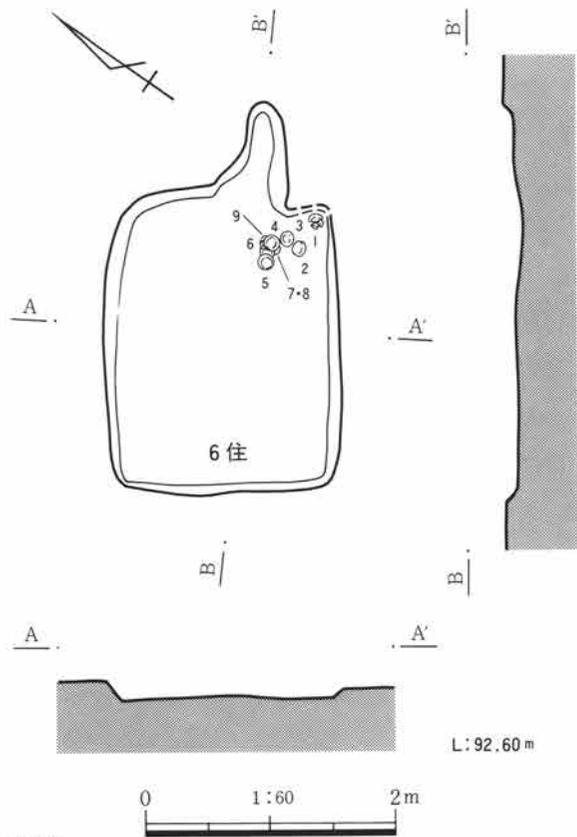
面積 4.22㎡ 方位 N-55°-E

床面 ローム土を7~17cm掘り込む。中央部が周壁際に比べて若干高いが、凹凸面および傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や床面中央部は、叩き床状ほどではないが堅く踏み固められている。

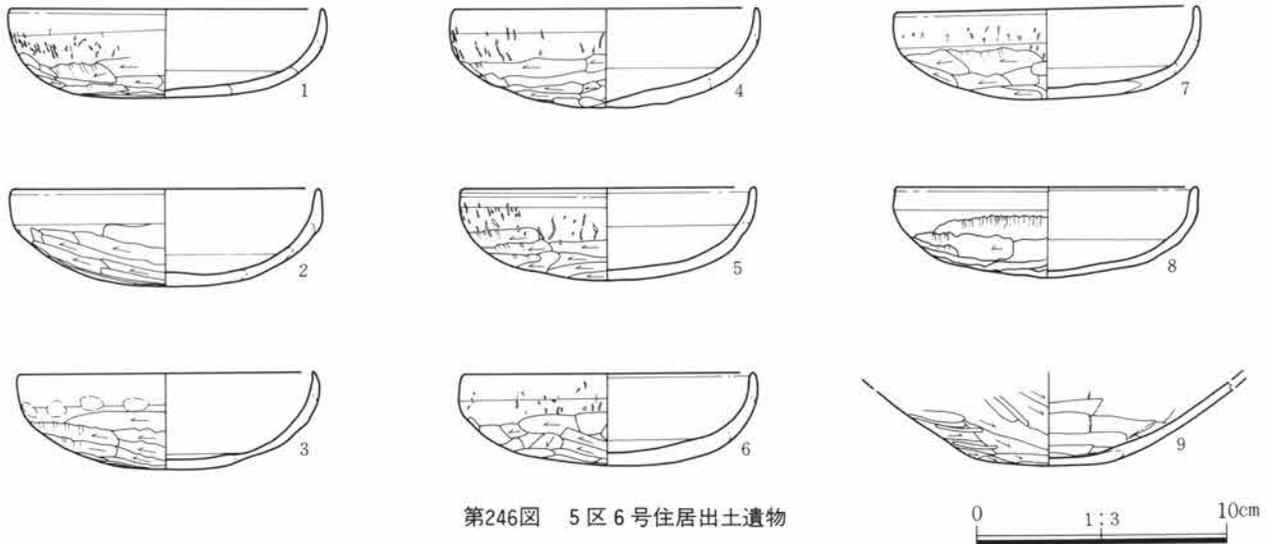
竈 東壁中央部の南側寄りに位置する。燃焼部は周壁よりも外側に造り付けられ、その規模は長さ60cm、幅45cmである。煙道部は幅30cm、長さ50cmの掘り方のみ残存する。

遺物 坏8、甕1の合計9点が、竈の右側手前に集中して出土している。No.1が床面より10cm浮いていたほかは、すべて床面に密着して出土し、No.4~9は重ねて積み上げられた状態で出土した。

(遺物観察表:107頁)



II 調査の内容



第246図 5区6号住居出土土遺物

(2) 土 壙

3区より3基、5区より5基の合計8基の土壙が検出された。両区の土壙とも散在し、規模や形状は一定していない。伴出遺物をもつものがほとんどないために時期は確定できないが、3区1号土壙や同4号土壙は埋没土中に堆積したAs—CやAs—Bなどの降下テフラにより、その年代の下限を押さえることができる。各土壙の性格についても判明しないが、いずれも自然埋没をしている点で共通する。

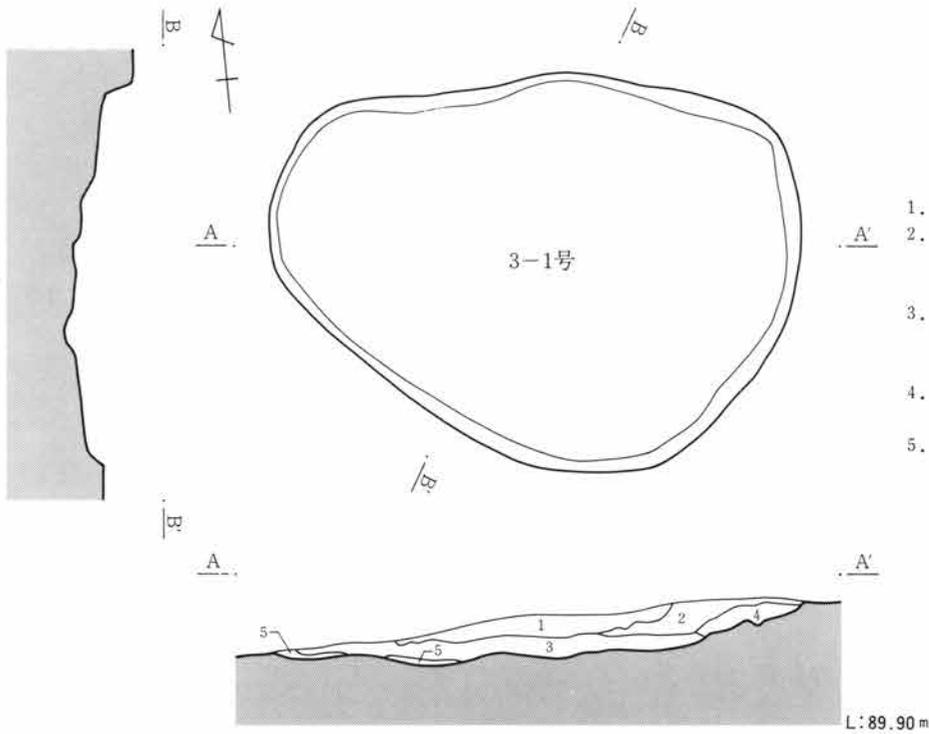
3区の土壙 丘陵の南端部に3基が散在している。1号土壙は35cmほどに浅く掘り込まれ、底面は凹凸をもち、東から西側へ向かって比高差30cmの傾斜がある。床面直上に層厚16cmで炭化物が堆積しているが、底面には火熱を受けた痕跡は認められない。炭化物層を除く各層は自然埋没であるが、最上層にAs—Bの堆積が認められることから、当土壙の時期は少なくともその降下年代の1108年以前に比定される。3号土壙は56cmの深さをもつが、底面から18～22cm上方の周壁面は火熱を受けて焼土化している。また底面の直上には、層厚6cmの灰や炭化物を多量に含んだ黒色土が堆積している。この黒色土を除いた各層は、自然埋没の状態を示す。4号土壙はすり鉢状の円形土壙であり、内部に堆積した各土層は、自然埋没の状態を示す。上層にはAs—Cが堆積していることから、当土壙の時期はその

降下年代の4世紀中葉より確実にさかのぼる。

5区の土壙 調査区の南半部に、5基が散在している。各土壙ともにその掘り込みが30cm以内と浅く、As—Cを含んだ黒褐色土で自然埋没している点で共通している。4号土壙の底面の北半部は、火熱を受けて焼土化している。6号土壙はやや規模の大きな楕円形の土壙で、その埋没土中より土師器の小破片が少量出土している。(PL—113・114)

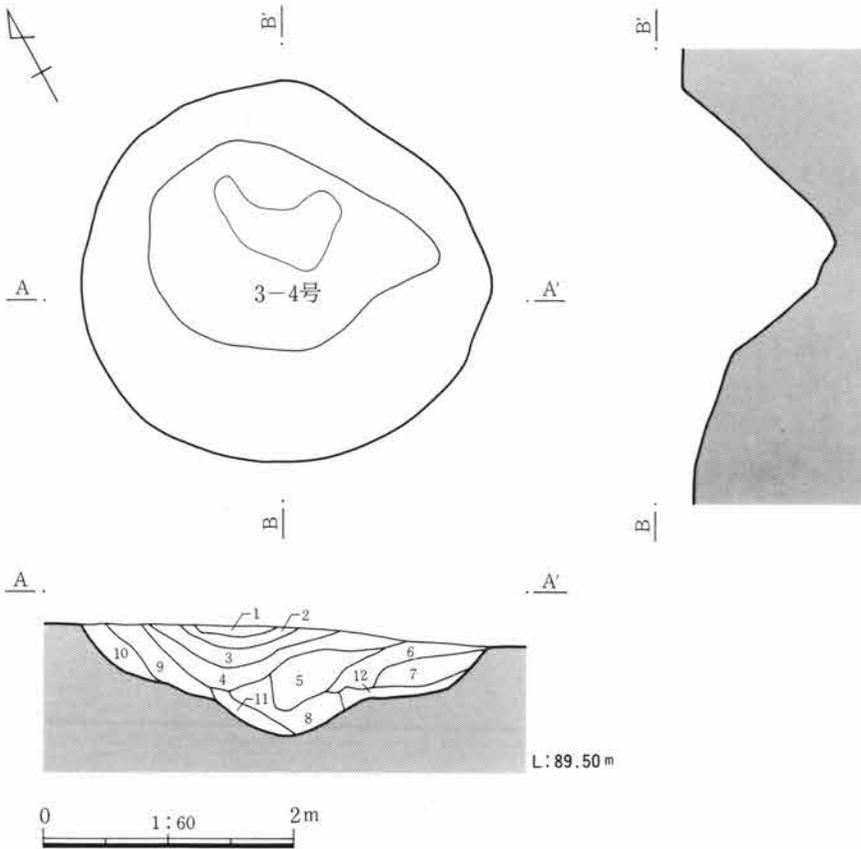
第3表 3・5区土壙の規模一覧 (単位:m)

番号	位置	形態	規模 (①直径②深さ)
3区1号	D—2	楕円形	①4.20×3.10 ②0.35
3区3号	L—13	隅丸方形	①1.65×1.35 ②0.56
3区4号	H—20	不整円形	①3.28×3.00 ②1.24
5区1号	J—18	円形	①1.10×0.90 ②0.31
5区2号	B—25	不整円形	①1.60×1.25 ②0.15
5区3号	J—24	楕円形	①1.03×0.76 ②0.20
5区4号	J—21	楕円形	①1.26×0.90 ②0.23
5区6号	A—33	円形	①2.05×1.30 ②0.23



埋没土層

1. As-Bの純堆積層。
2. 黒褐色土。多量のAs-Cやローム粒と少量の炭化物粒を含む。粘性や締まりの弱い土。
3. 黒色土。As-Cやローム粒を少量含み、最下部に厚さ約1cmの炭化物の堆積層が存在する。
4. 暗褐色土。As-Cやローム粒を少量含む。粘性や締まりの弱い土。
5. 黒褐色土。As-Cやローム粒・ロームブロックを僅かに含む。粘性や締まりの弱い土。

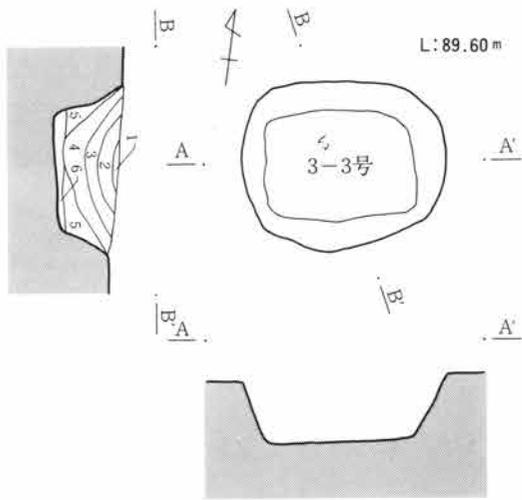


埋没土層

1. 黒色土。As-Cを多量に含む。締まりが弱く、粘性に乏しい土。
2. As-Cの純堆積層。
3. 黒褐色土。As-Cやローム粒を少量含む。締まりが弱く、粘性に乏しい土。
4. 暗褐色土。ローム粒を多量に含む。やや粘性をもち、かなり締まりのある土。
5. 黒褐色土。4層に類似するが、色調がやや暗い土。
6. 暗褐色土。ロームブロックをかなり多量に含む。粘性はあまりみられないが、かなり締まりのある土。
7. 暗褐色土。6層に類似するが、固く締まった土。
8. 暗褐色土。4層に類似するが、色調のやや明るい土。
9. 暗褐色土。ロームブロックを多量に含む。かなり締まりのある土で、粘性をもっている。
10. 褐色土。ローム粒やロームブロックを多量に含む。粘性や締まりのある土。
11. 黒褐色土。ロームブロックや褐色土ブロックを多量に含み、粘性・締まりともに弱い土。
12. 褐色土。10層に類似するが、やや締まりの弱い土。

第247図 3区1・4号土墳

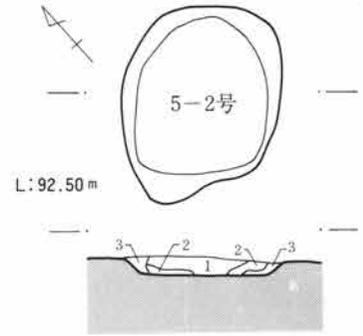
II 調査の内容



3区3号土壌

埋没土層

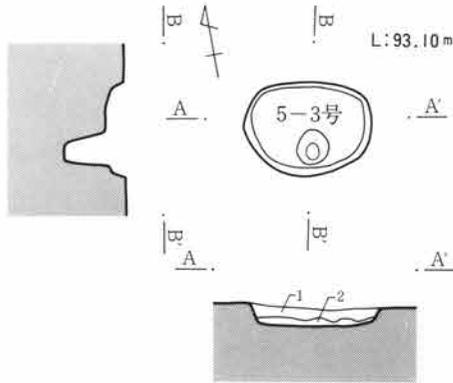
1. 黒褐色土。As-Cを多量に含む。縮まり・粘性の弱い土。
2. 褐色土。As-Cやロームブロックを少量含む。粘性はあまりないが、やや縮まりのある土。
3. 黒褐色土。As-Cやロームブロックを少量含む。縮まりは弱い、やや粘性のある土。
4. 褐色土。As-Cや炭化物粒子を少量含む。縮まりや粘性のある土。
5. 褐色土。4層に類似するが、ロームブロックを少量含む。
6. 灰と黒色土との混土層。多量の炭化物と少量の焼土粒子を含む。



5区2号土壌

埋没土層

1. 褐色土。As-Cや炭化物を少量含む。縮まりや粘性の弱い土。
2. 黒色土。炭化物を多量に含む。縮まり・粘性ともに弱い土。
3. ローム粒と黒色土粒との混土層。縮まり・粘性ともに弱い土。



5区3号土壌

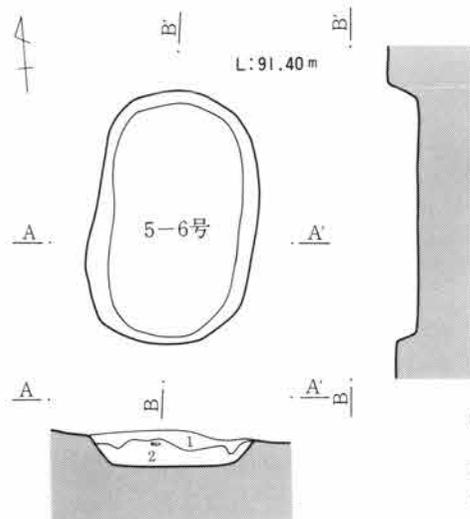
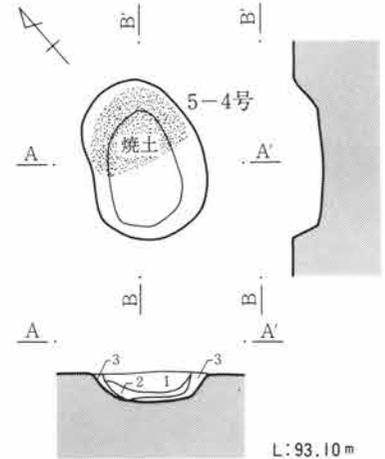
埋没土層

1. 黒褐色土。As-C・炭化物粒・焼土粒を多量に含む。
2. 黄褐色土。ソフトローム粒を多量に含む。縮まりの弱い土。

5区4号土壌

埋没土層

1. 黒褐色土。As-Cを多量に含む。縮まりは弱く、やや粘性をもつ。
2. 黒褐色土。As-Cや炭化物を僅かに含む。最下部では焼土粒子もみられる。
3. 黄褐色土。ソフトロームと褐色土との混土層。



5区1号土壌

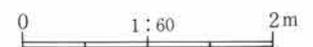
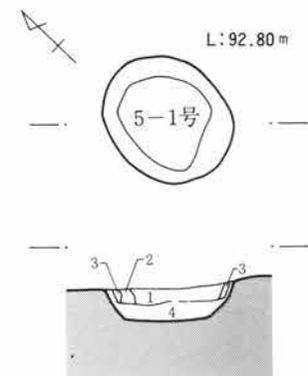
埋没土層

1. 黒褐色土。多量のAs-Cと少量の炭化物粒子を含む。縮まりや粘性の弱い土。
2. 黒色土。As-Cや炭化物・焼土粒を少量含む。縮まりや粘性の弱い土。
3. 暗褐色土。焼土ブロックや炭化物粒を多量に含む。縮まりは弱く、やや粘性をもつ。
4. 黒色土。少量のAs-Cと多量の炭化物粒を含む。縮まりや粘性の弱い土。

5区6号土壌

埋没土層

1. 褐色土。As-Cを少量含む。縮まりや粘性の弱い土。
2. 黄褐色土。ローム粒を多量に含む。縮まりや粘性の弱い土。



第248図 3区3号・5区1～4・6号土壌

(3) 掘立柱建物遺構

3区より2棟、5区より1棟の合計3棟が検出された。ともに東側の開析谷に面して立地し、3区2号掘立を除いて長軸が東西方向を向く点で共通している。それら掘立の時期や性格については確定できないが、3区1号掘立については15世紀中葉の墓壇群と、3区2号掘立や5区2号掘立は8世紀後半～9世紀前半の竪穴住居との関係が窺える。

3区1号掘立柱建物

位置 E-21グリッド

形状 1×1間の建物で、規模は2.04×1.90mである。各柱穴の規模は、直径28～35cm、深さ33～53cmで、柱痕は検出されなかった。

方位 N-22°-E

備考 伴出遺物が存在しないために、時期を確定することは困難であるが、柱穴内の埋没土が西側に展開する墓壇群のそれと同様の暗灰色土であることから、それら墓壇群と何等かの関係を持つと推定される。

3区2号掘立柱建物

位置 C-20グリッド

形状 やや歪んだ形状を呈するが、長軸を南北にもつ2×1間の建物である。規模は築行3.52×桁行1.86×2.15mである。各柱穴の規模は直径24～36cm、深さ20～47cmで、柱痕は検出されなかった。

方位 N-49°-W

5区1号掘立柱建物

位置 B-35グリッド 写真 PL-116

形状 長軸を東西にもつ2×1.5間の建物で、その規模は築行3.6×桁行2.8mである。各柱穴の規模は直径40～67cm、深さ30～56cmで、柱痕は検出できなかった。

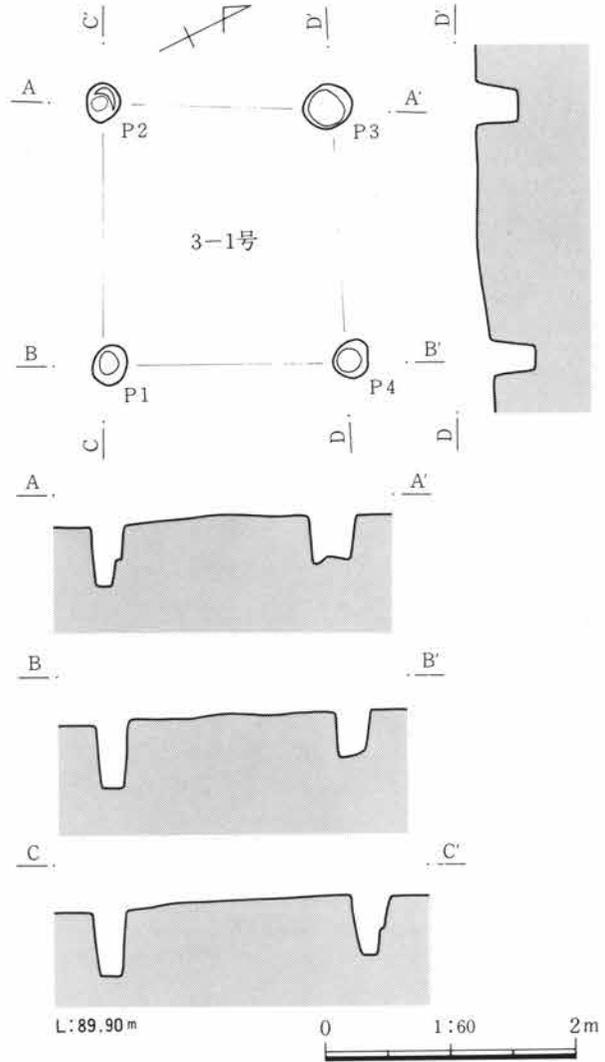
方位 N-10°-E

遺物 P₁とP₇の柱穴の埋没土中より、No.1の台付甕とNo.2の環の破片が各々出土した。

備考 柱穴内より出土した2点の土器の年代が、と

もに8世紀後半～9世紀前半に比定されることから、本遺構も当該期の所産の可能性が高い。

(遺物観察表：108頁)



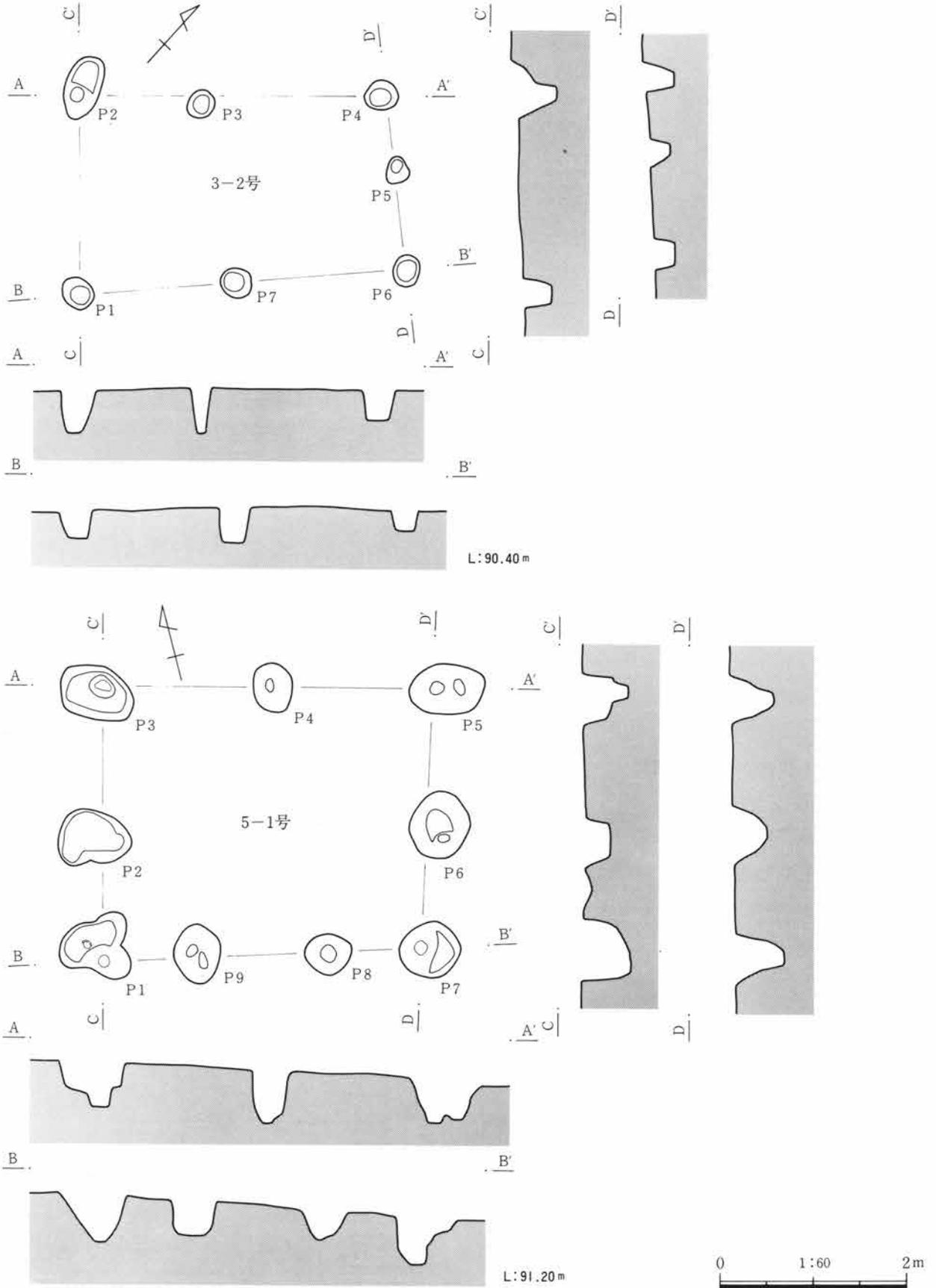
第249図 3区1号掘立柱建物

第4表 3区1号掘立柱建物の規模一覧

柱間間隔		番号	柱穴の規模	
			直径	深さ
P ₁ —P ₂	2.08	P ₁	0.28	0.53
P ₂ —P ₃	1.86	P ₂	0.28	0.48
P ₃ —P ₄	2.02	P ₃	0.35	0.33
P ₄ —P ₁	1.94	P ₄	0.28	0.35

(単位：m)

II 調査の内容



第250図 3区2号・5区1号掘立柱建物

第5表 3区2号掘立柱建物の規模一覧

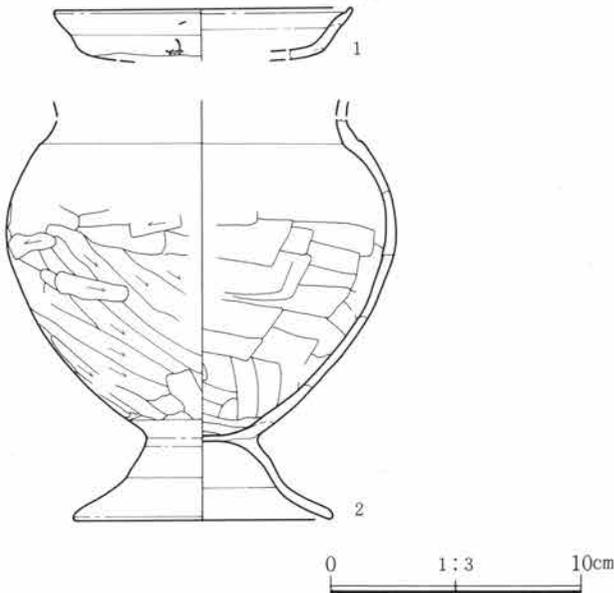
柱間間隔	番号	柱穴の規模	
		直径	深さ
P ₁ —P ₂	2.14	P ₁	0.30 0.28
P ₂ —P ₃	1.36	P ₂	0.36 0.44
P ₃ —P ₄	1.92	P ₃	0.26 0.47
P ₄ —P ₅	0.75	P ₄	0.32 0.31
P ₅ —P ₆	1.10	P ₅	0.24 0.20
P ₆ —P ₇	1.85	P ₆	0.29 0.20
P ₇ —P ₁	1.68	P ₇	0.32 0.36

(単位：m)

第6表 5区1号掘立柱建物の規模一覧

柱間間隔	番号	柱穴の規模	
		直径	深さ
P ₁ —P ₂	1.84	P ₁	0.50 0.40
P ₂ —P ₃	1.60	P ₂	0.52 0.58
P ₃ —P ₄	1.80	P ₃	0.57 0.48
P ₄ —P ₅	1.82	P ₄	0.43 0.56
P ₅ —P ₆	1.44	P ₅	0.55 0.43
P ₆ —P ₇	1.33	P ₆	0.67 0.36
P ₇ —P ₈	1.05	P ₇	0.63 0.51
P ₈ —P ₉	1.44	P ₈	0.43 0.30
P ₉ —P ₁	0.98	P ₉	0.55 0.41

(単位：m)

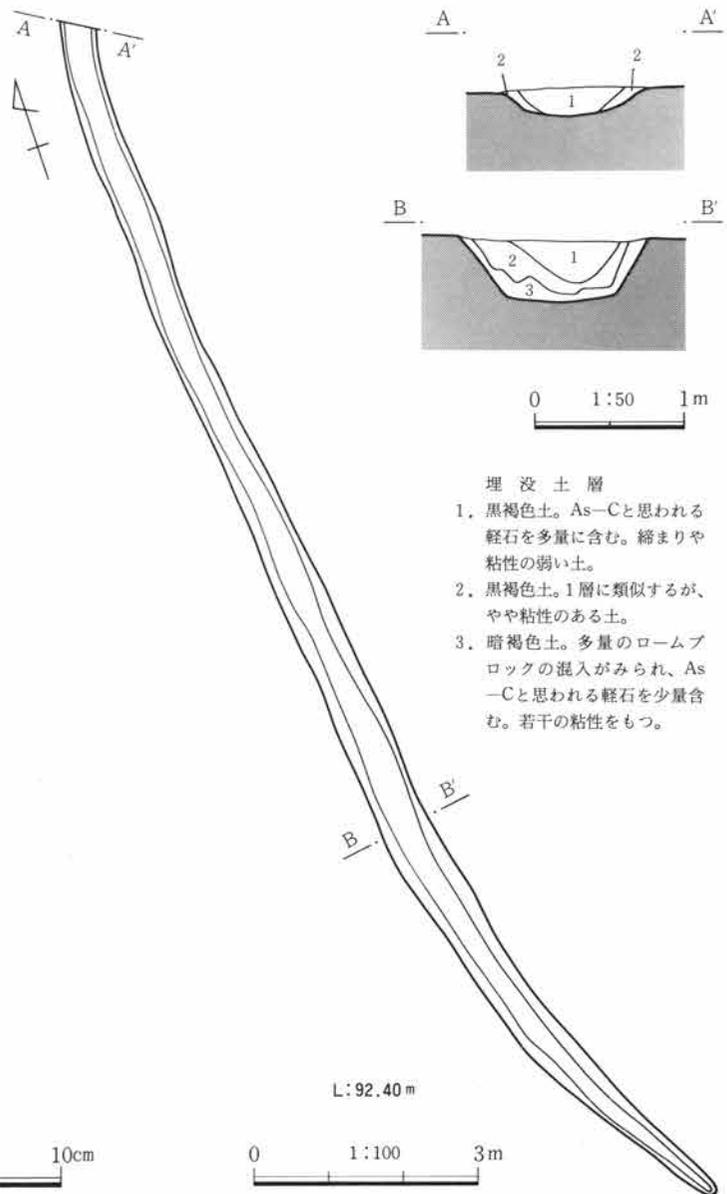


第251図 5区1号掘立柱建物出土遺物

(4) 溝状遺構

5区より1条検出されたのみである。時期・性格ともに特定できないが、溝内には流水の痕跡は認められず、用水路としての性格はもたないと推定される。

5区1号溝 台地の中央部をやや曲折しながら南北方向に走行する。断面形は蒲鉾状を呈し、その規模は確認長38m、上幅80~140cm、下幅45~85cm、深さ15~36cmである。底面は凹凸がみられるが、ほぼ水平に掘り込まれている。溝内の埋没土は4区1号溝とほぼ同様であり、自然埋没の状態を示す。(PL-115)



第252図 5区1号溝

II 調査の内容

(5) 墓 墳

本遺跡の墓墳群は、調査区域の南東端の3区内・今井沼に北から南へ突出した小丘陵の先端部西斜面に占地している。検出された墓墳は12基である。位置・規模等は第7表のとおりであるが、形状は一定せず、直径が0.3~0.6m、確認面からの深さが0.3m未満という小型の遺構である。各墓墳からはヒトの焼骨片が出土しているが、そのほかに6・7号墓墳からは板碑の破片や北宋銭が、4号墓墳から同じく北宋銭、12号墓墳から北宋銭と仏具の引磬（いんきん）がそれぞれ出土している。以下、その概要を記す。

1号墓墳 表土を除去した段階で、火葬骨の細片を交える不明確なプランとして検出された。覆土には木炭の小片が多く見られ、全体が黒色を呈する。骨片にも炭化物が付着している。

2号墓墳 確認時は楕円形のように見受けられたが、実際は底面も不整形な坑となった。少量の骨片と木炭片が出土している。

3号墓墳 楕円形で浅い皿状の坑である。これも少量の骨片と木炭片のみの出土である。

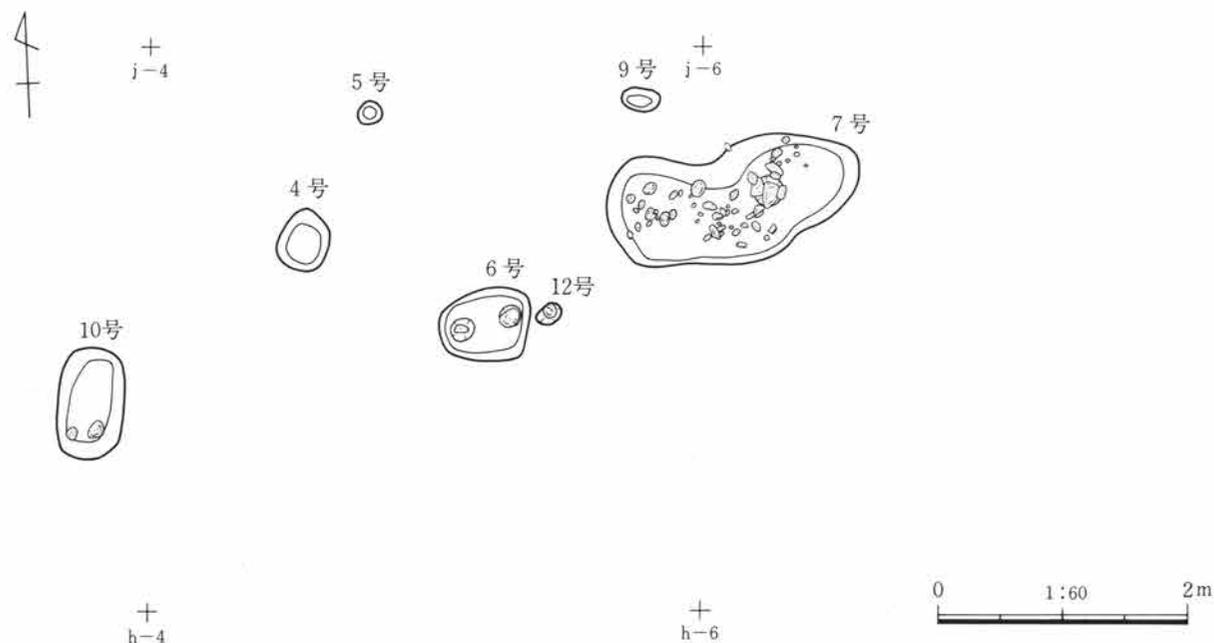
4号墓墳 円形で極めて浅い坑である。炭化物は含ま

ず、骨片も比較的崩れていない。北宋銭4枚（景德元寶1枚・皇宋通寶3枚）が伴出している。

5号墓墳 確認時は東西にかなり長く骨片が散乱していたため長楕円形と思われたが、実際は墓墳群中でも最小の円形坑であった。骨片のみで伴出遺物はない。

6号墓墳 東西を長軸とする長方形の浅い坑の中に、東西2ヶ所の施設がある。東側の施設は直径0.25mの円形坑中に少量の骨片を納め、安山岩の偏平円礫で封じ、南東手前に小型の板碑を造立したらしく、基部の残欠が検出された。西側の施設では、東側の施設と同様の円形坑に板碑基部の残欠が建っていたのみで、埋納物は検出されなかった。造立のための坑と思われるが、東側施設との平行関係に疑問が残る。両施設の中程から北宋銭（崇寧通寶）の模造品1枚が出土している。これは本銭に比べて直径が1cm余りも大きい鋳物製で鏹銭とするにはあたらない。右端に直径1mm強の小孔があるが、孔辺に縁取りがあり、鋳型の段階で既に意図されていたものとみられる。飾り物等の転用と考えられよう。

7号墓墳 東西に長い不定形な円形の範囲に、小礫および板碑片が散在して検出された。埋納施設はこの範囲の東に偏して検出された。施設は直径0.3mほどの円



第253図 3区の墓墳の位置(1)

形皿状をなし、少量の骨片が出土した。板碑は細片化し、東から西にかけて同一個体片が流れている。埋没土中より北宋銭1枚（元祐通寶）と須恵器甕の体部片が各1点出土しているが、須恵器については、供伴するものではあるまい。

8号墓壙 南北を長軸とする楕円形を呈し、内壁の直立する坑である。内容物は炭化物の細片に骨片をまじえるものが充満しており、骨片の埋納とみるよりは、一括処理ともとりうる様相である。伴出遺物はない。

9号墓壙 浅い皿状の円形坑である。中央に骨片が少量検出されたのみで、伴出遺物はない。

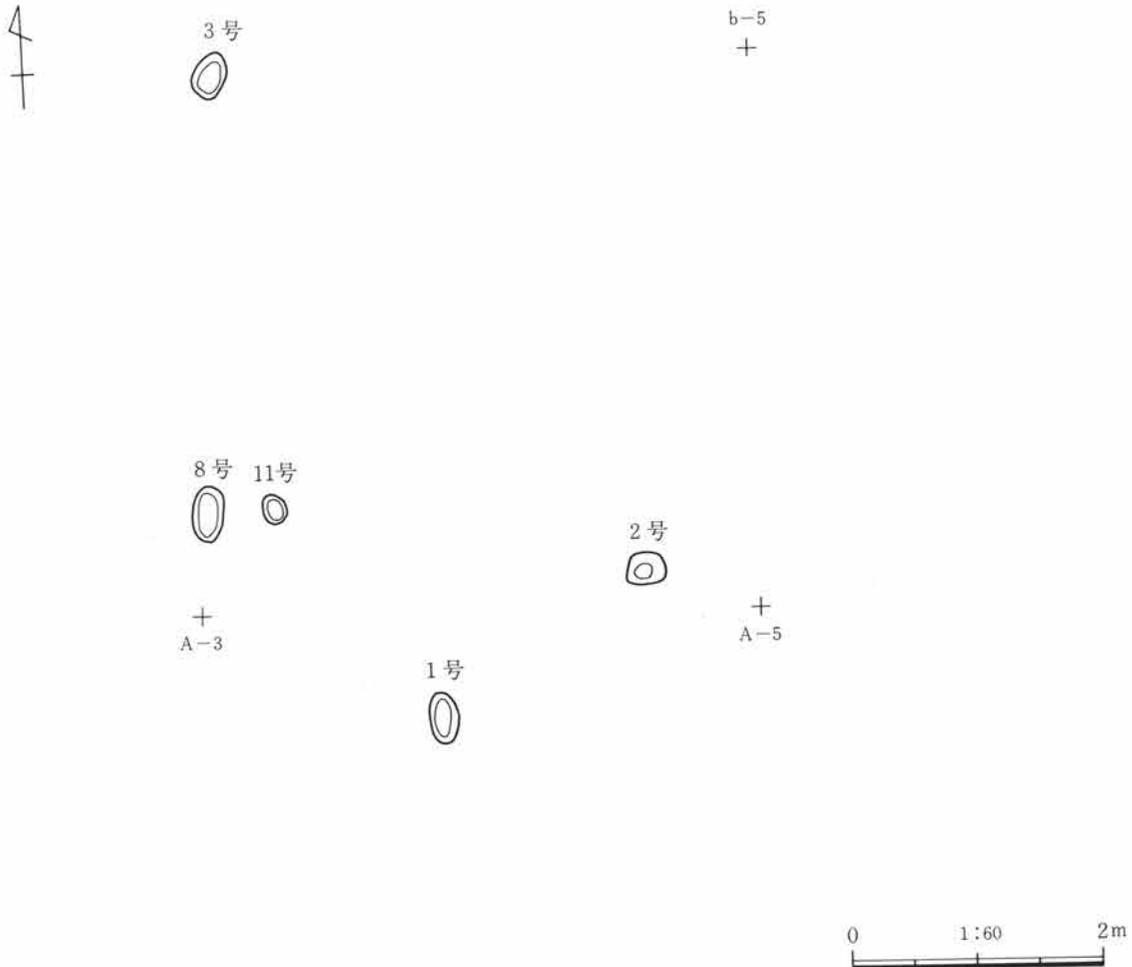
10号墓壙 南北に長軸をとる楕円形の坑で、8号墓壙と同様に、骨片をまじえる炭化物を主体とした覆土が充満していた。底面の南側寄りに円礫2個が存在した

が、そのうちの1個は火熱を受けていた。

11号墓壙 8号墓壙の東に接して検出された、小型の円形皿状の坑である。少量の骨片のみを出土した。

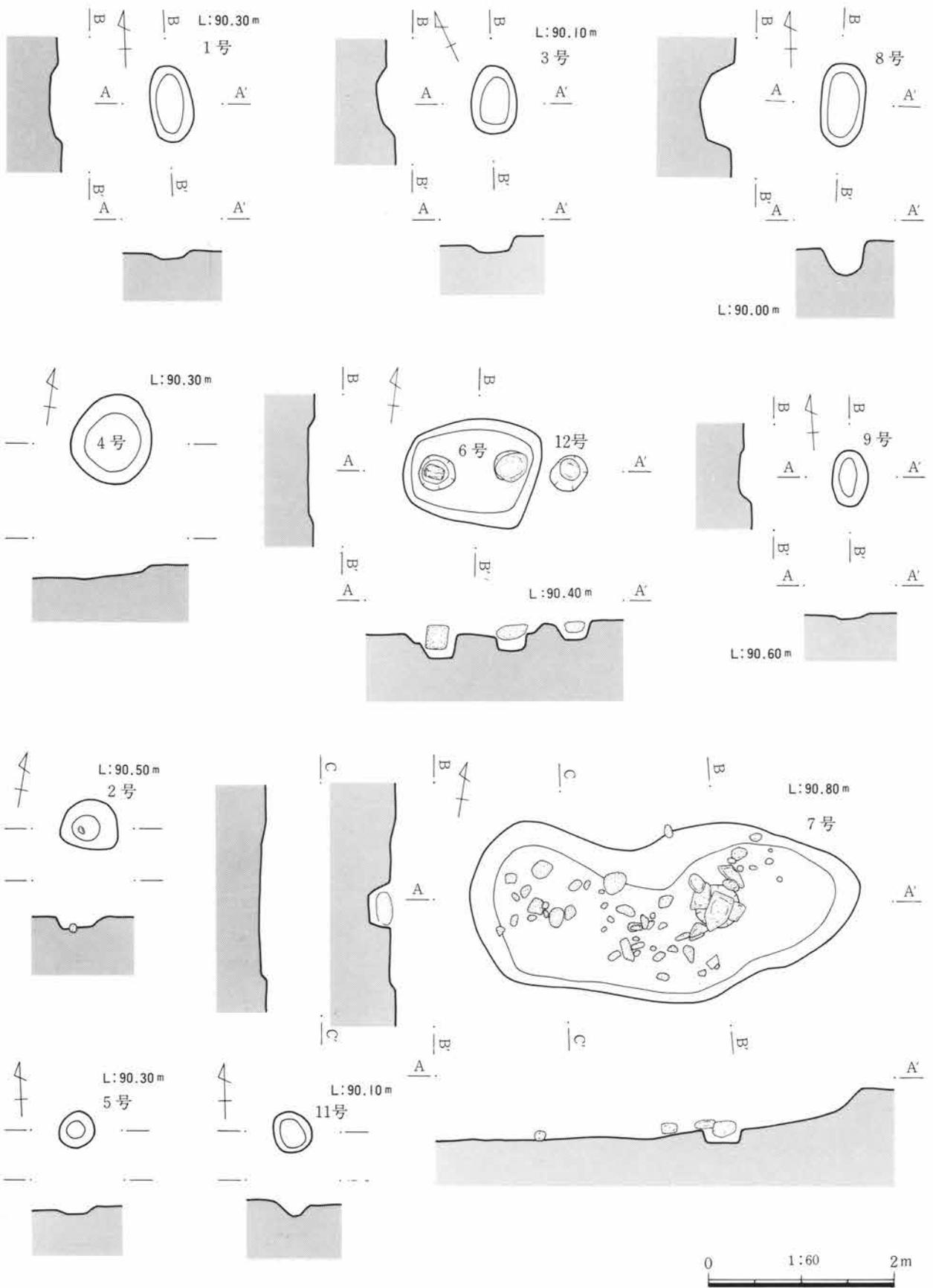
12号墓壙 6号墓壙の東側に並んで検出された。形態は6号墓壙の東側施設に近似している。円礫が蓋状に坑上にあり、その下から少量の骨片が出土している。また、骨片には北宋銭3枚（元祐通寶1枚・景祐元寶1枚・天禧通寶1枚）と小型の引磬および薄板片が伴出している。薄板片は銅貨の底面側に付着して検出されたが、これは銅成分の保存効果により銭貨大に遺存したものであろう。檜または杉材とみられるが、小型の曲げ物等の容器の存在を推認できよう。

(PL-116~118、遺物観察表：108頁)

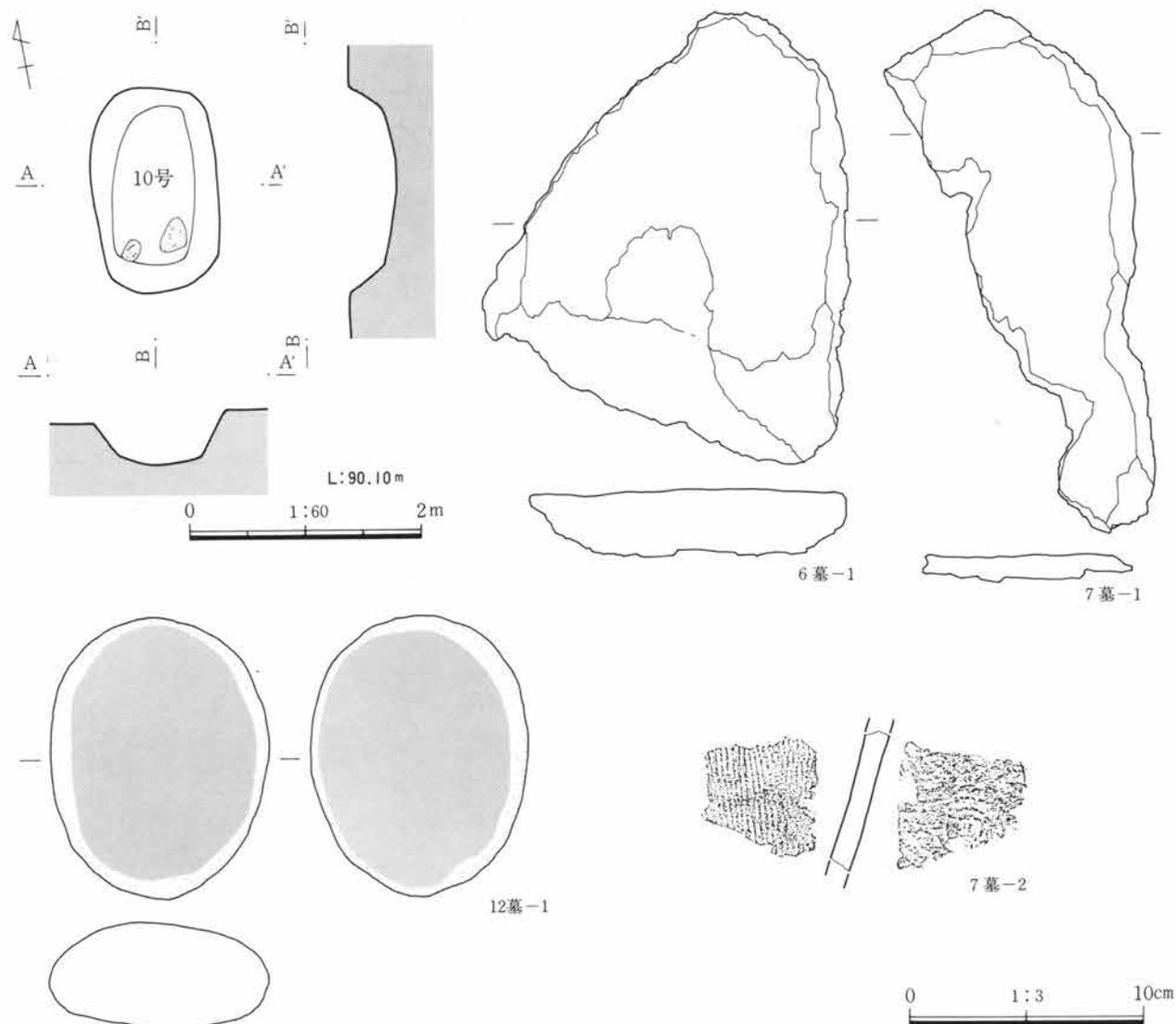


第254図 3区の墓壙の位置(2)

II 調査の内容



第255図 3区の墓墳



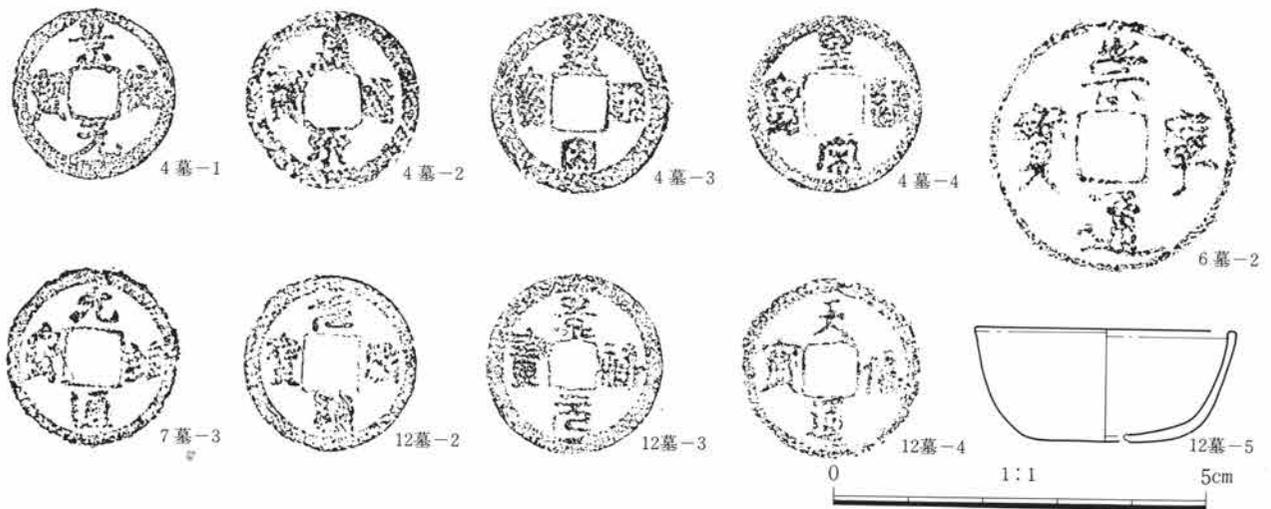
第256図 3区の墓墳と出土遺物

第7表 3区墓墳の規模一覧

(単位：m)

番号	位置	形態	規模 (①直径②深さ)	長軸方位	出土遺物
1号	B-3	楕円形	①0.55×0.31 ②0.07	N-5°-E	
2号	A-4	不整円形	①0.42 ②0.13		
3号	a-3	楕円形	①0.50×0.34 ②0.16	N-24°-E	
4号	i-4	円形	①0.60 ②0.08		銅銭4
5号	i-4	円形	①0.28 ②0.05		
6号	i-5	方形	①0.98×0.76 ②0.22	N-82°-E	銅銭1・板碑片1
7号	i-6	長楕円形	①2.81×1.14 ②0.28	N-81°-E	銅銭1・板碑片1・須恵器片1
8号	A-3	楕円形	①0.60×0.32 ②0.25	N-3°-E	
9号	i-5	楕円形	①0.42×0.25 ②0.10	N-88°-W	
10号	h-3	方形	①1.17×0.75 ②0.23	N-11°-E	
11号	A-3	円形	①0.29 ②0.13		
12号	i-5	円形	①0.28 ②0.13		銅銭3・銅碗1・磨り石1

II 調査の内容



第257図 3区墓塚の出土遺物

第8表 墓塚出土の古銭一覧

番号	銭名	法量			初 鑄 年 代	
		直径	孔径	重量		
4号墓-1	景德元寶	2.25	0.60	2.25	景德元年 (1044)	北宋
4号墓-2	皇宋通寶	2.45	0.70	3.25	宝元2年 (1039)	北宋
4号墓-3	皇宋通寶	2.45	0.70	3.15	宝元2年 (1039)	北宋
4号墓-4	皇宋通寶	2.45	0.70	3.00	宝元2年 (1039)	北宋
6号墓-1	崇寧通寶	3.40	0.90	9.42	崇寧年間 (1102~) 以降の模造品か 北宋	
7号墓-1	元祐通寶	2.40	0.70	2.94	元祐元年 (1086)	北宋
12号墓-1	元祐通寶	2.40	0.70	3.09	元祐元年 (1086)	北宋
12号墓-2	景祐元寶	2.45	0.65	2.81	景祐元年 (1034)	北宋
12号墓-3	天禧通寶	2.45	0.70	2.51	天禧元年 (1017)	北宋

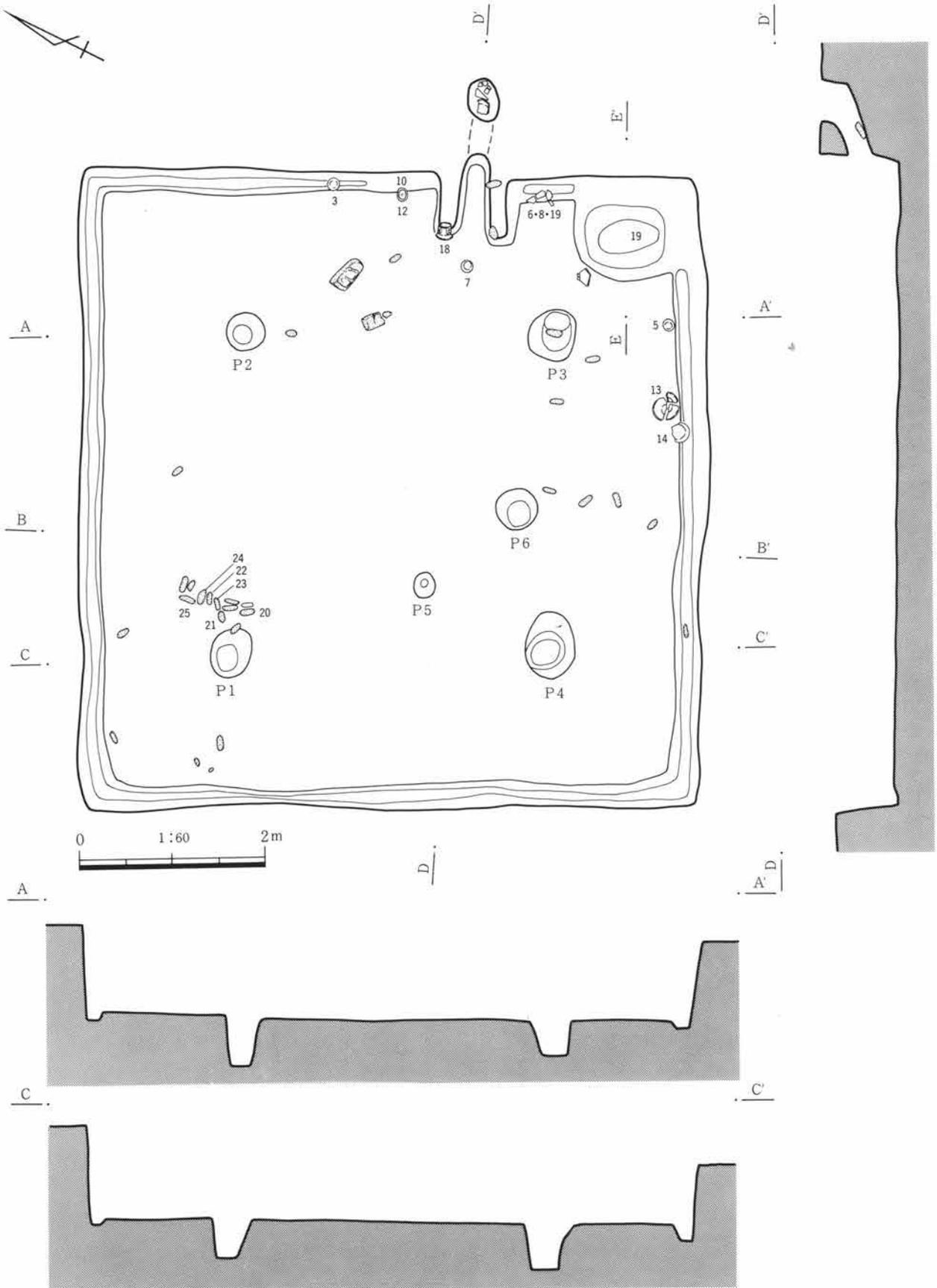
3 4区の遺構と遺物

3区と同一の台地に立地してその500m北方に位置する4区は、東西150m、南北110m、面積約11,000m²の範囲が調査された。トレンチ調査によって検出された遺構は、古墳時代後半の竪穴住居1軒と時期不明の溝状遺構1条のみであったため、遺構の所在する地点のみを拡張して調査を行った。3区との間は遺構の分布も途切れることから、4区は3区とは別個の遺跡に属するものであろう。しかし、時期的には1・2区の竪穴住居よりもやや新しい段階に位置付けられることか

ら、相互に何等かの関係を有するものと考えられる。また、4区の属する遺跡全体がこれらの遺構のみで構成されるか否かは、調査区域が狭いこともあり断定できない。溝状遺構は、遺跡内を東西に横切っている中世の用水址である女堀遺構を挟んで、竪穴住居から北側へ約360m離れた位置に検出されている。

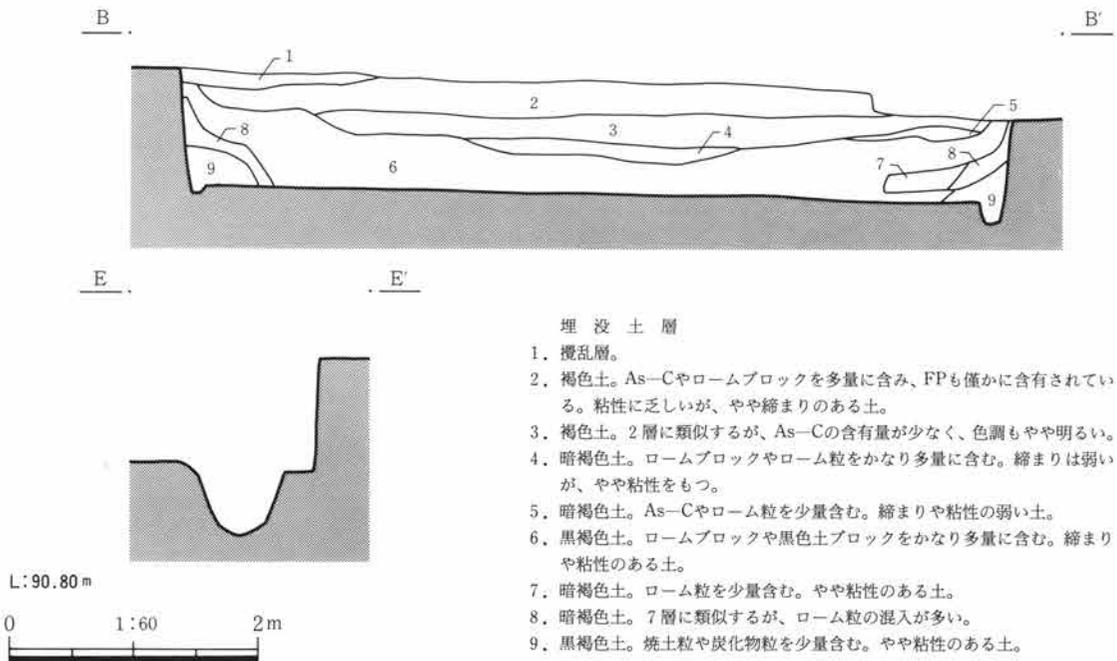
(1) 竪穴住居

1軒検出されたのみである。一辺の長さが7m弱の正方形を呈した規模の大きなもので、床面の掘り込みも深い。住居の主軸方位や竈および貯蔵穴の位置などは、1・2区の竪穴住居とも共通している。



第258図 4区I号住居(1)

II 調査の内容



埋没土層

1. 攪乱層。
2. 褐色土。As-Cやロームブロックを多量に含み、FPも僅かに含有されている。粘性に乏しいが、やや締まりのある土。
3. 褐色土。2層に類似するが、As-Cの含有量が少なく、色調もやや明るい。
4. 暗褐色土。ロームブロックやローム粒をかなり多量に含む。締まりは弱い、やや粘性をもつ。
5. 暗褐色土。As-Cやローム粒を少量含む。締まりや粘性の弱い土。
6. 黒褐色土。ロームブロックや黒色土ブロックをかなり多量に含む。締まりや粘性のある土。
7. 暗褐色土。ローム粒を少量含む。やや粘性のある土。
8. 暗褐色土。7層に類似するが、ローム粒の混入が多い。
9. 黒褐色土。焼土粒や炭化物粒を少量含む。やや粘性のある土。

第259図 4区1号住居(2)

4区1号住居

位置 R-8グリッド 写真 PL-119・120

形状 一辺が6.80mの正方形を呈する。四隅は直角で、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。

面積 44.66㎡ 方位 N-56°-E

床面 ローム土を63~105cm掘り込んで床面としている。凹凸面および傾斜の少ない平坦な床面であるが、北から南側へと比高差約10~15cmの傾斜が認められる。電手前や貯蔵穴周辺および支柱穴で囲まれた範囲は、叩き床状の堅固な面となっている。

埋没土 上層にはAs-Cまじりの黒色土が、壁際や底面の第1次埋没土にはロームブロックまじりの褐色土がレンズ状に堆積する。自然埋没の状態を示す。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ90cm、幅45cmである。煙道部は燃焼部の底面から約25cm上位の壁面中途を直径20cmで水平に掘り抜き、その後垂直に近い角度で立ち上がる。左袖部にNo18の甕を逆位にして、また右袖部に輝石安山岩の河床礫を立ててそれぞれ補強材として使用している。

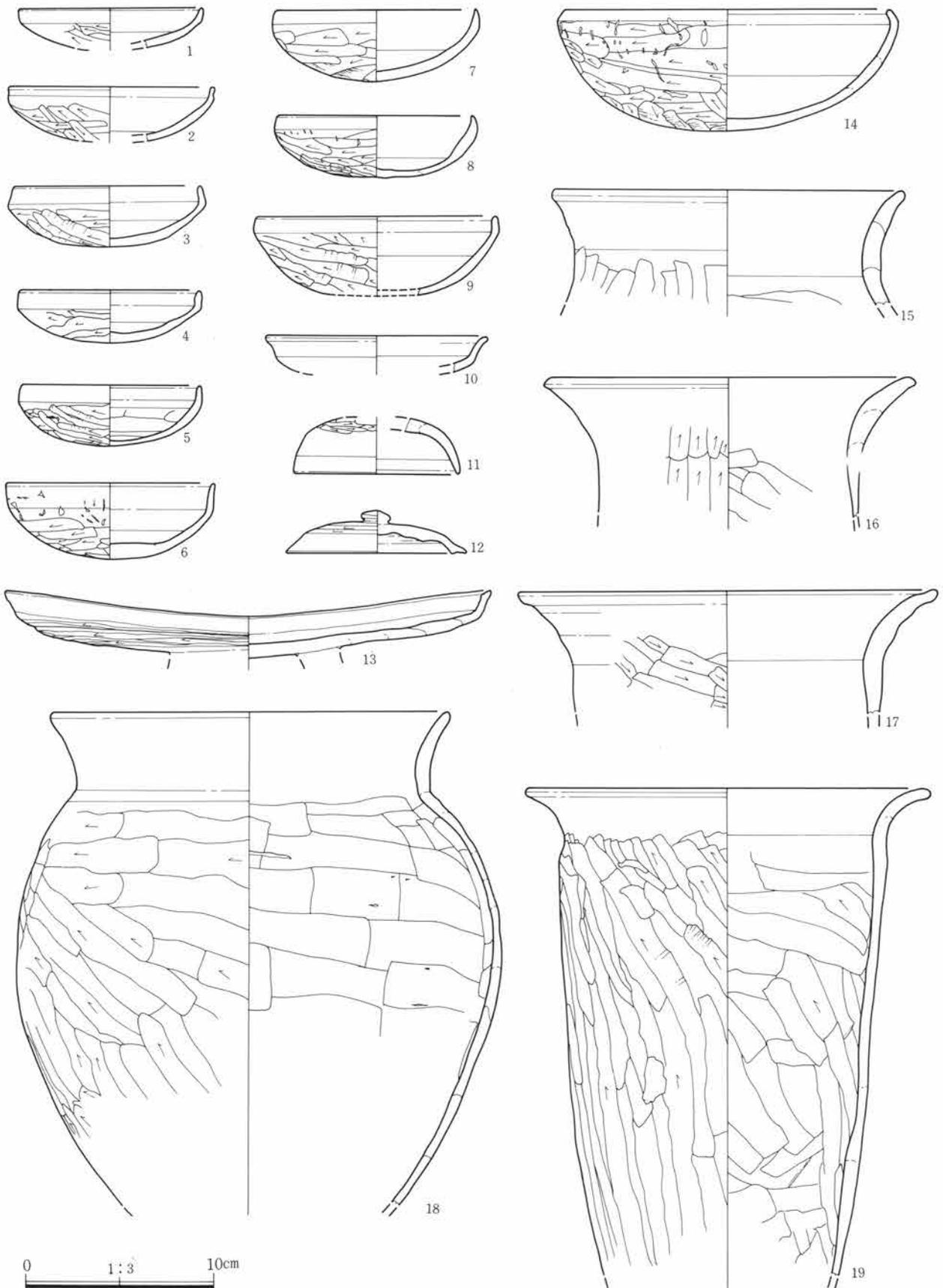
貯蔵穴 竈右側の南東隅に位置する。長軸113×短軸95

cmの隅丸方形を呈し、深さ90cmである。焼土の下からNo19の甕が出土する。

柱穴 住居の対角線上に支柱穴4本と性格不明の小ピット2本の合計6本が検出された。各支柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似形を呈する。規模はP₁~P₂:3.50m、P₂~P₃:3.40m、P₃~P₄:3.55m、P₄~P₁:3.45mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:45×42cm、P₂:40×54cm、P₃:50×36cm、P₄:55×48cm、P₅:25×16cm、P₆:45×32cmである。

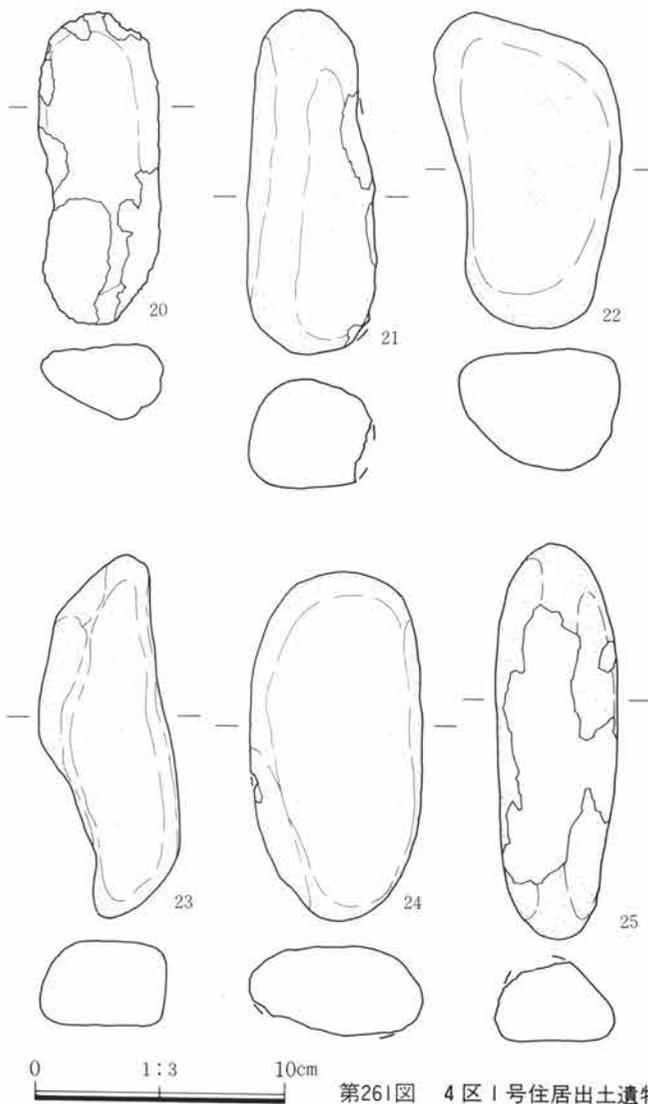
周溝 幅13~37cm、深さ7~16cmの規模で壁面に沿って全周する。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏11、甕5、須恵器の坏蓋2、脚付き盤1の合計19点が出土している。No12・14は床面に密着して、他は床面から10cm以上浮いて出土した。長径15×短径8cm前後の河床礫を利用した薦編み石が19点出土しているが、P₁に近接して12点の集中した出土がみられる。また竈の焚口部の左手前に、長径30~40cmの河床礫2点が出土しているが、いずれも火熱による割れが認められ、竈天井部の補強材として使用していたものと推定される。(遺物観察表:109・110頁)



第260図 4区1号住居出土遺物(1)

II 調査の内容



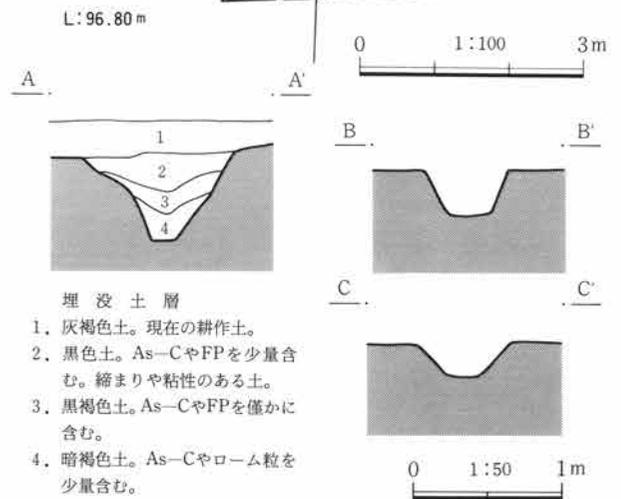
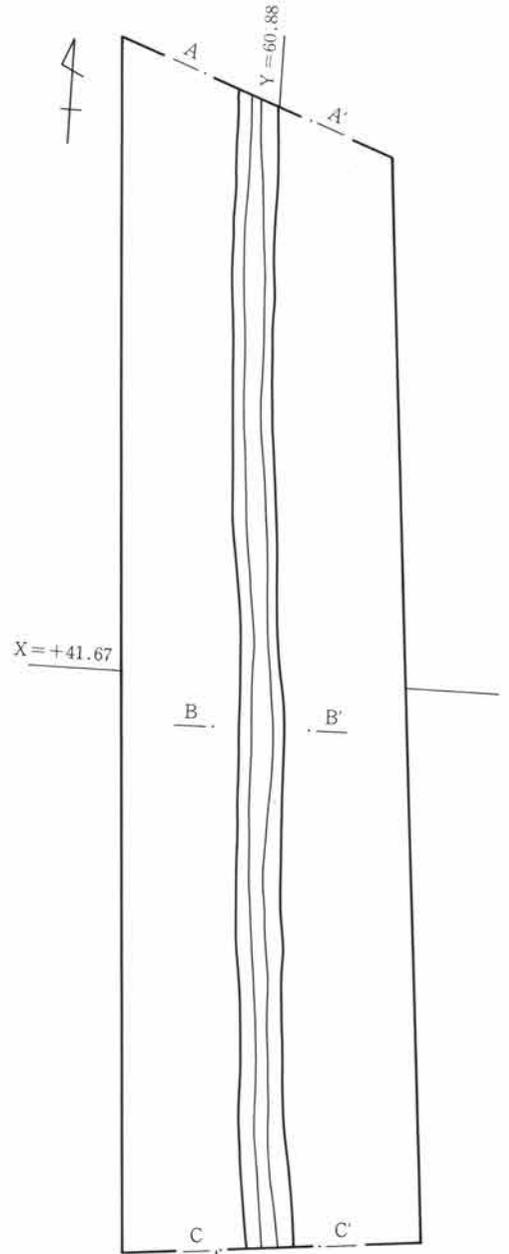
第261図 4区1号住居出土遺物(2)

(2) 溝状遺構

1条検出されたのみである。時期・性格ともに不明であるが、流水の痕跡は認められない。

4区1号溝 台地の中央部をほぼ南北に縦走している。断面形は、2区1号溝と同様に法面勾配が約60°前後の逆台形状を呈する。またその規模は、確認長15.5m、上幅45~60cm、下幅15~25cm、深さ24~33cmである。底面の勾配は一定していない。溝内の埋没土は、上層にAs-Cを含む黒色土が、中・下層に黒褐色土および暗褐色土がレンズ状に堆積し、自然埋没の状態を示す。古墳時代以降の堆積と思われるII層上面より掘り込むことから、その掘削時期も当該期以降と思われる。

(PL-121)



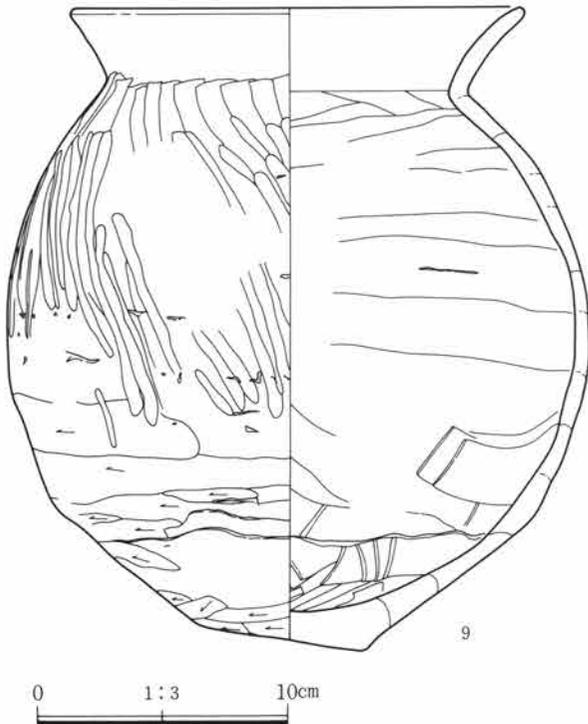
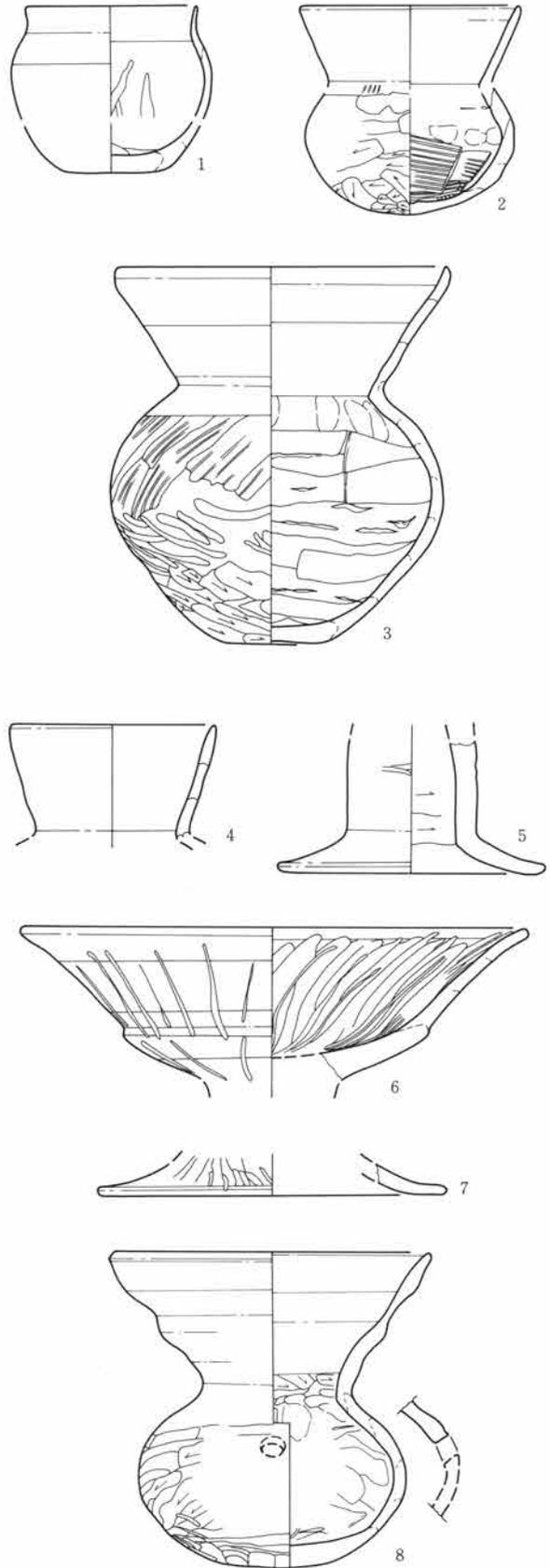
第262図 4区1号溝

4 6区の遺構と遺物

沖積地を挟んで1・2区の南東側の台地に位置している。農道部分の約750㎡が調査され、古墳時代中期の竪穴住居2軒と性格不明の焼土痕1カ所が検出された。全体的な遺構の分布は希薄のようである。

(1) 竪穴住居

2軒検出されているのみであるが、時期的には1・2区の竪穴住居に近似しており、相互に何等かの有機的な関係をもつと考えられる。1号住居は炉付きの住居と想定されるが、竈付きの2号住居よりも古式の土器を出土している。また1号住居は周壁面に3本の支柱穴を穿つタイプであり、他区の竪穴住居にはみられない構造をもっている。各住居の主軸方位や竈の位置は、1・2区の竪穴住居とも類似した内容をもっている。



第263図 6区1号住居出土遺物

II 調査の内容

6区1号住居

位置 K-10グリッド 写真 PL-121・122

形状 長軸を東西にもつが、正方形に近い形状を呈する。四隅は丸く、周壁は外側へ弧状に膨らむ。規模は長辺3.90×短辺3.70mである。

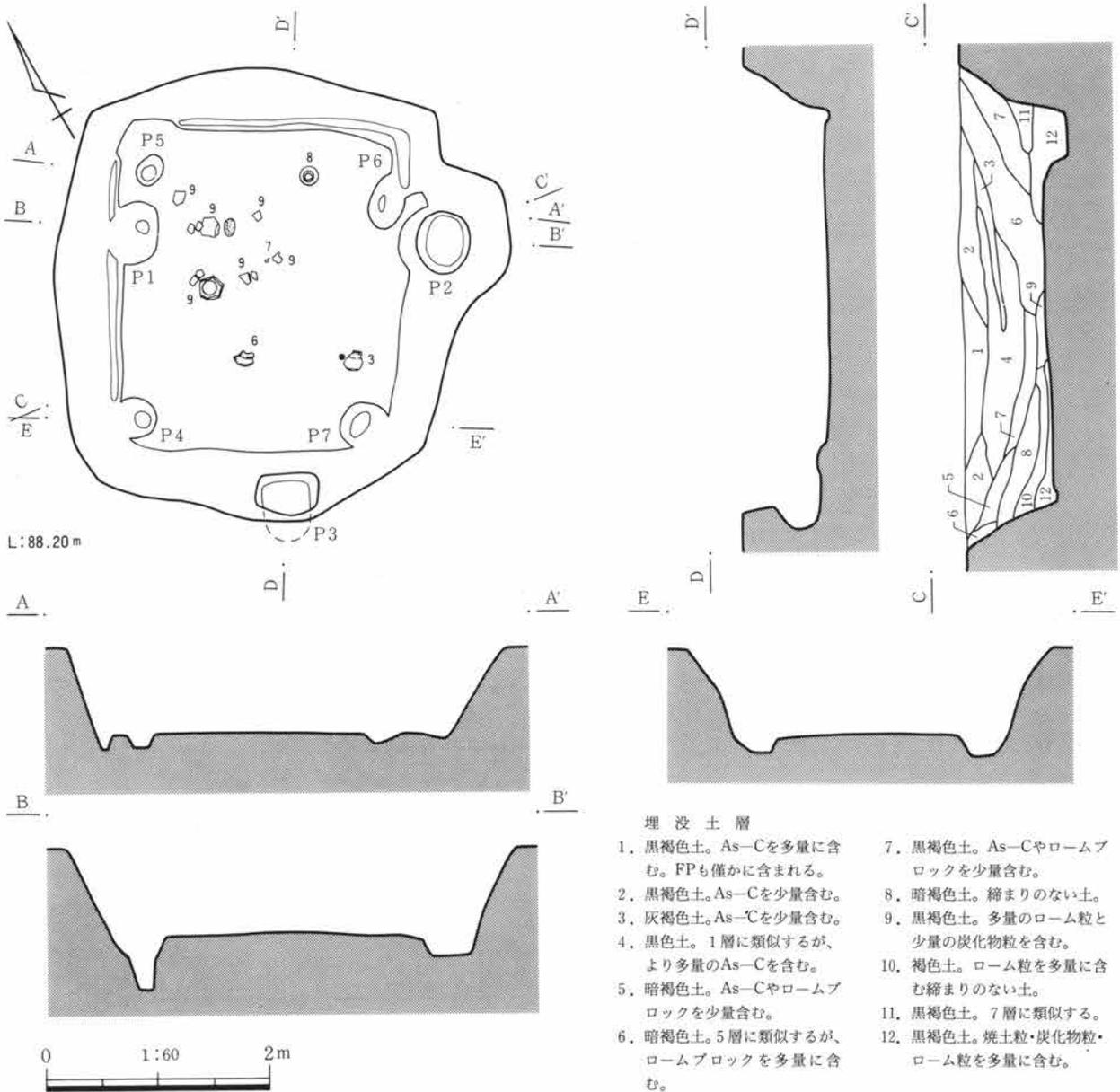
面積 12.74m² 方位 N-57°-W

床面 ローム土を70~77cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。叩き床状ほどではないが、全体的に堅く踏み固められている。

埋没土 上~中層にかけてAs-Cまじりの黒色土が、壁際や底面の第1次埋没土にはロームブロックまじりの暗褐色土がレンズ状に堆積する。各層の堆積状況から自然埋没したと判断される。

炉 5世紀前半代の土器を出土していることから、炉付き住居と判断されるが、床面上には火熱を受けた痕跡は見当たらず、炉の位置を特定することはできなかった。

柱穴 周壁に接するかあるいはその外側にはみ出して掘り下げられた3本の主柱穴と、住居の四隅に4本



埋没土層

- | | |
|---------------------------------|-------------------------------|
| 1. 黒褐色土。As-Cを多量に含む。FPも僅かに含まれる。 | 7. 黒褐色土。As-Cやロームブロックを少量含む。 |
| 2. 黒褐色土。As-Cを少量含む。 | 8. 暗褐色土。締まりのない土。 |
| 3. 灰褐色土。As-Cを少量含む。 | 9. 黒褐色土。多量のローム粒と少量の炭化物粒を含む。 |
| 4. 黒色土。1層に類似するが、より多量のAs-Cを含む。 | 10. 褐色土。ローム粒を多量に含む締まりのない土。 |
| 5. 暗褐色土。As-Cやロームブロックを少量含む。 | 11. 黒褐色土。7層に類似する。 |
| 6. 暗褐色土。5層に類似するが、ロームブロックを多量に含む。 | 12. 黒褐色土。焼土粒・炭化物粒・ローム粒を多量に含む。 |

第264図 6区1号住居

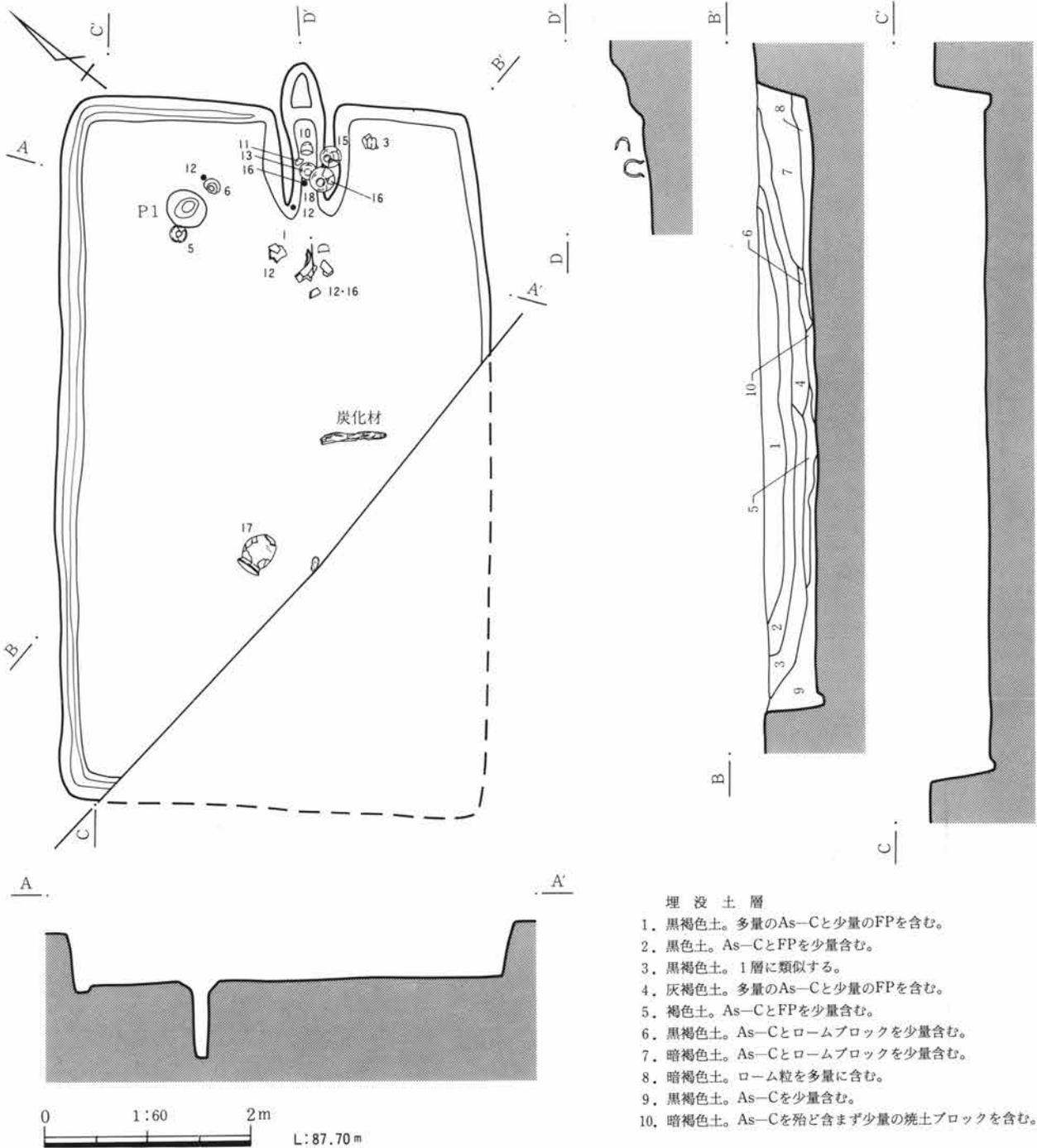
の小ピットを検出した。各支柱穴の心々間を結んだ形状は三角形状を呈し、その規模はP₁~P₂:2.73m、P₂~P₃:2.78m、P₃~P₁:2.78mである。また各柱穴の規模(径×深さ)は、P₁:50×48cm、P₂:110×95cm、P₃:60×33cm、P₄:25×10cm、P₅:30×8cm、P₆:40×14cm、P₇:35×13cmである。

周溝 北壁および東壁沿いのみに検出された。規模

は幅39~63cm、深さ9cmである。

遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、小型甕1、甕1、壺1、埴2、高坏3、甃1の合計9点が存在する。No.6・8・9は床面に密着して、他は床面から3~5cm以上浮いて出土。

(遺物観察表:110・111頁)



第265図 6区2号住居

II 調査の内容

6区2号住居

位置 Q-10グリッド 写真 PL-123・124

形状 水道管の埋設や一部が調査区域にかかっているため、全掘できていないが、長軸を東西にもつ長方形を呈する。四隅は丸く、周壁はほぼ直線的に掘り込まれている。規模は長辺6.75×短辺4.20mである。

面積 (27.22㎡) 方位 N-53°-E

床面 ローム土を46~67cm掘り込んで床面としている。若干の凹凸面をもつが、傾斜の少ない平坦な床面である。竈手前や床面中央部は、叩き床状の堅固な面となっている。

埋没土 上~中層にかけてAs-Cまじりの黒色土が、壁際や底面の第1次埋没土にはロームブロックまじりの暗褐色土がレンズ状に堆積する。各層の堆積は自然埋没の状態を示す。

竈 東壁中央部の南側寄りに位置し、両袖部が残存する。燃焼部は周壁よりも内側に造り付けられ、その規模は長さ95cm、幅35cmである。煙道部は幅45cm、

長さ55cmの掘り方のみ残存し、燃焼部より約30°の角度で立ち上がる。燃焼部内より小型甕 (No.10)、甕 (No.11・12・16) が出土した。また右袖上にはNo.15・18の2点の甕が逆位に出土している。

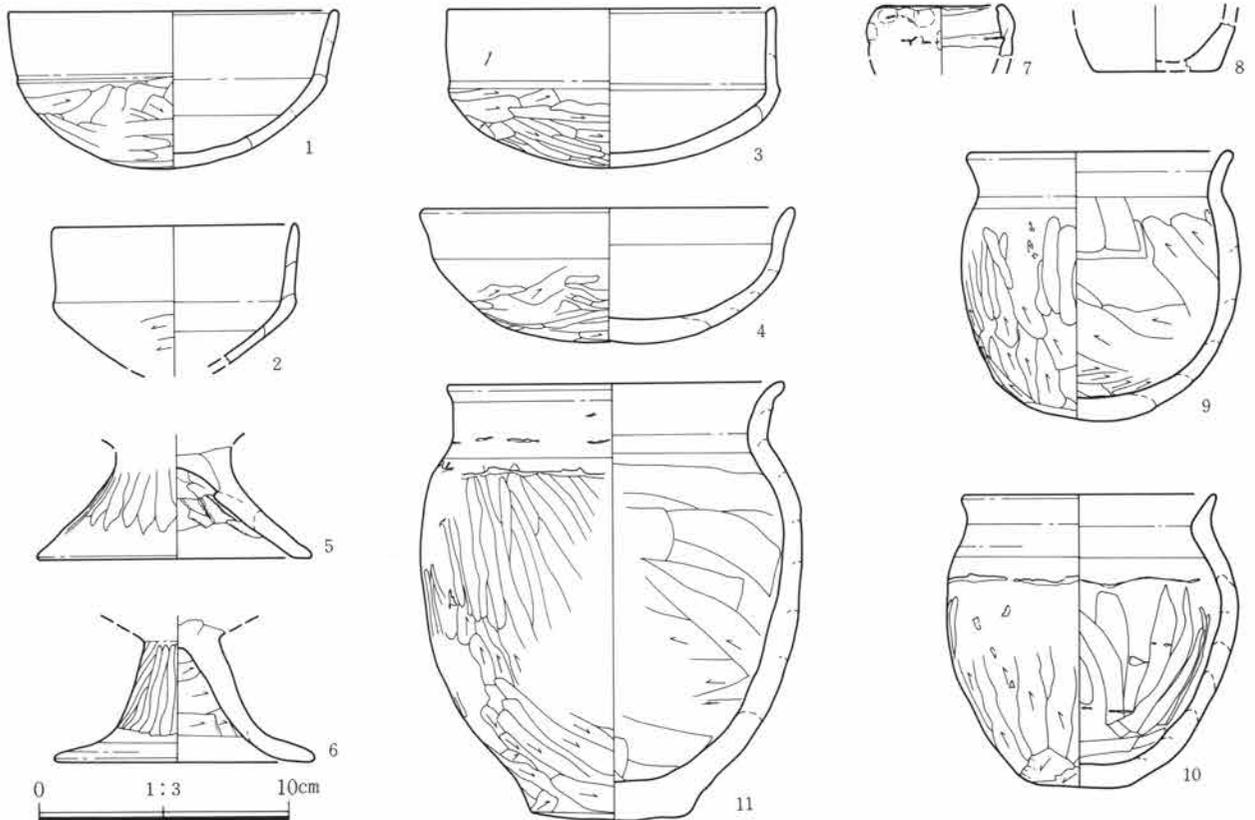
柱穴 竈の右側に1本検出し得たのみであるが、4本主柱穴の構造と推定される。柱穴の規模は直径35×深さ74cmである。

周溝 周壁に沿って全周するものと推定される。規模は幅14~25cm、深さ2~7cmである。

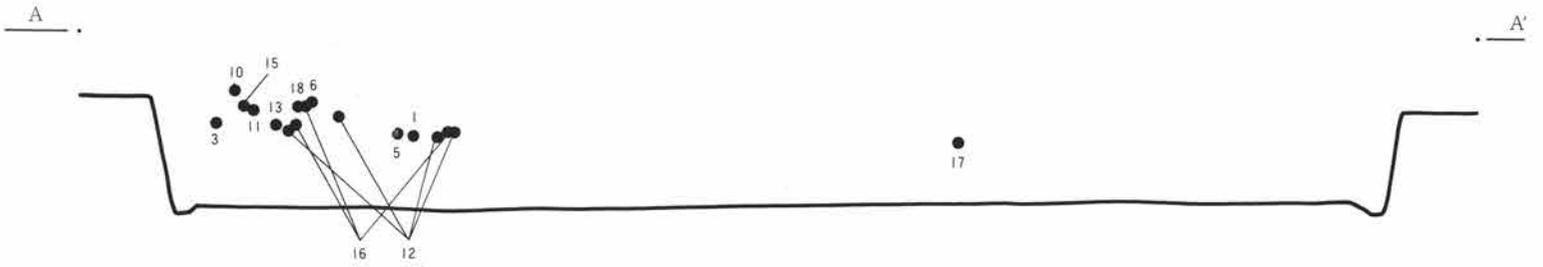
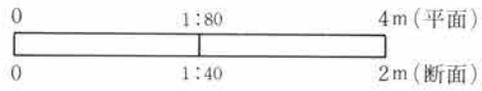
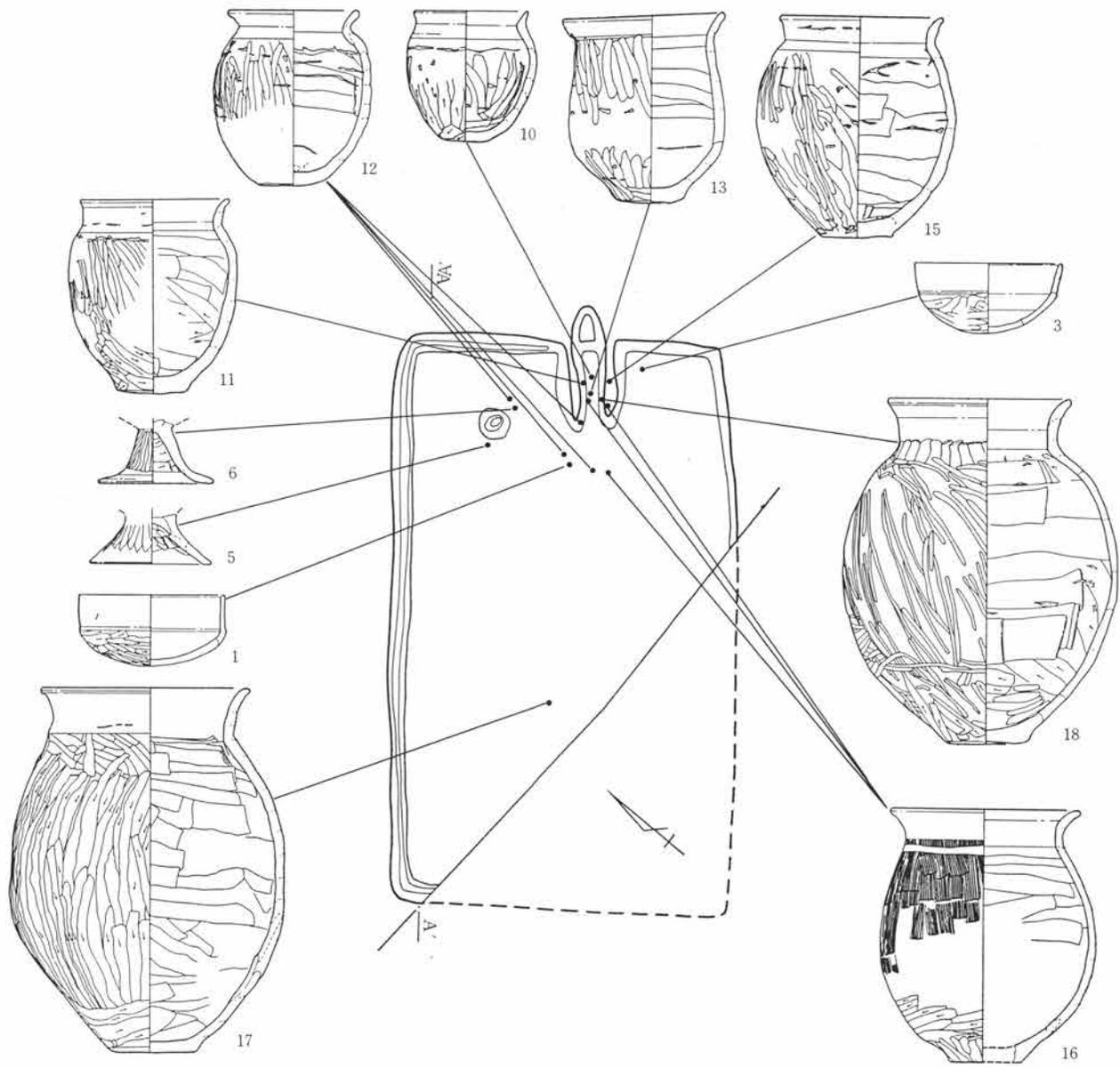
遺物 埋没土中からの出土を含め実測可能な土器は、坏4、甕10、甌1、壺1、高坏2、小型粗製土器2の合計20点が出土している。No.1・5・12・17は床面に密着して、他は床面から5~17cm浮いて出土した。ほかに床面中央部から、炭化材1点が出土している。

(遺物観察表: 111・112頁)

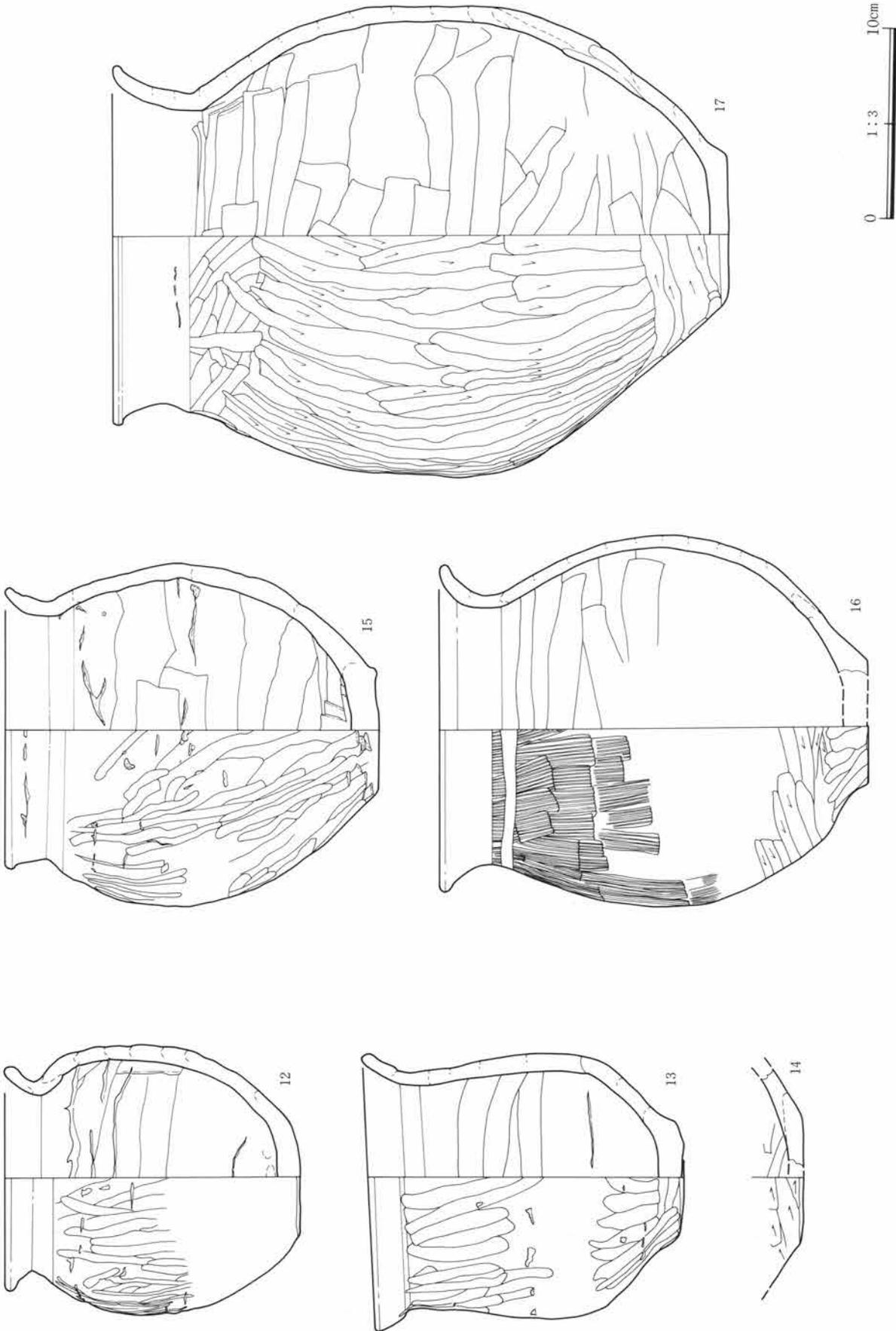
備考 屋根材の一部と思われる炭化材が出土しており、焼失家屋の可能性はある。



第266図 6区2号住居出土遺物(1)

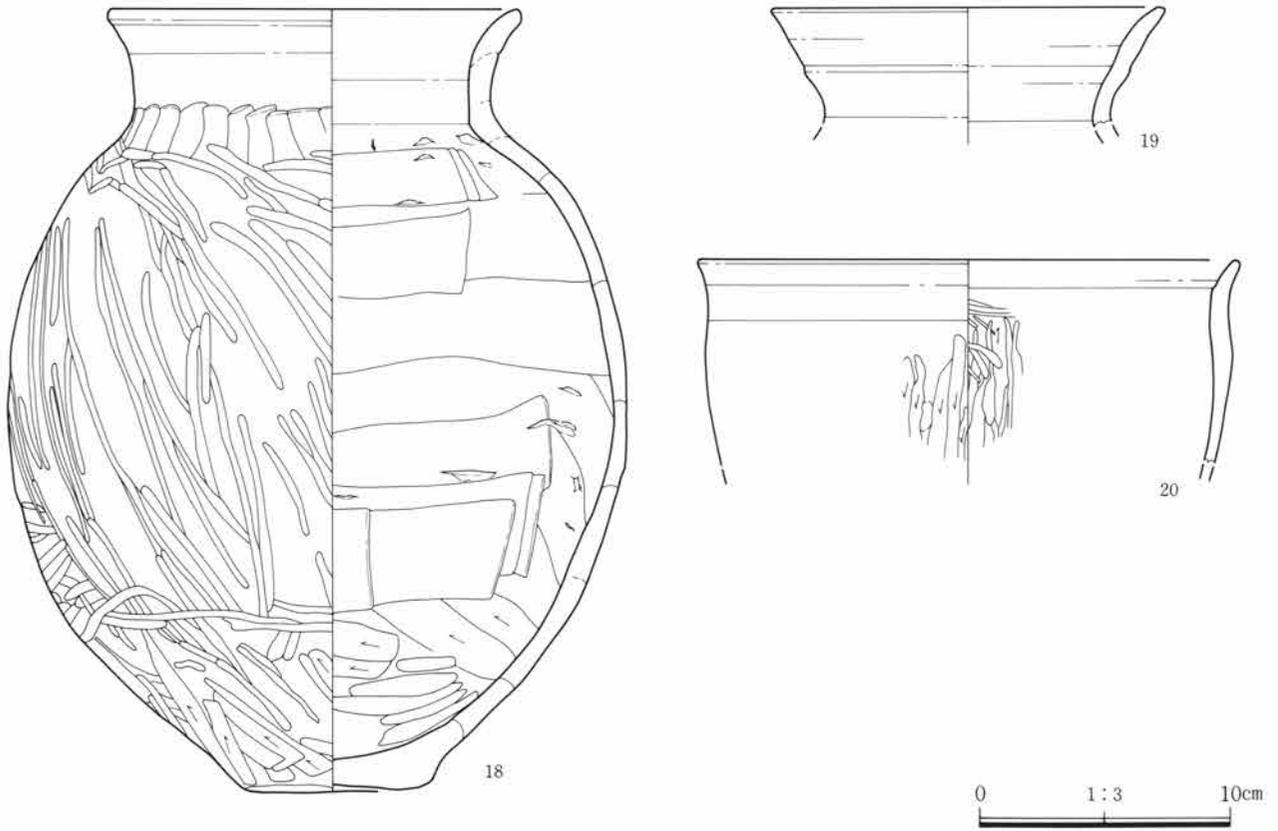


第267図 6区2号住居の遺物出土状況



第268図 6区2号住居出土遺物(2)

II 調査の内容

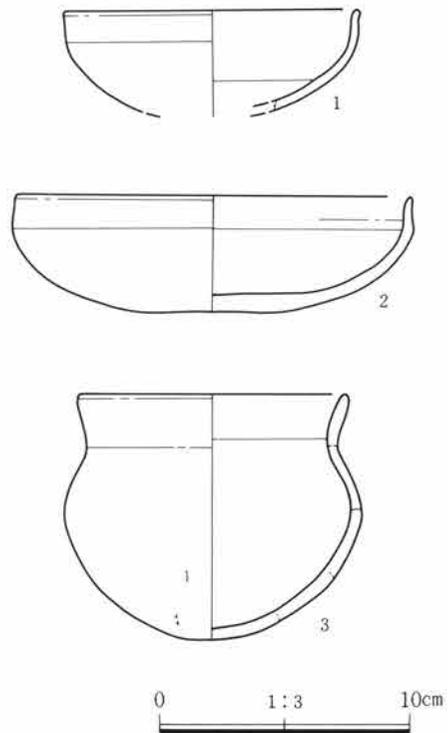


第269図 6区2号住居出土遺物(3)

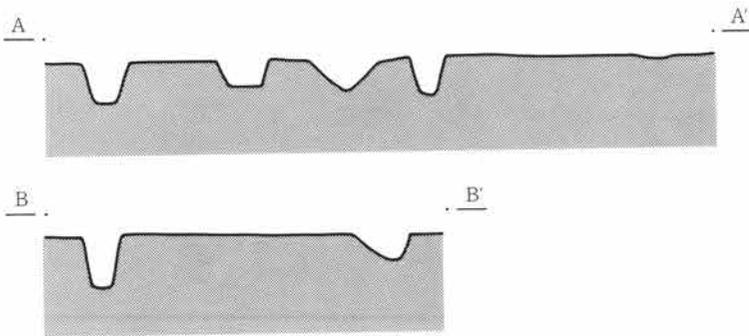
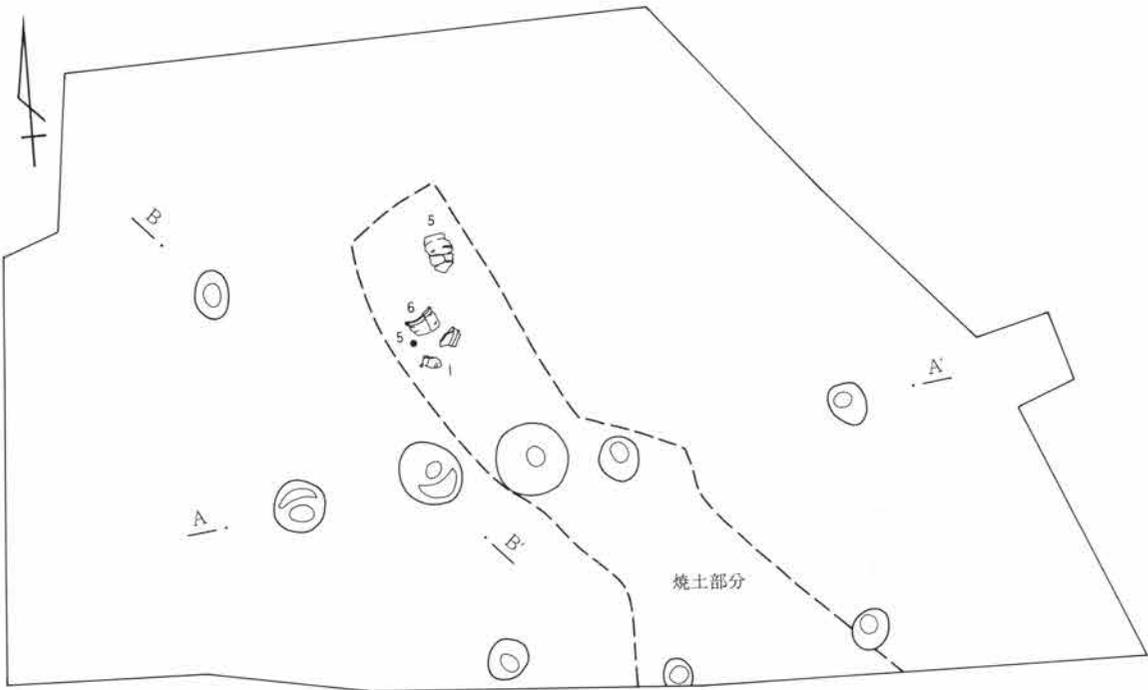
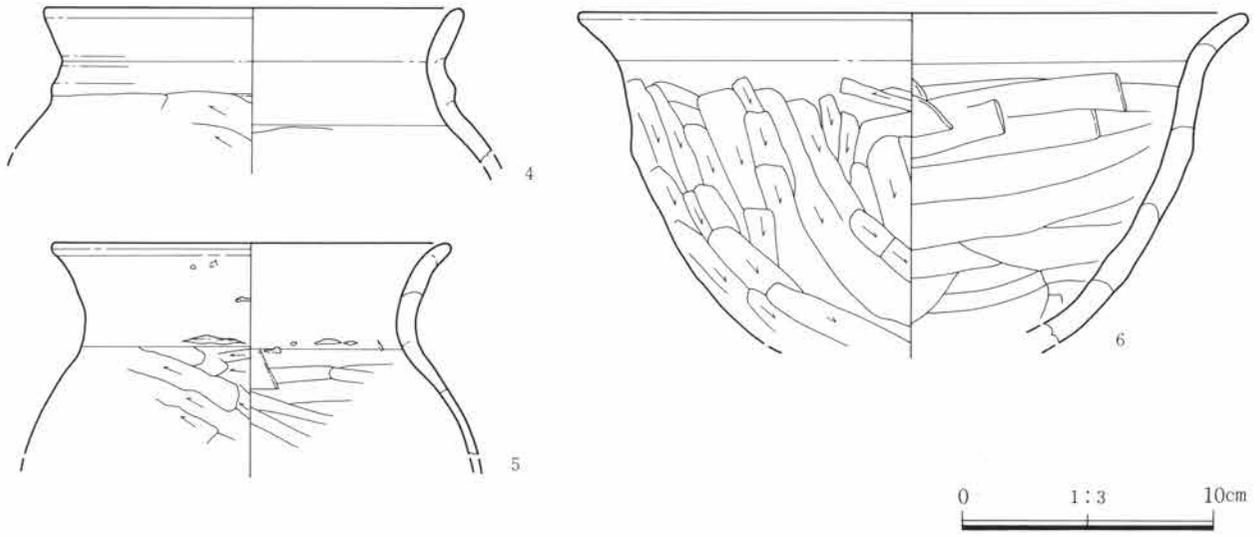
(2) 焼土部分からの出土土器

W-10グリッド付近より、坏2、小型甕1、鉢1、甕2の合計6点の土師器が、ローム層上面より10~20cmほど浮いた状態で出土している。現代の耕作による攪乱がローム上面にまで達しているために、これらの土器とを関係付ける遺構の存在の有無を確認することはできなかったが、火熱を受けて焼土化した部分が幅1m、長さ5mの範囲に帯び状に認められ、各土器はこの焼土の範囲内より出土した。また、これらの土器や焼土痕と時期的に伴うか否かは確定できないが、直径30~60cm、深さ25~30cmの規模の小ピットが9個検出されている。これらのピットには、柱痕や配列の規則性は認められず、柱穴的な性格をもつか否かについては確定できない。

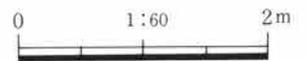
(PL-122、遺物観察表：112頁)



第270図 6区焼土部分の出土遺物



L: 88.90 m



第271図 6区の焼土部分と出土遺物

III 科学的分析

荒砥北三木堂遺跡出土須恵器の胎土分析

(株) 第四紀地質研究所 井上 巖

1 X線回折試験および電子顕微鏡観察

(1) 実験条件

A 試料

分析に供した試料は第9表胎土性状表に示すとおりである。X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥した後に、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{m/m}$ の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

B X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物および造岩鉱物の同定は、X線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target : Cu, Filter : Ni, Voltage : 40KV, Current : 30mA, ステップ角度 : 0.02° 、計測時間 : 0.5SEC。

C 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物およびガラス生成の度合いについての観察は、電子顕微鏡によって行った。観察には日本電子製T-20を用い、倍率は35、350、750、1,500、5,000の5段階で行い、写真撮影をした。35~350倍は胎土の組織、750~5,000倍は粘土鉱物およびガラスの生成状態を観察した。

(2) 実験結果の取り扱い

実験結果は第9表胎土性状表に示すとおりである。第9表右側には、X線回折試験に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の組成が示してあり、左側には各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの高さ(強度)をm/m単位で測定したものである。電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト(Mullite)、クリストバーライト(Cristobalite)等の組成上の組み合わせとによって、焼成ランクを決定した。

A 組成分類

a Mo-Mi-Hb 三角ダイアグラム

第272図Aに示すように、三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土に

第9表 胎土性状表

資料No 三木堂	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘土		鉱物		造岩		鉱物		ガラス	備考	
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch-Mi-Hb	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Pyrite	K-fels	Albite	Qt			Pl
1	B	I	14	20					152		1948	111	197	767	発泡 細粒砂、碎屑性粘土。
2	B	I	14	20					173		1443	109	217	250	発泡 細粒砂、碎屑性粘土。
3	B	I	14	20					176		3055	83	196	732	粗粒 細粒砂、碎屑性粘土。
4	B	I	14	20					128		2157	99	179	621	発泡 細粒、均質な粘土で構成。
5	B	I	14	20					193	127	917	117	213	384	発泡 細粒砂、碎屑性粘土。(均質)。
6	B	I	14	20					213		1432	97	246	253	発泡 粗粒砂、碎屑性粘土。
7	B	I	14	20					127		2687	155	165	827	粗粒 粗粒砂、碎屑性粘土。(均質)。
8	B	I	14	20					304		2058	96	290	513	粗粒 粗粒砂、碎屑性粘土。
9	B	I	14	20					230		2268	84	249	807	粗粒 粗粒砂、碎屑性粘土。
10	B	I~II	14	20					179		3082	72	210	268	粗粒 粗粒砂、碎屑性粘土。
11	B	I	14	20					194		2339	85	191	157	粗粒 粗粒砂、碎屑性粘土。
12	B	I	14	20					214		2457	89	231	389	粗粒 粗粒砂、碎屑性粘土。
13	B	I	14	20					247		2195	67	278	672	粗粒 細粒砂、碎屑性粘土。
14	B	II~III	14	20							3134	91			粗粒 中~粗粒 細粒砂、碎屑性粘土。
15	B	I	14	20					227		1685	95	241	309	発泡 細粒、均質な粘土で構成。
16	B	I	14	20					342		1418	92	305	873	発泡 細粒砂、碎屑性粘土。(均質)。
17	B	I	14	20					192		1595	89	229	247	発泡 粗粒砂、碎屑性粘土。
18	B	I	14	20					205		1860	93	248	424	粗粒 中粒砂、碎屑性粘土。(均質)。
19	B	I	14	20					230	96	1333	89	222	173	粗粒 細粒、均質な粘土で構成。
20	B	I	14	20					269		1081	87	262	1438	粗粒 細粒砂、碎屑性粘土。(均質)。
21	B	I	14	20					260		897	160	139	644	発泡 細粒砂、碎屑性粘土。(均質)。
22	B	I	14	20					181		1577	98	177	239	粗粒 細粒砂、碎屑性粘土。
23	B	I	14	20					160		2976	97	178	316	粗粒 細粒砂、碎屑性粘土。(均質)。
24	B	I	14	20					198		1790	111	252	528	粗粒 細粒砂、碎屑性粘土。(均質)。
25	B	I	14	20					186		1316	98	209	270	発泡 細粒砂、碎屑性粘土。(均質)。
26	B	I~II	14	20					93		2068	101	107	276	粗粒 細粒砂、碎屑性粘土。
27	B	I~II	14	20					98		1238	321	85	911	粗粒 細粒砂、碎屑性粘土。(均質)。
28	B	I	14	20					196		1550	82	227	679	粗粒 細粒砂、碎屑性粘土。(均質)。
29	A	I	5	20			88		242		1447	97	270	1007	粗粒 細粒砂、碎屑性粘土。
30	B	I	14	20					215		1612	82	211	526	粗粒 細粒砂、碎屑性粘土。
31	B	I	14	20					251		1291	91	287	454	粗粒 細粒砂、碎屑性粘土。(均質)。
32	B	I	14	20					261		1847	90	503	321	粗粒 細粒砂、碎屑性粘土。
33	B	I	14	20					269		2241	74	300	445	粗粒 細粒砂、碎屑性粘土。(均質)。
34	B	I	14	20					227		2022	80	232	863	粗粒 細粒砂、碎屑性粘土。(均質)。
35	B	I	14	20					195		2977	64	233	250	粗粒 細粒砂、碎屑性粘土。
36	B	I	14	20					210		1623	98	166	173	粗粒 細粒砂、碎屑性粘土。(均質)。

凡例

焼成ランク Mu: I Mu-Cr: II Cr-glass: III glass: IV
 原土 Mont: モンモロロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch(Fe): 鉄緑泥石 Ch(Mg): マグネシウム緑泥石 Pyrite: 黄鉄鉱 K-fels: カリ長石
 Albite: ソウ長石 Qt: 石英 Pl: 斜長石 Mu: ムライト Cr: クリスタクトバートライト

ついて行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mo、Mi、Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14に入れ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb) のX線回折試験におけるチャートのピーク高をパーセント (%) で表示する。モンモリロナイトは $Mo / (Mo + Mi + Hb) \times 100$ でパーセントとして求め、同様にMi、Hbも計算し三角ダイアグラムに記載する。三角ダイアグラム内の1～4は、Mo、Mi、Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は、第272図に示すとうりである。

b Mo-Ch、Mi-Hb 菱形ダイアグラム

第272図Bに示すように、菱形ダイアグラムを1～19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) のうち、①3成分以上含まれない②Mica、Chの2成分が含まれない③Mica、Hbの2成分が含まれない、の3例がある。

菱形ダイアグラムは Mont-Ch、Mica-Hb の組み合わせを表示するものである。Mont-Ch、Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの高さを各々の組み合わせ毎にパーセントで表すもので、例えば $Mo / (Mo + Ch) \times 100$ と計算し、Mi、Hb、Chも各々同様に計算し、記載する。菱形ダイアグラム内にある1～7はMo、Mi、Hb、Chの4成分を含み、各辺はMo、Mi、Hb、Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は、第272図Bに示すとうりである。

B 焼成ランク

焼成ランクの区分は、X線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

ムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト (Cristobalite) はムライトより低い温度で、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から土器胎土の焼成ランクをI～Vの5段階に区分した。

焼成ランクI：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。

焼成ランクII：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。

焼成ランクIII：ガラスの中にクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。

焼成ランクIV：ガラスのみが生成し、原土(素地土)の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。

焼成ランクV：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

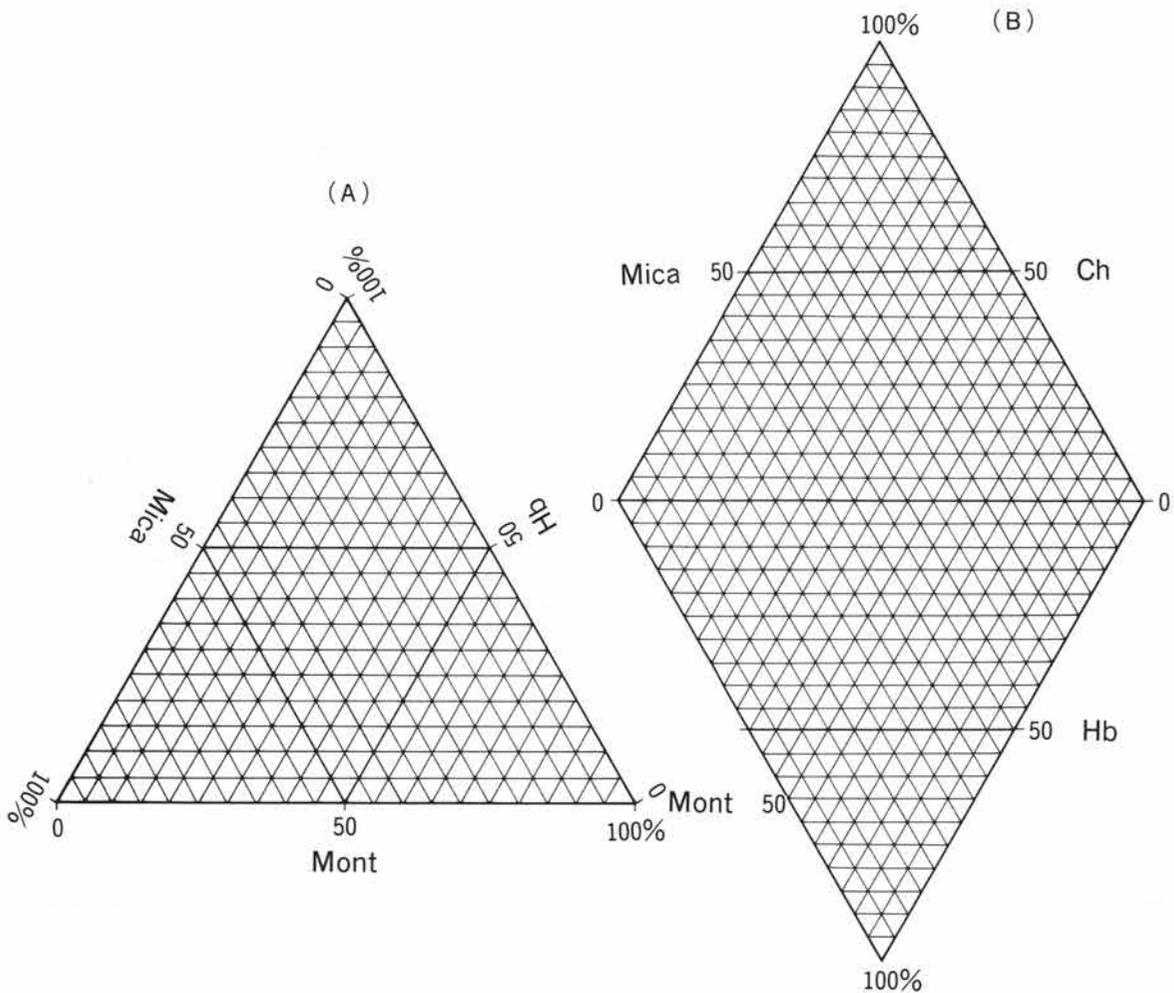
以上のI～Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組み合わせと幾分異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第9表の右端の備考に理由を記した。

C タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイアグラム、菱形ダイアグラムの位置分類による組み合わせによって行った。同じ組成をもった土器胎土は、位置分類の数字組み合わせも同じはずである。

タイプ分類は、三角ダイアグラムの位置分類における数字の小さいものの組み合わせから作られるもので、便宜上、アルファベットの大文字を使用し、同じ組み合わせのものは同じ文字を使用して表現した。

例えば、三角ダイアグラムの1と菱形ダイアグラムの1の組み合わせはA、三角ダイアグラムの2と菱形ダイアグラムの15はBという具合にである。なお、タイプ分類のA、B、Cなどは便宜上つけたものであり、今後試料数の増加にともなって統一した分類名称を与える考えである。



第272図 三角(A)・菱形(B)ダイアグラム位置分類図

2 実験結果

(1) タイプ分類

土器の分析は、荒砥北三木堂遺跡出土土器21個（北三木堂-No.1～19・26・27）と荒砥島原遺跡出土土器⁽¹⁾（北三木堂-No.20～24）、荒砥北原遺跡出土土器⁽²⁾（北三木堂-No.25）、愛知県猿投窯の土器2個⁽³⁾（北三木堂-No.28・29）、陶邑古窯址群出土土器7個⁽⁴⁾（北三木堂-No.30～36）を併せて行い、荒砥北三木堂遺跡の土器と比較対比した。分析した土器は第9表胎土性状表に示すように、三角ダイアグラム、菱形ダイアグラムの位置分類、焼成ランクに基づいてA・Bの2タイプに分類された。第9表でも明らかのように、高温で焼成した際に生成されるムライト、クリストバーライトが検出され、本来の組成は分解してガラス化していることを示している。そのため、No.29以外はMont、Mica、Hb、Chの4成分は検出されておらず、三角・菱形ダイアグラムは省略した。電子顕微鏡による分析では、ガラスは粗粒で一部で発泡しており、焼成ランクはIあるいはI～IIと非常に高いのが特徴であり、ムライト、クリストバーライトが検出されたこととよく一致している。

Aタイプ(北三木堂-No.29)：Hb 1成分を含み、Mont、Mica、Chの3成分にかける。

個体数は1個と少ない。このサンプルは猿投窯から出土したものである。

Bタイプ(北三木堂-No.1～28、30～36)：Mont、Mica、Hb、Chの4成分は高温で焼成されたために分解し、ガラス化したものである。本来の組成とは異なる。

今回分析した土器は5世紀中葉から後半にかけて作られた須恵器であり、高温で焼成されているためにタイプ分類は2タイプとなったもので、本来の組成を反映しているものではない。

(2) 石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は、粘土の材質、土器の焼成温度と

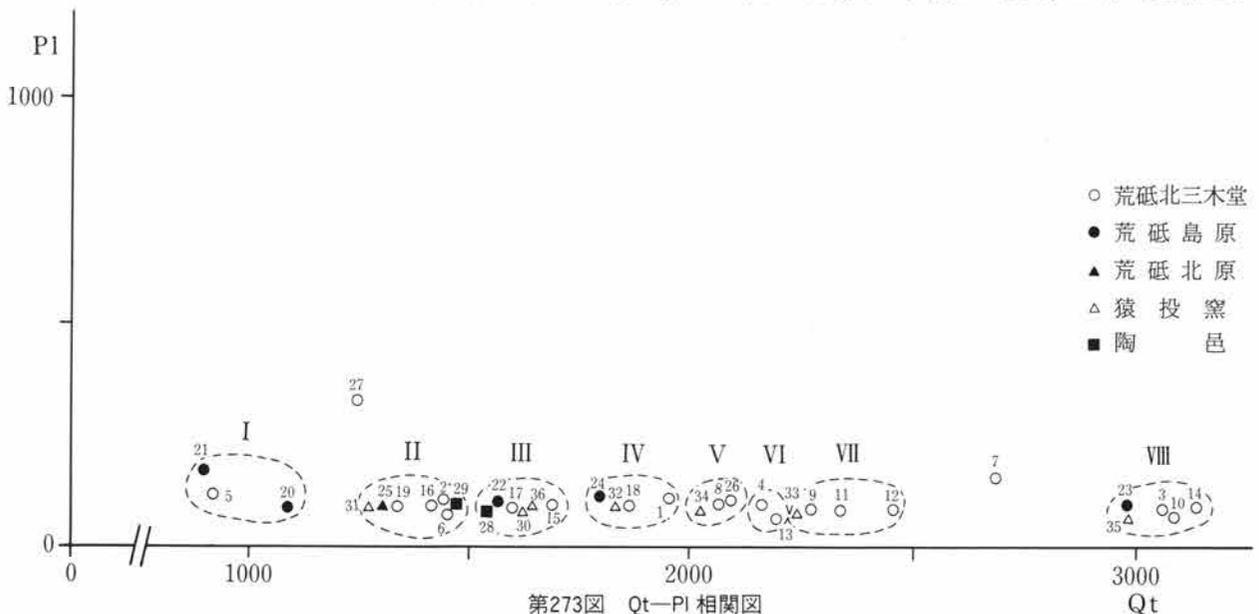
註1 荒砥島原遺跡の須恵器のうち、No.20・21は報告済みであるが、No.22～24については報告漏れの資料である。No.22～24はともにE区16号住居の埋没土中より出土している。

『荒砥島原遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984

註2 7号住居出土の高坏。
『荒砥北原遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986

註3 No.28・29ともに東山111号窯出土の須恵器。

註4 No.30～32は陶器山地区71号窯、No.33・34は同84号窯、No.35・36は高蔵寺地区73号窯出土の須恵器。



大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは、個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。自然状態における各地の砂は、個々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地域における砂は各々固有の石英-斜長石比を有しているといえる。この固有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは、前記のように各々の集団の有する固有の技術の一端である。

第271図の石英 (Qt) - 斜長石 (Pl) 相関図に示すように、土器は I ~ VIII の 8 つのグループと “その他” に分類された。

I グループ (北三木堂-No.5・20・21) : このグループは石英の強度が低い。No.5 は明灰色で、胎土が良質の土器で、No.28と29の2個の猿投窯の土器とよく似ているのが特徴である。器種的には甕・短頸壺・高坏で構成されている。II

グループ (北三木堂-No.2・6・16・19・25) : No.16・19・25の3個は明らかに良質の胎土を使用しており、セピア色をしたものが主体で、良質の胎土で焼きがいいことが特徴である。器種的には高坏が3個と樽形甕・甕で構成される。

IIIグループ (北三木堂-No.15・17・22) : セピア色系の土器で構成されるもので、高坏・樽形甕・甕と器種的に統一性がない。

IVグループ (北三木堂-No.1・18・24) : 灰色~暗灰色を呈する土器が主体となるもので、甕・甕・蓋で構成される。

Vグループ (北三木堂-No.8・26) : セピア色系の土器で、粗粒の砂を混入した胎土を使っている。坏と高坏で構成される。

VIグループ (北三木堂-No.4・13) : 灰色~暗灰色の土器で、甕と蓋で構成される。

VIIグループ (北三木堂-No.9・11・12) : セピア色系の土器が主体で、中~粗粒の砂を混入した胎土で特徴付けられる。器種的には坏・蓋で統一されている。

VIIIグループ (北三木堂-No.3・10・14・23) : 石英の強度が高いグループで、粗粒の砂を混入し、灰色~暗灰色で、砂質な感じのする胎土が特徴である。器種的には坏・蓋・甕で構成される。

“その他” (北三木堂-No.7・27) : No.7 は暗灰色で、粗粒の砂を混入した土器で、他と比較して異質である。No.27は斜長石の強度が高く、暗灰色の胎土で構成され、異質である。

荒砥北三木堂遺跡の土器は、I ~ VIII の 8 つのグループと “その他” に分類された。これらの結果を見てくると、セピア色とそうでない灰色~暗灰色のものとは比較的明瞭に分かれているようである。また、良質の素地土を使っているものと、粗粒の砂を入れているものとも比較的よく分かれている。このようにみえてくると、荒砥北三木堂遺跡で出土した土器は、材質的に比較的多くのタイプが含まれていることがわかる。

次に、荒砥北三木堂遺跡の土器を愛知県の猿投窯、大阪府の陶邑古窯址群から出土した土器と比較し、検討してみると、次のようになる。

III 科学的分析

猿投窯の土器は明灰色で、見た目には花崗岩質的な岩相を示しており、No.28と29は第273図において接近した状況にあり、両者はよく似ていることになる。猿投窯の土器と比較して、陶邑古窯址群の土器は灰色～暗灰色およびセピア色のものと変化に富んでおり、全体に分散傾向にある。

猿投窯の土器と類似した岩相を示すものとしては、No.5のサンプルだけのように見受けられる。

また、陶邑古窯址群の土器は全体に分散傾向にあり、荒砥北三木堂遺跡で出土した土器が作るグループの中に入ってくる状況にある。このような関係からすると、荒砥北三木堂遺跡で出土した土器と陶邑古窯址群の土器は密接な関係にあるように見受けられるが、実際には顔付きもあまり似ておらず、その関連性には疑問が残る。

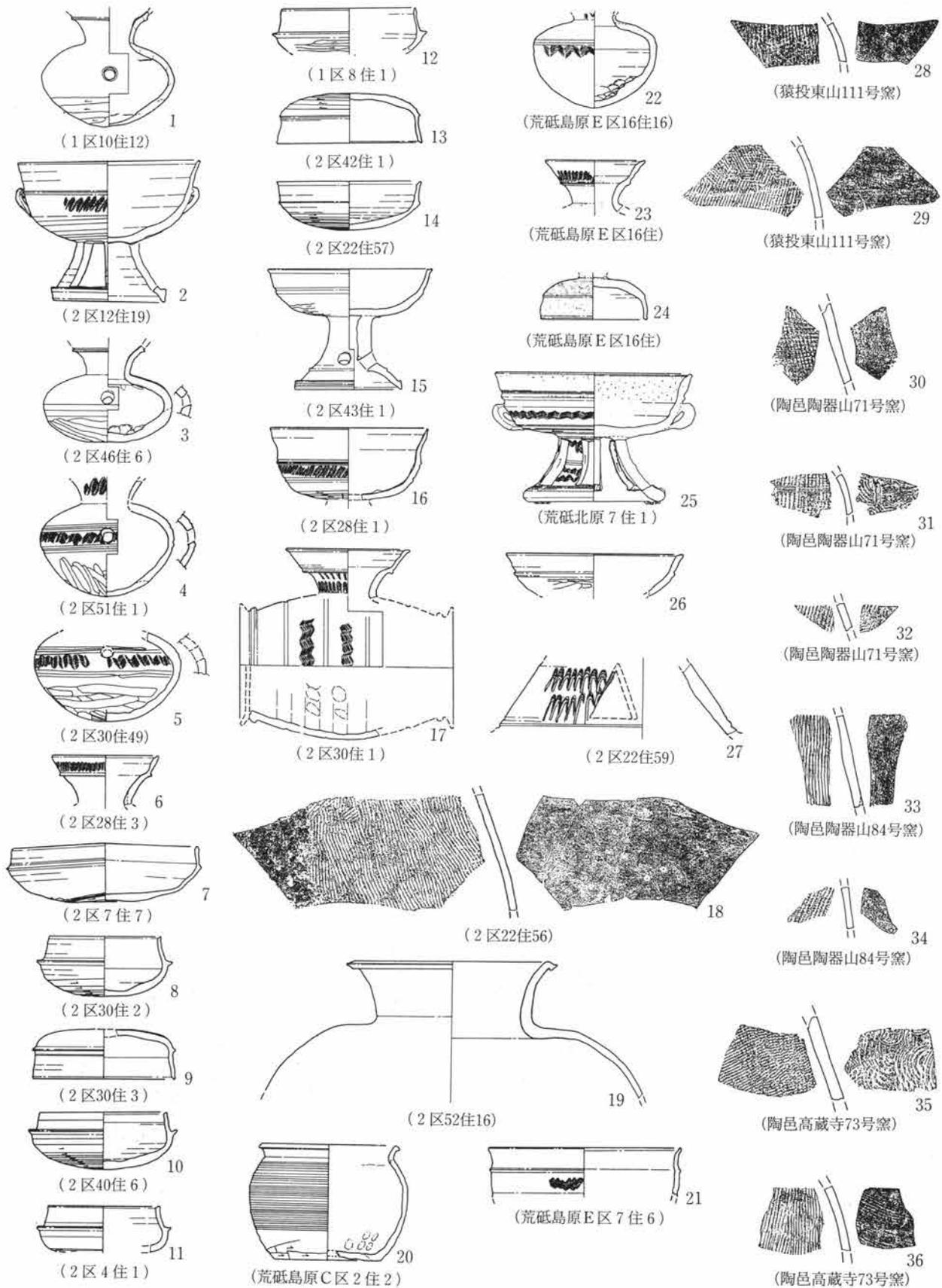
荒砥北三木堂遺跡の土器は、全体に粗粒の砂を混入し、土器の断面においては鬚が多く入った状況にあるが、陶邑古窯址群の土器は鬚が少なく、全体に細粒の胎土で構成されている。荒砥北三木堂遺跡のセピア色の良質の土器は、細粒で鬚の入らない緻密なものであるが、陶邑のものと比較すると、荒砥北三木堂遺跡のものの方がセピア色が濃いという差があるようにみうけられる。このようにみえてくると、荒砥北三木堂遺跡で出土した土器の大半は、関東で作られているものではないかという疑問が残る。

3 ま と め

I) 分析した土器は、高温で焼成されているために Mont、Mica、Hb、Ch などの鉱物は分解してガラスになっている。そのため、胎土はAとBの2タイプだけとなっている。これらの土器は高温で焼成されているために、ムライト、クリストバーライトが多く検出され、電子顕微鏡で分析した焼成ランクとよく一致している。電子顕微鏡による分析では、粗粒および発泡したガラスが生成し、焼成ランクはIあるいはI～IIと非常に高いのが特徴である。

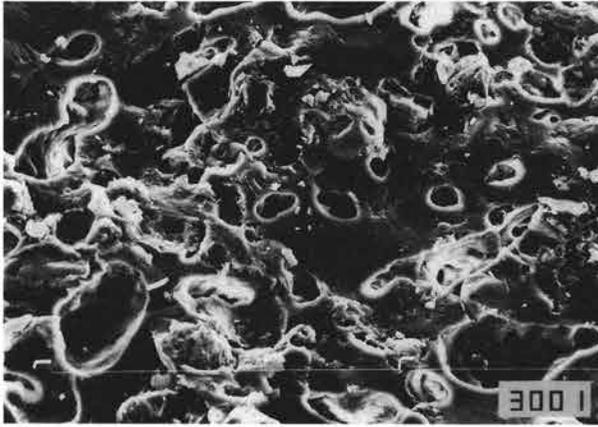
II) 石英と斜長石の相関では、I～VIIIの8つのグループと“その他”に分類された。灰色～暗灰色の土器とセピア色の土器とは別々のグループを構成し、比較的明瞭に分かれていることがわかる。“その他”の土器は明らかに異質であり、8つのグループのものとは異なるものと推察された。

III) 愛知県の猿投窯と大阪府の陶邑古窯址群の土器とを分析し、荒砥北三木堂遺跡の土器と比較検討した。その結果によれば、猿投窯の土器と類似するものはNo.5が1個ある程度である。また、陶邑古窯址群の土器は第273図において、密接な関連性があるように見受けられるが、土器の材質、断面などで比較すると、陶邑のものは細粒で、緻密な土器であるが、荒砥北三木堂遺跡のものは粒子が粗く、鬚が入っているという共通性があり、陶邑の土器とは異なるように見受けられた。粒子の細かい、良質なセピア色の土器においては、荒砥北三木堂遺跡のものは色が濃く細粒であるのに対して、陶邑のものは色が薄くやや粒子が粗いように見受けられ、両者は共通するものではないのではなかろうか。このようにみえてくると、荒砥北三木堂遺跡の土器の大半は関東で作られているように見受けられるが確証はない。

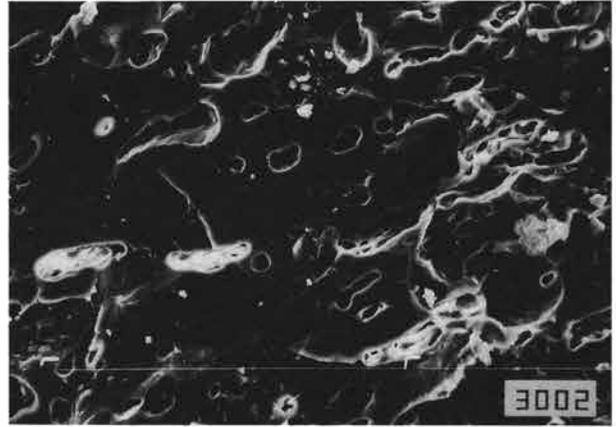


第274図 分析対象の須恵器実測図

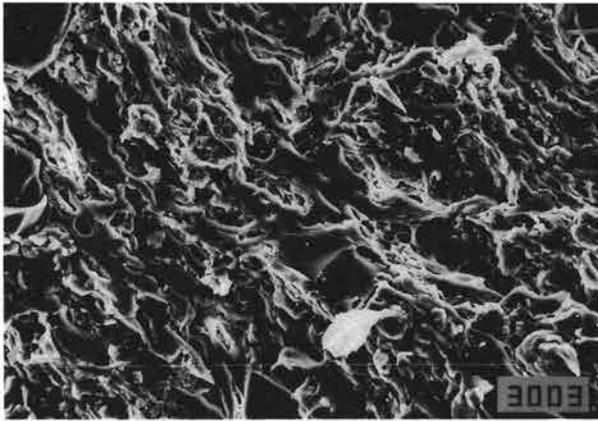
III 科学的分析



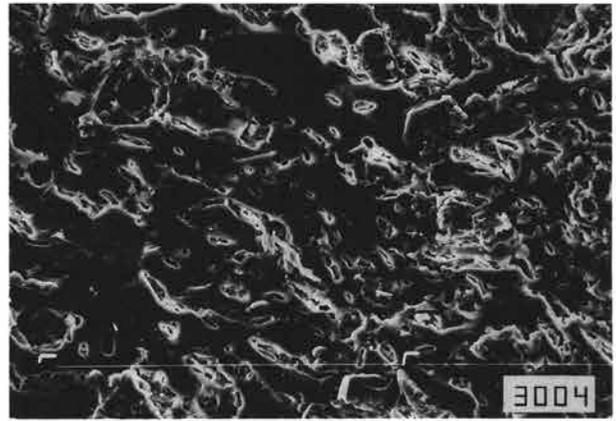
北三木堂 No. 1
 1 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 (clastic clay)。
 2 glass (ガラス) 生成により組織が変形。
 3 マトリックス (基質) はglass。
 4 glassは発泡。粗粒で焼成ランクはI。



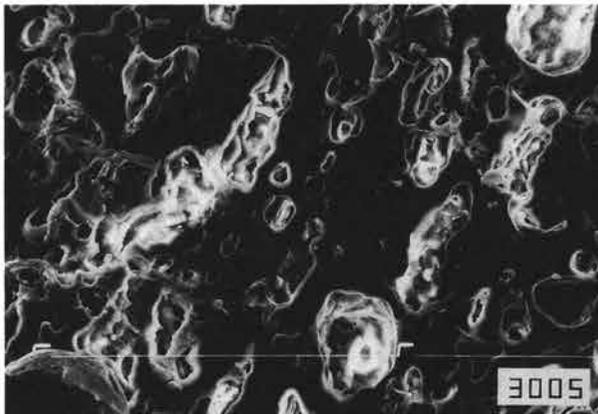
北三木堂 No. 2
 1 細粒の砂を混入する碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は発泡。粗粒で焼成ランクはI。



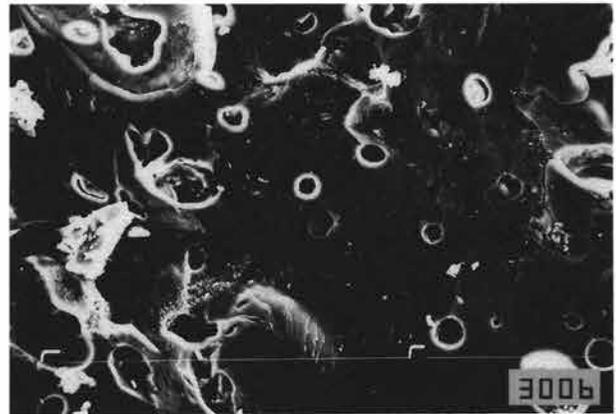
北三木堂 No. 3
 1 細粒の砂を混入する碎屑性粘土。
 2 glass生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクはI。



北三木堂 No. 4
 1 細粒の砂を混入する碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glassは発泡。粗粒で焼成ランクはI。

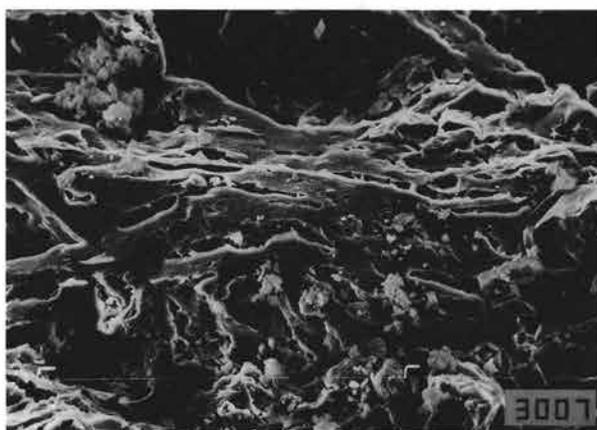


北三木堂 No. 5
 1 細粒で均質な素地土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は発泡 (円形)。粗粒で焼成ランクはI。

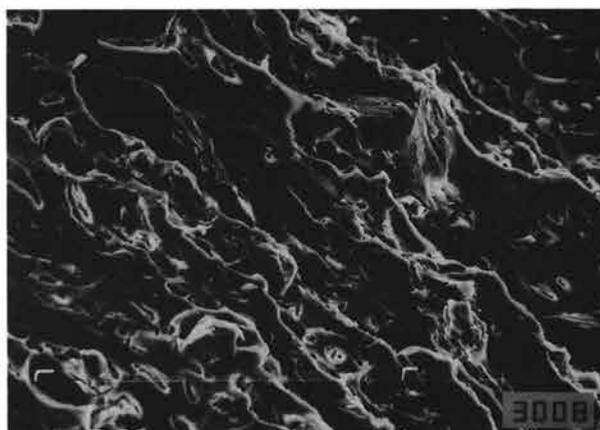


北三木堂 No. 6
 1 細粒の砂を混入する均質な碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は円形に発泡。粗粒で焼成ランクはI。

第275図 各須恵器の電子顕微鏡写真 (I) [×750]



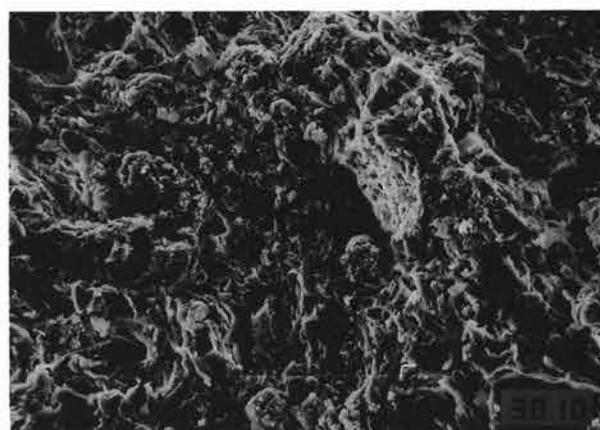
北三木堂 No. 7
 1 粗粒の砂を混入する碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。



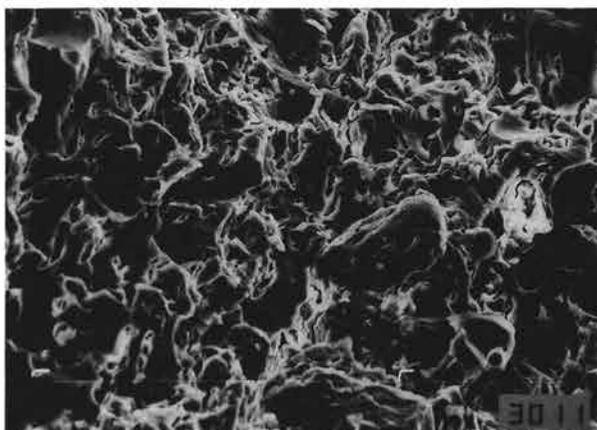
北三木堂 No. 8
 1 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 (均質)。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。



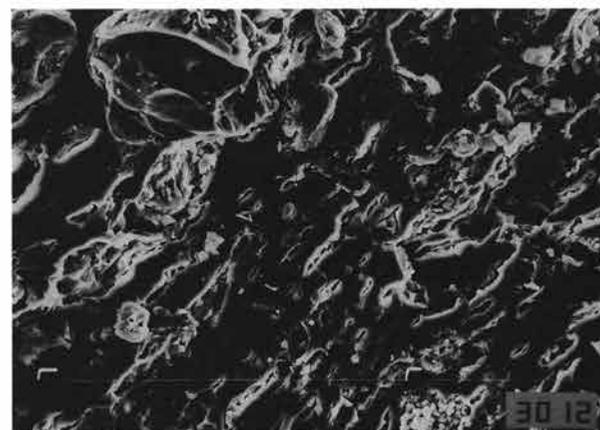
北三木堂 No. 9
 1 粗粒の砂を混入する碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。



北三木堂 No.10
 1 粗粒の砂を混入する碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I～II。

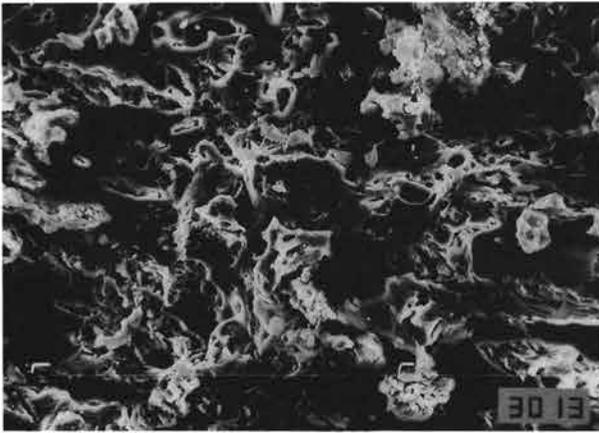


北三木堂 No.11
 1 細粒の砂を混入する碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。

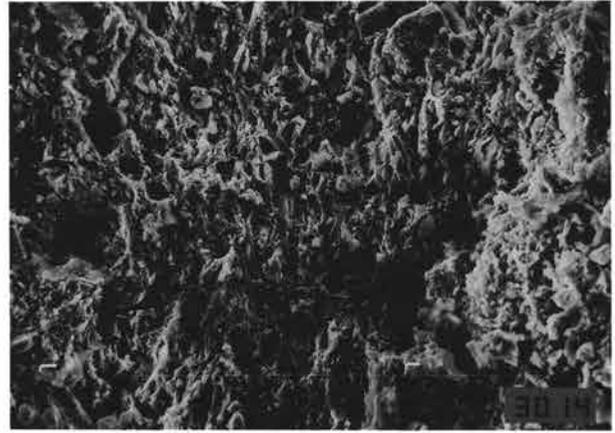


北三木堂 No.12
 1 粗粒の砂を混入する碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。

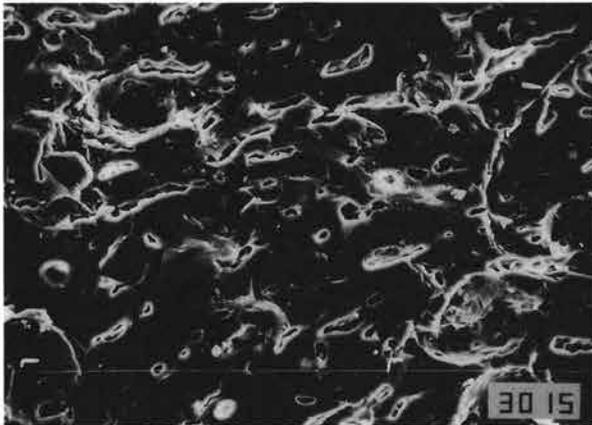
III 科学的分析



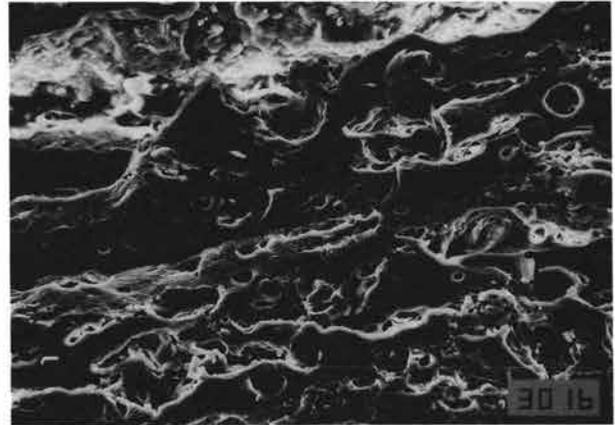
北三木堂 No.13
 1 細粒の砂を混入する碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。



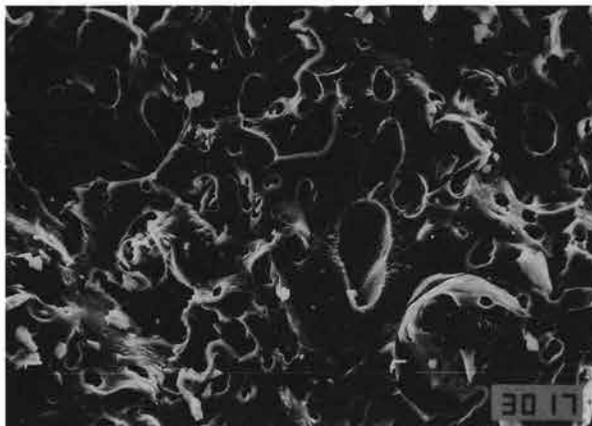
北三木堂 No.14
 1 細粒の砂を混入する碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が若干変形。
 3 マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot e\text{H}_2\text{O}$ (アルミナゲル)+glass。
 4 glass は中～粗粒で焼成ランクは II～III。



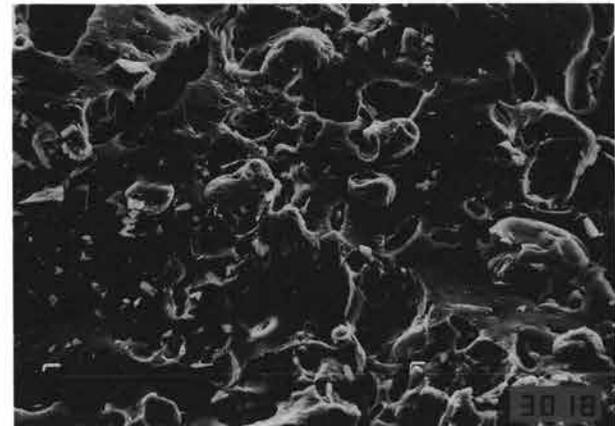
北三木堂 No.15
 1 細粒で均質な素地土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は円形に発泡し焼成ランクは I。



北三木堂 No.16
 1 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 (均質)。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は発泡。粗粒で焼成ランクは I。

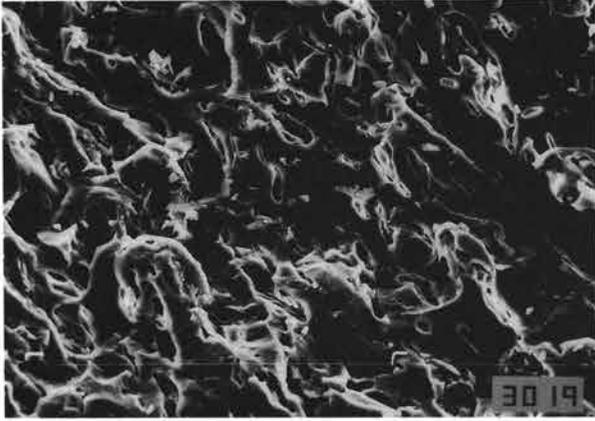


北三木堂 No.17
 1 粗粒の砂を混入する碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は発泡。粗粒で焼成ランクは I。

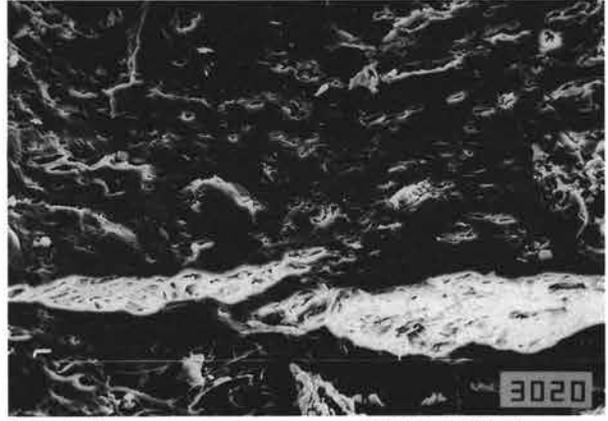


北三木堂 No.18
 1 中粒の砂を混入する碎屑性粘土 (均質)。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。

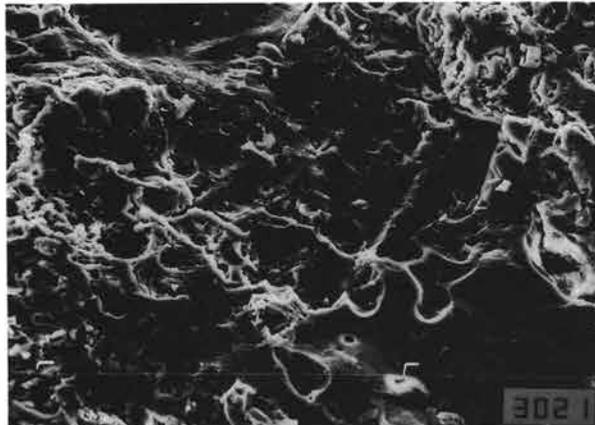
第277図 各須恵器の電子顕微鏡写真 (3) [$\times 750$]



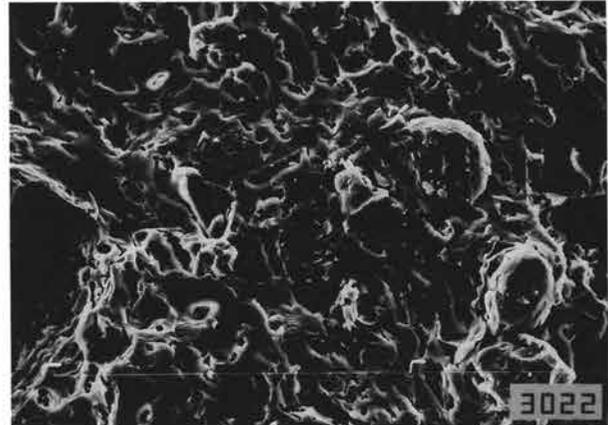
北三木堂 No.19
 1 細粒で均質な素地土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。



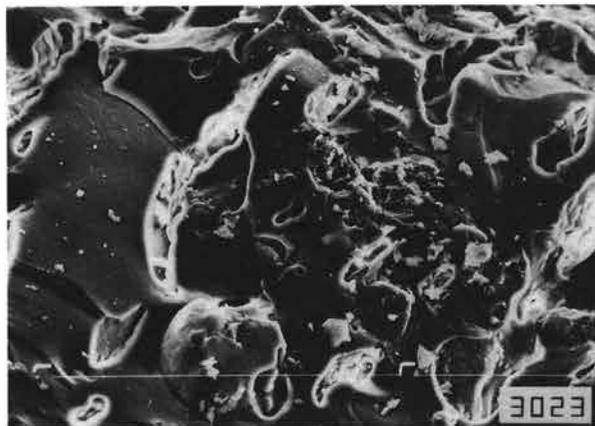
北三木堂 No.20
 1 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 (均質)。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。



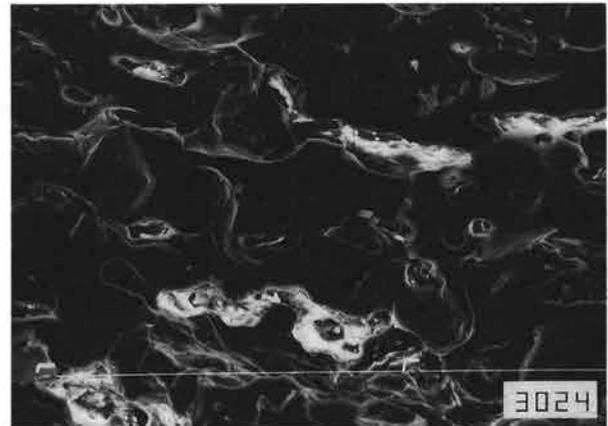
北三木堂 No.21
 1 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 (均質)。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は円形発泡し焼成ランクは I。



北三木堂 No.22
 1 細粒の砂質碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。



北三木堂 No.23
 1 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 (均質)。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。



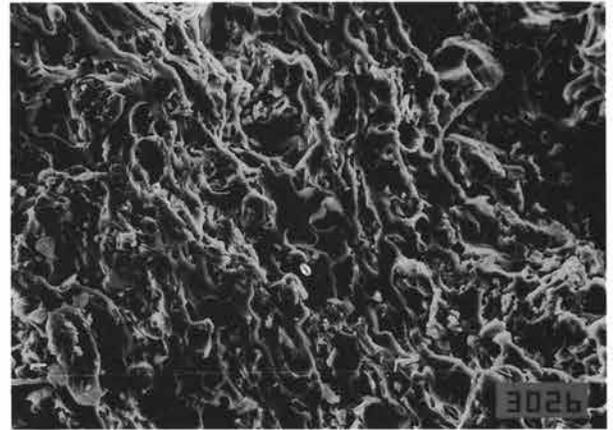
北三木堂 No.24
 1 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 (均質)。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。

第278図 各須恵器の電子顕微鏡写真 (4) [×750]

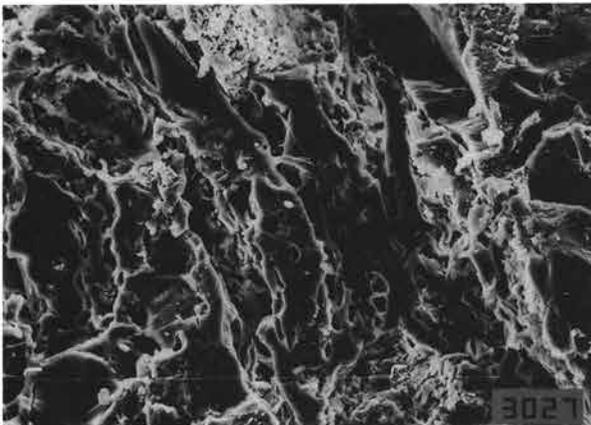
III 科学的分析



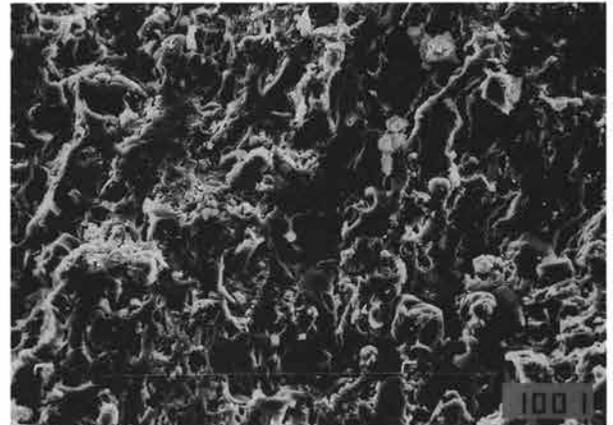
北三木堂 No.25 (×350)
 1 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 (均質)。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は円形発泡し焼成ランクは I。



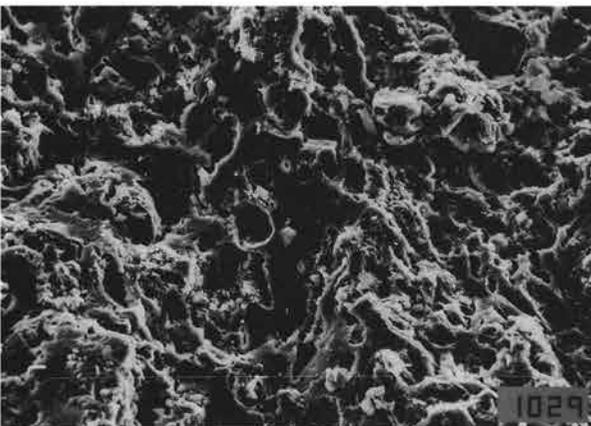
北三木堂 No.26
 1 細粒の砂質碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I~II。



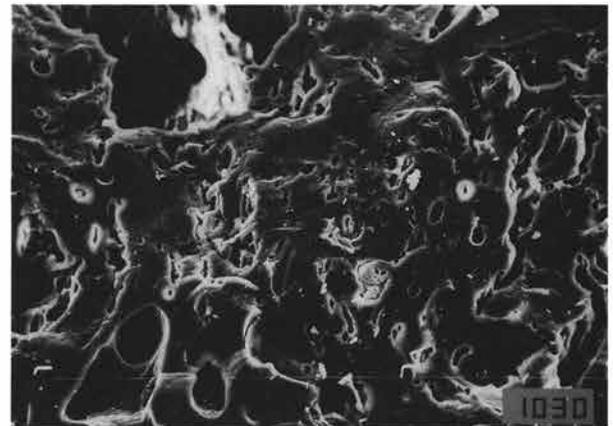
北三木堂 No.27
 1 細粒の砂を混入する碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I~II。



北三木堂 No.28
 1 細粒の砂を混入する均質な碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。

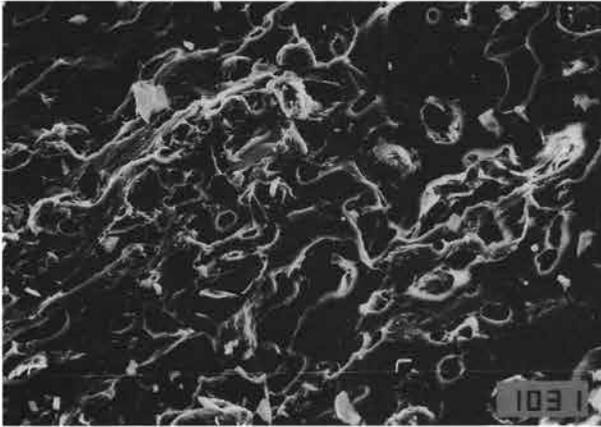


北三木堂 No.29
 1 細粒の砂を混入する碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。

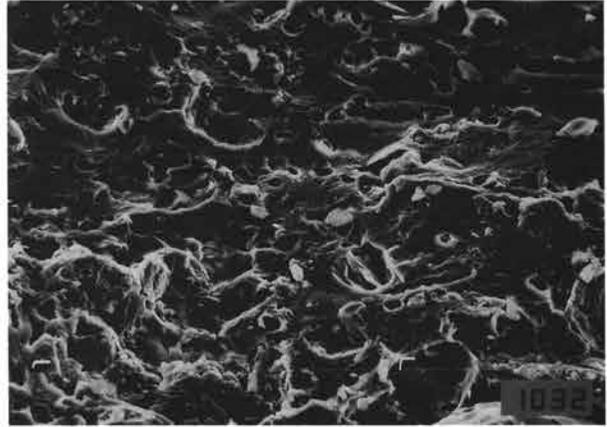


北三木堂 No.30
 1 細粒の砂を混入する碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。

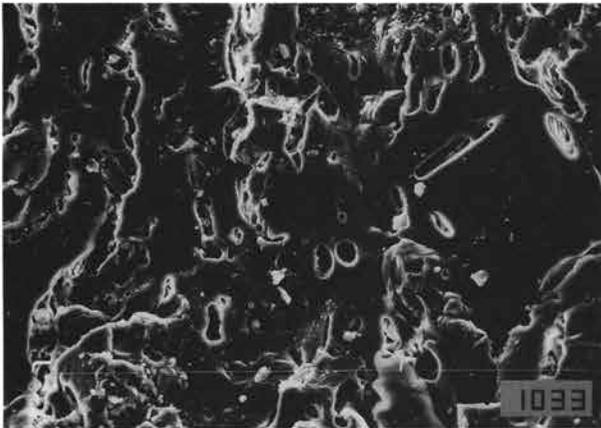
第279図 各須恵器の電子顕微鏡写真 (5) [×750]



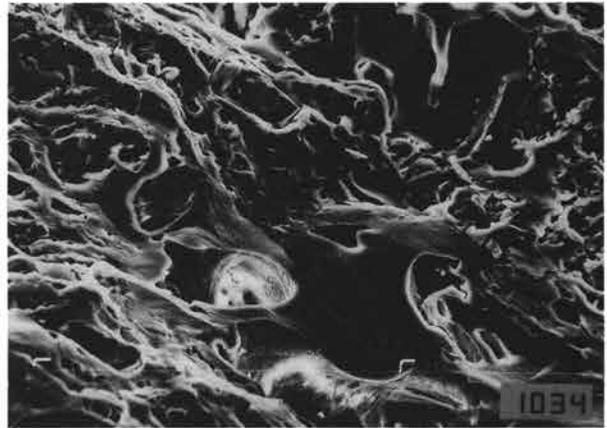
北三木堂 No.31
 1 細粒の砂を混入する碎屑性粘土 (均質)。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。



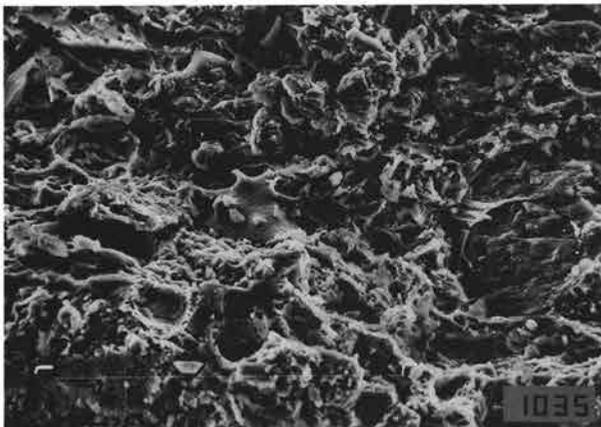
北三木堂 No.32
 1 細粒の砂を混入する碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。



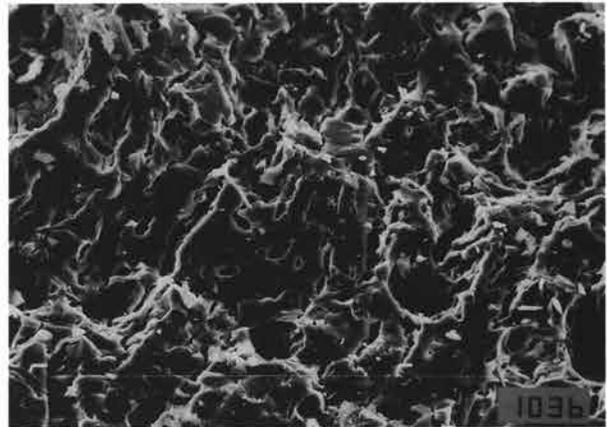
北三木堂 No.33
 1 細粒の砂を混入する均質な碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。



北三木堂 No.34
 1 細粒の砂を混入する均質な碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。



北三木堂 No.35
 1 粗粒の砂を混入する碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。



北三木堂 No.36
 1 細粒で均質な碎屑性粘土。
 2 glass 生成により組織が変形。
 3 マトリックスは glass。
 4 glass は粗粒で焼成ランクは I。

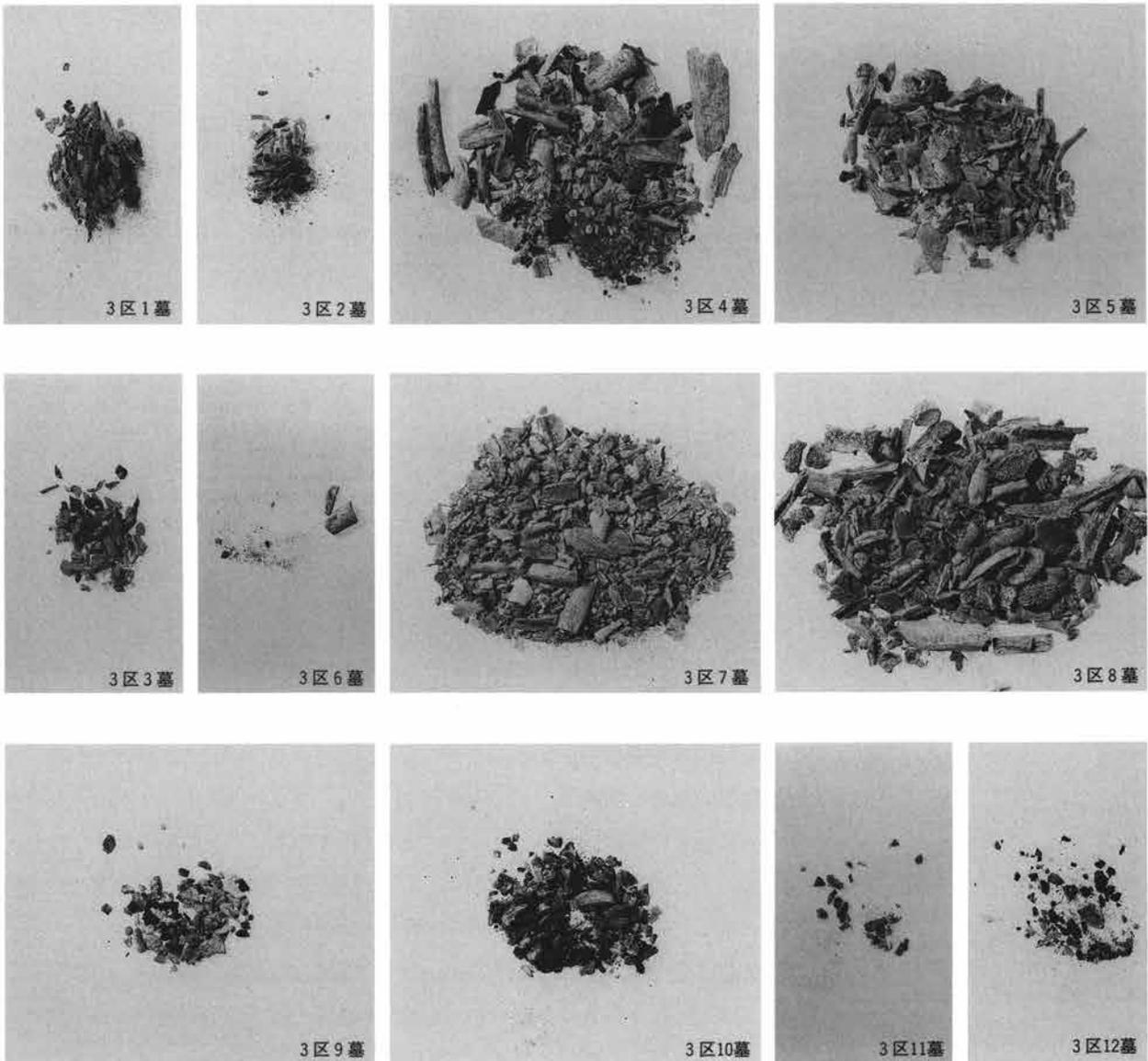
荒砥北三木堂遺跡出土の人骨

国立科学博物館人類研究部第一研究室長 佐倉 朔

人骨は12基の墓壙（1～12号）から検出されている。大部分は少量の微小な骨片で、焼かれて灰化が進んでいるが、一部に黒色を帯びた炭化の段階に留どまっているものがある。形態的特徴は概ね不詳であるが、以下に墓壙番号ごとに人骨の分量と部位を主として所見を記す。なお、これらの墓壙の年代は、15世紀中葉の室町時代に想定されることである。

- 1号：約12g。四肢骨小片を主とし、最大の破片は長さ34mmの細い形状で、前腕骨の一部と推定される。
- 2号：約4.5g。四肢骨の細片で長さ16mm以下、厚さ1～2mm程度であり、前腕骨などの薄い部分の破片が多いと考えられる。
- 3号：約7g。大部分は四肢骨の細片で、長さは20mm以下である。やや厚い骨を含み、上腕骨程度以上の太さの骨が混在していると考えられる。また四肢骨以外に、1個の頬骨の一部と思われる小片が存在する。
- 4号：約85.5g。主として四肢骨の破片で、上腕骨、大腿骨、頸骨などの部位が認められる。最大の破片は接着によって約85mmの長さとなった。通常の焼骨と同様に、変形、収縮、亀裂が生じているが、骨緻密質はかなり厚く、筋線も発達している。したがって比較的強壯な男性個体に属する可能性が高い。骨端付近の海綿質や、指骨のような細い骨の破片も存在する。その他に頭蓋の破片と思われるものが1個認められる。
- 5号：約47g。四肢骨片の他に少量の頭蓋の小片が残存する。頭蓋片は最大のもので28mmで、多くは内板と外板が分離している。四肢骨片には微小なものから約50mmの大きさのものまで存在し、かなり緻密質の厚い大腿骨の破片を含む。所属個体は成人と考えられる。
- 6号：約1.5g。2個の四肢骨片のみである。その1個は長さ約20mmの円筒状の骨の一部で、直径が約12mmと推定され、緻密質の厚さは約3mmである。橈骨の一部と思われる。
- 7号：約80g。大部分は微小な四肢骨の破片であるが、接着により長さ58mmとなった破片もある。部位は概ね不明であるが、明らかに大腿骨である破片が認められる。成人のものと考えられるが、緻密質はやや薄く、女性の可能性もある。
- 8号：約152g。人骨の分量は最大である。四肢骨の他に少量の頭骨、歯、体幹骨が認められる。頭骨のうち明瞭なものは1個の頬骨の小片で、右側の上部に相当する。体幹骨としては少数の脊椎骨破片等がある。歯には2個の歯冠の破片が残存しており、その1個は犬歯の尖頭付近と考えられる。四肢骨はすべて長さ70mm以下の破片で、さまざまな部位を含む。少数の大腿骨および頸骨の破片から見ると、骨の太さ、緻密質の厚さとも、やや小さかったと推定される。

- 9号：約8.5g。15mm以下の少量の四肢骨の細片である。黒色に炭化した部分があり、保存は不良である。緻密質はやや薄い。
- 10号：約16g。すべて30mm以下の小片で、頭骨とそれ以外の部分がほぼ等量に存在する。頭骨のうちには右側の顎関節窩付近の破片が含まれるが、かなり太く、男性個体に属する可能性が強い。頭骨以外はおもに四肢骨の破片で、形態的特徴は明らかではない。
- 11号：約1g。少量の微細骨片で、12mm以下の大きさである。四肢骨の海綿質と思われる部分が多く、保存は不良である。
- 12号：約2g。少量の微小な骨片で、黒色に炭化したものが多い。大部分は四肢骨の緻密質の破片と考えられるが、約17mmの灰化した最大の破片は板状で、頭蓋の内板が剥離したものである。



第281図 墓壙出土の人骨

IV 成果と問題点

荒砥北三木堂遺跡の1～6区の調査区からは、竪穴住居78軒、古墳1基、円形周溝墓1基、溝状遺構3条、土壇26基、掘立柱建物4棟などの遺構が検出された。時代的には断続的であるが、弥生時代中期末、古墳時代前期～後期、奈良～平安時代（8世紀第3四半期～9世紀第2四半期）、室町時代（15世紀中葉）に分かれ、長期間にわたる人々の生活の痕跡をとどめた複合遺跡と言える。

本稿では、弥生時代から平安時代にかけての竪穴住居を中心とした集落について、その変遷を含めた若干の分析を行ってみたい。

尚、弥生時代および古墳時代から平安時代にかけての土器の型式学的分析や、室町時代の墓壇については、後段において大木紳一郎、坂口 一、唐澤至郎の各氏によりまとめて戴いた。

1 竪穴住居の時期分類

弥生時代から平安時代にかけての78軒の竪穴住居の時期については、大木紳一郎氏および坂口 一氏による出土土器の型式学的分析や時期区分に基づいて分類すると、第10表のようにI～X期の10段階に分けることができる。⁽¹⁾I・VIII～X期を除いたII～VII期にかけては、四半世紀を単位に区分される。II～VII期およびIX・X期の間は時間的に連続しているが、I期とII期、VII期とVIII期、VIII期とIX期の間は断絶が認められる。時期別の住居軒数は、I期：5軒、II期：1軒、III期：6軒、IV期：34軒、V期：14軒、VI期：3軒、VII期：1軒、VIII期：1軒、IX期：3軒、X期：5軒で、5世紀第3四半期のIV期が最多となる。各期に振り分けられた住居が、その期間内において総て同時存在したか否かについては、現在のところの土器編年がこれ以上の細分が困難なため、出土土器からは明確にし得ない。しかし、住居軒数が最多となるIV期では、2区の3号と4号住居、同24号と40号住居、同46号と55号住居の計6軒が同一時期内において重複関係にあり、またV期の1区7号と12号住居が同様に重複していることから、同時共存する住居は若干少なくなると判断される。

尚、2区33・39号住居、3区2号住居、5区3・5号住居の5軒は、出土土器が乏しいために時期の判定ができない。

2 竪穴住居の形態と規模

各期の竪穴住居の形態および規模については、種々のあり方が認められるが、その長・短軸長をもとに第11表のような基準⁽²⁾によって便宜的に類型化すると、第274・275図のようになる。ここでは、その時期別の傾向を分析してみたい。

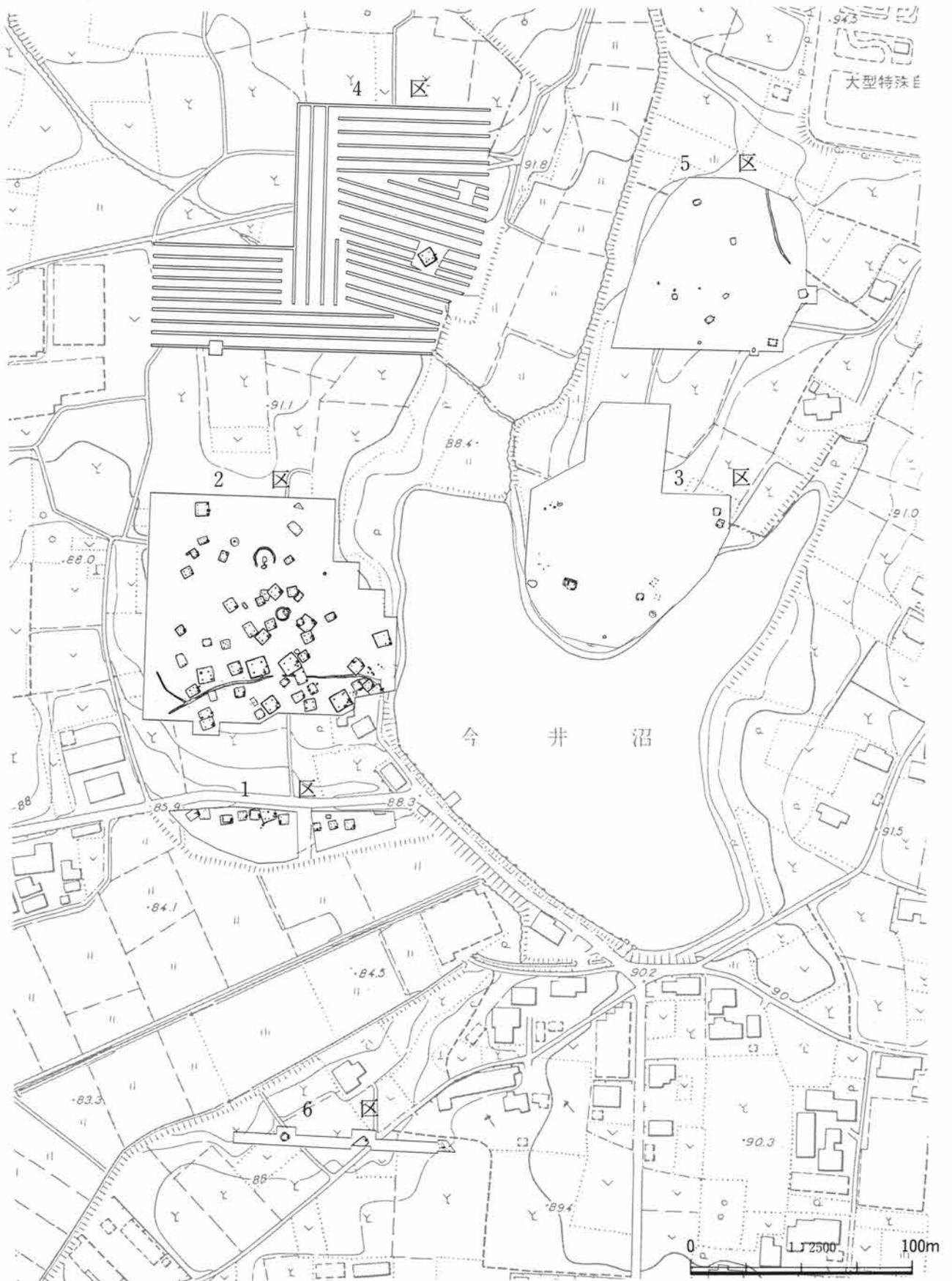
I 期（弥生時代中期） 5軒の住居は、いずれも同一の類型に属するものはなく、1住居＝1類型の計5類型が存在する。基本形態は縦長長方形と正方形とに分かれるが、正形状のものはややひしゃげた台形に近い形状を呈している。

II 期（5世紀第1四半期） D1類型の6区1号住居1軒のみであり、傾向把握は

註1 古墳～平安時代にかけてのII～X期は、坂口氏によるI～IX期の土器編年に対応する。

註2 竪穴住居の規模・形態の分類基準については、有馬条里遺跡での分類に準拠している。

『有馬条里遺跡I』(叢書馬泉埋蔵文化財調査事業団 1989)



第282図 各調査区の遺構検出状況

第10表 年代別住居一覧

住居番号	年代	短軸	長軸	長軸比	面積	方位	柱穴	形状	炉・電	深度	土器の出土量		須恵器等の出土遺物の種類
											土器	須恵器	
2区1住	(弥生時代)	3.8	5.9	1.55	22.42	N-62°E	4	大形縦長長方形	炉	56	14		
2区17住	(弥生時代)	4.1	4.1	1.00	16.78	N-15°W	4	小形正方形	炉	13	7(1)		
2区26住	(弥生時代)	2.6	3.2	1.23	(8.7)	N-44°W	4	小形縦長長方形	炉	24	2		
2区31住	(弥生時代)	4.6	6.5	1.41	29.38	N-54°E	4	超大形縦長長方形	炉	20	18(5)		
2区44住	(弥生時代)	4.4	4.6	1.05	(20.3)	N-85°W	4	中形正方形	炉	14	12(10)		
6区1住	5C1四半期	3.7	3.9	1.05	12.74	N-57°W	3	小形正方形	炉	77	9(3)		
1区11住	5C2四半期		4.9				2			22	9	1 坏1	
2区11住	5C2四半期	5.2	5.2	1.00	(26.9)	N-79°E	4	中形正方形	炉	19	10(4)		
2区14住	5C2四半期	5.0	6.8	1.36	(32.6)	N-67°E	4	超大形縦長長方形		21	4		
2区18住	5C2四半期	3.2	4.0	1.25	12.60	N-11°W	4	小形縦長長方形		31	14(11)		
2区43住	5C2四半期	3.8	6.2	1.63	24.16	N-45°E	4	大形縦長長方形	炉	20	42(20)	1(1) 高坏(1)	
2区56住	5C2四半期						4			18	6(3)		
1区1住	5C3四半期		3.6			N-83°E	4		東壁南	65	2		
1区3住	5C3四半期	4.6	4.8	1.04	20.94	N-83°E	4	中形正方形	東壁南	46	27(20)		
1区4住	5C3四半期		5.2				4			46	3		
1区9B住	5C3四半期	4.3	5.7	1.33	23.50	N-82°E	4	大形縦長長方形	東壁中	60	1		
1区10住	5C3四半期	4.0	5.6	1.40	(21.0)	N-52°E	2	大形縦長長方形	東壁南	40	19(16)	1 聴1	
2区2住	5C3四半期	3.4	4.4	1.29	14.96	N-73°E	0	中形縦長長方形		26	46(18)		
2区3住	5C3四半期	4.5	5.5	1.22	(24.8)	N-64°E	4	大形縦長長方形	東壁南	37	8(2)		
2区4住	5C3四半期	4.9	6.1	1.24	27.44	N-72°E	4	大形縦長長方形	東壁南	36	13(3)	1 坏1	
2区5住	5C3四半期	4.6	5.9	1.28	23.71	N-54°E	4	大形縦長長方形	東壁中	76	24(10)		
2区6住	5C3四半期	4.7	5.1	1.09	20.70	N-84°E	0	中形正方形	東壁中	77		1 蓋1	
2区10住	5C3四半期	3.9	5.4	1.38	20.72	N-61°E	0	大形縦長長方形	東壁南	51	29(8)		
2区15住	5C3四半期	8.1	8.4	1.04	63.52	N-53°E	4	超大形正方形	東壁南	64	74(11)	2 蓋2	
2区16住	5C3四半期	8.4	9.3	1.11	75.18	N-69°E	4	超大形縦長長方形	東壁南	64	29(6)		
2区21住	5C3四半期	3.6	4.6	1.28	15.31	S-63°W	4	中形縦長長方形	西壁中	41	35(20)		
2区22住	5C3四半期	7.7	8.4	1.09	62.77	N-60°E	4	超大形正方形	東壁南	97	55(9)	3 高坏1・坏1・甕1	
2区24住	5C3四半期	6.7	6.9	1.03	(45.7)	N-37°E	4	超大形正方形	北壁東	71	47(7)		
2区28住	5C3四半期	5.6	5.7	1.02	30.29	N-73°E	4	大形正方形	東壁南	67	24(8)	3(1) 高坏1・聴1・樽形聴(1)	
2区30住	5C3四半期	2.8	4.4	1.57	11.44	N-37°E	4	中形縦長長方形	北壁東	85	102(2)	8 高坏1・坏1・蓋4・樽形聴・聴1・甕1	
2区35住	5C3四半期	5.6	5.8	1.04	(32.0)	N-48°E	4	大形正方形	北壁東	70	79(27)	1 高坏1	
2区36住	5C3四半期	2.9	4.1	1.41	11.18	N-49°E	4	小形縦長長方形	東壁南	56	8(2)		
2区37住	5C3四半期	3.5	4.8	1.37	16.20	N-17°E	4	中形縦長長方形	北壁東	76	21(5)	1 蓋1	
2区38住	5C3四半期	3.1	4.1	1.32	14.05	N-56°E	4	小形縦長長方形	東壁中	89	12(5)		
2区40住	5C3四半期	2.9	3.1	1.07	(8.7)	N-63°E	4	超小形正方形	東壁南	69	6(2)	1 坏1	
2区41住	5C3四半期	4.3	4.9	1.14	20.26	N-60°E	4	中形縦長長方形	東壁南	40	15(8)		
2区42住	5C3四半期	6.0	6.1	1.02	36.22	N-87°E	4	大形正方形	東壁南	42	28(12)	1 蓋1	
2区45住	5C3四半期	5.3	6.0	1.13	31.58	N-42°E	4	大形縦長長方形	北壁東	70	29(10)		

2区46住	5 C 3 四半期	4.1	4.7	1.15	18.22	N - 52°-E	4	中形縦長長方形	東壁南	68	12(4)	1(1)	隠(1)
2区47住	5 C 3 四半期	5.4	6.3	1.21		N - 58°-E	4	大形縦長長方形	東壁南	104	38(8)		
2区50住	5 C 3 四半期	6.8	7.1	1.04	46.18	N - 72°-E	4	超大形正方形	東壁南	66	21(9)		
2区51住	5 C 3 四半期	3.8	3.8	1.00	14.38	N - 68°-E	4	小形正方形	東壁南	67	48(6)	1	隠1
2区52住	5 C 3 四半期	5.4	5.6	1.04	30.06	N - 46°-E	4	大形正方形	東壁南	68	15(4)	1(1)	隠(1)
2区53住	5 C 3 四半期	3.1	4.5	1.45	12.44	N - 71°-E	4	中形縦長長方形	東壁南	62	20(12)		
2区55住	5 C 3 四半期	4.3	5.1	1.19	21.93	N - 68°-E	4	中形縦長長方形	東壁中	15	3(2)		
6区2住	5 C 3 四半期	4.2	6.8	1.62	(27.2)	N - 53°-E	4	超大形縦長長方形	東壁南	67	20(11)		
1区2住	5 C 4 四半期	3.8	4.0	1.05	15.30	N - 71°-W	4	小形正方形	東壁中	51	7	1	隠1
1区7住	5 C 4 四半期	4.3	4.8	1.12	19.62	S - 86°-E	4	中形縦長長方形	東壁中	67	2		
1区8住	5 C 4 四半期	4.1	4.2	1.02	16.08	N - 89°-E	4	小形正方形	東壁中	56	9(1)	2	坏1・隠1
1区9 A住	5 C 4 四半期	3.4	4.2	1.24	(13.6)	N - 87°-E	0	小形縦長長方形	東壁中	58	39(18)	1(1)	隠(1)
1区12住	5 C 4 四半期	7.2	7.2	1.00	(50.6)	N - 70°-E	4	超大形正方形	東壁南	67	36(10)		鉄線1
2区8住	5 C 4 四半期	6.6	6.6	1.00	42.93	N - 53°-E	4	超大形正方形	東壁南	65	31(4)		
2区12住	5 C 4 四半期	4.2	4.7	1.12	18.14	N - 57°-E	4	中形縦長長方形	東壁南	58	37(12)	1(1)	高坏(1)・隠1
2区13住	5 C 4 四半期	3.4	4.0	1.18	11.82	N - 43°-E	4	中形縦長長方形	北壁中	28	16(7)		羽口1
2区20住	5 C 4 四半期	7.0	7.4	1.06	51.80	N - 12°-W	4	超大形正方形	炉	70	12(5)		
2区23住	5 C 4 四半期	5.0	5.1	1.02	24.67	N - 65°-E	4	中形正方形	東壁南	62	39(26)		
2区25住	5 C 4 四半期	3.5	4.7	1.34	15.22	N - 60°-E	4	中形縦長長方形	東壁南	90	12(7)		
2区27住	5 C 4 四半期	4.6	4.8	1.04	21.32	N - 70°-E	4	中形正方形	東壁南	58	27(10)		
2区34住	5 C 4 四半期	4.0	4.1	1.03	15.46	N - 52°-E	4	小形正方形	東壁南	88	17(5)		
2区48住	5 C 4 四半期		4.0		(14.9)	N - 57°-E	4		東壁中	23	7		
1区6住	6 C 1 四半期	4.6	4.8	1.04	20.80	N - 84°-W	4	中形正方形	西壁南	40	24(3)		
1区13住	6 C 1 四半期		5.3							67	3		
2区32住	6 C 1 四半期	5.2	5.5	1.06	27.90	N - 57°-E	4	大形正方形	東壁南	85	25(4)		
2区7住	6 C 2 四半期	4.1	4.1	1.00	15.57	N - 58°-E	4	小形正方形	東壁南	48	10	2	坏1・隠1
4区1住	7 C 4 四半期	6.7	6.9	1.03	44.66	N - 56°-E	4	超大形正方形	東壁南	105	16(3)	3(1)	蓋2(1)・脚付盤1
5区6住	8 C 後半期	1.9	2.4	1.26	4.22	N - 55°-E	0	超小形縦長長方形	東壁南	17	9(8)		
2区29住	8 C 後半期	4.3	4.5	1.05	(19.7)	N - 79°-E	4	中形正方形	東壁中	52	8(1)		墨書「木」
3区1住	8 C 後半期	3.2	3.3	1.03	9.61	N - 12°-E	4	中形正方形	北壁東	42		2	坏1・蓋1、刻書「十」
3区3住	9 C 2 四半期	2.9	3.8	1.31	10.46	S - 54°-E	4	小形縦長長方形	東壁南	52	2	2	蓋1・長頸壺1
3区5住	9 C 前半期	3.1	3.7	1.19	10.78	S - 80°-E	0	小形横長長方形	東壁南	46	8(1)	3	坏1・蓋1・長頸壺1、墨書「當」
5区1住	9 C 前半期	3.8	3.9	1.03	13.97	N - 78°-E	0	小形正方形	東壁南	34	6(1)	4	坏1・蓋1・隠1・高台付椀1
5区2住	9 C 前半期	2.8	3.8	1.36	10.13	N - 57°-E	4	小形縦長長方形	東壁南	47	20(4)	5(1)	坏2・蓋1・高台付椀(1)・長頸壺1、墨書「寺・木」
5区4住	9 C 前半期	2.7	3.5	1.30	8.66	N - 72°-E	0	小形縦長長方形	東壁中	78	7	3	坏2・蓋1、墨書「寺」
2区33住	時期不明	3.0	3.1	1.03	(9.1)	N - 54°-E	0	超小形正方形	東壁北	50	1		
2区39住	時期不明	5.5	5.7	1.04	34.75	N - 61°-E	4	大形正方形	東壁南	50	3		
3区2住	時期不明	4.0	6.1	1.53	(23.9)	N - 18°-E	0	大形横長長方形		73		1	瓦1
5区3住	時期不明	2.4	2.8	1.17	5.77	N - 79°-E	0	超小形縦長長方形		43			
5区5住	時期不明	2.5	3.2	1.28	7.39	N - 80°-E	0	小形縦長長方形		38			

IV 成果と問題点

第11表 竪穴住居外形分類基準

規 模	形 状		
	正 方 形	横 長 長 方 形	縦 長 長 方 形
超 大 形	6.5以上 1.0～1.1未満	6.5以上 1.1以上	6.5以上 1.1以上
大 形	5.4～6.5未満 1.0～1.1未満	5.4～6.5未満 1.1以上	5.4～6.5未満 1.1以上
中 形	4.3～5.4未満 1.0～1.1未満	4.3～5.4未満 1.1以上	4.3～5.4未満 1.1以上
小 形	3.2～4.3未満 1.0～1.1未満	3.2～4.3未満 1.1以上	3.2～4.3未満 1.1以上
超 小 形	3.2未満 1.0～1.1未満	3.2未満 1.1以上	3.2未満 1.1以上

凡 例 上段：長軸長(単位m) 下段：長軸比(長軸長/短軸長)

できない。周壁際に柱穴をもつためにやや変形しているが、正方形に分類される。

III 期（5世紀第2四半期） 6軒のうち分類可能な条件を備えたものは4軒であるが、I期と同様に1住居＝1タイプの4タイプが存在する。規模は超大形から小形まで認められるが、長軸長が3.2m未満の超小形は存在しない。形態ではI・II期にみられなかった横長長方形が存在するとともに、縦・横長を含めて長方形を基調とするものが多い。

IV 期（5世紀第3四半期） 34軒のうちで分類可能なものは31軒で、11タイプが存在する。B2タイプとC2タイプが共に7軒と最多で、次いでA1タイプとB

1タイプが共に4軒、A2タイプとC1タイプが共に2軒となる。規模別にみると、超大形：6軒、大形：11軒、中形：10軒、小形：3軒、超小形：1軒となるが、大・中形で全体の68%を占め、同様に超大形が20%弱と比較的高い比率にある。また形態別では、正方形が12軒であるのに対して、縦・横長を含めた長方形が19軒となり、先の類型別住居数にも現れているように長方形が正方形をはるかに上回っている。縦長長方形は超大・大・中・小形のいずれにも存在するが、横長長方形は中・小形に限定されている。

V 期（5世紀第4四半期） 14軒のうちで分類可能なものは13軒で、5タイプが存在する。A1形態：3軒、C1形態：2軒、C2形態：3軒、D1形態：3軒、D2形態：2軒で、目立って多いタイプはない。規模別では中・小形が共に5軒で最多となるが、超大形も3軒と相対的には少なくない。形態別では正方形が8軒、縦長長方形が5軒と僅かながら正方形が長方形を上回っている。また当該期では、III・IV期にはみられた横長長方形が存在しない。

VI 期（6世紀第1四半期） 3軒のうちで分類可能なものは2軒で、B1タイプとC1タイプが各1軒である。少数であるために傾向把握まで至らないが、形態はいずれも正方形を呈する。

VII 期（6世紀第2四半期） D1タイプの1軒のみで、全体的な傾向は不明である。

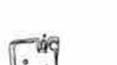
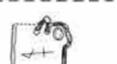
VIII 期（7世紀第4四半期） A1タイプの1軒のみで、全体的な傾向は不明である。

IX 期（8世紀後半） C1タイプ・D1タイプ・E2タイプの各1軒のみで、全体的な傾向は不明であるが、超大形や大形がなくV期以降はみられなかった超小形が存在する。

X 期（9世紀後半） D1タイプ：1軒、D2タイプ：2軒、D3タイプ：2軒の3タイプが存在し、いずれの規模も小形に集中している。形態では、正方形も存在するが、縦・横長を含めて長方形が優勢となっている。

各期における資料的な多寡もあり、全体を通しての対比はできないが、おおよその傾向としては以下のことが指摘できよう。①I期の形態は、長方形あるいは台形状を基調とし、III期からX期までのような正方形はみられない。②規模の異なる超大形住

<凡例> 規模 E：超小形 形態 1：正方形 2：縦長長方形 3：横長長方形

	A (超大型)	B (大形)	C (中形)	D (小形)	E	
I 期	1		 (2区44住)	 (2区17住)		
	2	 (3区31住)	 (2区1住)		 (2区26住)	
	3					
II 期	1			 (6区1住)		
	2					
	3					
III 期	1		 (2区11住)			
	2	 (2区14住)	 (2区43住)			
	3			 (2区18住)		
IV 期	1	 (2区15住)  (2区22住)  (2区24住)  (2区50住)	 (2区42住)  (2区35住)  (2区28住)  (2区52住)	 (1区3住)  (2区6住)	 (2区51住)	 (2区40住)
	2	 (2区16住)  (6区2住)	 (2区45住)  (2区4住)  (2区5住)  (2区3住)  (1区98住)  (1区10住)  (2区10住)	 (2区41住)  (2区55住)  (2区46住)  (2区2住)  (2区37住)  (2区30住)	 (2区36住)	
	3			 (2区21住)	 (2区38住)	
V 期	1	 (1区12住)  (2区8住)  (2区20住)		 (2区23住)  (2区27住)	 (1区8住)  (2区34住)  (1区2住)	
	2			 (1区7住)  (2区12住)  (2区25住)	 (1区9A住)  (2区13住)	
	3					
VI 期	1		 (2区32住)	 (1区6住)		
	2					
	3					

		A	B	C	D	E
VI 期	1				 (2区7住)	
	2					
	3					
VIII 期	1	 (4区1住)				
	2					
	3					
IX 期	1			 (2区29住)	 (3区1住)	
	2					 (5区6住)
	3					
X 期	1				 (5区1住)	
	2				 (5区2住)	 (5区4住)
	3				 (3区3住)	 (3区5住)

第284図 年代別の住居外形分類一覧(2)

0 1:450 10m

居と小形住居の併存は、I期より認められる。③中間の段階が欠落するものの、長方形の住居はI期からX期にまで、A1類型はIV期からVIII期までその存在が確認される。④IX・X期の住居規模は中形以下となるが、X期では小形に限定され、顕著な小形化傾向と共に形態の長方形化が認められる。⑤横長長方形は中形以下に限定され、超大形・大形には認められない。

3 竪穴住居の付属施設と方位

炉 炉の所在を確認できた竪穴住居は少ないが、竈の有無を勘案して判断すれば、I～III期は炉付き住居であり、IV期以降は竈付きの住居に取って替わられている。炉の形態は円形状を呈し、石などによる囲いをもたない床面を僅かに掘りくぼめただけの掘り込み炉である。住居内での位置は、I期はC1・D1類型ともに床面中央部のやや北側寄り、II期は不明、III期はC1類型が中央部のやや西側寄りに位置している。

I・III期とも正方形住居でのあり方であり、長方形については不明である。

竈 IV期より出現し、以降XI期までの竪穴住居に認められる。竈の構造については、残存状態の良好なものが少ないことや記録の不備もあり明確にし得ないが、IV～VIII期までは燃焼部が周壁の内側に付設され、IX期ではそれが周壁のやや外側に造り出される傾向にあり、X期ではほぼ完全に外側に造り出されている。また、竈の付設される位置については第10表にまとめたように、各時期・類型を通じて東壁に付設されるものが最も多く、その総数は45軒にも上る。このうち周壁の中央部に付設されるものは11軒であり、残りの34軒は中央部からやや南側に偏っている。また、北竈や西竈については、データ数が少ないこともあって断定はできないが、IV・V・IX期にまたがって存在しており、東竈例と同様に特定の時期や類型に偏る傾向は認められない。

貯蔵穴 I・II期は貯蔵穴の検出例がなく、住居内での在り方は不明である。III期ではC1タイプの1例のみであるが、北西隅に位置している。IV～XI期にかけては、各類型を問わず竈に向かってその右側隅に位置するものが最も多いが、その中には右側隅からかなり手前に下がった周壁寄りに位置するものがIV期で5例、V期で1例認められる。竈の左側隅に位置するものはV・VI期に各1例認められるが、IV期の2区30号住居の場合は竈に接してその左側に位置している。また、IV期の2区35号住居は竈の位置とは無関係に北東隅に位置しており、他例に比べて特異な在り方をしている。

I・II期を除いて貯蔵穴をもたない住居が、III期：2例、IV期：4例、V期：1例、IX・X期：各2例存在するが、そのあり方には住居の規模や形態との直接的な関係を認めがたい。

貯蔵穴の位置の全体的な傾向としては、IV～X期とも竈の右側隅を基本とするが、IV期ではバラエティがより多く認められ、V・VI期でも僅かなバラエティがみられることから、IV期以降徐々に「右側隅」という定位置を獲得して行くように見受けられる。

柱 穴 各期とも住居対角線上に4本の主柱をもつものが主体を占めるが、II期の6区1号住居は周壁際に3本主柱、IV期B2タイプの1区10号住居は2本主柱、2区10号住居は1本主柱となり、他とは著しく異なっている。また、明確な柱穴をもたないものがIV・V・IX期に各1例、X期に3例存在するが、いずれも住居面積が15㎡以下のものに限定されている。

出入口部 出入口部に関係すると想定される施設をもつものは極めて少ないが、そうした施設としては、まず周壁際の小ピットを上げることができる。IV期の2区16・46・51号住居はこうした小ピットを1個もつもので、いずれも貯蔵穴に近接した位置に設けられている。ピット内からは柱痕等は検出されていないが、昇降にかかわる梯状施設の下端が埋置されたものと推定される。また、V期の1区12号住居は、出入口に相当する部分に床面との比高差5cm程の馬蹄形状の高まりをもち、同様にVI期の1区6号住居は比高差10cm前後の半円形状の高まりをもっている。1区6号住居の場合、いわゆる「ベット状遺構」としても解釈可能であるが、小規模であることやその位置が1区12号住居を含めて貯蔵穴に近接していることなどから、出入口としてとらえられよう。IV期の2区21号住居は、スロープ状の地山の掘り残しが認めら

れ、これが出入り口部に相当すると推定されるが、確定はできない。

上記の住居例からみると、出入り口部は貯蔵穴に近接して設けられる傾向が窺える。

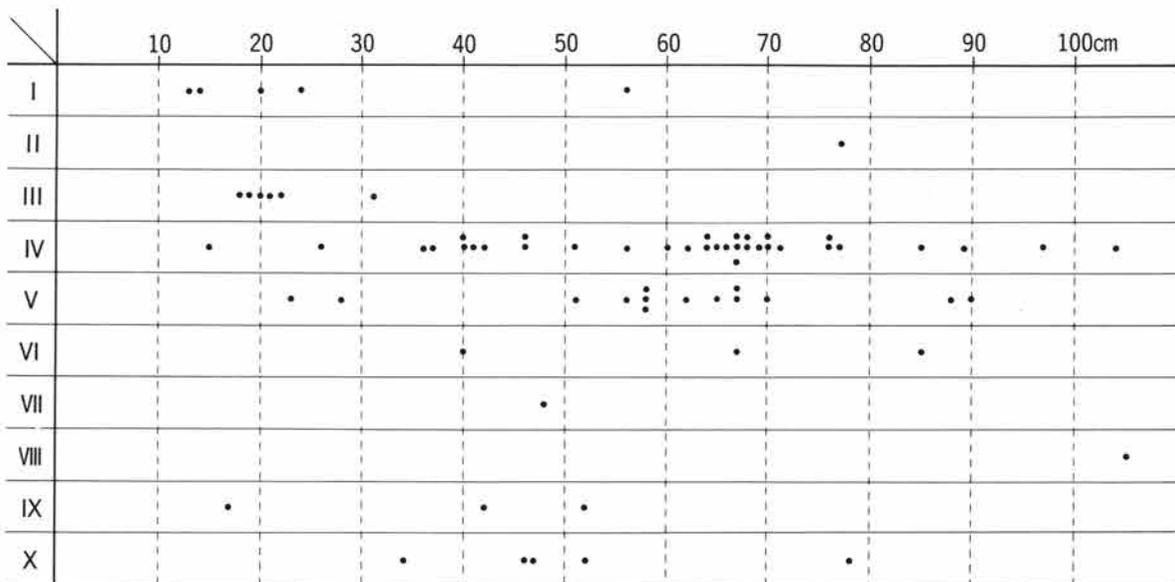
掘削深度 複数の住居が存在する I・III～VI・IX・X期について、確認（ローム）面から床面までの掘削深度をまとめたのが第285図である。何分にも当時の生活面からの掘削深度が把握できないことから、単純に比較することには問題があるが、およその傾向は把握できよう。I・III期では平均深度が20cm台と浅いが、IV～VI期にかけては60cm台と著しく深くなり、IX・X期では40～50cm台とやや浅くなる傾向が認められる。各住居の中で、105cmという最大深度をもつのはVIII期の4区1号住居であり、IV～VI期までの大深度傾向はVIII期まで継続する可能性が高い。なお、各期とも住居の規模・形態と深度との顕著な相関性は認められない。

方位 各期の住居の方位を第277図に示したが、炉付き住居は短軸の方位、竈付き住居は前述の竈の付設される方位を意味する。⁽³⁾

註3 方位の算出については、凡例の3を参照。

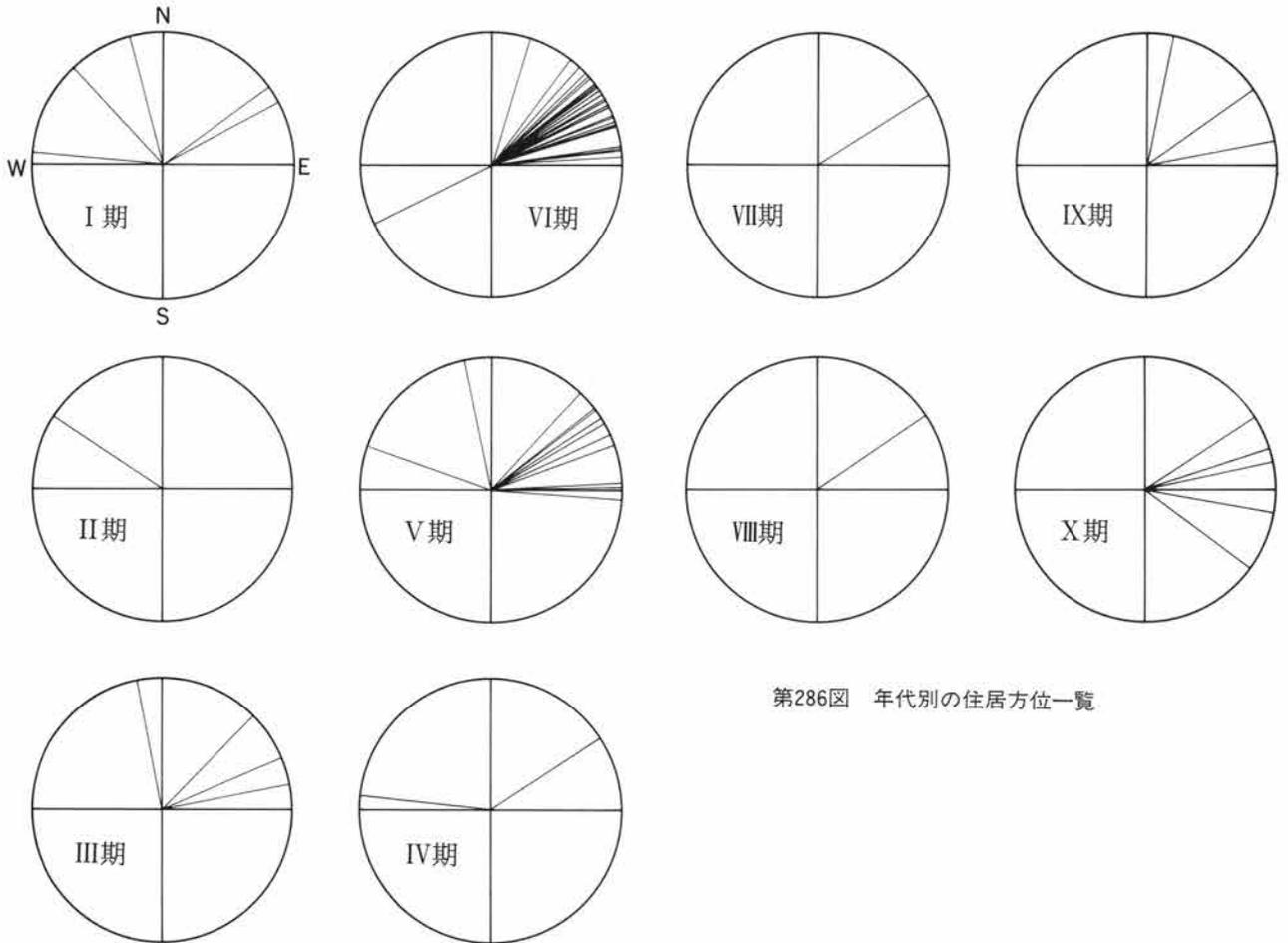
I期についてはやや数値のばらつきがあるが、北西方向かあるいはそれと約90度ずれた北東方向をとる。III～V期は北東方向から東方向にまとまる傾向を示しているが、それらの方位から外れる場合でも、90度ないしは180度のずれとなるものが多い。また、数量的には少ないが、VI～X期にかけてもIII～V期と同様の傾向にあることが窺える。

各期における全体的な傾向は上記のとおりであるが、住居数の多いIV期について竈の位置を無視して長・短軸線の方位によりそのあり方を詳細に見ると、N60～69°Eの範疇に収まるものが10例と最も多く、70°と50°台は共に7例、80°と40°では同じく5例となり、60°台をピークとしてその前後では等比級数的に減少している。こうした現象については様々な意味付けができようが、少なくとも各住居がある程度、基準となる方位（例えば60°台）を意識して構築されたことを示すものであろう。また、方位のばらつきが時間差を反映しているとも解釈できるが、IV期の住居同士で重複関係にある2区3号と4号住居および2区46号と47号住居とはその方位に顕著な違いがなく、単



第285図 年代別の住居掘削深度一覧

IV 成果と問題点



第286図 年代別の住居方位一覧

純に方位差を時間差と認定することはできない。

一方、各類型と方位との相関性については、掘削深度と同様にその関係を見いだし難い。

4 須恵器と土師器の出土状況

土器を中心とした遺物は、各期の竪穴住居よりその出土が認められるが、特にIII期からVI期にかけての住居からの出土には、夥しいものがある。ちなみに、20個体以上の土器を出土している住居は、III期：1（1）⁽⁴⁾軒、IV期：20（3）軒、V期：6（1）軒、VI期：2（0）軒、X期：1（0）軒であり、住居軒数が最多となるIV期に集中している。しかし、その住居に確実に伴うと判断される床面密着の土器が20個体を越える例は極めて少なく、その大半が埋没土中からの出土例となっている。例えば、IV期の2区15・22・30号住居は、それぞれに78・61・118個体の土器を出土しているが、床面に密着して出土したものは11・9・2個体という状態である。また、III～V期の5世紀代の20軒の住居からは、合計34点におよぶ初期須恵器や古式須恵器が出土しているが、同様に床面密着のものは1区9A号住居と2区12・28・43・46号住居からの各1例の合計5個体に過ぎない。これら埋没土中からの出土土器は、住居内に第一次埋没土が堆積した後に短期間のうちに投棄されたような出土状態を示しており、縄文時代の竪穴住居におけるいわゆる⁽⁵⁾“吹上パターン”として認識される出土状況に類似している。

註4 ()内は床面密着の土器を20個体以上出土する住居数。

註5 小林達雄「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』第93号 1974

第12表 複数住居にわたる出土土器の接合関係一覧

No.	掲載住居 (IV期)	接合関係住居 (IV期)	No.	掲載住居 (IV期)	接合関係住居 (V期)	No.	掲載住居 (IV期)	接合関係住居 (V期)	接合関係住居 (V期)
1	1区3住10(埋)	1区1住(埋)	27	2区52住15(床)	2区30住(埋)	48	2区10住29(床)	2区9住(埋)	2区9住(埋)
2	1区8住9(埋)	1区12住(埋)	28	2区52住16(床)	2区10・22・30住(埋)	49	2区15住28(埋)	2区12住(埋)	2区12住(埋)
3	2区3住3(埋)	2区5住(埋)	29	2区53住2(埋)	2区51住(埋)	50	2区22住27(埋)	2区23住(埋)	2区23住(埋)
4	2区4住5(埋)	2区3住(埋)	30	2区53住5(埋)	2区52住(埋)	51	2区22住57(埋)	2区8・12住(埋)	2区8・12住(埋)
5	2区4住9(埋)	2区3住(埋)	31	2区53住7(埋)	2区52住(埋)	No.	掲載住居 (IV期)	接合関係住居 (VI期)	接合関係住居 (VI期)
6	2区5住4(埋)	2区6住(埋)	32	2区55住2(床)	2区47住(床)	52	2区15住30(埋)	2区32住(埋)	2区32住(埋)
7	2区22住57(埋)	2区15・21・46・47住(埋)	No.	掲載住居 (V期)	接合関係住居 (V期)	53	2区52住16(床)	2区32住(埋)	2区32住(埋)
8	2区30住1(埋)	2区3住(埋)	33	1区9住25(床)	1区7住(埋)	No.	掲載住居 (IV期)	接合関係住居 (IX期)	接合関係住居 (IX期)
9	2区30住4(埋)	2区24住(埋)	34	1区9住40(床)	1区8住(埋)	54	2区52住16(床)	2区29住(埋)	2区29住(埋)
10	2区30住94(埋)	2区51住(埋)	35	2区12住3(埋)	2区8住(埋)	No.	掲載住居 (V期)	接合関係住居 (IV期)	接合関係住居 (IV期)
11	2区36住8(埋)	2区30(床・埋)・51住(床)	36	2区12住19(床)	2区15・27住(埋)	55	1区2住8(埋)	1区3住(埋)	1区3住(埋)
12	2区41住13(床)	2区51住(埋)	No.	掲載住居 (I期)	接合関係住居 (IV期)	56	2区12住25(床)	2区15住(埋)	2区15住(埋)
13	2区41住15(床)	2区38住(埋)	37	1区26住2(埋)	2区30住(埋)	57	2区12住37(床)	2区15住(埋)	2区15住(埋)
14	2区46住9(埋)	2区47住(埋)	38	1区31住15(埋)	2区28住(埋)	58	2区20住2(埋)	2区30住(埋)	2区30住(埋)
15	2区46住10(埋)	2区42住(埋)	No.	掲載住居 (I期)	接合関係住居 (V期)	59	2区25住7(床)	2区16住(埋・電)	2区16住(埋・電)
16	2区46住11(埋)	2区47住(埋)	39	1区1住10(埋)	2区34住(電)	No.	掲載住居 (V期)	接合関係住居 (VI期)	接合関係住居 (VI期)
17	2区47住10(床)	2区55住(埋)	No.	掲載住居 (III期)	接合関係住居 (IV期)	60	2区25住7(床)	2区32住(埋)	2区32住(埋)
18	2区47住14(埋)	2区55住(埋)	40	1区11住6(埋)	1区10住(埋)	No.	掲載住居 (V期)	接合関係住居 (VII期)	接合関係住居 (VII期)
19	2区47住23(埋)	2区21壙(埋)	41	1区11住8(埋)	1区10住(埋)	61	2区12住23(埋)	2区7住(埋)	2区7住(埋)
20	2区51住26(床)	2区30住(埋)	43	2区43住1(床)	1区1住(埋)	No.	掲載住居 (VI期)	接合関係住居 (V期)	接合関係住居 (V期)
21	2区51住28(埋)	2区30住(埋)	No.	掲載住居 (IV期)	接合関係住居 (III期)	62	1区13住2(埋)	1区8住(埋)	1区8住(埋)
22	2区51住31(床)	2区30住(埋)	44	2区15住12(床)	2区14住(埋)	No.	掲載住居 (IX期)	接合関係住居 (X期)	接合関係住居 (X期)
23	2区51住37(埋)	2区30住(埋)	45	2区15住15(埋)	2区14住(埋)	63	3区1住1(埋)	5区2住(埋)	5区2住(埋)
24	2区51住43(埋)	2区30住(埋)	46	2区28住16(埋)	2区20壙(埋)	No.	掲載住居 (IV期)	接合関係遺構 (不明)	接合関係遺構 (不明)
25	2区51住48(埋)	2区30住(埋)	47	2区52住16(床)	2区11住(埋)	64	2区46住6(床)	2区1溝(埋)	2区1溝(埋)
26	2区51住49(埋)	2区52住(埋)							

凡例 (床)：床面密着出土 (埋)：埋没土中出土 (電)：電埋没土中出土

IV 成果と問題点

註6 藤野修一「第3章 遺物の遺存状態の検討」『神谷原II』八王子市栢田遺跡調査会 1982

註7 石井 寛「縄文社会における集団移動と地域組織」『調査研究集録』第2冊 港北ニュータウン遺跡調査会 1977

註8 註5に同じ。

註9 坂口 一氏の指摘による。

ところで、同一時期に属する複数の住居にまたがって出土した土器の接合例を第12表に掲載してみた。この接合例はIV期が31例、V期が6例で、住居数に比例してIV期に集中している。こうした接合例をもつ住居同士を「同時に廃棄場として機能している⁽⁶⁾」ものと仮定できるならば、IV期では2区3～6・24・30・36・38・41・51・52号住居と2区15・21・22・42・46・47・55号住居の2グループが、V期では1区7～9・12号住居と2区8・12・27号住居の2グループが、各々個別に同時共存的な廃棄場としての関係を認定できる。しかし、このような複数の住居にまたがる接合例は、同時期内で重複関係にあるIV期の2区3号と4号住居およびV期の1区7号と12号住居とにみられ、また時期の異なるIV・V期の住居同士でも27例確認されており、廃棄場としての共存関係を、それら住居の使用時における同時共存関係にまで高めることはできない。

こうした“吹上パターン”的な廃棄行動が意味するものについては、縄文時代を対象にした分析で語られているような「集落の移動⁽⁷⁾」や「土器製作に関連した行動⁽⁸⁾」を示すか否かをも含めて今後十分に検討されねばならないが、総体的には床面密着出土と埋没土中出土の土器とは形式的にほとんど差がみられないことから、住居の廃絶後から“第一次埋没土の堆積→土器の投棄、までの期間は、少なくとも土器の型式差に反映されない四半世紀以内に止どまるものであろう。

一方、土器の出土量と住居類型との関係をIII～V期についてみると、各期とも特定の類型との結び付きは認められないが、床面密着あるいは埋没土中を含めて20個体以上の土器の出土例は、規模的に超大形・大形・中形の住居に集中する傾向がみられる。しかし、初期須恵器や古式須恵器の出土状況には、そうした大型住居との関係は認められず、超小形から超大形住居までの広い類型にわたっての出土が確認できる。つまり、土師器の出土量は住居の規模とある程度比例関係にあるが、須恵器の場合はそうした関係がほとんどみられないといえよう。

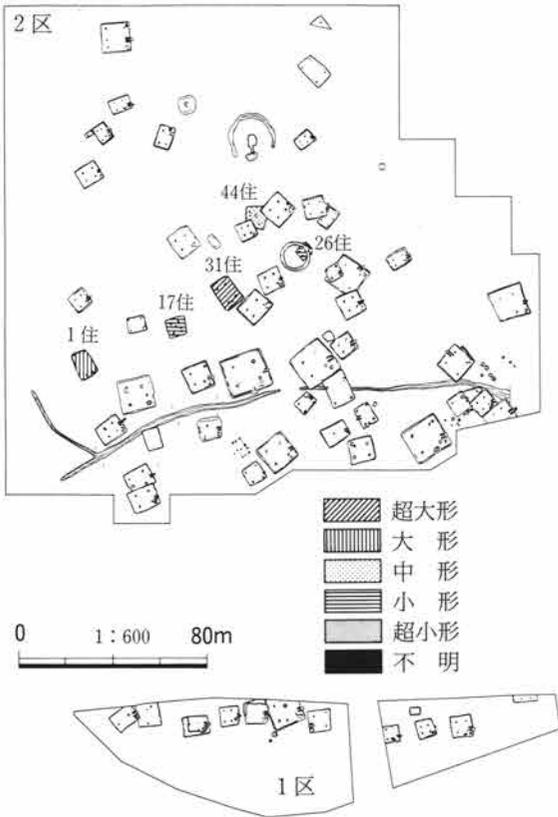
5 集落の変遷

各期の集落占地 前述した各住居のI～X期の時期区分を基に、各期における竪穴住居を中心とした集落の変遷を分析してみたい。尚、参考資料として第287・288図に1・2区における各期住居の規模別の配置を示した。

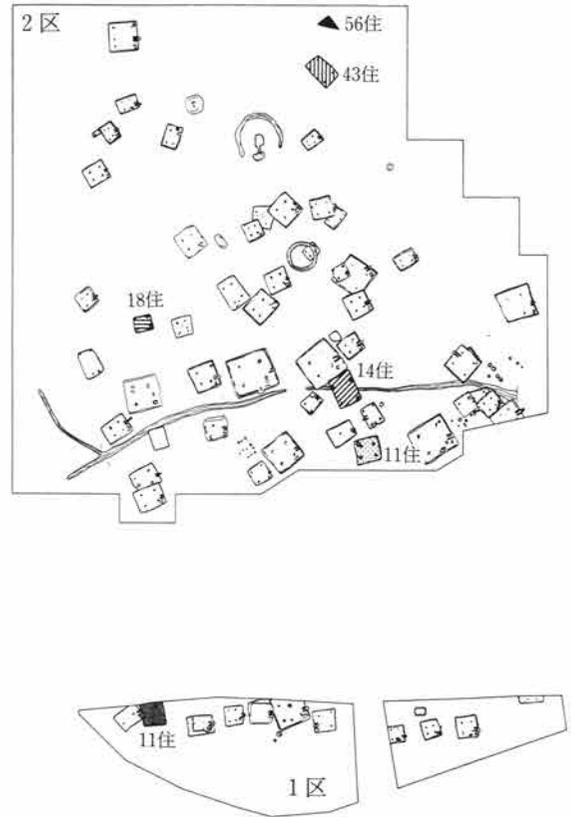
I期の5軒の集落立地は2区のみ限定され、他区域への広がりには確認されていない。位置的には2区の中でも標高の高い台地中央部寄りに立地する傾向が見られ、44号住居を除いた4軒は、8～15m間隔で軒先を揃えるようにほぼ東西に直線的に並んでいる(第287図1参照)。44号住居については、その出土土器が他の住居例よりもやや後出する要素をもつとされており、⁽¹⁰⁾1・17・31・26号住居→44号住居へと変遷する可能性もある。

註10 後段の大木紳一郎氏の論考参照。

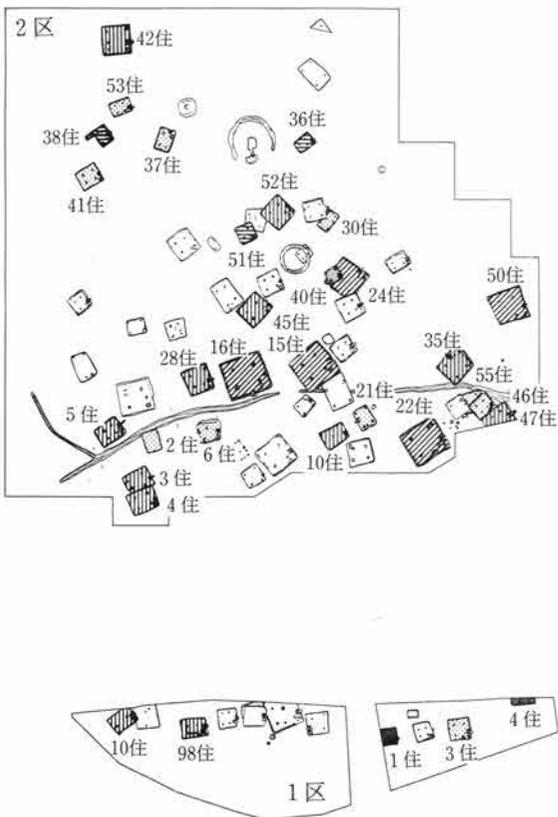
I期から約4世紀余りの空白期をおいたII期では、沖積地を挟んで2区の南東150mに位置する6区で1軒検出されているのみで、他区域からは検出されていない。6区における遺構の分布は他期を含めても粗であるが、5m幅の道路敷き部分の調査でもあり、全体的にはより多くの遺構の存在が想定されることから、当該期集落も複数の



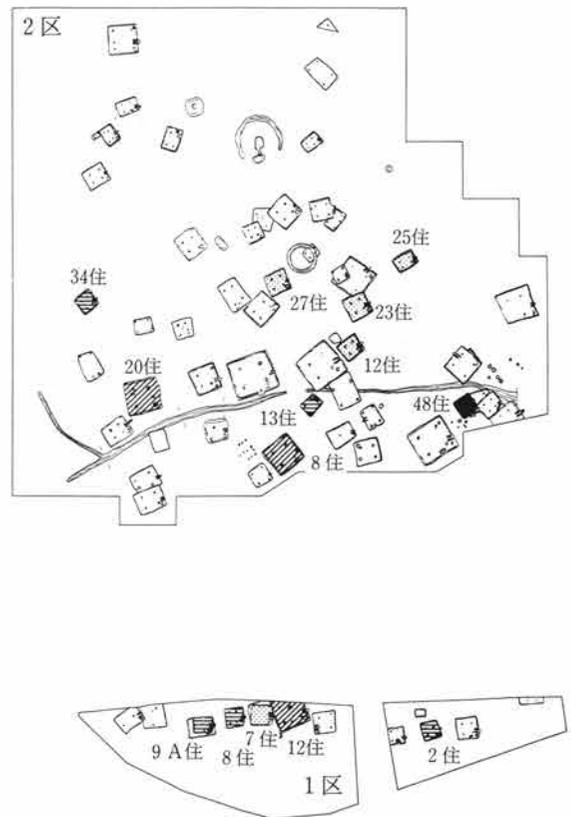
1. 弥生時代後期



2. III期 (5世紀第2四半期)



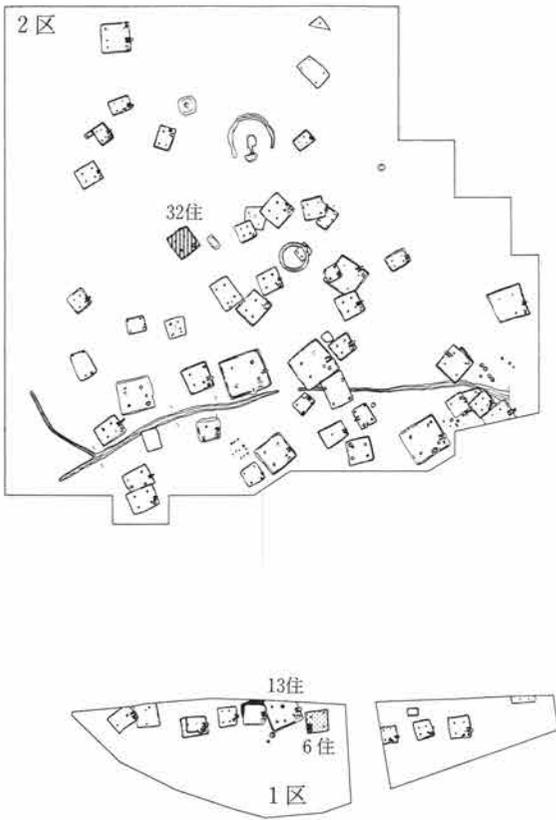
3. IV期 (5世紀第3四半期)



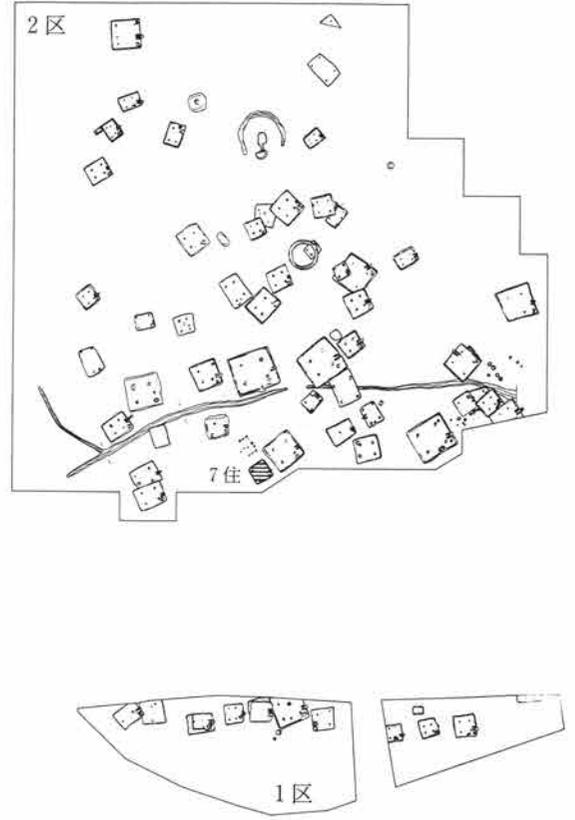
4. V期 (5世紀第4四半期)

第287図 1・2区の集落変遷(1)

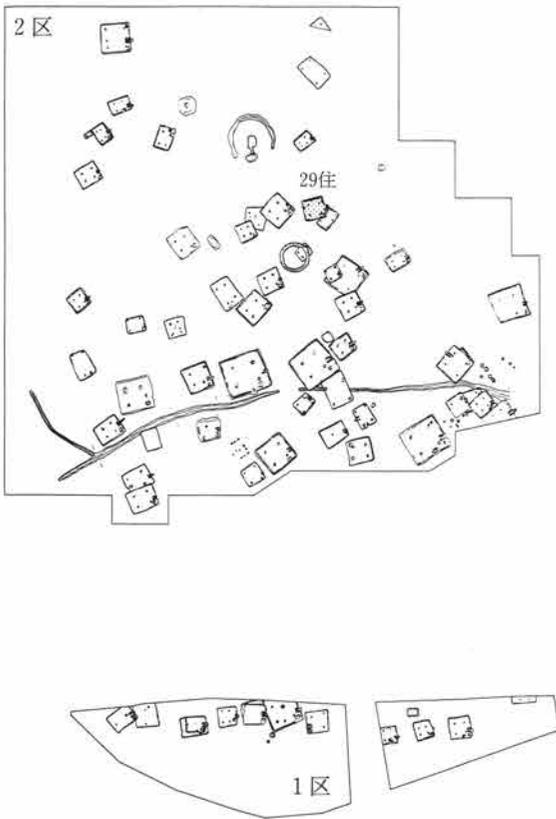
IV 成果と問題点



5. VI期 (6世紀第1四半期)



6. VII期 (6世紀第2四半期)



7. IX期 (8世紀後半)

第288図 1・2区の集落変遷(2)

住居によって構成されと考えられる。III期は同一台地上に位置する1・2区のみ、6軒が存在する。I期のような住居の配列は見られないが、2区11・14号住居および同43・56号住居のように2軒単位でまとまる傾向がある。また、南側の沖積地に面した場所(1区)への集落の広がりが認められる。

IV期は34軒の住居が存在し、各期の中でも最大の集落規模となる。またその立地は1・2区と6区にまたがり、前時期に比べて集落規模と共に占地面积の点でもより拡大している。各区における住居タイプの分布をみると、顕著な傾向とまでは言えないが、超大形正方形のA1類型は2区の東側斜面と6区に、大形縦長長方形のB2類型は2区南側から1区にかけて、中形縦長長方形のC2類型は2区北西側と南東側に、小形のD1~3類型は2区中央部から北側にかけてそれぞれ立地している。しかし、こうした分布傾向から、各類型間での位置的な相関性や住居単位というべきものは見出すことができず、その意味するところについては判然としない。

V期は14軒が存在するが、IV期に比べてその数は著し

く減少し、その占地も1・2区に止どまっている。また、2区内においても住居の分布はその北半部にはみられず、集落規模の縮小とともに占有面積の減少が認められる。各類型の分布状況は、超大形正方形のA1類型と小形のD1・2類型がともに2区南側から1区にかけて存在し、中形のC1・2類型が2区の東側に集中する傾向がみられる。

VI・VII期は前時期に比べて更に住居軒数が減少し、類型別の傾向は把握できないが、VI期では住居が特定の箇所集中することなく散在している。III期からVII期に至るまで集落の占地が連綿と継続していた1・2区では、これ以降はIX期に至るまでそれも途絶えてしまっている。

VII期から約1世紀半の空白期間を挟んだVIII期では、同一の台地ではあるが2区から北方へ約100m離れた4区に1軒が立地するのみとなる。

更に、VIII期から約1世紀弱の間を挟んだIX期の集落の占地は、沖積地を挟んで1・2区の東側に位置する3・5区へとその主体が移動し、X期に至るまで3・5区を中心に集落が営まれている。IX期は3軒と集落規模は小さく、2区へも1軒の住居が再び立地するが、それも当該期のみで終焉している。X期は集落の形成が認められる最終段階であるが、IX期との間に約四半世紀の空隙が存在する。総軒数は5軒と前段階をやや上回り、集落の占有面積もIV期に匹敵する広がりをもつが、極めて散在的な分布となる。IX・X期は集落占地の点でほぼ共通するが、住居類型の面でもVII期まで存在していた超大形・大形住居は認められず、それ以前とはかなりの変貌が見て取れる。

以上が竪穴住居を中心に見た集落の変遷過程であるが、6世紀後半の二ツ岳軽石で埋没した子持村黒井峯遺跡⁽¹¹⁾の例からみれば、集落が竪穴住居のみで構成されるものではないことは明らかである。当遺跡にも溝・土壇・竪穴状遺構・掘立柱建物をはじめ、円形周溝墓や古墳などの遺構が存在するが、時期を確定することができず、竪穴住居との明確な関連性を把握することは難しい。しかし、大づかみにみれば、2区より1基検出されている1号円形周溝墓については、その周辺の竪穴住居の埋没土中より出土している石田川式土器の存在からみて、古墳時代初頭に位置付けられる可能性が高い。また2区1号古墳は、僅かに掘りくぼめられた前庭部とその両脇で途切れている周堀のあり方や、その周辺から出土している埴輪の破片からみて、6世紀後半に位置すると想定される。これらの遺構を先のI～X期の時期区分に照合させるならば、1号円形周溝墓はI期とII期との間に、1号古墳はVII期とVIII期との間にそれぞれ位置付けられる。これらの墓址が構築された段階の竪穴住居が調査区域内より検出されていないことからみると、当遺跡では短期間ではあるが、2度にわたって居住域から墓域への土地利用の変更がなされたものと思われる。

その他の遺構に関しては、溝は2区1号溝と5区1号溝の2条が存在し、集落内を区画する機能も推定されるが断定できない。また、掘立柱建物は2区に1棟、3区に2棟、5区に1棟の計4棟が存在し、中世墓壇と関連をもつ3区1号掘立柱建物を除けば、その立地状況からみて2区1号掘立柱建物はI～VII期、3区2号・5区1号掘立柱建物はIX・X期のいずれかに所属するものであろう。それと同様に、1・2区の

註11 『黒井峯遺跡確認調査概報』子持村教育委員会 1986

註12 第128図26、第230図114を参照。

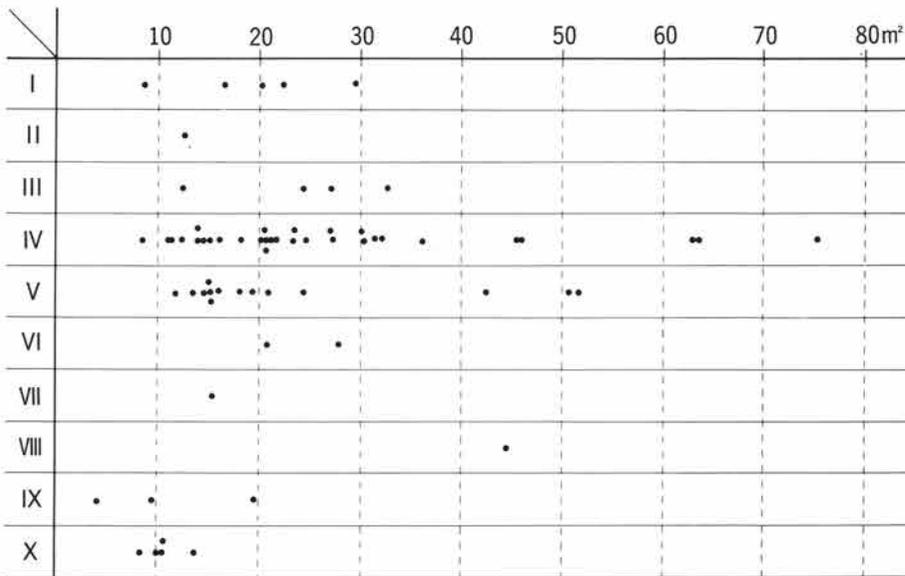
註13 「荒砥北原遺跡 今井神社古墳群 荒砥青柳遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
 註14 「芳賀東部団地遺跡Ⅰ・Ⅱ」前橋市教育委員会 1984・1988

註15 「荒砥島原遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
 註16 「荒砥天之宮遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988
 註17 「荒砥洗橋遺跡 荒砥宮西遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989

註18 能登 健「農耕集落論研究の現段階」『歴史評論』466号 1989

土壌は前者に、3・5区の土壌・竪穴状遺構は後者に所属すると判断される。特に3区2号住居とした竪穴状遺構は、埋没土上層に1108(天仁元)年の降下火山灰のAs-Bが堆積しており、こうした想定を裏付けている。この竪穴状遺構は、3区2号住居をはじめ5区3・5号住居とした3基が検出されているが、竈・柱穴などの付属施設や伴出遺物等が存在しないという共通点をもつことから、同段階における竪穴住居とはその性格を異にするとと思われる。なお、この性格不明の竪穴状遺構については、本遺跡の北方約700mに位置する荒砥北原遺跡⁽¹³⁾で8世紀後半の集落内より1基確認され、また同じく約7km北西に位置する芳賀東部団地遺跡⁽¹⁴⁾で6世紀後半から11世紀後半にかけての集落内より5基が確認されており、当該期集落における共通したあり方を示すものとして注目しておきたい。

竪穴住居の規模および形態の差について 各期の集落が、それぞれの段階において、その規模や形態に差をもつ複数の種類の竪穴住居によって構成されていることは既に述べた。この住居種類のあり方について幾つかの問題点を上げれば、①超大形正方形住居の出現と消滅、②同一段階内での大形住居と小形住居の存在、③X期にみられる住居の小形化および横長長方形化傾向、の3点がある。①については、当遺跡ではIV・V・VII期までその存在が確認されるが、周辺の荒砥島原遺跡(第2図5)、荒砥天之宮遺跡⁽¹⁵⁾(同図11)、荒砥洗橋遺跡⁽¹⁶⁾(同図29)、芳賀東部団地遺跡⁽¹⁷⁾などでのあり方を参考とすれば、4世紀後半から8世紀初頭段階にまで認めることができる。それを本遺跡での時期区分に置き換えるならば、II期には確実にその存在が想定されることになり、VIII期まで存続することにも整合性がある。群馬県内の事例で見ると、この4本支柱を基本とするA1類型は、正方形という基本形態を含めて、長方形を基本とする弥生時代の住居にはその類例を見いだすことができず、石田川式土器の登場と共に古墳時代に入って他の地域から伝播した種類の可能性が高い。またそれが消滅する8世紀中葉段階以降のあり方を芳賀東部団地遺跡を例としてみると、A1類型の超大形正方形住居と入れ代わるように掘立柱建物が出現しており、両者の密接なつながりが窺われる。②についてはすでにI期にも認められる現象であり、先の他遺跡例も参考にすれば、I～VIII期(弥生時代中期後半～7世紀後半)にかけては確実に両者が併存すると想定される。子持村黒井峯遺跡では、竪穴住居に付随する形で柵に囲まれた平地住居群が検出されているが、竪穴住居の規模の大小によってそれに付随する平地住居の軒数や内容に差が認められる。これについて能登 健氏は、竪穴住居と平地住居および竪穴住居の大小には階層的な上下関係が反映されているとし、更にA1類型のような大形竪穴住居が激減・消滅する時期が、それまでの竪穴住居と平地住居との上下関係が逆転する段階であり、竪穴住居の性格を一系的にとらえることに問題があるとしている。この考え方は古墳時代前期以降を分析対象としたもので、弥生時代についても同様な理解が可能であるのか検討を要するが、①の芳賀東部団地遺跡例でみられたA1類型と掘立柱建物との関係は、こうした理解が的を得ていることを示すものであろう。③についても当遺跡のみで理解することは困難であるが、荒砥洗橋遺跡や芳賀東部団地遺跡でみると、8世紀中葉以降には超大形住居は存在せず、中・小形にま



第289図 年代別の住居面積一覧

る傾向をみせる。そしてその後、段階的に横長長方形住居が増加し、9世紀後半以降ではC3・D3タイプの横長長方形が他類型を遥かに凌駕している。このような8世紀中葉以降の竪穴住居にみられる傾向は、規模や形態の両側面での均質化ともとらえられるもので、先の②とも密接な関係をもつものであろう。当遺跡でも認められた8世紀後半以降の竪穴住居の小形化・横長長方形化傾向も、こうした動向と軌を一にするものと理解される。長方形住居はI期の弥生時代より存在するが、それがII期以降の縦長・横長を含めた長方形住居とも系譜関係をもつか否か明らかにし得ない。ただ、8世紀後半以降の横長長方形住居には、規模の縮小と共に竈の周壁外への造り出しや支柱穴の消失傾向などの構造的変化を伴っている点で注意を要する。

集落の断続および占地の移動とその背景 北三木堂遺跡における農耕社会以降の集落は、I期の弥生時代中期に始まり、XI期の9世紀前半にてその営みを終えているが、前述したようにI～XI期に至る間には集落の時間的な断続状況と1・2・6区→4区→3・5区という占地の移動が認められる。もちろん、遺跡全域の調査ではないことから、調査区域外の未確認資料を考慮すれば、そうした状況も変わる可能性がある。しかし、調査前段階における地表面での分布調査によれば、遺跡の範囲や各調査区での遺構の時期的な偏りも発掘調査結果とほとんど異なっていないことから、少なくともこの調査結果は今井沼周辺における集落の実態を相応に反映したものと推定される。

ではそう仮定できた場合、次に集落の断続と占地の移動をもたらす契機となるものが何であるのかが問題となる。これについても、能登氏によって注目すべき見解が出されている。ここで詳しく取り上げる余裕はないが、その概要は以下のようなものである。能登氏は弥生時代から平安時代にかけての集落を分析し、その継続性によって3～4世紀に集落が形成されてその後も同一地点で集落経営が継続・拡大される「伝統集落」、古墳時代中・後期になって伝統集落の周辺に新たに成立する「第一次新開集

IV 成果と問題点

註19 能登 健「里棲み集落の研究—集落変遷からみた農耕地の拡大過程とその背景—」『内陸の生活と文化』雄山閣 1986

註20 註19に同じ。

註21 註18に同じ。

註22 註18に同じ。

落」、8世紀代になって劣悪な農耕地に進出する「第二次新開集落」の3つのパターンに分類している⁽¹⁹⁾。これは基本的に集落の時間的継続を前提にした分類であるが、その中に当遺跡のように断続する状況が存在することの理由について、①発掘区域の狭さに起因する問題②水田耕地の地力低下や「秋落ち」などの農耕技術上の問題③「忌み地」化などの民衆の信仰的問題④奥羽地方への移住や地域の再編成などの強制的集落介入などを上げている⁽²⁰⁾。これを当遺跡と対照してみると、①については前述の通りであるが、②については水田耕地と想定される1・2区南側から北東側へと延びている沖積地は規模が小さく、冷温かつ量的に少ない湧水を用とせざるを得ない点で、決して良好な耕地とは言えない。また、③④に関しては、円形周溝墓や小円墳の立地にみられるように、計画的か否かは不明であるものの、現象的には居住域から墓域への土地利用の変化が認められる。このようにみれば、当遺跡においても集落の断続あるいはその占地移動を促す十分な要因が、内在すると言える。

しかし、狩猟採集経済段階にある縄文時代の集落とは異なり、農耕社会における集落は「生産域として保守される「耕地」を管理することを第一義として居住域が決定される。すなわち、農耕集落は耕地を保守・拡大するために居住域が定住・継続し、拡大・拡散する」とされる⁽²¹⁾。またこの集落を広大な生産領域に対する数単位集団の協業という側面からとらえて、「一遺跡は一居住単位であり、これが数単位集まって一つの生産集団を形成している。一遺跡は集落(村落)総体の一地点でしかないのである。すなわち、生産域を中心にした農耕集落の構造は、数遺跡の集合体であった」という認識も提示されている⁽²²⁾。こうした視点に立つならば、本遺跡における集落の断続・占地移動の背景理解も1遺跡=1地点に止どまるのではなく、荒砥川周辺の更に広い範囲にわたっての他遺跡も含めた分析がなされなければならないのであろう。またその分析過程において、先の「吹上パターン」的な遺物出土状況の解釈も、単に集落移動の証拠としてではなく、「集落=村落」内の1地点における居住のあり方という側面からの検討を余儀なくされるものと思われる。

当遺跡は断続的ながらも弥生時代から平安時代にわたって集落が継続しており、先の能登氏の集落分類に従えば、「伝統集落」に位置付けられる。この集落で特筆されるのは、その形成が5世紀後半をピークとする点と大量の古式須恵器を出土する点であり、後段で坂口氏によって論及されているように、当遺跡の南方500mに位置する5世紀後半の前方後円墳である今井神社古墳の存在とも無縁ではなからう。当然のことながら、その背景には安定した水田耕地を中心とする生産域の存在とその拡大が想定されるのである。筆者自身の不勉強ゆえ、それらの諸点を現時点で明らかにすることはできないが、先の視点に立脚した分析を今後の課題として擱筆しておきたい。

(石坂 茂)

北三木堂遺跡の弥生式土器について

大木紳一郎

器種は、壺、甕、台付甕、蓋、瓢形土器、(高杯)、(甕)が見られる。このうち、高杯は脚部のみ(第17図-7)で全形を知り得ない。第17図-8は鉢の可能性もあるが、器高が深いことから甕と推定した。以下、各器種毎にその特徴を記す。

壺 器形と文様の特徴から次の5類に細分される。

1類：口縁は単純で漏斗状に開き、頸部が弱い「く」字状に屈曲する長胴の器形で胴最大径はやや下半にある。口縁と胴上半に縄文を施す。第7図-9、第16図-1。

2a類：器形は1類に近似するが、胴最大幅は中位にある。文様は口縁と頸部から肩部にかけて沈線区画の帯縄文を施す。文様モチーフは横線文、連弧文が主で、他に三角文(第7図-7)や垂下文(第228図-63)等の変化も見られる。第12図-2・3など。

2a類：文様は2a類に準ずるが、口縁は粘土帯貼付による折り返し状で、口頸部が長く緩やかに内彎する器形を呈する。胴部は不明であるが、2a類とほぼ同様と考えられる。第7図-1、第226図-1。

3a類：器形は受け口か漏斗状口縁で頸部は緩やかにくびれる。胴部形状は不明。文様は1本ないしは2本1対の弾力性のある棒状具(径1~2mm)による沈線で重連弧文、重三角文を施す。口唇部には豆状粘土粒を貼付する。第10図-7、第13図-11・14。

3b類：小形で器形は2a類に似る。3a類と同様の施文具で同心円状文を連続して描き、接点部分に豆状粘土粒を貼付する。第12図-1。

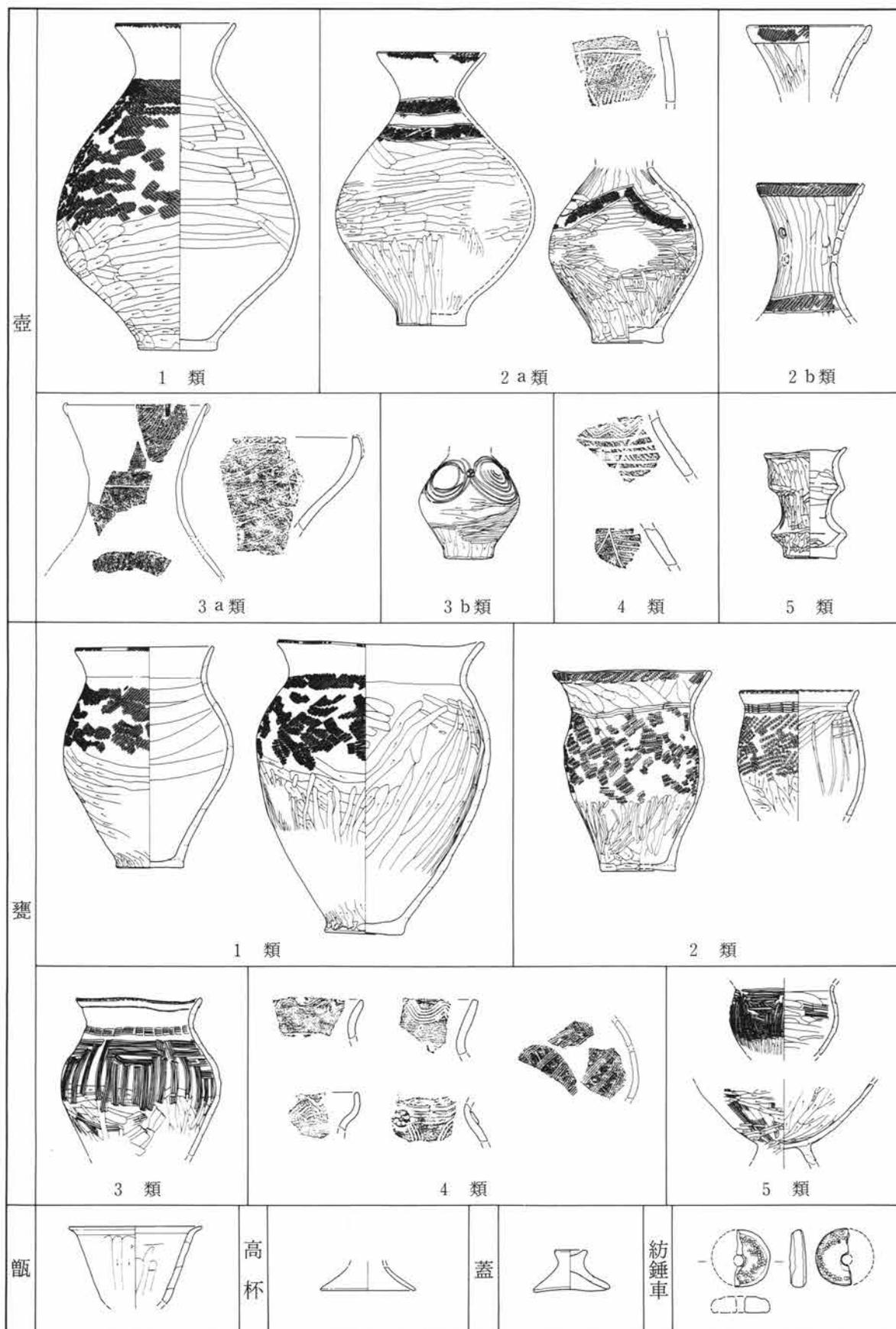
4類：器形は不明で、文様は沈線で横線文、鋸歯文を描き、櫛描波状文や縄文との組み合わせで構成される。第227図-38b・43。

5類：瓢形土器を示す。第7図-4。

1類は、縄文のみを施文する点で既知の型式には見られない特徴をもつといえる。器形は2類との強い関連性を窺わせるものであるが、最大径が下位にある点で後出する可能性がある。2a・b類は長胴の器形と櫛描文を施さない点で、群馬県西部に分布する典型的な竜見町式とは異なる。なお、2b類は南関東に主要な分布をもつ宮ノ台式に近似するもので、器形からは2a類と峻別すべきであるが、全形を知り得るものがないため、文様の類似性からここでは2類に含めた。3a・b類は文様の特徴から、東北地方南部に分布する二ツ釜式あるいは次期の川原町口式の影響を強く受けた土器と考えられ、赤城山南麓の荒砥川周辺地域に集中して分布する特徴的な土器の⁽¹⁾群と考えられる。4類は竜見町式であるが、全形を知り得るものはない。この他に、「リボン」状に縄文を施した宮ノ台式(第228図-7)と考えられるものもあるが、小破片のためここでは分類から外した。

註1 大木紳一郎 「群馬県東部における弥生時代中期後半の土器について」『創立十周年記念論集』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1988

IV 成果と問題点



第290図 弥生式土器の器種分類

甕 平底と台付があり、平底甕は文様の特徴から4類に分けられる。

1類：口縁は短く開き、頸部は弱く「く」字状に屈曲する。体部の最大径はやや上位にあり、肩の張る形状を示す。文様は縄文のみで、口唇部と体上半に施される。

なお、器面調整としてのハケ目は見られない。縄文は単節斜縄文の横位施文が基本で、複雑な構成は見られない。原体は単節を主とするが、0段多条の複節も見受けられる。これは、0段に燃のかかった糸を用いた可能性があり、弥生式土器の特徴的な縄文原体として注目すべきものである(第282図)。第12図-7・8、第17図-4・10・11、第226図-16・23など。

註2 本遺跡出土土器に特徴的な縄文原体か否かは今後の検討課題であるが、系統的に続く可能性のある赤井戸式土器にも同様の原体による縄文が認められることは注意すべきであろう。

2類：器形は1類に近似するが、胴最大径が中位にあり、肩部が明瞭でない。文様は口縁と胴上半に縄文、頸部に簾状文を施す。第7図-3、第17図-5など。

3類：器形は1類に近似し、口縁、口唇部に縄文、頸部に櫛描簾状文、胴部に櫛描コの字重ね文を施す。第10図-26住2、第17図-9、第226図-15など。

4類：口縁は素口縁と受け口状で、口縁、頸部、体部に櫛描文を施し、竜見町式を一括した。全形は知り得ない。第10図-17住4~6、第226図-22~28など。

5類：台付甕である。全形を知り得ないが、第226図-3のように沈線でコの字重ね文を描いた小形品は竜見町式に属するものであろう。第7図-5、第12図-4など。

甕1類は、壺1類と同様に縄文のみを施文することが特筆すべき点である。器形は最大径が中位近くにあるもの(第17図-4)と上位にあるもの(第12図-8)で僅かな相違が見られるが、これは後者から前者へ推移する可能性がある。3・4類は竜見町式の範疇で理解されるが、3類に見られる折り返し状口縁と縄文施文は典型とは異なる特徴といえる。2類は1類と3・4類の両要素をもつものであり、器形や文様の組み合わせが画一的でなくバラエティーに富む。



第291図 燃紐を使用した弥生土器の縄文(2区31号住居No.8)

IV 成果と問題点

高杯は全形を知り得るものはないが、小形で裾部が大きく開き塗彩が見られる。蓋(第10図-26住1)は小形品で壺と組み合わせたものであろう。なお第7図-8は、全面に縄文を施したもので内彎する器形から浅鉢の可能性がある。

本遺跡出土弥生式土器の時期は、壺4類、甕3・4類の存在から、中期後半の竜見町式並行期と考えられる。しかし、本遺跡の弥生式土器は比較的単一の型式内容をもつ竜見町式に比べて、いくつかの異なる系統の土器から構成されるのが特徴であり、そのなかで注目されるのは壺1類、同2 a・b類、甕1類、同2類に代表される縄文施文土器の存在である。壺1類は全形を知るものが2区44号住居例のみであったが、同類の破片はかなり多く見うけられることから、壺2類とともに壺の主体を占めたと考えられる。また、甕1類は従来、前橋市荒口前原遺跡⁽³⁾、同市荒砥前原遺跡⁽⁴⁾、伊勢崎市西太田遺跡⁽⁵⁾、粕川村西迎遺跡⁽⁶⁾等の赤城山南麓における在系土器として知られてきたが、いずれも客体的な存在であったために大きく取り上げられることはなかった。しかし、壺1類、同2 a・b類、甕1類、同2類で構成される本遺跡での主体的な在り方を見る限り、これらが同時期に存在した櫛描文系の竜見町式とは全く異なる系統の土器として存在することを示唆していると言えよう。

この縄文施文系土器による器種組成が確実ならば、その器形や文様の特徴から周辺地域でほぼ同時期に存在すると考えられる宮ノ台式、栗林式、百瀬式、二ツ釜式等の既知型式とは関連性をもちつつも、これらと異なる型式の土器群として新たに認知する必要がある。これらの土器との関連性は、竜見町式を始めとして宮ノ台式に近似する壺2 b類や東北地方南部の土器文様を取り入れた壺3類に見られるように、かなり強いものであるが、それによって大きく変化することはなく、縄文施文は土器製作の原則的技法として堅持されたと解釈される。またこれらの土器との同時平行関係の具体的な位置付けについては未だ十分な検討を行える段階にはない。かつて平野進一氏は、これと同様の土器群を出土した前橋市荒砥前原遺跡の検討から、壺の胴最大径が中位にあること、甕の櫛描文が崩れている事等をもって竜見町式の新しい段階と位置付けたが⁽⁷⁾、その系統が竜見町式では理解できないことから、安易に竜見町式との対比のみで前後関係を推定するのは困難と考えられる。むしろまず行うべきは、この縄文系土器群の系統的な把握であろう。ここでは、本遺跡出土土器の位置付けについて簡単な見通しを述べておきたい。

縄文が主文様である点を重視した場合、中期前半～中葉に位置付けられる野沢式や須和田式の一部に見られるような、主に北関東東半部を中心にした土器群に近似性が求められる。また、器形についても壺2 a・b類に見られる折り返し口縁や長胴器形はこれらの土器群との類縁性を感じさせるものである。これらを系統的な祖型と想定した場合、壺2 b類が最も近いと考えられることから、壺2 b類→壺2 a類→壺1類との変遷過程を設定することも可能であろう。甕は邑楽郡板倉町板倉出土品⁽⁸⁾や熊谷市池上遺跡出土の4類に類縁関係が求められよう⁽⁹⁾。しかし、分析するに足る良好な資料が本遺跡のみであり、また野沢式自体の型式的理解が不十分な状況と言える現段階においては、具体的な祖型の検討は控え、ここでは可能性の提示としてのみ述べるに止

註3 工業善通 「北関東地方1」『弥生式土器集成 本編2』1968

柿沼恵介 「荒口前原 遺跡」『群馬県史 資料編2 原始古代2』1986

註4 平野進一 「群馬県荒砥前原遺跡-赤城山南麓における弥生時代中期から後期にかけての住居跡とその遺物について」『信濃』第22巻第4号 1976
「荒砥前原遺跡 赤石城址」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985

註5 「西太田遺跡」伊勢崎市教育委員会 1982

註6 「西迎遺跡」群馬県勢多郡粕川村教育委員会 1990

註7 前掲註4文献。
平野進一 「竜見町式土器の分析について」『第7回三県シンポジウム資料 東日本における中期後半の弥生土器』1986

註8 外山和夫・津金沢吉茂 「群馬県地域における弥生時代資料の集成1」群馬県立博物館 1978

註9 「池守・池上」埼玉県教育委員会 1984

どめたい。

なお、これに続く後期の土器としては、関東北西部の周縁地域に分布する赤井戸式ないし吉ヶ谷式を上げることができよう。いずれも縄文のみを文様とする地域色の強い土器群である。赤井戸式は分布地域がこれと重なることから最も関連性を考え易いが、現在後期後半～古墳時代初頭に位置付けられると理解されており、本土器群との間にはなお形式的空隙が存在する。ただし、これを祖型と認定した場合には赤井戸式土器の形成過程や吉ヶ谷式との関連などについて、従来の解釈を大幅に修正する必要が生じよう。これについての詳細な検討は別稿を予定しているので、ここでは見通しを述べるに止めておく。

註10 小島純一 「赤井戸式土器について」『人間・遺跡・遺物－わが考古学論集－』 1983

以上のように、本遺跡出土弥生式土器は縄文施文の系譜を保持続けた土器群として考えられ、その位置付けは中期後半段階におくことが出来る。更にその前後期の形式的連続性を明確にすることが出来れば、群馬県東部の赤城山南麓地域においてひとつの土器系譜、すなわちある限定された伝統を守り続けた集団が中期から後期終末まで細々と継続して存在したと推定することも可能であろう。このことは、すなわち従来無人に近い過疎地帯と考えられていた本地域の弥生社会解明にあたって大きな波紋を投げかけることになるだろう。

荒砥北三木堂遺跡出土の土師器と須恵器の編年

— 農耕集落分析の基礎的作業 —

坂口 一

1 はじめに

荒砥北三木堂遺跡では、農耕社会が成立する弥生時代以降の集落として、弥生時代中期から平安時代にわたる78軒の竪穴住居が検出されている。このうち、弥生時代の住居は中期後半に属す5軒のみで、その後に継続性はみられない。

一方、古墳時代における集落の消長をみると、5世紀初頭で出現した竪穴住居がその後半で最も増加し、6世紀前半で消滅する。すなわち、この遺跡で検出した竪穴住居の大半が5世紀代に営まれている。さらに、5世紀代と認定できる55軒の住居のうち、約35%にあたる20軒の住居に初期須恵器・古式須恵器が伴出し、この時期における須恵器の出土頻度は県下でも突出した高さを示している。

したがって、ここでは農耕集落の変遷過程を探る基礎的な作業として、その後に継続性のみられない弥生時代中期を除いた、古墳時代以降における竪穴住居の土師器と須恵器の編年を試み、集落と古式須恵器に関するいくつかの問題点について検討してみたい。

2 土器の分類

土器の分類に際しては、竪穴住居に伴出する一括遺物とみなすことのできる土器群を扱い、これらの組合せ及び形態の変化を比較検討することによって分類した。しかし、この遺跡の竪穴住居には坏と甕以外の器種の出土頻度が低いため、分類の基準には主として坏と甕を用いた。また、その形態は坏が平底から丸底への変化と、須恵器の坏蓋を模倣した坏の口縁部が外反する変化を、甕は短胴から長胴への変化をそれぞれ前提とした。

I期(6区1号住居)

埴、高坏、甕を主体とする器種の構成を示す。埴は大形と小形の2種類がある。また、頸部中位に段差をもち、体部中位に焼成前の穿孔を施す須恵器甕を模倣した甕も存在する。高坏は下位の段差から外彎気味の口縁部に至り、内外面に篋研磨を施す。甕は胴部中位に最大径をもつ短胴を呈す。

須恵器の共伴はないが、須恵器を模倣した甕の存在から明らかに須恵器出現以降の所産で、その後に盛行する坏類は伴出していない。

II期(1区11号住居・2区43号住居)

坏、高坏、埴、甕を主体とする器種の構成を示す。坏は底部が平底のもの、小さな平底から彎曲する体部を経て、短く外傾する口縁部に至るものの2種類に分けられる。高坏は坏部下位に明瞭な稜線がなく、坏部内面を除いて篋研磨が省略される。

甕は胴部が大きく彎曲する短胴を呈す。

伴出する須恵器の坏と高坏は、陶邑古窯址群における田辺昭三氏による編年⁽¹⁾（以下同様）のTK-216型式に比定することができる。

註1 田辺昭三 「須恵器大成」
1981

I期の竪穴住居に伴出土器が少ないために、各器種の形態の変化を明確に把握することはできないが、小形の埴が少ない一方で坏類を伴うことと、高坏の篋研磨が省略化の傾向にあることから、I期よりやや後出的な様相を看取することができる。

III期（1区3号住居・1区10号住居・2区22号住居・2区30号住居・2区42号住居）

坏、埴、甕を主体とする器種の構成を示す。坏は①体部が彎曲するもの、②彎曲した体部から短く外傾する口縁部に至るもの、③体部と口縁部を画す弱い稜線から、内彎気味の短い口縁部に至るもの、④体部と口縁部を画す明瞭な稜線から、外反する高い口縁部に至るものの4種類に分けられる。坏類の大半は①と②で占められ、これらの底部の大勢は丸底を呈するが、①と②の一部には小さな平底をもつものも存在する。また、③と④は須恵器の坏蓋を模倣した、いわゆる模倣坏の初源期のもと考え⁽²⁾ている。甕はやや長胴化の傾向を認めることができ、甕は大形と小形の2種類に分けられる。

註2 須恵器の坏蓋を模倣した
いわゆる模倣坏については、他
の須恵器模倣品を含めて別稿を
準備している。

須恵器は坏、蓋、臑が伴出し、形式的にはTK-216型式～TK-23型式の幅をもつが、TK-208型式のものが主流を占める。

II期に比較して坏類の出土頻度が高いことと、その底部の大勢が丸底化していること及び、甕がやや長胴化することが後出的な要素であり、伴出する須恵器もII期に比較して新しい型式に位置付けられる。

IV期（1区8号住居・1区12号住居・2区8号住居・2区12号住居）

坏、埴、甕を主体とする器種の構成を示す。坏は①体部が彎曲するもの、②彎曲気味の体部から短く外傾する口縁部に至るもの、③体部と口縁部を画す稜線から直立気味の口縁部に至るものの3種類に分けられる。これらの底部はほぼ完全に丸底化し、③の出土頻度はIII期と同様に低い。甕は長胴化が一層進んだ砲弾形を呈し、口縁部の屈曲が強い。伴出する須恵器坏はTK-47型式に比定することができる。

坏類の体部が総じて浅くなり、底部がほぼ丸底化を完成させることと、甕の長胴化がさらに進むことがIII期と比較して後出的な要素で、伴出する須恵器もIII期より新しい型式に比定される。

V期（2区32号住居）

坏、甕、甗が伴出する。坏は体部が彎曲するものと、体部と口縁部を画す稜線からやや外反する口径の大きなものの2種類に分けられる。甕は中位に最大径をもつ長胴を呈し、口縁部の屈曲がやや弱い。

須恵器坏蓋を比較的忠実に模倣したいわゆる模倣坏が坏類の大勢を占めることに、IV期より後出的な様相を認めることができる。

VI期（2区7号住居）

浅い体部から体部と口縁部を画す稜線を経て、外反する口縁部に至るものと、口縁部が内傾する2種類の坏が存在する。須恵器坏は大きな口径を呈するが、短い受部と

稜線のない口唇部の特徴から、TK-10型式に比定するのが妥当と考えられる。

須恵器坏蓋を模倣した坏が小形化して口縁部が外反することに、V期より後出的な様相を認めることができる。

VII期（4区1号住居）

坏は体部と口縁部を画す弱い稜線を経て外反するものと、彎曲する体部から僅かに内傾する口縁部に至るものの2種類が存在する。甕は膨らみのない胴部から、彎曲気味に外反する口縁部に至る。須恵器坏蓋は外稜のないものと、浅い天井部で短い返りをもつものの2種類がある。この他に高盤も伴出し、これらはTK-48型式に比定することができる。

VIII期（2区29号住居）

彎曲する体部の坏と、平底気味で浅い体部の坏が伴出する。

IX期（3区5号住居・5区2号住居）

平底気味で体部の浅い坏、上位に最大径をもつ胴部から、中位で屈曲して外反する口縁部に至る甕が伴出する。須恵器坏は上げ底気味の底部から外反する深い体部に至り、底部は回転糸切り無調整である。

3 土器の実年代比定

2章で分類した土器群を筆者がかつて提示した編年に同定することで、分類した各時期の年代的な位置付けを試みたい。なお、この時期における土師器の実年代を証明する資料は乏しいが、土師器と須恵器が初期須恵器の段階から平行関係にあるという前提で、須恵器の実年代を土師器に援用する。また、須恵器出現期の実年代については白石太一郎氏の説に依拠して、4世紀末葉～5世紀初頭⁽³⁾⁽⁴⁾としたい。

I期は埴、高坏、甕を主体とする構成で、篋研磨を丁寧に施した高坏及び短胴の甕⁽⁵⁾の特徴から、筆者による古墳時代中期の土器の編年のI段階（以下同様）に比定することができ、この段階はTK-73型式に平行する時期を想定している。一方、荒砥北三木堂遺跡のこの時期に須恵器の伴出例はないが、後出するII期にTK-216型式に比定できる須恵器が伴出していることから、この時期はTK-73型式に平行する段階と考えられ、須恵器を模倣した甕の存在は既に須恵器が出現していることを示している。したがって、I期は5世紀第1四半期に位置付けられる。

II期は底部が平底か或いは小さな底部の坏、篋研磨が省略化の傾向にある高坏と、短胴の甕の特徴がII段階に近似した様相を示している。伴出する須恵器もTK-216型式で、II段階で想定している須恵器型式と一致している。したがって、II期は5世紀第2四半期に位置付けられる。

III期は大勢が丸底化した坏と、僅かに含まれる須恵器坏蓋を模倣した坏及び、やや長胴化した甕の特徴がIII段階の様相に近似しており、TK-208型式を主体とする須恵器の伴出例にも矛盾がない。したがって、III期は5世紀第3四半期に位置付けられる。

IV期は体部が彎曲する坏と口縁部が短く外傾する坏が定型化することと、長胴化して砲弾形を呈する甕の特徴から、IV段階に比定することができる。伴出する須恵器は

註3 白石太一郎 「近畿における古墳の年代」『考古学ジャーナル』No164 1979

註4 白石太一郎 「年代決定論」『日本考古学』1 1985

註5 坂口 一 「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」『研究紀要』4 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987

	土 師 器				須 意 器
I 期	 (6-1住-2)	 (6-1住-3)	 (6-1住-6)	 (6-1住-3)	 (6-1住-9)
II 期	 (2-43住-3)	 (1-11住-2)	 (2-43住-19)	 (2-43住-12)	 (2-43住-38)
III 期	 (1-3住-1)	 (1-3住-11)	 (2-30住-22)	 (2-22住-28)	 (2-42住-22)
IV 期	 (2-12住-3)	 (2-12住-2)	 (1-8住-2)	 (2-12住-10)	 (1-12住-30)
V 期	 (2-32住-10)	 (2-32住-4)	 (2-32住-5)	 (2-32住-22)	 (2-32住-25)
VI 期	 (2-7住-1)	 (2-7住-2)	 (2-7住-3)	 (2-7住-9)	 (2-7住-7)
VII 期	 (4-1住-10)	 (4-1住-18)	 (4-1住-5)	 (4-1住-9)	 (4-1住-11)
VIII 期	 (2-29住-3)	 (2-29住-6)	 (2-29住-5)	 (2-29住-1)	 (5-2住-16)
IX 期	 (3-5住-1)	 (3-5住-2)	 (3-5住-10)	 (3-5住-4)	 (5-2住-14)

第292图 虎砦北山大寺遺跡出土土器編年图

TK-47型式に比定することができ、IV段階で共伴する須恵器型式と一致している。したがって、IV期は5世紀第4四半期に位置付けられる。

V期は口径が大きくなってやや外反する坏と、長胴化して口縁部の屈曲が弱くなった甕の特徴が、筆者による古墳時代後期の土器の編年のIII段階⁽⁶⁾（以下同様）に近似している。荒砥北三木堂遺跡のこの時期に須恵器の伴出例はないが、先行するIV期にTK-23型式～TK-47型式が伴い、後出するVI期にTK-10型式が伴うとすれば、理論的にこの時期にはMT-15型式が伴う筈である。さらに、模倣坏の口径が大きくなる現象が、MT-15型式における須恵器蓋坏の大形化に連動した結果に起因することも、MT-15型式との平行性を暗示している。したがって、V期は6世紀第1四半期に位置付けられる。

VI期は浅い体部から外反する口縁部に至る坏の特徴がIV段階に比定され、伴出する須恵器もTK-10型式で、IV段階の須恵器型式と符合している。したがって、VI期は6世紀第2四半期に位置付けられる。

VII期は先行するVI期との間に時間的な断絶が認められるが、やや内傾する口縁部をもつ坏と、膨らみのない長胴の甕の特徴がX段階に比定され、伴出する須恵器もTK-48型式で、X段階の須恵器型式と矛盾がない。したがって、VII期は7世紀第4四半期に位置付けられる。

VIII期も先行するVII期との間に時間的な断絶が認められるが、坏の特徴が筆者らが提示した奈良・平安時代の土器の編年のV段階～VI段階⁽⁷⁾（以下同様）に近似し、IX期は坏、甕、須恵器坏の様相がVII段階～VIII段階に近似している。したがって、VIII期は8世紀後半に、IX期は9世紀前半にそれぞれ位置付けられる（第13表参照）。

註6 坂口 一 「古墳時代後期の土器の編年」『群馬文化』第208号 群馬県地域文化研究協議会 1987

註7 坂口 一・三浦京子 「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究』第24号 群馬県史編さん委員会 1987

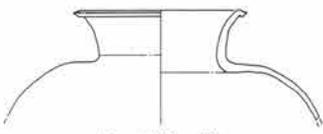
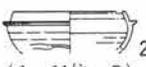
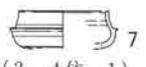
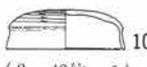
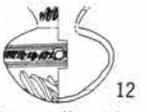
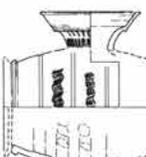
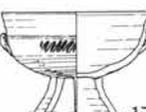
第13表

北三木堂遺跡	坂口編年	須恵器型式	実年代
I 期	古墳時代中期 I 段階	TK-73	5 世紀第 1 四半期
II 期	〃 II 段階	TK-216	5 世紀第 2 四半期
III 期	〃 III 段階	TK-208～TK-23	5 世紀第 3 四半期
IV 期	〃 IV 段階	TK-23～TK-47	5 世紀第 4 四半期
V 期	古墳時代後期 III 段階	MT-15	6 世紀第 1 四半期
VI 期	〃 IV 段階	TK-10	6 世紀第 2 四半期
VII 期	〃 X 段階	TK-48	7 世紀第 4 四半期
VIII 期	奈良・平安時代 V～VI 段階	—	8 世紀後半
IX 期	〃 VII～VIII 段階	—	9 世紀前半

4 荒砥北三木堂遺跡の古式須恵器について

この遺跡では20個体以上にも及ぶ古式須恵器が出土し、その一部には初期須恵器と認定できるものも存在する。これらの多くは竪穴住居に伴い、伴出する土師器と共に主として編年的な研究に良好な資料を提供している。したがって、ここでは古式須恵

IV 成果と問題点

TK 73 型式	 <p>(2-52住-16) 1</p>
TK 216 型式	 <p>(1-11住-7) 2</p>  <p>(2-22住-58) 3</p>  <p>(2-30住-6) 4</p>  <p>(2-43住-1) 5</p>  <p>(2-46住-6) 6</p>
TK 208 型式	 <p>(2-4住-1) 7</p>  <p>(2-30住-3) 9</p>  <p>(2-40住-6) 8</p>  <p>(2-42住-1) 10</p>  <p>(1-10住-12) 11</p>  <p>(2-5住-1) 12</p>  <p>(2-30住-49) 13</p>  <p>(2-30住-1) 14</p>
TK 23 型式	 <p>(2-30住-2) 15</p>  <p>(2-28住-1) 16</p>  <p>(2-12住-19) 17</p>
TK 47 型式	 <p>(1-8住-1) 18</p>
TK 10 型式	 <p>(2-7住-7) 19</p>

第293図 荒砥北三木堂遺跡出土須恵器編年図

器と土師器の編年を通して、関連する若干の検討を試みたい。

(1) 須恵器と土師器の平行性

この遺跡で検出した須恵器を、陶邑田辺編年に同定したものが第293図である。このうち、1・14・17はいずれも複数の住居に伴出した破片が接合し、住居に共伴する一括遺物とは認め難い出土状況を示している。特に1の甕は6軒の住居に破片が分散し、これらの住居は5世紀第2四半期から6世紀第1四半期までの年代幅をもつ。したがって、これらの須恵器は伴出する土師器との同時性に疑問があり、編年上の資料としては除外せざるを得ない。

一方、3・4・6は概ねTK-216型式に比定できるが、この遺跡ではⅢ期のTK-208型式～TK-23型式に平行する段階の住居に伴出している。したがって、これらはⅡ期がTK-216型式に、Ⅲ期がTK-208型式～TK-23型式にそれぞれ平行するという、須恵器と土師器の模式的な平行関係とは一致していないことになる。

これに対して、Ⅱ期の住居に伴出する2・5、Ⅲ期の住居に伴出する7～13・15・16、Ⅳ期の住居に伴出する18は、それぞれ伴出する土師器と共に連続した型式をたどることができ、両者の前後関係に大きな矛盾をきたすような伴出状況は認められない。

したがって、この遺跡では初期須恵器の一部に平行性上の齟齬がみられるものの、大勢としてはその平行関係に矛盾するところがないといえることができる。また、平行関係に齟齬をきたす初期須恵器についても、その時間幅は須恵器型式における1型式の範疇に収まる。これは、後出する型式に必ず先行形態のものが残存する土師器の型式変化と共通し、必ずしも須恵器のみに特有な現象ではない。つまり、こうした残存形態をもって須恵器の伝世を認めるのは早計に過ぎよう。

(2) 古式須恵器の性格

この遺跡では、5世紀代と認定できる55軒の竪穴住居のうち、約35%にあたる20軒の住居から古式須恵器が出土している。これらの器種は坏、蓋、高坏、甕、樽形甕、甕、器台に及び、胎土分析の結果は、大半のものに関東地方で生産された可能性を指摘している。⁽⁸⁾

さて、5世紀代において須恵器が出土する頻度を他の集落遺跡と比較すると、例えば柳久保遺跡群⁽⁹⁾（前橋市）及び、萱野遺跡⁽¹⁰⁾（前橋市）の5世紀前半を主体とする集落では、両遺跡合わせて62軒の竪穴住居が検出されているが、須恵器は全く伴出していない。また、尾島工業団地遺跡⁽¹¹⁾（新田郡尾島町）では、5世紀代に属す115軒の竪穴住居のうち6軒に須恵器が伴い、その頻度は約5%にすぎない。さらに、三ツ寺Ⅰ遺跡居館の北側に展開する三ツ寺Ⅱ・Ⅲ遺跡⁽¹²⁾（群馬郡群馬町）では、5世紀終末を主体とする62軒のうち須恵器を伴出する住居は13軒で、時期が下るにも拘らずその頻度は約20%である。こうしてみると、荒砥北三木堂遺跡の須恵器出土頻度である35%という数値は、県下におけるこの時期の集落遺跡としては突出しており、5世紀代を主体とする集落の状況と併せて、この遺跡の特異性を示すものであるといえよう。

一方、この遺跡の南西約500mには、今井神社古墳が立地している。今井神社古墳は全長71mの規模をもつこの周辺地域で初出の前方後円墳で、組合せ式の石棺を有し、周

註8 280頁の井上 巖氏の胎土分析を参照。

註9 『柳久保遺跡群』Ⅰ～Ⅶ 前橋市埋蔵文化財発掘調査団・前橋市教育委員会 1985～1988

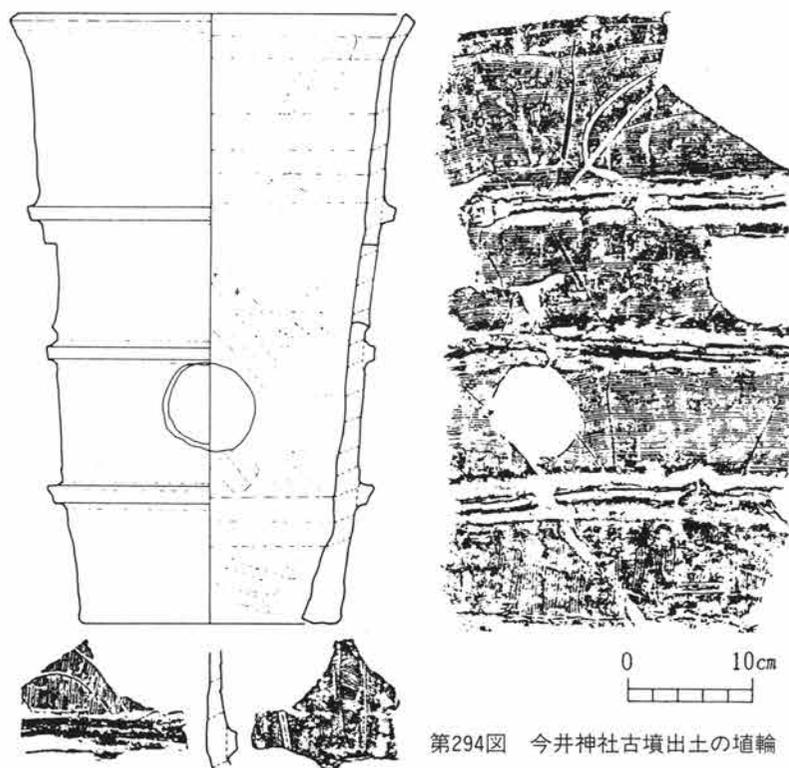
註10 この遺跡は、現在群馬県企業局で整理作業が進められ、整理を担当されている佐藤明人氏に御教示を頂いた。

註11 この遺跡は、現在尾島町教育委員会で整理作業が進められ、整理を担当されている須永光一氏に御教示を頂いた。

註12 この遺跡は、現在群馬県埋蔵文化財調査事業団で整理作業が進められ、整理を担当されている関 晴彦氏に御教示を頂いた。

註13 井川達雄 『三ツ寺Ⅲ遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985

註14 『西大室遺跡群』前橋市教育委員会 1980



第294図 今井神社古墳出土の埴輪

註15 川西宏幸 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会 1987

註16 坂口 一 「群馬県における須恵器出現期の様相」『考古学ジャーナル』No.316 1990

註17 能登 健 「三ツ寺Ⅰ遺跡の成立とその背景」『古代文化』第42巻第2号 古代学協会 1990

註18 坂口 一 「5世紀代における集落の拡大現象」『古代文化』第42巻第2号 古代学協会 1990

堀の発掘調査によって円筒埴輪が検出されている⁽¹⁴⁾ (第294図)。この円筒埴輪は二次調整のB種ヨコハケを施すものと、二次調整を省略するものの2種類があり、川西宏幸氏はこれらを氏による円筒埴輪の編年のIV期に位置付け、5世紀中葉の年代を与えている⁽¹⁵⁾。したがって、今井神社古墳は荒砥北三木堂遺跡のほぼⅡ～Ⅲ期に出現する、この周辺地域で最も古い段階の前方後円墳で、他の小古墳とは隔絶した首長墓と呼ぶにふさわしい条件を備えている。

ところで、筆者はかつて古式須恵器の性格に関して「古墳との相関関係が認められる、日常用器というより5世紀代に古墳の被葬者によって導入された祭器的な色彩が濃いもの」とした⁽¹⁶⁾

が、この遺跡にも同様な傾向を看取することができ、遺跡の特徴もこの考え方によって理解することができよう。すなわち、この遺跡における古式須恵器の出土頻度と5世紀代の集落立地の特異性は、生産の基盤である沖積地を挟んで至近距離に位置し、近似した時期に出現する今井神社古墳の存在と決して無縁のものとは考え難く、ここには両者の強い相関関係を認めることができるのである。

5 おわりに

以上、古代農耕集落の変遷過程を分析する基礎的な作業として、荒砥北三木堂遺跡の土器を編年し、古式須恵器についての検討を試みた。結果として、この遺跡の特異性である高い古式須恵器の出土頻度と、5世紀代を主体とする集落立地のあり方が、今井神社古墳の存在と深く係わることを指摘した。

しかし、当然のことながらこの遺跡の調査区域は、遺跡の全面には及んでおらず、周辺に分布する遺跡の詳細も不明である。また、県下における5世紀代の遺跡群研究に三ツ寺Ⅰ遺跡周辺を扱ったものがあるが、集落の動向が異なることから、また様相の異なる地域性での分析が可能である。⁽¹⁷⁾

したがって、周辺地域における遺跡群の詳細な分析が今後の課題であり、こうした作業の蓄積が農耕集落の変遷過程を探る糸口になるものと確信している。

小稿を草するについて、当事業団の能登 健・石坂 茂・関 晴彦・飯塚 誠氏、群馬県企業局の佐藤明人氏、前橋市教育委員会の前原 豊氏、尾島町教育委員会の須永光一氏には有益な御指導と助言を賜った。文末ながら記して深甚なる感謝の意を表す次第である。

北三木堂遺跡中世墓の性格

唐澤至朗

1 葬法及び墓の形態からみた本遺跡の位置

死は生命活動の終焉に訪れる不可避の現象である。人はこの厳粛な現象に、一定の社会規範を以て対峙してきた。この行為を葬法という。

葬法には大別して、風葬・火葬・水葬・土葬・鳥葬が知られ、我が国では土葬・火葬が一般的であることは周知のことである。今日、土葬は法規制の中で特殊な場合を除いてしか用いられなくなり、火葬が自ずと葬法の中心的位置を占めるようになってきている。しかし、火葬の起源や伝来の経緯についてはここでは触れないが、葬法の歴史の中では逆に火葬が特異な位置を占めるもので、むしろ厚葬としてとりおこなわれてきたものである。本遺跡の葬法も一般論として、同様の位置付けをなしてよいであろう。

また、いわば物理的な見地からのこうした分類とは別に、埋葬の場所・時間差・遺体の変容に伴う中間措置を含む多元的な葬法の分類があり、洗骨・分骨等による再葬・分葬があったこともまた、よく知られていよう。

本遺跡の墓群は1号・2号・8号・10号の4基を除いて、それぞれに納められた火葬骨がかなり限定された法量であり、分骨による分葬の一形態とみてよいであろう。ただし、五輪塔等の墓碑を伴わず、一部に板碑のみを添えることから、並列的視点での複数墓の一方とみるよりは、これと異なる性格をもつものであろうことを想起させる。

2 村落域内における本遺跡の立地

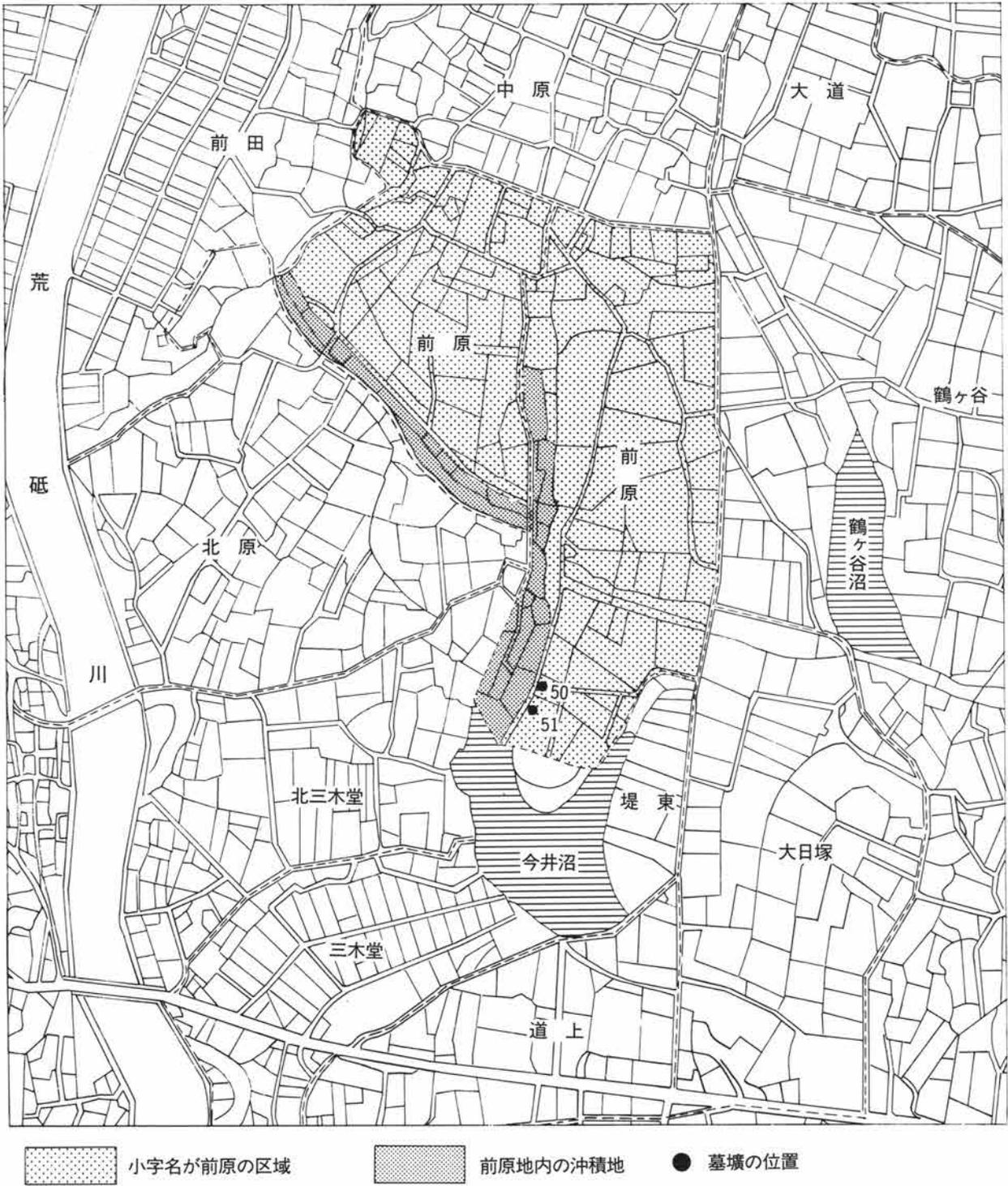
本遺跡の範囲は、今井沼に突出した舌状の狭小な緩斜面の南西面に限定されている。第295図に示したものは、昭和35年10月調整の「群馬県勢多郡城南村荒砥地区全図」の一部である。これによると、遺跡範囲は前原分50・51の二筆に限られており、当該範囲の地割りがかなりさかのぼるものであることを推定させる。また、この地が北三木堂分ではなく、丘陵上では前原分の南西端を占めていることが観察でき、ひいては墓域としてのこの地が前原に帰属していたことを窺わせる。

中世の村落は近世初頭に解体・再編制されたところもあり、本地がそのまま中世の前原に帰属していたか否か、なお検証を要するところであるが、これを証する直接的な資料がみあたらない今日、あえて、現在まで連続するものとして可能性を提示しておきたい。

3 勢多郡における中世および近世寺院の動向

第14表は群馬県内の宗教法人のうち、⁽¹⁾ 仏教系法人の宗派統計である。また、第15表

註1 「群馬県宗教法人名簿」
群馬県総務部学事文書課編
1986



第295図 墓墳と周辺の小字名

は前橋市および勢多郡内の多数派である天台宗・真言宗上位7派・曹洞宗寺院を寺伝および本尊・脇本尊をもとに分類したものである。寺伝不祥のものは除外してある。次いで、第16表は宗派をこえて中世以前に創立が遡りうる寺院の本尊を統計化したものである。ただし本尊がいつの時点で定まったかは、検証できていない。

各表を一瞥すると、阿弥陀如来を本尊とする寺院が多いことがうなずけよう。また、浄土宗・浄土真宗寺院はいうまでもない。

阿弥陀如来への帰信を本旨とする宗派は、浄土宗・浄土真宗・時宗などであるが、ここでみたように天台宗のなかでもほとんどの寺院がそれを掲げており、これは天台宗の宗旨とは矛盾しない⁽²⁾。また、前橋市上泉町の曹洞宗寺院のように、発願者の信仰のゆえに阿弥陀如来を本尊としているかのごとき例もみられ、同様の観音菩薩を本尊とする寺院もあわせれば、実に過半数が厭離穢土・欣求浄土を旨とするものとなっている。これは寺院の宗旨以前の地域の時代的要求・実態を反映したものともみることができよう。

以上の動向は現代資料をもとに検討したものであり、寺伝の信憑性にも問題があるであろうから、ただちに採用しがたいことは自明である。しかし、おおまかな宗派の動向やこの地域の民衆の弥陀信仰への欲求のそれを、暗示するものとはいえないか。

註2 泉 浩洋「密教における弥陀思想」『阿弥陀信仰』雄山閣 1984

4 彼我観と日想観の達成

かつて水野正好氏は、浄土三部経の一つ『感無量寿経』の経意を索き、日想観について論じられたことがある⁽³⁾。氏によれば、「西方の極楽を求め、浄土をのぞむ人々の行動の一つ」として、日想観すなわち落日を通じて浄土の存在と自身の浄土転生を確認する行為がなされたと、三つの類型を掲げてそれを証している。異論の余地はないものとおもわれる。

註3 水野正好「日想観」『考古学論考（小林行雄博士古希記念）』平凡社 1982

しかし、これらは現に生ある者自身の浄土転生を観ずるもので、墳墓の造営とは直接はつながらない。したがってこうした生者の彼我観を検する一方で、死者に対する生者の配慮も同一の視点でなされたか否かについても検討を加える必要があろう。生者と死者との思想上の連続性は、死者に対する行為が生者によってなされる以上、同一のものとなるであろうし、そうした遺跡はいわば日想観の達成を具体的に示したものであることを意味するものとなるであろう。

5 本遺跡中世墓の性格と今後の課題

先に、本遺跡の墓群の構造および内容が分葬形態をとるのものであること、さらに限定された占地と位置から、西に偏じた落日遠望に適した地勢であることを示した。次に、この地域が弥陀信仰の支配する宗界であったろうことを推定した。このことは本遺跡の性格が、死者を阿弥陀如来に託した生き残った者の宗教観を具体的に示したものであると言いうるであろう。こうした例の報告はまれであるが、新潟県尾野内遺跡⁽⁴⁾の場合は観音菩薩に付託した同様のものと考えられよう。

註4 波田野至朗・田海義正「尾野内遺跡」新潟県教育委員会 1982

また、日想観に連続する彼岸の行為の一つとして、適地を選じた分葬の存在した可

能性を指摘したが、その検証の候補として本遺跡の例を報じておきたい。

ただ、このたびは十分な検討をなしえず、課題とせざるをえない問題も多い。その一つは、中世集落の領域の確定である。考古・文献・地理上の資料による複合的検証が必要であろう。次に、分葬地に対する主たる葬地の同一村落域内での確認であろう。近接する前橋市富田町の中世墓群⁽⁵⁾のように、小規模な主体部をもち火葬骨を納め、五輪塔・板碑をともなう形態をとるものがそれに該当するものかもしれない。また、分骨供養の形態は本遺跡の場合よりは、高野納骨や奈良元興寺極楽坊納骨などの霊場納骨が中世納骨の好例としてよく知られているが、納骨供養の系譜上は同一のものなのか、変化または先行する形態を示すものなのか、これについても今後の課題としておきたい。

註5 木部日出雄・井野誠一・飯塚 誠「富田遺跡群」前橋市教育委員会 1980

参 考 文 献

- 奈良康明・西村恵信編 『日本仏教基礎講座（禅宗）』雄山閣 1979
 山本世紀 「中世における曹洞宗の地方発展」『日本宗教史論集（笠原一男博士還暦記念）』吉川弘文館 1976
 橋川 正 「平安時代における法華信仰と弥陀信仰」『阿弥陀信仰』雄山閣 1984伊藤唯真 「浄土信仰と聖の活動」『阿弥陀信仰』雄山閣 1984
 上別府 茂 「わが国の骨掛葬法について」『岡山民俗』104号 1973

IV 成果と問題点

第15表 前橋市・勢多郡内仏教系宗教法人多数派本尊別創建年代分類表

宗 派	本 尊	～1226	1227～1614	1615～1868	計
天台宗	阿弥陀如来	17	10	7	34
	薬師如来	0	2	2	4
	釈迦如来	2	2	1	5
	観音菩薩	1	0	2	3
	虚空蔵菩薩	1	0	0	1
	地藏菩薩	1	0	1	2
	不動明王	0	1	0	1
真言宗	阿弥陀如来	0	6	0	6
	薬師如来	1	1	1	3
	釈迦如来	0	0	1	1
	大日如来	0	1	2	3
	観音菩薩	1	4	1	6
	不動明王	1	1	1	3
曹洞宗	阿弥陀如来	0	1	1	2
	薬師如来	0	2	1	3
	釈迦如来	0	18	11	29
	釈迦如来+薬師如来	0	0	4	4
	釈迦如来+観音菩薩	0	1	1	2
	釈迦如来+地藏菩薩	0	0	1	1
	釈迦如来+不動明王	0	0	1	1
	観音菩薩	0	6	8	14
	地藏菩薩	0	1	0	1
		25	57	47	129

※ 1227年、曹洞宗創宗。 1615年、江戸幕府宗門統制開始。

第16表 前橋市・勢多郡内仏教系宗教法人多数派のうち中世創建推定寺院本尊別分類表

本 尊	件 数	比 率
阿 弥 陀 如 来	34	41.5%
薬 師 如 来	6	7.3%
釈 迦 如 来	22	26.8%
大 日 如 来	1	1.2%
観 音 菩 薩	13	15.9%
虚 空 蔵 菩 薩	1	1.2%
地 蔵 菩 薩	2	2.4%
不 動 明 王	3	3.7%
計	82	100.0%

写 真 图 版



1. 第3調査区の遠景
(手前今井沼、後方赤城山)



2. 第3調査区の遠景
(西方から)



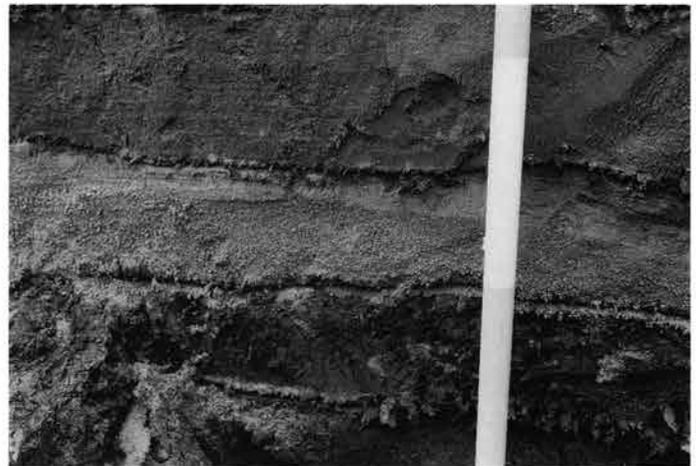
3. 第1調査区の全景
(西方から)



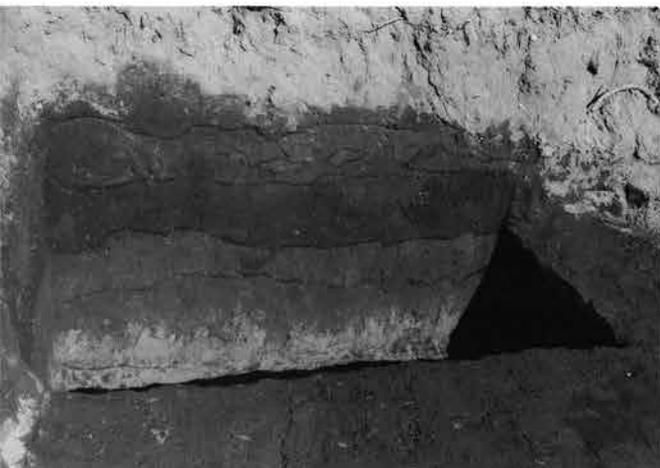
1. 第2調査区の全景（北方から）



2. 沖積地の堆積土層



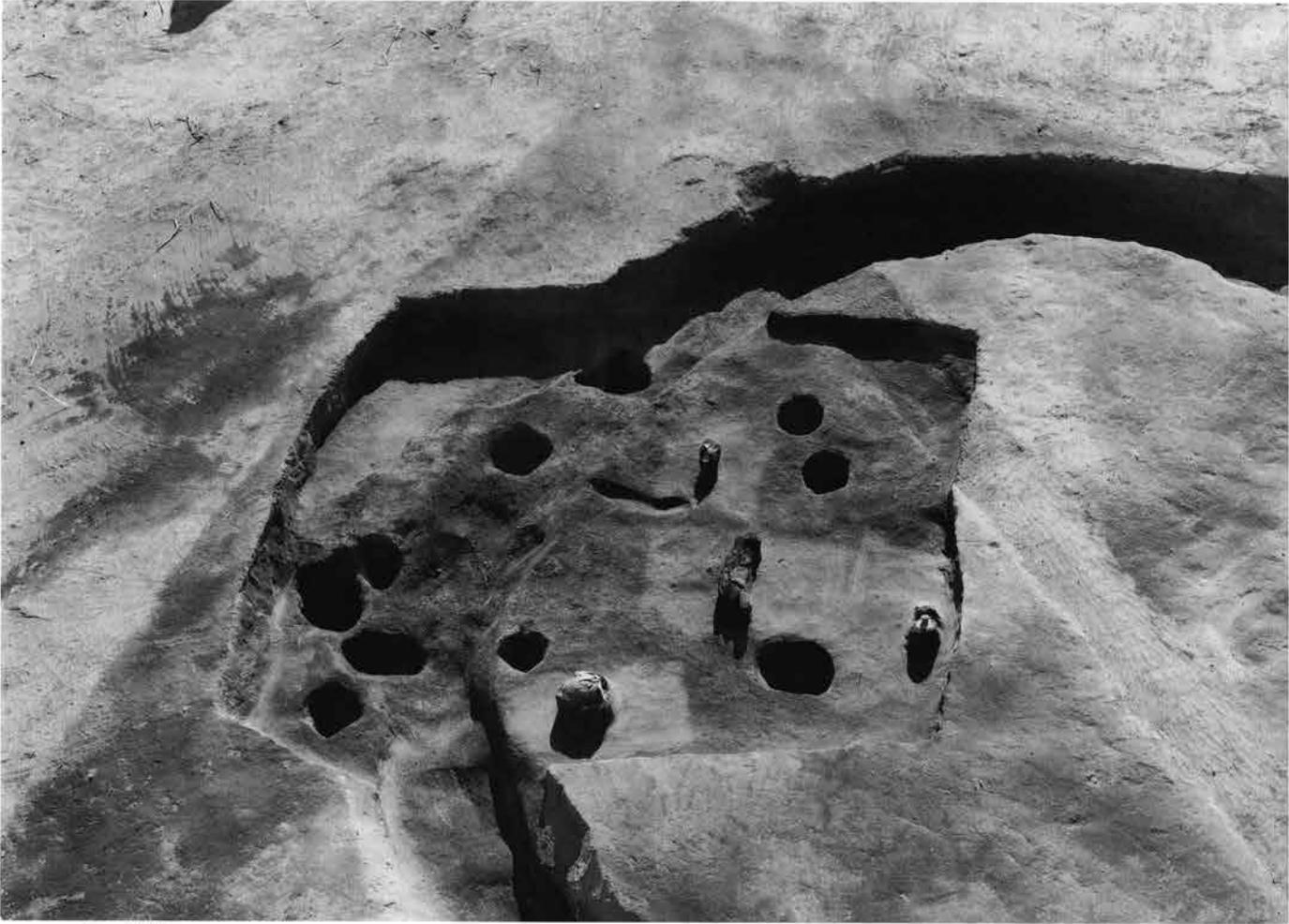
3. 同左（部分拡大）



4. 第1調査区の堆積土層



5. 第5調査区の堆積土層



1. 2区26号住居



26住-2



26住-1



17住-7 B



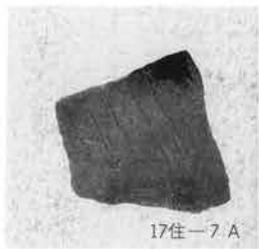
17住-3



17住-1



17住-2



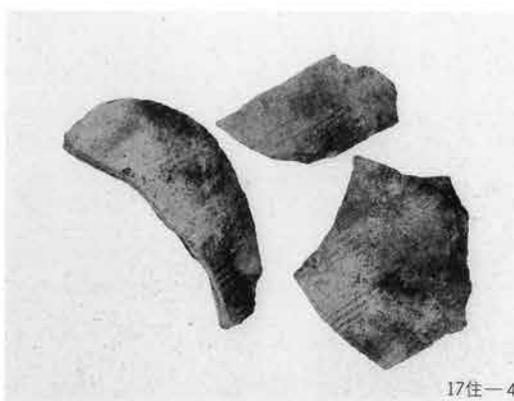
17住-7 A



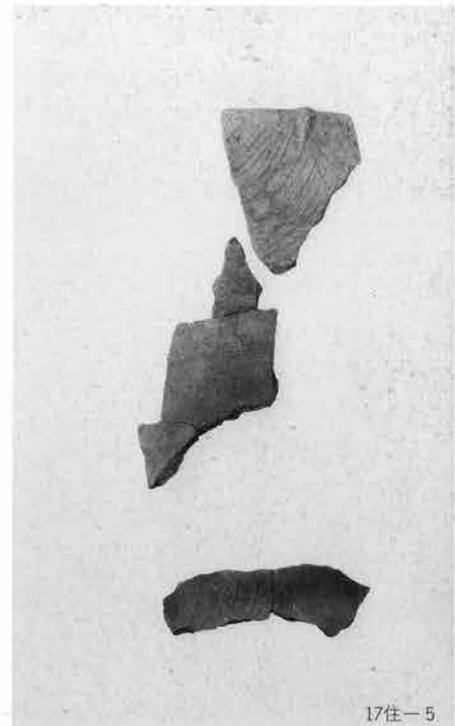
17住-6 B



17住-6 A

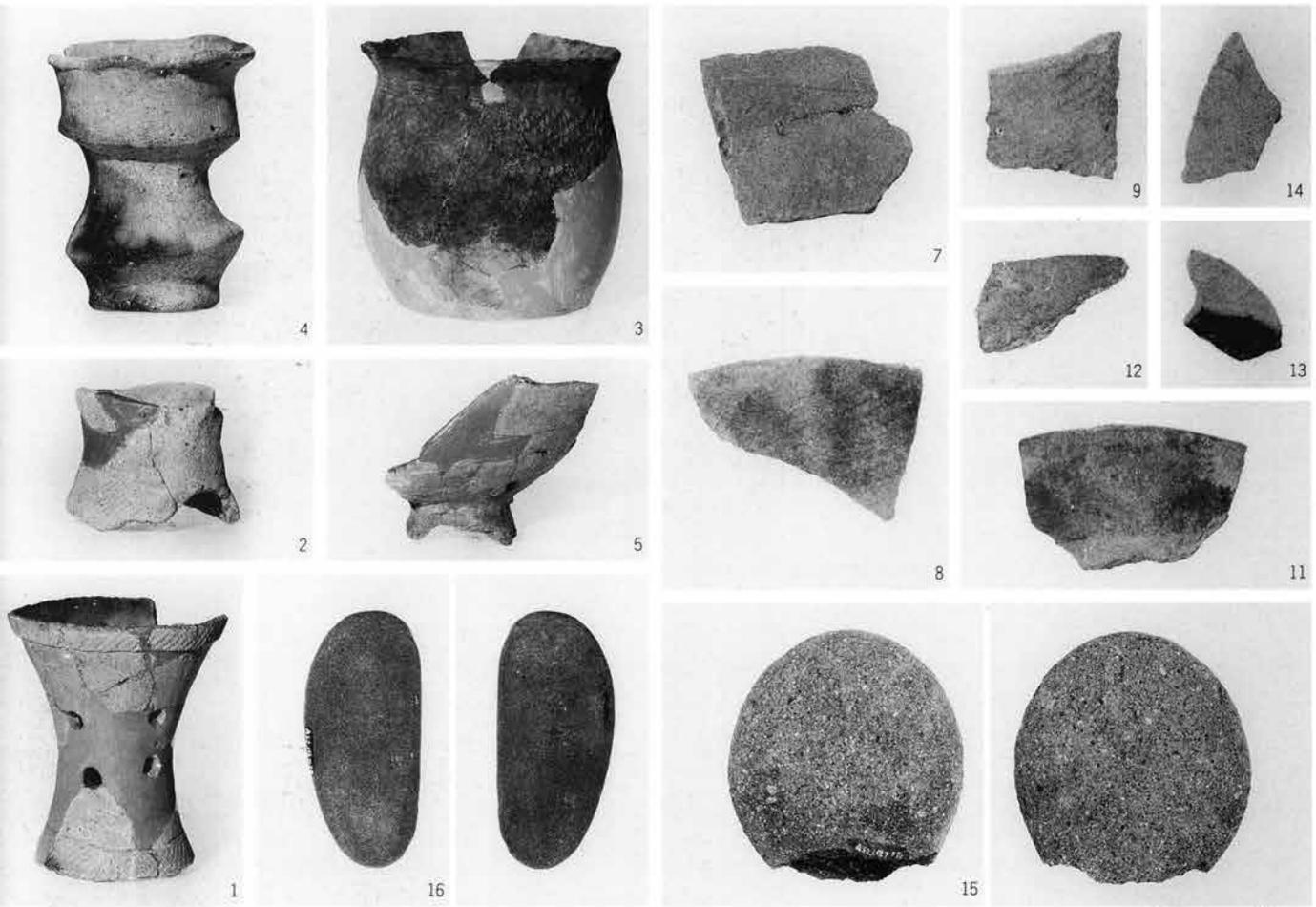


17住-4

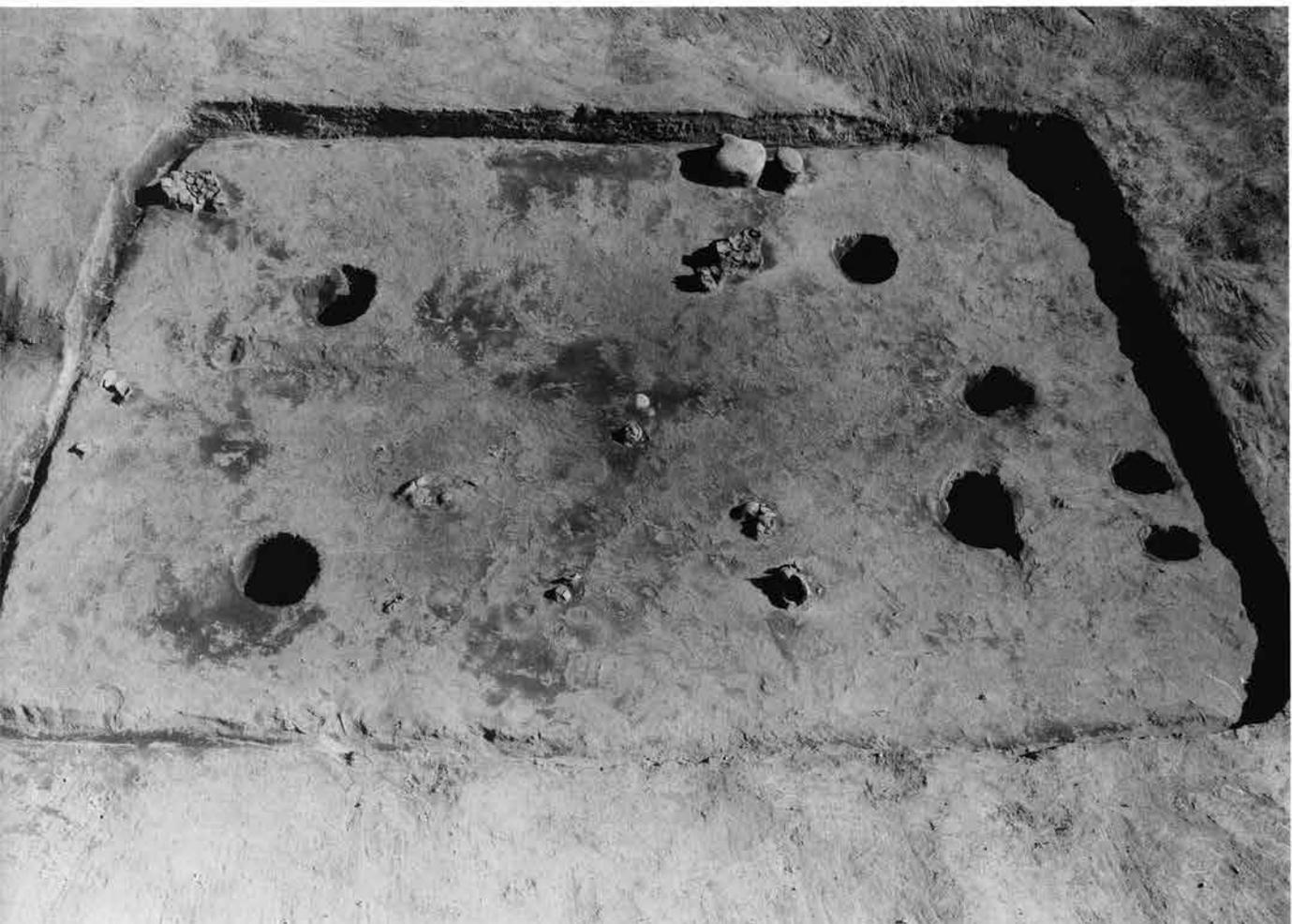


17住-5

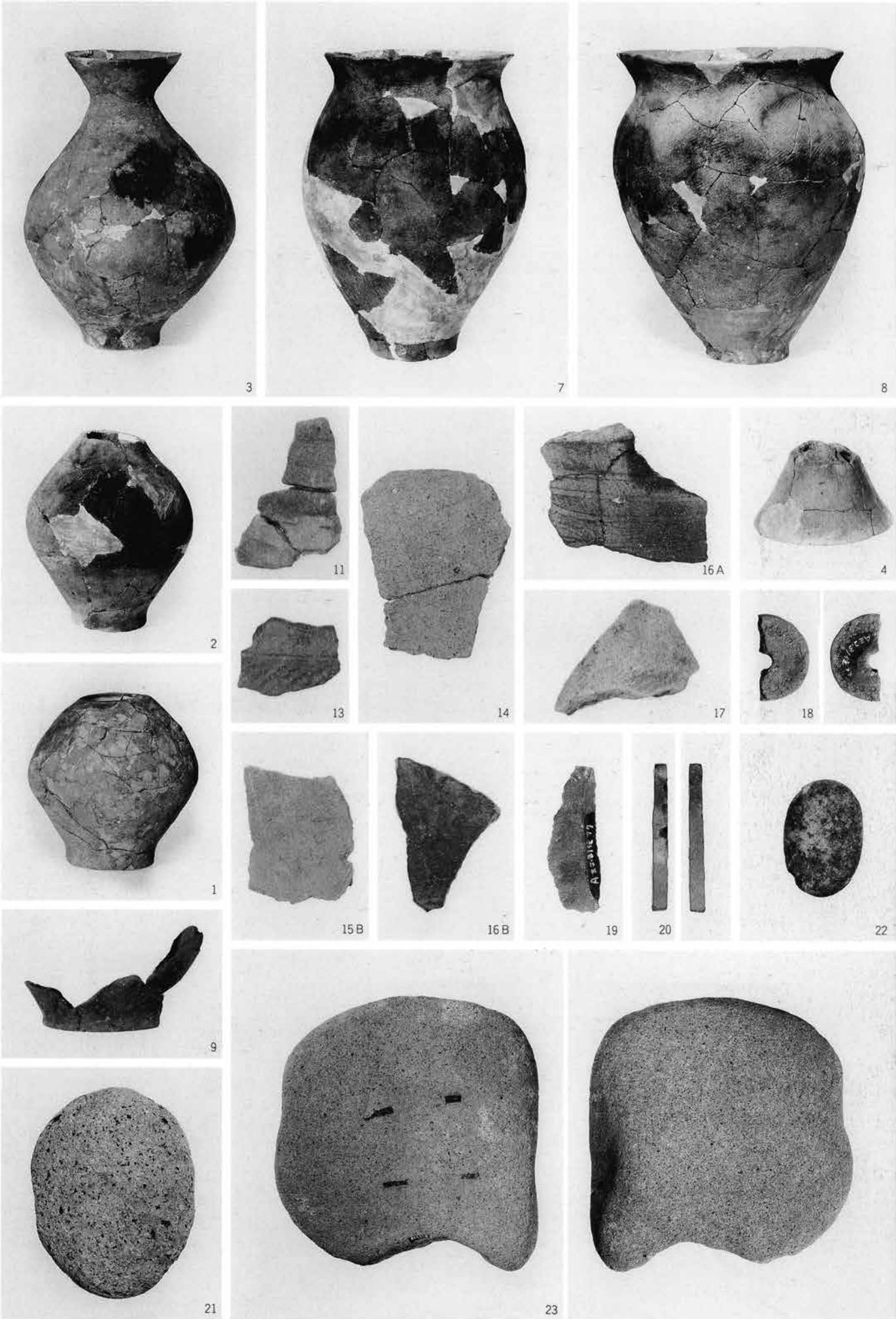
2. 2区17・26号住居出土遺物



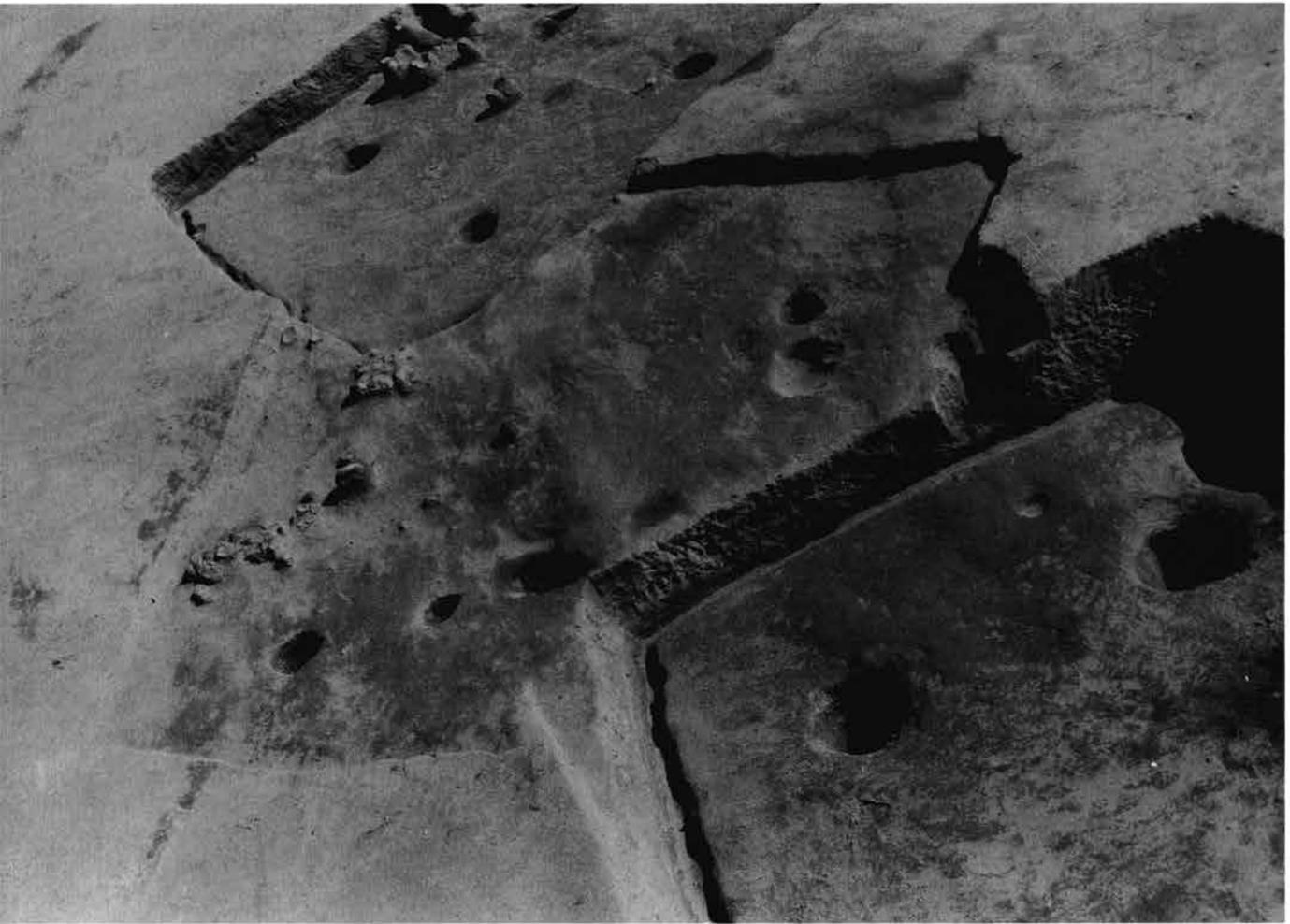
1. 2区1号住居出土遺物



2. 2区31号住居



2区31号住居出土遺物



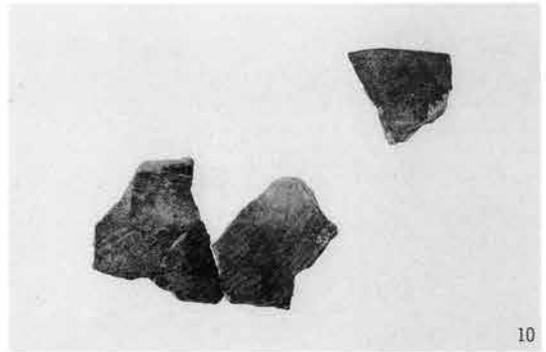
1. 2区44号住居



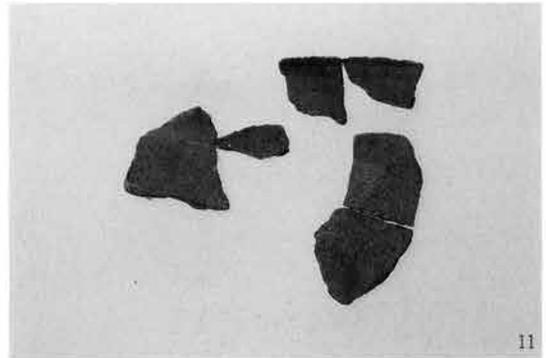
4



1



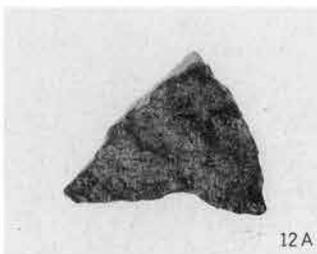
10



11



5



12A

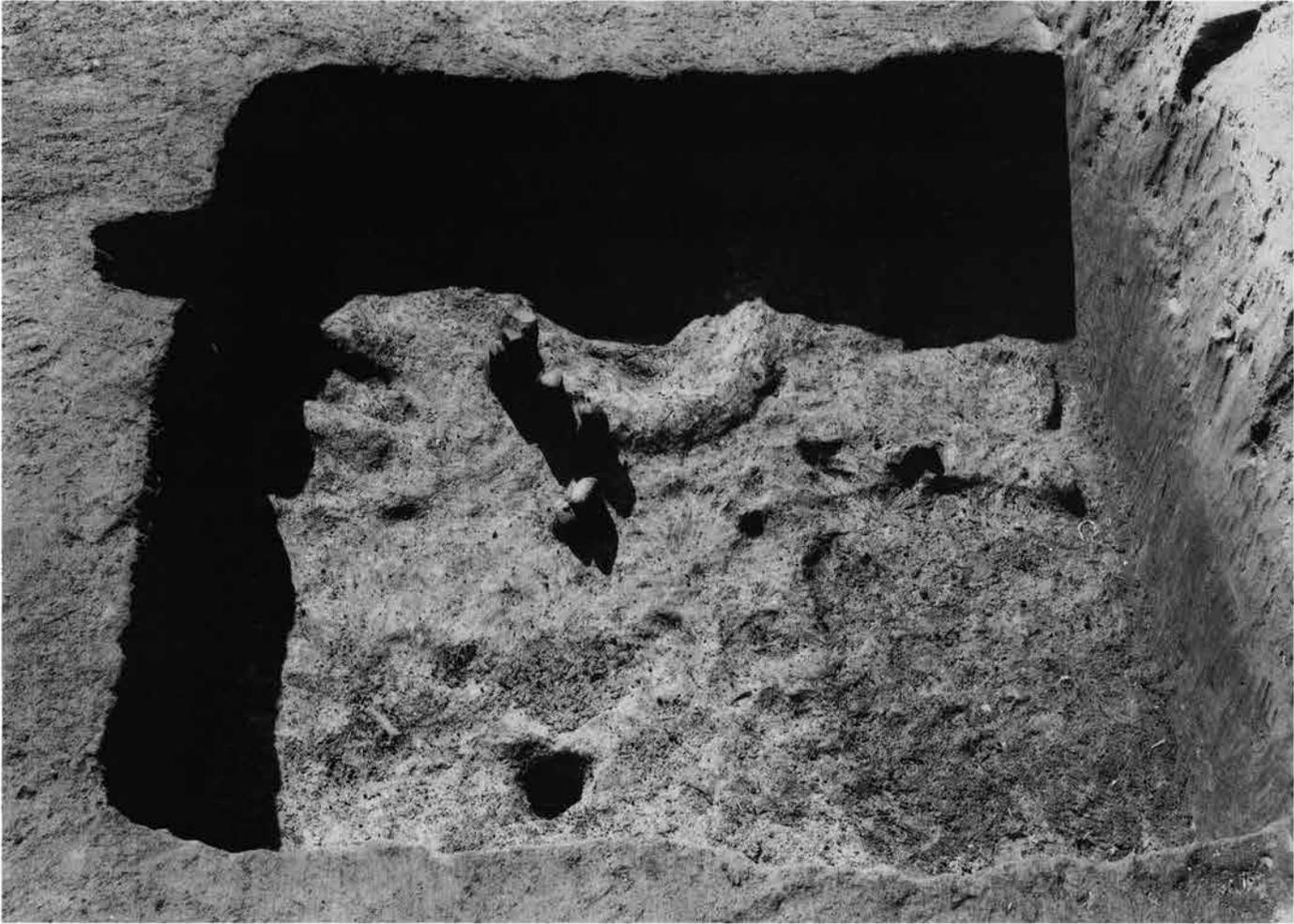


12B



12C

2. 2区44号住居出土遺物



1. 1区1号住居



1住-1



1住-3



2住-1



2住-2



2住-3



2住-9

2. 1区1・2号住居出土遺物



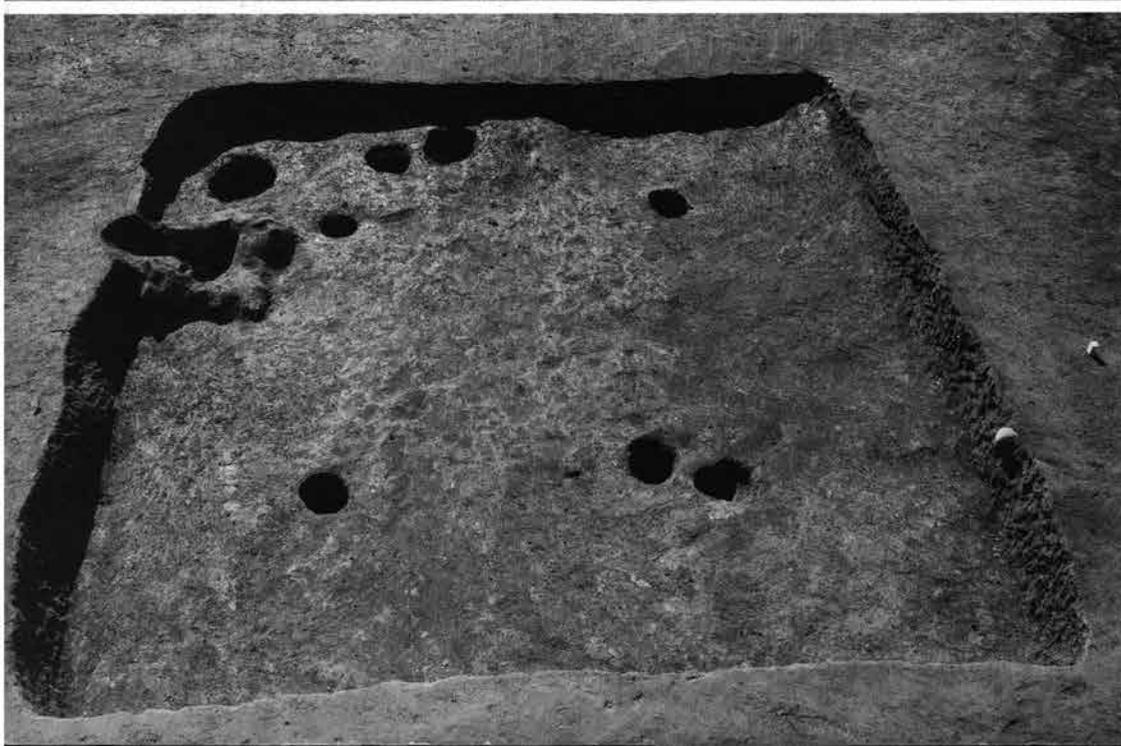
3. 1区4号住居



1. 1区3号住居



2. 同 竈



3. 同 遺物取り上げ後の状況



8



9



1. 1区3号住居遺物出土状況 (No.18・20・24・27等)



19



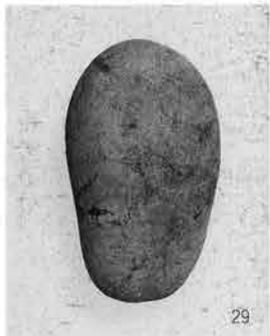
1



28



2



29



17



3



4



5



13



14



6



11

2. 1区3号住居出土遺物



18



20



12



16



21



24



25

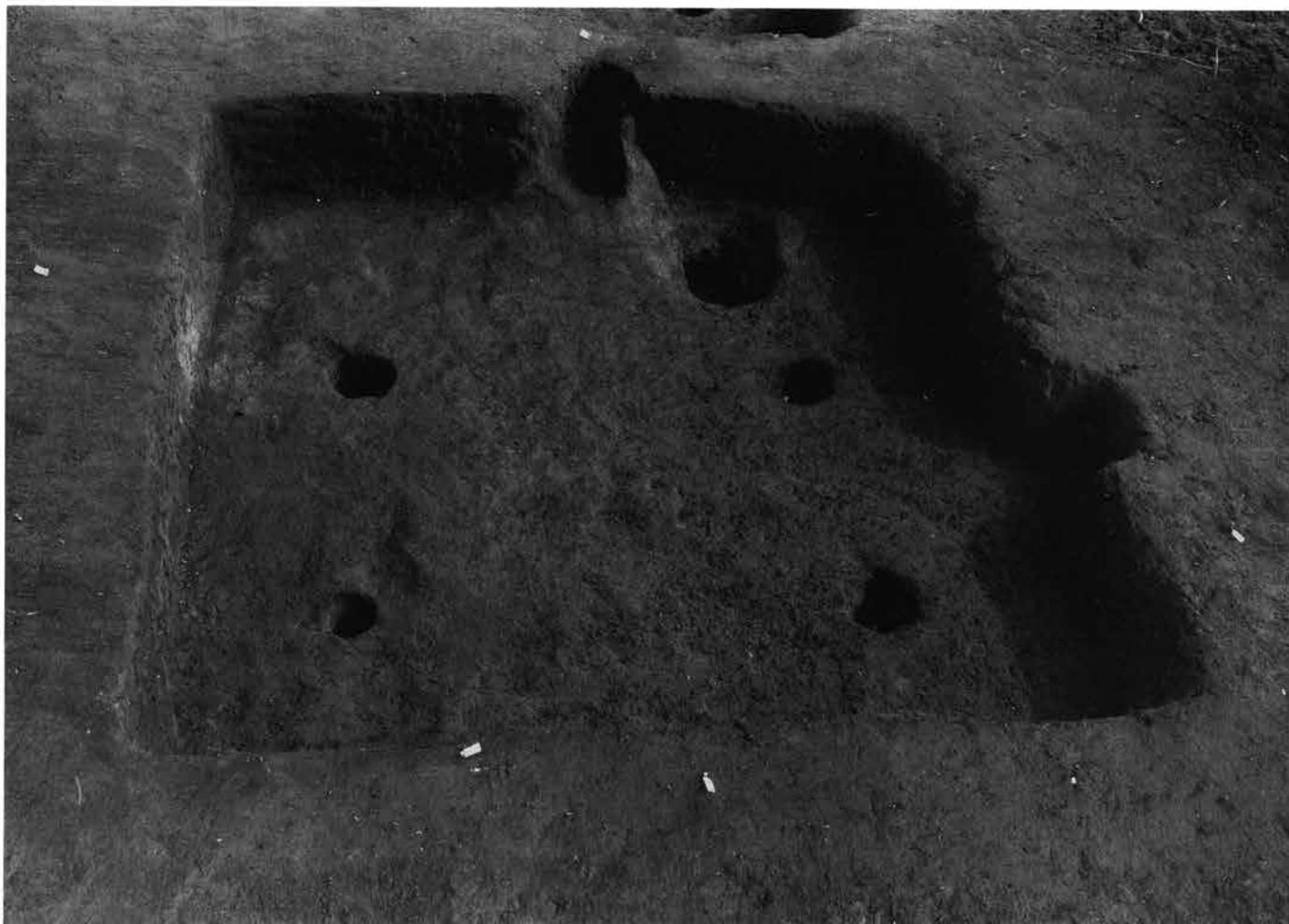


27



26





1. 1区8号住居



1



3



4



7



8



2



12



3. 1区7号住居

2. 1区8号住居出土遺物



1. I区6号住居



2. I区9A・B号住居



2



11



9



3



20



16



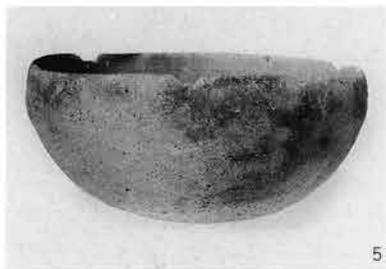
4



21



13



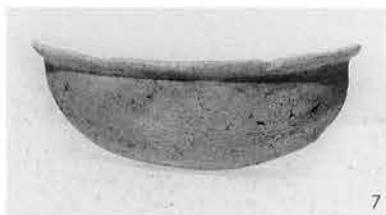
5



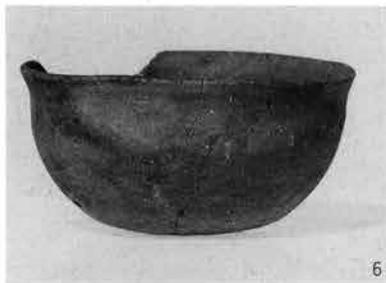
24



22



7



6



10



12



25

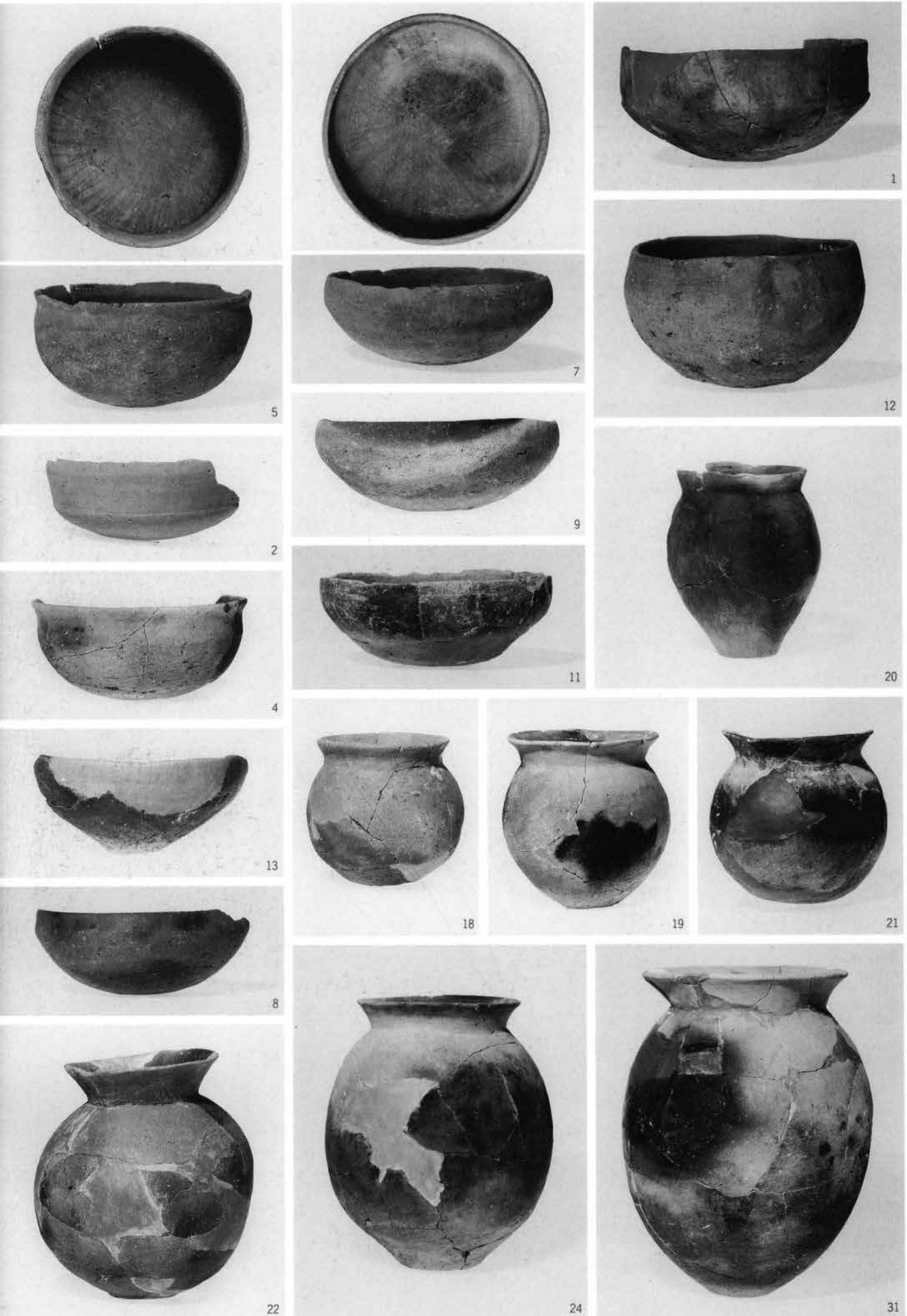


26



1

I 区 6 号住居出土遺物





23



28



29



25



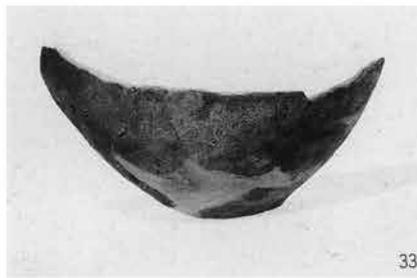
34



36



26



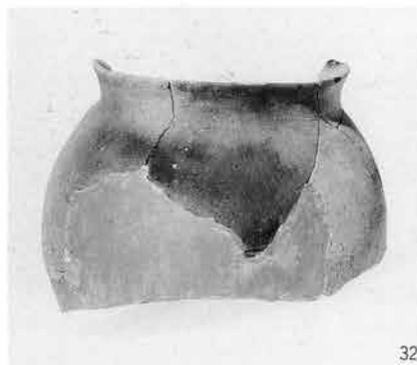
33



9 B-1



27



32



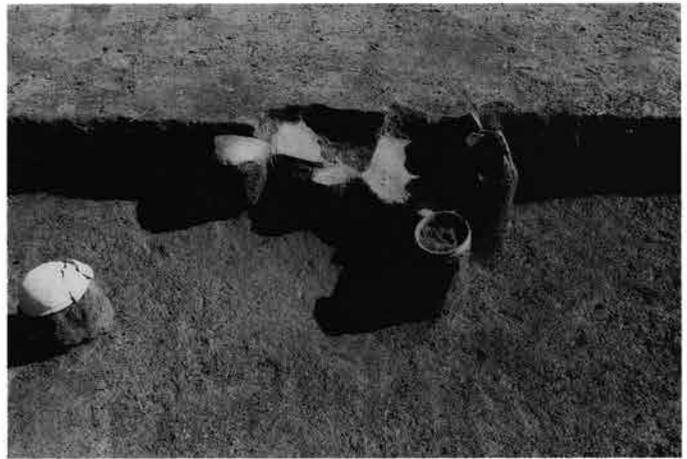
41



1. I区10・11号住居



2. I区10号住居竈と遺物出土状況 (No.2・4・16・20等)



3. I区11号住居遺物出土状況 (No.3・10等)



5



2



4



3

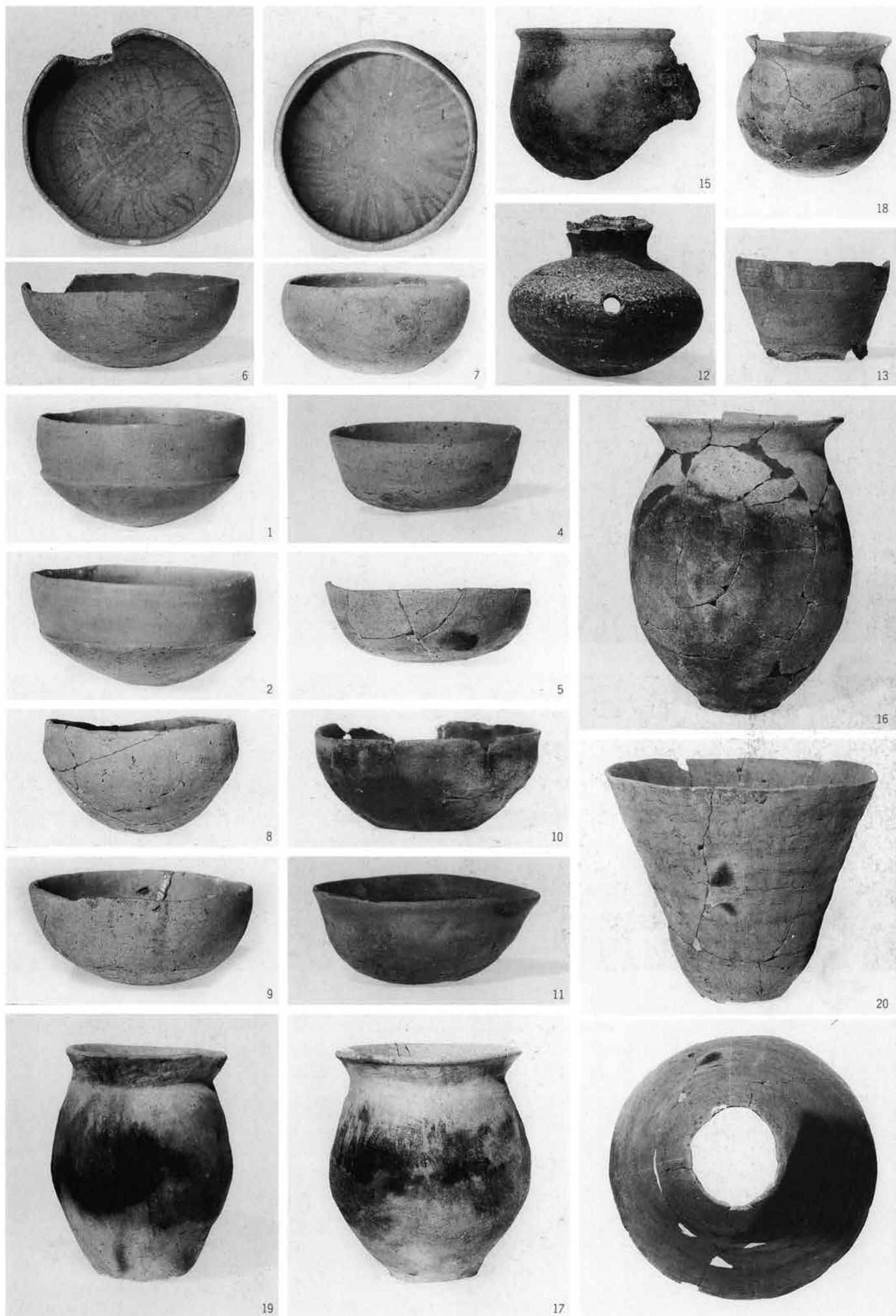


8



9

4. I区11号住居出土遺物



I 区10号住居出土遗物



1. I区12号住居



2. 同 竈と遺物出土状況 (No.19・20)



3. 同 竈埋没土層 (E-E')



5



6



7

4. 同 出土遺物



11



8



12



14



13



18



15



16



25



26



27



30



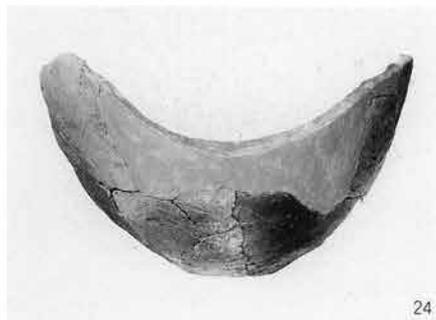
29



36



28



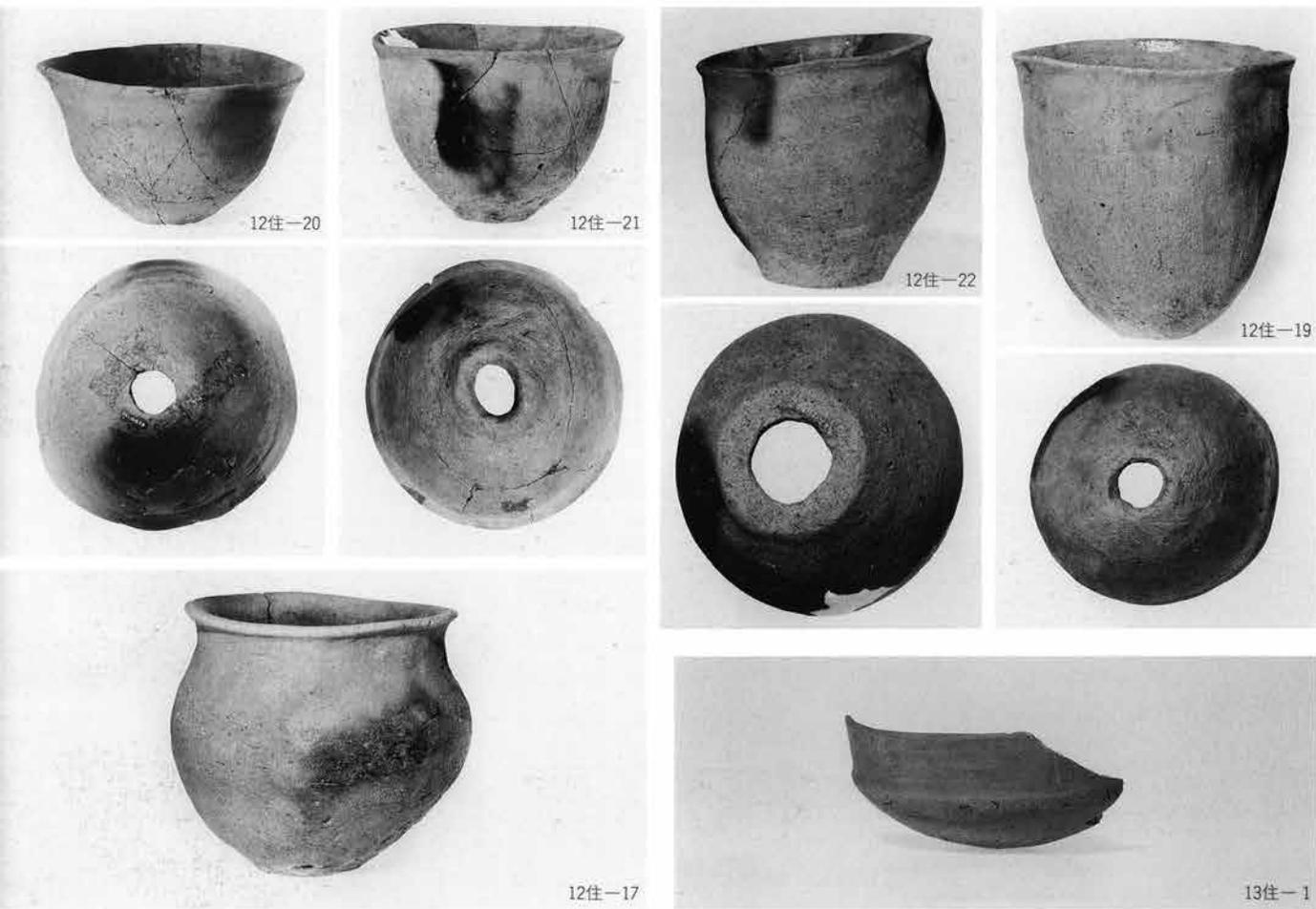
24



38



I 区12号住居出土遺物



1. 1区12・13号住居出土遺物



2. 2区2号住居



17



18



19



1. 2区2号住居遺物出土状況



1



8



11



2



9



12



3



10



13



4



16



15



6



22



16



20



28



25

2. 2区2号住居出土遺物



1. 2区3号住居

2. 2区4号住居



3住-2



4住-1



3住-6



4住-3



4住-13



4住-4



4住-7



4住-8



4住-11



4住-12



4住-10



4住-14

3. 2区3・4号住居出土遺物



1. 2区5号住居



1



6



4



8



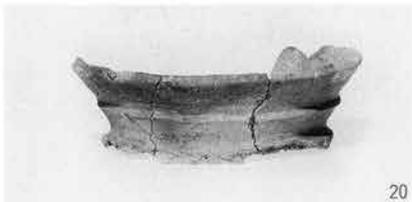
17



10



12

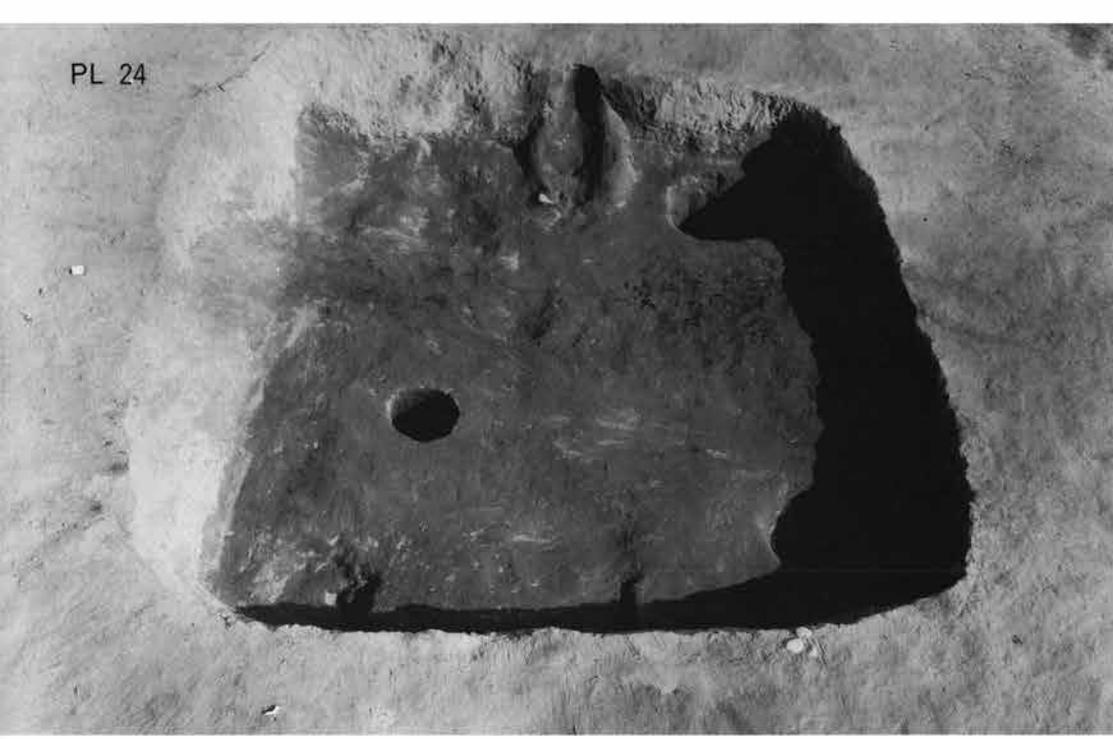


20



16

2. 2区5号住居出土遺物



1. 2区6号住居



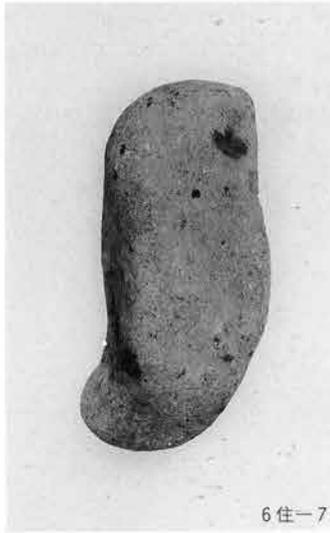
2. 2区7号住居



3. 2区8号住居



6住-6



6住-7



1. 2区6号住居埋没土層 (A-A')



6住-2



6住-3



7住-7



7住-1



7住-5



6住-4



6住-5



7住-2



7住-8



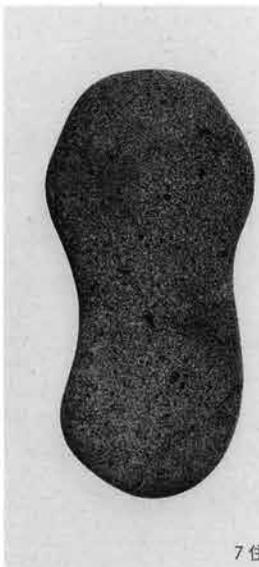
7住-3



7住-9



7住-13



7住-14



7住-10



7住-11

2. 2区6・7号住居出土遺物





1. 2区10・11号住居



2. 2区10号住居埋没土層 (A-A')



3. 2区10号住居竈と遺物出土状況 (No. 1・7・10・12等)



5



6



3



7



10

4. 2区11号住居出土遺物



11住-8



10住-1



10住-10



10住-13



10住-2



10住-7



10住-21



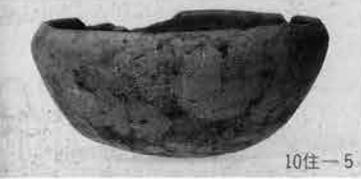
10住-19



10住-4



10住-11



10住-5



10住-20



10住-29



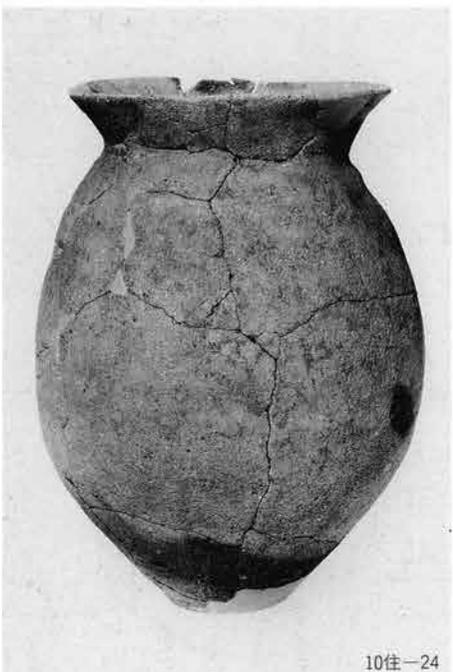
10住-8



10住-12



10住-6



10住-24



10住-28



10住-15



10住-23



1. 2区12号住居



2. 同 遺物出土状況



3. 同 竈



4. 同 遺物出土状況 (No.24・26・29・32等)



5. 同 遺物出土状況 (No.2・6・14・21等)



1. 2区12号住居埋没土層 (B-B')



2. 同 遺物出土状況 (No.5・8・12・23等)



3. 同 遺物出土状況 (No.6・14)



4. 同 遺物出土状況 (No.5・8・12・23等)



2



5



9



6



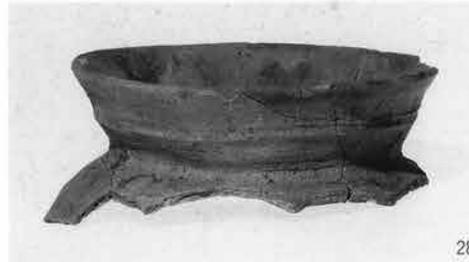
8



27



4



28

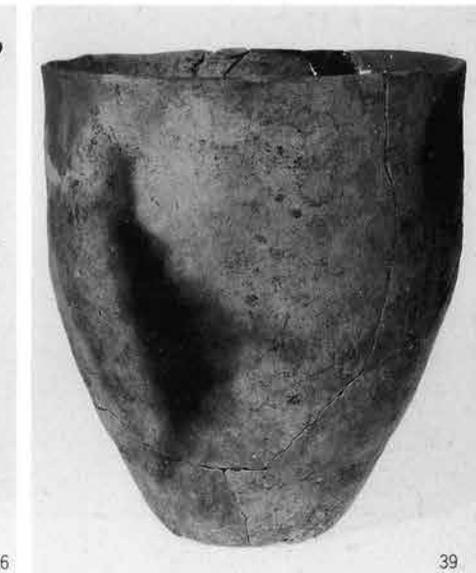
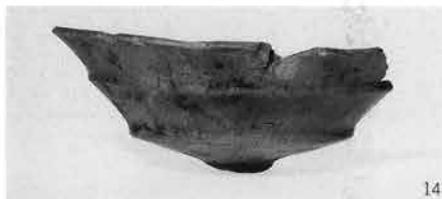


24



30

5. 2区12号住居出土遺物



2区12号住居出土遺物



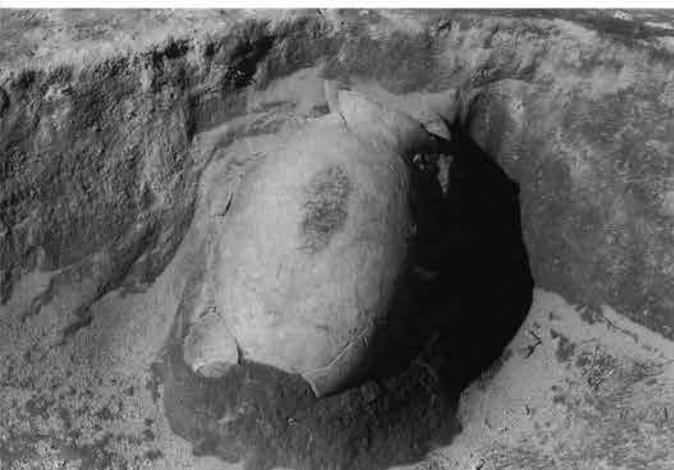
1. 2区13号住居



2. 同 竈と遺物出土状況 (No.12・13等)



3. 同 遺物出土状況 (No.1・9)



4. 同 遺物出土状況 (No.16)



5. 同 遺物出土状況 (No.8・10・15・16)



1. 2区13号住居遺物出土状況 (No.5)



2. 同 遺物出土状況 (No.14)



1



3



4



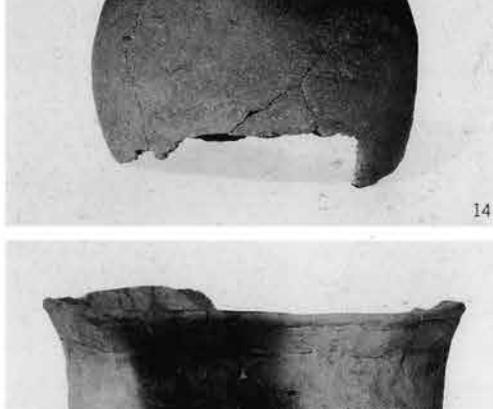
5



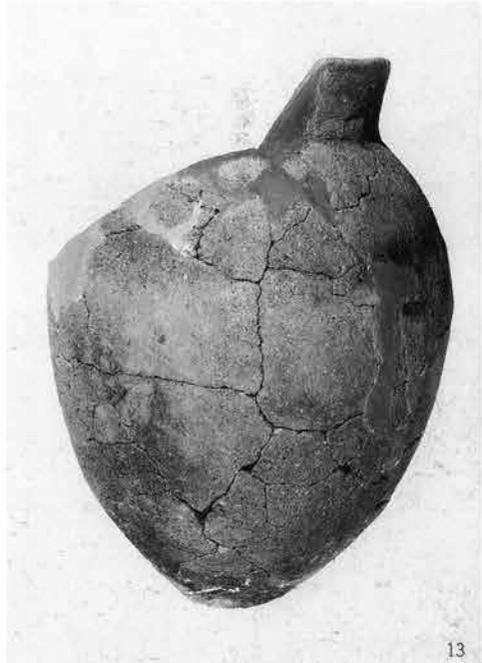
9



8



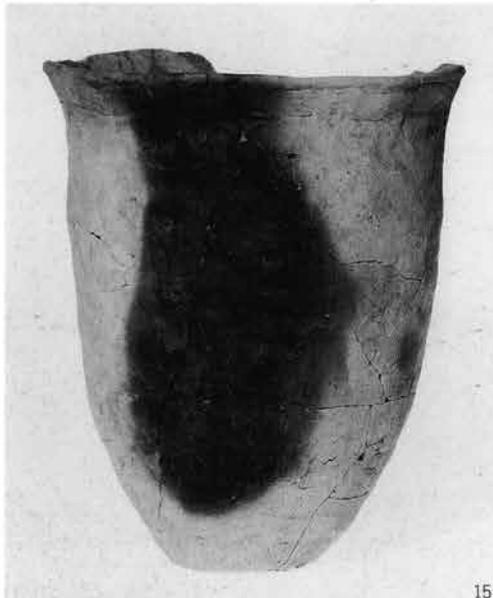
14



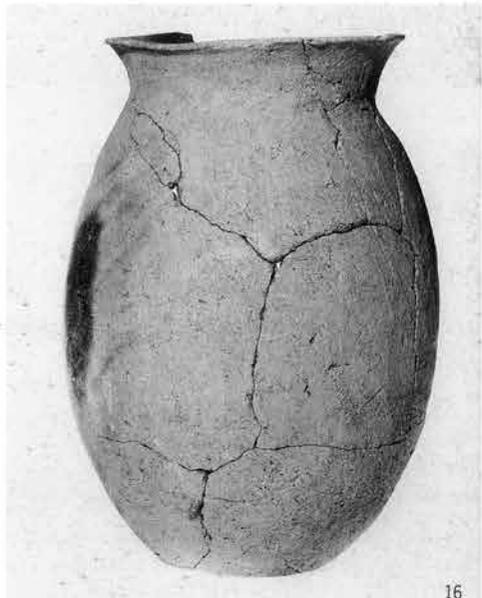
13



10



15



16

3. 2区13号住居出土遺物



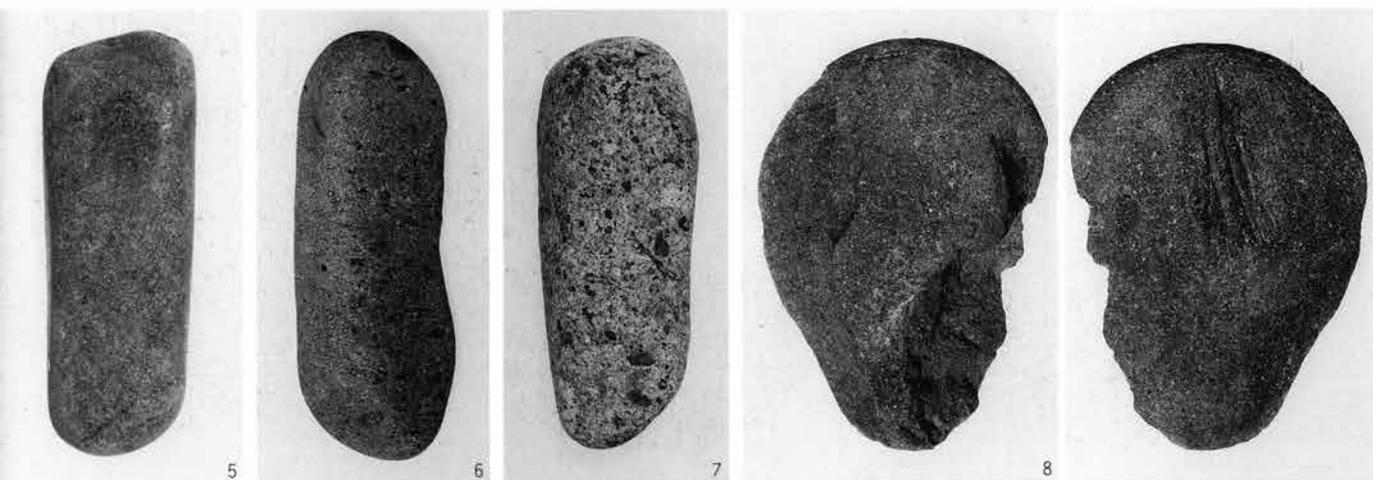
1. 2区14·15号住居



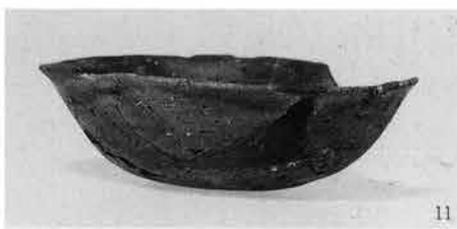
2. 2区14号住居



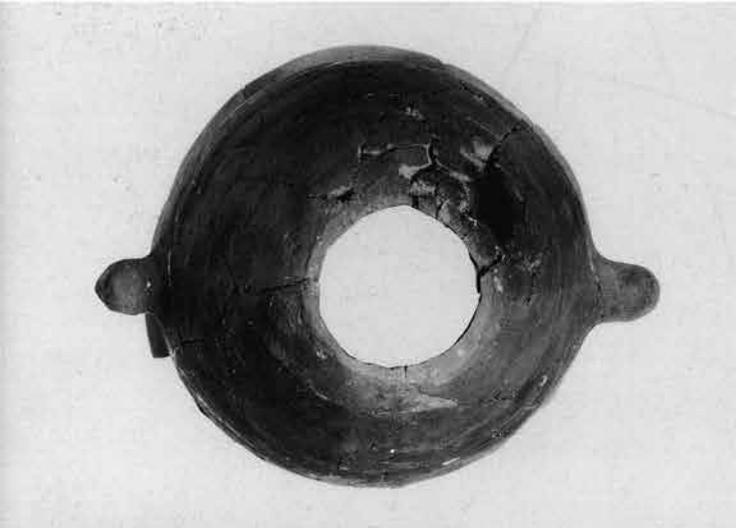
3. 2区15号住居



4. 2区14号住居出土遺物



2区15号住居出土遺物

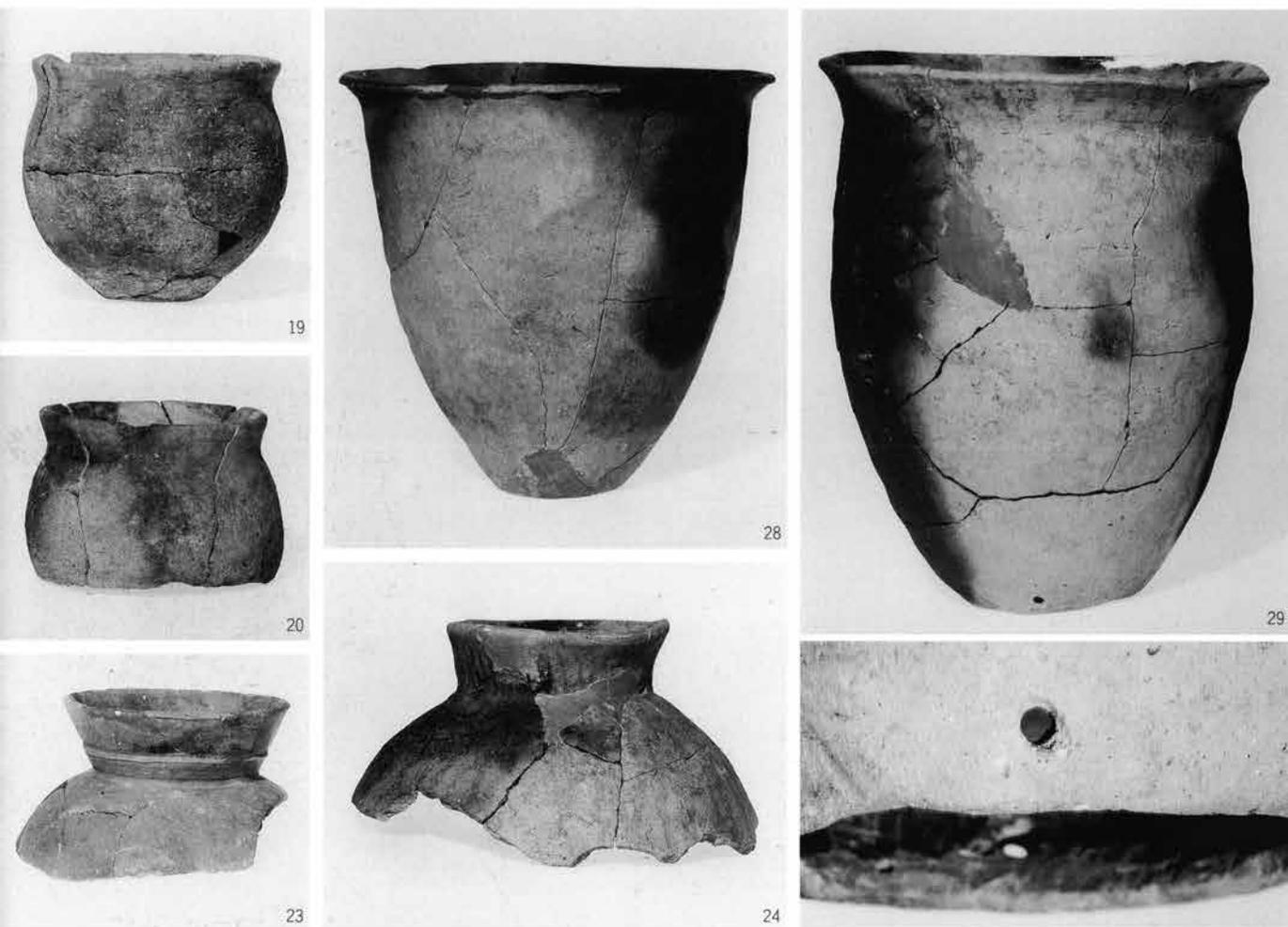




1. 2区16号住居貯藏穴内
遺物出土状況 (No.28・29)



2. 2区16号住居出土遺物



1. 2区16号住居出土遺物



2. 2区18号住居出土遺物



4



1



10



9



2



13



7



3



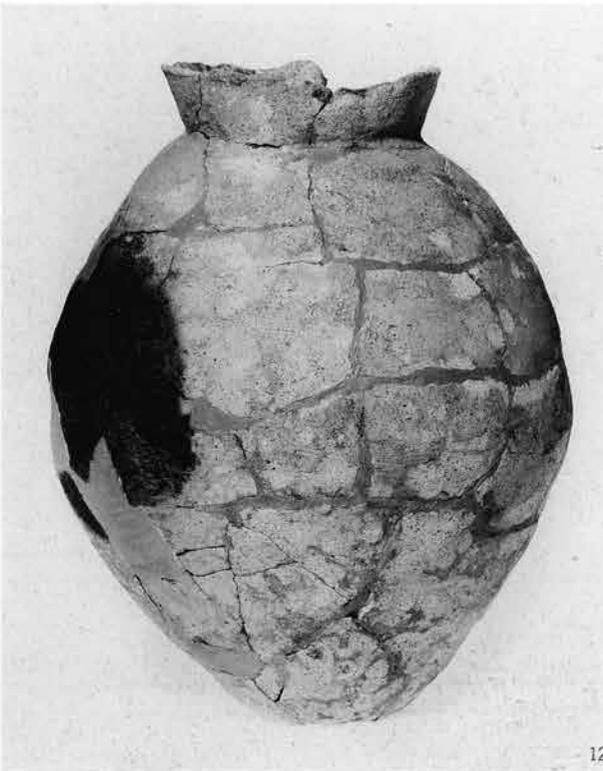
8



14



6



12



15



1. 2区20号住居



2. 同 竈と遺物出土状況 (No.9・11)



1. 2区20号住居遺物出土状況
(No.3・6・9・12等)



2. 同 遺物出土状況
(No.1・12)



3. 同 遺物出土状況
(No.3・6)



1. 2区21号住居



2. 同 竈と遺物出土状況
(No. 1・6・10・20等)



3. 同 遺物出土状況
(No. 2・5・17・34等)



20住-1

20住-2



20住-3



20住-6



20住-7



20住-11



20住-12



20住-9



21住-1



21住-6



21住-18



21住-24



21住-2



21住-7



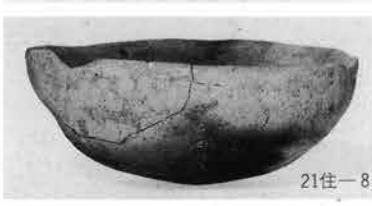
21住-33



21住-28



21住-3



21住-8



21住-9



21住-4



21住-23





1. 2区22号住居



2. 同 遺物出土状況



3. 同 竈と遺物出土状況 (No.23・35・50・53等)



4. 同 貯蔵穴と遺物出土状況 (No.5・25・36・45等)



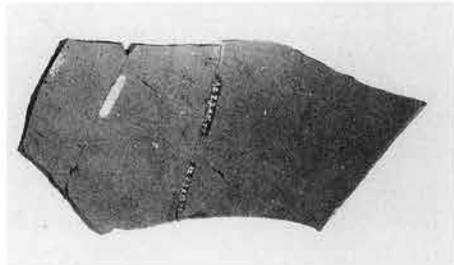
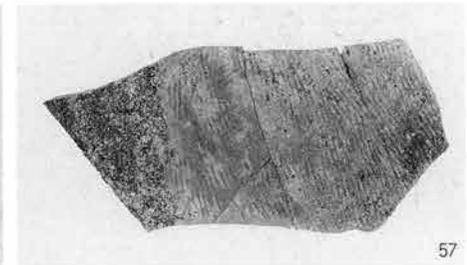
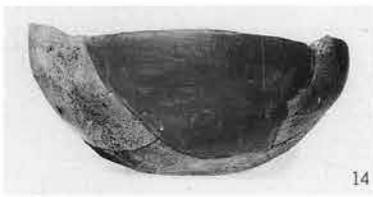
5. 同 埋没土層 (B-B')



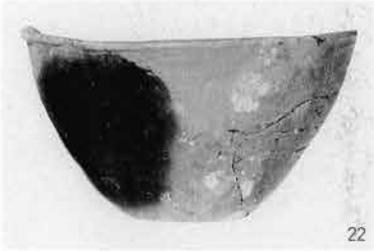
1. 2区22号住居遺物出土状況 (No.19・26)



2. 同 遺物出土状況 (No.6)



3. 2区22号住居出土遺物



22



27



35



36



25



28



37



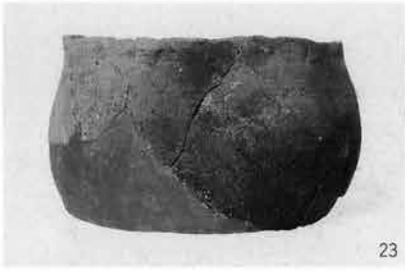
38



26



53



23



46



55



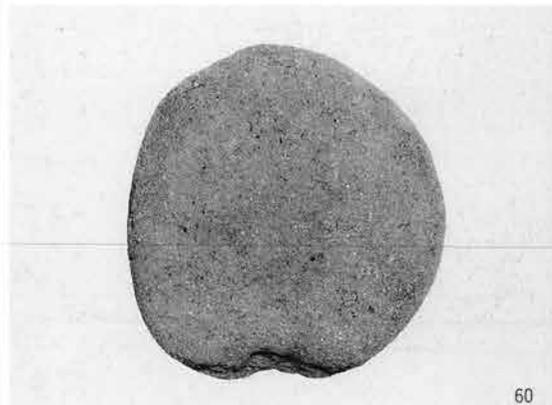
49



52



45



60

2区22号住居出土遺物



1. 2区23号住居



2. 同 埋没土層 (B-B')



3. 同 竈と遺物出土状況 (No.3・10・30・32等)



4. 同 遺物出土状況 (No.27・38等)



5. 同 遺物出土状況 (No.20・24)



2区23号住居出土遺物



1. 2区24号住居



2. 同 竈と遺物出土状況
(No. 4・6・27・46等)



3. 同 埋没土層 (B-B')



1



3



17



2



4



16



6



5



44



7



13



34



8



14



46



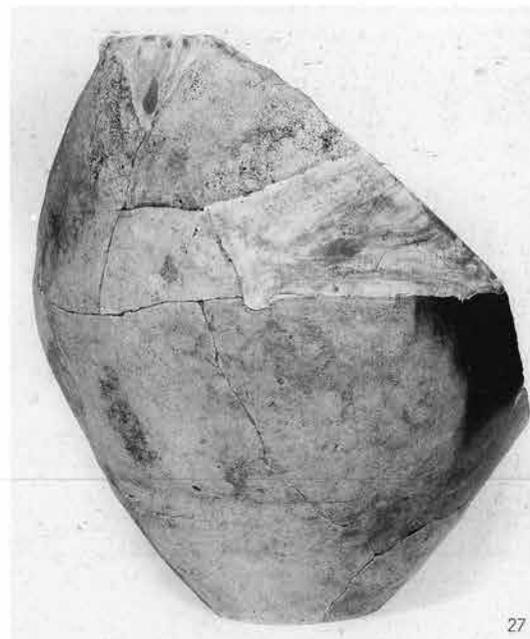
26



45



15



27

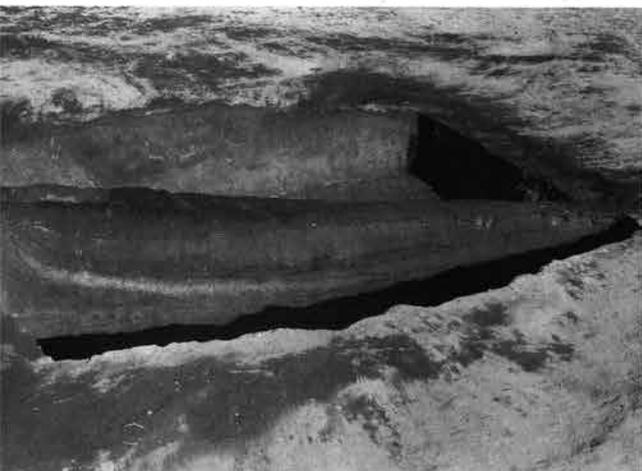
2区24号住居出土遺物



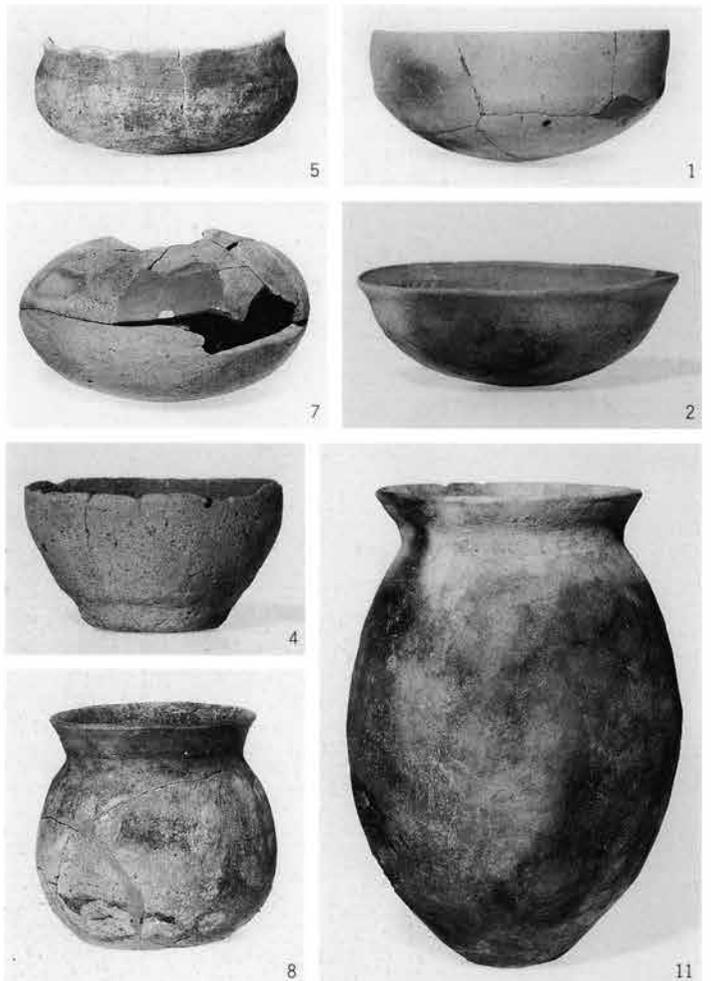
1. 2区25号住居



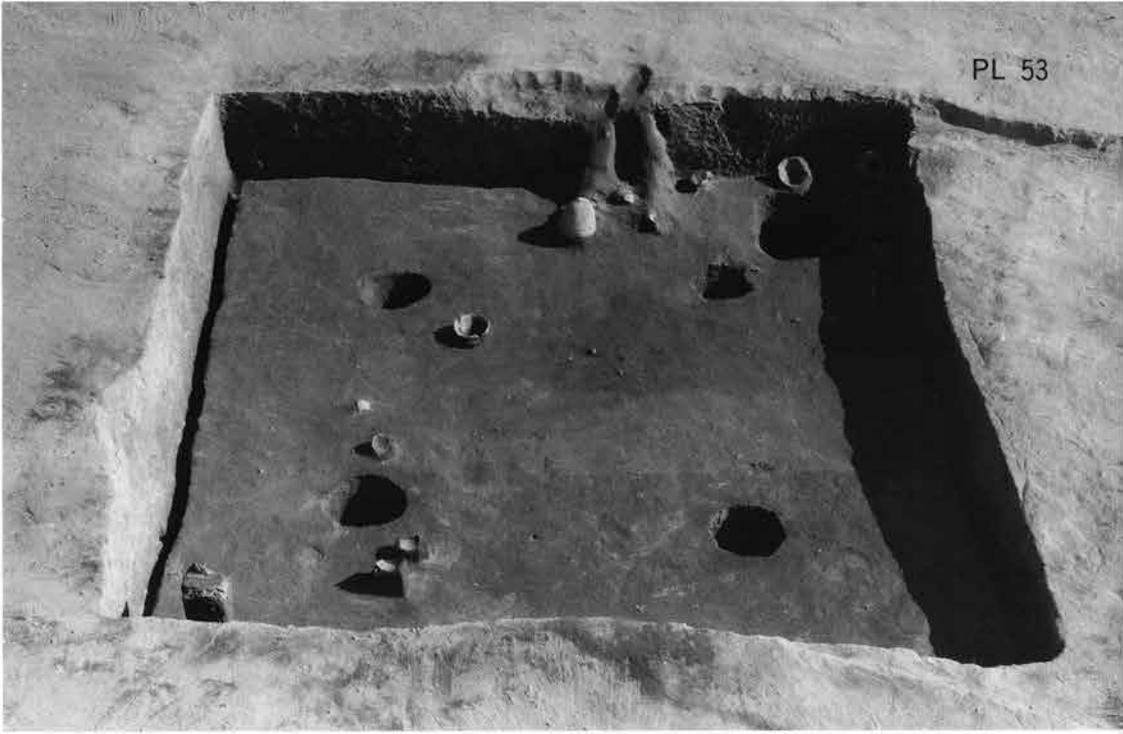
2. 同 竈と遺物出土状況 (No.11)



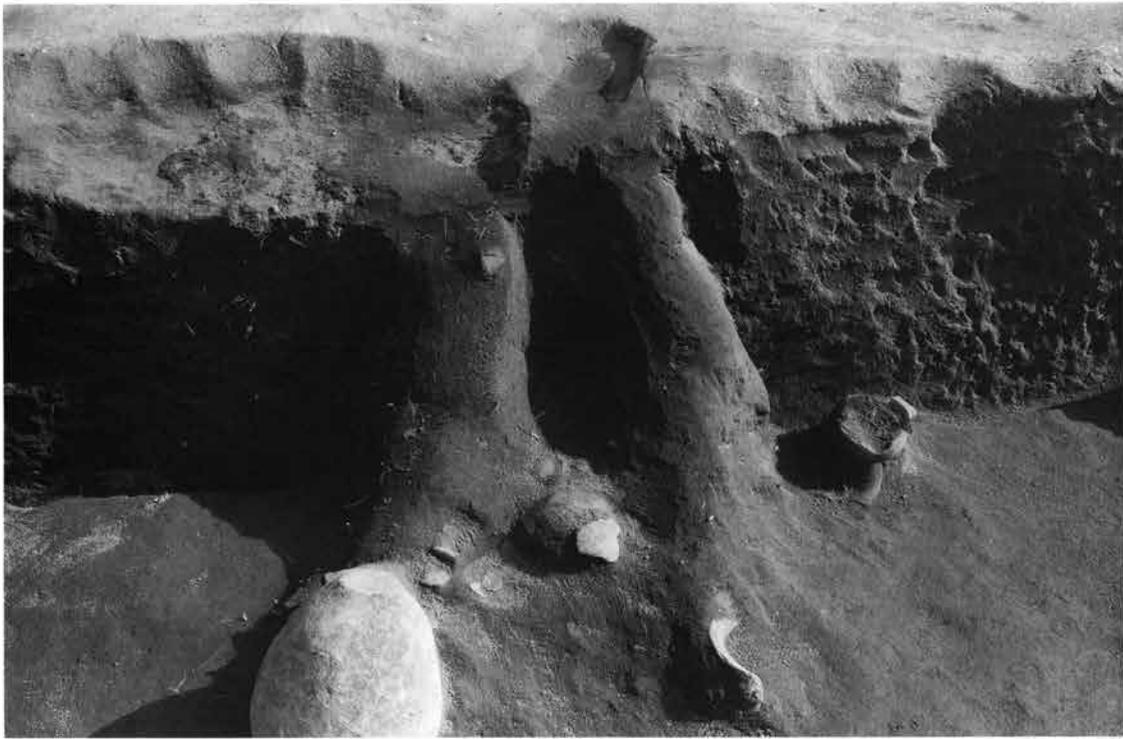
3. 同 埋没土層 (D-D')



4. 同 出土遺物



1. 2区27号住居



2. 同 竈



3. 同 遺物出土状況
(No.13・14・20・25)



1. 2区28号住居



2. 2区28号住居出土遺物





1. 2区29・30・33号住居



2. 2区29号住居埋没土層 (B-B')



29住-8



29住-2



29住-3



29住-6



33住-1

3. 2区29・33号住居出土遺物



1. 2区30号住居



2. 同 埋没土層 (A-A')



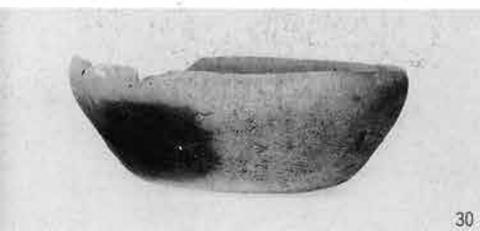
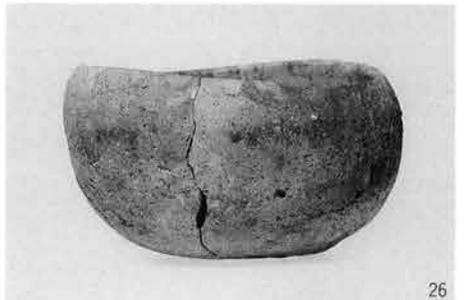
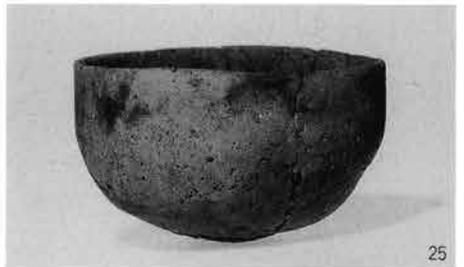
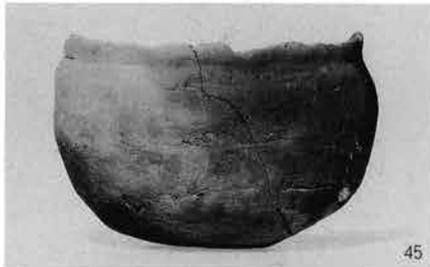
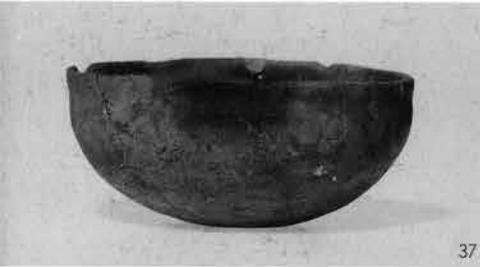
3. 同 遺物出土状況 (No.49)



4. 同 遺物出土状況 (No.8・10・12・21等)

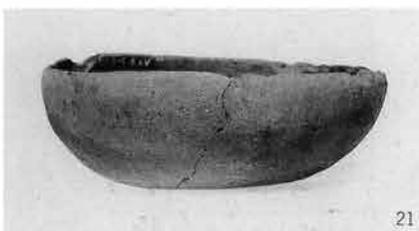


5. 同 遺物出土状況 (No.30・31・48・63等)





8



21



23



9



22



80



10



28



11



31



14



34



84



17



35



19



53



20



74



86

2区30号住居出土遺物



64



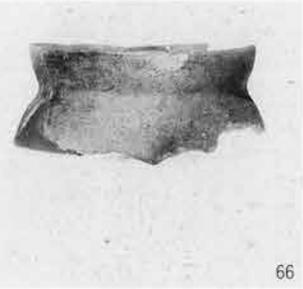
69



73



61



66



67



72



71



77



82



88



87



78



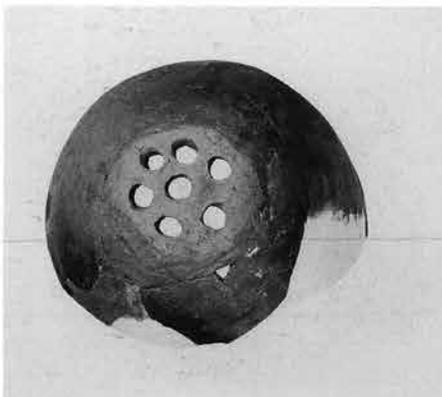
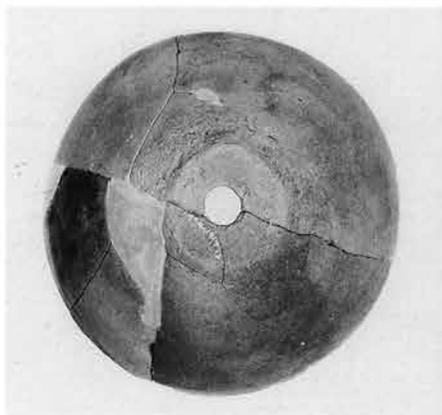
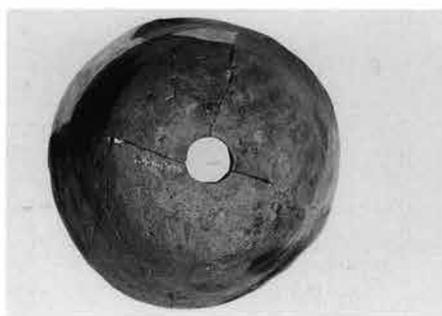
98



90



97

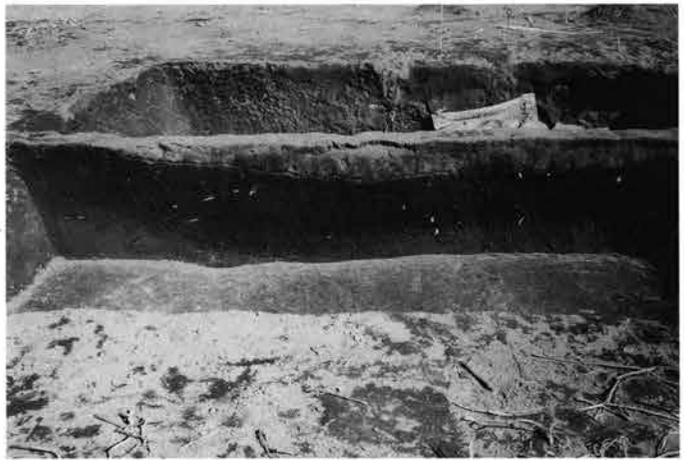




1. 2区32号住居



2. 同 竈と遺物出土状況 (No. 1・13・20・21・25等)



3. 同 埋没土層 (B-B')



25



16



23

4. 同 出土遺物



1



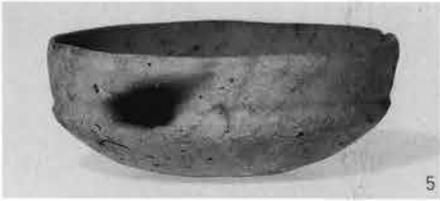
6



2



7



5



8



9



10



11



13



12



17



19



20



18



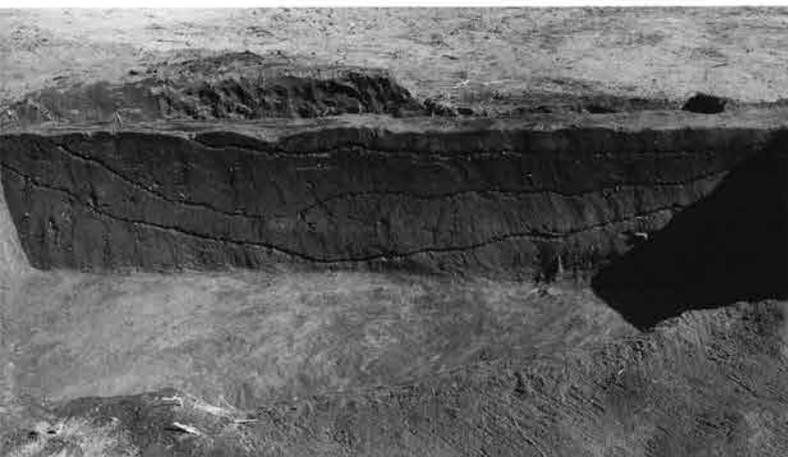
22



21



24



1. 2区34号住居
埋没土層 (B-B')



2



9



16



5



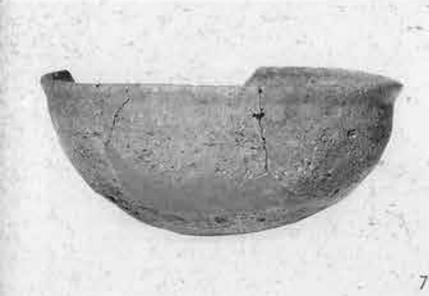
13



12



6



7



17

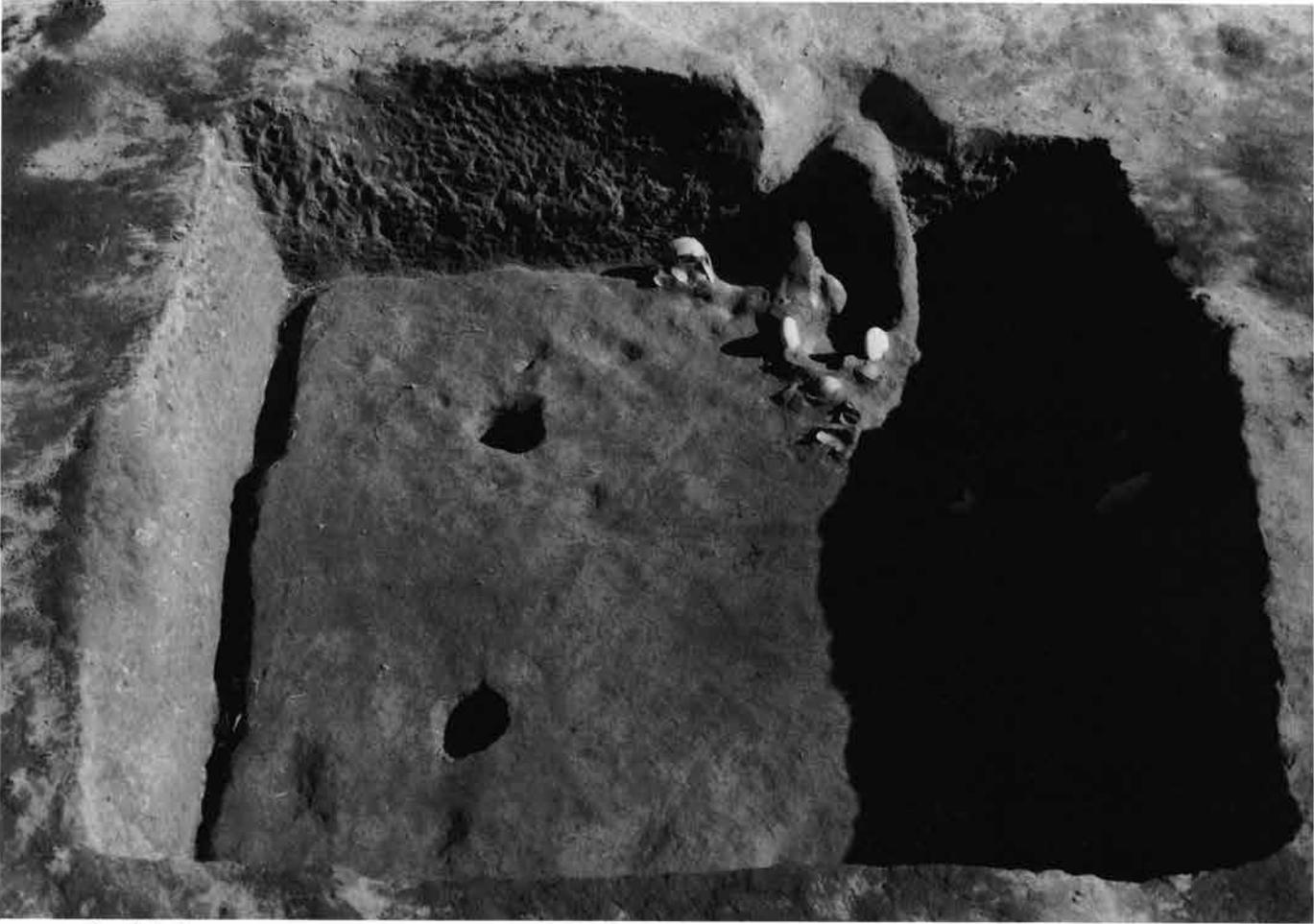


14



8

2. 2区34号住居出土遺物



1. 2区34号住居



2. 2区36号住居



1. 2区36号住居埋没土層
(C-C')



2. 同 竈と遺物出土状況
(No. 3・4)



3. 同 出土遺物



1. 2区36号住居竈



2. 2区38号住居



1. 2区38号住居窟



1



2



3



4



8



5



6



9



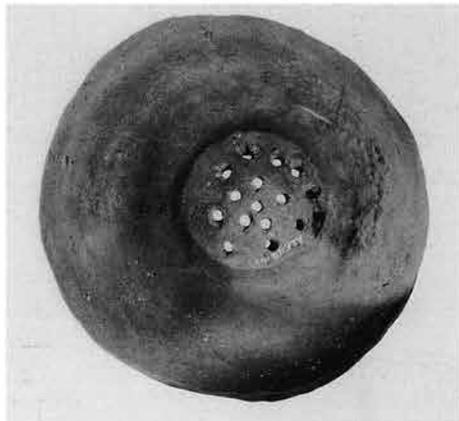
11



12



10



2. 2区38号住居出土遺物



1. 2区35・39号住居



2. 同 遺物取り上げ後の状況



3. 同 埋没土層 (B-B')



4. 2区35号住居竈



5. 2区39号住居竈



1. 2区35号住居遺物出土状況



2. 同 遺物出土状況 (No.50・66・74・75等)



3. 同 遺物出土状況 (No.24等)



4. 同 遺物出土状況 (No.20・31等)



5. 同 遺物出土状況 (No.6等)



6. 同 遺物出土状況 (No.7・46・61等)



7. 同 遺物出土状況 (No.47等)



8. 同 遺物出土状況 (No.42等)



2区35号住居出土遺物





35住-61



35住-65



35住-72



35住-63



35住-64



35住-70



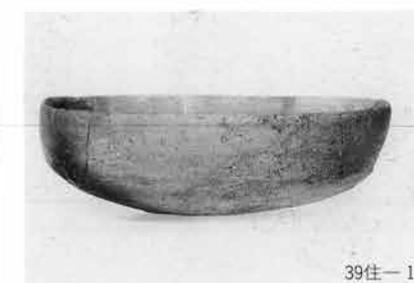
35住-78



35住-69



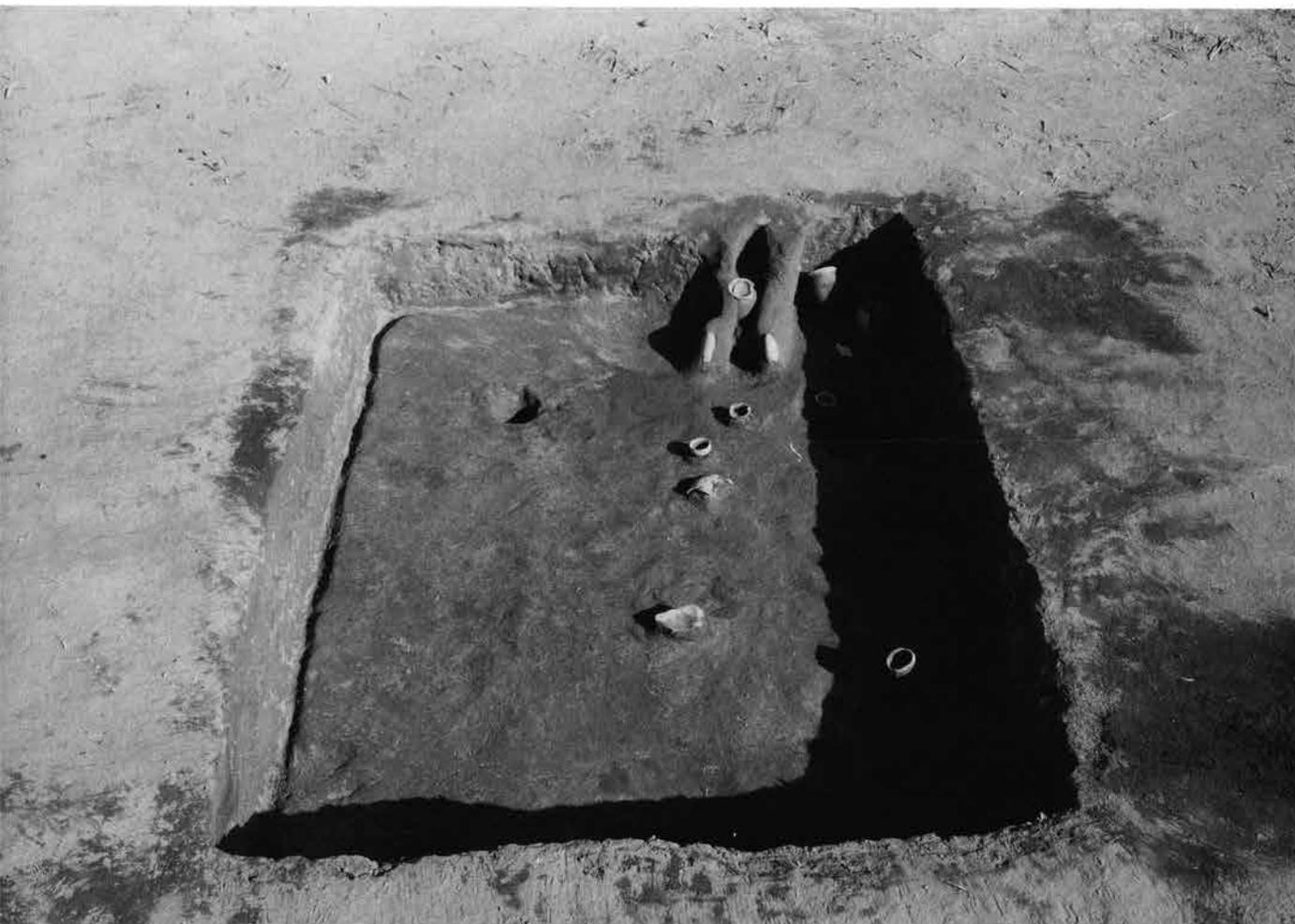
35住-77



39住-1



39住-3



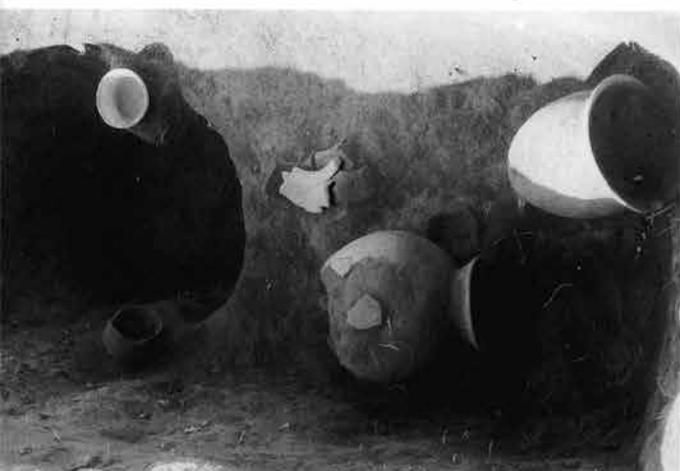
1. 2区37号住居



2. 同 遺物取り上げ後の状況



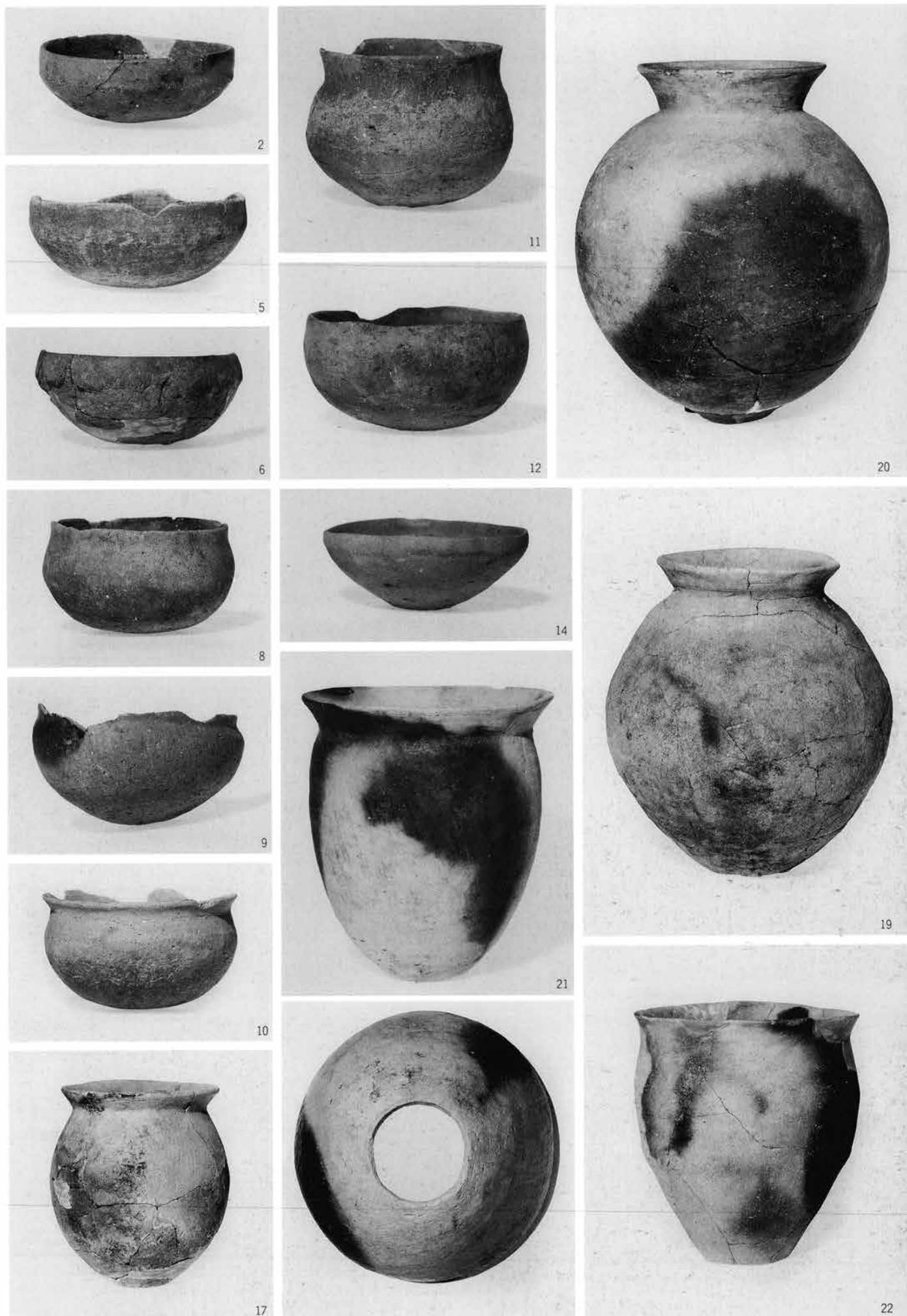
3. 同 甕と遺物出土状況 (No.2・19・21等)



4. 同 遺物出土状況 (No.11・14・17・21等)



5. 同 遺物出土状況 (No.5)



2区37号住居出土遺物



1. 2区40号住居



2. 同 竈と遺物出土状況 (No.2・4・6・7等)



3. 同 埋没土層 (D-D')



6



4



1

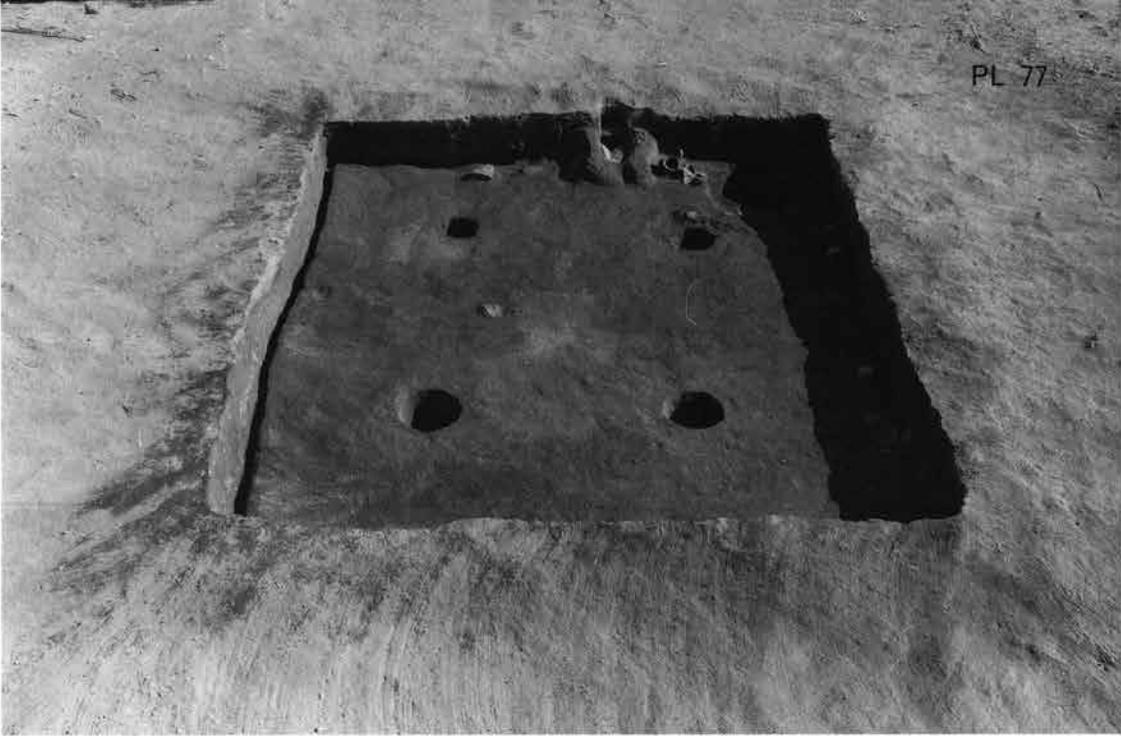


5



3

4. 同 出土遺物



1. 2区41号住居

3. 同 出土遺物



13

2. 同 竈と遺物出土状況 (No.9・14等)



1



7



6



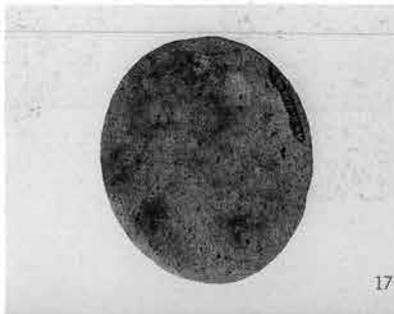
2



9



11



17



16



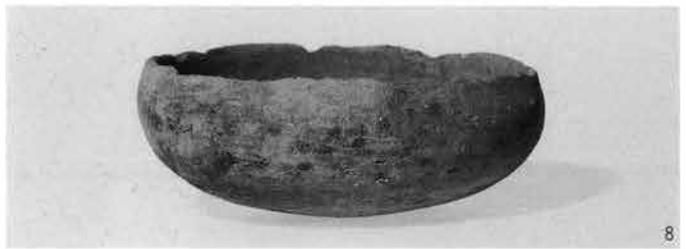
1. 2区42号住居



2. 同 竈と遺物出土状況 (No.26・29等)



6



8



1



4



9



3



5



10

3. 同 出土遺物



13



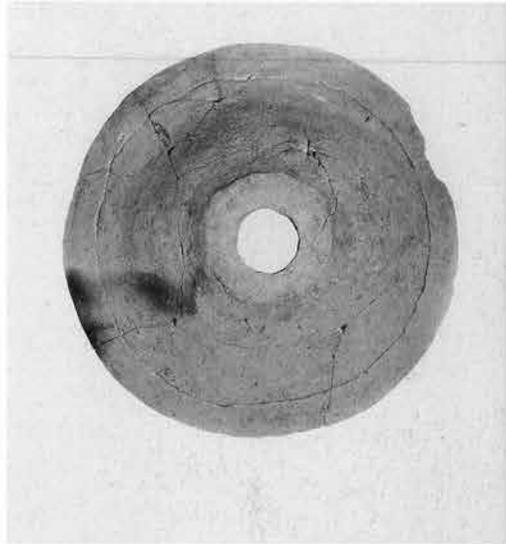
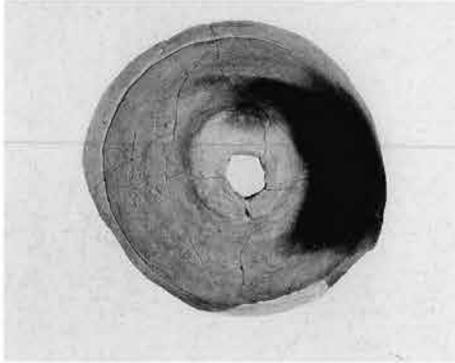
28



29



14



15



23



26



21



22



25



19

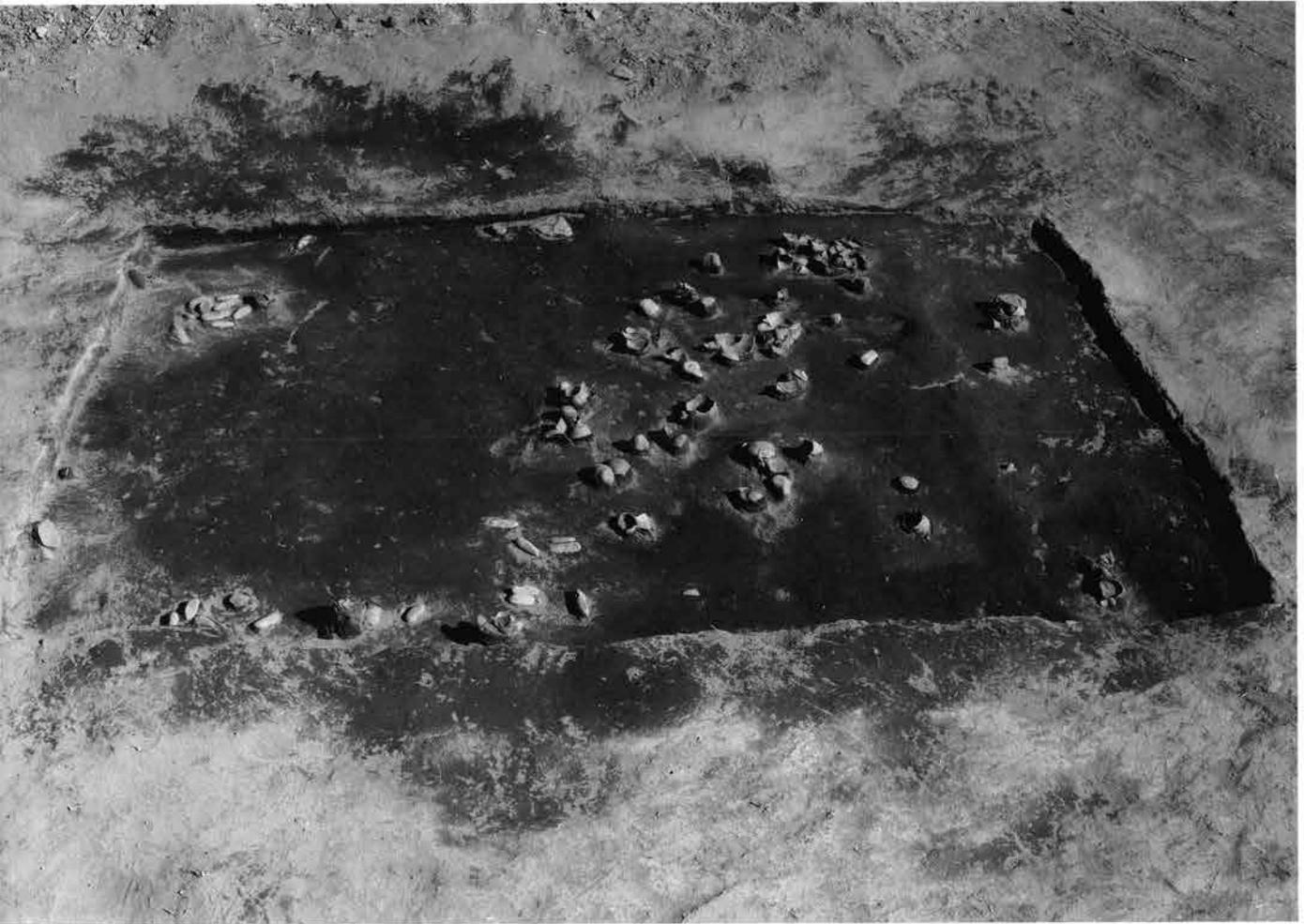


17



16





1. 2区43号住居



2. 同 遺物出土状況



3. 同 薦編み石の集中出土状況



4. 同 出土遺物

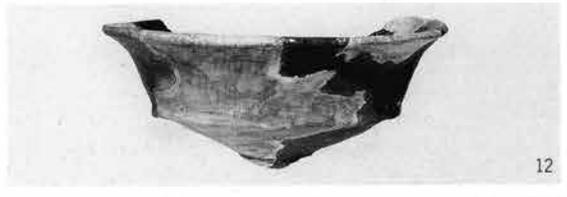
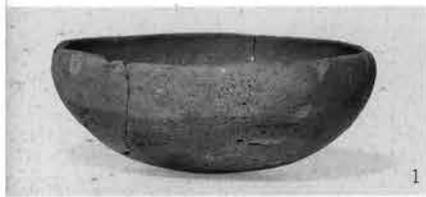


2区43号住居出土遺物



1. 2区45号住居

2. 同 出土遺物





1. 2区46・47号住居



6



5



11



7



9



10



12

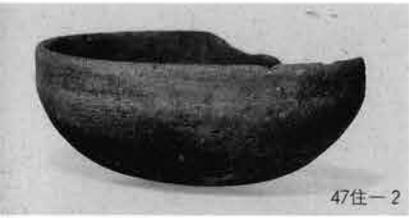
2. 2区46号住居出土遺物



46住-8



46住-3



47住-2



47住-4



47住-9



47住-19



47住-20



47住-23



47住-25



47住-37



47住-22



47住-30



47住-24



47住-31



47住-38





1. 2区50号住居



2. 同 竈と遺物出土状況 (No.3・8・15・20等)



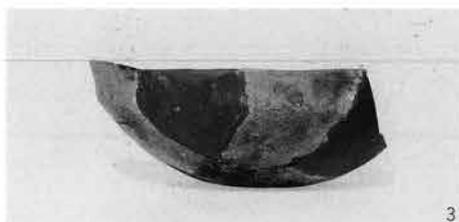
3. 同 遺物出土状況 (No.19・21)



1



2



3



5



7

4. 同 出土遺物

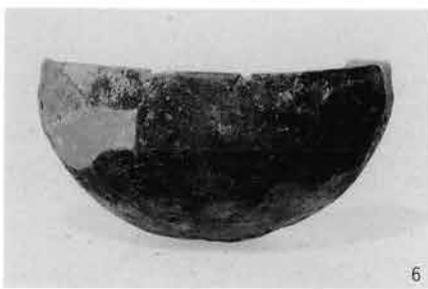
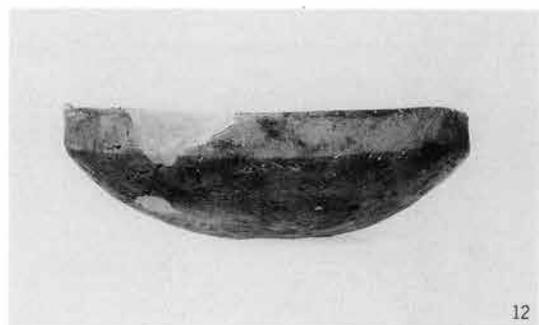




1. 2区51号住居



2. 同 埋没土層 (E-E')





30



32



22



31



27



24



34



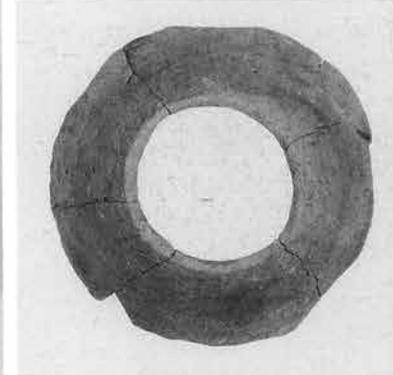
35



33



46



36



28



48



1. 2区52号住居



2. 2区46・48・55号住居



1. 2区52号住居埋没土層 (B-B')



52住-16



52住-1



52住-3



52住-7



52住-4



52住-5



52住-12



52住-13



52住-11



48住-2

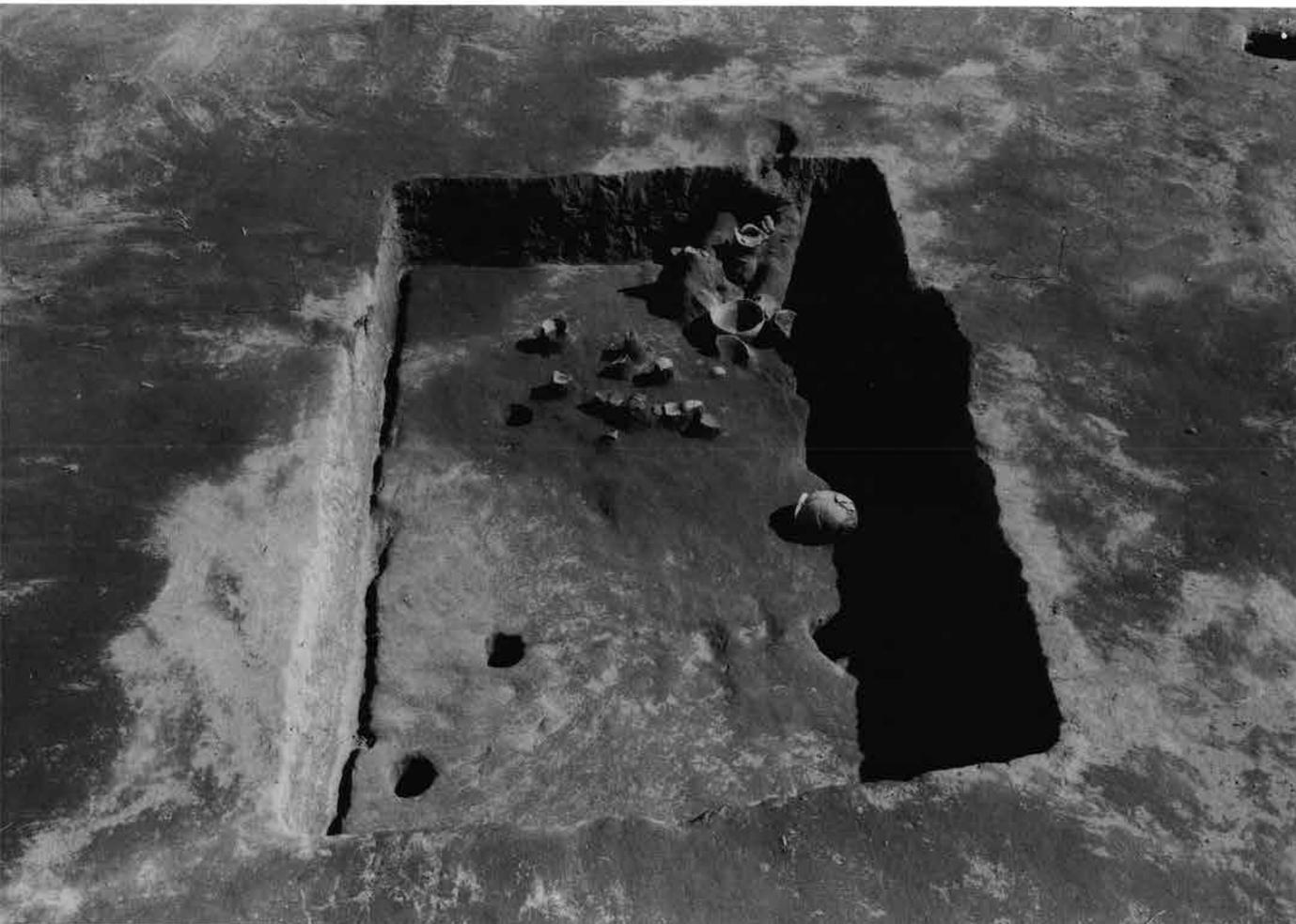


55住-1



55住-3

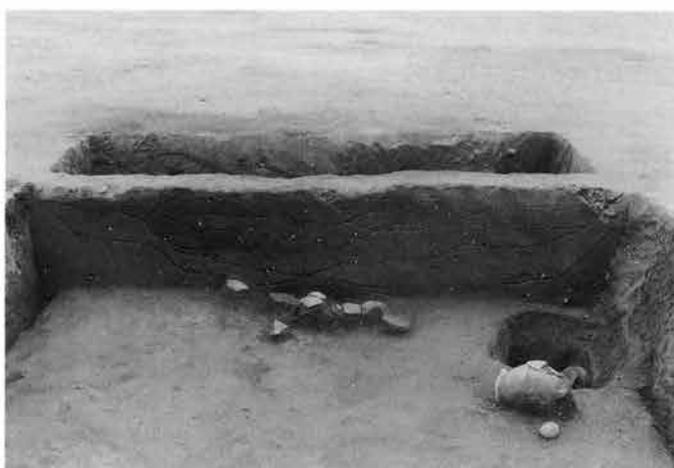
2. 2区48・52・55号住居出土遺物



1. 2区53号住居



2. 同 竈と遺物出土状況 (No.13・16・18等)



3. 同 埋没土層 (A-A')



12



15



16

4. 同 出土遺物



1



7



2



11



13



3



9



10



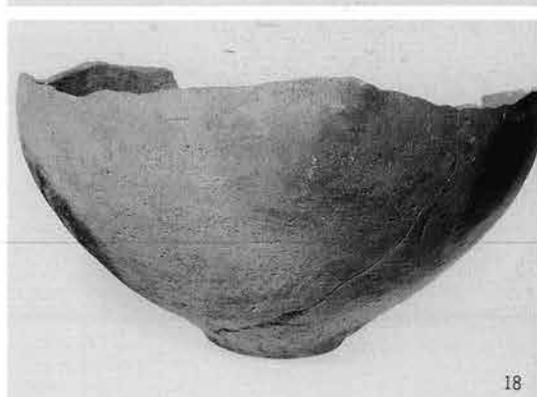
20



14



17



18

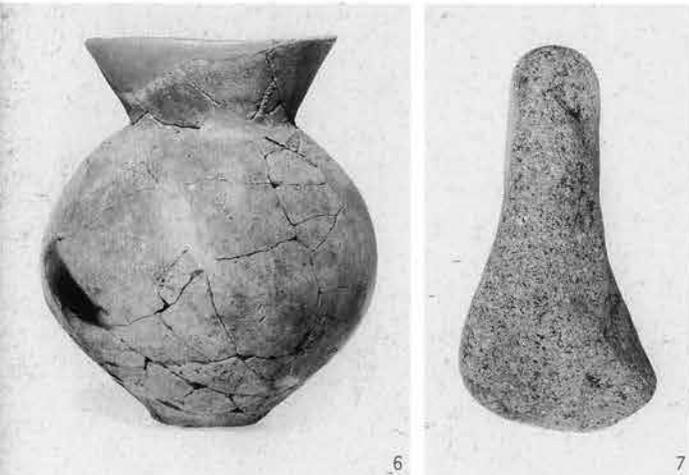
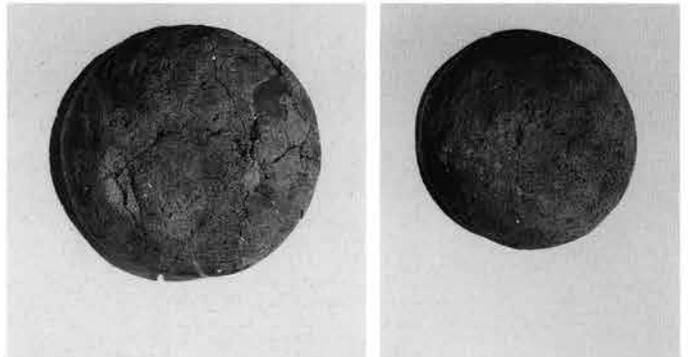
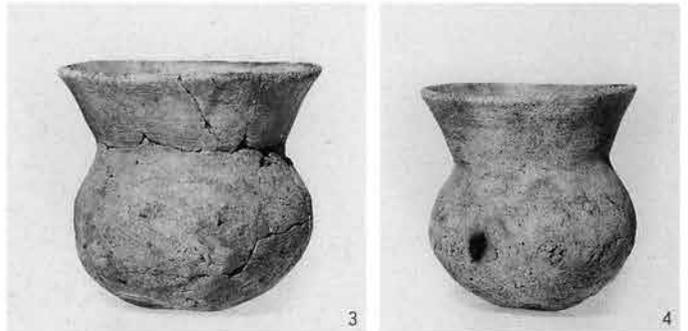
2区53号住居出土遺物



1. 2区56号住居と遺物出土状況 (No. 3・4)



2. 同 遺物出土状況 (No. 5・6等)



3. 同 出土遺物



1. 2区1号周溝墓



2. 同 周溝内の埋没土層
(一A')



3. 同 周溝内の埋没土層
(A一)



1. 2区1号古墳



2. 同 石室



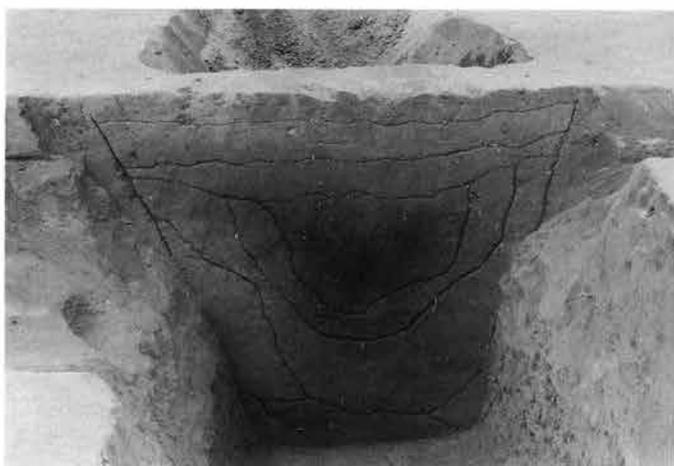
3. 同 前庭部の埋没土層



4. 同 掘り方の状況



1. 2区17号土壤



2. 同 埋没土層 (A-A')



3. 2区19号土壤



4. 同 埋没土層 (A-A')



1区3号壤-1



2区20号壤-8



1区3号壤-2



2区20号壤-1



2区21号壤-5



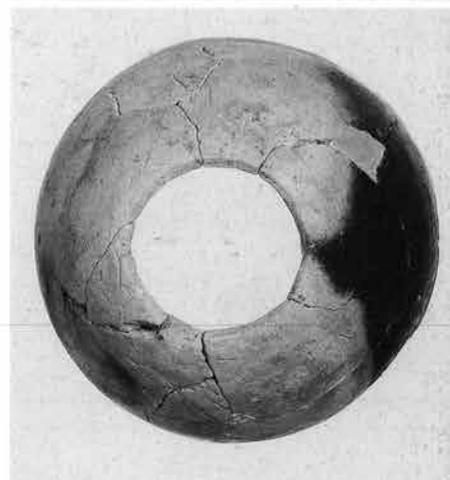
2区21号壤-1



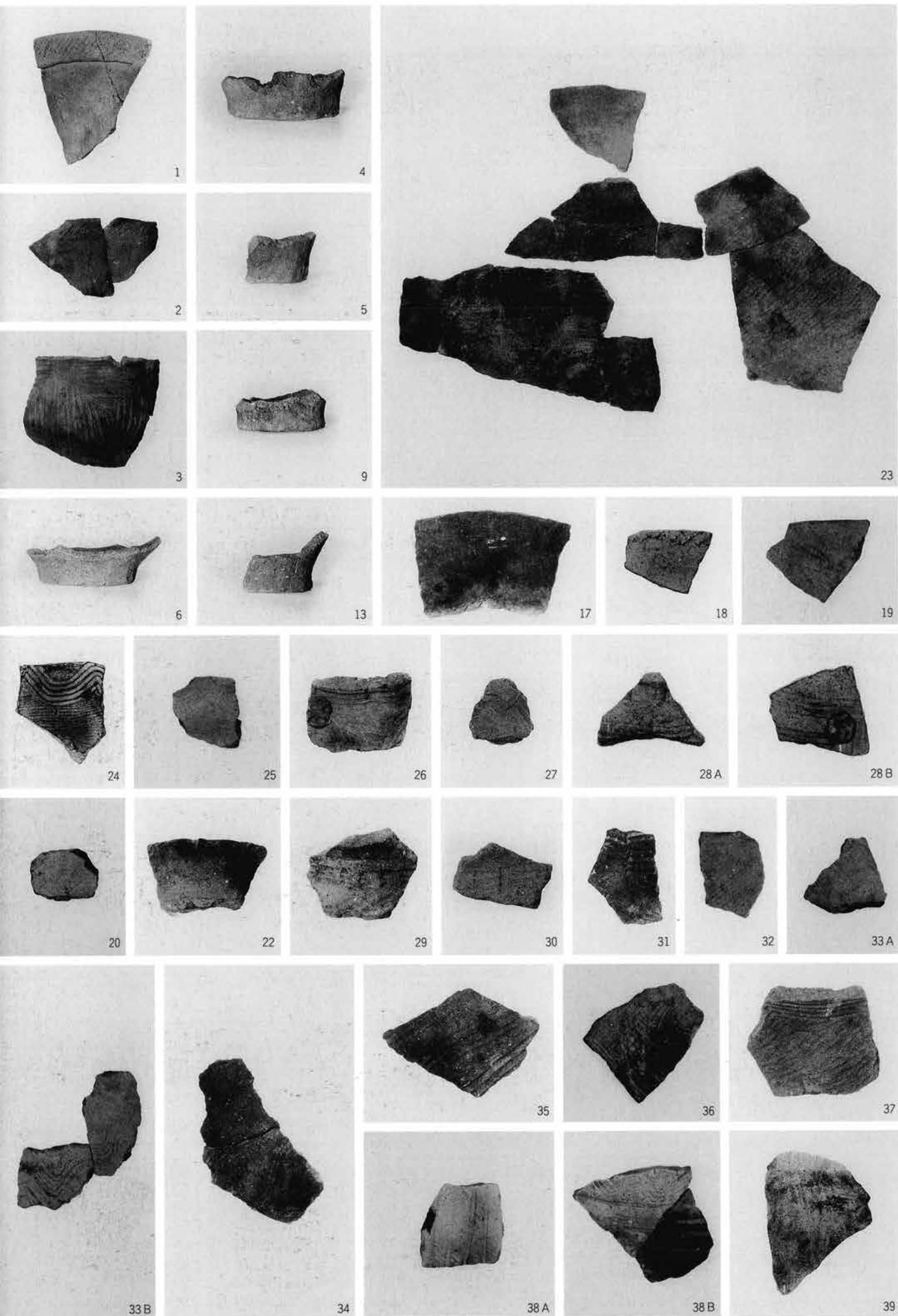
2区21号壤-2



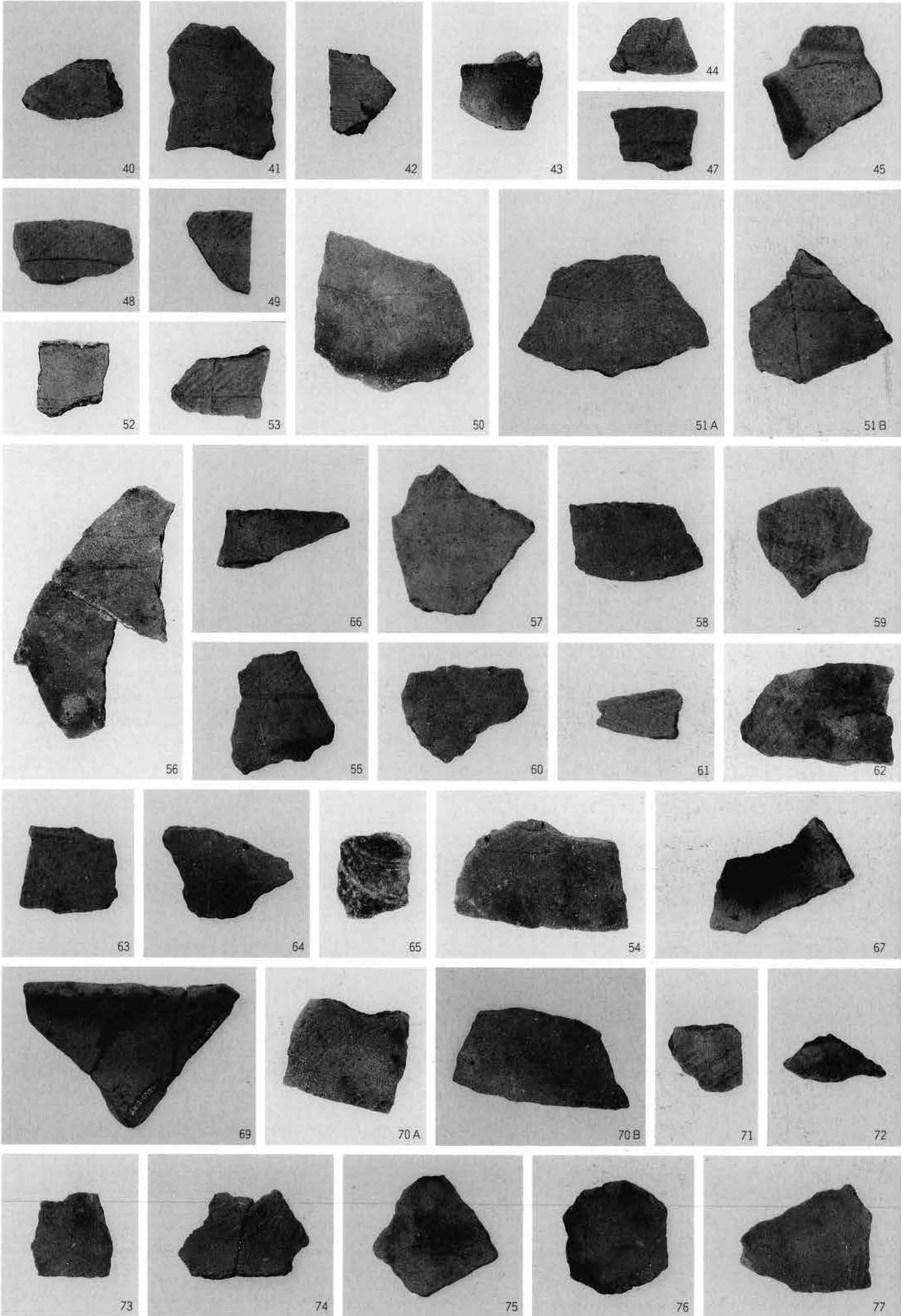
2区21号壤-3



5. 1区3号土壤、2区20·21号土壤出土遺物



2区遺構外および包含層の出土遺物



2区遺構外および包含層の出土遺物



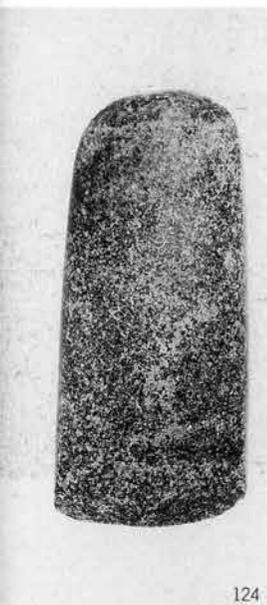
1. 2区14号住居からの磨製石斧出土状況 (No.124)



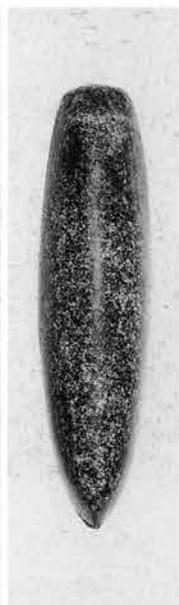
121



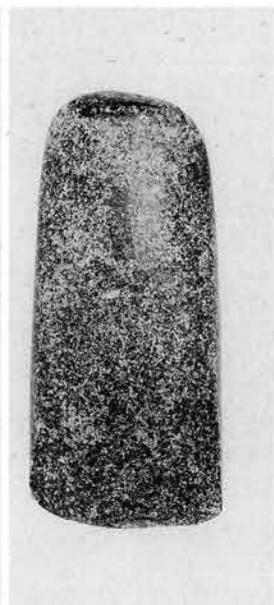
122



124



123



95



96



118



111



110



91



93

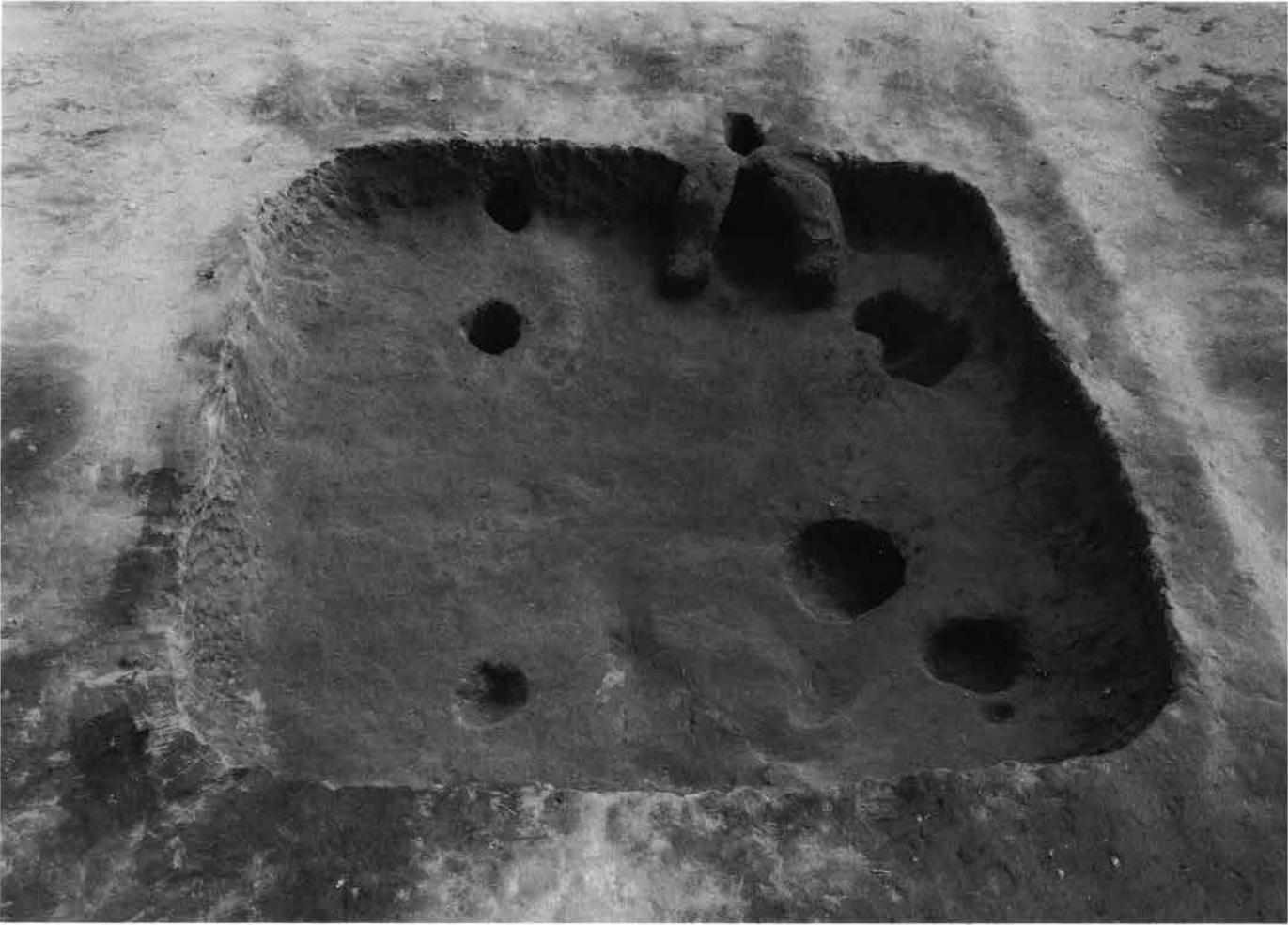


92

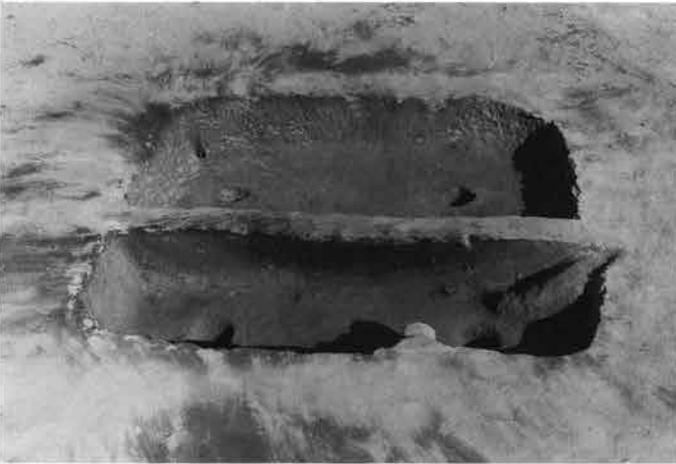


94

2. 2区遺構外および包含層の出土遺物



1. 3区1号住居



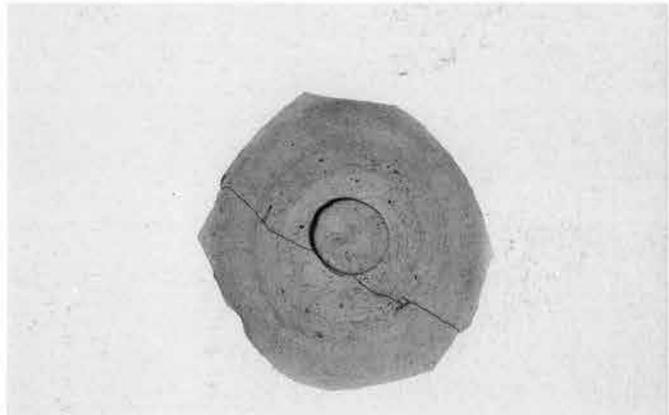
2. 同 埋没土層 (C-C')



3. 同 竈



1

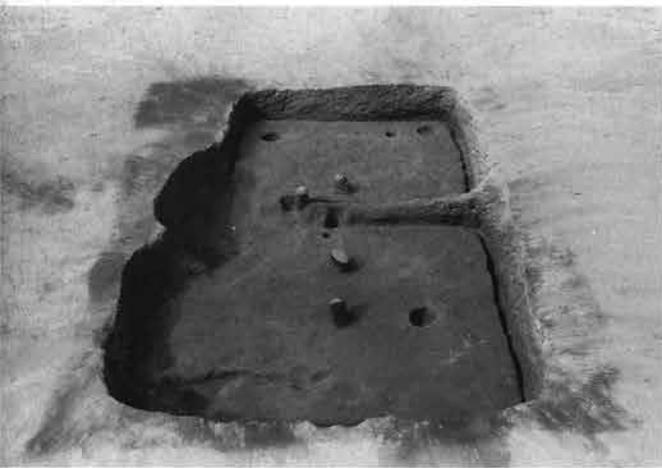


2

4. 同 出土遺物



1. 3区2号住居



2. 同 全景



3. 同 遺物出土状況 (No. 1)



4. 同 間切り状の地山掘り残し部分



5. 同 埋没土層 (D-D')



1. 3区2号住居遺物
取り上げ後の状況



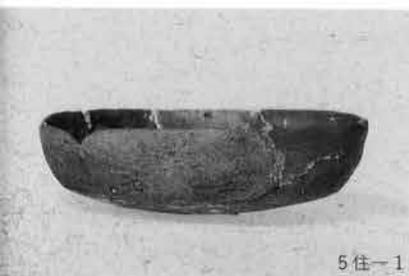
2. 同 部分拡大



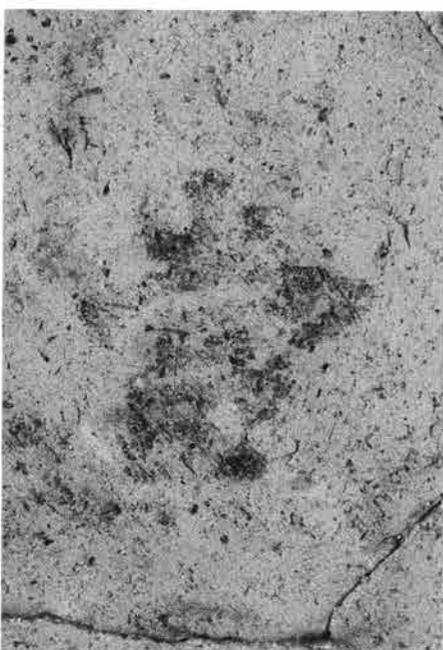
3. 同 間仕切り状の
地山掘り残し部分



1. 3区5号住居



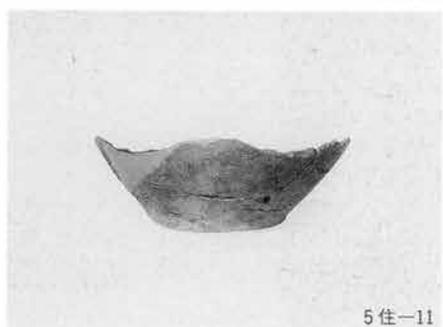
5住-1



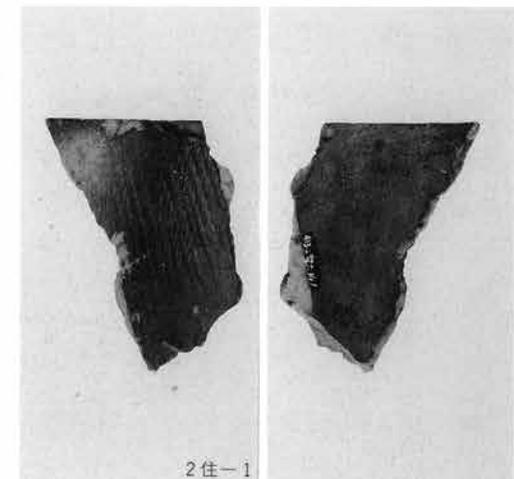
5住-6



5住-2



5住-11



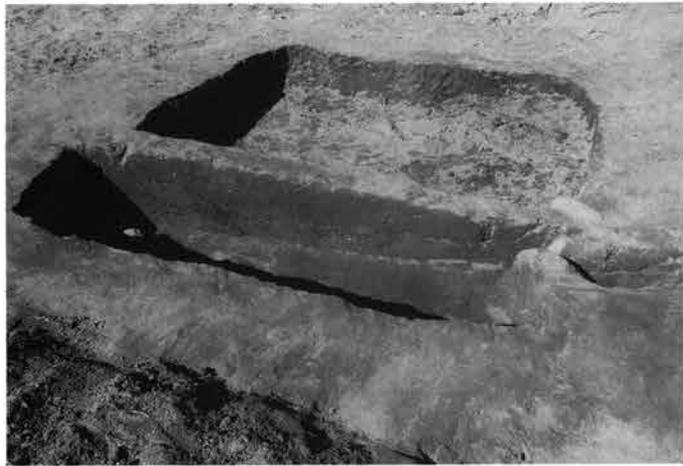
2住-1

5住-5

2. 3区2・5号住居出土遺物



1. 3区3号住居



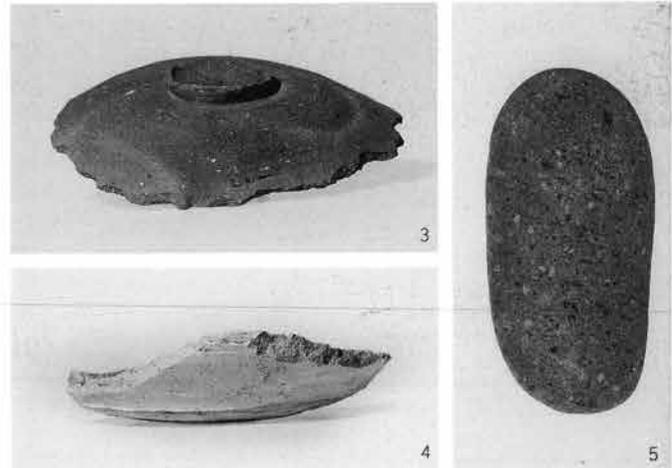
2. 同 埋没土層 (C-C')



3. 同 竈



4. 同 遺物出土状況 (No.3)



5. 同 出土遺物



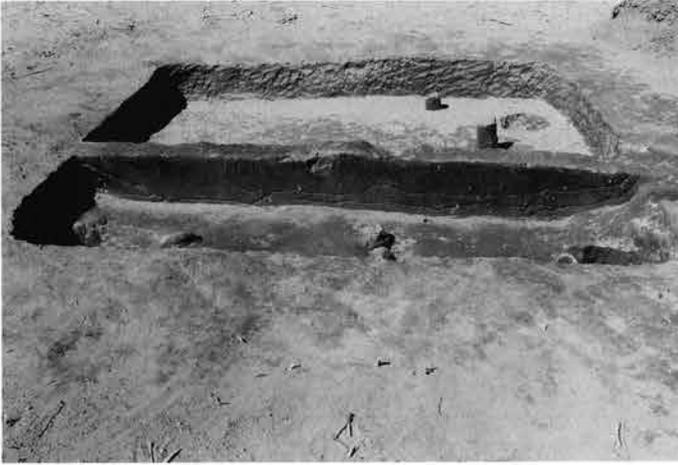
1. 5区1号住居



2. 同 掘り方の状況



3. 同 竈



1. 5区I号住居埋没土層 (A-A')



2. 同 掘り方の状況



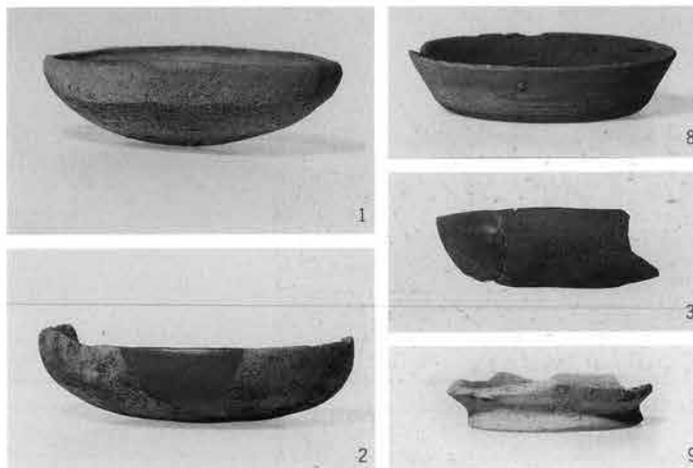
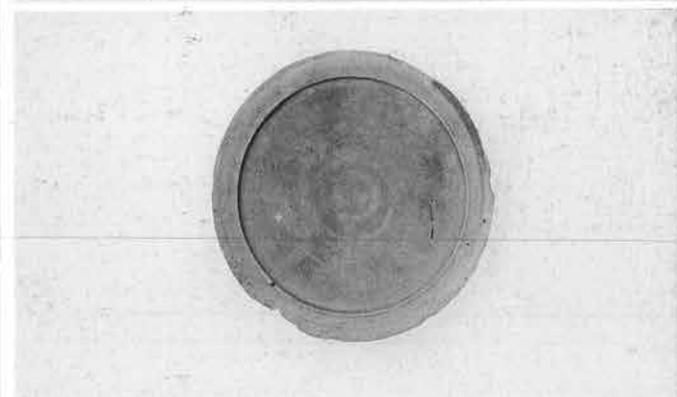
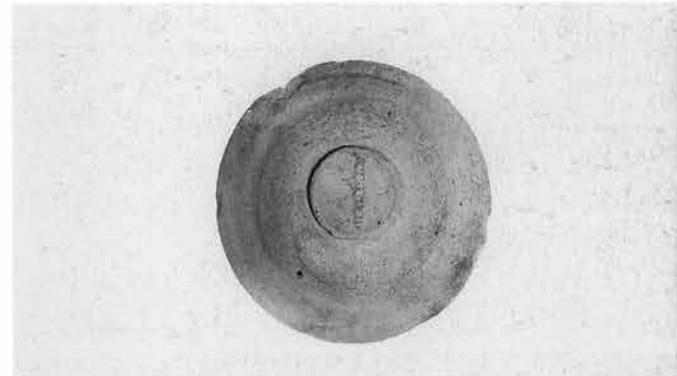
3. 同 遺物出土状況 (No.2・7)



4. 同 遺物出土状況 (No.1)



5. 同 遺物出土状況 (No.8)



6. 同 出土遺物



1. 5区2号住居



2. 同 竈



3. 同 埋没土層 (A-A')



4. 遺物出土状況 (No.1)



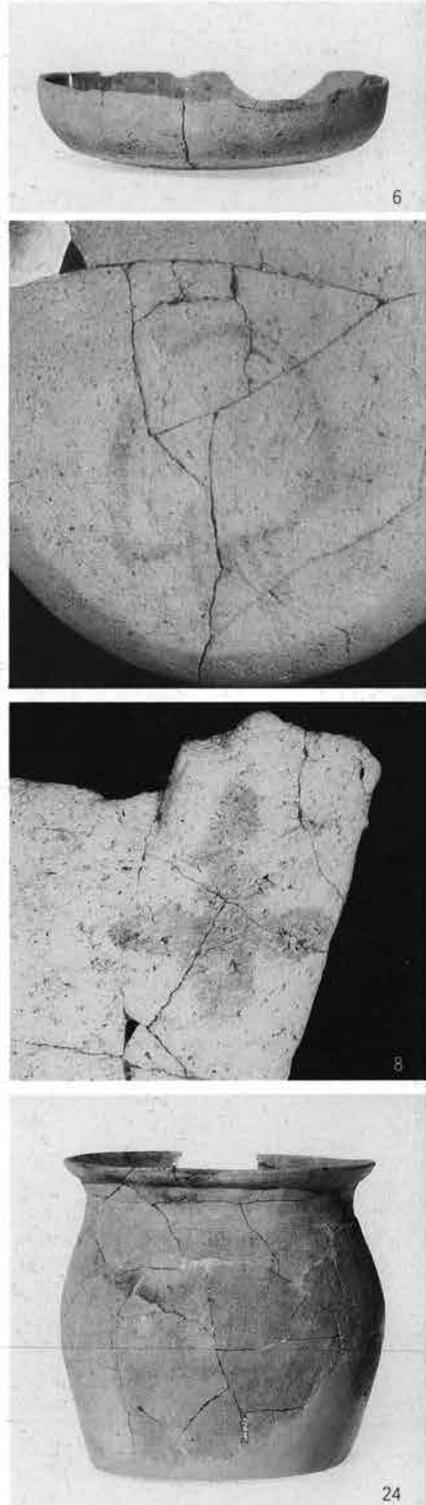
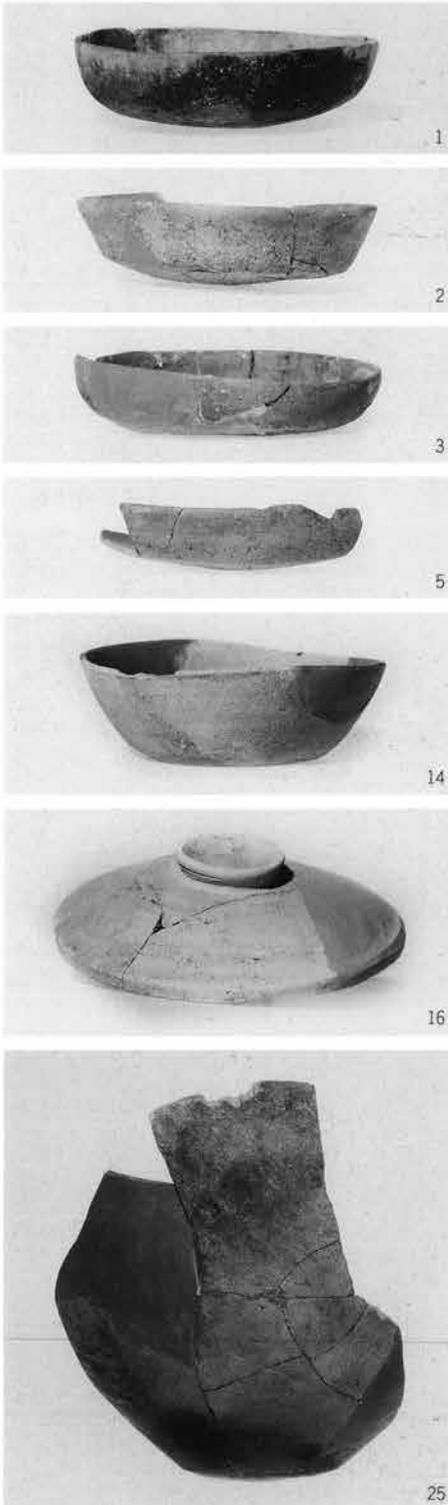
5. 同 遺物出土状況 (No.14)



1. 5区2号住居遺物出土状況 (No.6・18等)



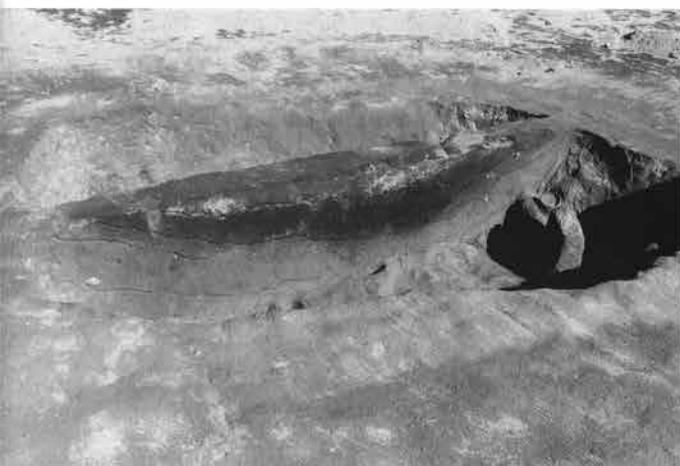
2. 同 遺物出土状況 (No.24)



3. 5区2号住居出土遺物



1. 5区4号住居



2. 同 埋没土層 (D-D')



3. 同 竈と遺物出土状況 (No.4等)



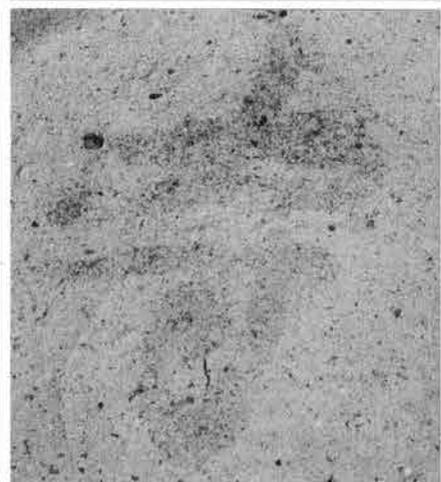
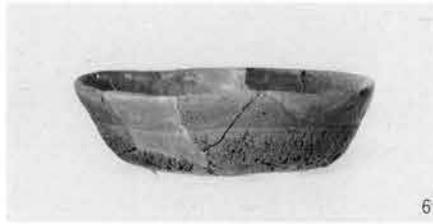
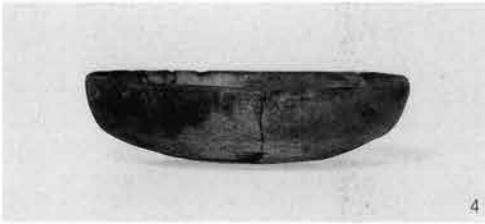
4. 同 遺物出土状況 (No.9)



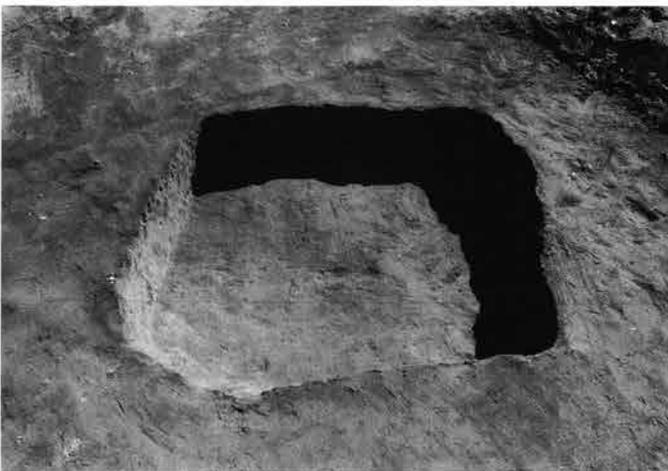
5. 同 遺物出土状況 (No.1・2・8)



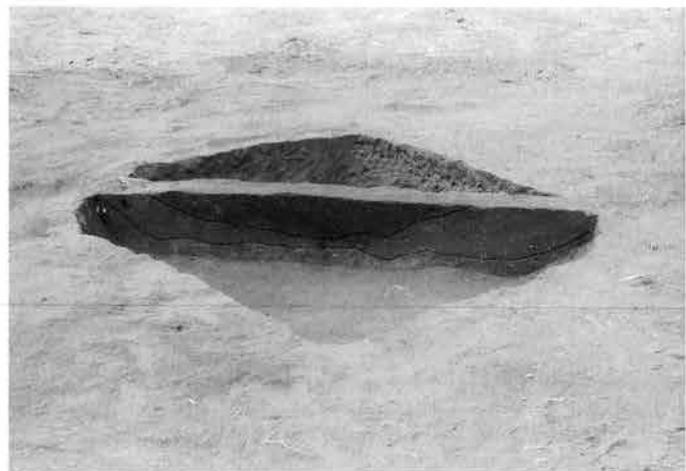
1. 5区4号住居遺物出土状況 (No.4)



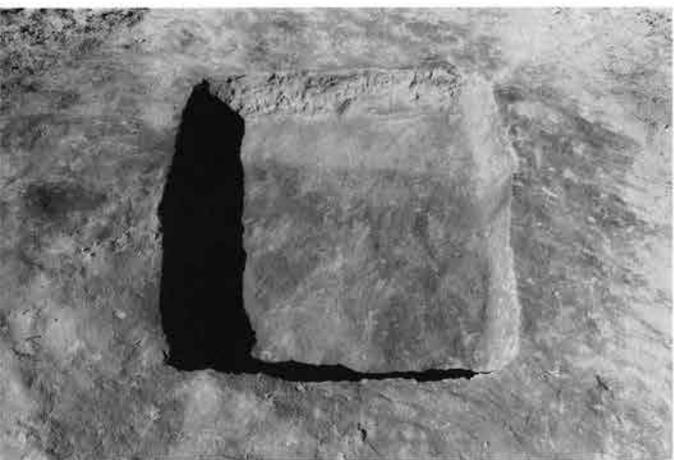
2. 5区4号住居出土遺物



3. 5区3号住居



4. 同 埋没土層 (C-C')



1. 5区5号住居



2. 同 埋没土層 (B-B')



3. 5区6号住居



1



4



7



2



5



3



6

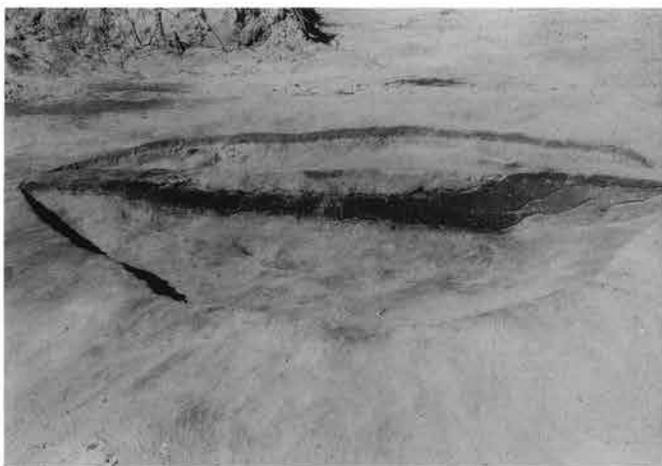


8

4. 5区6号住居出土遺物



1. 3区1号土壤



2. 同 埋没土層 (A-A')



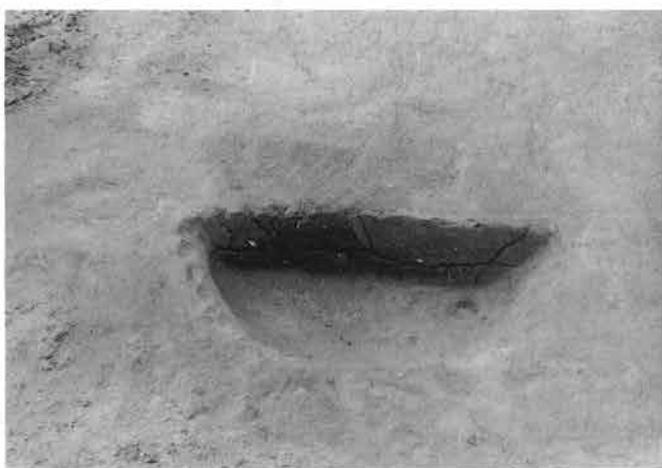
3. 3区3号土壤



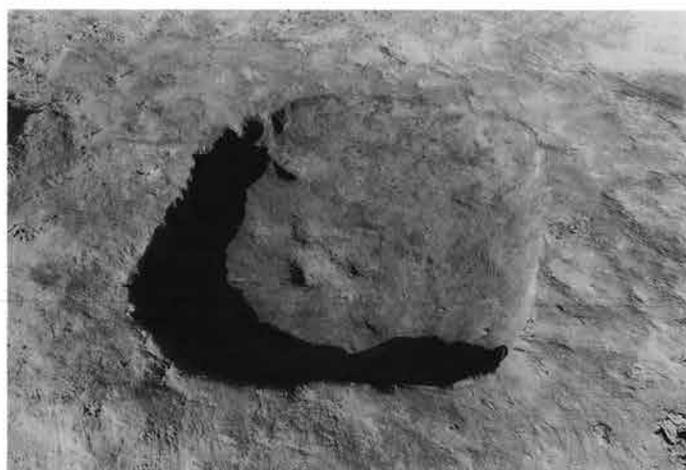
4. 同 埋没土層 (B-B')



5. 5区1号土壤



6. 同 埋没土層 (A-A')



7. 5区2号土壤



8. 同 埋没土層 (A-A')



1. 5区3号土坑



2. 同 埋没土層 (A-A')



3. 5区4号土坑



4. 同 埋没土層 (A-A')



5. 5区6号土坑



6. 同 埋没土層 (A-A')



7. 3区4号土坑



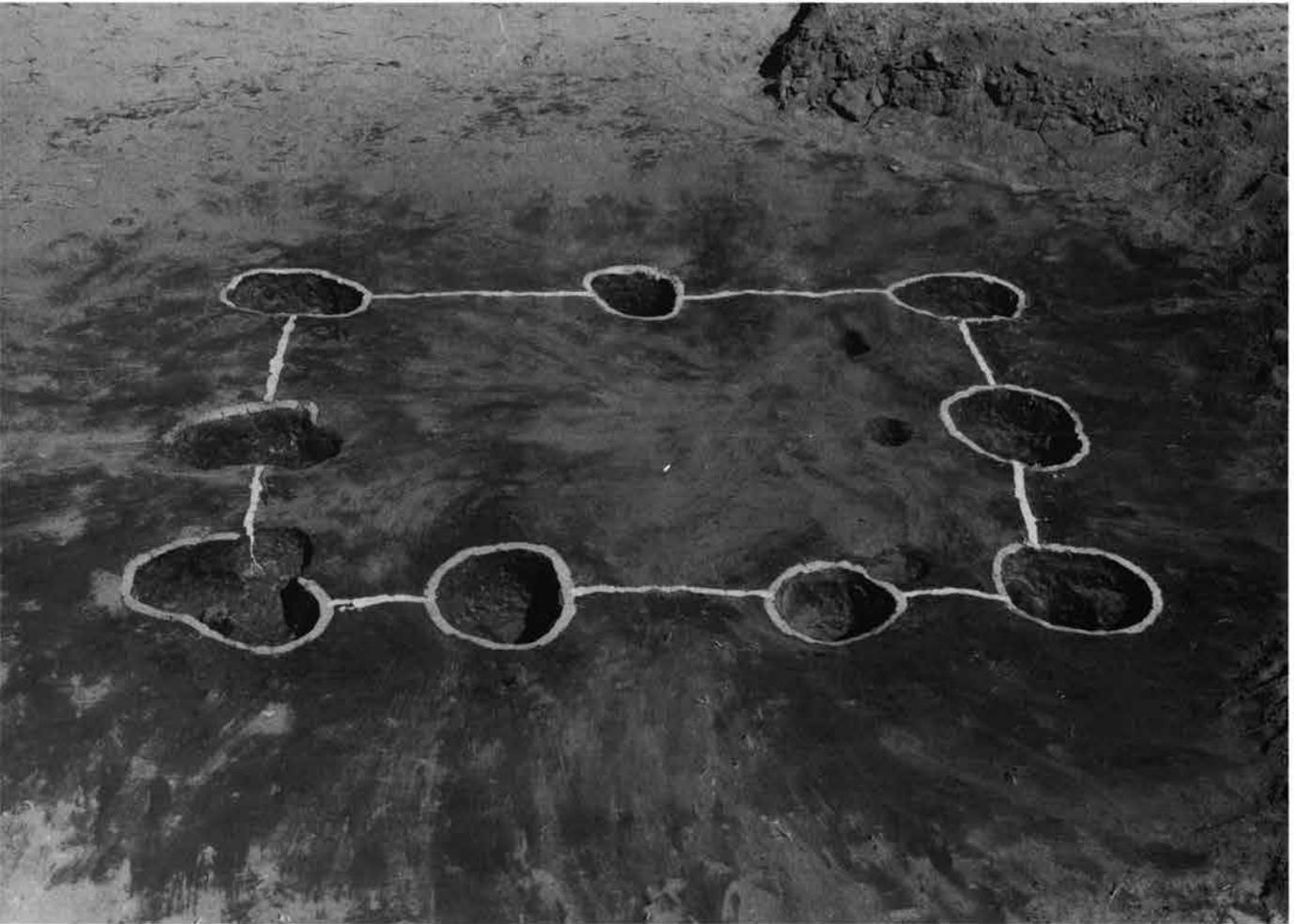
1. 5区1号溝状遺構



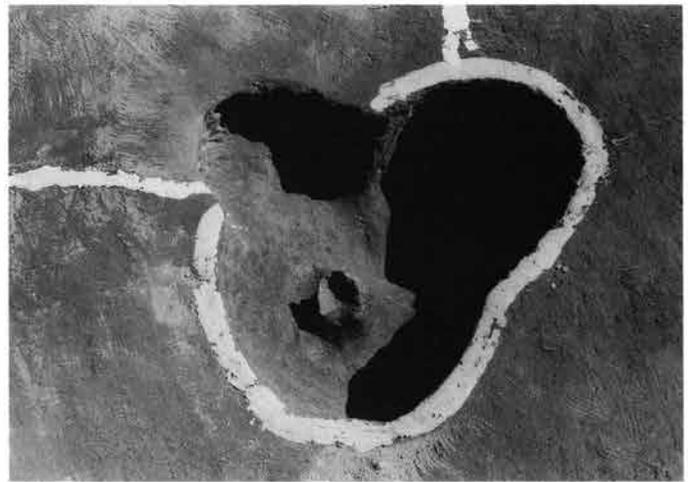
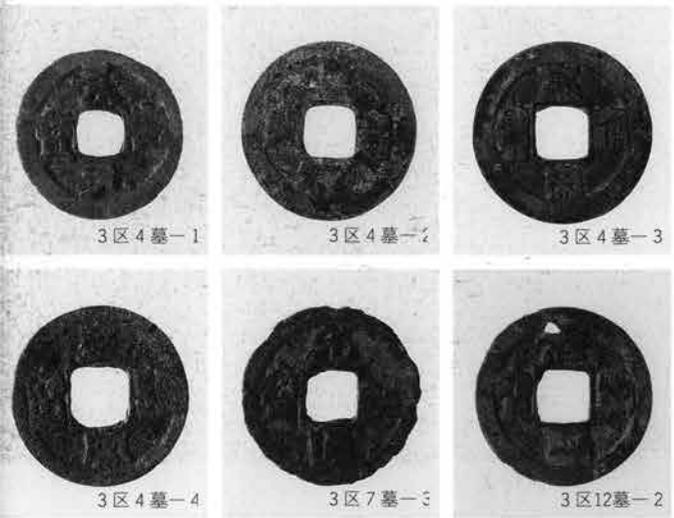
2. 同 埋没土層 (A-A')



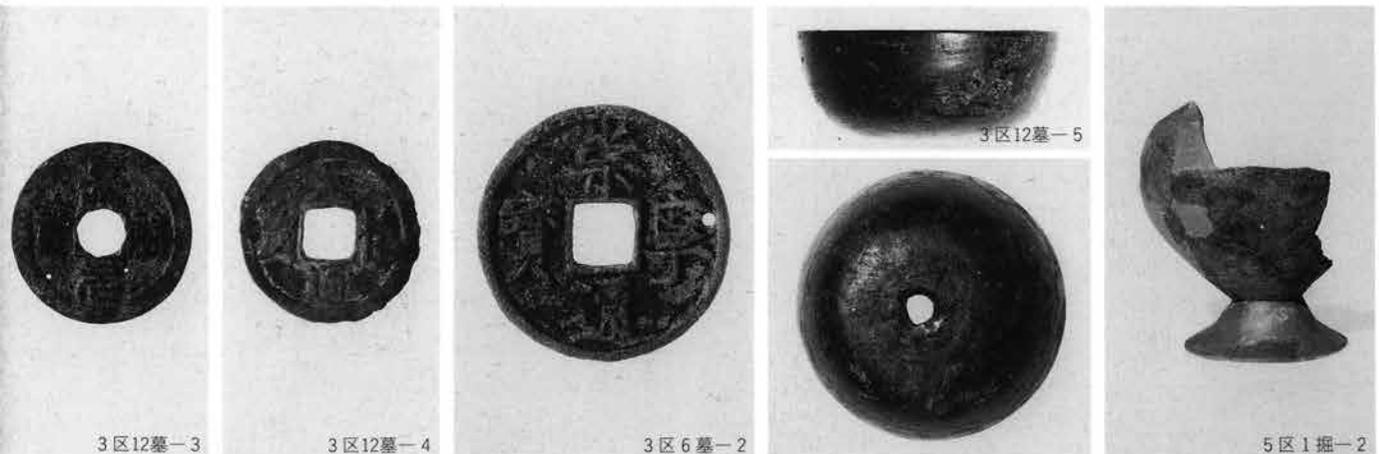
3. 同 埋没土層 (B-B')



1. 5区1号掘立柱建物



2. 同 遺物出土状況 (No.2)



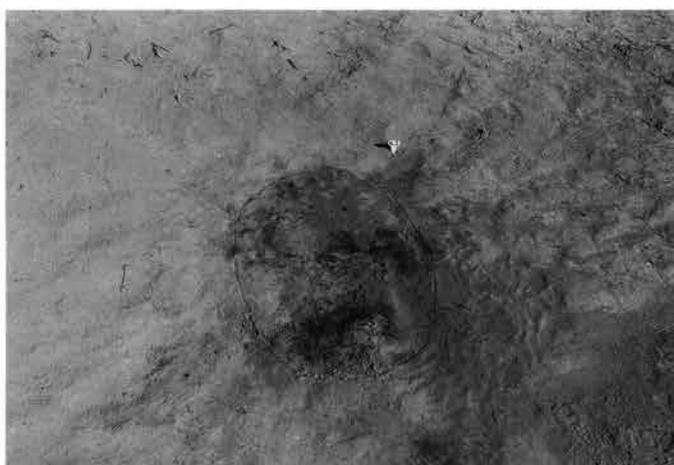
3. 3区4・6・7・12号墓墳、5区1号掘立柱建物出土遺物



1. 3区1号墓墳 (調査前)



2. 同左 (調査後)



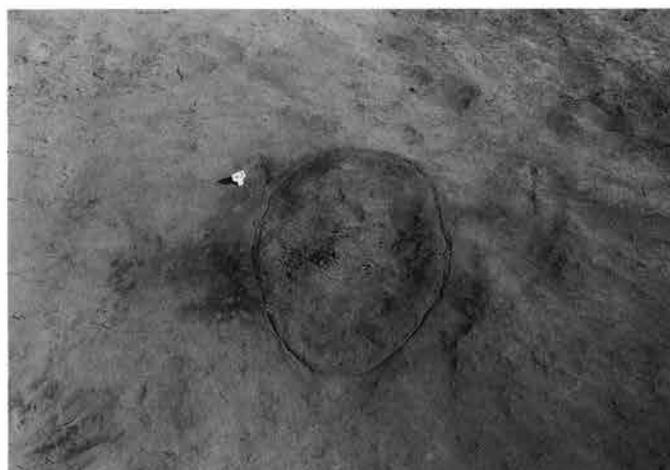
3. 3区2号墓墳 (調査前)



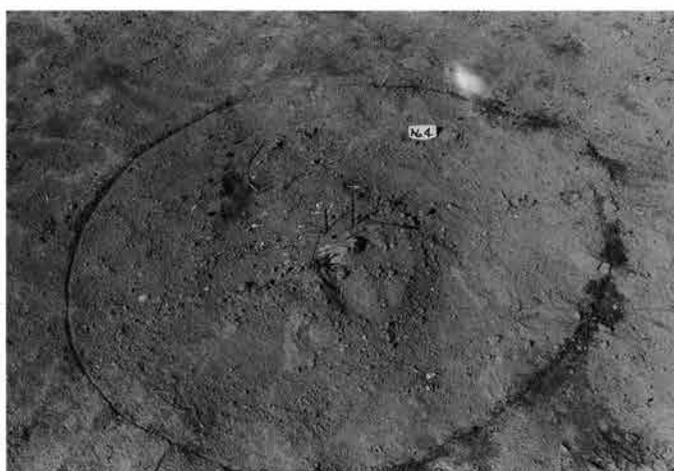
4. 同左 (調査後)



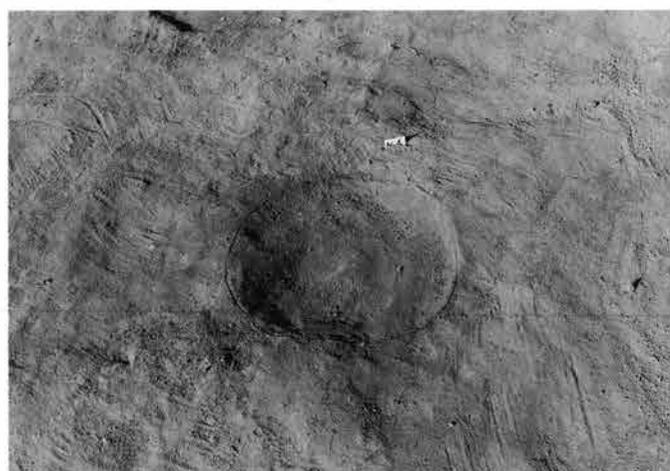
5. 3区3号墓墳 (調査前)



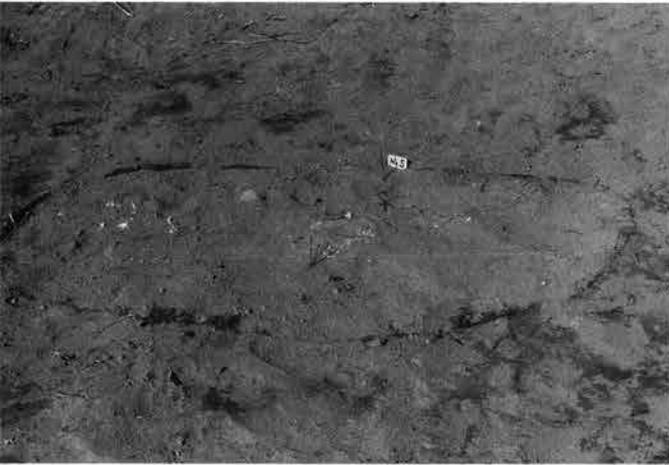
6. 同左 (調査後)



7. 3区4号土墳 (調査前)



8. 同左 (調査後)



1. 3区5号土壙 (調査前)



2. 同左 (調査後)



3. 3区8号墓壙 (調査前)



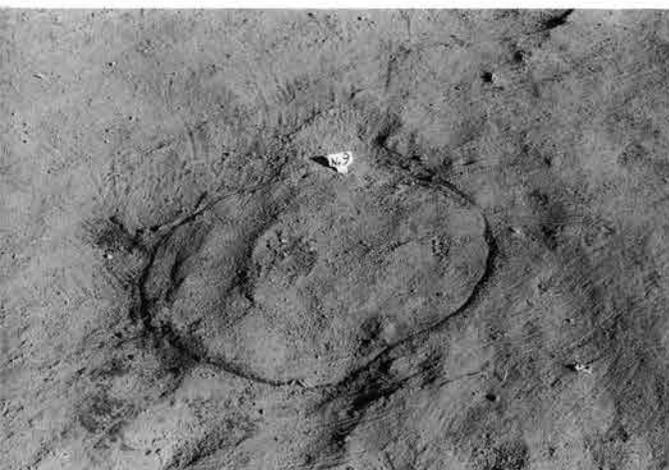
4. 同左 (調査後)



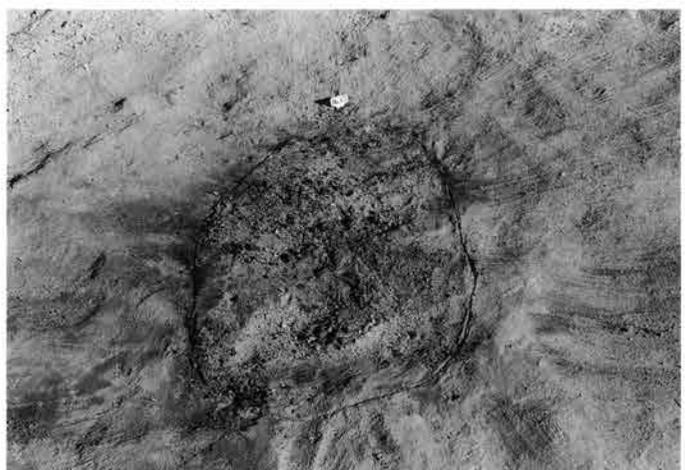
5. 3区6号墓壙 (調査前)



6. 3区7号墓壙 (調査後)



7. 3区9号墓壙 (調査後)



8. 3区10号墓壙 (調査後)



1. 4区1号住居



2. 同 竈と遺物出土状況 (No.7・18等)



3. 同 竈埋没土層



4. 同 竈埋没土層



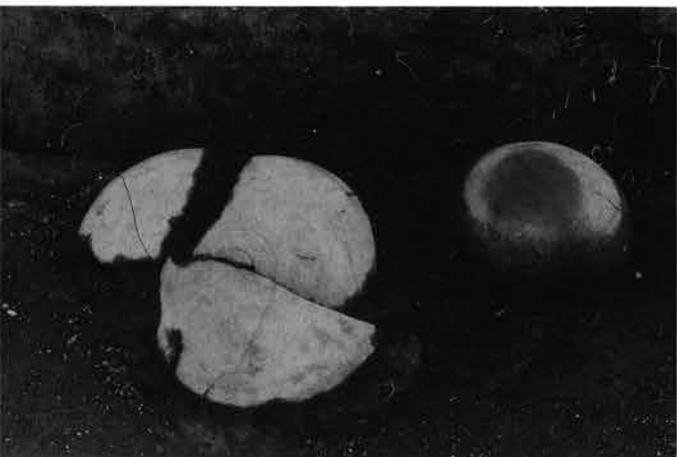
5. 同 竈埋没土層



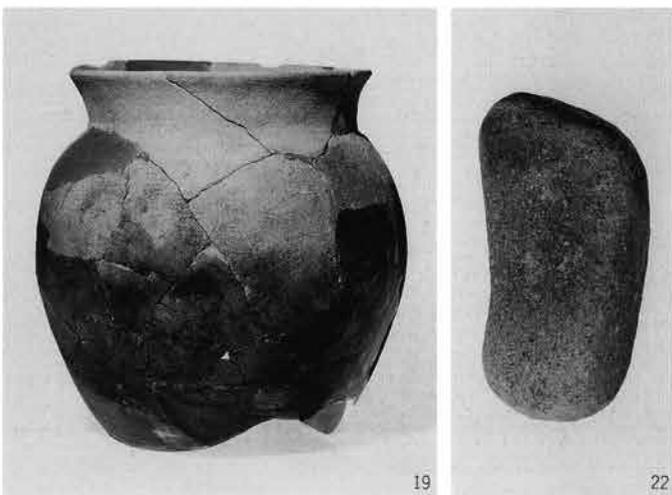
1. 4区1号住居出土遺物(薦編み石)



2. 同 貯蔵穴内の遺物出土状況 (No.19)

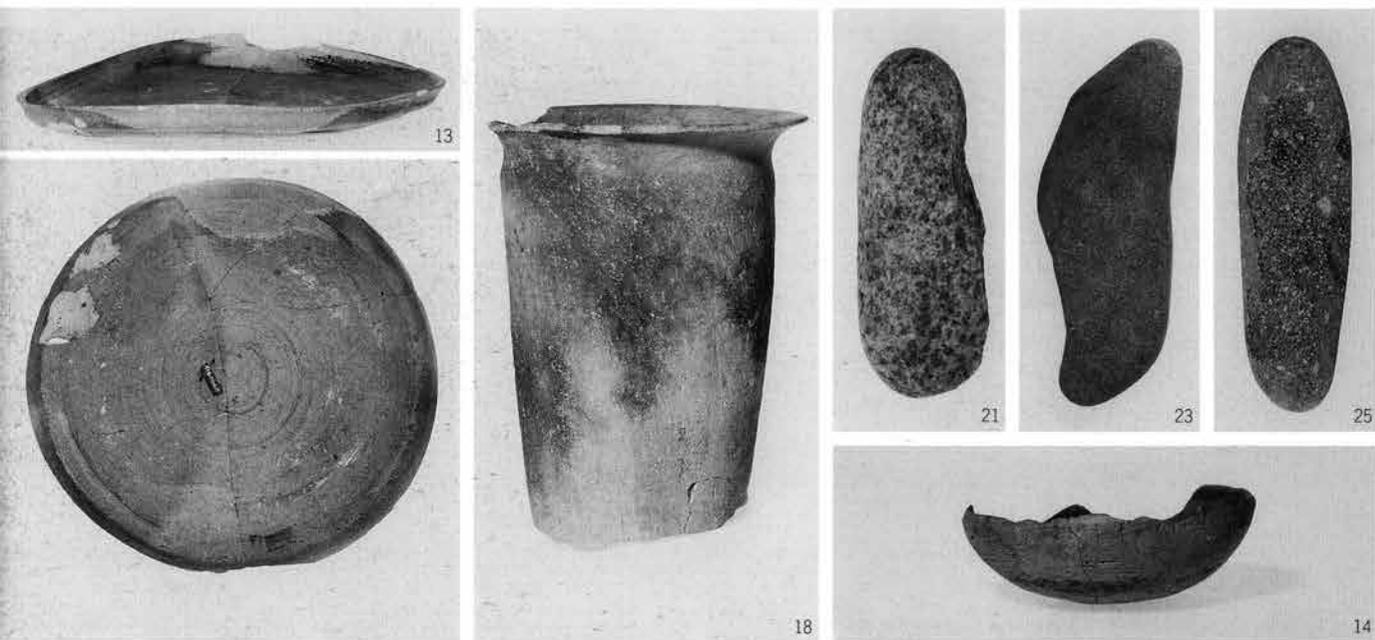


3. 同 遺物出土状況 (No.13・14)



19

22



13

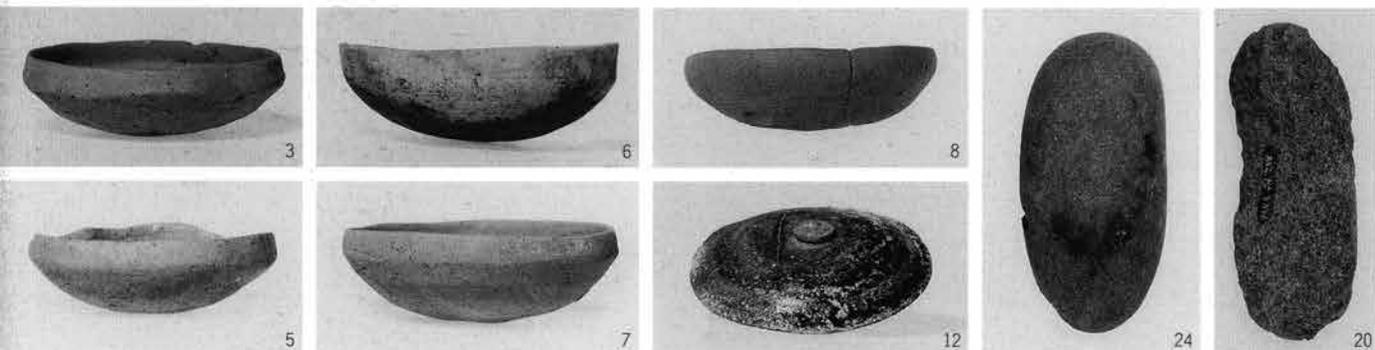
18

21

23

25

14



3

6

8

5

7

12

24

20

4. 同 出土遺物



1. 4区1号溝状遺構



2. 同 埋没土層 (A-A')



3. 6区1号住居埋没土層 (C-C')



4. 6区1号住居



1. 6区1号住居遺物出土状況 (No.3)



2. 同 遺物出土状況 (No.8)



3. 同 遺物出土状況 (No.9等)



4. 同 遺物出土状況 (No.6)



5. 6区焼土部分



焼土-3

7. 6区1号住居、焼土部分出土遺物



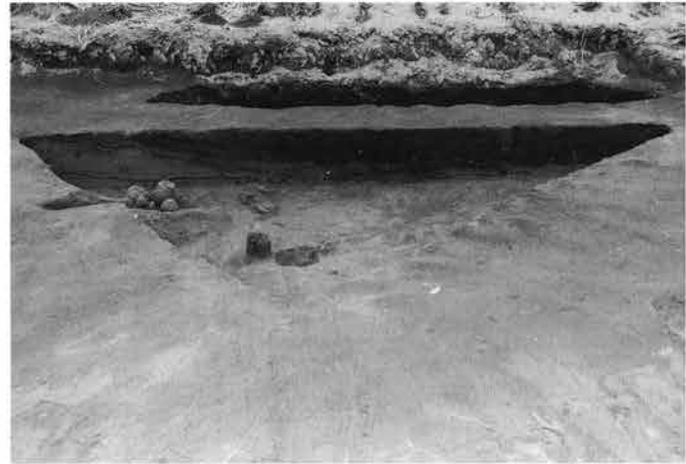
6. 同 遺物出土状況 (No.1・5・6)



1. 6区2号住居



2. 同 竈と遺物出土状況 (No.10・13・15・18等)



3. 同 埋没土層 (B'-B)



4. 同 遺物出土状況 (No.12・16)



5. 同 遺物出土状況



1. 6区2号住居遺物出土状況 (No.5・6等)



2. 同 遺物出土状況 (No.17)



5



4



6



9



10



15



11



12



13



16



1



3

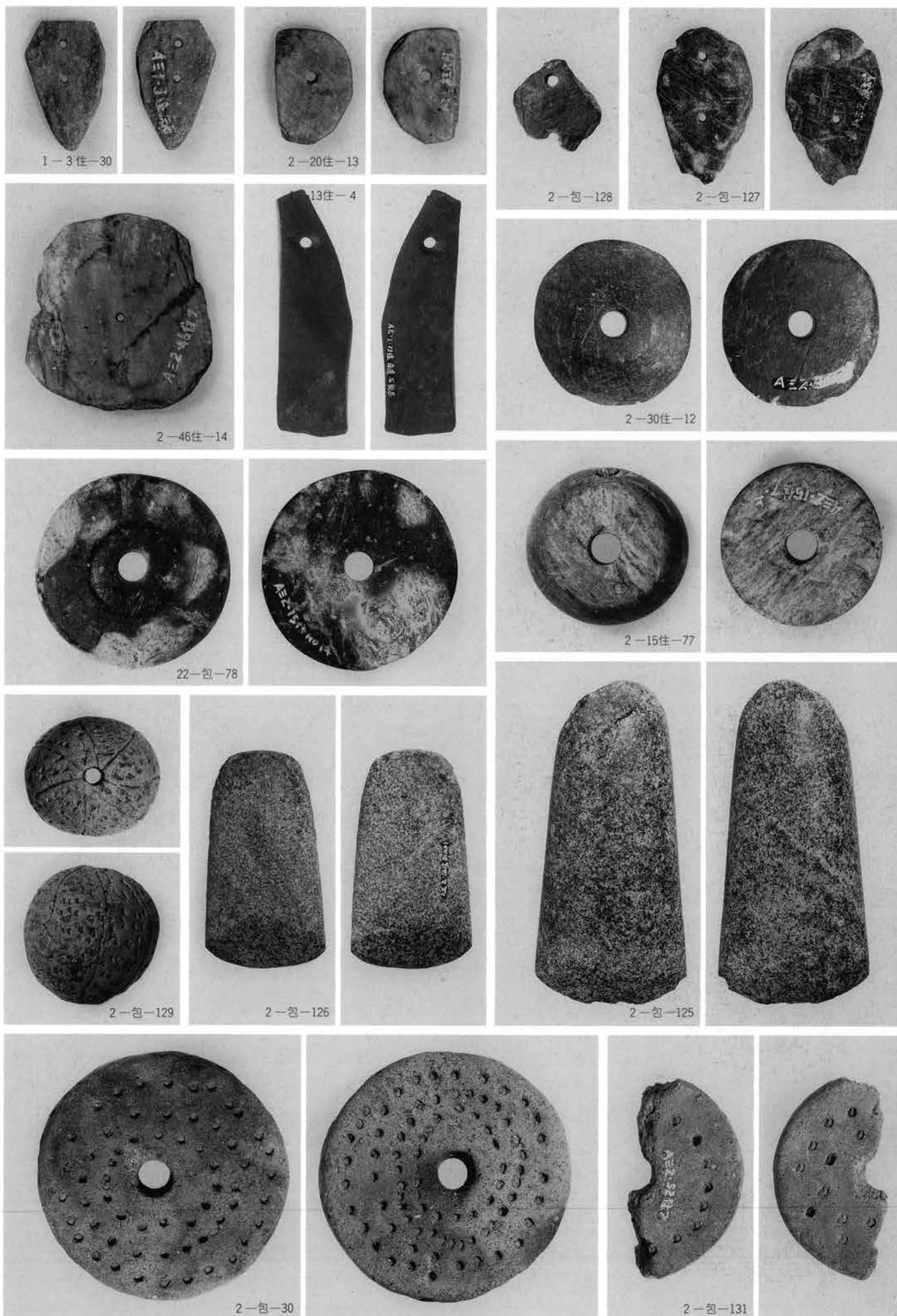


17



18

3. 6区2号住居出土遺物



1区3・13号住居、2区15・20・30・46号住居と2区包含層の出土遺物

群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第110集

荒砥北三木堂遺跡I 昭和56年度県営圃場整備事業荒砥南部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

平成3年3月20日 印刷
平成3年3月26日 発行

編集・発行／群馬県教育委員会
〒371 前橋市大手町1丁目1番1号
電話 (0272) 23-1111(代表)

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377 勢多郡北橘村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

© 1991